THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附録號

第三十三年第四號　第三百五十八號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

近く起る可き日本對獨露の戰爭記也

著者が、獨露二國の相聯盟して日本に襲撃し來る日の必ず近き將來に在る可きを斷ぜるは、實に大正四年の夏六月なりとす。而も幾くもなくして日露の間に協約成り、相互使節の交換となりて兩國の國交蜜の如き狀を示すや、人多くは、著者の豫斷を以て甚しき不稽の言なりとせりき。而も今や如何、僅に三歳を隔てたる今日、事實は著者の言に裏書きしつゝあるに非ずや。獨露の間に單獨媾和は成り、極東の風雲甚だ急、帝國安危の一大問題となりつゝあるに非ずや。今にして著者の活眼に驚ける人は、速に此の『獨露の來襲』を熟讀せざる可からず。

獨露の來襲

歩兵中尉 原田指月氏著

總洋布最上製
大版四百三十頁
價壹圓參拾錢
小包料貳拾錢

本書は、謂ゆる戰爭實記風に謂ゆる戰爭小說風に、近き將來に起る可き極東の大戰を描けるもの也。獨逸は青島の新恨を叫び、露西亞は奉天日本海の舊怨を懷ひ、相結んで日本に襲撃し來る。日本の陸海軍は直ちに邀撃せり。全國民は總動員の實を示せり。飛行機は日本領土の上を飛び、潜航艇は日本の近海に出沒す。大激戰、大鏖戰、我が軍は陸に海によく戰へるも、今日の我邦と親善なる某國の突如敵國に左袒せるあり、我軍遂に重圍を受けて、甚しき苦戰に陥る徑路を叙す。悉く軍事的實際に材料を採りて專門の智識を傾倒し、描くに小說家的大手腕を以てす。日本國民が刻下に讀む可き書として、是れを有らゆる階級に薦む。

危機頭上に落つ 我國民の運命如何

東京牛込矢來中の丸 **新潮社**
振替(東京)一七四二
電話番町八〇九番
電話番町八九九番

第一高等學校教授・文學士 芥舟 畔柳都太郎先生著

論に根柢あり詞に熱火あり
眞に是れ近來の一大快著！

向陵より社會へ

▽定價壹圓△ ▽送料六錢△ ▽中判總布△ ▽函入美本△

最新刊

全國學生が憧憬の標的たる向陵一千の健兒を帥ひて、籠城主義に匿る英語の先生も時到らば如何に獅子吼するかを聽け！ 新らしがる女と文士とに痛棒を喰はし、戀愛宗に止めを刺し、賢母良妻主義と共に賢父良夫主義を高唱し、父務運動の急を警告し、士魂に憧れ、氏を重んじ、貧の福音を傳へ、成金や新華族の雛に鐵拳を御見舞申して墮落し行く新日本の社會を呪詛せんとす。將に痛快淋漓たり。

英語上達法百話

▽忽再版 定價金六十五錢 送料六錢 小型總布製

著者英文解釋を擔當して教育に從事すること拾餘年、現代中學卒業生の陷り易き誤解誤譯の病根が何處にありやを考察し最も重要なる個條一百を選拔して初學者にも解り易きやう鄭寧詳密なる説明を試みたるもの本書。

東京南紺屋町 實業之日本社 振替口座東京三二六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

岡鬼太郎先生著

花柳小説 あつま唄

佐藤三重三先生装幀

最新刊

現今の文壇に於て名ある小説家の數百を以て數ふべし、然も花柳社會の意氣地と氣分を寫し得る者幾人かある、其多くは半可通とはき違ひを以て識者の笑を招く、唯我鬼太郎先生の才筆は好く其江戸前藝者の意氣地を活寫し、好く其裏面を捉へて浮川竹の色と戀のいきさつ、伊達引を描いて餘すなし、加ふるに行文極めて豐麗春宵燈下の讀物として正に絶好の書といふべし。

箱入頗美本
表紙唐棧本
文ポイント
三百七十頁
定價九十錢
送料八錢

岡本綺堂先生著

紀行小品 五色筆

佐藤三重三先生装幀

箱入頗美本
表紙木版手刷十二度刷
定價七十錢
送料六錢

最新刊

旃檀の林に餘木なく崑崙山の砂土は皆珠玉也

綺堂先生の筆は劇に小説に行くとして可ならざるはなく、既に文壇の第一人者として定評あり、然も先生の詩趣に富める紀行文と靈妙なる小品文は天下の望んで未だ得ざるもの、今悉く集めて本書にあり、艶麗無比の小冊子春日之を繙かば珊々珠玉を掌に掬ふの感あるべし。

文學士沼波瓊音氏著 **やなぎ樽評釋** (三版)九十五錢送料八錢

大倉桃郎氏著 **新世帶** (再版)四十五錢送料四錢

室津鯨太郎氏著 **怪談情話** (再版)四十五錢送料四錢

圖書目錄贈呈

弓館小鰐氏著 **大正蠻骨傳** (再版)四十五錢送料四錢

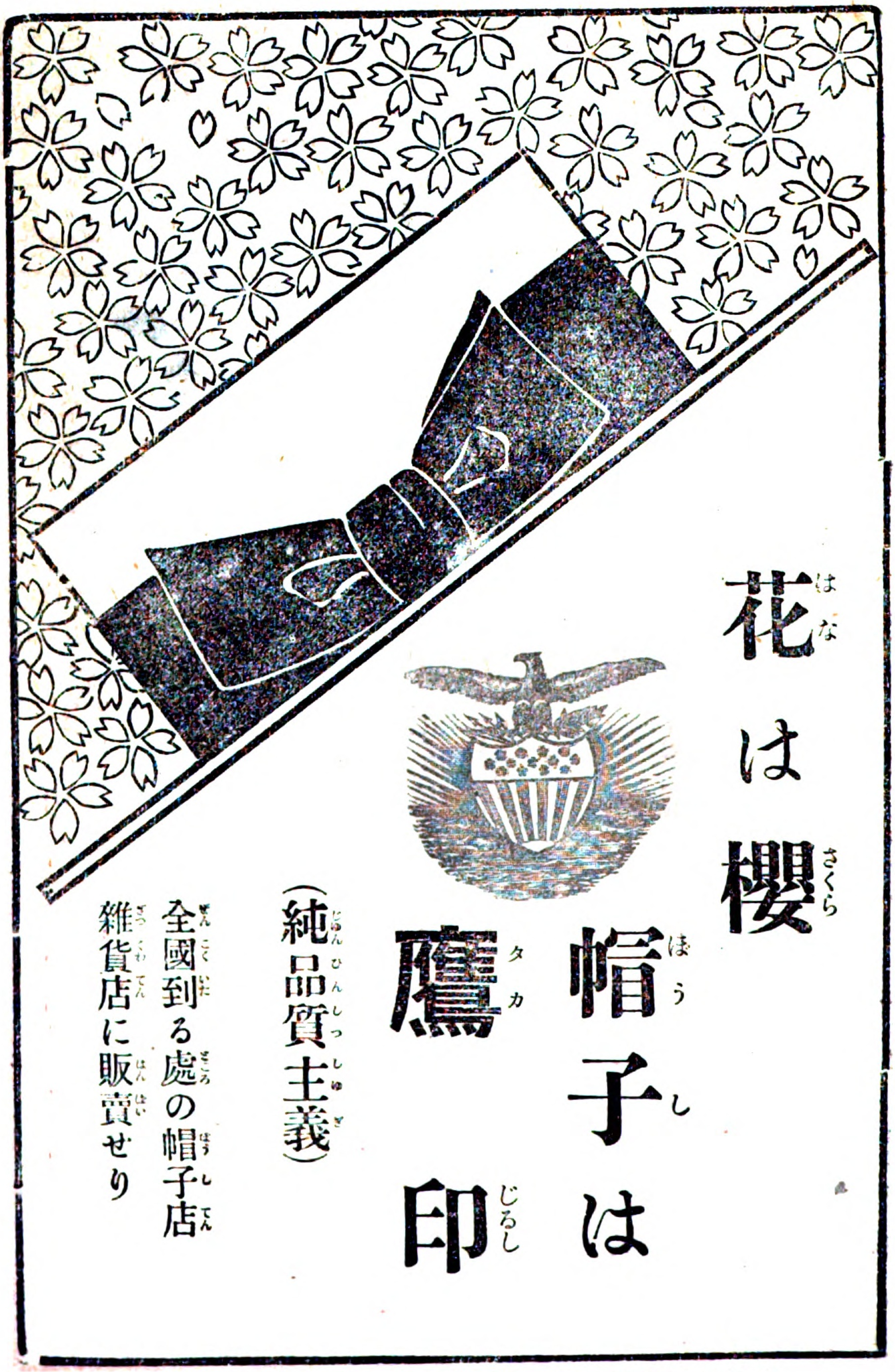
室津鯨太郎氏著 **秀吉論** (再版)一圓廿錢送料八錢

近藤浩一路氏著 **漫畫道中記** (七版)七十錢送料六錢

發行所 東京下谷區池の端茅町二丁目 南人社 振替口座東京三壹四貳壹番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

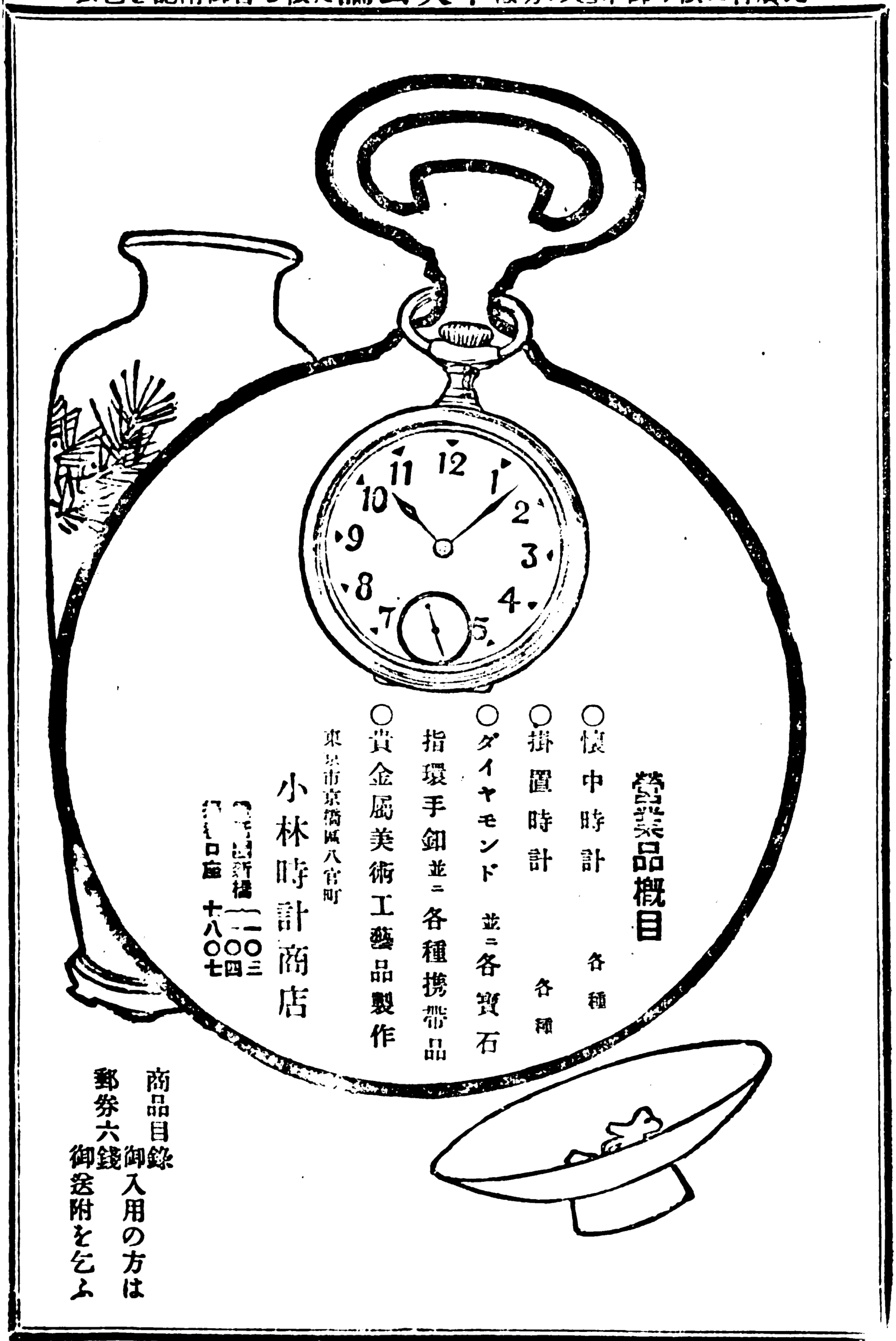


信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第三十三年四月號（春期大附錄號）目次





營業品目概
○懐中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
【電話】新橋 二〇三 二〇四
振替口座 十八〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



PLACE D'IVAN VELIKI AU KREMLIN

BY A. VASNETZOFF.

中央公論



第卅三年第四號
春期大附錄號
第三百五十五號

所謂出兵論に何の合理的根據ありや

法學博士　吉野作造

(一)

西伯利出兵論が露獨單獨講和の成立に促されて起つた事は言ふ迄も無い。單獨講和條約の調印は三月三日である。併し出兵論の漸く我國の朝野に動き出したのは、二月廿日過ぎ内田大使露都引揚げの報道があつた頃からである。而して此問題につき何國がイニシヤチーヴを取つたかに就いては、今日いろいろの說がある。一說に據れば、此問題の發頭人は我本野外務大臣で、先づ西伯利に於て軍事行動を採らんとするの利害を英佛伊の三國政府に諮り、次いで英を通じて米國政府の意嚮をも照合したとの事であ

る。又一説には本野外相が斯る態度に出づる前、氏の親友たる佛國外相ピションから之に關する慫慂があつた、尠くとも本野外相の這般の措置は、英佛の暗示に基くものであると云ふのである。而して英佛側の當初の目的は西伯利に於て反過激派勢力を結束し、之を協戮援助する事によつて露國の崩壞を拯はんとするに在る、此種の考は二月中旬露國東清鐵道のホルワット氏が北京に來た頃から初まつた、或は此頃から大いに熟したといふのである。更に第三の説は西伯利に於て反過激派勢力の結束を計るの運動は餘程前から初つて居つたので、現に日本人中にも所謂志士を以て任ずるもの丶少からざる數が、西伯利方面に活動を初めて居つたとも云ふのである。之と參謀本部との連絡に關する風説は、固より一片の訛傳に相違ない。

何れにしても西伯利に出兵すべしとの論は、二月末から三月に懸けて頓に激烈を極むるに至つた。而して中には故らに事を大袈裟に吹聽して、露西亞は今や正に獨逸の所有になつて了つたとか、獨逸の辣腕は更に遠く東亞に及び、獨逸俘虜の解放並びに其武裝に伴つて、吾人を脅かす所の危險が目前に迫つて居るとか、無暗に我々國民を怕がらせんと努めて居るやうに見ゆるものもあつた。社會に相當の地位を占むる學者論客にして、亦此種の盲動に左袒するものが少く無つたので、一時新聞紙等の論調から判斷すれば、政府は今にも出兵しさうな形勢であつた。尠くとも政府は此等の矯激なる言論を其の横行するに任せて、何等の手加減を加へなかつた事丈けは事實である。

併し一部の識者の間には出兵に反對する考が亦案外に强いやうであつた。尠くとも所謂出兵論者の其理由として擧ぐる所の根據に深き疑問を挾むものが頗る多かつた。之れ實に注目すべき現象である。其

上米國の方からも出兵に反對する趣の意嚮が明になつて來る。風說に據れば、我國が英國を通して米國政府の意嚮を問合せたるに對し、彼は「獨逸勢力東漸の結果急迫なる實害の發生する場合を除き其以前に出兵するは露國民に對する敵對行爲と云ふべく、我政府は主義として直ちに之に賛成する事を得ず」といふ旨の返事があつたといふ事である。一部の好戰論者(ジンゴイスト)は、外國の思惑を右顧左眄するを批難するのであるけれども、悲哉いよ〳〵出兵となつた場合に、必要なる各般物資の供給を米國に仰がざる可らざる狀態にある我國としては、全然彼の意に反して行動する事を難んずべき事情がある。夫れや是れやの理由で月の央頃から出兵論も段々下火になつた。吾人の見解からすれば、斯の如きは政黨や外交調査會などの反對する迄も無く當然の成行であらう。而して政府も愈々當初の考の如き大規模の出兵計畫を中止した事は、三月廿日貴族院本會議に於て高橋博士の質問に對して爲せる寺內首相の答辯に於ても明かである。吾人の密かに想像する所に據れば、大規模の出兵は或は絕對に實現する事無かるべしとするも、若し西伯利に於ける反過激派勢力の結束成るの曉には、或は之を援助する意味に於て多少の出兵を爲す時が來ないとも限らない。尠くとも政府並びに軍事當局者は斯の如き事實の發生を心私かに期待して居るではなからうか。故に予輩は、寺內首相の言明に於て大に安心すると同時に、まだ多少の懸念を將來に繫けざるを得ない。

予輩は必ずしも絕對的出兵反對論者ではない。唯兵を動かすは、陳腐なる言葉ではあるが、國家の大事である。最も愼重なる熟慮深議を盡して後、初めて決行するを許すべき問題である。而して熟慮深議の題目としては、先づ第一に、何の爲めに出兵するかの目的を確定しなければならない。第二には

其目的に對して拂はねばならぬ所の犠牲の程度を測定しなければならない。第三に夫れ丈けの犠牲は、之に依つて達せんとする目的に照して、甘じて之を拂ふに差支なきものなりや否やを講究しなくてはならぬ。更に第四には出兵の結果として將來に起るべき財政關係、國際關係其他種々の方面の跡始末に就いても計畫する所なければならない。而して凡て此等の問題を愼重に講究した上で、之を國の內外に正々堂々と表明して、然る後に初めて出兵を決行すべきである。然るに今日まで主張せられたる出兵論者の議論には、凡て此等の點に就いて果して十分吾人を滿足せしむるものがあるか。

出兵論者の多數の議論に予輩の甚だ遺憾とする所は、何の爲めにするかの目的の意識が明白で無い事である。而して彼等の最も喜んで國民に語らんとする所は、出兵の結果として他日帝國の獲得し得べき物質的利益である。或有力なる新聞の如きは、西伯利の占領は以て優に戰費を償うて餘りあるべしとさへ放言して居る。西伯利を占領する事に就いては日本國民中何人も異議はあるまい。其豐かなる富源の點より、又日本海の對岸を包容して日本の國防的地位を一層鞏固にし得る點より、殊に日本國力の大陸發展を一層促進せしむる點より觀て、此上の望ましい事は無い。併し乍ら西伯利占領はさう無雜作に實現の出來るものであらうか。東亞に利害關係を有するものは、日本を除いて支那許りでは無い。假令戰時の今日歐米諸國が深く東亞の事を顧るに遑無しとしても、我日本國は今や世界の一員として立つて居るものなる事を忘れてはならない。世界の大勢に逆行する事は今日決して吾人の執るべき方針では無い。世の偏狹なる論者動もすれば、我國が漫りに歐米の思想に左右さるべきにあらずと力む。然し斯くの如きは鎖國的思想家の常に口にする所にして、世界的思想を自らの中に見出し、否、自らの思想を以て世

界の大勢を造らんとする大國民の抱負に適はしき態度ではない。吾人は須らく進んで世界の大勢を作るの主動的分子たるを期すべきである。此覺悟ある以上、世界の大勢に順行するといふ事夫れ自身は決して大國の面目を傷けない。而して今日世界の大勢は、故無くして領土的野心を逞うせんとするものを許さゞらんとするに在る。米國が日本の出兵に好意を表せざる所以も、畢竟彼の努力して造らんとしつゝある所の大勢が、之に由つて事實上裏切らるゝ事無きやを怖れたる爲めではあるまいか。米國の態度の是非は今玆に論ずる問題では無い。唯斯くの如きが今日世界の大勢なる事を念頭に置いて、其上に出兵の問題を研究計畫すべきである。譯も無く出兵して相當の地歩を事實上に占めさへすれば、後日何とかなるだらうと云ふやうな根據薄弱なる樂天觀に基いての、帝國此際の出兵は、餘りに無鐵砲なる行動ではあるまいか。他國の領土に出兵する事のみが國力を張る所以では無い。講和談判の開催まで十分の餘力を蓄へ、所謂滿を持して放たざるの態度を執る事も亦、何れ丈け戰後に於ける日本の立場を鞏固にするか分らない。何れにしても出兵の決行には、もつと〳〵精密なる研究を要する點あるは言を俟たないのである。

一體我國が西伯利に出兵し得るとすれば、如何なる目的を以てすべきであるか。吾人の考へ得べき出兵の目的は尠くとも三つある。一つは帝國の自衛の爲めである。も一つは露國を救援する爲めである。終りには聯合與國の協同目的を後援するが爲めである。此等の點は出兵論者も亦漠然と認めて居る所である。唯此等の目的の爲めに、果して帝國は、一部の論者の主張するが如く、大兵を西伯利の野に送るの必要ありや否や。之が實に大いなる問題である。

（二）

先づ自衛の爲めにする出兵論から調べる。

論者曰く、單獨講和の成立と伴つて獨逸の勢力は全露を掩ひ、今や東漸して直接に我國を脅かさんとして居るから、我々は自衛の爲め速かに出兵して居る。一日後るれば夫れ丈け危機増大するの形勢を呈して居るから、我々は自衛の爲め速かに出兵して之に備へなければならないと。此論に對して吾人の先づ問はんとする所は、東亞に殺到し來る所謂獨逸の勢力とは如何の性質のものなりやの點である。若しそが純然たる經濟的勢力若くは多少兵力を伴ふ經濟的勢力であるならば、之に對抗する方策は出兵による國權の發動でなくして、自ら他に方法はあらう。故に自衛を名として出兵を必要とする以上は、所謂獨逸の勢力を解して純然たる兵力と觀なければならない。世の出兵論者の多くが、自衛の爲めの出兵論の根據として、東亞に於ける獨逸經濟力の發展までを列擧するのは笑ふべき俗論である。

高橋法學博士は最近の「國際法外交雜誌」（三月十五日發行）に於て自衛權を理由とする西伯利出兵の法理的根據を說かれて居る。併し直接の危害あらざるも緊急防禦手段として大兵を西伯利に送る事が假令國際法の認むる所たりとしても、此論據から直ちに速かに出兵を決行せざるべからずとするの議論は成立たない。國際問題を惹き起すべき重大事の決行については、之に關する國際法理を豫め講明するは固より必要であるけれども、更に進んでいよ〳〵國際法上許されたる行動を決行すべきや否やは、また諸般の事情を斟酌して愼重に判斷すべき政治問題である。而して世上の議論の爭ふ所も亦其が法理的根據ありや否やにあらずして、今日出兵を決行するの必要ありや又之を爲すは得策なりやの點である。

自衛の目的を以て出兵を主張する論者の揭ぐる根據に二つの種類がある。一つは獨力東漸の勢滔々として已に東亞に及び、帝國に對する脅威目前に迫つて居るとの說で、一つは危機夫れ程切迫しては居ないけれども、早晩到來するに相違ないから、今より之に對する用意を爲すの必要があるといふ說である。

第一の獨逸の勢力東亞に張り直接に我國を壓迫せんとして居ると主張するものは、又いろ〳〵の根據により自己の說を裏書きせしめんとして居る。今其主なるものを列擧すれば、（一）今日露國內の實權を握つて居る過激派は全然獨逸の傀儡である。此兩者の結託は自ら獨逸勢力の東漸を便せざるを得ないと觀るのがある。併し此說は、過激派が概して獨逸の意の儘になると見る點に於て、及び獨逸が昨今の新形勢に乘じて東亞に野心を逞うせんとして居ると見る點に於て、正鵠を缺いて居る。獨逸が今日兵力を割いて徒らに東亞に事端を釀すものに非るべきは尙後に說かう。過激派が概して英佛嫌ひである事、レーニンが曾て獨探某と金錢上の交渉があつたといふ事は隱れもない事實なるに拘はらず、昨今に至りて、此一派が決して獨逸の傀儡でもなければ、又獨逸の思ふ通りになるものでもないといふ事が、段々明かになつた。而かも我國に於て、今日尙過激派を獨逸の手先なりなど〻する謬想より脫するを得ざる所以のものは、恐らく西洋の社會主義、中にも極端なレーニン一派の殆んど無政府主義に近い主張に關し、適當なる理解を缺くからではあるまいか。人は曰ふ、彼等が英佛を袖にして單獨講和の商議を進め、以て不信の譏を厭はなかつたのは、大に獨墺を利益せんが爲めであると。成程單獨講和の成立は其必然の結果として、英佛の不利と獨墺の利益とを伴つた。併し乍ら、前者の不利と後者の利益を計る事が彼等の目的ではない。一般平和を齎らさうとする大理想（假令其考が誤つて居るにせよ）の前には、目前の

細事を顧るに違なかつたのである。斯の如きは獨り彼等許りでは無い。他の穩健なる社會主義者の間にも略ぼ一貫せる所にして、革命開始以來數ふるに違無き程多數の類例を示して居る。彼等の爲す所の結果が偶々獨墺を利益したからとて、直ちに之に味方するものと考ふるは、レーニン一派を誣ゆるの甚だしきものである。又人は曰ふ、レーニン政府は曩きの與國との密約を訐いて信義に背くの罪を意としなかつたと。併し乍ら吾々は、彼等が曩きの與國との密約許りでない、獨墺との密書をも訐いた事を忘れてはならない。中にも日露戰爭當時より數年間に涉り露獨兩國皇帝の間に往復された七十餘通の秘密電報を世界に公表したるが如きは、最も露骨に獨逸皇帝の面皮を剝いた處置と云はなければならぬ。今度の單獨講和の調印に至る迄の經過に於ても、露國側は唯々諾々として其命を喜んで奉じたるが如く見ゆるけれども、併し其實、最後まで精神的反抗の態度を飜さゞりし事は、調印の席上に於ける露國側委員長の聲明に於て之を徵する事が出來る。彼は飽くまで獨逸の領土的野望に眼を掩ふを拒んだ。又獨逸が無法に休戰條約を破棄せる罪を數へて止まない。而して所謂平和條約も畢竟獨逸が武力を以て强要する所たるが故に、故らに一言も文句を云はず、提示せられたる條約を其儘調印する旨を述べて居る。自ら戰爭停止を聲明し軍隊の解隊を決行して置きながら、今更敵の武力的强制を罵るは、實際政治家の眼から觀れば如何にも馬鹿氣切つた事のやうに見ゆるだらう。けれども彼等が飽くまで眞摯なる態度を執つて動かない事だけは之を認めてやらなければならない。要するに過激派を、單純なる空想に動いて毫も實際上の結果如何を顧みないといふ點より之を批難するは妨げない。けれども彼等に故らに獨逸を助くるの意ありと觀るのは大いなる誤りであらう。獨逸が暴力を以て無理に露國人民を壓倒しつゝ進むに非

る限り、大兵の東亞發遣を無人の地を行くが如く容易なる事業と思ふならば、大なる誤りである。

(二)假令過激派政府に獨逸と結托する事實無しとするも、同國の無政府的崩壞は獨逸勢力の東漸に何等の妨げを爲さぬではないかと觀る說もある。獨逸に此際東亞に送兵するの意圖ありや否やは別問題として、露國今日の國家的崩壞は或點迄は事實である。レーニン一派がもと自家の理想の實現の爲めには戰爭の敗北を第一條件とするの見解を執つて居つた事に鑑み、去年の夏以來軍隊の秩序が全然崩れて、今日となつては假令どんな英傑の將軍が出て來ても殆んど之を纏めるに由なき狀態に在るに鑑み殊に二月十一日戰爭停止軍隊復員の命令を發して以來、此の形勢が一層進んだといふ事實に鑑みて、露西亞が獨逸軍隊の前には全然無力である事は言ふ迄も無い。單獨講和成立の前後、獨逸軍隊の露都侵撃に對して、政府が對獨反抗命令を出したといふ電報もあつたが、之は恐らく過激派政府の與り知らざる所であらう。政府並びに人民に概して獨逸を助くるの意無きは疑も無い。否、進んで獨逸に反抗せんとするの氣分は、一部の國民間に必ずや存するに違ひない。けれども政府も國民の大多數も、武力を以て獨逸に抵抗するの考の無い事は明白であつて、云はゞトルストイの所謂無抵抗主義を實行して居るが如き現狀に在る。此點に於て露國が國家として全然解體の姿にあることは明白であるけれども、併し乍ら之を以て露國民に到底將來舊態に復興するの氣力はないと見るのは些か早計ではあるまいか。武力的破產は必ずしも精神的破產を意味しない。我々の愛國的思想から觀れば無論精神的破產に相違ないが、併し彼等には尙かれ惡しかれ彼等自身の立場がある。而して彼等本來の思想の立場から云へば、彼等は寧ろ自家の思想の成功を誇つて居るかも知れない。尠くとも彼等が自家の理想の實現を近き將來に期して努力奮鬪を止め

ざる事は、最近歸朝せられたる内田大使の談話にも見えて居る。大使曰く「過激派政府は一方ブレスト・リトヴスクに於て講和を議しながら、他方無線電信を飛ばして過激派主義の宣傳に努むる等、其熱心驚くべきものがある。爲めに獨逸國内にも過激派化したるもの少く無い。從つて獨逸も强壓的政策を採り得ない。よし獨逸が過激派を撲滅する事が出來るにしても、其主義は決して亡びないであらう。彼等の立場は今や却て世界の全局に亘り影響せずんば已まざるの概がある。恐らく其影響は第一着に墺太利に及びて其瓦解を來たし、更に之が獨逸に波及して流石の强國も獅子身中の蟲の爲に斃れる事とならぬとも限らない」（東京朝日新聞に據る）と。予輩の數ケ月來主張せる見解が偶々大使の言明によつて裏書せられたるは、予の密かに快とする所である。大使の言の如く、武力的に壓倒せられたる過激派が、精神的に獨逸を壓倒し得るの日の、果して近き將來にありや否やは姑く措き、彼等が獨逸の態度に不滿と反感とを有つて居る事は、累次國民に向つて發表せる檄文にも明かではないか。彼等は「侵略主義の毒手より世界を拯はんとする吾人の革命的運動を、獨逸が漫りに蹂躙せんとする」と云つて其暴狀を罵つて居る。一般物資を獨逸軍隊の手に入らないやうにせよと人民に告示して居る。さればと云つて彼等は主義の上から武器を執つて獨逸に抵抗する事はしない。夫れ程憤慨するなら何故武器を執らないかと云ふのは日本流の考である。吾人は吾人の考へ方の型に嵌らないからと云つて彼等を漫に罵倒してはならない。獨逸の暴狀を許さず、獨逸に何等の援助を與へざらんとするの決心の頗る堅い事丈けは、之を認めなければならない。吾人は内田大使と共に、過激派の政府は、「當分持ち堪へるもの」と觀る。よし過激派政府が沒落したとしても、近き將來に隣國が優に獨逸の跋扈に對抗し得るだけの勢力に纒まるとは思はない。

併し乍ら露國は今日獨逸の横行跋扈に對して全然何等の障礙を與ふるもので無いとする程に、予は露國民を見縊らない。況して獨逸が僅か東方に大兵を送つた場合、獨逸軍隊の背後の連絡は露國領内に於て極めて安全なものとは、到底考ふる事は出來ない。

(三)過激派の跋扈と獨墺俘虜の活躍とが兩々相伴つて我々を脅かすと云ふ考もある。露西亞が其歐羅巴本部と西伯利方面とを通じて過激派の跋扈跳梁に委して居る事、解放されたる獨墺俘虜の少からざる數が過激派の爲めに武器を執つて反對派壓迫の仕事に從事して居る事は、隱れも無き事實である。然し此事が東亞に對する脅威たるを得る爲には、過激派が日本に惡意を有する事と、過激派を援くる俘虜が本國の戰爭目的に共鳴し、否進んで熱中するといふ事と、及び露西亞殊に西伯利方面に在留する此種俘虜の數が恐るべき實勢力を有するといふ事を前提としなければならない。併し乍ら此等の前提には果して確實なる根據ありやは大いに疑無きを得ない。過激派が必ずしも獨逸と結托するものでない事は前にも述べた。獨逸の使嗾に基かず過激派本來の立場として彼等が特に日本に反感を有すとの證據は、今日迄何等擧つて居ない。あれだけ秩序の紊れたる中で、内田大使などが兎も角無事に歸朝し得た事實に觀ても、寧ろ相當の好意を有つて居ると觀るべきである。過激派の態度若くは其思想其物に反感を有するからと云つて、直ちに彼等を敵視するのは正當でない。ブラコヴエスチエンスクに於て過般日本義勇兵團が十數名の死傷者を出したのは、正確なる事實の報道に據るに、我から進んで彼等の爭鬪に參加したるの結果であるやうに見える。今日まで特に過激派が日本の不利益を計るべく行動したる事實は無い。故に過激派の跋扈に由つて不良なる精神的影響を蒙るといふは妨げ無きも、直に之を以て日本に對する

現實の威迫と見るのは穩當ではない。若し夫れ獨墺の俘虜が、本國の戰爭目的を助成するの意味を以て巧に過激派に取入り、本國の指揮訓令の下に一定の計畫を立てゝ過激派を操縱し、其結果西伯利に於ける彼等の一團が、所謂過激派を提げて支那日本に迫るだらうと觀るに至つては、事實を誤るも亦甚だしい。一體西伯利に限らず、一般露西亞の内部に於て、獨墺の俘虜が自由に露國民の間に濶歩して居るのを見て、我國多數の論者は、之れ現露西亞政府が獨逸の言ふが儘になつて居る證據だと見るやうであるが、之れ甚だしく事の眞相に違つて居る。過激派政府が獨墺の俘虜を全部解放した事は事實である。其中の一部を過激派軍隊の中に使つて居ることも事實である。併し乍ら之と獨墺政府との間には、尠くとも當初何等の連絡が無い。而して將來とても、獨墺政府が此等の俘虜を利用して自家の野望を遂げるといふが如きは、容易に起り得べき事柄では無いと思ふ。

一體露西亞が俘虜の解放を斷行したのは、獨墺政府の意思に出でたものでは無い。彼等一派の本來の空想から、人類の自由は重んずべし、無意義の戰爭の爲めに俘虜となつたものを拘束するのは不當であるといふ見地から、進んで彼等を解放したのである。彼等は戰爭を無意義として戰時の今日凡ての軍隊に復員を命じたではないか。而して所謂國際主義を採り國家の畛域を眼中に置かざる彼等が、自國の兵隊に與へたると同じ自由を敵國の俘虜に與へたるは何の怪しむべき點も無い。されば彼等は今年一月獨逸との單獨講和の席上に於ても、此同じ理屈から獨逸に向ひ、露國俘虜を解放せよとか、居住旅行の自由を與へよとか、殊に言論集會の自由を與へ、又本國より發送する革命思想の傳播を目的とする印刷物を自由に閲讀する事を許せよなどゝ要求した。而かも其際露國委員は更に附け加へて云ふ。吾人は唯之

を貴邦に望むのみではない、我國に於ても已に貴國の俘虜に對しては同樣の取扱を與へて居ると。斯う云ふ見地から露國委員は、獨逸の所謂「俘虜交換」の提議に對して「俘虜取扱の方法の變更」を主張した。蓋し俘虜の交換は已に一種の自由の拘束である。歸らうが歸るまいが、飲まうが食はうが、勝手に任せよ、之を一纏めにして交換するといふ事は、其欲する所に非ざるのみならず、已に解放を決行した今日事實不可能でもある。斯う云ふ次第で、獨墺俘虜は露國内に於て全く自由の身となつた。而してかゝる取扱方については獨逸は寧ろ之を甚だ迷惑に感じたのである。何故なれば斯くして解放せられたる獨墺の俘虜の多くは、歸つて本國の爲めに再び貴重なる生命を捧げんことを欲せずして、寧ろ戰爭の濟むまで露國に止らんことを欲する者が多く、中には過激派の思想に感染れた者も少く無いといふからである。現に墺太利の方面からの報道に據れば、單獨講和の結果として歸還すべく豫期した俘虜の數が案外に少かつたといふ事である。獨逸とても此點は同樣であらう。最近露國から歸つた人の說に據ると、鐵道沿線に於て赤帽や宿引やに獨逸人を觀ること少からず、更に何なり職業に有り就きたいと焦つて居る多數の獨逸人を見たといふ事である。故に彼等が今日露國の諸都市に散在するは、寧ろ彼等に歸つて國家の急に應ずるの志無きを證明するものである。唯表面丈けの觀察から輕卒に判斷して、此處にも獨逸人が横行する、彼處にも獨逸俘虜が濶步して居ると買ひ被るのは正當でない。横行濶步どころか、彼等の多數は今や、露國人の糟粕を嘗めて漸く今日の露命を繫がんとする意氣地無き狀態に陷つて居るのである。

今や彼等は生命が惜しいから歸國はしない。されば云つてまた適當な職業もないので今日大いに生活に困つて居る。茲に獨墺政府に乘ずべき隙があるといへる。即ち彼等を買收して獨探たらしむる事は

左程困難な事ではない。併しながら又一方に於ては、獨墺俘虜の中の少からざる部分が過激派にかぶれて居る事をも豫定しなければならない。獨逸とても下級兵卒の多數は勞働階級の供給する所である。而して勞働階級間に於ける獨國近年の社會黨の勢力發展の事實に考へ合はすれば、獨逸俘虜は已に過激派の思想に大に共鳴するの十分なる素地を有つて居るものと視ることが出來る。故に二月十七日の電報が、獨墺土三國の解放せられたる俘虜が、任意にウエストニックに集合し、滿場一致の決議を以て、各自國民に對しては「吾人は吾人の本國が、露國の革命を援助し、專制主義と資本家の束縛とより國土を解放するに盡力せんことを求む」る旨の、又露國民に對しては「吾人は貴國農民勞働者及び兵士諸君に對し、深厚なる敬意を拂ふと共に、全世界の勞働階級を糾合し、露國勞働者階級によつて揭げられたる國際的標旗を支持せんとす。吾人は速かに戰爭の終結を見んことを欲するに於て諸君と共望を一にするものなり」との檄文を發表したといふのは、少くとも一顧の價値はある。內田大使の談によれば、獨逸本國の人民すら漸次過激派の思想に感化せられんとしつゝありと云ふ。況んや露國其物の中に在留する者に於てをや。此等の點より考ふれば、如何に獨墺政府が買收其他の陰險なる手段を講じても、露國內の俘虜全部を擧げて其手足たらしむる事は事實不可能であると見なければならない。無論我々は之を以て安心する事は出來ない。何處までも警戒の眼を睜つて居ることは必要である。併しながら、獨墺の俘虜が全部本國政府の手先となつて過激派を操縱し、東亞に吾人を脅かすとの、針小棒大の臆說に立つて、以て出兵の大事を輕々しく決行せしめんとする燥狂論者の暴論に對しては、敢て一言の辨妄を草して、其無責任なる煽動より正直なる國民を保護せざるを得ないのである。

假りに西伯利方面の獨墺俘虜が、眞實本國政府に忠誠なものとしても、其數は決して大したものではない。二月二十五日清和俱樂部に於ける本野外相の說明によれば、西伯利に居る獨墺俘虜の總數は七八萬より十萬位であると云ふ。外相は更に附け加へて言はれた。之に過激派から供給した武器は二三百人分位に過ぎぬ。而して哈爾賓方面に於ては支那兵の牽制を受け、浦鹽方面に於ても連絡ある行動を取り得ない狀態にあるが故に、我在留民の生命財產が焦眉の危殆に瀕しつゝありとは認めて居ないと。又三月十五日衆議院豫算分科會に於ける大島陸相の說明に依れば、バイカル以東に九萬四千人、バイカル以西に六萬人で、イルクック以西は不明であるとの事である。吾人の不完全ながら調査せる所に依れば、陸相の擧げたる計數はやゝ多きに過ぐる。それでも僅に十五萬に過ぎない。而して露西亞が當初、スラブ人とか波蘭人とか云ふ敵國に於て所謂異人種に屬するものをば本國に留め、生粹の日耳曼人は之を西伯利に送る方針を取つたといふ事實があるから、西伯利に於ける俘虜は、其能力に於て特に他に優つて居ると見なければならない。併しながら、それでも十五萬が全部結束して獨逸の用をなすといふ事は考へられない。其中若干武裝して過激派の爲めに働いて居るものはある。併し之とても何等本國政府と連絡のあるものではなからうと思ふ。憶ひ起す、支那第一革命の當時、兵役の義務を終りて後商店の小僧として又は藥の行商などの爲めに彼地に行つた我國の青年が、面白半分に戰爭見物に行き、規則正しき訓練を受けた事のない支那兵が大砲などの打ち方を知らないのでまご〳〵して居るのを、兎や角批評して居る中に、氣の早い連中は手傳つてやらうといふ事になり、支那軍隊でも段々之を重寶がつた結果、遂に商店の小僧が一躍して支那革命軍の指揮官となつたといふ奇譚が澤山にあつた。之と同じやうな事

路で獨逸俘虜の一部が過激派の用をなして居る者はあらう。併し斯くの如きは今に初つた事ではない。事が若し警戒すべきであるならば、もつと早く警戒すべきであつた。單獨講和が調印されたからと云つて、俄に此等の寧ろ滑稽に類する事例を擧げて騒ぐのは、所謂風聲鶴唳に昏迷するの類ひに外ならない。

又理屈から考へても、假令幾萬の俘虜が有つたにしろ、全部之を武裝するといふ事は、あの亂雜な露西亞に出來る事であらうか。鳥渡考へると、軍隊を解除した以上夫れ丈けの兵器が殘つて居るではないかと思はる。けれども解除と同時に小銃などは兵隊の自由に持つて行くに委し、大砲なども殆んど遺棄して顧みなかつたから、相當數量の兵器彈藥が政府に殘つて居るのではない。又露西亞に夫れ丈けの設備が無いなら獨逸が之を供給するだらうと考ふる者もあらうが、今や西部戰場に乾坤一擲の大決戰をなさんとするの際、力を他に割くは獨逸の爲し得ざる所、又獨逸の利とせざる所であらう。更に一步を讓り、假令十分なる供給を得たとしても、一旦武器を離れた俘虜が俄かに鞏固な組織の下に强い軍隊となるといふ事は考へられない。何となれば、彼等には最早緊張したる士氣の恢復を求むることは出來ないからである。若し夫れ斯くして造られたる軍隊が、後方勤務をあの亂雜な露國に托して遠く千里の外に立派な軍事行動を執り得るかの點に至つては、固より一言の辯明を要しない。故に獨逸の俘虜が假令纒つて過激派と手を携へても、精々之を買ひ被つた所にしろ、吾人は稍々大規模な支那の土匪馬賊以上に之を評價するの必要は無い。此種類のものに對抗するなら、現在帝國の派遣せる滿洲守備軍を動かした丈けでも大抵事は足りるではあるまいか。現に寺内首相も廿日の貴族院に於て、西伯利に於ける獨逸東漸の危險を極めて輕く見て居るでは無いか。勿論萬一に備ふるの用意は、斷じて之を缺く事は出來ない。併

し周到なる用意を怠るなと云ふ事は、直に出兵を決行せよとふ事ではない。
第二に獨力東漸の危機が左程急迫でないとしても何の途早晩來るに違ひない、然らば機先を制して今より之に備ふるのが我々に取つて目前の急務であるといふ意味で出兵論を主張するの說もある。此說が、前に述べたやうな露西亞は全然獨逸の意の儘になるといふ考と、獨逸は此地位を利用して必ず東方を脅かすといふ考とに基いて居る事は言ふ迄も無い。而して露西亞を以て必ずしも獨逸に對する絕對的の抵抗無能力者と觀るべからざること、幷びに獨逸の東洋派兵を絕對に安全ならしむる程に露は獨を後援するものに非る事は、前段述ぶる所に據つて略ぼ明白であらうと思ふ。高橋博士の如きは、獨逸は己に必要なる輸送を東亞に開く爲めの準備を完全に整へて居ると說かれて居るけれども(前記國際法外交雜誌)、何の正確なる根據に由つて斯の論斷を爲すか頗る怪むべきである。盲目的出兵論者は、獨逸が鐵路潜航艇を浦鹽に送るの可能を說いて國民に無用の恐怖心を起さしめんと努め、殊に三月五日浦鹽に於て潜航艇五隻の艤裝を終れりとの誤報に接するや、得たり賢しと之を出兵論の口實にした。又某將軍が公開の席上に於て、途中二度着陸すれば獨逸のツエッペリンの我帝都に爆彈を投下するは不可能でないと述べたのを聽いたが、さう手輕に着陸地點を發見し得るものなら、日本の不完全なる飛行機でも、七八度途中で休むを得ば伯林の蒼空を脅かすことが出來ると云へぬ事もあるまい。架空の條件を譯も無く許し、一片の想像を今にも目前に起る事實なるが如く說くのは、識者の最も愼むべき事である。或は露獨同盟してバイカル湖畔の鐵道を破壞すといふが如き、ウラル方面にクルップ工場の一部を移轉するといふが如き、多量の軍器彈藥を北氷洋を廻つて東亞に送るといふが如き、イルクック及びクラスノヤロスク

にツエッペリンの格納庫を設くるといふが如き、皆眞面目に受取るべき報道では無い。若し事實斯の如き事ありとすれば、事の初まつてから之に對する處分を考へても遲くは無い。我々の知らぬ間に斯の如き事が實現すると云ふならば、そは敵側の敏捷を語るよりも寧ろ我當局者の大なる間抜けを自白するものである。之を要するに、獨逸が現實に東亞を脅かす程の兵力的基礎を西伯利に築くといふ事は、テクニックとして殆んど不可能に近い。從つて之を根據とするの出兵論も亦一個の空論たるを免れない。さればと云つて吾人は全く獨逸の爲す無きに安心して、西伯利を顧るの必要が無いと云ふのではない。最も緊密なる警戒を怠る可らざるは言ふを俟たない。唯萬に一つ起る事有りや否やの明白ならざるに、早急事端を醸すの得策にあらざるを說くのみである。論者或は曰はん、いざといふ時に事を初めては遲いではないかと。併し乍ら、獨逸がいよいよ此事に着手して、いざといふ急迫の場合に到る迄には相當の時日がある。而して同一の期間を與ふるなら、我々日本は寧ろ獨逸よりも早く準備を整へ得る地理的境遇に居るではないか。況んや滿洲にはかゝる萬一に備ふる爲めの大兵の駐屯があるではないか。いざといふ場合に機先を制する事難しと云はゞ、大兵の駐屯は畢竟何の爲めぞ。

假令獨逸の東洋派兵が技術上可能であるとしても、獨逸は果して此處置を取るや否やも考へて見なければならない。第一に獨逸は今や西部戰線に於て一大決戰をなさんとして居るではないか。一體獨逸は其現狀が許し得る出來る丈けの力を東洋に割いても、果して日本支那を壓倒し得るの成算があるだらうか。吾人は無謀の出兵に反對する者ではあるけれども、獨逸が現實に兵力を以て東亞に繰出して來た以上は、極力之が防遏排斥を主張すること固より云ふを俟たない。從つて西伯利の出兵が當然日本を敵

とするに至るべきは、獨逸政治家の覺悟せねばならぬ所である。而して日本と戰つて勝算の歴々たるもののなき以上、何を物好きに彼等は西部戰線を犧牲にして兵を東方に割くの愚擧に出でよう。姑らく一歩を讓つて、日本支那を壓倒し得るの成算ありとしても、之に依つてどれ丈け彼は全體の戰局に利する事を得るや。近く起るべき西部戰線に大捷を占めざる以上、どんなに露西亞を手に入れ支那や日本を壓倒しても、彼は未だ大局の勝利を占むるものではない。戰後に處する方策から云つても、彼は無用の反感を東洋諸國に買はざるが得策である。吾人に固より戰後獨逸と締盟するの考なしと雖も、少くとも、獨逸が今日巳に吾人に秋波を寄せて居るは事實である。現に先般或方法に依つて獨逸は吾人に單獨講和の意なきやを尋ねて來たといふではないか。要するに獨逸の東方送兵は、假令可能なりとしても、獨逸今日の國策の決して利とする所ではない。若し强いて餘力を西部より割いて別個の活動を試むべき方面ありとすれば、そは恐らく中南亞細亞方面であらう。之れ遠く印度を脅かす事に依つて英國を苦しめ、以て大局を自國の有利に發展せしむるの見込みあるからである。併し之れとても大規模の實現を見るとは容易に考へられない。尙序に云ふが、假りに印度方面に事が起れば、日英同盟の規約に基いて、新たに日本の出兵の必要が起るかも知れないが、其急迫の程度如何によつては、平素日印兩民族の關係を嫉視する英國政府の、直ちに日本の印度出兵を求め來るべきや否やは、又一個の疑問たるを失はない。

　之を要するに、露國昨今の狀態並びに單獨講和の成立は、戰局全般の上に一段の危險を增したものたるは云ふを俟たないが、我國昨今の論壇が騷ぐ程に、我東亞に直接重大な關係を有するものではない。若し此直接の影響の下に非常急迫の危險を感ずるものありとすれば、そは寧ろ東方よりも西方に於てこ

る。何となれば、獨逸は現に東歐の兵を移して之を西方に用ひんとして居るからである。此事は二月央過ぎの議會に於ける、ロイド・ジョーヂの演說にも見えてをつた。曰く、獨逸は露西亞との約束に背き、大部隊の兵を西方に移送し、爲めに我々は從來にない一大急迫に臨んでおる。之に對するには、又從來にない大決心と大對策なきを得ないと。斯くて巴里聯合國軍事會議に統制の實行權を賦與するの議が成立したのである。此結果は昨今開始された西方戰場の一大決戰に其うち現(あらは)るゝであらう。去年の秋迄は英佛側が寧ろ獨逸よりも優勢であつたのが、今や主客其地位を顚倒し、英佛側が受身の地位に立たねばならぬ事になつたのは、畢竟獨逸が露西亞政局最近の形勢を利用した爲めである。只獨逸が此形勢を利用して、どれ丈け西部戰場に活動し得るやは一個の問題である。獨逸も內情は餘程困つて居るといふ說があるが、此說のどこまで肯綮に中つて居るかはこの決戰に於ける獨逸の活動振りに依つて知ることが出來る。之を要するに、今日獨力東漸の危機を說くのは、恐らくまるで見當が違つて居るのであるまいか。今日獨逸の壓迫を最も强く感ずるものは、英佛であつて、決して我國ではない。

（三）

予は獨逸の武力を以てする東漸に對しては先づ大體樂觀說を執るが、然し**經濟力を以てする東漸**に對しては決して安心はしない。若し獨力東漸の事實有りとせば、そは必ずや經濟力を以てするもので、露西亞本部並びに西伯利の獨逸經濟力の下に壓倒せらるゝといふ事は豫期し得べき事であり、又大に警戒せねばならぬ事である。此點に於て若し東亞の危機を警むべくんば、予は其急先鋒たるを辭せず、又之が對策を講ずるの急を說くの熱心に於て、決して所謂出兵論者の夫れに劣るものでは無い。

此事に關聯して吾人の注意せねばならぬ點は、露西亞を如何に取扱ふべきかに關する獨逸國論の最近の傾向である。元來露西亞は、戰前に於ても獨逸の最も經濟的關係を開拓するに努めた處であつた。同じ努力を彼は戰後に於ても固より繼續するに相違ない。けれども今日特に獨逸は、露西亞の將來に對しては一層の重きを置いて居るやうである。そは何故かと云ふに、今度の戰爭の結果として世界中の市場の殆んど全部を失つた獨逸に取つては、戰後に於て全部之を恢復する事が不可能である。從つて戰前に於けると同じ勢を以て經濟的に發展せんとすれば、一旦失つて恢復の見込無き市場の償ひをば、他の新たなる方面に開拓するの必要がある。勿論戰時中奪はれた市場の全部を、戰後全く恢復する事が出來ないと極端に悲觀して居る譯ではない。けれども、米國のやうな強盛な國の占むる所となつた市場は、之を奪還すること殆んど不可能であると諦めて居る點は夫と無く仄見える。斯くて戰後に於て獨逸が更に大に海外に發展し、戰前に於けるが如き卓越せる經濟的地位を占めようとすれば、米國などの手の入つて居ない方面、即ち專ら露西亞を通じて東方に向ふ事にせなければならない。そこで露西亞を如何に取扱ふかといふ問題が、獨逸に取つて極めて大切になつて來るのである。

此の露西亞を將來獨逸產業の市場として確實に保持するが爲めには、何う之を取扱つて可いか。此問題に對して國論は自ら二つに分れて居るやうである。一つは所謂文治派の意見で、此際出來る丈け寬大の態度を以て露西亞に臨み、露國民の好意を繫ぎ、以て他日活動の便宜を作つて置かうといふ意見である。我國にも博く知られて居るパウル・ロールバッハ氏の如きは此意見の代表者であらう。他は所謂軍閥派の、主張で、露西亞を確實に獨逸の市場とする爲めには、例へば英國の埃及に於けるが如く、日本の南滿に於

けるが如く、之を獨逸の獨占的勢力範圍とせなければならないと云ふのである。而して獨逸は去冬單講和の問題が起つた頃から、此二つの思想の間に大に迷つたのではあるまいか。十二月末單獨講和の席上に於て、一旦露國側の意思を尊重するの態度を執つたのは、文治派の對露意見が獨逸政府部內に優勢であつた事を反映するやうに思はれる。而して其後獨逸が急に態度を一變して苛酷なる條件を以て露國に臨み、終にどんどん兵を進めて其提出する條件を强請せしは、一月十二三日御前會議に於て軍閥派の意見が勝利を占めてから後の事である。今日は軍閥派の對露意見が優勢を占めて居るらしいが、他に文治派の意見も國內で有力である以上、後說が又前說を大いに牽制して居るに相違ない。而して何れの意見に據るも、要するに獨逸の主として期する所は經濟的勢力の發展である。此目的を達する以上に無用の武力的壓迫を加ふるは、如何に軍閥優勢の獨逸でも努めて避けんとする所であらう。今日單獨講和の調印を見たるに拘はらず、獨逸が尙局部的進擊を熄めざる所以のものは、畢竟危險思想傳播の根源を絕ち、幾分でも殘留する對獨抵抗力を絕滅せんが爲ではあるまいか。彼がウクライナ、芬蘭を懷柔し、又羅馬尼とも和議を纏めて、着々東方發展の素地を作つて居るのは、其志の決して小ならざるを示すものである。けれども彼の志す所は主として經濟的發展であつて、徒らに進擊を逞うして露國民の反感を買ふが如き事は爲ぬであらう。何れにしても、獨逸が露西亞本部を通じて更に東方に經濟的發展を試みんとして居る事は疑ない。而して經濟的發展は、其前後に於て必ずや多少の政治的勢力を伴ふものなるが故に、吾人の獨逸經濟的膨脹を全然不問に附す可らざるは、固より云ふ迄も無い。唯直接に兵力を以て我を脅すに非るが故に、我亦直に兵力を以て應ぜんとするは決して策の得たるものではない。

獨逸經濟力の東漸にして警戒すべしとせば、之に對する對應策を講ずるの必要なるは言ふを俟たない。而して出兵によつて障壁を築く事が必ずしも此目的を達する最良の策でない事は、從來の經驗に徵しても極めて明白である。何となれば、斯くして徒らに所在民族の反感を挑發し、結局經濟的發展を妨ぐるに止るからである。經濟的競爭に勝利を占めんとせば、先づ所在住民の心を得なければならない。而して斯の如きは、主として國民の私的活動に俟たねばならない。日本の海外發展の從來の缺點は、兵力を以て障壁を築き、其内に於て粗惡の品を高く賣るといふ事であつた。之に由つて我國はどれ丈け苦い經驗を嘗めたであらうか。今日は正に此迷夢より醒むべき秋である。良い品を安く賣つて、住民との間に親切な社會關係を開拓すれば、吾人の經濟的勢力は努めずとも自ら擴らざるを得ない。此根本的努力を等閑に附して、獨り出兵を急ぐのは、經濟的競爭の對策として冠履顚倒の甚しきものである。彼を措いて此を取る、故に動もすれば日本に侵略的野心ありといふ無用の誤解を招ぐのではないか。無用の誤解を招ぐが故に、吾人は往々得るべき利權をも得損つて居るではないか。去月下旬某大新聞は態々號外を以て黑龍江に於ける六十五萬噸の露國船舶が米國ナイト提督の手に歸したといふ報道を發表した事がある。翌日は夫れが「六萬五千噸？」となり、更に海軍當局者の計數によれば六千噸位であらうかと云ふ事になり、而かも多くの新聞は全然之を默殺し、政府當局者亦議會に於て之を否認したので、世間では其新聞の粗漏無智と又之に由つて民間の出兵論を煽動せんとしたる兒戲的拙策を哂ふの滑稽に畢つたのであつたが、若し假りに此事が幾分でも事實であつたとすれば、之れ亦日本が兵力的占領に熱中して、國民經濟的活動を等閑に附せる著明なる實例になる。且つ又昨今報道せられたるレーニン政府が西伯利鐵道の利

米國に讓つて其の財政的援助を乞ふたとの風說の如きも、本來ならば東洋の我國にこそ第一著に交涉せらるべきかゝる問題が、終に斯くの如き方向を取るの勢を馴致する傾あるは、畢竟米國が今日露國民に關する理解を有するに對し、我は全然之を缺如するのみならず、却て領土的野心あるが如く見られ居る結果ではないか。果して然らば、かゝる風說の傳はり又事件の勃發する每に煽動的論議を絕叫する所謂出兵論其者が、自ら斯の如き大不利を國家に蒙らしむるの原因を作るものではないか。吾人は國家の爲と稱しながら知らずして國家の不利益を來たす此種の煽動的操觚者の無識と短見とをあはれむと共に、又其國を過るの責任を糺さゞるを得ない。而して若し吾人がもつと夙く實質的經濟發展の必要を覺醒しる居つたならば、黑龍江の船舶は云ふに及はず、西伯利鐵道其他各種の利權も、疾うの昔に吾々の手に落ちて居つたかも知れない。

（四）

自衞の爲めの出兵論に何等確實なる根據がないとしても、出兵論はそれで全く成立しないのではない。前にも述ぶるが如く、出兵論は更にもう二つの根據から之を說かれ得る。一つは露國救援の爲め、一つは聯合國協同の目的を助成する爲めである。

一部の論者は露國救援の爲め出兵の必要を說く。さて此種の論者に向つて吾人は先づ問はんとする。何物より露國を救はんとするのであるかと。此點に關する論者の思想は極めて曖昧である。時としては獨逸の毒手より救ふべしと唱ひ、又時としては過激派の兇暴より露國の良民を救ふべしと言つて居る、獨逸の毒手よりの救援を名として出兵するに就いては露國民の承諾を俟たなければならない。救はるべ

き當人の意に反して出兵するは不當の干渉である。然らば何人の要求あるを俟つて之を露國民の希望なりと認むべきや。此點に關して吾人は漫然北京駐在英佛公使等の窮策に乘つてはならない。傳ふる所に據れば、聯合諸國は、北京を計畫の中心として西伯利に反過激派諸勢力の結束を計り、之をして救援を求むるの宣言を發せしめ、以て露國の崩壞を救ひ、少くとも獨逸に對抗する一勢力としての復活を計らんとして居るとの事である。斯の如くして叫ばれたる救援要求の聲が、果して露國民其者の聲と認むべきや否やは、吾人愼重に之を判斷しなければならない。吾人は斯かる事實の判斷に於て、何も英佛の意見に盲從するの必要はない。所謂自主的外交とは、必ずしも孤獨の行動に出づる事を意味するのではない。判斷裁決の獨立を尊重すべきを言ふのである。予は恐る、漫然此種の運動に參加する事は、之れ獨逸の毒手より露國を救ふにあらずして、却て過激派を正面の敵とし、以て露國の内紛を一層激烈ならしむる結果に終る事なかるべきかを。

尤も露國を救援すると云ふのは過激派の手よりである、過激派が即ち眞の露國民の敵であると見るの說に至ては、予は容易に首肯する事は出來ない。吾人は内田大使と共に過激派の近く沒落せざるべきを思ふけれども、然し又其壽命の永からざるべきを豫期して居る。少くとも過激派が勢力を固める事、其の極端なる思想が最後の勝利を占むる事を希望するものではない。けれども其の昔ロベスピールの一派が、佛國當時の中心勢力の厭ふ所となつて居りながら、尙之を踏臺として多大の勢力を擁ひ得たと同樣に、レーエン一派は、露國人民の全然心服する所に非るも、尙國民と同一潮流に掉してゐる點に於て容易に倒るゝものではなからう。彼を好むと好まざるとに拘らず、又結局に於て彼が國民より捨て

き運命にあると否とに拘らず、彼が現在必しも露國民の敵でない事は、恰かもロベスピールが當年の國民の敵でないと同様である。從つて露國救援を名として過激派を敵とするは、まかり間違へば露國全體を敵とするの結果となるを覺悟せねばならぬ。九博士の連中の一人が、某新聞で説かれたが如く、我國の出兵によつて過激派を壓倒し得れば露國の良民は喜ぶに相違ないと觀るのは、獨立國民の心理を無視し、過激派の本體を度外視せる暴論である。所謂露國良民の喜ぶや喜ばざるやは今日明ならざるも、少くとも出兵する以上、其結果露國を敵とするに至るべきを覺悟して、決心を定めざる可からざるは言ふを俟たない。現に露國民の多數は、我國の出兵論に對して極めて不快の感を抱いて居ると云ふ報道は、既に頻々として吾人の耳朶を打つて居るではないか。

要するに吾人は今日露國を敵とする理由もなければ又其必要もない。露國を救はんとして露國を敵とするの結果を生ずるが如きは最も愼むべき事である。此際吾人は殊に露國將來の中心勢力は何處にあるやの判斷を誤つてはならない。社會の根本的顚覆に最も多く苦められたる有産階級、殊に海外に亡命して心窃かに故國の舊の如き狀態に復するを待つて居る所の上流階級が、偶々過激派を咒咀し、秩序の恢復の爲めには外勢の侵入も亦辭せざるの意見を發表したからと云つて之を穩健な多數の輿論と見るのは大いなる誤りである。吾人は未だ何れを以て露國將來の中心勢力と認むべきやの定見はない。此點に就いては、英佛の見解と米國の見解との間に已に明白なる相違があるやうに思ふ。英佛は頻りに反過激派の勢力を結束して之を將來の中心勢力たらしめんとするのは、只斯くの如くなるを希望する爲めのみではなく、之を結局將來の中心勢力たるべしと認めたるが爲めであらう。之に反して米國は、斯の見込の上

に立つ英佛の政策に參加するを避け、却つて過激派政府又は勞兵會に頻りに好意を表せんとして居る。西伯利出兵に對して獨り贊同の意を表するに遲疑するも、恐らく亦之が爲めであらう。

何れにしても、我國にして露國救援を名として出兵すべしとせば、先づ何物より露國を救はんとするかを明かにせなければならない。而して救はねばならぬとする露國とは抑々何を指すやを確定せねばならない。其上で露國自ら日本の救援を希望するや否やを明かにすることが必要である。

（五）

次に聯合國の協同目的を助成する爲めの出兵論は、之に據つて獨逸を牽制し、以て西部戰場に於ける英佛の軍事行動に裨補すべしと云ふ根據に立つ。此目的を以て出兵するにしても、本來露國の同意を得る事が必要であるが、一般平和の確立を理想とする彼等が、快く之に同意せざるべきは初より明白である。併し協同目的の助成と云ふ大策より觀れば、露國の不承諾は最早や之を顧慮せずともよろしい。露國の抵抗力無きに乘じて兵を進むる事は、もと我の好まざる所ではあるけれども、英佛を援けるといふ大目的の上から、之は已むを得ないとも見られ得る。併し乍ら茲に考へなければならぬのは、此目的で進む以上は、有効に此目的を達し得る丈けの兵力を以て、又之に必要なる地點まで大軍を進めなければならぬ事である。五萬十萬の兵隊では何の役に立たない事は勿論、遠く露獨の境上まで深入りするでなければ、之れ亦何の役にも立たつまい。斯くの如きの可能なりや、又我に斯くするに堪ふるの實力有りやは、深く問はずして明かであらう。

尤も聯合國協同目的の助成は、直接に獨逸を牽制し得るの程度迄進まなくとも、例へば浦鹽を初め

利沿線に蓄積せらるゝを妨ぐる事によつても間接に幾分遂せられ得る。三月十五日議會に於ける大島陸相の説明に據れば、日本より供給せる爆藥・火藥・大砲・小銃並びに彈丸を合せて浦鹽に在る者七千萬圓の多きに達する。或る新聞の報道に據れば、此種の物資の總價格三億に達すとあつたから、他に米國等より供給せられたものも澤山に有る事と思はれる。此等の物資が西部戰場に於て獨逸に利用せらるゝの恐れあるに對しては、極力之を妨止しなければならない。併し之れ丈けの爲めならば、何も大兵を西伯利に送るの必要は無い。本年一月中旬浦鹽に軍艦を送つたのも、畢竟この爲めではないか。この點丈けでは出兵論の論據には成らない。

西伯利に於ける反過激派の勢力を結束し、之を援助する目的を以て多少の出兵を爲す事が、延いて歐露本部に於ける反過激派の結束を促し、之によつて露國が獨逸に對する多少有効なる抵抗力として復活するの見込あらば、之れ亦間接に獨逸を牽制するの一助となる。併し乍ら反過激派勢力の結束が、獨逸に對する有効なる抵抗力となるや否やの疑はしきと共に、反過激派勢力其物の結束すら現に西伯利に於て捗々しく進んで居ないではないか。過激派が譯も無く獨逸の傀儡となつたと見るの誤なるが如く、反過激派の諸勢力が亦譯も無く英佛の傀儡となるべしと見るは恐らく正當の見解ではあるまい。善かれ惡しかれ、露國民の多數は已に餘りに現代放れのした突飛なる思想に心醉して居るからである。

（六）

終りに序で乍ら、西伯利の出兵は支那問題の解決に資すべしとするの俗論に對して少しく批評を加へて置く。

支那の內爭は日本に取つて一大煩累たるは云ふ迄もない。速かにその妥協調和せんことは我々國民の切望である。而して援段政策の迷夢より初めて覺めて正路に復するのキッカケ無きに苦んで居つた現政府に取つて、所謂東亞の危機なる題目は對支政策の方向轉換を計るに絕好の機會であつた。而して世上の俗論も亦、急迫の外難を說けば支那の政爭は立地に止むものと考へて之に裏書きした。成程支那は外難を叫ぶの聲に對しては由來極めて神經過敏である。併し乍ら支那現在の多數政治家の何人に、國難の急に備へんが爲めに多少の犧牲を忍んで妥協調和せんとするの誠意を認むる事が出來るか。外難を口實として妥協した例は第一革命の時にもある。併し此妥協たるや、双方犧牲を出し合つての妥協では無くして、革命派が袁世凱のペテンに乘つのて妥協であつた。所謂南方派の連中は、今日此苦き經驗を再びする程蒙味ではない。而して彼等の內爭の根本原因が、極めて複雜し極めて根抵深き以上、之を圓滿に妥協せしむる事は決して容易の業ではない。三月十九日林公使が日本政府を代表し「支那が已に協商側の一員として參戰せる以上、徒らに內爭に屈托するは甚だ其當を得ない。今や西伯利の風雲急を告ぐるに際し、帝國政府は殊に此感を深うせざるを得ない云々」と說いて南北妥協を勸めたとあるも、一片の忠告位で支那が吾人の思ふ通りに動くと見るのは、餘りに實際を無視せる考である。現に支那の內爭を嗤ふ我日本に於てすら、所謂千載一遇の世界的變局に立つて、上は元老より下は群小政治家に至るまで、黨同伐異を之れ事として居るではないか。眞に支那をして南北妥協の實を擧げしめんとするの誠意を示すには、先づ以て我れ自ら擧國一致の實を擧げなければならない。而して從來の行掛りが容易に山縣と大隈とを和せしめず、寺內と加藤とを和せしめざるを諒とする以上、一層複雜なる支那の政界が、西伯利

急迫位で悉く一切の利害を抛擲する者に非ることは、明白に認識し得べきである。現に西伯利の急迫を理由として、日本より購求せる軍器彈藥を横取りした張作霖は、忽ち戈を南に向けて黨爭の勢を煽つて居るではないか。西伯利の出兵は支那南北妥協の問題を解決する上にも絕好の機會であるなどゝいふのは、人を愚にするも亦甚しい。よし又之が支那問題解決の好機會たり得るとしても、之が解決のために出兵の大事を決行するは、餘りに大なる犧牲である。(三月廿三日)

「伯林より東京へ」

中野正剛

（一）

先頃本野外相が西伯林出兵に關し聯合列國の意嚮を問合せるや、待ち構へたる列國の新聞雜誌は、筆を揃へ聲を大にして日本の出兵勸誘説を喧傳した。獨逸側でもまさかとは思つたであらうが、恁んな事が實現されては叶はぬと思ひ、聯合諸國の言論に應酬して、「伯林より東京へ」なる新標語を喧傳し、竊かに日本の輿論に愬へんと試みた。此「伯林より東京へ」なる新標語は、其概略を新聞電報で見たゞけでも、決して世の所謂東漸若しくは東洋侵略を意味するのではない。却て露西亞を通じて日本と手を握り、其聯盟によつて日獨兩國の世界政策を遂行せんとするのである。一體日本の國民は此頃神經衰弱にでも罹つて居るかの如く、新聞でも標題だけは覗いても見るが、内容を精讀する程のエネルギーが無いやうだ。更に精讀して後地圖と引較べて熟考するなどいふ事は迚も覺束ない。仍で血迷つた眼には「伯林より東京へ」なる標語が既に獨逸の東方侵略を意味するかに見え、氣の早い連中になると今にも飛行船が東京市街に爆彈を投下し、潛航艇が東京灣に潛り込むかの如く不安を感ずる者さへある。是では宛然水禽の羽音に驚いた維盛卿の戰略である。

（二）

獨逸の日本に對する政策、即ち「伯林より東京へ」といふ政治家の理想が如何なるものであるかを知らんと欲すれば、先づ露獨單獨講和の大勢を概觀せねばならぬ。曩に露西亞のレーニン一派が勢力を握り、獨逸とブレスト・リトウスクにて和議を開くや、氣の早い連中は素破こそレーニンは獨逸の走狗である、聯合列國に

て獨逸との屈辱的講和に甘じ、獨逸の世界侵略の手先となるものであるなど騒いだが、其經過に觀ると決してさうとは思へぬ。レーニンは露國の社會黨の內でも敗北派と稱せらるゝ極端な部類に屬する者であるが、決して獨逸皇帝の走狗ではない。彼は露西亞の本國を去つて瑞西など中立國で其主義を傳道してゐたので、獨逸政府は彼を利用する心算で直接間接隨分資力も供したであらうが、レーニン等露國の過激黨は已に其以前から獨逸の社會黨と結び、國際的に其主義を傳道したのである。寧ろ獨逸皇帝の走狗であると云はむよりは、國際的無政府主義若くは社會主義の一大勢力である。嘗に露國の宮廷內に獨探の手が伸び、宮廷を中心として露獨單獨講和が行はれさうな形勢となるや、英佛諸國では其裏を掻く爲めに中產階級を背景とするケレンスキー一派を援助し、彼等をして勢力を握らしめた。

一體英佛の露國民主主義援助はなか〳〵一朝一夕の事ではなく、一九一五年の頃から已に此準備に取掛つて居つた。一九一六年には英國のセントラル・コンミチー・フォア・ペトリオチック・オーガニゼーションが主催で、露國の六大新聞の有力者連を英國に招待した事がある。其際に英國政府の意を承けた實業家連と露國の新聞社會との間に一種の契約が成立し、爾來露國內には英國の意を承けて言論を立つる新聞が非常に多くなつた。其他露獨國境の閉鎖に伴ひ英露の經濟的關係が頻繁となり、又軍需品の受授が行はるゝやうになると共に、兩國の資本家階級中產階級の間には幾多の利害の共通點が生じて來た。利害の共通する所即外交政策の伴ふ所で、其處に露西亞の中產階級を援助する英國の勢力は確立せらるゝに至つたのである。其チャンピオンとして選ばれたのがケレンスキーである。獨逸は此形勢を觀て非常に殘念に思つた。併し乍ら「先」を打たれて「後の先」を打つだけの備の無い獨逸ではない。帝政が破れ親獨的宮廷の力が一掃せられ、其處に中產階級を背景とするケレンスキー一派が、英國の傀儡となるのを看て取つた獨逸は、兼ねて一方に於て準

備して居た過激派を利用する事になつた。獨逸が他國の領土内に政治的思想的經濟的運動を逞うし、基礎鞏固ならざる敵國の内部を侵蝕するの巧妙なるは後に說明するが、獨逸が豫ねて露國の無政府主義者、社會主義過激派等の背後に廻つて彼等を煽動し、ツアルの帝國を弱めんとしたるは一朝一夕の事ではない。仍でケレンスキー一派に對抗すべき過激派のレーニン一派を援助し、兩方競爭の結果ケレンスキーが失脚してレーニンが之れに代つたのは、畢竟露西亞に對する獨逸外交の成功を語り、英國外交の失敗を證するものである。

（三）

今後の獨逸の對露政策又はレーニン等過激派政府の前途をトせんと欲すれば、何うしても上述したケレンスキー、レーニン兩派の興廢を詳細に觀察せねばならぬ。一體列國は露西亞の實狀を觀察するに方つて、露西亞の利害を主眼とせずして自國の利害を主眼とし、夫れに便宜なる解釋を下さんとする傾向がある。露國は一言にして盡くせば、平和と自由とを享受するのが主眼であつて、大戰爭に勝つと敗くるとは其關する所ではない。革命が起つて後も露國の民衆は、如何に外戰を革命に利用するかを主眼とし、革命を利用して外戰に勝たうといふ念慮は無い。然るに英國側ではケレンスキーを援助し始めた最初より。此露西亞の革命を利用して露國の民衆物資を組織し、聯合與國の爲めに大戰亂に傾倒せしめやうといふ考を有つて居る。畢竟彼等の眼中大戰が主であつて、革命は其方便に過ぎない。仍で大戰を方便とし革命を主眼とする露西亞人とは、全然反對の立場に居るものである。

予は露西亞の思想文學等を專門的に研究はしないが、世界の思潮に多大の貢獻を爲した露國文學は、畢竟自由平和論者の殉難文學であり、又殉難者の英雄文學であると思ふ。露國の文筆家は思想の人であると共に自由主義の活動家である。十九世紀の露國の書物は十八世紀の佛國の書物の如く、社會解放の唯一機關である。露國文豪の運命は千遍一律に專制政府に虐げられた悲慘其物である。世界に名を走せた露國の文

は、大抵西伯利に追放せらるゝか、牢獄の中で悶死するかに定つて居る。ラッチスチエフ、プーシユキン、レルモントフ、ソロヴイヨフ、グリボイエドフ、ピエリンスキー、ゴルキー等專門家でない我々の知つた露國の文豪の運命は皆さうである。露都より西伯利に達する數千哩の通路は、累々たる殉難志士の髑髏によつて飾られて居るとさへ誇張し得るのである。中央で傳道して迫害を受け地方に追放され、饑寒の間に立ちて彼等殉難者が民間に植ゑ着けた自由主義無政府主義の力は非常に鞏固なものである。大戰勃發の際に已に地方に醱酵し始めた不穩分子は、此機を利用して專制政府を顚覆し、自由の天地に安息したいとの希望を描いたのである。然るに當時ツアル政府の威力がなか／＼强いので、兎に角夫れに結束せられて大戰に從事したのである。然るに戰ふに從つて財力竭き、人力盡き、壯丁は塹壕の中に曝露され、老幼は所在に饑餓に瀕するに至つて、數百年來培養せられた民主主義が乍ち爆發して、專制政府の顚覆を見るに至つたのは當然である。

此機運を利用しケレンスキーを傀儡として專制政府を破壞した英國の對露政策は見上げた物である。然るに白人、別してアングロ・サクソンはイマジネーションの力が足りないで、自國の都合が好いやうに大勢を觀察する弊害がある。機を觀るに敏なるロイド・ジヨージ氏も世界の思潮を解釋する上には、矢張りウエールスの田舍役者に過ぎない。彼はケレンスキーを中心として專制政府を仆したのは露國の思潮の力に負ふとは悟らず、自國の小刀細工が適中したものと誤解した。仍で無鐵砲にも財力竭き武力盡きたる露國民衆を驅使して、再び大戰亂に傾注せしめんとした。當時ケレンスキーが聯合諸國との共同利害を擁護し、獨逸の軍國主義を懲す爲めには最後の血の一滴までも流すと揚言したのは、聯合與國の爲めには如何にも好都合で、各國の新聞がやんやと喝采したのは無理ならぬ次第である。

併し乍ら聯合列國が喝采したのは露國の利益となるからではなく、彼等自身の爲めに露西亞を犧牲にし得

ると考へたからである。羊の群は已に饉ゑ且つ疲れて若草の野邊に休憩しやうと欲して居たのである。之を驅つて再び戰場に向はしめたものは英國を中心とする聯合與國で、鞭を執つて小羊を戰場に追出した者はケレンスキーである。ケレンスキー一派は英國の援助を受けて居るから是非も無い次第であるが、露西亞人に取つては決して有難い處置ではない。厭や／＼ながら羊の群はガリシヤ方面に聊か蠢動した。然れども糧食無く彈藥無く且つ戰意無き軍隊が、何うして戰に堪へやう。宛然羊と狼との戰爭の如く、ケレンスキーの對獨膺懲軍は大戰以來二つ無き慘めな狀態となり、隊を成して投降する者、算を亂して敗走する者、解隊して四散する者、實に目も當てられぬ光景を演出した。是に於て國民は驚いた。而して更に戰場に於ける悲慘なる光景より、眼を轉じて國內の狀態を一瞥すれば何うであるか。ケレンスキー政府は全く英佛の傀儡となり了つて居る。戰へば戰ふ程金融權は英國の手中に收めらるゝ。其處へデモクラシイの假面を被つた米國までが遲れ走せに飛込んで來て、帝國主義者のオーソリチーたるルートを使節として送り來り、ドサクサ紛れに露國本土より西伯利沿海州に亙つて莫大の利權を掴み去るといふ騷ぎである。之では迚も遣り切れない。獨逸を膺懲するといふて戰ひながら膺懲の目的は逹せず。露西亞は遂に英米のヴアッサルとなるのでは無いかといふ不安が、全露西亞の民衆を襲つた。此機に臨んでレーニン一派が蹶起したので、天下は欻然として之に歸した。予もレーニン一派の主義を宣傳した小冊子などを曾て二三讀んだ事もあるが、彼等は敗北派と稱せらるゝが如く、野蠻な戰爭には敗けても構はぬ、戰爭さへせねば其處に平和があり、其處に自由がある。平和を愛好し自由を愛好する人類の本性は遂に到る所に勝を稱して、平和を蹂躙し自由を蹂躙する間違つた國、及び間違つた思想を壓服するに至るべしといふのが彼等の主義である。此主義は戰つて獨逸を退ける見込みが立たず、却て英米に金融權及び資源を壟斷せらるゝ事を怕るゝ一般國民に對して、寔に誂ひ向きの主義

ある。畢竟時弊に適せる方針である。仍で此主義は遂に英米の犠牲となりて飽くまで戰はんとするケレンスキー政府を顚覆し、新に過激派のレーニン政府を産むに至つたのである。

（四）

予は此レーニン政府が成立した最初から、彼等は決して好んで獨逸に屈服する者でないと信じた。唯實力盡きたる露西亞としては、獨逸と和を講ずるより他に手段が無い。仍で講和は必然に來るであらうが、獨逸側が講和の條件を決すべき鍵を握りながら、如何なる程度の講和條件を決するかゞ見物であると思つてゐた。講和談判が開始されると、遉がにレーニンは水際立つた態度に出た。之は力を根據に爭つては到底話に成らぬといふので、理想に於て唯一つの活路を見出ださうと考へた。斯くて彼等が全世界に高く掲げた旗幟は何であるか。無賠償、非併合、領土自決之である。レーニンは之を以て高飛車に獨逸に莅んだ。獨逸側から見れば對露戰爭は十分の勝利である。然るに此三大方針で露國の空想の前に膝を折つては堪るものかと思つたに相違ない。併し乍ら露國側としては考へも考へたり、此三大標語は獨逸としては遺憾ながら世界の潮流である事を、如何とも爲る事は出來ない。何を小癪なと思つても之を蹂躪しては、遠大なる獨逸の世界政策の筋書きが立てられない。

蓋し獨逸の國策はアントワープより波斯までといふ順序で發展せらればならぬ。其間に横はる幾多の民族を懷柔せんとならば、何としても此三大標語を反古にする譯には行かぬ。先づ獨逸は今日勃牙利と土耳古とを與國として巴爾幹の軍事外交の立脚地として居るが、此勃牙利及び土耳古には、或は積極的に或は消極的に民族的希望がある。勃牙利は其民族的自覺心を積極的に遂行せんが爲めに獨逸に與みし、土耳古は積弱の餘を英佛露三國の分割に委せず、土耳古民族の力によりて存立を保ちたいといふ消極的決心の下に獨逸と手を握つたのである。更に民族自決主義を獨逸が尊重して巴爾幹半島に打つて出づるとすれば、墺

太利と塞比爾、墺太利と羅馬尼、羅・勃・土・希諸國相互の關係も今後何とか折合を着けさせ、其等を總轄して歐亜阿三大陸の眞中に蟠居する事が出來るのである。埃及も此風を望んで英國に背かんとし、波斯も英露を去りて獨逸に嚮ふに到るべく、貧かに印度の革命家等は此大勢を觀望して蹶起するに至るであらう。先頃獨逸宰相が英米兩國の宣言に對抗する爲めに、議會で明言した講和條件の中にも歴然と此意味が含まれて居る。彼は更に之を押擴め、此民族的自覺を根據とする領土自決主義によりて、世界公海の自由を完うすべしと主張して居る。卽ち領土自決、公海自由は至極結構であるが、獨逸に都合が惡く英國に都合の好い事許りは御免を蒙る、先づ世界の要路に當る處を奪掠的に占有する事は宜しくない、マルタ島を抛棄せよ、スエズ、アデン、ジブラルタルを解放せよ、香港新嘉坡を撤退せよ、之れまで遣れば公海の自由も徹底し、非併合主義も徹底すると叫んで居る。獨逸が當の敵を英國とする以上、英國の中腹なる印度を衝く事は最も大切な策である。然るに此印度の人心と共鳴しないでは對英政策の筋書が書かれぬ。馬蹄の下に呻吟する露西亜を一蹴して、此三大原則を蹂躙するのは朝飯前だが、ムずと左様に出ては前途の芝居が打ち難い。仍で原則としては此三大主義に異存はないと揚言し、之れが適用に對して種々の論議を企みた。

先づ獨軍の侵入せる波羅的三州は國民の自決に待つが、今兵力を以て掌中に收めた貴重なる抵當物は、講和條件の決定するまで無代で解放する譯には行かない。兵を入れたまゝ投票を行はすると揚言した。波蘭侵略地方も同様である。然るに露國側は自決投票は至極結構であるが、兵を入れたまゝでは自由に人民の意思を表示する譯には行かぬ。自由意思の表示に據らざる投票は獨逸の壓迫を意味し、三大原則の精神に反すると云ひ出した。此時既に理想の火は全世界に燃え移り、米國のウイルソン大統領は早速露國に共鳴して、講和には一の併合あるべからず、一の賠償あるべからずと大音聲に名乘上げた。甚だしきは英國の勞働黨ま

でが大帝國を危きに繋ぎ止めんとする政府者の苦心も知らばこそ、此三大原則を英國の領土の上に適用して可なりとまで決議した。斯うなると革命的狂熱で昂氣付いた露西亞の鼻息は益々荒くなる許りだ。此まゝにしては獨逸は理想で露西亞に捲くし立てられ、實行に於てまでも理想の力で引包まれるといふ莫迦らしい狀態となるのである。之れでは叶はぬ、其意ならば此方も遣り方があるといふので急に兵を動かし、餓虎の群羊を驅るが如く、彼得堡まで攻め込まんといふ勢を示すに至つた。仍でレーニン政府も理想論許りでは防ぎ切れず、殘念乍ら獨逸の講和條件に屈服せざるを得なくなつた。

（五）

獨露單獨講和條約の内容は已に世に傳へられて居る。日本の新聞紙は之を喧傳して、露西亞の領土大割讓と吹聽して居る。併し乍ら其新聞電報の内容と標題とを引較べて見ると、其間に多大の相違があり、所謂大割讓なるものも、決して武力的勝利の結果のみによりて行はれず、矢張獨逸が數百年の苦心の餘になつた平和的侵蝕の線に沿つて居るのは、我々の大いに注意しなければならぬ處である。此内容を詳察して初めて『伯林より東京へ』の筋書が解釋せらるゝのである。「打たざれば友とならず」とは水滸傳中の快文字であるが、獨逸はチャンと夫れを心得て居る。曾て獨佛の親善を恢復しやうといふ論者が、アルサス・ローレンを佛蘭西に還しさへすればと云つた時に、獨逸の思慮ある政治家は大に之を非難した。アルサス・ローレンは元來獨領である。それをルイ十四世の際に佛蘭西に取られたのである。故に取戻したのは所謂併合解除であつて侵略ではない。佛蘭西の弱蟲共がア・ロ二州であるからこそ恢復の何んのとホザクであらうが、今にも一戰して北部佛蘭西を蹂躪してやれば恢復などの念慮を絕ち、獨逸が新に侵入せる北部佛蘭西から綺麗に兵を引上げれば、却て獨逸の寛大を德として我を仰ぐに至るであらう。ア・ロ二州を還してやる事は佛蘭西を增長せしむる所以であつて、獨佛の親交を恢復する所以ではない

と。隨分傍若無人な言であるが、所謂「打たずんば友となならず」の眞理を解釋したものである。

獨逸は露國と事を構へ、其一億七千萬の人口を有する大國に牽制さるゝ事は決して好まない。彼は露と親交を結びて、歐洲外交巴爾幹外交に雄々しく立廻る事を利益とするのは明白であるが、而かも此露西亞との親交も屈從によりて結ぶべきにあらず、一擊を加へた後初めて結ぶべきものであると信じて居る。「獨逸の將來は海にあり」とは獨帝の揚言であるが、外交は秘密を尙ぶ以上、此揚言の裏には獨逸が其前途を陸に開拓せんとする意圖を藏して居たと觀なければならぬ。南阿に植民地を取る事は獨逸の國力を散逸せしむる所以であるとして、ビスマルクは最初反對であつた。力及ばぬ極東に手を伸ばし靑島に城砦を構へて、馬鹿正直なる日本の鼻の先に拳固を衝きつけ、强いて彼を敵方に追遣つたのは大失策である。之れは金持ちであり社交家であり貴族であつて、語學に熟達せる現代式獨逸外交家等が、寄つて集つて遣り損つた政策の結果である。それは當時も其後もフランクフォルテル・ツアイツングなどが攻擊して居る處である。獨逸は勢力の散逸を防ぎ、力を傾注するの必要は十分理解して居つたやうに見える。仍で露西亞と結び日本と親交を恢復するの必要なる事は、一日も忘れない所である。

併し乍ら獨逸人も隨分勝手な奴で、他の國と和せんと欲せば先づ其國を叩き付け、自分の欲するだけを掴み取つて、而して敵をして再び立つ無きに至らしめて後、親交を結ばうと云ふのである。先づ露獨單獨講和の結果波羅的三州は獨逸に併合せられた。然し之を併合と喧傳するのは聯合列國の新聞であつて、獨逸人自身は決して併合とは思つて居ない。寧ろ併合解除若しくは領土恢復と心得て居る。波羅的三州卽ちクーアランド、リヴオニア、エストニアは極く昔からの獨逸の植民地である。記錄に據ると獨逸の商隊は是等の地方に於ける蠻族と通商し、一一六〇年には今のリガ地方卽ちヅーナ河口に居住を定めた。一一八五年にはセゲンベルヒの僧マインハアドなる人がウックスクルに敎會

と城砦とを設立した。其後ブレメンの大僧正はリヴオニアの僧官を設置して居る。往昔では商賈と宗教、國力と教會とは常に併進したもので、新教主義と獨逸文明は實に斯くして獨逸國力の先驅となつたものである。一二〇二年には獨逸は是等の地方に「基督の武士」又は「劍の兄弟」なる組織を設け、獨逸の秩序を波羅的地方に樹立したもので、一二〇七年には獨逸の國王フイリツプはリヴオニアを獨領なりと宣言して居る。其後ハンザ同盟にも教會軍を後援し、商業と傳道とはリガ、ドルパツト、レワル等を中心に活躍した。獨逸側に取つては波羅的地方の逸話は犧牲勇俠の逸話であり、小人數の殉難者が獨逸主義を擁して渦卷く波羅的民衆を屈服せしめたのは、彼等の思ひ出多き誇である。

然るに獨逸の政治改革・宗教改革が勃發するに及び、獨逸人は兄弟內に鬩いで外には屈辱を受けねばならぬ時代に逢遇した。アルサス・ローレーンを佛蘭西に取られたのも此頃である。露西亞、瑞典、波蘭は此際に大に領土擴張に腐心した。其結果リヴオニアは一七一〇年に露西亞に併合せられるやうな勢となつた。然るに波得大帝は眞に英主である。彼の蠻勇なる決して民族の自覺とか、領土自決とか云ふやうなハイカラな主義は知らなかつたであらうが、直覺的に波羅的を武力一片にては統治し難きを知り、一七二一年のノイスタツドの平和條約では、是等の地方に自治、信敎の自由、言語の自由等を許し、獨逸人は是等の地方に宗教を興し教會を建て、波得の制度の下に獨逸的發達を樂しむに至つた。彼得の後繼者も堅く英主の遺訓を奉じて、ノイスタツドの平和條約を尊重した。然るに十七世紀の末葉より十八世紀に亘つて所謂汎露主義なるものが勃興して、遂に一八八一年には波羅的三州は自治を奪はれ、信敎の自由、言語の自由等を皆蹂躙され、獨逸の學校獨逸の教會は壓迫的に露西亞化せらるゝに至つた。而して露西亞の官僚主義は遠慮も會釋もなく獨逸人を壓迫し、甚だしきは地名までも露西亞化するといふ有樣であつた。併し乍ら波羅的地方は矢張り獨逸の文明を維持して動かなかつた。今に至つても波羅的地方の

地名は大體獨逸名である。例へばリヴォニアは Dorpat, Fellin,Oesel,Pernau, Riga, Walk, Wenden, Werro, Wolmar, に別たれ、エストニアは Horrien, Jerwen, Wiek, Wierland に別たれて居る。其他知名の都にして獨逸名を帶びたるものは少くない。丁度其名稱はハンブルヒやフランクフォルトが獨逸名であると鳥渡も選ぶ處がない。此獨逸名を帶びたる地方の人民は獨逸語を話し、獨逸の文明を尊崇しながら、露西亞に蹂躙され來つたのである。仍で獨逸人に取つて波羅的恢復の戰は其愛國心を喚起する非常の力であつて、丁度十字軍が聖地恢復を爲すのと同じやうな心理を抱かしむるものである。波羅的三州の內容を解決する爲めに、少し面倒であるが是等地方の人類別を擧げて見たい。

	リヴォニア	エストニア	クーアランド
獨逸人	113.373=9.74%	21.856=5.81%	49.953=8.68%
露西亞人	53.872=4.63%	17.465=5.64%	10.910=1.89%
エストニア人 レッツ人 猶太人	996.239=85.63%	337.016=89.55%	514.634=89.43%

先づ斯ういふ風に人口が分れて居て、エストニア人レッツ人猶太人を合したものが最大多數で土着民族であるが、其次に多いなる割合を占有して居るのは獨逸人で、露西亞人は遙かに下つて寔に微々たるものである。更に大都會を一瞥しても獨逸人の割合は非常に多數に上つて居る。先づリガに於て獨逸人は三五%、ミタウに於て五〇%、ペルナウに於て二五%、ドルパットに於て三五%、レワルに於て二五%、といふ割合である。數の上から此表によつて見ても此通であるが、其數を占有する人民の內容を一瞥すると、更に獨逸の有力なる事が分る。

一體波羅的地方に於ては獨逸人は上流社會を占有し、露西亞人は都會の勞働者に過ぎぬ。レッツ人、エストニア人は水呑百姓が多い。猶太人は賤しき路傍商人などの類である。智識に於ても資産に於ても勢力に於ても、波羅的地方の上流社會は大概獨逸人によりて占有せられて居る。リガ許でも獨逸人の發行する新聞雜誌は二十以上に達して居る。寺の坊主も學校の敎師も

銀行家も大商人も皆獨逸人である。土着民族も九割までは獨逸の新教に化せられて居る。而かも獨逸の傳道は戰爭以前遺憾なく是等の地方に行はれて居たのであつて、決して一朝一夕の事でない。事の成るは成るの日に成るでなくして、由つて來る處があるのである。畢竟數百年間の獨逸主義の殉難者の血潮が凝つて今日の結果を產んだのである。而かも內容を十分獨逸化しながらも地圖の表が露領であつて見れば、さう易す易すとは取られない。仍で大戰爭であれだけの勝利を收めた結果、漸く祖先以來開拓した足場を確保するに至つたのである。我國の前後の考へも無い領土擴張論者などは玆に深く鑑みねばならぬ。日本が微々たる朝鮮を手に入れるのさへ、西鄕南洲以來の愛國者の血が濺がれて居る。輕卒なる西伯利侵略論者は獨逸の爲せしが如き努力を爲さず、何等の根據無くして易す易すと他國の領土が取れやうと思ふのであるか。

（六）

上述の如く獨逸が波羅的三州を叩き落したといふのは列國から見てこそ領土併合であらうが、獨逸本國から見れば併合解除である。それから更にブレスト・リトウスクの講和によつて露領から切離されたのは波蘭である。此波蘭を露西亞から叩き落すにも、獨逸は可成り多年の力を盡して居る。波蘭は露西亞・獨逸・墺太利三國に分割せられて亡びたのであるが、其亡國の民族的自覺は之れまで少からず三國を惱ました。獨領波蘭の三百萬の波蘭人はなか〱治め難いので、之を獨逸化するためにはカイゼルも獨逸の政治家も非常に頭を惱ましたが、今に其成績は面白くない。獨逸は成可く自國領土內にある波蘭人を懷柔し、彼等を手先にして露領內にある波蘭人と氣脈を通じさせ、露領波蘭人を解放して露國より獨立せしむるものは獨逸人であるといふ思想を吹き込む爲めには、或は新聞雜誌を發行し、或は祕密出版物を配布し、或は銀行業者を利用し、思想的に經濟的に多年盡したものである。大戰勃發の最初カイゼルが波蘭人に配布した檄文の如きは隨分振つて居る。其檄文の一節に曰く、「スワチゴリの聖丘の尼

寺の鐘は一夜摑く人なしに鳴り渡つた。之は波蘭の女神が朕に波蘭民衆を拯ふべく劍を拔けよとの暗示に外ならなかつた。そもや女神は朕が枕邊に立ち、涙を流して波蘭民衆の爲めに力を與へん事を誥げられた。即ち朕は玆に斷乎として正義の劍を拔き、暴虐なる露西亞の專制より波蘭人を救はんが爲めに立つたのである云々」と。女神が枕頭に立つて涙を流されたなどとは如何にも艶ぽい話であるが、こんな檄文を波蘭内に配布し民衆が之を馬鹿にしないのは、豫ねて培養する處があつたからと云はなければならぬ。

恁んな調子で波蘭人を懷柔して露國政府に反感を抱かしめ、彼等を手先として露西亞に食入る策を廻した獨逸の腕前は天晴である。併しそれまでは成功したが、今度いよ〳〵波蘭を露國の手から叩き落して後、今後獨逸は如何なる手段を取るであらうか。獨領内の三百萬の波蘭人が、露領より解放せられた波蘭同胞と相呼應して、獨立國を恢復したいと騷ぎ立てたら何うする積であらうか。獨逸は手綱を緩めて民衆的自覺を寬容するの度量があるか。巧く懷柔して獨立もさせず、不滿も抱かしめぬといふ腕前があるか、是等は疑問である。併し獨逸が波蘭を叩き落したといふ事だけにも、其内容には、夫れ程までの手段があるので、日本人の一部が夢想するやうに、たら戰爭に勝つたから領土が取れたといふやうなものではない。更に南に下つてウークライナ地方も同樣である。獨逸のウークライナ政策も詳しく述べると面倒であるが、其民族的自覺に愬へ、露國より獨立せしむるといふやうな遣り方は略ぼ波蘭に於ける政策と同樣である。夫れからズット北に上つて、芬蘭に對する政策は如何であるか。芬蘭は人口三百萬を有するが、其大部分は成吉斯汗以來亞細亞人の血を受けたフイン人ある。之に瑞典人が四十萬人、露西亞人が六千人許り交つて居るが、獨逸の傳道は其錯雜なる人口關係の上に加へられ、植民の九割以上はルーテル派の新敎徒である。獨逸が是等の土地に諸種の運動をなして、獨立を煽動した事は一朝一夕の事でない。今日自治獨立を宣言し露西亞より分立するに至つ

たのは由て來たる所ありと云はねばならぬ。

斯の如く觀て來ると今度單獨講和で露領を離れた部分は、一つとして平常より獨逸の手が伸びて居なかつた地方は無い。而して其獨逸の手が、大勢に逆行するやうな日本の官僚式ではなく、潮流に順つて舟を遣るとも云ふべく、何れも是等各地の民族的自覺に愬へて居た事を看取せねばならぬ。一番南に下つて黑海と裏海との間、露土の境を接する地方に、本名ジョジア露名コーカシアなる地方があるが、此住民四百萬も亞細亞民族であつて、露西亞人に滿足せず矢張り民族的若しくは領土的自覺を有して居る。此地方にも獨逸の手は伸ばされて居るが、今に騷動が本物になるかも知れぬ。獨逸はこんな風に露國に食ひ込んだが此先果して如何なる風に進むであらうか。其處に「伯林より東京へ」なる標語の内容を研究する必要が起る。

（七）

獨逸が露西亞を叩き伏せてのみ締結した單獨講和條約は、獨逸の方より云へば歷史的民族的文明的經濟的に無理のない新線を描いたに過ぎまいが、露西亞に取つては實に致命傷である。露國の海外貿易の三分の一は波羅的諸港によつて行はれるのである。それが獨逸の手に掌握さるれば、露國は實に經濟上の死命を制せられたも同前である。又軍略的にも波羅的を掌握すれば、彼得堡は指呼の間にありともと云ふべく、露都に對して殺活の劍を握つたも同前である。勞兵會が政府を莫斯科に移すとすれば、露西亞は今度獨逸に對し逆襲的陣形を捨て、專ら自衛の方針に變るの已むなきに至つたものと見なければならぬ、獨逸は波羅的地方を得たのみでも、六百萬の人口を移植し更にコフノ地方をも併すれば、戰前獨領の四分の一を加ふる譯だと勘定して居つたが、更に波羅政策に成功し、ウークライナ政策に成功し、ジョジヤまでも手に入るれば、其得たる富源及び足場は非常なものである。惟ふに獨逸は此等の地方に於て、從來の露西亞の秕政を改良し、自國の立場を健全にする政策に出で、是等の諸民族を利用し更に對露政策を講ずるに至るであらう。波羅的三州には

大地主が多く、土着民が是等に虐げられて居るのは不穏の種子であるが、獨逸は是等の地方に獨逸特有の小農政策を移植し、國家の有財を以て大地主の土地を買收し、漸次に之を農夫に頒ち、自作小農の基礎を固めしむるであらう。さうすれば地圖を獨逸色に塗り替へたのみでなく、此地方の人心までも獨逸化する譯となる。獨逸の對波蘭政策對ウークライナ政策は、かなり面倒な事が多いので、其成否は輕々しく論ずる事は出來ぬ。寧ろ大いなる失敗をしはしないかと思はれるが、獨逸自身は失敗しないやうに努力するだらう。

（八）

偖て斯うなると獨逸は此上に露西亞の内部を侵蝕し、更に直ちに東方に向つて侵略の手を伸ばすであらうか。露西亞人はあれだけ屈辱的講和を結び乍ら、莫大の領土を叩き落され、此上にも獨逸の走狗となつて、日本と支那とに災を爲すであらうか。固より「敵の來るを恃まず、來るあるを待つあるを恃む」とは孫子の兵法であるが、他日亞細亞大陸を擁護する爲めに、或は露獨の聯合軍、夫れに歐米の何れかの國の尻押しまでも引受けて、亞細亞民族存亡の一戰をやらねばならぬ運命に逢着するかも知らぬが、敵の來るには緩急あり、其緩急の差を辨別して宜しきに處するは政治家の心得である。先づ過激派の態度を考へて見ると、彼等は力及ばずして獨逸に屈したが、固より獨逸に心服はしない。更に露國一般の國民に至つては、其屈辱を一層遺憾に思つて居る。トロツキーが單獨講和成立後失脚したのは、丁度ポーマス條約後に小村壽太郎侯が地位を保てなかつたのと同樣、露國民の屈辱的講和に滿足せざる證據と見る事が出來る。其他レーニンの宣言にも勞兵會の彼得堡立退きの決議文にも、獨逸に對して大に憤るの意味に明白である。若し平和を欲し自由を欲する露西亞を屈服せしめたのに尙滿足せず、彼等を驅つて極東侵略に利用するといふやうな態度を獨逸人が採れば、民衆は大に激して獨逸に反抗する。レーニン政府が此民意を蔑視して獨逸の手先きたるに甘んずるならば、國民はレーニン政府を仆す事、嘗てのケレ

ンスキー政府を仆したと同じ筆法に出づるであらう。

一方獨逸は成るべく過激派政府を利用しやうと思つて居る。故に過激派政府を難局に陷れ、遂に之を失脚せしめて今までの經綸を臺なしにして了ふやうな事は行るまい。又戰線は東部戰線のみでなく、西部戰場も重要である。亞米利加が參加したのに露西亞を片付け得なかつたならば、獨逸は非常な窮地に陷つて居つたであらう。露西亞を片付けたから辛つと新手の亞米利加を敵に廻しても、先づ互角の太刀打が出來るといふ準備になつたのである。仍て獨軍は新に大に西部戰線に活躍して佛蘭西を壓迫し、講和を促進する方法に出づるか、又は伊太利を蹴散して之と單獨講和を策するか、又は更に巴爾幹に打て出て土耳古を積極的に援助し、亞細亞・阿弗利加・歐羅巴三大陸に跨つて、英吉利の中腹を脅かす方法に出づるか、夫れは考へものである。何れにしても強いて極東にまでも野心を逞うせんとすれば、歐洲及び巴爾幹方面の力を殺がねばならぬ。現に日本出兵說が傳へられた時、獨逸の新聞紙は筆を揃へて、「獨逸は日本と西伯利に戰ふを欲しないが、然し乍ら日本が強いて露西亞領土を侵さんとするならば、已に國交を恢復した露西亞を援助し、日本を斥けるは獨逸の任務なり」と云つて居る。畢竟日本が西伯利に出兵し、領土的野心を逐げんとすれば、獨逸は之を口實にて露西亞を懷柔し、紙上で出來た講和條約を精神上にも有効ならしめ、本眞に露西亞を抱へ込んで了ふ方略に出づるであらう。

又英米列國では日本が西伯利だけの出兵をしたのでは効驗が無いので、一歩々々に東部戰線まで誘ひ出さうとするに相違ない。而して日本と獨逸とが正面衝突をするに至れば、もう〆めたものである。半分だけは日本に受け持たせる。而して巴爾幹にも他の植民地にも亞弗利加にも南米にも、どし／＼彼等の都合の好い事をやる。獨逸が日本に牽制せらるゝのみでない。新與の日本もお蔭で疲弊して、亞細亞でも大きな口は利けなくなる。若し又日本が西伯利にのみ兵を出し、東部戰線まで出て來なかつた時には、極力日本の利己的

領土的野心を攻撃し、露西亞をして對日反感を抱かしめ、此間に策して露西亞の民心と結び、日本より先んじて疲弊せる露國に經濟的利權を得るの足場を拓かんとするに至るであらう。吾人は記憶せねばならぬ、西伯利を極東で爭ふものは獨逸一國でない、亞米利加もそれである。亞米利加の後方にも某々國が居る。是等は大に注意せねばならぬ。

然し乍ら神變不思議なるは獨逸である。虛なるが如くにして實に、實なるが如くにして虛なりとは彼等の事である。彼得堡には攻め寄せまいと安心して居れば、大擧して軍を進める。今に露國全土を蹂躪するかと觀て居れば、好い加減の處に切り揚げて、講和條約を締結する、其腕前は遉がである。獨逸は極東に來はしない、「伯林より東京へ」は彼等の對日好感を意味するものであるなどゝ枕を高くして居れば、何日何時攻め寄せて來るかも知れぬ。戰前に於て露西亞は支那に對し伊犁、新疆、外蒙に特權を有して居る。賣買城より下り庫倫を經て歸化城に通ずる鐵道の計畫を有して居る。一方伊犁より新疆を横斷して肅州、甘州、蘭州に通ずる鐵道計畫を有してゐる。又白耳義の名に於て蘭州と海州とを繋ぐ所謂海蘭鐵道の權利をも得て居る。又歸化城と灤州とを連ぬる歸灤鐵道の權利をも取つて居る。露西亞は過激派の理想により對外發展を抛棄し、白耳義は事實上獨逸の脚下に慴伏して居るとすれば、此露西亞の政策を踏襲して、獨逸が極東に進み來る事は見え切つた事である。酒ばかり飲む露西亞の將校に代るに、組織あり智識ある獨逸の將校を以てし、外蒙、新疆方面を攪亂されたら、夫れこそ大變である。今度の戰爭中若しくは戰後一二年には然る事もあるまいが、漸次斯くなる事は覺悟せねばならぬ。夫れに對しては今から準備を要する次第である。

此對應策として予は平常日支協同の經濟的武裝論を唱へてゐる。今の九博士など云ふ耄碌先生の云ふやうに兵隊の小出しは出來ぬが、一度び大陸に事を構ふれば勢の誘ふ處七八百萬の動員をなし、更に日本の六千萬と支那の四億萬との國民的大動員を以つて此軍隊を

後援し、日支の人及び物資の全力を組織して、亞洲の平和の爲めに努力しなければならぬ秋が來りはせぬかと覺悟して居る。これに就いては一方に於て獨逸の世界政策を了解し、彼が嫌でも日本に秋波を送らねばならぬと理由と、又油斷をすれば月夜に釜を拔かるゝ怕ある大勢を觀察し、更に世界の地圖を一瞥して、單に西伯利のみでなく、支那あり南洋あり印度あり太平洋の彼岸に亞米利加あるを考へ、遠く印度波斯土耳古に亘る大亞細亞主義の根本筋書を考へねばならぬ。夫れから起算して刻々の變化に應ぜなければならぬ。川中島四郡の土地を爭つたのは謙信が天下を制し得なかつた理由である。予は先づ支那と此際十分の了解を遂げ、協同して伊犁新疆蒙古西伯利より來らんとする外國の壓迫に具ふる事を計ると共に、數百年來專制政府に苦しみ、今又外患と內亂とに艱しむ露西亞一億七千萬の人民に同情し、其反獨反英米思想を了解して、日本の進むべき道を考へねばならぬ。「伯林より東京へ」の意味は如何があらんとも、此大方針を樹立すれば、「東京より伯林へ」の氣合の掛け方は會得されるであらう。詳細に出兵論を論ずれば幾多の細目に入らなければならぬが、今の處支那と早く協定を遂げ、支那國境の安全を計る爲めに、日支兩國の軍事協同運動を支那國境內に行ふ以上の輕擧に出づるは大いなる誤りである。日本の兵は東亞の安全を欲する爲めにのみ用ひらるべく、大和民族の血は此高尙なる理想以外に一滴も濺がれてはならぬ。

屬國としての日本

若宮卯之助

一

事實に交渉せざる思想は、空想であり。思想に根柢なき事實は幻影である。事實と思想と、其の關係は、畢竟、二にして不二であるべきに拘はらず、今や日本には、所謂實際家と所謂思想家とが、各々互に無關係、無同情、及び無分別の孤立的傾向がある。所謂實際家の態度を看よ。飽くまでも當面的、飽くまでも其日的、飽くまでも常識的、直接的、不容間伱的は、正に其の特徴では無い乎。少く抽象的、少く理論的、少く間接的、學究的、思辨的、若くは得の爲の損、若くは急くが爲の廻り道となれば、彼等は直に之を回避しやうとする。或は之を冷笑しやうとする。然も此の傾向は、決して之を一掃的に否定すべきでは無からうと思ふ。日本が世界を知らずして、能く世界に伍するを得るが如き豫備的資格を充實するを得た一原因は、恐くは此の日本人の實際的傾向であつたであらう。日本人は極めて實際的である。實際的であるが爲に、其の歴史には大なる錯誤が無かつた。而も之が爲に、大なる率先的飛躍も無かつた。餘りに實際的であるが爲に、其の眼界は狹隘であり、其の經驗は斷片的である。――今日の日本、即ち世界の日本に最も必要なるものは、此の日本人の實際的傾向の補成としての思想の指導力である。

二

意外は同じく意外であるも、印度を求めてアメリカを發見した閣龍の意外と全く異れり他の意外は、日本思想界の探檢の結果である。日本は今や思想の指導力を痛切に必要とする。而して日本に發見される、勢力ある所謂思想は、恐く其の指導力の反對の從屬的精神

である。日本は、實際上、既に世界の日本であるに、日本の思想は益々日本的を離れて『世界的』とならうとする。否、世界の日本を指導するの方向に進まずに、世界に從屬するの傾向を强めんとする。然らば其の所謂世界及び世界的とは何である乎。

徒らに我等の倦怠と反感とを招くが爲に熾に發表されて居る所謂思想家諸君の御意見を仔細に點檢せよ。其の所謂思想には二個の共通せる時代的と地理的との錯誤がある。而して諸君の所謂世界とは主として歐洲のことである。更に詳く言へば歐洲二三ヶ國に北米合衆國を加へた總計が諸君の所謂世界である。而して諸君の所謂世界の大勢とは、此の歐米數ヶ國に於ける或種の傾向を抽象した或物である。諸君の想像せざるを得ざるが如き標準に照らす時は、日本人の顏の色が、西洋人の如くならざる事も、或は世界の大勢に反して居るかも知れず、日本人の常食が麥で無くて米である事も、亦或は世界の大勢に逆つて居るかも知れない。諸君は地理的條件と歷史的事情とを無視して居るが爲に、歐洲平和の一條件たる小國主義の要求を、極東にも認めんとするのであれば、佛國革命と産業革命とを經由した歐洲と、之を經由せざる日本とが、同一歷史の線路を、同一の距離を以て、沿うて來たと心得て居るのである。略して言へば諸君は歐洲と極東とを同一視して、一九一八年と大正七年とを同じ意味の暦と心得て居るのである。之を帝國議會の用語で言へば、彼等は一種のワイ〳〵連である。彼等のワイ〳〵的民族主義、其のワイ〳〵的民本主義。彼等は其の由つて來る所の事情の相異を認取せざるが爲に、日本と歐洲卽ち彼等の所謂世界とが、同一可能性に支配されて居ると云ふ偉大なる臆斷に誤られて居るのである。彼等は世界を知らない。それ故に世界の日本を知らない。彼等は世界と日本との差異に盲目である。それ故に日本の特殊點に盲目である。彼等が輸入語の民衆藝術を叫ぶときは、心私に歐洲民衆と日本民衆との差別點を無視して居るのであるが、其の所謂民本主義の實現の場合に於ても日本民衆の今の貧弱なる若くは絕無なる政治

思想、卽ち無意識的政治思想に擬するに、公けに、歐洲民衆の意識的政治思想を以てするのである。彼等は彼等自身の評價に從へば一種の思想家である。意識的と無意識的との區別は、抽象的には、申すまでも無く御存じの筈ではあるが、然も日本の無意識的政治思想と歐洲の意識的政治思想とは、不思議にも之を混同して居るのである。

三

誤解する事勿れ、我輩は日本を謳歌する者では無い。尙ほ更現代の日本を謳歌する者ではない。我輩は單に屬國的精神に反對するが爲に、世の所謂思想家諸君を向ふへ廻すだけである。諸君の主張は、千紫萬紅各々一家の春を衒ぜんとするも、諸君の標準は要するに歐洲の標準である。其の精神は要するに歐洲の屬國的精神である。如何なる部面に於ても歐洲は諸君の「先進國」であり。如何なる內容も歐洲の簡册は、諸君の「原書」である。斷片的實際家の昔時の日本人は、武士の魂を鍛え鍛えて、偉大なる結果を成就した。これ實に日本の職人的精神の誇り。今世之をモリブテンの製鋼的應用と稱して居るが、此の應用が、日本の屬國的精神の思想家共を全く無視した現代歐洲の系統的實際家に依つて實現されたのは、非常の興味と非常の恥辱とを併せて催うする事實では無い乎。日本の思想家諸君は、其所謂「世界的」を熱望して、歐洲生活を抽象した或物を盲目的に求めて居る最中に、日本の「特殊點」を研究した歐洲の思想家は、其の研究の結果を以て、世界文明の內容に新なる或物を供給した。既にして其の研究の結果は、諸君の好きな「原書」の中に發見された。諸君は其の「原書」を讀むで、自ら恥辱を感ぜずに、却て其の新知識の誇りを感じて居るのである。諸君の屬國的精神は、一の新なる滿足を感じて居るのである。

四

今や地位あり、名望あり、勢力あり、別して知識ある日本人の精神は、獨立的を卑むで屬國的を貴んで居る。寺內內閣は武斷內閣として外國の評判は此の通り惡いから、と、體面も無く外字新聞の轉載を誇る者は、日本

一流の新聞紙では無い乎。反對すべき理由あらば反對せよ。叩き潰すの必要あらば、之を叩き潰すに何の遠慮かある。寺内内閣の贊否は、純粋日本人の立場に依つてのみ決定すべき問題であるに、其の屬國的精神の滿足を、強ひて此に求めんとするは、我が無冠の帝王の態度である。我が無冠の帝王の態度は、純粋國内の問題に對してさへ、既に此の如くである。其の對外問題に關して益々屬國的となるに、何の不思議も無い。三拜九拜、合掌低頭して、戰爭參加の印可を請願するも、此の屬國的精神の要求であれば、歐洲の輿論は、其の熱することと已に此の如し、蓋ぞ此の千載一遇の好機會に於て西比利亞出兵を斷行せざると云ふものも、亦此の屬國的精神の憐れなる叫びである。而して此の屬國的精神の發現は、日露戰爭の壯士的催促の、柳の下の鰌の經驗を、西比利亞出兵の新なる催促に應用せんとする高橋作衛博士に至りて完成の域に達して居る。博士は其の御手のもの、國際法に依つて、「西比利亞出兵の法理的證據と先例」を求めて居る。博士の御苦勞は御察し申す。然も其の御苦勞は、大體に、徒勞では無い乎。若し西比利亞出兵が、日本の利益と日本の正義との一致に因つて、斷行すべきものとならば、その所謂國際法の法理と先例とは、何らの問題ともならぬでは無い乎。屬國的精神は頻りに先例と云ふが、その所謂先例は如何にして成立した乎。先例の以前に先例は無く、法理の以前に法理は無い。法理は無法理より出現したものであり、先例は無先例より發達したものである。日本の國際關係が、日本の國際關係の定まらざる以前より、既に確定的に他律的に規定されて居たと觀るは、眞に標本的の屬國的精神の發現では無い乎。盲者は杖を離れて行くことを得ず、學者は「原書」を離れて意見の立てやうが無い。

五

我が知識階級には、既に屬國的精神の瀰漫がある。彼等は既に一種の屬國病に罹つて居る。彼等は日本に、日本特殊の產物を養成せずに、世界即ち歐洲共通の或物を移植せんとするのである。彼等は熱心である。抽

象的に熱心である。日本をして、一種の歐洲的謄本と爲すが爲に熱心である。濠洲大學の書生さんが、其のケムブリヂ的學名と學帽とに屬國の誇りを感ずるが如く、「先進國」、「原書」の國の豚の兒までも抱いて、その臭氣を覺らざるは、我が屬國派論客の誇りである。畢竟、彼等はワイ〱連であるが故に、歐洲のサムブルを見て、直に騷がざるを得ない。彼等は交戰國の政治家が、一方に對する講和提議の催促を目的に、所謂「戰爭目的」を宣言すれば、其の宣言を直に文明流と心得て、而して其の宣言を爲ざる者を直に非文明と看做すのである。日本が日本の立場より、此の如き宣言を發表して、それが何になる乎。此の如きは固より屬國派の問題ではない。彼等は單にその屬國的精神の滿足を求めんとするだけである。彼等は其の本國たる歐洲の生活を解せずして、徒らにその所謂思想を憧憬する。彼等はその本國の生活と思想との交渉を解して居ない。否、之を解するの能力を拒まれて居る。歐洲本國の條件的思想を、誤譯的に受け入れて、之を絕對的思想に解するが如きは、寧ろ彼等屬國派の誇りであるかも知れぬ。彼等は自主的に出發して、自主的に考察するの能力を缺いて居る。彼等は人間生活一般に於ける、外的壓力の地位を、自ら心理的に考察すべき能力を缺いて居るが爲に、壓力を有せざる國家の成立をも、向ふ見ずに可能視するのである。彼等は空論に對して頗る大膽である。然も、其の空論の根據を批評するには頗る臆病である。彼等は民族自決の主張を承認するも、其の自決力の內容の檢討を忘れて居る。他の大國若くは大國の聯合力を藉らずして、民族自決の主張の斷じて成立せざるべき理由を忘れて居る。民族自決とは歐洲の言語である。差し當り、亞細亞に飜譯するを得ざる歐洲の言語である。憐むべき亞細亞！。亞細亞の何處に、現に、自決力を有する民族がある。更に憐むべき大日本民族！。爾は氣紛れ的に「亞細亞の宗主權」を叫ぶに拘らず、其の西比利亞出兵をさへ、現に、自決するを得ないでは無い乎。小國獨立の保障と民族自決。若し野次馬大會に於ける長講一席の結果と

して、能く其の實現を期待するに足るものならば、世界の政治組織は、今日の複雜を以て、其の複雜に惱むの道理が無い筈である。――即今即時、必ず退治すべきものは、獨逸勢力の投機的東漸よりも、寧ろ此の國內の屬國的精神である。

國民精神の頽廢

高島平三郎

中歐同盟國でも將た聯合國でも人心は緊張し切つて、生死興亡を賭して戰爭に從事して居る。殊に參戰以來米國の緊張は目覺しい。食料を節約する爲めに禁肉日を設け、燃料を節約する爲めに工場を閉づ日をさへ定めた。況してアルコホル飮料の如き有害無益の贅澤品は絕對に之を禁ずる州がます／＼殖えた。支那や露西亞のやうな國さへ兎に角眞劍に各自の主張の爲めに生命財產を賭して活動して居る。

この世界的緊張の中に於て我國現下の狀態如何と顧れば、眞に寒心に堪へぬ事が多い。我國に於て眞劍に生命を賭する程の覺悟を以て、眞面目に國家を思ひ人道を思うて働いて居る者が果してあらうか。概して言へば我國民精神はあらゆる方面に於て弛緩して居る。何人も永遠の考や堅實の信念の下にその自己の職に安んじて居る者は無いというてもよい程である。商人はその營める商業に安心して從事して居るのでは無い。兎に角之に由りて金儲けをすればよい。後は又後でどうにかなるといふのである。農業家は祖先傳來のこの職業を自己も子孫も永遠に繼承して着實に耕耘に從事しやうとする者がだん／＼少くなり、かゝる馬鹿氣たる

職業よりも何か有利の事に轉職せんとして不安の間に鍬を執つて居る。

宗教家も眞の信念に基き自己の職業を神聖の事業と信じ、物質以外に超然として人天の大導師たらんとするの覺悟と意氣とを有する者は殆んど無い。唯パンの爲めに心ならずも教を說いて居る者のみが多い。教育家も同樣にいつも物質の不安に襲はれ、之が爲めに卑屈に陷いり富豪の前に節を折つて金錢を膜拜する樣になつて來た。如何に唾棄す可き行爲ある者でも金錢さへ寄附すれば學校のパトロンとして之を崇め、彼をして生徒の前に說を述べしめるに至つた。教育の權威何處に在る。我國の誇として居つた武士道の唯一の保持者として一般に期待されて居つた軍人は如何。多くの破廉恥漢がこの中より生じ繩附をさへ出した。それも下士や兵卒では無い。將官若しくはその待遇者、甚しきは天皇親任の待遇を得て居る者からも罪人を生じた。それも出獄後謹愼でもすればまだしもであるが、醜陋の手段に由つて得た不正の金錢のあるに任せて、自動車に乘り廻はし會社の重役として働く者をさへ生じた。士人の面目を失却した彼等をしてかゝる事を平氣に行はしむる社會の人心が如何に頽廢せるかは想像の外にあらう。嚴密にいへば現在の我國には殆んど全く德義の制裁が無いというてもよい。

社會の上流に位し若しくは社會覺醒の任にある者にして上述の如くであれば、その以下の若しくはその以外の主として利益の爲めに働ける階級の者が不正不義を働くのは殆んど怪むに足らぬ。見よ現在の我國各方面に如何に不正の行爲が多く行はれつゝあるかを。鐵道郵便等に從事せる者等が運送の品物を竊取しつゝある事は久しき以前より折々暴露せることであるが、この頃の如くに甚しきは從來曾て無き事であると聞く。試みに各家に就きて爲替小包等の被害を調査すれば驚く可き多數に上るであらう。官營の事業已に然り、民營の運送業等の不完全なる樣更に甚しきものがある。或る人は京都より簞笥を通運に託したるにその外匣のみ着いて中の衣服は全く無かりしといひ、或は種々の

品物の中味の大部分を奪はれしもの、或は價値ある品物を拔き取りて他の價値少きものを容れて先方に屆くるの類、擧げ來れば運送業のみに就いても盜奪的行爲は頻々として行はれて居る。併し是等は小盜である。九州鐵道の殆んど各驛に於ける驛長以下の賄賂事件の如き巾盜ともいふ可き種類の者はなほ擧げられずに經過して居るのがどの位あるか分らぬ。大盜に至つてはその數は少いかも知れぬがその關係する所は甚大であらう。制裁の嚴格なる社會ではさう惡事がやたらに出來る者では無い。今日の如くに上下擧つて頽廢したのは制裁すべき純潔の者が極めて小いか、殆んど無くて、胸に疵持つ者のみ多い故互に隱し合ひ、偶々暴露するも恥かしいと思はぬのである。この點に於て何等かの責任を感じて自殺でもする者はまだ賴もしい。

工業者が製產し、商業者が販賣する品物に不正なるもの、ごまかし物の多い事は驚く可き程である。就中輸出品に各種の不正が行はれる事は我國の新聞紙でも屢々唱道せられ、或る部分では隨分筆誅もされたが依然として止まぬやうである。何事にもよく干涉する政府は何故嚴重に是等の取締をせぬのであらうか。一部商工業者の爲めに我國民全體の信用を害することは此上も無き痛恨事である。往年Made in Germanyといふ文字は惡しき品、粗末なる物との符牒と見做された時代があつたが、その後獨逸は自ら覺醒し孜々として製產の改良進步を計り、終に彼が自ら誇る如く世界に比類少き工業國となり、一般の信用を增進するに至つた。今日我國は獨逸は勿論英佛米伊等の戰亂の爲めに各種製產の注文を受け盛んに產出したのであるが、その無責任にして商工業の道德を無視せる爲めに Made in Japan の文字は粗惡不深切にして再び買ふなとの符牒であるといはれて居るといふ事である。露西亞國民は戰爭中餘儀なく日本より輸入の高き粗惡品を買はせられて懲々し、從來安くして善良なりし獨逸品に憧れ之が爲めにも獨逸との講和を望んで居る者が少くないといふ事である。その他支那にしても南洋各地にしても、我國の製品は到底獨逸品と競爭する事は出來ぬ。これ

いろ〳〵の原因もあらうが、歸着する所は國民精神の頽廢が根柢をなして居る。彼等は日本品は戰後必ず排斥せらる可き事を豫期し、如何なる不正を働いても一時的に暴利を貪らんとして居るのである。

資本階級の者共が此の如くにして如何にも暴利を貪らんと企て、又實際に暴利を得ることを見聞せる勞働階級は決して黙しては居らぬ。霜を踏んで堅氷の至るが如く既に各地に勞働者のストライキが行はれつゝある。之が系統的に大規模に進んで來たら一國の大事である。而かも是等勞働者の間には社會を根本的に覆すが如き所謂危險思想を抱いて居る者も決して少く無いといふことである。又是等勞働者の一部に於て高き賃金を得る者は身分も分限も顧みればこそ、矢鱈に奢侈贅澤の生活をなし馬鹿氣た金を費やして得々として居る。曾て安藝の宮島に風采人品に比較して分外の遊蕩をなす者があつた。同地の警察署は之を異み、就いて身分を調査したら神戸の某造船所の職工長で、或船が出來た爲めに多分の賞金と休暇とを與へられた爲めに遊びに來たのであると辯明した。併し官憲はなほ疑を解かず、その造船所に照會したら答が振つて居る。某は確かに我が造船所の職工長であるが、月俸幾百圓を取り賞與金幾何を得たものである故、その位の遊は浪費とは認めぬといふのであつた。同じ神戸には同地の藝妓百人に揃の衣服を新調して與へた所謂成金がある。此の如くにして風俗は滔々と破壞せられ國民精神はいやが上にも頽敗に導かれる。彼等は自己の得た金錢で自己がする事に何をしやうと大にお世話である。法律に觸れぬ限り何をしても宜いと思うて居る。否法律さへも金さへあらば巧みに潜ることの出來るものと信じて居る。又實際に屢金錢で法律の左右せられた實例が暴露せられる。彼等の眼中には君主も無い國家社會も無い。況んや人格の尊嚴などいふことは夢想だもせぬであらう。唯一の憧れは金である。此の如くにして緊張して一意國家の爲めに盡して居る歐洲の列強と相對するのである。吾人は思うてこゝに至れば眞に寒からずして肌に栗するを禁じ得ぬ。

翻つて立法行政の局に當る者の爲す所を見よ。議員は徒らに各自の屬する政黨あるを知つて國家あるを忘れ、爲政者は唯々目前の議會操縱とか新聞政策とか兎に角當面を糊塗して、國家永遠の大計に就いて確乎たる識見信念を有する事を認められぬ。又今日の如く政黨が政權の爭奪のみを事として眞に國家を思ふの至情を缺き、二三年每に內閣の交迭を見る樣では到底根本的の政策を實行する事は難い。神聖なるべき議會の狀態を見よ。眞摯を缺ぎ禮儀を無視し徒らに他黨の者の言葉尻を捉へて論議するが如き兒戲に類する事をなして貴重なる日を消して居る。之を米英佛等の大統領首相若しくは議員等が堂々として大戰に關する政論をなすに比すれば眞に慚愧の至である。我國現在の議院に於ては雄辯も入らぬ。熱誠も無用である。何となれば何事も豫め待合の評議に初まる政黨の議に上つて決定し居る故、議員は何れかの黨議に服さねばならぬ。隨つて如何に道理ある事を熱心に演述し一般に感動を與へたりとて、それが黨議と反し居れば何の用をもなさぬ。議員は眞に評決の數に加はる器械に過ぎぬ。されば議會の惰容を見よ。誰かこの中より熱誠君國を思ひ生命財産の一切を賭して國家に捧ぐるの至情を見出し得やらうか。この惡風は地方の議會に及び更に延いて青年に及び中等以上の學校生徒をして長上を蔑にし、禮儀を無視し傍若無人の言動を敢てし、動もすれば黨を作り派を立て多數を賴んで師長を凌辱するに至らしめるのである。この風は更に一般に及び、子弟が父母に從順ならずして放縱自恣、古來我國の美風たる孝道は少くとも知識階級に於ては日に〳〵滅却せんとして居る。

忠君愛國は孝道と共に我國古來の誇であつたが果して今日もよくこの精神が國民の間に活躍して居るであらうか。余は然か信じ度く思ふが各種の事實は動もすれば之に反する報道を齎すのである。余はこゝに此等の事實に就いて擧ぐるに忍びぬ。又之を擧ぐることを憚るが、兎に角無政府主義者の如き社會の病的思想を有する者を我國に生じた事を思へばその他は大柢察せられる。今は政府の取締りが嚴重である爲めに表面に

現はれぬが、この種の危險思想を有して居る者が多く居る事は當局者も調査して居らう。固より我國を以て支那や露西亞に比するのは不倫の甚しき者である。或る論者の如くに兩國の狀態を見て驚悸するのは寧ろ滑稽であらうが、さりとて何時までも神國であるとか聖國であるとかいうて安んじて居る可きでは無い。斯くあらゆる方面に頽敗した國民を覺醒せしめ、誤まれる思想を正すことは實に今日の急務である。併し之を爲す事は容易で無い。上下一般志を同うする者が總がゝりで掛らねばならぬ。然るに學者や思想家や政治家や宗教家やその他各般の職業を執れる者の狀態は前述の通りであるとすれば、我國はいよ／＼頽敗壞滅するの外は無いやうに思はれる。されど又よく／＼考察すれば必ずしも全般の國民が頽敗して居るのでは無い。三千年の歷史を有し六千萬の同胞を有するこの國に眞の愛國者の存せぬ事は無い。今はたゞ是等隱れたる愛國者が各自に六千萬人の中で五千九百九十九萬九千九百九十九人が腐敗しても自分一人は腐敗すまい。他人が皆國を賣るやうな事をしても自分一人は之をせず、奮鬪力戰して死する迄不正をせず不義をせぬといふ堅き決心を以て一人も多くを自己と同じ思想に誘導することに努める外は無い。

現在の此の悲む可く憂ふ可く厭ふ可き弊風惡傾向はその原因一にして足らぬであらうが、金錢が正當以外に尊敬せられるといふ事も確かにその主なる原因である。凡そ如何なる時でも金錢を欲せぬ國民の存する者では無い。併し我國今日の如くに金錢萬能にして而かもこの前には勳位も光を失ひ爵祿も名譽も失ひ、滔々たる小人者流が金錢さへあらば何事も出來ると思ひ、之を得る爲めには如何なる手段を用ゐるをも辭せぬといふが如き狀態は少いであらう。此の拜金的傾向を殺すにあらずんば今日の如き國民的頽敗の氣風は到底改善する事は出來ぬ。然るに此の十數年來我國の政治當局者は富豪に媚びるが如き政策を行ひ、富に最も多くの權利を與へ宛も拜金を奬勵するが如き態度に出て居る。選擧權を得るのも財產が唯一の資格、貴族院に出

るのも、多額の税を納めるのが唯一の資格である。どんな道德上の罪人でも法律にさへ觸れて居らねば、黄金の力で議員に出る事が出來る。又どんな知識の乏しい人物でも税を納めて居れば一國の大政を議する事が出來る。自己の金儲けの爲めに働いた人物でも大富豪となれば爵位も勲章も貰へる。罪惡を犯した事が一般國民に知道せられて居るやうな人物でも、官吏が數十年薄給に甘んじて國家の爲めに働いた以上の名譽を與へられる。見よ學者や敎育者や宗敎家が國民を淨化する爲めに眞に獻心的に働いても無形の事は分らぬといふのか、何等の名譽も與へねば生活の保障も與へぬ。

これでは國民が金錢萬能を信じ拜金に傾くのは當然といはねばならぬ。併し之が矯正はたゞ政府をのみ責めその爲す所にのみ信頼する事は出來ぬ。心ある者は奮つて金錢の正當の價値を國民に知らしめ、たゞその蓄積の方法を敎ふるに止まらず、又その消費の正經の道を諭さねばならぬ。物價暴騰の如きも經濟上正當の理由に由りて騰れるにはあらずして、富豪奸商等が手段を顧みず利益是れ計るが爲めに各種の買占を行ふに基くことが多い。官憲も輿論も是等の制裁に努むると共に根本思想の變化に努めねばならぬ。

我世界的大使命を果たす前提としての日支提携

永井柳太郎

（一）

個人には道德があるが、國家にも道德がある歟？

し國家にも道徳があるとすれば、如何なる點に於て個人の道徳に異る歟。マキアヴェリーは國家の道徳なるものを認めなかつた。人類の本性は墮落である。之れを放任すれば無秩序と無政府とに歸すべく、其極は自己破滅である。之れを豫防して秩序ある生活に導くのが即ち政治である。故に政治は無制限に强大なる主權者を要する。宗教とか道徳とか云ふやうなものは、其主權者あつて初めて存在し得るものであるから、宗教や道徳に依つて主權者を制限する事は出來ぬ。從つて國家の統一や發展の爲めには宗教や道徳を顧るべきでなく、主權者は宗教や道徳に無關係であると言つて居る。此學說は十五世紀以後の歐洲政治家に非常なる印象を與へ、彼等は專制政治を辯護し其掠奪政治を行ふに方り、常に之を以て金科玉條とした。

然しマキアヴェリーの學說は多くの反對に遭遇した。一體人間の本性が墮落であると云ふ事が獨斷である。若し人間の本性が墮落であるなら、それを引止めるのは、本性に戻る不自然の努力である。凡ての人間が墮落の本性を有して居るとすれば、其中の何人が其本性に反して、墮落より人間を引止めんとする不自然の努力を爲すのである歟。凡ての人間の本性が墮落ならば、其本性に反する努力を爲すべき人間の出現する道理が無い。加ふるに事實に於て如何なる野蠻人も、其程度に高低の差こそあれ、道徳を有しない者は無い。凡て爲すべき事と爲すべからざる事との定めを有つて居る。而して爲すべき事を爲さず、爲すべからざる事を爲す者には、一定の制裁を加へる。之れが即ち人間の本性が道徳的である證據ではあるまい歟。人間の本性が道徳的であるといふ事を認めなかつたならば、歷史上に燦然たる光彩を放てる多數の勤王家や愛國者や改革家や義人などの熱情・奮鬪及び犧牲の如きものは、凡て無意義且つ無價値のものとなつて了ふのである。

然ればとて我等はまたプーフェンドルフ教授の如く、「國家道徳と個人道徳とは全く無差別にして、國家は個人の善良なる如く善良なるべし」と云ふ說にも同意する事が出來ぬ。固より國家の生活は或程度まで

の生活に似て居る。卽ち國家も個人の如く、一定の目的を有する生活體である。自我の意識を有つて居る。自己の意思に依て自已の行動を決定する力をも有する。自己の智識に依て爲すべき事と爲すべからざる事とを判斷し之を發表し又實行する機關をも有する。其生活の形式は自然人に彷彿して居るけれども、然し國家には個人の如く感情又は情緒と稱すべきものが無い。個人道德にあつては或る感情又は情緒の發動が最も重要なる部分を占むるのである。例へば主君の爲めに一身を犧牲にするとか、親の殆きに際し子が身を以て之を守ると云ふが如きは美德と考へらるゝも、然し國家は如何なる場合にも、他の國家の爲めに自己を犧牲にするとか、他の國家を愛するの餘り之と生死を倶にするとか云ふが如き事は無い。個人の活動の目的は、其生活の凡てに於て宇宙の眞善美を實現する事である。然し國家の活動の目的は、個人の活動の目的の如く多種多様でない。國家の活動の目的は單に個人をして、其生活に於て宇宙の眞善美を實現せしむるに必要なる環境と機會とを與ふる事に限られて居る。故に個人の活動の目的が多種多様であるに反し、國家の活動の目的は單一である。故に國家は個人の善良なるが如く善良なる事は出來ない。米國は奴隷を解放するが爲め、多數の奴隷を其所有者の手より奪つた。奴隷を奪ふは財產を奪ふに等しい。然し之を奪はざれば、米國の秩序及び進步を保障する事が出來ないと見たからである。日本は獨逸に宣戰し、其土地を奪ひ其船舶を擊沈した。之れは個人の場合に於ける掠奪に相違ないけれども、之を爲さざれば日本國民の生存及び發展に最も重大なる關係を有する東洋の運命が危險に瀕すると考へたからである。斯の如く國家は道德に無關係なる能はざると共に、又個人の善良なるが如く善良たり得るものでない。

玆に於て所謂ネオ・マキアヴエリズムの思想が走る。國家は個人の如く多種多様なる倫理的活動を爲し得るものでないけれども、而かも個人と等しく或種の倫理的目的を有する一個の活物である。卽ち「宇宙の正道（プリンシプル・オブ・ジヤスティス）」を體現し、人類共存の目的を完成するが爲めに生れた

る最高最大の社會組織である。何れの國家の歴史も掠奪・殺戮・侵略・戰爭の果しなき連續のやうに見ゆるけれども、其根柢に於て正義の觀念が實在し、時間を經過するに隨つて進歩發展しつゝある。而して此正義の觀念は尙未だ薄弱であつて、朧ろに人心を照らすに過ぎぬけれども、而かも不斷に擴大し、文明の進歩と共に發展し、軈て來るべき廣大無邊なる人類文明の光明を暗示して居る事は、苟くも歴史に對する批評眼を有する者の、何人も認識せざる能はざる所である。斯くて國家は「宇宙の正道（プリンシプル・オブ・ジャスティス）」を體現せる秩序及び進歩の保障者として絶對的の價値を有する。是に於て乎、國家の生存權なるものが生ずる。卽ち國家が人類共存の倫理的目的を完成するが爲めには、先づ生存すると云ふ事が必要である。從て國家は如何なる他のものにも優つて自己の生存權を主張し、其生存權を行使する事が出來なければならぬ。此生存權が確立してこそ、初めて國家は其人類共存の倫理的目的の爲めに活動し得るものである。故に國家の生存權の確立は、畢竟するに又世界文明の確立となる。從て國家は其對外關係に於ても、先づ自己の生存權を無視する者に對しては、如何なる種類の抵抗でも、又如何なる種類の復讐でも試むべき自由があらねばならぬ。之れが如何なる國家に對しても外交の根本方針となるのである。

（二）

佛蘭西社會學者マクスウェル氏は其著「現代社會心理」に於て「人類が世界的平和と云ふ不確實な完全境に至るまでには、尙前途遼遠である。人類に取つては當分戰爭は避くべからざる必然的災禍である。然し之を嘆くに及ばぬ。何となれば戰鬪は生存の一形式であるからである。戰鬪に由つて勇者が現はれる。將來の重任を負ふに足る勇健なる者と、將來の進化の「種」となるに足る健全なる智識は、戰鬪に由つて現はれて來る。社會は生きんが爲めに戰はねばならぬ「種」である。力を拋棄する者は、之と同時に生存の權利を拋棄するのである」と云つて居る。我等は戰鬪は勇者の出現を促すけれども、社會に於ける勇者の「種」を增加する

ものでは無いと思ふ。戰鬪が永く繼續すればする程、多數の强壯にて勇敢なる者は死ぬ。而して其後には比較的虛弱にして、比較的勇氣無き者の「種」が殘る。而して其比較的虛弱にして比較的勇氣なき種に屬する者が、比較的强壯にして比較的勇壯なりし者の、戰鬪に由つて獲得したる遺產を繼承し之れを浪費するから、戰鬪の繼續は屢々國家の滅亡を招く。羅馬の滅亡も土耳古帝國の衰微も之れが爲めであると云はれぬ事はない。從て戰爭は出來得る限り之を避くべく、戰鬪に出つて將來の重任を負ふに足る勇健なる者と、將來の進化の「種」となるに足る健全なる智識が現はれて來ると、常に樂觀する事は出來ぬけれども、然し今日に於ては自ら之を求めざるも、戰爭は屢々避くべからざる災禍となつて襲來する。故に今日英國首相ロイド・ジョーヂ氏の如く、又米國大統領ウイルソン氏の如く、何れも平和の爲めに戰ひつゝあるが如く宣言し、聯合軍が捷利を博すれば、直ちに世界の平和が到來するやうに論ずるけれども、當分斯の如き完全境は決して到來しないのであつて、今後と雖も幾度か戰爭が繰返さるゝに相違ない。故に此間に在つて國家が生存權を確立し、以て人類共存の目的の爲めに活動せんと欲するならば、何うしても强大なる力を蓄へなくてはならぬ。力を拋棄する者は、之れと同時に生存權を拋棄するのであると云ふ言葉は至言である。然らば如何にせば强大なる力を蓄はふるを得べき歟。我等の考ふる所に據れば、强大なる力を養ふが爲めには、少くとも次の如き有形的及無形的の要素を具備する必要がある。

有形的要素の第一は人口である。國家の生存競爭に於ては、個人の生存競爭の場合に於けるよりも、力の集合を必要とする。如何に大なる富を有し、如何に精銳なる武器を有するも、白耳義や塞爾亞の如き少數なる國民を以てしては、如何とも爲る事が出來ぬ。獨逸が今尙ほ十九世紀の初めに於けるが如き聯邦に分裂して居たならば、今日の如き戰鬪力を發揮する事は不可能である。英國でも蘇蘭、英蘭及び愛蘭が昔のまゝに離別して居たならば、現在の如き大海軍を建設し、大

陸軍を編成する事は出來ぬに相違ない。是に於て人口の増加といふ事は、國家が弱くなる事の第一要素である事が解る。故に歐米先進國は、内に社會政策を勵行し、或は未青年者の過激なる勞働に從事する事を禁じ、或は成年勞働者に對しても、其勞働時間を制限し、或は失業者の爲めに職業紹介所を設け、或は貧民の爲めに施療の方法を講じ、或は公共衛生の發達を圖る等、專ら國民の榮養を増進し、其人口の減退を豫防すると同時に、外に對しては所謂民族統一を圖つて居る。即ち或程度の血族關係を有するとか、言語の系統を同じくするとか、同一の祖先より出でたる傳說を有するとか、又は文化的理想を同じくするとか云ふやうに、血統上又は思想上に共通點を有するものを出來得る限り綜合し、之を自國の國民性に統一して大國家を建設せんと努力して居るのである。露國が戰前巴爾幹半島に勢力を扶植し、塞爾比亞、勃牙利、モンテ・ネグロ等の如きスラヴ民族に屬する諸邦の保護者を以て任じ、又屢々墺洪國の内部に於けるスラヴ民族を煽動して其獨立を促さんとしたるは、凡て此民族統一の精神に出でたのである。獨逸が今度の露獨媾和條約により波羅的諸州に對する保護權を得たるが如きも、同諸州が十二世紀以來獨逸人の開拓したる處にして主として獨逸民族が生活する爲めである。歐洲學者の中には米國に於ける物質的文明の勃興が、遂に歐洲諸國の生存を威嚇するに至るべきを患へ、「生の要求は歐洲諸國をして團結の已むを得ざるを感ぜしむるに至るべし」とさへ云ふ者がある。

有形的要素の第二は土地である。如何に人口が多くても、之れと同時に廣大なる土地を有せざれば、其生存を維持するに必要なる物資を得る事が出來ぬ。而して其生存に必要なる物資の根抵となるべきものは卽ち土地である。茲に於て何れの國家も人口の増加を圖ると同時に、又之を養ふ土地を求めた。之れが軈て植民主義となつて全世界に對する政治的及び經濟的膨脹を促した。今歐米諸國の本國以外に於て植民地として獲得したるものを一覽すると、歐州戰爭以前に於てさへ、大

の如く廣大である。

國名	植民地面積
英吉利	一一、二一一、〇〇〇方哩
露西亞	六、九〇二、〇〇〇
佛蘭西	四、五三八、〇〇〇
獨逸	一、〇二七、〇〇〇
白耳義	九〇九、〇〇〇
葡萄牙	八〇二、九〇〇
和蘭	七三六、〇〇〇
北米合衆國	七二〇、九〇〇
伊太利	五九一、〇〇〇
西班牙	八五、八〇〇

固より人類は此度の大戰に由り、實に植民主義の代價の低廉に非ざるを經驗した。然し土地が依然として人類の生存に缺くべからざる要素の一部分を占むる以上、此大勢は當分之を防ぐ事が不可能である。

斯の如く強くなるといふ事の爲めには人口及び土地が必要であるが、然し單に人口及び土地が具備しただけでは眞の強大でない。何となれば如何に人口が多く、又土地が廣大であつても、其國民の道德心が強烈でなければ、生存競爭に堪ゆる事が出來ない。仍で無形的要素の第一は道德心の強烈といふ事であるが、何うすれば道德心が強烈になる歟。道德心なるものは、人性の眞摯なる發露である。常に內部から湧出するもので、外部から附加する事の出來るものではない。常に兒童に教育勅語を讀み聽かせたる教師が、教科書事件に連坐して縲紲の辱めを受け、常に義勇奉公を口にする官吏が、製鐵所事件の如き大腐敗を暴露するに徴しても、從來の如き附燒刃の教育では強烈なる道德心を養成する事は不可能である。眞の道德心は人格の權威を自覺する事から湧き出づるのであるから、眞に人格の權威に對する自覺を促し、徹底したる道德的信念を喚起せしむるには、囚はれざる自由なる教育に由り、人間として宇宙に於ける自己の地位を考へ、赤子天眞の心を以て之れに對する底の修養を與へなければならぬ。斯の如き自由主義の教育に由つて、個人夫れ自身が自由に其

偉大性を發揮し、其最高の理想の實現の爲めに全心全力の奮鬪を樂しむやうにならなければ、眞に生きた人間の生きた道德と見る事は出來ぬ。

無形的要素の第二は即ち科學的智識である。如何に多數の人々があり、如何に廣大なる領土を有するも、其國民が其土地及び土地に埋藏されたる富源を開發して、之を自己の生活に利用すべき能力が旺盛でなければ、眞に强大を致す事は出來ない。科學的智識の應用により、國力の强大を致したる最も顯著なる實例は即ち獨逸である。獨逸にては已にビスマルク時代より國家の生存權の確立の爲めに自給自足の經濟政策を確立するの必要を認め、殊にウイルヘルム二世が即位以來盛んに化學工業を奬勵し、かの人造藍を以て天然藍を驅逐し、人造樟腦を以て天然樟腦を驅逐し、甘菜等を以て甘蔗を驅逐し、又人造絹を以て天然絹を驅逐する等、苟くも學術を應用して、外國より輸入せらるゝ天然物を驅逐し得る限りは悉く之を驅逐した。其他獨逸には從來良質の鐵が無く、多くは燐が混同して居つたので、ウイリヤム・フーラートン氏の如きは、其著「列國權力鬪爭」に於て、「獨逸は鐵を得んが爲めに世界を探し廻りつゝあり」と冷笑した程である。然るに最近化學工業によつて其鐵より燐を分離し、燐は燐酸肥料として輸出すると共に、頗る良質の鐵を得て之を自給自足し得るに至つた。其他或は窒素肥料の缺乏を補ふが爲め、電氣を利用して空中よりカルシウムニトレート、即ちシヤナミードを取り、之れに依つて天然物の缺陷を補ひ、又アンモニアの如きも之れを泥炭褐炭よりコークスを採る時の副產物として製出する等、努めて自給自足の政策を確立して居る。獨逸が今日其國境を列强に包圍せられ、外界との交通は殆んど全部杜絕したるにも拘はらず、世界各國民の意外とする程度に於て、軍器軍需品は勿論生活必需品に至るまで、之を自給自足し得る所以のものは即ち此處に存する。之に依つても科學的智識の優劣が、國家の生產力の大小を決する重大なる要素なるを認識しなければならぬ。

(三)

日本は其有形的要素に於ても、又其無形的要素に於ても、大いなる缺陷がある。殊に有形的要素に於ては土地、無形的要素に於ては科學的智識の缺陷が顯著である。日本に於ては戰時は云ふまでもなく、平時に於ても國民の生活必需品さへ自給する事が出來ぬ。如何なる國民に取つても、第一に必要なるは鐵である。日本は戰前に於てさへ、一年約百三十萬噸の鐵を需要したのであるが、日本自身は其四分の一を生產し得るに過ぎなかつた。四分の三は輸入である。第二に日本國民の生活必要品としても、又貿易品としても最も必要なる綿絲綿布の原料たるべき綿花が殆んど全部が輸入である。之れが爲めに日本は年に二億圓以上を外國に仕拂ふ。第三に羊毛も缺乏して居て、羊毛の爲めにも一年三千萬圓以上を仕拂つて居る。第四に工業用原料として必要なる石油の如きも、東北地方及び臺灣にて多少產出すれども、今尙米國、露國、及び蘭領ボルネオより輸入する所一年五百萬圓に達する。第五に日本國民の約六割は農民で、農業の盛衰は直ちに國民の大多數の生活に影響するのであるが、其農業に必要なる肥料の輸入額も、年に三千七八百萬圓に及ぶのである。若し是等の生活必需品を輸出する國が戰爭其他の事情に由つて其輸出を禁止するに至らば如何にする歟。よし輸出禁止とならざるも、途中の航海が危險又は不可能となつて、其輸入が杜絕すれば如何にする歟。斯の如く其生活の必需品を外國に仰ぎ、外國に由らずんば生活し能はざる國家が、果して自主的外交を行ふ事が出來る歟。例へば西伯利出兵問題に關しても、西伯利に出兵する事の是非は別問題として、假に米國が絕對に日本の西伯利出兵に反對した時、日本は單獨にて西伯利に出兵し、獨逸と大規模の戰爭をする事が出來る乎。戰爭に最も必要なる物は武器船舶其他の軍需品であるが、未だ出兵せざる今日に於てさへ、日本は鐵の缺乏を感じ、米國より鐵の供給を受けざれば船舶を製造する事すら出來ないのである。それに米國が反對し、日本の軍器及び軍需品に必要なる材料の供給を拒んだ時に、果して單獨に大規模の戰爭をなし得るや否やは疑

はざるを得ぬ。又或人は日露戰爭の時、二億の正價があつて二十倍の公債を起し、之れに由つて軍費を支辨する事を得た。今日は十五億の正價があるから、百五十億圓の公債を起す事が出來ると云ふけれども、日露戰爭當時主として日本の外債に應じたる英佛兩國は、今や自國の戰爭に沒頭して自己の軍費の支辨にさへ苦んで居る。故に今日は外債を起すとすれば、勢ひ米國に依るの外は無いのであるが、其米國が反對するとすれば、長期に彌る大規模の戰爭をするに際しては、軍費の調達にも困難を感ぜざるを得まい。斯の如く考へ來れば、其自主的外交を行ふに方り、先づ緊急に必要なるは、其生存權に必須なる根本條件を完備するといふ事である。我等が何物にも優りて對支外交に重きを置かねばならぬと主張する所以は、卽ち玆に存するのである。蓋し日本が米國に依賴する事無く、其生活必需品を獲得するには、勢ひ支那に依る外は無いからである。

然し乍ら我等は或る人の如く、所謂亞細亞モンロー主義の爲めに之を云ふのではない。世界は人類の世界であらねばならぬ。米國人が米國を以て米國人の米國と爲すの愚なるが如く、亞細亞を以て亞細亞人のみの亞細亞と爲さんとするは愚である。我等は米國人が歐洲大陸の四倍に近き南北兩米の大富源を壟斷して、之を人類の爲めに開放する事を拒むを以て罪惡なりと認むる者であるが、之を罪惡なりと認むる者自身が、亞細亞の富源を獨占せんとするは自家撞着である。我等は又或る人の如く、東洋人を率ゐて西洋人と世界の覇權を爭はんが爲めに之を云ふのでない。全體東洋人と云つても、單一なる人種ではない。印度人も亞刺比亞人も馬來人も、また支那人も各々異なれる人種に屬し、其思想に於ても、亦其言語に於ても多大の相違あるのみならず、或る者は婆羅門教を奉じ、或る者は回々教を信じ、或る者は佛教に歸依し、或る者は儒教を遵守し、其間に何等の統一無きのみならず、却て嫉視反目して居る。強いて共通なるものを求むれば、その何れも獨立の能力を有せず、白色人種の支配に隷屬して居るといふことである。之を歐洲國民が何れも同一のア

リアン人種より出で、其宗教及び傳說を同じうし、言語及び思想の系統を一つにするに較ぶれば、霄壤の差ありと云ふべく、斯の如き複雜なる、而して嫉視反目せる東洋諸民族を率ゐて、全白色人種と覇權を爭ふが如きは危險至極の事である。我等が支那と提携し支那の領土を保全するの必要を論ずるは、斯の如き空想の爲めでは無い。我等が支那國民と提携し、支那民族と共に其大富源を開發するの特權を得る事を急ぐ所以のものは、實に夫れが日本の生存權を確立し、日本の世界文明に對する大使命を遂ぐる前提を爲すものと信ずるからである。幸にして支那人と日本人とは、恰も獨逸人と墺太利人との如く、其容貌、文字及び思想に類似の點多く、所謂同文同種なるのみならず、其廣大なる土地には日本國民の生活必需品とすべきものは、悉く之を生產し得べき可能性を有する。例へば鐵の如き、綿花の如き、羊毛の如き、石油の如き、更に又肥料の如き、之を支那に求むれば凡て獲得する事が出來るのである。唯今日は支那に資本及び科學的智識を缺くが故に、支那人自身之を生產する能はずと雖も、若し日本人が支那人と提携し、日本人自身の資本及び科學的智識を活用して、支那の富源を開發するに於ては、其廣大なる領土は日支兩國民の生活及び生存競爭に必要なる一切の物資を供給して尙餘りあるのである。故に支那の領土を保全し支那人と提携して、其大富源を開發するといふ事は、單に支那の領土が日本の領土なる臺灣・朝鮮及び關東洲に接續し、支那領土の分裂は直ちに日本の領土に影響すると云ふが如き意味のみで無く、日本が國家としての生存權を確立し、世界文明に對する一大使命を大成する基礎的條件なのである。若し日本が夙くより支那人と提携して、其富源を開發すると云ふ事に着手して居つたならば、今日米國が日本に反對して如何なる態度に出でやうとも、日本は自國の生存權の爲めに、爲すべき事を爲すの自由を有したに相違ない。然るに歷代の政府が常に其努力を懈り、其機會を逸した事が、今日の日本をして又其外交上に於ける機宜を失せしむるの原因となつて居るのである。

（四）

前獨逸宰相ビューロー公は其著「獨逸世界政策」に於て、獨逸が歐洲列强の嫉視憎惡を受くる理由を論じて、「獨逸帝國は忽然として產れたり。其速かなる事迅雷も啻ならず、其强大なる事人の意表に出でたり。歐洲列强は一つとして獨逸の再生を希望したるものなく、若し能ふべくんば之を抑壓せんと欲したり。されば此新强國が世界に歡迎せられずして、嫉視憎惡せられしは寧ろ當然なりき」と云つて居る。

然るに日本は獨逸の如く、列强に遲れて國際的生存競爭に參加したるのみならず、更に歐米先進國民とは異なる有色人種に屬すると云ふ弱點を有つて居る。故に日本が獨逸帝國の如く强大となり、獨逸帝國の如く大膽に其目的に向つて邁進せんとするならば、世界列强は白人種に屬する獨逸に對するよりも更に深刻に、日本の勃興を嫉視憎惡するに相違ない。獨逸の法學者エーリング氏は其著「アリアン民族史」に於て、猶太人が一神教を奉ずるに拘はらず、神を以て猶太人のみの神なりとし、異邦人は其祝福に與る能はざるが如く信ずるを指摘し、「彼等の一神教は國民的一神教なり」と冷笑して居る。然しエーリング自身の屬する歐米基督教徒も亦、眞に嚴格なる意味に於ては人種的一神教徒に過ぎず、未だ世界的一神教徒を以て目する事は出來ない。何となれば彼等は口に神の人類の父たる事を敎へ、人類の互に兄弟姉妹たる事を說くと雖も、事實に於ては異敎徒を見る事其仇敵の如く、他人種を待つ事其奴僕に等しく、兄弟姉妹の情誼は未だ之を白人種以外に及ぼさない。現に北米合衆國の如き、其面積は三百萬方哩を踰ゆと雖も、其人口は尚未だ約九千萬に過ぎず、ロッキー山脈以西十一州に至つては、一平方哩の平均人口八・一を出でない。英領加奈陀及び濠洲の如きも、其面積は何れも歐洲の大に匹敵するに拘はらず、其人口は歐洲の全人口の百分の一內外である。卽ち前者は約五百萬、後者は約四百萬に過ぎずして、其一平方哩に於ける平均人口は、兩者共に二人に達しないのである。從て百里の平野未だ耒鋤を入れず、

古の深林曾て斧鉞を加へざるもの、擧げて數ふべからざる狀態であるのに、彼等白人種の偏狹なる、或は「白人加奈陀」を唱へ、或は「白人濠洲」を稱し、苟くも皮膚の色を同じうせざるものには、斷じて其上陸を許さぬ。北米合衆國に旅行したる人は、時に料理屋に入り食事を命ずれども、單に有色人種たるの故を以て、一片の肉をも一杯の水をも與へられず、實に米國人が其口に正義人道を說くに拘はらず、他人種に對する道德的觀念が、我等の豫期したるよりも低級なるを實驗したるに相違ない。彼等は斯の如く自國の門戶は、有色人種に對して之を閉鎖するに拘はらず、有色人種の領土に對しては常に機會均等を名として、門戶開放を要求しなければ已まない。實に彼等は世界を以て白色人種の家となし、有色人種を以て其奴僕とせずんば已まざる野心を有するのであつて、今度の歐洲戰爭の如きも、畢竟すれば白人種の何者が世界に君臨し有色人種に對する號令權を得べき歟、といふ事を決するが爲めの衝突である。斯の如き間に起つて有色人種に屬する國家が、其頭を擡げ世界文明に對する抱負を實現せんとするに於ては、獨逸が受けつゝある以上の壓迫を受くるの覺悟無かるべからざる事勿論である。

（五）

十九世紀は國民主義の時代であつた。何れの國に於ても、貴族專制を顚覆し立憲政治を確立したのである。二十世紀は人類共同自治の時代でなければならぬ。卽ち世界に於ける白人專制を打破し、人類共同自治の基礎を確立すべき時代である。惟ふに貴族又は富豪が一國の政權を壟斷する事が罪惡である如く、或特種の一民族又は一人種が世界を獨占し、其富源を壟斷する事も罪惡である。國家が國民全體の國家たらざるべからざる如く、世界も亦全人類の世界でなくてはならぬ。白人種が其國內に於て貴族專制を顚覆し、國民の國家を建設したるにも拘はらず、世界に於ける人種の差別を一掃し、有色人種に對する差別的待遇を一掃し、人類の世界を建設する事に證認を與へざるは自家撞着であつて、彼等の所謂自由主義なるものは、全世

界の全人類を一貫すべき大自由主義に非ずして、實に自國の國境を越ゆる能はざる小自由主義である。然し貴族専制を顚覆せんとする運動を、貴族階級の間より期待する事が不可能である如く、白人種専制を打破する運動の、白人種自身の間より出づる事を待つは、百年河清を待つが如くである。貴族専制を覆顚せんとする運動が、常に貴族より壓迫せられ蹂躙せられたる平民階級より勃發したる如く、白人種専制を打破せんとする運動も、亦常に白人種より壓迫せられ蹂躙せられつゝある有色人種の間より起るのが必然である。英國首相ロイド・ジョーヂ氏及び米國大統領ウイルソン氏の如きは、頻りに民族自決權を唱へ、各民族は其隷屬すべき主權者を選擇するの自由なかるべからずと論ずと雖も、斯の如きは啻に獨逸に征服せられたる多數の民族を獨逸に隷屬せしめず、武力によつて奪はれたる土地を、民族自決權なる名目によつて獨逸より奪ひ回さんとする目的より出でたるに過ぎない。若し是等の人々が眞に民族自決權を信ずるならば、夫れを自國の領土に於ける印度人にも適用し、埃及人にも適用し、又支那人にも適用しなければならないのに、單に之を獨逸の征服地にのみ適用せんとするを以ても、其目的の何處に存するかを知るに足る。

斯く考ふる時は、有色人種中最も進歩し、又最も富強なる日本の使命は實に重大なりと云ふべく、白人専制の迷夢を破り、人類共同自治を目的とする世界的維新を行ひ、以て文明史上に一新紀元を開くべき義務を帶びて居る。斯の如き使命を自覺し、斯の如き維新を計畫する一大國家が世界に出現したといふ事は、白人種に對する一大威嚇であるから、彼等の日本に對する壓迫と監視とは、今後日本が其力を増加し、其勢力を擴大するに從て、益々加はるに至るべく、現に獨逸に對し聯合諸國と共同作戰に從事せる今日に於てさへ、尚且聯合諸國は我日本を疑ひ、如何なる場合に於ける出兵に對しても、常に名義上のみの白人兵を混へて日本の行動を監視し、將來日本が戰勝の效果を私する事無きやう之を豫防せんと力めて居る。味方として戰鬪を倶にせる場合に於てすら、尚且斯の如き壓迫を蒙

る。彼等の利益に反するが如き場合に立ち到らば、如何に强大なる壓迫を蒙らねばならぬかは之を想像するに難くない。

斯の如く考へ來れば、對支外交の步武を進め、日本の生存と發展とに必要なる基礎條件を完備し、以て其生活權を確立するといふ事は、單に日本の爲めのみならず、世界文明の爲めに必要である。日本が白人種の嫉視憎惡の間に立ち、能く白人專制の迷夢を破り、世界文明史上に一新紀元を闢き得るや否やは、實に對支外交の眞意義を徹底せしめ、日本の生存權を確立するに必要なる基礎的條件を完備し得るや否やに依つて決せらるるのである。

☆

予の民本主義論に對する北氏の批評に答ふ

法學博士　吉野作造

本誌一月號に掲げたる予の民本主義論はいろいろの人からいろ／＼の批評を受けた。大抵一通り眼を通したが、一々之に答ふる餘裕なきことを遺憾とする。と云つて全然之を不問に附し、評家の好意に背く積りは無い。予は常に批評家の言を玩味して、自ら正すを怠らざるものである。

中に就き北昤吉氏が「中外」二月號に於て發表せられた評論には、予の論文を最も能く讀まれた點に於て、又最も叮嚀なる詳評を下された點に於て、而して又最も多く予の蒙を啓發した點に於て、大いに感謝の意を表する。大體に於て氏の評言に承服するが、唯二三辯明を敢てすべき點が無

いではない。忙しい爲め月を超して些か後れたりと雖も、一つには氏の好意に酬ゆる爲め、一つには民本主義に關する研究を盛んならしむる爲めの意味で、玆に此文を草して北氏並びに讀者に再び教を乞ふことにした。

北氏の批評に對し予の辯明を敢てせんとする諸點に通じて、豫め予の斷つて置きたい事が二つある。一つは北氏が予の常識的意味に用ひし文字に特別の學術的意義を附し、予の本來執る所の立場以外の見地から予の用ひし文字と之によつて現さんとせる思想とを批判せられた事である。予が學術上特別の意味のある言葉を無雜作に常識的に用ひたのが宜しくないと云へばそれ迄だけれども、もと／＼通俗の讀物として公にせるものである。特別の説明なしに用ひた文字は之を常識的に解すべしと要求するのは强ち不都合でないかとも考へて居る。も一つの點は北氏は事物の理想(ゾルレン)(Sollen)を解くに詳かにして、之と現實(ザイン)(Sein)との交渉は比較的之を輕く見て居らるゝの點である。例へば予が國家本位主義に對して個人本位主義を立するを觀て、北氏は國家主義は素と弊害あるものではない、弊害あるは誤れる國家主義の責任であると云はるゝ。併し現實の國家生活に於て、所謂國家主義の名に於てせらるゝものは、往々誤れる國家主義に墮する事が多い。仍で國家主義は其ゾルレンの方面に於て弊害あるものにあらずと云ふ見解を承認しつゝ、現に誤れる國家主義に動もすれば墮する所の、所謂國家主義を如何にせば其理想的の狀態に還らしむる事を得るやを講究するのが、實際政治に於て最も必要である。ザインとゾルレンを結びつける爲めの方法手段が、政治家の研究すべき主要なる題目である。國家主義と云ひ個人主義と云ふ、其主義の理想的本質は本來何等の弊害を伴ふべきものではないと云つて安心して居る譯には行かないのである。此點に於て北氏と予輩との眼の着け處が初めから餘程異つて居るのでは

あるまいか。

尙北氏に對して述べたる以上の二點は、同時に他の多くの評家に向つても當篏めんと欲する所なる旨を附言して置く。

民本・民主兩主義の區別の標準としての主權の觀念に就て

（一）

予が民主主義を主權の所在に關する說明、民本主義を主權運用の方法に關する說明なりとせるに對し、從來諸方面から幾多の批難を受けたが、北氏も亦此點について手嚴しき批難を向けられて居る。而して此等の批難の中には全然誤解に基くものもありと思ふが、併し大部分は予が所謂主權の觀念を十分說明しなかつた事に責任がある。現に北氏も予の前記兩主義の區別に關する細評は、他日予の主權論の公けにさるゝ機會を俟つと云はれて居る。

一體予が民主・民本兩主義の區別の標準として採つた主權と云ふ文字には、極めて通俗の意味を附して居るのである。主權と云ふ文字は斯の如く解せざるべからずといふ見地よりも、寧ろ我國に於て通俗に此文字が如何なる意味に使はれて居るかの見地よりして此文字を用ひたのである。而して我國にて通俗に或は主權と云ひ、或は主權者と云ふ時は、極めて形式的なる法理解釋によつて居る事は何人も承認する所である。即ち予輩は、北氏も指摘して居る如く、憲法法理の形式的解釋に從つて主權の意味を定めたのは、之が通俗の觀念なりと思つたからである。予は固より國家主權說（從つて天皇を最高機關と見るの說）に全然理解がないではない。けれども通俗に我々は主權者といふ文字によつて國家其物を理解するのではない。主權は常に國家にあり、又國家にあらざる可らずと云ふのは、己に通俗の用例を離れて獨り學界に於て初めて理解せらるべき言ひ現はし方である。斯くて通俗の意味に解釋すれば、我國に於て主權の常に君主にある事は分り切つた話である。而して主權を此意味に解釋し、君主主權

に對し人民主權を主張する事が、予輩の所謂民本主義でない事は之亦改めて斷るまでもなく明白である。此事は理義極めて明白にして、我々日本國民の間に一點の疑あるべからざるも、而かも一方には頑迷固陋なる論者あり、又他方には國體を尊重するの餘り少しでも君主の地位に論及するが如き思想の行はるゝを憂ふる人があるので、特に民本・民主の區別を立て、予輩の所謂民本主義は君主主權に相對する主義ではないといふ事を、吳々も明にするの必要を認めたのである。

併し乍ら若し主權といふ文字を國家社會を動かす事實上の最高權力といふ風に解釋するならば、所謂國家主權說に深大な意義あることは又之を認めざるを得ない。少くとも今日の國家に於ては事實上之を動かす所の原動力は國家其物にありと云はねばならない。唯制度上は之を體現し又之を發現するものを立てなければならぬ。通俗の用例に於ては此國家權力の制度上の體現者發現者を主權者といふのである。但し國家主權說の立場から云へば、主權は常に國家にありとなし、君主は國家の意志を形式的に發動する所の最高の機關であると說明する。君主を主權者といふも或は之を最高機關といふも、畢竟するに言葉の爭に過ぎない。根本の意味に於て兩者は全然相容れないものではない。

唯日本に於ては從來主權と君主とを離す可らざるものとして考ふるのが通俗の用例である。予は嘗て或教育家の集會で次のやうな演說を聽いた。某將軍が地方の師團を檢閱した時、試みに兵卒に向つて何の爲めに兵役の義務に勤しむかと尋ねた所が、兵卒は即座に國家の爲めにと答へた。將軍は之を聽いて何故に天皇陛下の爲めと云はなかつたかと云つて長大息を禁じ得なかつたといふのである。之を說く敎育家も如何にも茲に深い高い眞理あるかの如き口吻を洩らして居つた。以て所謂國家主權說の極めて俗耳に入り難き所以を想ふべきである。先年我國の法學界に君主主權說と國家主權說との論爭のあつた時、後說を採るものが恰も國賊なるかの如き一種非常なる精神的迫害を受けし實に視ても、思半ばに過ぐるものがあらう。予

之と同じ迫害を恐れたるが故に、主權の意味を俗說に從つて解したのではない。先づ一般の俗解によつて主權の意味を定め、夫れと民本主義とが如何なる關係に在るやを明かにする事が、一般社會を啓發する至當の順序であると考へたからである。

予が斯く形式的に主權の意味を定めた事は北氏も之を明白に認められて居る。何となれば氏は斯かる形式的解釋を採るを批難して、氏の所謂國家主權說の立場を主張せられて居るからである。併し予が故らに主權の意味を斯く形式的に解せるについて相當の理由ある事は以上の陳述によつて明かであらう。唯予が更にも少し詳しき學術的說明を主權問題について加へなかつたのは、北氏の指摘するが如く如何にも予の粗漏であつた。唯予の些か北氏に遺憾とする所は、假令斯く俗解によることが惡いとしても、予が主權を斯く形式的に解せるを認めらるゝ以上は、予の所謂主權は斯々の如きものと一貫して考へらるゝを至當とするに、然かせられざりし事である。同氏は其評論の末項に於て、予が實質上一種の議會主權論者なるに、而かも同時「極端なる君主主權論者」たるは矛盾も亦甚だしいと指摘せられて居るが、かゝる批難は、主權を國家を動かす實際の權力といふ實質的意義に解釋して初めて成立す得べき事柄である。主權の觀念を形式的に解せるを難ぜる同氏が、一轉して予を實質的意義の君主主權論者と強ゆるのは、些か撞着の嫌なきを得ないではないか。

（二）

一體國家の權力といふ問題については予は次の如く考へて居る。

國家を動かす最高の權力に關しては少くとも次の二つの問題が起り得る。一は國家の權力が如何にして構成せらるゝかの實質問題で、他は如何にして此權力が國家の各分子を拘束するの効力を有するに至るかの形式の問題である。第二の點は法律的制度の力を俟つは云ふを俟たない。換言すれば國家の權力を體現し且つ之を外部に發現するの地位を制度の上に確定し、此地位に依つて現はるゝ時に國家の權力は初めて天下萬民

を拘束するの力となるのである。古は斯の如き地位は一個の自然人によつて占めらるゝを常とした。君主即ち之れである。而して君主は形式的に國權を外部に發現するものなると同時に、又國權の實質的構成にも至大の關係があつた。實質的に觀たる國家の權力は、國家を構成する凡ての要素の參與を待つは今も昔も變りはない。唯形式上治者の地位に立つものと被治者の地位に立つものとの、構成要素としての重要の程度は、時代によつて同一ではない。大體上から云へば、古代に遡る程國權の實質的構成に對する君主の影響は重きを爲す。極端に云へば殆んど一人の考で國權を構成したと觀ても可い時代があつた。所謂朕は國家なりといふ言葉は此狀態を形容するものである。併し斯う云ふ時代でも他の一般の人民は、非常に微弱ではあるけれども、全然國權の實質的構成に無關係なのではない。而して彼等の構成要素としての重みは、時に浮沈消長ありと雖も、大體に於て時と共に進むものなるは疑を容れない。而して此點に關する進歩發展は、所謂近代に至つて一大飛躍をなした。就中最も著しきは國權の構成に關する民衆の力が、消極的なるより更に積極的に進んだ點である。今日では此方面に關する上流の力に比して、民衆の力の勢がいよ／＼發展して止まざるの狀態である。固より上流は其地位により又其內在の價値によつて、民衆を道德的に指導する事は出來る。併し乍ら、結局民衆の意志を全然無視して、獨自に國家意志を構成する事が、今日に於ては君主にも許されて居ない有樣である。斯く云へば如何にも君主の尊嚴を傷けるが如くに見ゆるけれども決してさうではない。寧ろ斯くして君主の尊嚴は從來の神秘的な傳說的根據から引出されて、君民和協の合理的な人格的根據の上に確立せしめらるゝことになるのである。

斯て國家の權力に關する問題は、少くとも君主國に就て云へば、(一)制度上之を體現し發現するものは一私人たる君主であるけれども、(二)國家意思其物は決して一人の意思では無い、國家の總ての分子が國家意思の構成に實質的に與つて居るものである。如何に

論上之が所謂國家全體の意思であるといふ事が明であつても、之が國君たる君主を通じて發現せざる以上は、法律上人民を拘束する力とはならない。此點に於て君主が往々主權者と云はるゝのである。併し乍ら法律上完全に拘束力を有する事が出來ても、それだけでは實質上永く國民を拘束する力とはならない。そが實質上永く拘束力を有し得るが爲めには、法律上國家の權力として現はれたものが、眞實の實質的權力を其儘發現せるものでなければならない。換言すれば法律的權力が國民を支配する力として永く成立し得る所以は、そが實質的權力たる點にある。此點よりして實質上の權力を主權なりと觀るの說も亦誤りではない。此見地よりすれば主權は常に國家にあり、君主は卽ち其發現の最高機關であるといふを妨げない。故に前の意味に於てすれば、予輩は君主主權論者である。後の意味に於てすれば予輩は又國家主權論者である。畢竟主權といふ文字を如何なる意味に解するやの言葉の用法如何の區別に過ぎない。

唯國家主權論が君主主權論を批議するには多少の理由が無いではない。そは君主主權論者は、國家の實質的權力は多數民衆の參與を以て成り、君主は只之を發現すべきものたるの理を無視して、君主の單獨の意思(又は少數者によつて影響せられ一般民衆とは直接の交涉なき單獨の意思)が直に國家を支配すべき最高權力たらざる可らずとするが故である。今度の議會で、尾崎行雄氏の質問に對し、寺內首相が「外交調査會の設廢は君主大權の發動に屬し、臣下たるものゝ批議すべき所にあらず」と答へたるは、政治家としての道義的責任を回避し、憲法上補弼の責任を無視せるは云ふ迄も無いが、又君主主權說に對する重大なる誤謬の暴露として注目に値する。斯の如きは一見太だ君主を重んずるが如きも、果して能く君民和協の實を擧ぐるに妨ぐる所なきを得るや。此點に於て君主主權論は難せらるゝ。然し國家主權論は決して君主が國權を外部に發動すべき最高の地位に在す事を難ずるのではない。之に反して君主主權論者が國家主權論を批難する

の説にも亦相當の理由がある。何故なれば國家主權論者は動もすれば國權は君主を通して發動せざる可らずとする重要なる制度を輕視し、吾人の國家生活に於ける君主の意味を蔑にするの傾あるからである。國家の意思は實質的には自ら定まる所ありとしても、若し制度の上に之を發動ずる機關を認めざれば、所謂國權は有つて無きに等しい。而して此發現機關の吾人の國家生活に重きを爲すについては、自ら長き歴史の背景が要る。然るに之を無視し又は之を輕視すると、少くとも一時は支那の如く、又甚だしきは今日の露西亞の如く亂離になるの結果を來すだらう。此危險なる謬想を伴ふの怖あるから、國家主權論の唱道に警戒せよといふは妨ない。が併し本當の意味の國家主權論は、決して所謂君主主權論と其本質に於て相容れざる者ではない。

實質的權力は形式的制度を待つて初めて法的權力となる。前者は後者の本質であり、後者は前者の表現である。二者相合致するを以て國家の理想とする。併し乍ら實際の問題としては兩者は必ずしも緊密に相合致すると限らない。而して之が緊密に相合致すると否とは國家の盛衰強弱の上に至大の關係がある。故に實際問題としては、此兩者を如何にして能く一致せしむるかゞ極めて重大の問題である。而して之が爲には、一方に於ては民衆を教育して其思想を合理的ならしむる事、他方には所謂主權者の教育に意を用ひて其聰明叡智を期する事等、幾多の倫理的教育的努力を要するは勿論なるが、又制度の上にもいろ〳〵爲すべき事が無いではない。而して此目的を以て立てられたる制度中最も肝要なものは君主の主權者（通俗の意味に於ての）としての意思表示に一定の條件を設くる事である。然らば君主によつて表はさるゝ法的權力と國家の實質的權力を調和せしむる爲めに、君主の意思表示に加へらるゝ條件とは如何なるものなりやと云ふに、之には二つの種類がある。一つは法律上の條件である。例へば所謂法律の制定には議會の協贊を經ねばならぬとか、君主の命令には國務大臣の副署がなければならぬとか、又そは一定の機關を通して行はれねばならぬとか、

云ふ様な、多く憲法に於て設けらるゝ所の條件である。假令此等の條件を缺くも、君主の意思表示たる事の事實上明なものは、無論尊敬の意を以て迎へらるる事はある。けれども、法律上斯の如きは君主の國君としての意思表示と認む可らずと云ふのが、立憲諸國の通則である。第二の種類は政治上の條件である。卽ち法律の認むる所の條件の外に、政治上の慣例として自ら發生せる所の條件であつて、例へば補弼の責に當る國務大臣は議會の多數より任せらるゝものたらざる可らずといふの類之れである。而して今日立憲諸國を通じて、政治上の條件として現に確立し又は確立せんことの希望せらるゝものは、一言にしていへば民意尊重の主義、卽ち民本主義の主張である。蓋し民本主義の主張は、各種の法律的條件と共に、之を確立尊重する事によつて、君主の發現する法的權力を國家の實質的權力に合致調和せしめ、以て國家の眞の强盛を計らんが爲めに唱へらるゝものである。されば此見地に立者は、自ら法律上の條件を廣く解釋し、又政治的慣行として民本主義に基づく諸々の原則も、十分に確立せんことを希望するのであるが、不幸にして之に反對する頑迷なる一派の論者は、政治的條件の如きは絶對に確立せざらんことを欲し、法律上の制限の如きも出來るだけ狹く之を解釋せんとするに傾く。而して遂に其陷る所は官僚的專制主義にして、結局國家を危からしむるものたるに心着かないのは、吾々の甚だ遺憾とする所である。

(三)

以上說く所によつて(一)予が主權の觀念を通俗の說明に取り、之を以て民本・民主兩主義を分てる所以、(二)予の所謂民本主義は毫も主權論に觸れず、其運用に關する主義であるとせる所以、從つて又(三)予の民本主義の主張が所謂君主主權と毫も矛盾せざる所以が、明となつたであらう。予が主權論に力めて觸れざらんとせるは、決して自己の安全の爲めではない、皆主權の俗解に根據する各種無用の誤謬に累せられざらんことを欲したが爲めである。而して北氏が主權論より政

治目的論と政權運用論とを分離して考へたが誤りだと難ぜられたのは、主權なる文字を北氏の立場に解釋することによつて初めて意義を爲すものである。若し主權を同氏の說くが如き意味に解するの前提に立てば、予は少くも運用論と主權論とを分離するものではない。之れも予の運用論を少しく親切に讀む者には自ら明白であらうと思ふ。尤も主權論と目的論と運用論との相關の理に至つては、予は北氏によつて大に啓發され、爲めに從來の思想に更に一段の改正を加ふるの必要を認むるに至つた。敢て此事を一言して置く。

科學的政治學及び政治哲學の辨

（一）

廣い意味の政治學に全く研究の方針を異にする二種類ありとなし、一方に科學的政治學の名を與へ、他方に政治哲學の名を附せるについては、北氏よりも批難されたが、他の評家よりも少らざる論駁と嘲笑とを受けた。此等の批難と嘲笑との半ばを予は敢て甘受する。一つには說明の方法が拙かつたし、一つには科學、哲學といふ文學を極めて常識的に用ひたからである。併しながら之れ只說明の方法の巧拙の問題、科學的政治學並び政治哲學の命名の適否の問題であつて、予の腦中に往來せる思想其物の根本に至ては此等の批難によつて何等の動搖を感じない。予の考ふる所（多數の政治學者の說く所も亦同樣であると思ふが）によれば、凡そ政治に關する研究は、（一）國家の本質と政治の理想との研究と、（二）現實の國家と之を其理想に導く爲めの必要なる手段方法の研究とに分れる。一つは國家並びに其働きのゾルレンの研究である。他は此理想と現實との調和の方法の發見に關する研究であるといつてもいゝ。此二つの種類の研究に如何なる名稱を與ふべきかは、畢竟名義の問題である。前者の研究には多少哲學的素養を必要とする點より之に政治哲學の名稱を與へ、後者の研究は專ら現實の國家社會に關する各種の材料の蒐集・整理等、比較的事實其物の觀察を必要とする點より、之に科學的政治學なる名稱を與

へたが、併し此等の命名の果して適當なりや否やについては予は深く爭ふものではない。只此二種の異つた研究の存在する事、並びに今日の政治學の實用的價値は多く第二の研究に於て認められ居ることを記憶すれば足るのである。

苟くも政治現象を正當に解釋せんとせば、此兩面の研究を閑却してはいけない。然るに世上多くの政論家を見るに、或は實際政治に多大の趣味を有するものは、第二の方面を重んずるに過ぎて議論稍〻淺薄に陷るの弊を見るが、又純思想家の側ら政治に容喙するものは、動もすれば第一の點を高調するに急にして第二の點を忘れ、從つて所謂空論に畢るの弊あるを見る。同じく政論を試むるもの丶一人として、予が何れの種類に屬するやは、姑く世上の批評に任せる。而して、北氏は多くの點に於て予等を啓發するも、氏の政論は稍〻純思想家の動もすれば陷る弊害より全然脱却してはゐないと思ふ。

北氏は予の政論の最大の缺點は公民國家の理想を缺くにありとせらるる。成程氏の說の如く「全體は部分の爲めに、部分は全體の爲めに」の理想によつて所謂各種の政治主義の本質を統一的に說明せられんとするのはい丶。此理想に立てば氏の言の如く、「特權階級の特權の濫用をも、又必要の場合は特權階級の絕滅をも主張し得べく、參政權の擴張をも要求し得べく、個人の不合理の自由をも拘束し得べく、低劣なる多數者の功利的精神に反抗する事も得べく、君主の特權を無みせんとする平等主義にも、憲法を停止して君主の權力を絕大ならしめんとする復古的革命主義にも反抗することが出來る」。約言すれば、個人的自由の極端なる主張も、又國家的拘束の極端なる要求も、其本質に於ては決して相戾るものではないといふ事になる。併之は國家のゾルレンの方面を說明するものであつて、決して其ザインの方面を說けるものではない。ゾルレンの方面の說明としても、予一個の者としては、北氏の說明で盡きたとは思はない。少くとも國家の本質に關しては個人觀と團體觀との爭は容易に結着はつき難からう

と考へてをる。併し此等は今茲で論ずべき問題ではない。只現實の國家に於て、個人的自由の主張は所謂危險な個人主義に陷り、又國家的拘束の要求は厄介な個人の壓迫になるといふの事實は之を隱す事が出來ない。

(二)

今日現實の國家生活に於ては所謂個人主義も所謂國家主義も共に其純なる形に現はれて居ない。少とも純なる形に於てあらはるゝと限らない。「全部の爲め」として求めらるゝものが常に必ず「部分の爲め」になると限らない。「部分の爲め」として求めらるゝものも亦同樣である。而して目前に斯くの如き不調和の事實ある以上、我々は「全部の爲め」が其純なる本質に於て「部分の爲め」になるべきものであるからとて安心して居ることは出來ない。是に於てザインとゾルレンとを調和せしむるの必要が起るのである。而して之が調和の方法如何は、實に予の所謂科學的政治學の非常に頭腦を絞る問題なのである。

北氏は此難問を極めて無雜作に「合理的」といふ文字を以て解決し去らんとし、又解決し得たりとして居る。「全部の爲め」の施設が合理的なれば自ら「部分の爲め」になる。「部分の爲め」の施設が合理的なれば又同樣に自ら「全部の爲め」になる。氏は斯くて予の態度を疑つていふ、「何故に第一の意味の民本主義に公民國家の理想を加へ、個人の自由を國家生活内に於ける合理的自由と化せざりしか」と。氏は又曰ふ、「民本主義も國家主義も之を純化すれば十分調和し得ると認めざるを得ず」と。成程思想の上で兩者を調和することは極めて簡單である。けれども之を實際に應用して現實の國家生活に兩者の調和を打建てんとすれば、何が合理的かといふ其目安を適確に定めなければならない。只合理的たるべしといふのみにては、少くとも實際の問題に對する答解とはならない。而して個人的自由の主張がどの點に止るのが合理的か、國家的拘束の要求がどの點に止るのが合理的かといふ、いはゞ兩者の間に適當なる現實の合理線を發見する事が、實に政治學の大事業なのである。

然らば古來斯の如き所謂合理線は發見されたかといふに事實は之を否認する。思想としても發見されなければ事實の上にも今日に至るまで未だ解決がついてゐない。少くとも近世の歷史では、此合理線の發見の爲めの一大苦悶奮鬪が實に其重なる頁を占めて居るではないか。國家の拘束は本質に於て「個人の爲め」のものであり、又個人の充實は畢竟「全體の爲め」になるといふ事は、固より初めから分り切つて居る。此考あればこそ我々は時に無理と思ふ國家の拘束にも甘んじて服從し、國家も亦時に無理な自由の要求にも應ずるのである。只常に合理的畛域を超えずと稱して主張し要求せらるゝ所の個人の自由又は國家の拘束其物が、必ずしも合理的畛域を超えずと認むることが出來ず、少くとも此點について人により著しく其觀る所を異にするものあるが故に、古來爭が絕えないのである。從來の歷史が之が絕對的調和の殆んど不可能なるを吾人に暗示して居るに拘らず、人心自然の要求は之が調和を求めて止まざるが故に、政治家も學者も共に苦んで居るのである。此實際を看過しては、千萬言の立論も畢竟空論に終らざるを得ない。

予の所謂科學的政治學（姑く此批難多き文字を假用する）は、所謂合理的標準なるものゝ求め難きを豫定し（求め得ずと諦めるのではない、此方の研究は予の所謂政治哲學に讓るのである）、實際問題としては「全部を重ずるの主義」と「部分を重ずるの主義」とを交互に代り立たしむる事の外に致方がないといふ結論を吾人に示して居る。尤も斯く云へば、或時には個人主義に行き、或時には國家主義に行くといふ風に、時を隔てゝ國家を全く相反對の方向に奔らしむるやうにも聞ゆるが、然し科學的政治學は、深い理論は姑く之を政治哲學の研究に讓り、差當り政治の目的は個人の充實も計り又國家組織の鞏固をも計るに在るといふ、卑近な所から發途するものである。恰度人生終局の目的は容易に分らないとしても、差當り我々は身體も丈夫にし精神も磨くといふ卑近の目標の上に、今日の生活を支配して行かなければならぬといふと同樣である。此差當

りの卑近なる目的を達するが爲には、時には勉强をするが又時には運動をする必要がある。眞の人生の目的の貫徹は、かく卑近なる目的を達した上に築かれなければならない。國家の本質は如何、國家の究竟目的は如何は、姑く之を他の學門の研究に讓り、差當り科學的政治學は、國家も强め個人も充實するといふ見地から發途して差支がない、又發途して然るべきである。而して國家の爲めにする事と個人の爲めにする事とが、其本質に於て相戻るものではないけれども、事實上此兩者は所謂合理的標準を超えざる場合に於てのみ相一致するものであり、而して其合理的標準の容易に求め難しとせば、運動と勉强とを交り〱行ふが如く、兩方の主義を交互に立たしむるといふ事に何の怪むべき所あるか。之を「空漠なる二元論」といふべくんば、現今の科學的政治學は此名稱を甘受するを辭せざるものである。

(三)

尤も予の二元的交代論を以て、同一の政治當局者に違つた主義を代る〱やれと勸むるものと解するならば、それは大なる誤である。凡そ政治家には、自ら或は國家本位主義的に、或は個人本位主義的に傾くの差別はあらう。然し之は外部から客觀的に判斷する場合の事で、政治家彼自身は初めから一方に偏するを意識しつゝ諸般の施設に當るものではない、又當る可らざるものである。尤も之までの政治が一方に偏し過たから、今度は他方に偏するのがいゝといふ考で政治をやる事はある。何れにしても、結局國家其物の爲め又之を構成する個人の發達の爲め、此兩方の目的を達するに適當なる所謂合理的標準を誤るなからんとするの主觀的態度に於ては、皆一致して居る。又斯くの如き不偏公平の態度を持する事を、吾人は政治家に向つて要求するものである。故に政治家が、或時には甲の主義或時には乙の主義と、相交代する事が眞に政治の目的に協ふといふ確信の上に立つものならば妨げない。けれども只盲目的に違つた主義を交る〱實行するといふ事は吾人の政治家に望む所ではない。併しながら盲目的に

無主義無方針に、或は右し或は左するものに非ざる限り、同一の政治家に、例へば今日軍備を擴張せんが爲めに莫大の租税を賦課しながら、明日民力休養を名として此等の租税を減廢するといふが如きを望む事は出來ない。矢張り政治家には、主觀的には皆國家民生の爲め最も適當なる施設をなすと信じつゝ、吾人の客觀的判斷の鏡に照せば、其間に自ら一方は「全部の爲め」を餘計に思ひ、他方は「部分の爲め」を餘計に思ふと云ふの區別がある。從つて軍備擴張の必要を感じ之を實行せんが爲めに廟堂に立つた政治家は、どこまでも此方針で押し進み、之が眞に目的に協ふと信じて、假令全體の形勢が民力休養の急務を思ふ時勢になつても容易に其方面を轉換する事が出來ないものである。然らば民力休養の方面の施設は、自ら現在の當局者とは違つた方向の政治家をして其の實行の任に當らしめなければならない。そこで我々は、「全部の爲め」の主義と「部分の爲め」の主義とを、適當に調和せしめ得べき合理的標準の實際に求め難く、從つて此兩主義を交互に波動的に行はしむるの外に途なしといふ立場からして、異つた傾向を有する政治家團體の各々をして適當に交代せしむるの仕組を立てることが、必要であると思ふのである。

然らば如何にして二つの團體をして相交代せしむべきか。之を五年毎に代へるとか十年毎に代へるとか云ふ風に、器械的に又人爲的に定むる事は出來ない。一番合理的な方法は、時勢自然の要求に合せしむる事である。時勢が自ら國家本位的施設を要求する時には此傾向の政治家を立たしめ、又此方の施設が一通り完成し若くは更に一歩を進めて寧ろ其弊害が現はれ初めたといふ場合には、他の傾向の政治家を立たしむる樣にする。然らば此時勢の要求の變遷は何に依つて之を知るかと云ふに、それは所謂輿論に之を徴するの外はない。此點に二大政黨論の政治的意義の存する事は予の屢々說ける所である。二大政黨論は即ち交代の時期を國民良心の判斷に任せるものである。今現に甲黨が廟堂に立つて居るとすると、其黨の政策が自然一方に偏して

時を經るに從つて其弊が著しくなれば、それは必ず自ら國民の意嚮の上に反映して來る。從つて國民は何となく政變を思ふやうになる。尤も國民が政變を思ふの時期には長短の區別はある。其長さは取りも直さず時の政治家が比較的一方に偏する事が少かつたか、若くは合理的標準を誤る事少かつた事を意味する。それでも全然何れの一方にも偏しないと云ふ事はないので、從つて早晩國民は同一の内閣に倦怠の情を催すものである。政治家の思想が、或者は國家主義的、保守的であり、他の者は個人主義的、自由的でなると云ふ區別の必ず生ずる所以は、心理學上からも證明が出來ると思ふが、茲では今之を論じない。要するに二つの異つた傾向に分れるとすれば、一方がどんなに愼んで合理的標準に遠からざらんと努めても、早晩國民から厭かられるといふのは止むを得ない。從來の政治歴史家は、非常な勢ひを以て歡迎された政府も永くも十年と續くが稀であり、國民が間もなく政變を思ふに至る狀態を指して、之を漫然と國民の移氣といふ事に歸して居つたけれども、併しよく考へて見ると、之には深い理論上の根柢があるのである。要するに國民の現政府當局者に與ふる所の信任如何は、卽ち其政府をして引續き其職に留らしむべきや否やを判斷する唯一の事實上の標準である。此點よりして吾人は、所謂二元的交代論の實際的應用として二大政黨論を主張するものである。只二大政黨論が其國特殊のいろ〳〵の事情により、文字通りに行はれない場合ある事は固より云ふ迄もない。又此仕組の運用をして本來の趣旨を誤らざらしむる爲には、一方には國民を教育して政治的施設の效果に對する鋭敏なる感應性と誤りなき批判力とを養はしめ、他方に於ては當局者が何時までも其職に留らんとして種々の奸策を施し以て政變の發生を人爲的に避くるが如き事なからしむるの用意なくてはならぬ。此等の點についても論ずべき事頗る多いが、今は問題外だから總て之を略する。

民本主義の二種別に就て

（一）

予は民本主義を二種に分ち、一は政治の目的に關して所謂國家本位主義と並んで主張さるべき自由尊重主義、一は政治の目的を有效に達するを得べき唯一の方法としての參政權賦與(又は獲得)主義なりと解し、前者を相對的眞理とし、後者を絕對的眞理なりと說いた。之にもいろ／＼の批難があつたが、其多くは予の說明の不十分なりしに基く事は、予の甚だ遺憾とする所である。

予が第一の意味の民本主義を相對的眞理なりといふ意味は、前段說く所に於て已に明かとなつた事と信ずる。相對的といふ形容詞を附するの適否については深く爭はない。

第二の意味の民本主義を絕對的眞理なりといふ所以は、政治の目的は何であれ、之を有效に達するには是非共此主義に由るの外はないといふ意味に於てしたのである。前のは二つの主義が相交代して用ひらるべしといふ所から、其交互に用ひらるべき一つの主義は、それのみで單獨に最終の眞理たるものではないと云ふ意味で相對的といひ、後のは之のみで單獨に一個の眞理たる事を要求し、之と相並んで用ひらるべき他の主義を認めないといふ意味で絕對的といふたのである。而して予が「政治の目的は何であれ、之を有效に達するには是非共之に由るの外はない」と云ふたのは、必ずしも政治の目的を全然不明とし、只目的遂行の方法丈けが絕對的價値ありと主張する意味ではない。目的は全く不明なのではない、結局の目的は國家を强くし、國民を安んずるといふ所にある。只此全體の目的を眞直な一本の途を辿ることに依つて達成する方法が吾々に分つてゐない。そこで止むなく或時は右し、或時は左して、所謂波動的に進むの外はない。而して、右に行く場合でも、或は左に行く場合でも、即ち政治の差當りの目標が左右何れの方向に向つて居る時でも、其地方／＼の地理等を詳細に研究してかゝるといふ事が絕對に必要だといふやうな意味で、予は目的遂行の方法に絕對的價値ありといふたのである。予の態度を以

て「旅行の目的地は不明なるも、我々の現に辿りつゝある途に誤りはない」といふに等しと責むるのは、適切なる譬論ではない。

斯くて予が第一の意味の民本主義を相對的眞理なりと云ふたのは、之れと國家本位主義とを交互に併用せしむることに依つて、器械的ながら政治の施設が初めて合理的標準を誤らざるを得べしとする思想から出づるのであつて、第二の民本主義を絶對的眞理なりといつたのは、前記二主義の何れを行ふに就いても、其方法としては是非共之に據らざるを得ずとする思想に出づるものである。從つて代議制度其物に疑を挾むサンヂカリスムの如きありても、第二の意味の民本主義を絶對的眞理として主張するに何の妨げもない。第二の意味の民本主義のよつて以つて立つ所の代議制度を否認するの説があると云ふ事と、第一の意味の民本主義が國家本位主義と相並んで共に眞理なりと主張せらるゝ事とは、之を同一に論ずる事は出來ない。

(二)

予が政治の目的論と運用論とを全然相互的關係なきが如く説明したのは大いなる粗漏であつて、此點に於ても予は北氏の指摘に感謝の意を表する。

第一の意味の民本主義、は北氏の説の如く「公民國家」の理想に於ては、もと之と正反對に立つが如く見ゆる主義と相容れぬものではない、又相容れざるものであつてはならぬと信ずる。然しながら、現實の國家に在ては、往々所謂特權階級なるものあつて、全體としての國民の利益を蹂躙するの現象に乏しくない。斯くとも現實の國家は、此等の點に於て公民國家の理想からは餘程遠いものである事を認めなければならない。是に於て民本主義が、實際の政界に於て、特權階級に反抗する自由主張の形に於て現はるゝを免れない。それが極端に行つて不純の姿をとることはあるも、民本主義が自由を主張するといふは深い意味のあることである。而して之が合理的の境を超えなければ、所謂國家主義と矛盾せざるは云ふ迄もない。けれども、こは只理想的の狀態に於ていひ得る事で、現實の狀態に於ては、

民本主義ばかりでなく、所謂國家主義も亦忠實に合理的範圍を守るものではない。是に於て吾人の國家生活の實際に於ては、民本主義は常に自由の主張の爲に奮鬪を要する事になる。而して第二の意味の民本主義は、此奮鬪の過程に於て起つた。故に第二の民本主義は畢竟第一の民本主義の目的を貫徹する爲の手段であり、又斯くの如き手段たる所に本來の價値を有するものである。故に此二種の民本主義は、本來極めて密接な關係を有するものである。

歴史的に云つても、第二の民本主義の第一の民本主義に次いで起つた事は、前の論文にも述べた通りである。卽ち第一の民本主義先づ唱へられ、其目的の容易に達せられざるを見るに及んで、世人は初めて第二の所謂參政權獲得が先決問題たる事に氣が付いた。而して實際問題としては、第二の民本主義が貫徹すれば、第一の民本主義の目的は自ら苦もなく達せらるると考へられた。斯くして理論上の本質的價値から云へば、第一の方が主で第二の方が從たるに相違ないけれども、實際的努力の目的物としては、第二の方さへ解決が出來ればいゝので、第一の方は全然之を不問に附しても差支がない。其處で第二の民本主義さへ貫徹すればいゝといふ事になり、何の爲めに之を要求するやの根本論は、實際政界に於て頓と忘れられる樣になつた。此點を高調せんが爲めに、予は第二の民本主義が第一の意味の民本主義と獨立したる實際的價値を附せらるゝに至つたと述べたのである。北氏が「政治の目的に頓着なく政權運用の決定だけが一番價値ありとは抑も何の意味であるか」と問はれたのは、全然理論上の價値のみを着眼せらるゝ限りに於て至當の批評である。

實際的努力の目的物として第二の意味の民本主義を最上位に置くは、主として我國の現狀を着眼しての立論である。一般世界の憲政完成運動の最後の目標が常に之であるとの意味ではない。蓋し歐米諸國に於ては、第一の民本主義の容易に達し難きに覺醒し、第二の意味の民本主義の貫徹を先決問題として運動し初めたのであるが、今日大體に於て此方の目的は達せられた。

けれども當初豫期したが如く、之によつて直ちに第一の民本主義の苦も無く實現せられ得るの實が擧らない。其處で今度は再び第一の民本主義の實現に回り、從つて彼國に於る憲法政治完成の運動は、今や參政權獲得てふ形式問題より一轉して、再び眞に民生の利益幸福を計るの實質問題に移つた。歐米諸國の所謂社會政策の流行は即ち其明白なる象徵である。戰爭となつて此進潮は一時紛更を蒙つて居るけれども、戰後必ずや一層の勢力を以て再び大いなる勃興を見るであらう。此方面は我日本に於ても已に其萌芽を發せないではない。極めて不完全なものであるけれども、彼の工場法の制定の如きは即ち之れである。併し乍らあの工場法ですら之が制定を見るまでに幾多の迂餘曲折あつた事實に照せば、我日本は憲政有終の美を濟す第三期の運動に入るには、未だ〳〵前途遼遠の感無きを得ない。予輩が第二段の參政權獲得を高調するに熱中するは、固より報國の至誠に出づるものなるも、又密かに顧みて今頃かゝる問題を高調せざるべからざる我國の現狀に對し、一種憂愁の情を禁じ得ない。

要するに第一の民本主義と第二の民本主義との間には深い關係がある。之を疎略に取扱つた點に於て、予は北氏の批評に承服する。唯次の點だけは北氏並びに一般讀者の諒解を願ひたい。第一は實際的努力の對照としては第二の意味の民本主義が第一の意味の民本主義と全然獨立せる外觀に於て主張されたる事である。此意味を強く云ふ爲に、時に假令第一の民本主義と相反對なる主義の貫徹の爲にも、今日の國家に於ては第二の意味の民本主義によらねばならぬといふものもあつた。參政權を洽く賦與し國民全體に政治上の獨立資格を與ふるの主義に立つにあらずんば、今後の世の中では何事も爲し得ないといふ意味を、強く言ひ表はさうといふのである。第二の意味の民本主義はもと第一の意味の民本主義より起つたのであるけれども、後者が事實上合理的の範圍を越え從つて非難され排斥されたとしても、前者は之とは全く獨立して依然其價値を主張し得るといふ意味に於て、彼此分離して唱へられ

得るのである。

第二は歷史的に云へば第一の民本主義が先きで第二の民本主義が後であるけれども、又心理的に云へば第二が先きで第一が後なりとも云へる事である。此點に於て亦兩者は分離して考へられ得る方面もあるのである。尤も何の爲めと云ふ目的に關係なく、自主其事が人心本然の要求なりといふに對し、其自主といふ事夫自身が所謂目的の一つの內容であると云へばそれまでゝある。

終りに二種の民本主義の相互的關係については北氏の評言に承服するも、此二つを區別し對立せしむるの實際的必要は飽まで之を主張したい。尤も之については兩者の相互の關係並びに第二の民本主義の本質に關して、前論文の足らざりし所を補充して更に論ずべきもの多きを認むるも、之は他日の機會に讓つて玆に之を說かない。

民本主義と社會主義との區別に就て

予が民本主義と社會主義とを對比せしめ、社會主義を以て階級鬪爭を第一義とするとなせるに對し、北氏は之れ予が民本主義を社會主義と同一視せらるるの危險を慮つて、故意に社會主義を曲解せるものか、否らずんば學者としての資格問題に關する重大なる誤謬であると難ぜられた。此事もと直接に民本主義の闡明に關係する所なしと雖も、自らの良心の滿足の爲めに蛇足ながら一言の辯明を試みる。北氏は云ふ「社會主義も民本主義と同樣自由を目的とする。後者が政治的自由を叫ぶ如く、前者は經濟的自由を叫ぶ」と。又云ふ、「政治的自由は……此目的の第一步として特權階級に反抗して非特權階級の解放を叫び來つた。……社會主義も亦……之が實現の第一步として經濟的特權階級に反抗して被壓制階級の解放を叫ぶものである」と。又曰ふ、「今日民本主義者が特權階級に反抗せず、社會主義が之に反抗しつゝあるのは民本主義の特權階級反抗は大部分其目的を達し……社會主義の經濟的特權階級に對する反抗は未だ其效を奏せずして依然奮鬪を續くる

必要があるからである」と。此處までは大體に於て同意を表するに躊躇しない。然るに氏は更に進んで「博士は民本主義は特權階級が折れて出れば階級的反感を起さないと云つて居るが、社會主義と雖も此點に於ては同一である」と云ひ、「今日社會主義が運動の本體を非特權階級（經濟的）たる勞働者に求めつゝありとて階級鬪爭を第一義とすとは誤解も亦甚だしい。社會主義は決して下層階級をして上層階級に取代らしめんとするのではない」と說かるゝに至つては、予に大いなる異議がある。

　社會主義の運動を客觀的に一つの社會現象と觀れば、結局其落ち着く所は北氏の說の如くであるかも知れない。併し乍ら將來經濟的特權階級と妥協する事あるべしとするも、今日の社會主義者が極力所謂資本家階級の合理的存在を否認し、之が絕滅を期する爲めに勞働者の全階級を以て此の階級に鬪爭を挑まんとするの根本主張に眼を掩ふ事は出來ない。尤も社會主義といふ文字にも種々の意味が附せらるゝ、一概に之を論ずることは困難であるけれども、然し今日社會主義運動の代表者と見るべき各國の社會黨幷びに此等多數社會黨の由つて以て立つ所の社會主義正統派の主張は、私有財產制度の撲滅卽ち資本家階級の存在の否認を以て其根本として居るではないか。彼等が黨議として、現在の政府は資本家の味方なるが故に其造る所の豫算には絕對に反對すべしと唱へ、又現在の諸政黨は、社會黨を除き、一として資本家階級存在否認の根本主張に立つもの無きが故に、絕對に此等と提携す可らずと唱ふるは、之れ皆上層階級に對する所謂階級鬪爭を第一義とするものではないか。此點に於て今日の社會主義の多數は、恰かも十八世紀の君主の合理的存在を否認せる末過激狂妄なる人民主權論に類似して居る。人民主權論によつて點火されたる一種の政治運動が、結局民本主義となつて無暗に特權階級に反抗させるやうになつた如く、社會主義に導かる、又社會主義の乘ぜる一種の經濟的自由の運動が、他日遂に資本家階級との妥協に終らないとも限らない。而かもこは社會運動

を全體として觀たる大勢觀に立つものであつて、之に由つて現に主張せらるゝ社會主義其ものの意味を限定せんとするは正當ではあるまい。北氏の物の觀方に一種の尊重すべき特色あるは之を認むるも、此特色に累せられて事物其ものを現にあるがまゝに觀られないのは、予の同氏の爲めに甚だ惜む所である。



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



(中付一の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

決意要迅速

記念事業

- 比較心理學
- 革命の心理
- 價値の哲學
- 實際の哲學
- 國民共濟策
- 應用社會學
- 政黨社會學
- 社會統制論
- 都市の兒童
- 舞踊と歌劇
- 歐洲演劇史
- 現代の墮落
- 人種改良學
- 濠洲及其諸島
- 現今の南阿
- 經濟政策上卷
- 經濟政策下卷
- 資本及收入論
- 變態性慾心理
- 夢の心理
- 近代犯罪學說
- 宗教の眞諦上卷
- 宗教の眞諦下卷
- 實證道德
- 遺傳
- 露國民
- 西比利亞
- 北極
- 墨西哥
- 獨逸世界政策
- 植民政策
- 列强權力問題
- 軍事世界地理
- 動力
- 航空學
- 勞働問題
- 歐洲各國民の心性下卷
- 近世獨逸社會思潮上卷
- 近世獨逸社會思潮下卷
- 世界的米合衆國
- 今日の南亞米利加
- 伊太利及伊太利人
- 現今の猶太種族
- 國際商業及交通
- 近世應用電氣學
- 近代化學の勝利
- 今日の科學思想
- 科學思想發達史
- 近代思想の變遷
- 生物學的人生觀
- 趨異遺傳及進化
- 種の起原の基礎
- 生命の不可思議上卷
- 生命の不可思議下卷

申込所

東京市麴町區元園町壹丁目廿貳番地

大日本文明協會事務所

振替口座東京二二八九〇番

電話番町三五四一二番

取次 全國書店

(中付一の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

官報も矢張り新聞だ　善く讀むで貰ひたい

池田印刷局長談

社會事故、政治問題を報道するには夫々機關新聞がある。新聞その物が社會の耳目であり木鐸であるとせば官報も同じく政府の機關新聞、乃至機關雜誌の類と見て差支へあるまい。官報は一切の法令を公布する爲めの政府の機關である丈、所載記事は凡て正確だが所謂世上の新聞の如く碎けてはゐない。從て興味が薄いから必要を感じ乍らもつひ精讀をせぬ、然し國民としては必ず見なければならぬものである。然も從來一日の發行部數僅々三萬二三千部を出なかつた我が國の人口に比べても亦各新聞紙の發行部數と對照しても、餘りに僅少な發行高ではあるまいか。これでは地方新聞第二流ぐらゐの處にある。調べて見ると甚しきは相當の知識階級者でさへ官報の何物であるかを知らないものがあるとは、人智の啓發も疑はしいと謂はねばならぬ畢竟是は官報の周知が行屆いてゐない結果である。依て今回內地及殖民地全部の新聞紙に廣告して其存在及內容を知らしめる所以である、且更に內容體裁も一新を企てることにしてゐる。勿論詔勅法令の如きは猥に改竄を許さないが、差支へない記事には能ふる限り改良を施し、有益なる調査報告等をも加へ、且廣告の範圍も擴げたいと思ふ。又體裁の如きも見易からしむる爲め世界各國の官報を參考として研究中である。また職員錄の如きも二三十年來同一筆法だが漸次編纂上に改良を施す餘地があらうと思ふ

（中付一の四）

◎官報、法令全書、職員錄發賣廣告

記事の內容　官報は詔書、皇室令、法律、豫算、勅令、條約、軍令、制令、律令、閣令、省令、府令、訓令、告示其他一切の法令を公布する機關たるを以て官公衙私人何れに拘らず必讀さるべきものなり右の外授爵、敍位、敍勳、任官及補職、官等、俸給其他の辭令を掲ぐ尙ほ皇室に關する宮廷錄事あり又諸官廳の彙報、帝國議會、地方行政の記事、在外公館報告、氣象觀測、內外諸般重要の事項を載す其他文官、外交官、司法官、辯護士、裁判所書記等の試驗、學生生徒募集、檢定教科用圖書、學術講演會、諸官廳の購買、工事、拂下、林野賣拂等の入札、商業及法人の登記、產業、漁業、森林組合の登記、公示催告、勸業及貯蓄債券其他の債券當籤番號、外國行郵便締切時限、內外汽船出發表等諸般緊要の廣告あり殊に帝國議會開會中は貴族院、衆議院の議事速記錄を號外として發行す

法令全書は每月公布の法令を一括し印刷に付して翌月之を發行す

職員錄は每年一回各官公衙に於ける官公職位階勳等氏名俸給を錄す併せて官制俸給令等の拔抄を掲げて參考とす

發行度數　官報は日曜日、大祭祝日、歲末、年初等の公暇日の外は日刊なり但し緊急重要なる事項は公暇日と雖も號外を發行して敏速なる周知に力む

法令全書は每月一回（每年一月分を第一號とし第十二號に終る）職員錄は一年一回（大凡七月發行）とす

購讀の申込　當局官報部發賣課へ左の事柄を書きたる購讀申込書を送らるべし

官報は何年何月何日より又は何年何月分。法令全書は何年第何號より。職員錄は何年發行と記すこと（大正六年發行分は賣切）

定價　官報は一箇月六十錢、一部三錢、號外は一部二錢（何れも郵稅不要）

法令全書は一部二十一錢、索引（目錄共）も同價（郵送不要の分は四錢を減す）なり職員錄は年により定價同じからざるにより發行每に別に之を廣告す

代金の拂込　代金は前金とす拂込は郵便振替貯金に據らるゝを最もよしとす口座は「東京一九〇〇〇番」なり拂込通知票裏面の通信欄に配達を受くべき場所、氏名並に購讀申込書に記載すべき事柄を記入のこと但し此場合には別に購讀申込書を送らるゝに及ばず

右の外每月一日發行の官報（休日なれば次日）廣告欄內に精しく記したる發賣手續あり熟覽されたし

大正七年三月

東京市麴町區大手町所在

印刷局

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



迷宮の暗は深し！

佛國學士院會員 ジュール・クラルチイ氏序
佛國文豪 モーリス・ルブラン氏著
日本 保篠龍緒譯

諸者を慄然たらしむる…………
世にも怪奇なる探偵譯
智識階級の讀むべき探偵小説＝深刻なる科學と心理の應用
シャロックホルムス以上の幻快なる名著＝佛蘭西讀書界人氣の焦點

アルセーヌ・ルパン〔I〕
怪紳士

四六判三百五十頁
挿畫三葉入
佛蘭西式美本
定價金八拾五錢
送費金八錢

▼一等船客中の大盗は隣室の貴族かはた博士か？▲
▼蟻の這ひ出る隙もなき城中の貴重品が消えた！▲
▼收監中の怪盗がいつの間にか乞食の換玉に！▲
▼汽車中の兇賊ルパンをルパンが捕縛した！▲
▼應接間の訪問客が突然拳銃で自殺した！▲
▼金庫中の巨萬の證券はみんな僞物！仕舞ッた！▲
▼來て見れば自分より先に黒眞珠を盗んだ奴がある！▲
▼遲かりし名探偵ホルムス！ルパンは一足先へ！▲

賣捌所全國著名書店◇もし無き時は直接本社へ

發行所 東京市日本橋檜物町九番地 金剛社 振替貯金東京三九九二三

（中付一の六）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

末廣鐵腸先生著

岡本一平氏 口繪及裝幀

三五判全一冊 總クロース綴 天金特製函入

正價金九拾錢 郵送料金六錢

改版縮刷

西洋見物 唖の旅行

日本最初の最も面白き世界漫遊記

明治年代最初の政論家にして、兼て滑稽洒脱の筆致を有せし末廣鐵腸先生が、最も滑稽の妙味を傳へたる膝栗毛式の世界漫遊記にして、筆を渡航の船中に起し、道聽途說、觸目偶感、その奇警なる觀察と、その輕妙なる筆致とは、奇想天外、滑稽百出、眞に應接に暇なからしむ。日本最初の世界漫遊記行として、意味深き名著のみならず、側面より世界人文の進展を敍したる、驚異すべき讀物たるを失はず。今これを改版縮刷し、艶麗清洒なる裝釘を加へて江湖にすゝむ。實に出版界の一異彩たり。

近藤浩一路著

漫畫巡禮記

著者は現代漫畫界の第一人者に候、此の書、收むる所すべて十九篇、島原太夫道中、アイヌ見物、異國情調、耶馬溪見物、和歌の浦瓢々記、吉野の花見等にして何れも輕妙なる文章を附す。

四六判美裝
價金九十錢
送料金八錢

發兌 東京日本橋鐵砲町 振替一五〇五六番 磯部甲陽堂 電話神田八四五番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

(中付一の七)

■■■伯爵土方久元閣下題字
醫學博士佐伯矩先生序

大津復活先生新著

最新刊

現代强健法の眞髓

（現代の急務とは何？）

歐洲大戰の活教訓は『力の權威』を痛感せしめ體育氣育の刷新は當面の急務となれり。此急務に應じて幾多の强健法が行はれ幾多の學說が現はれ來れども此等の諸法を綜觀し此等の諸說を究盡して其眞髓に觸れしむる所の著者なきは斯道の恨事と謂はざるべからず。本書は之れらの希望に添はんが爲に成りしものにして內容は現今盛行の諸法を綜觀し古今東西の諸說を究盡して其眞髓を捉へ來つて平易に叙述し明快を極む。自己の心身を改造し國民體育の革新を急とするの人士幸に熟讀を給へ。

目次一班

現代の急勢…呼吸强健法の源流…先哲の深呼吸獎勵…深呼吸の科學的研究…二木式腹式呼吸法…遠山博士深呼吸法の眞髓…岡田式靜座法…藤田式息心調和法…凝念法の直髓…禊式强健法…各種呼吸法の批判…川合式强健法の眞髓…斷食强健法の眞髓…シンクレーヤ氏の實驗…斷食と治病…抵抗養成法の眞髓…石塚式食養法…現代榮養學の眞髓…常識的榮養研究…食物の化學的研究…食物組成の細說…滋養價の研究…標準保健食…米麥榮養の研究…天然生活法の研究…自然療法…精神と肉體の關係

四六判最上製美本
全壹冊箱入五百頁

正價金壹圓五拾錢
郵稅金八錢

（中付一の八）

■■好評 四版

日蓮宗大學講師 文學士 小林一郎先生新著■■

日蓮主義講話

四六判上製
美本全壹冊
紙數五百頁

金壹圓五拾錢
郵稅金八錢

□日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり。本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と教義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸著點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れる者は之によりて現今の時勢と宗教の關係を了解し得べし。特に青年の人々に本書の熟讀をすゝむ。――（現代的解釋に成れる聖日蓮の教義は之れ）

內容目次

吾等と日蓮上人：時勢の推移：切迫した世間：眞の愛國者：世界大戰爭の後：三種の低い信仰：他力と自力：科學と信仰：日蓮上人の事蹟：日蓮主義の將來：近世文明と吾日本國：妙法蓮華經

東京市神田區表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座東京八七貳番



享保廓噺

二人大名

村松梢風

一

「今日は何をして暮さう?」

と、宗春は考へた。

書院造りの清楚な居間、床には靑綠山水の大幅が掛つて、木犀の活花が高い香りを放つてゐる外、別段是れといふ裝飾もない。南向きの緣一杯に午前の陽が燃えて、障子は閉めてあつても外と同じ樣に明るく、緋總のぶら下つた金襖がテラ〳〵と光つてゐる。僅か明いてゐる小窓から庭園の一部が見える。團子を幾つも轉がしたやうな躑躅の築山の向うから美事に咲いた山櫻の一枝がヒヨロ〳〵と碧空に差し出てゐる。

宗春は脇息に凭れたまゝぼんやり櫻の枝を眺めてゐた。戸外の景色とは反對に彼れの心は暗かつた。近頃の彼れは、何をして見ても感興が起らない。毎日同じ樣な酒宴にはもう飽き〳〵して仕舞つた。第一屋敷の女達の顏からして見飽いて仕舞つた。それに、何うしてあゝ同じ樣な女ばかり揃つて居るのだらう。偶さか風の變つた新參の女が來たと思ふ間もなく、直ぐに周圍の者に化せられて、まるで見境ひが付かなくなつて了ふから不思議である――。藝人を呼んで遊藝をやらして見た處で、矢張り何時も極つたことばかりで面白くはない。もう自分には何もすることが無くなつて仕

舞つたのかしら……？

「御前、唯今戻りまして御坐りまする」

一人の侍が徐かに襖を明けて這入つて來て、敷居際に蹲踞りながらかう云つた。今朝市ヶ谷の上屋敷へ使に遣つた近習が戻つて來たのである。宗春は億劫さうに振り向いて

「大儀であつた。返書を是へ持て」と云つた。

侍は摺り足をしながら進んで、蒔繪の文箱を宗春の前に置いた。それは家老下山備中守に宛てた一寸した用件の返事であつたが、其の末尾に「……自然兎角の浮評など致す輩も有之候折柄、去る三日の式日にも御登城無之を以て、年寄共に於ても心痛在罷候との趣、昨日左近將監より內談有之候。旁々御酒宴は間々の事に遊さるる方、御養生にも宜敷かる可くと愚考仕候。……」といふやうな事が書いてある。

宗春は苦笑ひをもらしながら、それを机の上へ拋り出したが、

「金吾、上屋敷に何ぞ面白い噺はなかつたか？」と、少し面を和らげて云ふ。

「は」と金吾は主君の顏を覗くやうに見て

「實は、本日お上屋敷に於きまして榊原侯の一埒を耳に致しましたが、御前は最早やお聞き及びで御坐りませうや？」

「否、存ぜぬ。榊原が何を致したのじや」

「それはかうで御坐りまする。過日上樣がお鷹狩りにお成りの砌、榊原侯が大手の御番をなされましたが、お服裝が餘り華美に亘りましたため、儉約のお觸れを蔑に致すと仰せられて、上樣より嚴しいお咎めがあつたと申すことで御坐りまする」

「ほほ——。して榊原は何んな服裝を致したのぢや？」

「詳しい事は分りませぬが、なんでも袢は萌黄色の琥珀に、白糸で車輪の縫紋をしたものとか申しまする。それから大小は白塗りだつたげに御坐ります。何に致せ御美男の榊原侯のこと故一際眼立ちまして、丁度雛を見るやうであつたなどと評判致して居りまする」

「はゝゝゝ。それではあの勤儉殿が御立腹なさる筈ぢ

や」
　と宗春は聲を立てゝ笑つた。すると金吾は少し膝を進めて
「尚それに就いて様々な噂が御坐りまするが、全體榊原侯は御養子とのことで――」
「さうぢや、彼れは確か分家の伊織とか申す旗本の悴であつたやうに覺えて居る」
「左樣だげに御坐りまする。處が其の頃は大層な御道樂者で、一時は勘當同様の有様であつたと申します位。何んでも黒縮緬に源氏車を染めた衣裝などを召されて、よく廓へお通ひなされたものださうに御坐りまする」
「ほゝ――。それは又面白い男ぢやな」
　宗春は愉快さうな顏をして云つた。彼れは、問題の榊原政岑とは單に殿中で顏を合せる以外に近づきがないから、今度の政岑の振舞ひが故意か夫れとも不注意の結果か判斷が付かないが、何れにもせよ近比痛快千萬な咄であると思つた。將軍に楯を突き得る人間は恐らく得られない。せめて將軍の忌諱に觸れたといふだけでも、何となく頼もしい者のやうに彼れには思はれる。
　全體、何が滑稽だといつて吉宗の所謂勤儉簡直ぐらゐ莫迦々々しいものはあるまい――。今迄にも、綸子の衣服を着たとか熨斗綃の帷子を用ゐたとかいふ位の事で咎められた大名さへある。あれも儉約是れも儉約と、儉約さへすれば夫れで國が治まると思つてゐるから可笑しい。そして食膳に野菜ばかり付けさせたり、態と木綿着物を着て見せたりして、下々は須く是れに習へといふ。鷹狩りと云へば、木綿のもゝ引に草鞋ばきで出掛けて行く「あれでは勤儉簡直を通り越して吝嗇粗野といふものだ。のみならず、征夷大將軍が野菜ばかり食べて木綿を着る日になれば、町人百姓に至つては何を食つて生きてゐるか？何を着て歩けば身分相應だといふのか？吉宗くらゐ分度の辨へのつかぬ人間もないものだ。――
　分度を知らぬと云へば、一切萬端其の流儀で、政治まで同じ筆法で行はふとするのだから堪らない。手一

い例が、あの目安箱である。下民の訴へを聽くのも善いが、夫れなら夫れで然るべき役人に扱はせるが宜い。それを自身で箱の鍵を持つてゐなければ氣が濟まないなどといふ事は、征夷大將軍たる者の態度ではない。のみならず幕府有司の不信を天下に廣告するやうなものだ。聞けば碌な訴狀はなく、讒言めいた事ばかりが多いといふ咄だが、吉宗の遣り方が遣り方故自然さうあるべき筈である。まだそれでも足りないと見えて、近頃庭番とか稱する隱密を市中に放つてゐるといふ噂だが、コセコセした吉宗の遣りさうな爲事である。

あの吉宗を、世間の盲目(めくら)共は稀代の明君であるかのやうに買ひ冠つてゐるから莫迦げてゐる。夫れといふのも、吉宗の人氣取り政略に瞞著されて了ふからだ。

「我らは將軍宣下を蒙るとも諸事は御名代の心である」

吉宗といふ人間は、よくから云つた道德家めいた、其の實不徹底極まることを云つて人氣を取る事に妙を得てゐる。淺薄な群衆は手もなく感激して、實に當代の上樣は勤直で寛厚でそして謙遜家で入らせられるなどと云つて持て囃す。處が事實は吉宗くらゐ陰險で偏狹でそして驕慢な人間はないのだ――。第一、吉宗が將軍になつた事が已に許し難い僭上の振舞ひではないか。三家とは云へ、門地から云へば無論我が尾州家が先に立つべきで、若し年長といふ點から云へば水戶殿を推すのが順當であつた。然るに狡猾な吉宗は、宿老共と合體して、文照院殿御遺命などと稱してマンマと兩家を出し拔いて仕舞つたのだ――。彼れが何んで寛厚な人間であるものか。早い咄が、新井白石の侍讀顧問を罷めて其代りに毒にも藥にもならぬ林信篤輩の建言を聽いて喜んでゐたり、間部越前を初め前代の寵臣を悉く追ひ斥けて紀州から連れて來た家來ばかり登用するのを見ても、彼れが如何に偏狹な人間であるかといふことが判る。

然し、幸運と云へばあれ位幸運な男はあるまい。彼れがまだ松平主稅頭と云つて、僅かに三家庶流の大名として大廣間に席を置いた時代は何うであつた?三萬

石の宛がひ扶持を貰つて有難がつてゐた人間ではないか。姪が佐竹修理太夫の處へ輿入れすると云つては、甥の後乘までした人間ではないか。――其の吉宗が、今では將軍に成り濟して、自分逹とは神と人間程の懸隔があるやうな顔をして居るのだ。――

二

宗春は依然として脇息に凭れたまゝ、小窓から外を眺めてゐた。陽は一倍强く照つて來たやうで、あたりに飛んでゐる雀の羽が白く光つて見える。彼れは考へるともなく、先刻金吾が話した榊原政岑のことを頭に浮べてゐた。

「さうだ。自分も廓へ行つて見よう」

彼れは突然かう思ひついた。噺にばかり聞いてゐる廓といふ世界が想像された。華やかな淫蕩な歡樂が、其處には限りもなくありさうに思はれた。彼には急に明るい浮き／＼した氣分を感じて來た。

「右馬之丞、右馬之丞は居らぬか」と、暫らくしてから宗春は次の間の方を向いて呼んだ。

「お召しに御坐りまするか」

這入つて來たのは、三十恰好の、のつぺりした顔立だが、何處か卑しい感じのする侍である。

「おゝ、もそつと近う參れ」

と、宗春は右馬之丞が膝で躙り寄つて來るのを待つて

「右馬、予は今宵廓へ參るに依つて、其方に案内を申し付けるぞ。宜いか」

「……」右馬之丞は吃驚して頭を疊へ擦りつけた。

「其方は定めて廓などには明るいであらう。出來るだけ華美に、萬端手落ちなき樣用意致せ」

「はゝッ」

右馬之丞は恐る／＼頭を擡げながら、狡猾さうな眼つきで宗春の顔いろを窺つたが、意外千萬な君命が決して冗談でないことが判ると、彼れは不安と欣びがごつちやになつたやうな妙な氣がした。彼れは元觀世流の能役者であつたが、宗春の氣に適つて侍に取り立てられた男である。其の當時は士仕か能に凝つて居たの

で彼れも多少の御用は勤めたが、近來頃とそれもお忘れになつて仕舞つたため、他に何一つ取柄のない彼れは至極手持無沙汰な恰好で居る折だけに、降つて涌いたやうなこんな適り役を仰せ付かつたといふことは左に右く有り難くて堪らない。それに、事柄が事柄だけに聊か心配な氣はするが、上手に立ち廻れば隨分うまい役廻りだといふことを何より先に考へた。

其の日も餘程傾いた頃、宗春は五六名の近侍を連れて屋敷を出た。お供の者は、主君の駕の脇に隨いて威勢よく歩いて行つた。

一行が兩國へ着いたのは、靜かな黄昏が街を包み始める頃であつた。宗春は其處で駕から下りて、待つて居る屋根船へ乘つた。

宗春は物珍らしさうに船の中から邊の景色を眺めた。土手の上の船宿の軒燈にはもう殘らず灯が入つて居た。堀割には船が澤山舫つてゐる。向う鉢卷をした船頭が大聲に何か呶鳴りながら、巧に棹を使つて船を操つて行く。とある棧橋では、町人風の男が媚めかしい風俗をした女と戯れながら船へ乘らうとしてゐる。軈て、廣々した大川の流れが眼の前に展がつて來た。水も空も一樣にぼかされた藍色の中に、兩岸の灯が吸ひ込まれたやうに滲んでゐる。墨で畫いたやうな橋の下からは、絶え間もなく船が出たり隱れたりしてゐた。

三

護持院ヶ原の榊原家では或日意外な賓客を迎へた。客は尾張中納言であつた。取り敢えず客殿へ案内をした上、主の政岑が應對に出た。白綸子の着物に蜀江錦の羽織を着て、宗春は二間の床を背にして莞爾々々笑つて政岑の顔を見た。其の蔭に、前髪立の小姓が太刀を持つて座つてゐる。

「今日は所用では御座らぬ。餘り徒然であつた故、其所許の面白い噺を聞かうと存じて突然雜作になつたのぢや」と宗春は禮儀が濟むと打ち解けた樣子で云つた。

「夫れは／＼異に冥加に餘りまする事、御覽の通り、

手前屋敷は何の風情も御座りませぬが、何卒御緩りとお遊びの程をお願ひ仕りまする」

政岑はかう云つて、直ぐ樣酒肴を運ばせた。花のやうな粧ひをした小姓がゾロ／＼夫れへ現はれて、主客の間へ侍つて酌をしたりなどした。政岑は中納言の來邸を不思議に感じながらも、さり氣なく酒の相手をして何といふこともない談話に時を移してゐた。すると宗春は突然思ひ出したやうに盃を下へ置いて

「實は一寸耳に致したが、何時ぞやお鷹狩りの時、何か其所許が華やかな服裝をなされたとかで、上樣が御不興であつたとか申す事ぢやが、それは眞の事で御座るかな？」と、凝と政岑の顏を見ながら云つた。

政岑は思はず顏を紅くした。

「誠に面目次第も御座りませぬ。然し、あれはかういふ譯で御座ります。三代樣のお鷹狩りの時、矢張り當家の先祖が大手の番を仕りましたが、實は其の節の記錄に依りまして――」

「いや御尤で御座る。身は其の咄を承つて其所許に對しお氣の毒に存じて居つた。全體御門を固める大名が華やかに致すは、詰り將軍家の御威光を添ゆる爲と申すもの。然るに夫れをお咎めなさるとは甚だ其の意を得ぬ。自體當上樣の御儉約なるものからして――」

と、宗春は俄に息込んで將軍の攻撃をし始めた。政岑が呆氣に取られてゐるのも構はず

「元來當上樣は征夷大將軍の器では御座らぬで、知行ならば十萬石、役柄で申さば精々老中が頂上の人物ぢや」仕舞ひにはこんなこと迄云つて吉宗を罵倒した。

尾州家が將軍に不平を抱いて、登城もせずに日夜淫酒に耽つてゐるといふやうな噂が豫々政岑の耳にも這入つてゐた。彼れは、今日宗春の遣つて來た理由が判ると同時に、何となく宗春に同情し度い氣持になつた。それに彼れ自身も、鷹狩りの一件に就いては內心不滿で面白くない日を送つてゐた折だけに、一層宗春の心に共鳴を感ずるのであつた。二人は急に打ち解けた心持になつて來た。

「式部太輔。其所許は以前大層廓遊びを致されたさう

ぢやな」と、宗春は盃を唇にあてながら眼で笑つて云つた。政岑は面食つたやうに眼をパチ〳〵して
「是れは思ひも寄らぬ事。毛頭左様な……」
「否々お隱しあるな。廓は面白い處と聞き申した故、實は身も先頃參つて見た。」
「ほゝ――、お館様が廓へ……。して廓は何れへお越しで？」と政岑は浮つかり吊り込まれる。
「されば、扇屋へ參つて、薄雲といふ太夫を買ひ申した」
「夫れは嘸かし、御愉快だつたで御座りませうな」
「處が、一向面白うなかつた」
かう云つて宗春は大眞面目で、廓へ云つた時の事を話し始めた。あの日、宗春の一行は最初駿河屋といふ仲ノ町の茶屋へ上つた。其所では其の夜他の客を一切斷つて、狹い家中に金屛風を立て廻し、二階の座敷には緞子の布團を幾枚も重ねた座席を晝のうちから設けて待つて居た。宗春は其所で様々な人間に會つた。幇間といふ者も澤山來て、種々の藝盡しを行つた。耀くばかりに粧ひを凝らした太夫が大勢の末社を隨へて乘り込んで來た。それから宗春は人々に取り卷かれて扇屋へ行つた。

其の夜も可成り更けてから、宗春は疲れた軀を駕に搖られて屋敷へ歸つたのであつたが、期待して行つた廓といふ處に對しては彼れは失望して仕舞つた。山谷堀迄の船中の變化に富んだ隅田川の夕暮れの眺め、大門口から瞥見した夜櫻の廓、夫れ等から受けた感動は、軈て次第〳〵に消されて行つたのであつた。茶屋といふものも無風流に思はれ、幇間の仕草も態とらしくて面白くなかつたが、第一薄雲といふ太夫が彼れにはつまらなかつた。右馬之頭の言葉に依ると當時廓隨一の全盛を歌はれてゐるといふだけあつて、流石に姿形は優れた女ではあつたが、夫れは單に人形を見るやうな美しさにとゞまつて、彼れが心に描いてゐた遊女といふものゝ、放縦な淫蕩な血の流れてゐるやうなところは微塵もない。あれでは屋敷の女共と少しも變つた事がない。「面白うなかつた」と云ふと、右馬之頭め

直ぐ心得顔をして「それは初會ゆゑで御座ります。二度三度と馴染が重なりますると、其處で初めて眞の味が出て參りまするもので」と云つて頻りに勸めるから、其の後も二三回通つて見たが矢張り一向面白くない。——

「はゝゝゝは」と、政岑は宗春の話しを聞いてゐるうちに到頭堪らなくなつて笑ひ出して仕舞つた。

「夫れは無かし面白くなかつたで御座りませう。それでは、態々愉快を追ひ散らしにおいでなされたやうなもの……」

かう云つて政岑は又もや腹を抱えて笑つた。

「夫れは又何ういふ譯で御坐る？」

「されば、あなた樣のやうに中納言卿のお振れ込みでお越しなされましては、先方が御威光に畏れて唯々失禮のなきやうとばかり心がけまする故、到底面白い遊びなど出來よう道理は御坐りませぬ。のみならず、總じて廓遊びと申しまするものは——」と云ひ掛けて、政岑はふと氣が付いて口を噤んだ。

「遠慮なく話して下され。實は其の咄が聞き度うて參つたのぢや」

と宗春は膝を乘り出す。政岑はニヤ／＼笑ひながら、

「遊びは何ちらかと申すと忍んで通ふ程にして、餘り全盛に致しませぬ方が物の裏表が見えて面白いもので御坐ります。また一口に廓遊びと申しましても幾通りもありまする。先づ中店小格子となりますと調度をはじめ萬端粗末で、優雅な趣が無くなりますが代り又ガラリ變つた面白味のありまするもので——」

と話してゐるうちに政岑は次第に興に乘つて來て、頻りに小店遊びの面白味を說き始めた。張見世、素見し、吸付け煙草、廻し部屋、政岑の口から出るかうした言葉が、世にも不思議な光景を宗春に想像させるのであつた。

「式部太輔、身は是非共其の小格子とやらへ參つて見度い。其所許案内をしては下さらぬか」

政岑は飛んでもない事だといふ顔をして、

「是れはしたり。ほんの座興にお話し申した迄の事、大名の參るやうな處では御坐りませぬ」

「夫れ故尚更參つて見度い。唯一度だけで宜敷いから御案内を頼む。尾州一生のお頼みぢや」

かう云つて宗春は、眞底一生懸命のやうに頼むのであつた。

四

二人はブラ／＼土手を歩いて行つた。人通りは可成り多い。侍、町人、印袢纏を着た職人、ぶら提燈をさげた茶屋女――いろんな人間が通る。其の間を四ッ手駕籠が威勢の好い掛聲をあとに殘して飛んで行く。葦簾張りの茶店には、赤前垂れの小娘が行儀よく座つて往來を眺めてゐる。薄暗い田圃の方から生温い風が流れて來る。

二人は、政岑が以前懇意にした仲の、山本久庵といふ藏前に住む幇間醫者に情を明して、其所ですつかり變裝を調へて來たのである。黑羽二重の紋付の着流しに稍々古びた白博多の帶、大小は呂色塗の至つて野暮な拵へ、雪駄をチャラ／＼鳴らして行く容子は、番町邊の小旗本かさもなくば小藩の馬廻り役位が先づ動かぬところである。政岑は歩きながらいろ／＼說明して宗春に聞かせる。是れが衣紋坂とか見返り柳とか、五十間の道路が三曲りに曲つてゐるのは廓を外に現はさぬためだとか、大門の脇の高い處に上つてギョロ／＼眼を光らせてゐる人間は曲者を見張りに出てゐる、岡ッ引といふ者である――と、なか／＼精細なものである。

仲ノ町には菖蒲が植えてあつた。紅い絹で張つた行燈の灯がまだ飛び／＼にしか花を持たぬ眞青い葉を照してゐる。兩側の引手茶屋はすつかり表を明け放して塵一つ止めず氣持よく片着いた店先に女中が二三人づつ座つて客を待つてゐる。陽氣な笛太鼓で騷いでゐる二階もある。宗春は急にキョロ／＼し始めた。横の通りへ曲ると其處は門並み遊女屋である。千本格子の表掛り、大きな天水桶の上へ杉なりに手桶を積み上げ、定紋を拔いた長暖簾の奥深く寂り閑と靜まり返つた家

もあれば、百本燈心の大行燈が煌々と照り輝く店に紅い着物を着た女がズラリと並んでゐる家もある。女遊の客を呼ぶ聲、是れ聞けがしに流して行く素見しの歌　格子に摑まつて喃々と語らつてゐる男女、遠くへ離れて品評めに餘念もない客、それを面白さうに二階の手すりに凭れながら見下してゐる男や女もある。

と宗春が氣が付くと、一緒に歩いてゐた政岑の姿が見えない。キヨロ〳〵して邊りを見廻すと、政岑は向うの家の格子先に莞爾々々笑ひながら立つてゐるのであつた。側で女が頻りに手招ぎをしてゐる。宗春は何心なく側へ寄つて行つた。すると後に座つてゐた女がつと起つて來て、いきなり長煙管の雁首を袖口へ引つ掛けた。

「これ、何を致す！」

「ほヽヽほ。そんなに怖い顏をなさらずと宜いでは御坐んせんか。ねえお二人さん、おたんなはいよ」

女は宗春の袖を捉り捉へたまヽ聲丈けは優しく云つて、朱羅宇の長煙管に吸ひ付けると「お吸ひなんし」と格子の間から差し出した。政岑はと見ると、知らぬ顏で煙草をスパ〳〵ふかしながら何か女と押問答をしてゐる。

到頭二人は此所で遊ぶことに決め、「入らつしやアーい」と吃驚するやうな聲を掛けられながら段梯子を上つて行くと、直ぐに表二階の引付け座敷へ通された。

拙い七福神の繪を大きく畫いた唐紙で仕切つた十疊位の座敷、一間の床の間にはケバケバしい花鳥の幅が反つくり返つてゐるばかりで置物も何もない。座敷の眞中に炭の立ち消えになつた眞鍮の火鉢と樂書をした周行燈が置いてあつて、其の周りに先客が敷き散らしたまヽの座布團が亂雑に並んでゐる。

「えー、お馴染は何方樣で？」と、脂に額を光らせた男が、握り拳をちよいと畳へ突いて二人の顏を等分に見ながら訊いた。

「二人共馴染はない、格子で世話をやいた花魁を上げて見れ」と政岑が答へる。

「へい、畏りました。少々お待ちドさいまし」

から云つて若い者は出て行つたが、軈て梯子段の邊りから「花里さアん。千代菊さアん。御初會イ――」と呶鳴る聲が聞える。間もなく「バターン／＼」と家中に草履の音を轟かせながら最前の女が二人這入つて來て、横向きに並んで突膝をしたまゝぐいと反り身になつて見せたかと思ふと、其のまゝずいと出て行つてしまふ。「お待遠樣、何卒こちらへ」と今度は赤ら顏の中婆が這つて來て、廊下を引つ張り廻した揚句二人を連れ込んだ處は四疊半の本部屋。銅の落しがペカ／＼に曲つた長火鉢の前へ差し向ひに座らせられると、直ぐに三ツ物を載せた朱塗りの大臺が通る。續いて女が這入つて來て、おの／＼の客の脇へ、膝でグイと押しのけるやうにピッタリ寄り添つて座る。下等な髪油、白粉、麝香、それに酒の燗を付ける匂ひが混つて、一種異樣な、濃厚な空氣が忽ち室内を占領して仕舞つた。

宗春は初めて女の顏を見ることが出來た。自分の相方は餘り側過ぎるので却つて見にくいが、ぼちやぼちや肥つた縮れ髪の、眞白く塗つた耳の付根に大きな黒子の眼立つ二十二三といふ年比。夫れに比べると政岑の女は餘程年増で、細面の生え際の薄い、眼のパッチリし過ぎた、何處ともなく全體に險のある顏立ち。何ちらも眞紅な長襦袢の上へ、染め返し物のぼやけた縮緬に黒襦子の大襟を掛けた襠を着てゐる。宗春は尚不思議さうに部屋の内を見廻した。直ぐ頭の上に舞鶴の紋を大きく拔いた淺葱の布を掛けたのは多分押入れであらう。其の下に古物の簞笥と並んで鼠入らず茶簞笥などがあつて、午の日の縁日で仕入れた瀬戸物類が處狹きばかりに詰つてゐる。深さ一尺ばかりの床の間には蘭とも水仙とも見別けの付かぬ半切物が申譯ばかりにぶら下つてゐるかと思ふと、其の下には三味線鏡臺手箱などゝ雜居して大きなでく人形が行儀惡く足を投げ出してゐる。向うの壁際には脱ぎつ放しの着物が紅い裏を見せて衣紋竹にぶら下り、其の脇に屏風が折つて立て掛けてある。

新造が銅壺から銚子を拔き出して二人に酌をしなが

ら、一つ二つ取り留めもないことを云つて繼いでゐる。

「ほんにお二人さんともお靜かで御座んすね。何處の御家中ざます？」と政岑の女が云ふ。

「中てゝ見やれ」と政岑は笑つてゐる。

「さうざますね」と女は一寸考へるやうな眼つきをして「金澤？彦根？それとも桑名？えゝじれつたい、置きんせう。それよりお二人さん、ちとお干しなんし」

政岑はぐいと呑み干して盃を女に差した。宗春も口へ持つて行つたが、酒がきづくて我慢にも飮めない。

「御酒は餘り上らないやうで御座んすね。何か召し上り物でも入れませうか」と新造が横合から云ふ。

「夫れが宜うざんせう。ねえお二人さん」と女も口を添へて、是れだけは冗談でないといふ險しい眼つきをして見せる。

「何なりそち達の好きな物を取つたが宜い」

政岑がかう云ふと、女達は顏を寄せてほしや〳〵相談してゐたが軈て新造が合點々々しながら起つて出て行つた。女達は急に狎れ狎れしい態度を示し始めた。宗春の女は客の盃を横取りして

「もしへ、わたしや今晩酔ひんすよ。嬉しいんざますもの」

と甘つたるい調子で、宗春の膝へ手を突いてしなだれ掛りながら云ふ。政岑の女は、長い袖を振り上げて打つ眞似をした。

「千代菊さん、たんと見せつけなんし」

「おや好かない花里さんだよ」と云つたばかりで別段離れようとはしない。

廊下を隔てたばかりの眞向ひの部屋へ、四五人連れの客がドカ〳〵這入つて來た樣子である。忽ち割れ返るやうな笑聲、二階から女を呼ぶ聲、バタ〳〵廊下を驅けて來る草履の音、あたりは急に騷々しくなつて來た。宗春は、ぐら〳〵して來た頭を押へながら後のれんじ窓の側へ行つて障子を細目に明けて見た。隣りの家が、直ぐ眼の前に迫つてゐる。眞暗い廂合から心地よい夜風が流れ込んで來る。と見ると、向うの家屋の

障子が僅かばかり明いてゐる處から、薄暗い行燈に照らされた中の模樣が朧に見透される。

「何を見て入らつしやるの?」

千代菊はふら〳〵と起つて來た。

「おや厭な人、そんなものを見てさ。罪さます」

から云つてピッシャリ障子を閉めると、いきなり宗春の首つ玉へしがみついて元の處へ引き据ゑた。酒が弱いのか、夫れともだらしがないのか、襠は肱の處まですつこけてゐる。

「ほんに主は綺麗だよ。嘸方々で可愛がられなんすだらうねえ」

「いや……左樣なことは知らぬ」

宗春は、殆んど持て餘した顏をしてゐる。向うの二人は面白さうに笑つて見てゐる。

「隱さずとみんな白狀してお仕舞ひなんし。云はねば擽りんすよ」

宗春は「許せ、許せ」と云ひながら轉げ廻つた。仕舞ひに女は其の上へのし掛つてギユウ〳〵押へつけた。

五

それから後、二人は毎晩一緒に廓へ這入つて來た。唯一度だけ案内をしようと云つた政岑が、何時になつても廓通ひを止めようとはしなかつた。廓といふ處が、宗春に全く新しい發見の歡びを與へるものであれば、政岑に取つては譬へ難ない復活の歡びを齎すものであつた。昔に返つた、自由な、恣な世界に己れの姿を見いだす現在の心持は、嘗て千石の旗本から一足飛びに十五萬石の大名に出世した時の嬉しさよりも、遙かに眞實な歡びを包んでゐるのであつた。

二人は、或る時は尾羽打ち枯した浪人者に姿を窶した。又或る時はしがない小商人に、或ひは印袢天に頰冠りといふいで立ちで廓へ這入つて來ることもあつた。かうして己れの姿を變へる毎に、全然異つた趣を映して來る眼前の世界を、宗春は常に新しい驚きを以て迎へるのであつた。

七夕祭りと燈籠に夏は過ぎた。秋は、仁輪賀が了る

と、廓に菊が植ゑられた。

或夜、二人は菊を見ながら仲ノ町をぶらぶら歩いてゐた。丁度見物が出盛る刻限であつた。露を含んだ花の香が、明るい巷の隅々迄流れてゐた。

突然、ドシンと政岑にぶつかつたものがある。彼れは危く倒れる處であつたのを、垣根の竹に摑まつて漸う踏み止どまつた。

「こりややい。何の意趣意恨あつて身共に突き當つた」

木綿の紋付に荒い茶縞の羽織、小倉の袴を履いた侍が威丈高になつてから呶鳴つた。

「其方より突き當りながら何を申す。無禮者？」と、政岑は思はず嚇として云ひ返す。

「己れ、痩浪人の分際として不埒なことを吐す奴。最早勘辨罷り成らん」

かう云つて侍は刀の柄に手を掛けて詰め寄つた。「何だ／＼」と云ひながらドカ／＼遣つて來たのは此の侍の連れであらう。同じ様な若侍ばかり五六人、何れも酒に醉つてゐる。

「何、浪人者が無禮を致した？それは勘辨相ならん。手ひどく懲らしてお遣りなされ」

面白半分口々に罵りながら、二人の周りをぐるりと取り卷いて仕舞つた。彌次馬がワイ／＼集まつて來る。短氣な宗春が堪り兼、寄らば斬らうと身構へた時。

「まあ／＼皆さんお待ちなさんし、何ういふ情の喧嘩か知りいせんが、此處は妾に委せて與んなまし」

かう云ふ聲が侍達の後から聞えた。と、眼の醒めるやうな道中姿の太夫が、大勢の中へ割つて這入つて來た。最寄りの茶屋から出て來たと見え、後から禿がバラ／＼驅け着けて來る。

「やい。女共の出る場所ではないわい。引つ込んで居れ」

と、一人が云ふ。

「ほゝゝほ、何を云はしやんす。廓は女の世界でありんす。夫れとも妾の扱ひを不承知だと云ひなますのかえ」

「知れたことだ。愚圖〱致し居ると、己れから先に辛い目に會はして呉れるぞ」

「これは面白い。妾を何うしやうと云ひなます。三浦屋の高尾でありんす。指一本でも差す時は、廓五丁が闇になるぞえ」

女は凜とした聲で云ひ放つた。强い誇りがその眼に耀いた。其の勢ひに駭いてか、軈て大勢の侍は捨科白を殘して立ち去つて仕舞つた。

「お二人さん、氣を付けておいでなんし」

女は嫣然笑つてから云ふと、若い者の肩に手を掛けて徐かに向うへ歩き出した。冴えた金棒の音がりんりんと町中に鳴り響いた。

「お舘樣、私は小格子遊びが厭になりました」

と、恍惚立つてゐた政岑は、軈て溜息をつきながら云つた。

政岑が高尾の許へ通ひ始めたのはそれからのことであつた。政岑は宗春に向つても頻りに大籬遊びを勸め始めたが、宗春はきかなかつた。そして、政岑の打つて變つた豪奢な遊びの樣を見る毎に、宗春は心中で笑つてゐた。

「彼れは根が千石の旗本だけに、矢張り大名遊びが面白いのだらう」と思つた。彼れは相變らず落ぶれ果てた姿をして、小格子や局店を漁り歩くのであつた。

寒い晩であつた。素見しの人影も疎になつた廓に、夜廻りの金棒の音が痛いやうに響く、もう何處の家でも店に居る女は尠なかつた。丁字の溜つた薄暗い行燈の灯を格子から吹き込む風がゆら〱動かして、なが店に疲れた女達の顏を物哀しく照し出してゐる。

宗春は河岸通りを歩いてゐた。

「ちよいと――」

或る店の前を通ると、一人の女が眼早く彼れの姿を認めて起つて來た。

「こんなに遲く、何處へ浮氣をしたんざます」と、格子へ顏を當てゝ、一寸睨める。小春といふ、もう二三回の馴染である。

「交際ひで遊んだ戻りがけだ」と、宗春は懷手をした

まゝ笑つてゐる。

「何だか知れたものぢやありいせんね。でも、寄るだけ嬉しいよ。」

「處が今夜は都合が悪いのだ」

こんな言葉が識らず〳〵宗春の口から出た。

「さう――？」女は八の字を作つて暫らく相手の顔を見詰めてゐたが「仕方がないよう……。まあ今夜は妾が何とか都合しいすから、とにかくお上りなんし」とじれつたさうに云ふ。

二階へ上つて行くと、取つ付きの遣手部屋から「らつしやアい」と寝ぼけたやうな聲を掛ける。部屋々々の口には厚い草履が脱ぎ捨てゝある。食べ荒しの臺や皿小鉢などが邊りに散らばつてゐる。廊下の行止りの、裏梯子の横手が小春の部屋である。

廊下をバタ〳〵駈けながら小春が這入つて來る。其のあとから下新が大きな十能をぶら提げて來て、火鉢へ火を入れて出て行く。小春はガタピシする箪笥から荒い紬縞のどてらを出して男のうしろからフハリと掛けて遣つてから、差し對ひにべつたり座り、火鉢の上で一寸手を握りながら嫣然笑ふ、戸棚から昨夜の餘り物らしい酒を出して燗を付け、昆布巻だの莢豆の茹でたのなどを小さい膳の上に並べ始める。

「今夜は是れで我慢しなんし」と云つて、小春は袖の端しを口に銜へて酌をした。

小春はぢきに眼の縁を紅くした。島田の根が緩んで髪の毛がほつれて來るしんしんと銅壺の沸る音ばかり耳につく。

「ほんに、主は罪ざますよ」と小春は艶な眼つきをして云つた。

「何が罪ぢや？」

「白々しい、こんなに人を迷はせてさ。何うして呉れるんざます」と手を伸して抓らうとする。

「時に小春、何時か聞かうと思つて居たが、そちの生國は何處ぢや」と、宗春は何心なく訊いて見た。

「來や、東海道の三島でありんす」

「ほう――、三島か。

かう云つて宗春は空を見るやうな眼をした。參勤交代の都度泊る三島の宿の有樣が心に浮んで來た。其處からは富士と箱根が頭の上に見える。長い宿の中程には、陰氣な格子造りの遊女屋ばかり並んでゐる――。

「伊豆屋といふ家を存じて居るか」

「伊豆屋さんは古い本陣でありんすもの。妾の家も、矢張り旅籠で御座んした。」

「左樣か。何といふ家ぢやつたな？」

「杉屋といふので御座んしたが、それが潰れてかうしてゐる始末。したがまだ／＼妾や悲しい身の上、まあ聞いて呉んなまし」

かう云つて女は身の上ばなしをし始めた。小春の生みの親は三島の宿の形染職人で、母も同じ土地の者であつた。夫婦の間に小春が生れ何不自由なく暮してゐるうち、何ういふ魔が差したのか母は渡り者の職人と不義をして、夫と娘を置き去りに駈け落ちをして仕舞つた。丁度其の時父は脚の病に罹つてゐたが、それでも乳呑兒の小春を脊に負ぶひ、東へ行つたといふ母の跡を追ふのであつた。然し夫れは無理な爲事であつた。箱根山の中腹迄は喘ぎ／＼登つて行つが、到頭病が募つて來て路端に倒れたまゝ父は死んで仕舞つた。何にも知らぬ小春は、其の脊中の上で泣いてゐたのであるといふ――。

小春は咄の半ばから、悲しい感情が込み上げて堪らぬやうに涙をホロ／＼膝の上へこぼした。

「それから杉屋へ引取られたので御坐んすが、またこんな身の上になりんすとは、妾や何たる因果なことで御坐せう……」

「その駆落ちした母のことを、そちは憎いと思ふであらうの？」

「いゝえ、惡いかゝさんとは思ひんしても、妾や矢張り戀しう御坐んす。したが何處に暮してゐるのやら、大方一生逢はずに終ふので御坐んせう」

かう云つて小春は哀しげな表情をした。宗春は、何とも云へない強い異質なものに觸れたやうに感じた。そして彼れの眼には、酔つぱらつて泣いてゐる女の姿

が譬へようなく美しく、いぢらしいものに見えて來た。彼れの胸には、嘗て經驗したことがない程の强い愛情が一杯になつてゐた。將軍吉宗のことも、自身が中納言であるといふことも、彼れは一切を忘れてゐた。世界は、小春と自分だけのもいであつた。

檢事生活の表面裏面

澤田撫松

一

近頃、九州に一大疑獄事件が起つた。事件の内容は、八幡製鐵所、福岡鑛務所、九州鐵道管理局に於ける官吏、殊に高級官吏が、所謂船成金、鐵成金の實業家から賄賂を取つたと言ふのである。この事件が勃發すると、平沼檢事總長は自ら九州に趣き、官紀振肅上極力檢擧すべしと部下の檢事に命令した。福岡地方裁判所檢事局に於ては、檢事正阿部義彰氏を中心とてし、大分、佐賀、廣島、山口、久留米、小倉、長崎、尾の道、唐津等の各地方裁判所檢事局に應援を求め、三十餘名の檢事は八方に活動した。こうした場合に、檢事が起つて檢擧に向ふ時は、そこに金力も地位も身分も勢力も悉く無價値となる。高等官も、貴族院議員も、百萬長者も、檢事の蹂躙に任して、家宅搜索を拒むことが出來なかつた。その中の多くは大抵收監されることになつた。この狀態を見た九州の住民は、事件に關係ある者もない者も皆戰慄した。九州の住民はかりでない、全國の官吏と言ふ官吏は、瀆職の大檢擧に驚かされて、檢事の威力を今更の樣に恐れた。人間の道德性が麻痺して居る今の世には、檢事が威力を示すと、

ことは、腐敗混濁の現代人に對する清涼劑である。德川三百年の治世は、儒教の力に依つて世道人心が維持されて居たが、維新以來、西洋文明の輸入と共に、舊道德に權威がなくなつて、而かも之に代つて人間を導くべき力强き新道德未だ起らず、僅に小學敎育の修身書に依つて、現代人を支配しやうして居るが、生存競爭の劇烈なる今日に於て、效力のないのは言ふまでもない。こう言ふ風に道德觀念の痲痺して居る現代人に對しては、法律の威力を以て社會道德を維持するより外に手段がない樣になつた。而かも法律は死物であるから、之を活用する檢事の手に依つて頽廢せる社會道德を維持せねばならぬことになつた。こうなると檢事は、現代の道德を維持する者と言はねばならぬことになる。檢事は果して頽廢せる社會道德の維持者であらうか、檢事の力より外に社會道德を維持するものがないのであらうか。これは大に硏究せねばならぬ問題であるが、この問題を解決するには、檢事とは果してどう言ふものであるか、現在の檢事はどう言ふ人達であるかと言ふことを硏究して置かずばなるまい。我輩、紙硯を携へて法廷に出入すること茲に十六年、この間に於ける見聞に基づいて、檢事生活の表面裏面を描き『檢事は果して頽廢せる社會道德の維持者であらうか』と言ふ大なる社會問題の硏究材料を供しやうと思ふ。

二

檢事は司法行政官であるから、純粹の司法官たる判事の樣に獨立したものでない。判事は全く獨立したもので、上役から命令を受けることはないが、檢事は上役から命令されると、それに從ふて活動するのである。地方裁判所の檢事は檢事正が指揮し、控訴院以下の檢事は檢事長が指揮するのである。又大審院以下の檢事に對しては檢事總長が指揮權を以て居るのである。扨て檢事となるにはどう言ふ資格が要るかと言ふに、司法省法學校の卒業生、帝國大學法科(特に法律科)卒業生、三年以上帝國大學法科敎授若しくは辯護士をして居た者は無試驗で檢事となることが出來る。その他は一定の試驗に及第した者でなければ檢事になることが

出來ないのである。現在の檢事は大抵帝大出身と試驗及第者であつて、大學教授や辯護士出身者は餘りない、司法省法學校出身者はあるが、これは至つて少數で、大審院や控訴院にちらほら殘つて居るだけである。そこで檢事の系統が二つに別れる、一は官學派で他は私學派である。今日でも官學派と私學派との軋轢はかなり烈しいから、將來は一層激烈になることであらうと思ふ。官學派は私學派を貶して『試驗を受けて檢事になつた私學派の人は、秩序的に學問をしたのでないから、普通學の素養に乏しいばかりでなく、法律家に最も必要なる外國語の力が充分でない、それゆへ私學派の人は樞要の地位に置く譯に行かぬ』と言ふて居るが、私學派の人は又『帝大出身者は國家の試驗を受けないで檢事になつたのであるから、其の學力に於ても充分の信用を置く事の出來ないばかりでなく、こう言ふ人は、親から學資を出して貰ふて、中學から高等學校を經て大學を卒業したと言ふだけで、世間と言ふものに對して充分の理解を持つて居ない、こう言ふ學生上りの青年が、僅一年半の試補をやつたゞけで、直ぐ生きた人間を料理する檢事の職に就くと言ふことは頗る危險である』と官學派を謗つて居る。双方の言分には一應の理窟はあるが、徹底した議論とは言はれない。成程、從來の私學出身者には秩序的に學問をしなかつた者が多い、中學も碌々卒業しないで試驗に及第した者も無論あつた。この點から觀察すると、官學派の主張する樣に、私學出身者は普通學の素養に乏しく、外國語の力が不充分であることは事實であらう。然しこう言ふ境遇の人が、最も嚴肅な國家試驗に及第して檢事の資格を得ると言ふことは容易なことでない、毎年政府が行ふ國家試驗に應ずる者は千人を下らないが、及第する者は百人以内である、學校を優等で卒業した者でも、一度や二度で此關門を通過する人は稀である。大抵の人は失敗に失敗を重ね、四年も五年もかゝつて漸つと及第するのである。この間の苦勞と言ふものは、官學派の人達の想像も出來ないとである。學問と言ふものは、必ずしも學校と書物とにのみ依つて得ら

ものでない。こうした生きた實世界に於て、辛酸を嘗め盡した私學出身者には中學や高等學校で學むだ普通學や外國語以上の尊いものがある。殊に生きた人間の生命財産を左右する檢事の職責を盡す上に於て、最も必要なる實世界に對する理解を持つて居ると言ふことは、司法官にとつてどれだけの强味があるか知れない。現に、明治の大岡とまで言はれた今村恭太郎君にしても、東京明判官として地方裁判所を風靡して居た名川侃市君にしても、東京控訴院に異彩を放つて居る水口吉藏君や岡田庄作君にしても孰れも私學出身者である。私學出身者をこう言ふ風に研究して見ると、官學出身者に對して少しも遜色のないのみならず、或點に於ては勝れて居ると言ふ結論に逢著する。殊に今日の私學は、中學を出て高等豫科に入り、專門學も官學と同一年限の修業をするのであるから、普通學や外國語の力に於て官學に引けを取らない筈だ。こうして官學派が私學派を排斥する理由がなくなつたにも係らず、相變らず官學派が私學派を排斥して居るのは理由なき感情に囚はれて居るのである。而かもこの私學排斥が中央法衙に於て最も烈しいのは、私學派の憤慨して已まないところである。飜て官學派の側を見ると、秩序ある學問をしたと言ふことゝ、外國語の素養のあることは爭ひのない事實で、これは官學派にとつて唯一の武器である。それに司法部樞要の地位に在る人々は殆ど官學出身者であるから、官學派の人は私學派の人よりも出世の早いことも亦事實である。こう言ふ風であるから、將來の司法部は全部官學派で占領することになるかも知れぬ。

三

檢事は毎日何をして居るのか、檢事の仕事はどう言ふことをするのか、檢事生活の表面はどう言ふものかと言ふに、これを說明するには、試補生活から言はねばならぬ。帝國大學法科の出身者は無試驗で司法官試補になれるが、私學出身者は判檢事登用試驗に及第せねば司法官試補になることが來ない。試驗に及第して司法官試補になつた上でも、官學出身と私學出身とに

依つて待遇が違ふ。司法官試補の月給は二十五圓、三十圓、三十五圓、四十圓の四等に區別されて居るが、私學派の試補は二十五圓より支給されない、官學派の試補になると最初から三十五圓支給されて、點數のよい人になると四十圓支給される。ところが、官學出身者の點數のよい人は月給の高い實業界へ行くか、或は高等文官の試驗を受けて行政官になるかして、司法官を志望する者は點數の惡い、賣れ殘りが多いので、司法省の方でもこれでは堪らぬと言ふて、最近七十點以下の者は判檢事に採用しないと言ふ內規を作つて、なるべく點數のよい者を入れやうと腐心して居るが、點數のよい者は矢張りやつて來ない、採用點數七十點ぎりぎりの者ばかりが司法官を志望して來るのには弱つて居る。司法官試補に四十圓の月給を出す様になつたのも、なるべく點數のよい者を司法官に得たいが爲めに近頃こしらへた新制度である。試驗を受けて司法官試補になつた者は、二十五圓でも月給が貰へるのは未だ上の部で、月給の貰へない人の方が多い。尤も地方へ行くのなれば大抵は月給が貰へるが、東京に居ることになれば多くは月給がつかぬ、所謂無給試補で甘じて居なければならない。試補を有給にするか無給にするかを定める標準は及第の點數である。勝れて點數のよい者だけを有給として、點數の惡い者は無給にする。官學派の試補は大抵有給であるが、著しく點數の惡い者は無給になる。こうした試補生活を一年半勤めて、更に第二回試驗を受けるのである。第二回試驗に及第すると、初めて一人前の檢事となるのである。若しも第二回試驗で落第すると、試補生活を續けて、更に第二回試驗を受けねばならぬ。第二回試驗は幾回でも受けられる規定になつて居るが、二度も落第すればそれ切り辭職して辯護士になる人が多い。愈々本官の檢事となると、毎日檢事局へ出勤して、警視廳や警察署から廻つて來る書類を調べたり、嫌疑者を訊問したりして、起訴するものは起訴し、不起訴にするものは不起訴にする旨の意見書を附けて檢事正の手元へ差し出すと、檢事正がその意見書を見て起訴不起訴を決するの

である。その事件が起訴することに定まると、公判廷に出て公訴事實の陳述をして、事實の審問の終つた上、その事件に對する論告をするのである。この論告が檢事の職務中最も華かな仕事で、檢事として名聲を博すると否とは一に論告の巧拙に依るのである。河野廣中、櫻井熊太郎、小川平吉君等の騷擾罪の公判に於ける安住、杉本兩檢事の論告、野口男三郎に對する淸水(孝藏)檢事の論告、海軍事件の時の小原檢事の論告は論告中の最も異彩を放つたものであつた。論告は檢事として勇ましい仕事に相違ないが、死刑の論告をした時ほどいやな氣持はない相だ。我輩の學友に檢事をして居る者がある。その學友の細君がこう言ふ話をしたことがあつた。「夫が家へ歸つて來た時の態度で、死刑の論告をして來たことがちやんと分ります、家へ歸つて來た夫が、譯もなくブリ〳〵怒つて居ることがありますが、さう言ふ時はきつと死刑の論告をして來たのです、又いつにないニコ〳〵した顏で歸つて來る時がありますど、どうしたのかと聞きますと、今日は無罪の論告をして來たと言ふて、獨りで悦むで居りました」檢事も亦普通の人間である。死刑の論告をした時と、無罪の論告をした時と、心持の違ふのは當然である。それが檢事局や法廷に居る間は、職務の二字で緊張した氣分で居るのと、所謂檢事氣質とで、死刑の論告をしてもさまで心を動かさないが、家庭に歸つて妻子の顏を眺め、溫い人情に接して見ると、法の前には何物も認めない檢事でなく、血液の通ふて居る普通の人間となるのである。

四

家庭に於ては溫和な紳士でも、一たび檢事局に入ると、法の前には何者も認めざる、冷靜辛辣なる檢察官となるのが檢事の常態である。學者には學者氣質、商人には商人氣質がある樣に、檢事にも亦檢事氣質のあるのは免れないことである。醫者が、診察室へ入つて來る人間を、悉く病人として扱ふて居る如くに、檢事は檢事局へ呼出されて來る人間を、どれもこれも惡人として扱ふ傾きがある。眞實のことを言ふても嘘だと

言ふ、罪を犯した覺えのないことを辯じると、それは言分けだと聞く。落着いて居ると、横着だと言ふし、恐縮して居ると、罪を犯して居るから恐れ入つて居るのだと見る。總てがこう言ふ風に、檢事の前に立つ人間を、未だ調べをしない前から、惡い奴だと言ふ先入を主として訊問するので、その訊問に少しも温みがない。何でも彼でも罪に陷さねば置かないと言ふ劒幕で調べるのであるから、調べられる者にとつてはたまつたものでない。然しこれは强ち檢事ばかりが惡いのではない、檢事局でも裁判所でも、總て調書に重きを置く制度であるが爲めに、警視廳や警察署から廻つて來る書類を見て、如何にもその人間が惡事を働いた如くに書いてある聞取書に囚はれ、當人の言ふことを信用しない結果こう言ふことになるのである。現在の制度に依ると、警視廳や警察署で、事件として人を訊問すると、假令それが罪とならないことであつても、それをそのまゝ釋放する權能が警視廳にも警察署にも與へてない。それゆへ警視廳にしても、警察署にしても、一應取調べた事件はいやでも應でも之を檢事局へ送らねばならぬ、起訴不起訴の決定は總て檢事局の裁斷に俟たねばならぬのである。こう言ふ制度の下に聞取書が作られるのであるから、その聞取書を讀むと、どうしても罪になり相に書いてあるのは勢ひ已むを得ぬ次第である。檢事はこの聞取書を基礎として調べるのであるから、檢事局へ廻された者は隨分みぢめな目に逢はねばならぬのである。現在檢事局で扱ふて居る事件の起訴不起訴は、どう言ふ比例になつて居るかと言ふに、東京地方裁判所檢事局に於ける最近一年間に調べた事件の比例を聞いて見ると、百件に對して七十件は不起訴で、殘り三十件が起訴された割になつて居る、不起訴になつた七十件の內、三十五件は全く犯罪を構成せざるものとして不起訴になり、あとの三十五件は犯罪は構成して居るが、その罪頗る輕微なるを以て、微罪不檢擧として起訴しなかつたのである。起訴された事件は、公判に廻つてどう言ふ運命になつたかと言ふに、百件に對して五件の無罪があつたが、その外は悉

く有罪となつて居る。以前は百件に對して十件二十件の無罪があつたが、近來檢事局に於て調を綿密にやる樣になつたので、百に對する五位の無罪で濟む樣になつたのである。大阪地方裁判所の檢事局は、東京よりも尙一層成績がよい、昨年一年間に一審に於て無罪になつた事件は一件しかなかつた、その他は全部有罪になつて居る。檢事局としては、起訴した事件が無罪になるとを非常な恥辱として居るから、充分の確信がない以上は起訴しない方針で居るが、檢事としては、一件でも多く起訴して、自分の手柄にしたいと言ふのは人情である。折角骨折つて調べた事件が不起訴になると、釣りかけた魚に絲を切られた樣な氣がするのは、檢事氣質として無理ならぬことだ。殊に大事件の時ほどさう言ふ傾きがある樣だ、社會の耳目を衝動せしめたる一大疑獄事件の檢擧をする際には、獵師が獲物を漁る熱心と機敏とを以て活動する、そこに檢事氣質が遺憾なく發揮される。この鋭鋒に當つた者は、假令豫審免訴や無罪になるにしても、一時は未決監へほり込まれるし、社會的地位は覆へされてしまう。檢事の方では免訴か無罪になれば文句はあるまいと言ふかも知れぬが、我々天下の良民は、生命財產が大切なる如くに、名譽も亦大切である。この大切なる名譽を騎虎の勢で蹂躙されてはたまつたものでない。

五

大事件も隨分あつたが、こゝ二十年間に起つた事件の中で、明治三十一年の鐵管事件、同三十三年の教科書事件、同四十二年の日糖事件、、同四十三年の大逆事件、大正三年の海軍事件、大正四年の高松事件、それに今度の九州事件などが大事件中の大事件であらう。この大事件を檢擧した檢事の總指令官たる檢事總長は誰かと言ふに、鐵管事件は春木義彰君、教科書事件は野崎啓造君、日糖事件と大逆事件は現法相松室致君で、海軍事件以下は現檢事總長平沼騏一郎君である。鐵管事件に於て辛辣な檢擧をした法學博士古賀廉造君は、その後大審院檢事にまで陞進したが、贋札事件に連坐して檢事局へ廻され、後進の乙骨檢事に被告廉造に

連呼された上、一審の裁判で田山裁判長から有罪の判決を受けた。その時古賀君は『僕は自分が檢事をして居た時は、少しも氣がつかなかつたが、こうして被告になつて見ると、檢事と云ふものは實に恐しいものだ』と心から檢事を恐れて居た。古賀君は贋札事件に全く關係がなかつたので、控訴で中島裁判長から無罪を言渡され、華々しい雪寃會を開いたが、その席上でも『僕は孫子の代まで檢事はさゝない』と言ふて居た、餘程檢事に手古摺つたものと見える。然し檢事と言ふ職務は、見様に依つては誠に男らしい仕事である。破邪顯正の劍を提げて、富豪顯官何者の權威にも屈せず、所信を遂行して、天下萬民の爲めに正義の力を示すところに檢事の尊嚴がある。現大審院長横田國臣君が檢事總長をして居た時のことである、大東司法大臣と意見を異にすることがあつたが、飽まで檢事總長の職務を守つて、嚴として司法大臣の命令を聞かなかつた。懲戒免官となつても所信を枉げなかつた。横田君のこの行動は、檢事の爲めに萬丈の氣を吐いたものである。

檢事總長のする仕事と言ふものは實に六ヶ敷いもので、司法官と行政官との板挾みになつて、時の內閣の干渉を斥け、司法權獨立の爲めに奮鬪せねばならぬのである。こうした難局に立つて、檢事總長の職務を濫さない者は餘程の人物でなければ出來ないことだ。横田君にしても、平沼騏一郎君にしても、當代稀れに見る高潔の士であるから、檢事總長として一點の申分がない。今日の司法部内が、官學派と私學派との軋轢の烈しい割りに、何事も起らずに居るのは、大審院長に横田君があり、檢事總長に平沼君があるからである。若しも兩君の中の孰れか一方でも引退する様なことがあつたら、司法部內は忽ち群雄割據となるであらう。横田君が樞密院に入ると言ふ噂が傳はつて、未だこれが實現を見ないのは、こうした事情が伏在して居るからである。斯る重大なる職責を持つて居る檢事總長を始め、檢事長以下各檢事の生活狀態を見るに、孰れも質素なものである。その年俸が檢事總長六千圓、檢事長五千圓、檢事正三千三百圓、平檢事千圓以上二千五

百圓以下と言ふのであるから、生活が派手でないのは當然である。

六

現代の在朝法曹中、德望に於ては横田大審院長に越す者なく手腕に於ては平沼檢事總長に及ぶ者はない。平沼君は舊津山藩士平沼晋君の次男で、早稻田大學教授平沼淑郎君は君の令兄である。慶應三年生れと言ふから今年五十二歲、男としては未だ盛りであるが、故あつて妻もなく子もない禪僧の様な生活をして居る。頭腦明晰で裁決流るゝが如く、如何なる難局に立つても平然として、爲すべきことを遂行すると言ふ氷の様な冷靜を失はない人だ。常識の發達した、話の早く分る、温和な紳士である。君は明治二十七年帝大法科を出ると、直ぐ東京地方裁判所に判事を奉職して、東京控訴院部長となり、同控訴院檢事となり、三十五年に司法省參事官に轉じて四十年の三月に洋行した。歸朝すると直ぐ司法次官になつて、大正元年十二月に現法相の松室致君が檢事總長の職を去るに臨むで、君は檢事總長の椅子に着いたのである。君が檢事總長になつてから、海軍事件や高松事件の様な大きな事件を見事に處理して、今又九州の大疑獄に斧鉞を下して居る、三度九州に下つて檢事を指揮した働きは凄いほど目覺しかつた。九州の疑獄事件で、世間に名の知れ亘つたのは、長崎控訴院檢事長小山松吉君と福岡地方裁判所檢事正阿部義彰君とである。小山君は明治三十九年の七月から、四十一年の三月まで東京控訴院の檢事として隨分活動して居た人だ。生れは岡山で年齡は五十歲だが、好男子だから若く見える。明治二十五年の獨逸協會學校の卒業生で、監獄局長の谷田三郎君と同窓である。谷田君にしても小山君にしても、獨逸協會學校の出身者は洒脫で嫌味がない。阿部君は明治二十年の司法省法學校出身で、東管の疑獄事件で上京して居る福島地方裁判所檢事正日高實容君と同窓であるのは一奇だ。阿部君は五十五歲、日高君は五十六歲、檢事正としては元老の方だ。同窓の兩君が、福岡と福島と只一字だけ字の違ふ地方裁判所の檢事正として、九管と東管と同

じ鐵道從業員の疑獄事件檢擧の主腦になつて居るのは、頗る面白い對照である。東京控訴院の檢事長は、餘り表面に立つて活動をしないから、世間の記憶から薄くなつて居るが、檢事長の河村善益君は、現法相松室致君と同窓で、人物の高邁なることゝ、學殖の深いことは、當代容易に得がたい人物である。中央法衙の中心人物は、何と云ふても檢事正の中川一介君と次席檢事の小原直君である。檢事正も隨分多くあるが、東京地方裁判所の檢事正中川一介君ほど官僚くさくない檢事正は恐くなからう。司法官全部を見渡したところでも、中川君ほど平民的の役人は餘り多くないと思ふ。中川君は慶應三年北海道小樽に生れ、明治二十三年帝大法科を卒業して、横濱始審裁判所に司法官試補となり、試驗を了へて同裁判所の判事になつたのであるから、君の學殖と才幹とを以てそのまゝ官海を泳いで行つたなら、今頃は控訴院の檢事長になつて居るべき人だ。それを中川君が役人生活は面白くないと言ふて、明治二十六年の四月、自ら職を辭して辯護士となつた。辯護士生活を續ること十二年五ヶ月、この間に社會の實相と複雜なる人情の機微を見ることが出來た。夫人を失ふて孤獨の生活を續けて居る中に、稍に趣味を持つ様になり、久しく鎌倉通ひをやつて居た。君の友人が、君ほどの人物を何時までも野に置いて置くことは惜しいと言ふて、君を說き勸めて官吏生活に復活さした。それは明治三十八年で、東京控訴院判事となつた中川君は、東京控訴院檢事、韓國統監府檢事、京城地方裁判所檢事正を經て、明治四十三年大審院檢事に陞進し、東京控訴院檢事より現職に就いたのである。中川君が平民的で官僚臭くないのは、こうした民間生活を經て來た賜物である。民間生活で鍛へあげた中川君は、檢事に復活してからも、屢々官僚臭い同僚を驚した。その一例を擧げると、こう言ふことがあつた。當時新聞で騷いて居た本所の饂飩屋殺し、深川の新屋殺しと言ふ二つの殺人事件があつた。この二個の殺人事件の犯人として警視廳が擧げた被告に幡本樣吉と言ふ男があつた。裁判の結果は眞犯人として死刑の宣告

した。被告の辯護人布施辰治、小出五郎の兩辯護士はこの裁判に服せず控訴した。控訴裁判に立會ふた檢事が中川一介君であつた。中川君の論告は、被告福本藤吉は眞の犯人でない、全くの寃罪である、前裁決を取消し、直に無罪の判決をするのが相當であると、一々證據を擧げて極力無罪を主張した。この論告を聞いた被告は言ふに及ばず、布施、小出の兩辯護人も呆氣に取られ、最早辯護をする必要がなくなつたから、何分宜敷くと檢事に挨拶をして引きさがつた。判決の結果は、中川君の論告の通り、殺人の被告福本藤吉は無罪となつた。中川君の態度がこう言ふ風であるから、東京地方裁判所檢事局の空氣が緊張して居るのである。

七

東京地方裁判所の法庭に、江木、鵜澤、花井、大場の諸博士がずらりと並むだ時に、この矢面に立ち得る檢事を檢事局に求めると、小原直君の外はなからうと思ふ。日糖事件や、大逆事件や、海軍事件の樣な重大事件には孰れも、小原君が關係して居つた。日糖事件は横井時雄、臼井哲夫、栗原亮一など言ふ所謂名士が被告であるのと、各派の政黨に關係があつたので、これが捜査をするのは容易なことでなかつた。この難局に立つて快刀亂麻の手腕を揮ふたのは小原君であつた。この事件が濟むと間もなく起つたのが幸德秋水の大逆事件である。大逆事件の主任檢事となつたのは今辯護士になつて居る武富濟君と小原君とであつた。この事件は重大な事件であると同時に、非常に秘密を要すべき事件であつた。捜査中にこの事が漏れでもしやうものなら、どんな騷ぎが起るかも知れぬのであるから、捜査に從事して居る小原、武富兩君の心配はなみ大抵のことでなかつた。武富君は關西に飛び、小原君は長野、岩手の兩縣に密行して電光石火の活動をしたので、動きの取れない證據を押へることが出來た。小原君の檢事としての手腕は、この二大事件で充分認められたが、君の雄辯が天下に知れ亘つたのは海軍事件からである。あの複雜な事件を、條理整然一糸紊れずに論告した手際は、小原君でなければ見られない藝當である。

檢事としての小原君を最も遺憾なく現はして居るのは、鈴ヶ森お春殺しの嫌疑者小守壯輔の被告事件である。小守壯輔が警視廳で自白して公判に廻つて居る中に、石井藤吉と言ふ男が、お春を殺したのは自分だと名乘つて出たので、小守の自白は全く拷問の結果であると言ふことが分つて、大分喧しい問題となつた。その時小原君は、小守を拷問したと言ふ刑事四名を悉く起訴した。これには反對者もあつた相だが、頑として所信を遂行したところに君の人格が現れて居る。小原君は越後長岡の藩士小原某の三男であるのを八王子區裁判所の檢事小原朝忠君が君に惚れ込むで娘の婿にしたのである。小原君が現職に就くまでに、こうしたいきさつがあつた。小原君が明治三十五年に帝大法科を卒業して靜岡地方裁判所で試補を勤め、三十七年二月第二回試驗を首席で及第して東京地方裁判所の檢事になつたが、居ること僅八ヶ月で千葉地方裁判所へ轉任することになつて、此所で小原君は大に活動した。その働き振りが東京にまで傳はつて、時の東京控訴院長長谷川泰君が、さう言ふ名檢事なら手放すのでなかつた、何とかして東京へ呼び戻したいものだと、長谷川控訴院長から直接千葉地方裁判所の瀧川檢正正へ小原君の呼び戻しを交渉した。上級法衙からこう言ふ交渉があつたのであるから、一應その事を當人に話すのが當然であるが、千葉にとつても大切な檢事で、瀧川檢事正は小原君を千葉へ止めて置きたかつたので、當人にも話をせず、檢事正獨斷で長谷川控訴院長の要求を拒絕したけれども控訴院長はなか／＼斷念しない、どうしても東京へ貰ひたいと再三再四交渉したので、瀧川檢事正も我を折り、小原君を東京へ戻すことを承諾した。中央法衙へ歸つて來た小原君は、控訴院長の鑑識に違はず、檢事局で異彩を放つて居た。當時檢事局の席順は古賀行倫君が次席檢事で、その下に宮崎普一、吉益俊次、武富濟の諸君が居て、小原君は武富君の次であつた。小原君如何に才物なりと雖も、この先輩を乘越して次席檢事になることは困難であつた。ところが小原君に運が向いて來たと見えて、古賀君は横濱地

方裁判所、宮崎君は宇都宮地方裁判所、吉益君は水戸地方裁判所に孰れも檢事正となつて榮轉し、續いて武富君は野に下つて辯護士となつたので、小原君はじつとして居て次席檢事になつたのである。小原君は今年四十二才の厄年だ、あらそはれぬもので、小原君の家へ强盜が入つて、七十五圓持つて行つた。これが厄落しなら誠に安いものだ。今東京地方裁判所の檢事局には檢事が二十七人居るが、古參の檢事は乙骨半二、竹内佐太郎、金山季逸、秋山高三郎、清水行恕の諸君である。乙骨半二君は冷酷な辛辣な檢事として世間に傳はつて居るが、これは全く見當違ひで、乙骨君は檢事局第一の粹人である。君は幕末の志士乙骨太郎君の實子で、母親も旗本の娘だと言ふから、人に屈しない豪放なところのあるのは當然だ。小原君より一つ年が上で四十三歲であるが、見たところ小原君より若く見える。竹内佐太郎君は金澤の高等學校時代から雄辯を以て學生間に知られて居た人だ。檢擧はなか／＼嚴密だと言ふ噂である。年齡は四十四歲、冷水摩擦で鍛へあげた軀であるから至つて壯健だ。金山季逸君は小學校時代から大學を卒業するまで優等で通したと言ふ珍しい人だ。見たところ誠に溫和な、親しみのある人だが、檢擧は頗る峻烈だと言ふことである。頭腦の明晰なのと、職務に勤勉なのとで有名な人だ。秋山高三郎君は乙骨君と共に檢事局中の粹人だと言ふことだ。君は確に立志傳中の人物である。君は金山君と同じく、今年四十一歲であるが、學生時代は苦學をした人だ、生れは栃木縣の宇都宮で、實兄の丹精で中學だけは卒業したが、君が中學を卒業した時實兄が亡くなつたので、學資の送金が絕えた。君は之に屈せずあらゆる艱難と鬪ふて明治三十九年に首尾よく帝大法科を卒業した。こうした生活をして來た人だけあつて訊問振りにそつがない。君は東京區裁判所の檢事局に居たのを、小原君に見出されて、東京地方裁判所の檢事局へ拔擢されたのだ相だ。清水行恕君は明治四十二年の帝大出身で、今年三十五歲、古參檢事中での年少者で、前途大に望みのある人だ。以上、檢事に就て我輩の知る限り

のことを書いて見たが、終に臨むで検事諸公に望むのは、諸公が嫌疑者を取調べる時に、温かい正しい心持で調べて貰ひたいことだ。嫌疑者は則ち嫌疑者であつて諸公が起訴の手續をされるまでは刑事被告人でもなければ犯人でもない、それを最初から罪人視してかゝるから反つてことの眞相が得られないのである。味噌の味噌臭いのはよいものでない、検事の検事臭いのも結構なものと言はれない。検事諸公が悉く中川検事正の如く、小原検事の如き心持になつて貰ふたら、我輩は諸公を顛倒せる社會道徳の維持者として尊敬するに躊躇せぬ。

歐洲の春の憶ひ出

山本鼎

私は巴里で三度春を迎へた。里昂郊外の春と伊太利亞の春とをちつとばかり知つて居る。これは、その印象の若干片である。

巴里

量は少いが巴里は雨の多い處だ。併し春の雨は細くして光線のやうだ。行人は傘もさゝずに、むしろ樂しげに濡れてゆく、もし濡れすぎると思へば身ぢかなカフエに憩めばよい、三月となればカフエはベランダに椅子をならべて居るから其處で一杯の麥酒に喉を潤すと良い。此頃の麥酒の甘さは、新芽に濺ぐぬるい雨と同じに、生物にとつてそれは實に結構な肥だ。

○

輕い春服に着かへて、ひやうきんに赤いネックタイなどをつけ、夕暮れの街を歩けば、卒然として戀愛を

覺える。一夜のうちにおそろしく大きくなつたマロニエの芽を仰ひで『あゝ春だな…これが或はお名殘りの巴里の春か』なぞと思ふ。榛の木のそれよりも明るく軟かい其芽は紫紺色の夜の空に云ふばかりなく美しい、葉とは思へず、とんと花だ。木蓮の花盛りのやうだ。

○

巴里市を鳥瞰すると、エトワールの廣場を中心にして八方に放射する美しい緑色の縞を見るが、それは大通りに二列三列或は四列に植えられた豐富なる街樹の緑で、重に、マロニエと稱する栗の木なのである。幹も梢も炭のやうに黑くて、春は三階の窓を覗き込む位に高く、花は、花無數の小さな盞から成り立つた一個の花笠で、赤と白とがあり、近く見れば多くの鳩がとまつて居るやうだし、遠見には霜を冠むつて居るかのやう。花も散り、葉が茂れば、綠陰に馬車を寄せて、客待ちの馭者共が木製の高帽子傾け、心地よい睡眠を貪つて居る。巴里市は、鐵に圍まれた不幸なる此木を保護するために、一本の根に年額百法づゝの肥料を與へて居るさうだが、併し、巴里市はこれ等の並木のためにどの位美しくされて居るか、市民の呼吸がどの位新鮮にされて居るか——自動車の吐き散らす紫色のカゾリンに咽せかへるあの倫敦はどうだ。賢明な佛蘭西人!!

○

足の肉は濕つた靴のなかに膨れてむづ痒く、急にあたりの不潔が氣になり出す。で、朝目を覺ますとすぐ飛び起きて大掃除にかゝる。すべての家具を動かして一年目の塵埃を掃出さし、洗足になつて石鹼水で床を洗ふ。一隅に積み重ねられてある食器——脂と塵埃と石炭の粉とで眞黑になつて居る鍋とか飯つぶと葱とが黃色くこびりついて居る茶碗とか、オムレツの喰ひのこしに黴が生えて其まゝこつ〳〵に固つて居る皿などといふものは一しよくたに湯で煮て、買ひたてのやうに洗ひ淨め、鏡は砥の粉で磨き、ストーヴの底も舐めたやうに掃除する、最後に熱い湯で顏や首を洗ひ、殘つた湯で五六足の靴下まで洗濯してしまうのだ。呆れるのは

隅々から集つた空壜の數だ、一番多いのは醬油の壜で、正宗の壜も四五本はある、それ等はこま〲した雜多な壜と一しよに擂鉢へすててしまう、處で葡萄酒の壜は丁度仕事を見付けにやつて來たモデルの小娘に角の酒屋へ運ばしてビールと貿易させるのだが、空壜二本に對してビール一本の割りでよこす。赤大根の走りと乳酪とをおかずにして喉を潤したあのビールの味ひは蓋し忘れられない。床の下から出て來た、謝肉祭の帽子の赤つ鼻を顔につけて、鏡のなかの其顔に話しかけなどしたあの時の幸福な氣持ちは忘れられない。「心は氣球の如く輕く……」まつたくその通りだつた。

○

戸の外の人は容易に立去らない、またこつ〲と叩く、私は根まけして跳ね起きる。戸を開けて見れば案の條御用きゝのモデル女だ。

『私の姿勢を御入用ないでせうか』

『僕は今仕事を休むで居る』

『私は三法でいゝのです』

『僕は裸を今描き度ないんだ。もうそろ〱杜も良いからね』

『私にどうぞ住所を記さして下さい、ね、そして姿勢の必要な時に私に手紙を書いて下さい。私は美しい乳を有つてるのよ、可愛いゝ日本人さん』

『僕は睡むいのだ。早く住所を書いて出ていつてくれつ』

『薄情な方!!獨りぼつちで寂しくはないの』

『寂しいのより自由な方がいゝ』

『ほんとに情人を有つて居ないの。アムールをどうして居るのだらう?』

『カフエ、パンテオンへゆけば何でもない事じやないか』

『あすこへいつて居るの――そりやー經濟でないわ、一體あなた達はいくら拂つて居るの、ねえ、私じやどう、私日曜々々に來るから其時五法づゝ下さいよ』

『豚女!!、早く出ていつてくれ』

『葡萄酒もないんだね、麵麭と乳酪を下さいよ、私は

大變お腹(なか)がすいて居るんです」
「出てくれつ、早く」
「なんて性惡だらう。じや五十サンチーム下さい麵麭(パン)を買ふんだから、さうすればあなたに接吻(ベーゼ)をゆるすわ。」
「畜生!!これでも有つて出てゆけつ」
私は卓の上に轉つて居た五法の銀貨を女の足もとに投げてやり、拾ひあげた女の腕を掴んで戶の外へ突き出して戶をぴたりとしめて鍵をかけてしまつた。
「野蠻人!!、こんな金使へやしない、鉛の銀貨なぞくれやーがつて」
と女は戶の傍を去らずに怒鳴つて居た。女が隣の露西亞人の戶も、其隣の塞耳比亞人の戶も叩いて居るのを、私は寢床のなかで笑ひながら聽ひた。そしてまたざうさなく睡りにおちていつた——籾殻のやうな微(かす)かな雨のふる春の朝の事である。

○

或晚は又こんな事があつた。雨催ひの生(なま)ぬるい風の吹く夜であつたが、私は活動寫眞を見にいつた歸りに脊の低いマロニエの列ぶ或る散歩路を歩いて居た。其時近くを歩いて居る人は十人ばかりもあつたが、とにかく其人々の注意は異樣な孩兒(あかご)の泣聲に集注せられて居た。其裂けるやうな搔くやうな聲は人通りのない一方の人道から起るので、一人の男が其方へ向つて步いていつた。皆は同じ樣に立止つちまつた。處が聲の主は二疋の猫で、人が近寄ると見るや、別れて礫(つぶて)のやうに遁げてしまつた。皆は實に大聲を出して笑つちまつた。そして又歩き出した。私のすぐそばを歩いて居た婦人は、『何といふ滑稽な感じでせう』
と私に話しかけた。角を曲つて、パスツールの並木路に出る頃には、其婦人は私によりそつて來て殆ど肩を接する位に歩いて居た。婦人は帽から黒い紗を垂れた喪服の裝(よそほ)ひで、もう三十をすぎた顏であつた。脊が高いので顏を覗く樣にして私に話しつゞけた。で突然こんな會話がはじまつた。
「あなたはお獨りですか」

「えゝ獨りで畫室に住つて居ます」

「では極めて自由で居らつしやいますね、」

「自由すぎますよ」

「私は樂譜の寫しをして暮して居る未亡人ですか。良人(おつと)は白耳義人です……あなたは今晩も自由ですか。」

「えゝ」

「それは結構、ではね、これからさつきの猫のやうに滑稽な一と幕を演じやうじやありませんか、さ私の家へ行きませう」

私は腕をとつて引つぱられた。もしあの時、私の靴下がひどく破れて居なかつたとしたら、私は好奇心に隨つたかも知れない。好奇心に隨つたならば、私はずいぶん厭(いや)な目を見る處だつた。何故ならば、私の友も同じ喪服の婦人に話しかけられて、若干の宿料(ホテル)を拂はせられたからである。

○

英國隱元豆(アリコベール)、ほうれん草(エピナール)、走り馬鈴薯(ポンムドテールヌーベル)等、新鮮な野菜はすべて私を悦ばせるが西洋獨活(アスペルジュ)が一番だ。殊に硝子の帽子に伏せられて育つ巴里近郊のは素的だ。湯出たアスペルジュは女の二の腕のやうに素直で軟かだ。三ばい酢にねらして、舌で壓(つよ)しながら吸込む時の甘さ。

○

パスツールの並木路に又辻祭がやつて來た。放浪見世物師(サルタンバンク)の一群で、一年中、日を割つて巴里の定まつた辻々に興業して廻るのである。聞く處によると、此群は二た組あつて、毎年八月にはナポレオンの墓の前の大廣場、アンヴリードに集つて合併の大辻祭を布き、又二た手に別れて持場をめぐるのださうである。パスツールの通りへ來る頃は、春も稍老けて、マロニエの葉蔭々々に、砂いぢりする小兒等を守(もり)しながら褓姆達が編みものをする頃である。大きな長い箱車が二頭もしくは四頭ばかりの重輓馬に牽れて何個(いくつ)となくやつて來る。綠色のペンキやニスなどを塗つた美麗な車もあり、大停車場の片隅に雨ざらしにされて居る廢車のやうに哀れなのもある。是等の箱車には見世物師の一家族—犬猫小禽に至るまで住つて居る。夜に紅の華模樣

ある紗が下ろされる窓に、壁間は塗り骨の美しい鳥籠がおかれて鸚鵡が喋り、地へ渡した階段の上にはよく手入れされた三毛猫が香箱をつくつて居たりする。サルタンヷンクの兒は散歩路へ出て獨樂をまわし、色氣づいた其若者等は、マロニエ樹下の共同椅子に夜のあひびきを樂むで居る。見世物は、ガリヷルディ町を一端に、モンパルナスの停車場の後に及ぶ十町ばかりの間の散歩路の兩側に列ぶので、所謂日本のどつこいどつこいを大仕掛けにした當物の店が最も多く、獅子使ひ、茶番師、相撲、メリコーランド、小ルナパーク、射的、玉ころがし等があり、菓子屋や飴屋も澤山出て居る。大きな畫架を据ゑて其上に板紙をおき棒畫の具で忽ちに畫を描いて見せる大道畫家が居る。まづ五十サンチームづゝで番號を記した小札を見物のうちの希望者に賣るのだが、それが十人位になると彼れは効能を述べておいて畫を描きはじめる。たいてい丘と河とがあつて、立木の根じめに小さな百姓屋があるといふやうな風景畫であるが、二十分位で出來上る。出來上るとまた一とくさり喋つて、それから神籤のやうな道具で當り籤を定めるのだ。大道寫眞師も居る、それはいつも鐵橋の下の見物もさう集らない處に居たが、色の白い禿げた愛嬌ある老人で同じ年頃の妻君を伴ひ、三脚をとりつけ小さな暗箱を一とつ捺へて、一枚五十サンチームで撮して居るのだつた。處が玉の代りに小さな穴を明けた暗箱なのである。面白いのは此哀れな寫眞屋さんもなかなかお客を吸收して居る事で、小供をつれたお神さんなぞがよく此穴のレンズの前に立つて居た。小屋と小屋との間に、闇から半分顔を出して蹲たやうになつて弦をする氣の毒なヴヨリン彈きも居る。褪め汚れた其肉袢のやうに、褪め衰えた女の兒に、足で首を抱へて手で歩かせる慘な藝をやらして鳥目を集める輕業師も居る。併し繪畫的で非常に面白かつたのは、絹帽を冠むつた男が石油を口に含むでぷーつと霧にして吹き上げつゝ、今手に持つたカンテラの火をそれに移すのであるが。火のしぶきは奔騰してマロニエの梢を焼きそうにまでなる。併しなんといふ無器用な

藝當だらう、けれどもあのたるみなき氣合はどうだ。私は屡々メリコランドにも乘つた。料理屋(レストーラン)の給仕女や女工などはあれが大好きだ。私の使つて居たモデルの小娘は一日に五法乘つた事がある——あゝ、併しあの辻祭も千九百十四年以來止(やめ)になつちまつた。夜々私をあの賑かな燈火(あかり)の處へ呼び出した、馬鹿〳〵しく騒がしいけれど愛す可き稚氣を有つたメリコランドの舞曲(マーチ)それは私の春の追憶に一生蹤いてまわるだらう。

○

一夜、私の畫室に六人ばかりの友人が集つた。春の展覧會(サロン)を見に往つた晩で、畫の事が一同の頭を領して居た。十數年來ブルタニユーの海岸に定住して其處の郷土色(ローカルカラー)を迷ひなき手法で叙述して來た大家(イートル)のシヤルル、コツテエが、とんと田舎娘が空氣草履を穿いたやうに新傾向の影響をうけて居る事がまづ話題になつた。つまり皆にはコツテエの性質が素直であるのか、又は頭が曇つて來たのかゞ解らなかつたのだ。吾々は眞理を皆自分で製造して居るが、それは眞理は信仰だからだ。處がもし信仰にはぐれた時はどうか、例へばコツテエの場合、彼れが半生を傾けて握り得た特色ある表現に就ての自信が後進の創造力に刺戟されて内的に混亂を來たしたとして。沈省考慮の後(のち)既得の表現力を保守するのが健か。それとも感ずる處に動かされて、よし、おつかなびつくにでも信ずる處を攝受するのが純な心か、といふのが論點であつたが問題は流轉して、藝術上の崇拜と被崇拜者に就ての雜感に駐まつた。其時私はこんな事を喋つた。

『左様、成る程仰しやる様にKとシヤヴンヌとはずいぶん違ふでせう、シヤヴンヌの畫題は基督教精神に發して居ます。Kは基督教徒でありません。次にシヤヴンヌの手法——形態の上の靈感は全くグレークです。Kはそれも違ひます。Kの畫趣は觸目の現實。——農人とか漁夫とか或は樵者とかいふものゝ生活に構想せらるゝのです……シヤヴンヌも『勞働』を畫きました、併しそれは『勞働』そのものを基督教精神で美化して居るのです。で、『勞働』の幸福と神聖とを示すた

めには一つの畫面に種々な象徴的物件を容れて居るのです。……一體、世間がすぐ二人の人間を比較するのは惡い事です。Kとシャヷンヌは似て居やしない、など と考へずに、單に『Kはシャヷンヌを崇敬して居る』といふ明瞭な事實を承認すべしです。それが素直なリヤリズムといふものではありませんか。人間といふものは複雜なものだと私はつくづく思ひますね、人間はそれ自身、進歩、變化、廢頽するものですが、畫は君、それ自身進歩はしないのですからねえ。要するに僕は、Kがシャヷンヌの傾向と異つて居るといふのは、畫題、哲學、信仰の方面であつて、それは當然な事だと、又Kを感動せしめたものは其繪畫的精神とでもいふ方で造形美術の根本的の智慧そのものなのであると。併しそれはすべてに於て、僕がルノワールの讃嘆者であるといふ事實に較べればむしろ不思議の少ない事かも知れませんよ。」

此論鬪に就ては別に異論も起らなかつたが、Mと私との間に、クロードモネエの實相主義に關して水掛け論がはじまつた。さて、だんだんお定りの人物論になつた時、S氏は『君は僕をだいぶ觀察したでせうね』と所見を促した。此晩、私はどうしたか喋りたくてたまらなかつた。けれども簡單に、

「……併しやつぱりだんだん解らない。丁度科學が進歩したので、病氣の數が殖へた樣なものですね」

と答へた。皆が引揚げてから、私はどさりと長椅子に埋まり込んで葡萄酒をぐつと一杯飲むだ。一切のものを蹴飛ばし度い樣な感情が漲ぎつて來た。「識る事のみで肥えたくない、惚れる事によつて肥えるんだ」と叫けむで立ち上つて、室を歩き廻つた。もう夜明けに近いと見えて急に冷えを感じて來た。卒かに空腹と疲勞とを感じて、麵麭に、鰯の油漬けをのせて喰つた——窓硝子が水面の樣に白むで來て雀と鶩が鳴き出した。

エトイユ

巴里から二十五六里ばかりも西北に、エトイユといふ處がある。汽車路から三里ばかりもセエヌ河に沿ふて入り込んだ處、水に臨むだ小村で、麥畑、馬鈴薯畑

牧草畑などに彩どられたほがらかな潤い丘が、一と筋の白い縣道の左右に緩々盛り上つて居る。人家は道に沿ふて列び、家々のうしろはたいてい果樹園となつて居る。梨、桃、林檎、實櫻などの畑であるから春は花に包まれる。クロオド、モネエの畫布に何度となく採り入れられた、振りのよいカトリックの寺院は丘の中腹にあつて、其處まで登れば、河の彼方に擴がる美しいセエヌ、エ、オワーズの沃野を展望する事が出來る。緑野に見出した、珊瑚色の路を追ふてゆけば村があつて、其處には必ず削つた鉛筆の尖のやうな寺院の鐘樓が目に止まる。夕陽に染められて廣野が金色に輝く頃。祈りの鐘はそれ等の尖塔から鳴り溢れて、耕作の人々を彼れ等の村々に招くのである。ヱトイユ村の入口は少し上り坂になつて居て、路の、河に面した側には低い石垣が作られ、それに沿ふてアカシアの木が列むで居る。私は此處へ出て來てよく入り日を眺めた。石垣に片腰のせて水の面を見ながら長い間空想に耽つた。村の中心は此石垣の處から一丁ばかりはいつた處だが、宿屋は其處に二軒あるだけで私は白馬屋といふのに宿つて居た。下がカフエになつて居て、玉突臺があり、裏の方に、空地を隔てゝ一棟の踊場が出來て居る。私は此家に九十日ばかり滯在して居た。たいてい毎日外へ出て居たが、畫を描いてばかりも居なかつた。草の上に寢ころんで本を讀むだり、近所の村を見てまわつたり、學校の小供達と魚を掬つて遊むだり、百姓と、玉を突いたりして過した。ヱトイユは偲ひ出の深い處だ。私の青年時代の八年間を支配した戀愛問題に、最後の最後の幕が下ろされたのは此處に旅寢して居た時の事だから。私は其時、人間の定命が長過ぎる事を嘆じた。實に、時は憤怒をも詩化してくれるが、私はそれを神の慈悲とも思ふし、殘忍とも思ふ。

○

處々に壞れ殘つた土塀のある、雛の身のやうに紅い煉土の畑に、遠い丘の上の畑で耕馬を叱る百姓の閑かな聲を聽きながら、春光に蒸されて、私は十日ばかり滿開の梨の花を寫生した。まともに日を浴びた白い壁

は私をずいぶん苦しめた。光線、空氣、梨の木の性格、それから微妙な陰影を作る立體の魅力——認識は分析して心に訴へるが、眼は一切を刹那に感受する。私は不便なる、繪畫の表現力を咀ひつゝ描き進むだ。重ねられた繪の具は何を示して居るのか？、それはあの、青空に身輕に浮いて居る花の梢を示して居ると云へやうか。それは單に認識の痕跡だ。

○

私はセエヌ河の岸のマロニエ並木の陰に三脚を据ゑて描きはじめた。雨あがりの、春光ほがらかな朝で、梨畑にも丘にも、河にも人影がいつもより多かつた。水の邊の草原には五六疋の牛が放たれて居たが、其うちの一疋が私の方を見て居る風付が怪しいので、私はたてたばかりの畫架を手早くたゝみはじめた。果して牛は私を目掛けて駈けて來た。私は土塀のつゞく狹い横丁に逃げ込むだが、不良な牛は同じく横丁へ駈け込むで來た。私は背後に牛の荒い鼻呼吸をきゝながら全速力で走つた。丘の上の寺院の庭まで夢中になつて逃げのびた。私は牛、馬、犬、すべて、笑ふ表情筋を有たない、動物はきらひだ。

○

寺院の正面の壁には日時計が圖してある。針は動かずにお日樣が其影を動かして時を示してくれるのである。同じ樣な日時計は理髮店の壁にも描いてあつた。畫家のルーソーが若い時分此日時計を描いて金をとりつゝ旅した事を偲ひ出す。その時代の春光は一としほ閑かだつたらう。

○

宿の裏庭へいつたら、ピエール（徴兵前の若者で、幌馬車を仕立てゝ三里南の停車場へ御客を迎へに行つたり、荷車を引出して、隣村へ林檎酒を買ひにいつたりして居る男だ）が馬を洗つて居る。少し風が吹くのでたえず梨の花片が舞つて來る。赤馬の毛に青い空が映つて居る。

「またお客かい」

「お客じやない。今日は買ひ出しです」

「マントかね」
「マントへゆくんです。旦那は今日はお休みですか。どうです一しよにマントまで遊びに御出掛けなさいませんか。マントには小さな美術館がありますよ。」
「あすこには別嬪さんの家はあるのかね」
「二軒あります。併し二軒で五人しか居ないんですよ」
「君達は、では、日曜日なんかマントまで出掛けるんだらう……それともエトイユにもお嬢さんが居るか？」
「此處にも居るには居ますよ」
「ほー何處に、そんな女も家もついぞ見掛けないね」
「汚い奴でさ、此先きの運送屋の二階に居ますよ。藁のなかに寝て居るんです、外を歩く時は木靴を穿いて居ますよ。輕業師においてきぼりにされた女だといふ事です。」
「面白いねそいつは、そんな奴いくらだらう」
「五十サンチーム入りますよ」

○

私は或る少し大きな畫稿を作るために、裏の踊場を借してもらつた。乾してあつた秣を片よせてもらつて、壁に紙を張つて畫くことにした。或日も其處に居ると、俄かに大勢の足音がして、宿のお神さんを先きに、男女十數人が這つて來た。見るとそれは結婚式の一と組で、女は白服男はたいてい絹帽を冠むつて居る、彼れ等はもう燥ぎの頂天に居た。殆ど私が居るのも分らない風で、お神さんが自働ピヤノにねじを掛けて居るのを待たずに踊り出した。ピヤノが鳴り出したら、叫びを上げてめちやくちやに踊り出した。ポルカなのにタンゴを踊つて居る奴も居た。とにかく秣の屑と塵埃とが女共の裾に煽られて眞黄色に舞立つので、私は畫の具箱を閉ぢて呆れて見て居た。曲が終ると女達が一どきに私を圍むだ。花嫁さんは安つぽい藤色絹をひだの多い流行に仕立てたのを着て長い赤皮の靴を穿いて居た。丸い赤つ面で、眼の輪廓を墨で描き、生へ下りを西班牙風に巻いて居た。私は一見して巴里で賣子でもした女だ

らうと見た。彼れは私に自分の顔を寫生してくれと迫つた。私はすぐ鉛筆で畫いてやつたが、愕いたのは盡を受取ると、いきなり私の頰に接吻した事だ。私は多分眞紅になつたのだらう。皆が手を拍つて囃したから、私はとう〳〵他に三人の娘の肖像を描かせられた。そして兩頰へ都合十二回の接吻を酬ひられた。それはいゝが、私は彼れ等が私を踊りに引き出さうと努めたには弱つた。花嫁さんとも一人の娘が私の手をちぎれさうな程引つ張つたが、私は一度踊でこりた事があるので、逃げまわつた。花嫁さんは面白さに上せあがつて、又私に接吻しやうとして追ひまわした。そして私はつかまへられて、頰に接吻されるかと思つたら、だしぬけに口にされた。其時私は見たが、彼の女は片目で良人の方を見て居て、良人がむかうを向いたとたんに私の唇へ加へたのだ。勿論他の男も娘もこの惡戯を躍り上つて悦むだ。彼の女はすぐあとで良人を私の處へ引張つて來て名乘した。良人は名札を出して、貴君は英語を話すかときいた。知らぬと答へたら、露西亞語はといふ。それも知らないと答へたら。私は旅行家なので四ヶ國語位知つて居るといふ。彼れはマントの辯護士なのだ。妻は巴里生れだと説明して、『私の妻君は別嬪でせう、此色の服がよくうつるんです』といふ。私は貴君の妻君はすてきに魅者だと答へてやつた。彼れ等が散々踊り疲れた頃前の庭に、酒、シトロンなどの飲料をならべた卓が用意された。一同は其處へごた〳〵と集つた。自働ピヤノが庭へ運ばれて、幾回かねじが卷かれた。彼れ等は其處でへと〳〵になる迄踊つたのだ。彼れ等が二臺の無蓋車に乘つて宿を去る時、私は二階の窓から首を出した。女達はすぐ見つけて皆手で接吻を送つた。十六ばかりの一番可愛いゝ娘が、手にした花をほうり上げた。私はうまくそれを受取る事が出來た。——村は元の靜けさにかへり、そして、花の香りの涵滿する甘い春の夕ぐれになつた。

○

放課時間になると小學生共は、ほんに放たれた樣に皆セエヌ河のうちへ飛んで來る。そして相撲をとつた

り、木へ登つたり、石をなげたりして大賑かだ。禁漁の公札がまだ立つて居るので、群をなして泳ぎまわる魚を唯見て居るばかりだ。

○

セエヌ彼岸のラヴクールの村は遠見に十數個の石棺を列べたやうな寂しい村だ。一日其處へ渡つて見たが、貧しい百姓家ばかりだ。家の裏は一帶の梨畑けで水澤の乾いたあとのひゞの入つた、地面で、他には梨の花の寂しい日なた。

○

宿屋の食物は、いつも臭い犢に羊に馬鈴薯だが、食卓の花活は、荊毬花、紫丁香花、栗花、梨、桃、杏としきりにかへられる。今田園の春は酣だ。（七年三月）

江戸風俗

花見物語

田中貢太郎

一

飛鳥山の櫻は滿開に近かつた。享保五年九月に將軍吉宗の命で植ゑたと云はれてゐる花は、風の無い、どんよりとした空の下に咲き亂れて、一面に淡紅い霞が簇がつてゐるやうに見渡された。山と云ふ名はあつても、その實名ばかりの低い小さな丘には、花見の客が雜踏してゐた。

それは文政年間の事であつた。爛熟した江戸文明の縮圖は其所にも見られた。元祿以前まで鎗を持つた家來を連れて花見に行つてゐた武骨一片の三河武士も、疾病本田の頭を編笠に包んで、お納戸茶の裏をつけた黑羽二重の紋付を著、淺黄の縞博多の狹帶を締めて、

細身の大小を差し、色の白い草履取を連れて來るやうになつてゐた。生活様式の變化は士人ばかりでなしに、農工商の三階級にもそれぞれ行はれてゐた。町家の若い女は、五代將軍綱吉の頃から流行しはじめた花見小袖を着て、それを競ひほこるやうにしてゐた。花見小袖の中には、龜甲形の染模様のある物もあつた。若い女には島田崩が多かつた。天明頃から振袖を着るやうになつた若い藝妓は、姉様について、扇屋、海老屋など云ふ料理屋から、醉つた客のお供をして上つて來た。

丘の上は一面の人であつた。赤い燃ゆるやうな毛氈を敷いて、割子を開いてゐる者がある。幔幕を張つて踊つてゐる踊の師匠の群がある。花莚を敷いて三味線を引きながら小唄を唄つてゐる者がある。女の上着の小袖と男の羽織とを赤い女のしごき帶にとほして、それを圍ひにして吸筒を傾けてゐる者がある。

丘の其所此所には、葭簀張の水茶屋があつて、衣被の鹽茹、慈姑の串刺、團子の類を置いてあつた。茶の道服を着て白い髯を長く垂らした老人は、宗匠らしい連の男と二人で、店先の牀几に腰を下ろして、肩にかけてゐた瓢簞の酒を飲み合ひながら……花見かなと云ふやうな句を考へてゐた。菅笠を前さがりに被て、三味線を抱へた三人連の女太夫がやつて來て唄ひ出した。その中の一人は、絞りになつた紅鹿子の笠紐を結んだ顎が透きとほるやうに白かつた。その女は赤い櫻の花を形に置いた木綿の袷を着て、帶を引掛けに結んでゐた。

目かつらをつけ、紅絹裏にした揃の着物を着た五六人の藝人仲間は、その傍を騒ぎながら通つて行つたが、女の集つてゐるのを見ると、その側へ行つて茶番をはじめた。四邊にゐた者は走つて來て、茶番狂言の藝人を中にして笑ひ崩れた。

勤番の田舍侍がお國言葉で何か話しながら行つた。横縞の羽折に刀を一本差した町方の若衆が行つた。南部の上着に黒繻子の襟の付いた襦袢を見せた町醫者が行つた。木刀を差して尻をからげた折助が、貧乏徳利を片手に提げて、よたよたとして歩いた。黄八丈を着

て。朱の二重緒の雪駄を穿いた耳にたこのある大若衆は、とある木陰に引いた幔幕の陰から、舞扇のひらひらする中を覗いてゐた。目かつら賣りの、老婆も見えた。二三人連の小身者(せうしんもの)の侍の一人は、脇差刀(わきざしがたな)と云ふ物をして、悦しさうな顔をして歩いてゐた。脇差刀は泰平の象であつた。それは大刀を入質して無くした者が、脇差を抜いて白刃の所に手拭を巻き。鞘を先の方に差して、大刀の鞘のやうにして、羽織の下から鞘の先だけを見せるやうにした物であつた。

もう八つさがりで、山の賑やかな盛りであつた。西に廻つた陽は、薄絹に包まれたやうになつて、赤い鈍い光が花びらの上に睡つてゐた。王子の方の麓から二人の若い男巡禮が巡禮唄を唄ひながら上つて來た。杉形の菅笠を冠り、大和杖をつき、背には袖無し半身の白い木綿の笈摺をつけ、襟には札挾みをかけてゐた。

二人の巡禮は、丘の上の幕府の儒官成島道筑の撰した碑のある所に來た。薄い青石の高さが七尺幅が一丈位ある石碑は、元文四年に建てた物であつた。辨當や重箱の包みを持つた十人ばかりの女や子供の交つた町人の群が來て、その石碑の下で巡禮と行き違つた。巡禮は足を停めて、芝居でやるやうな靜かな落ち付きのある聲で巡禮唄を唄ひながら、一行の行き過ぎるのを待つてゐた。

黒羽二重の紋付を着て、朱鞘の大小を差した侍が、中ぬき草履を穿き、冠つた深編笠の縁に片手をかけて、櫻の梢を眺める風で一行の後から來た。角ばつた淺黑い顔の顎から片頰が見えた。巡禮の一人は、ばつたり唄を止めて、つかつかと侍の前に進んで、その顔を覗き込んだ。

『汝は、安藤兵庫にあらずや、』と云つて、巡禮は一足すさつて、杖を左の手に持ち直した。

侍は驚いて立ち停つて、眼を据ゑるやうにして巡禮の顔を見た。

『汝の爲に父を害せられたる山名宗太郎なるが見忘れたるか。』と、巡禮は菅笠をかなぐり捨てて、杖の端に右の手をかけた。

後にゐた一人の巡禮も侍の前に進み出た。「安藤兵庫、よも見忘れはすまい、山名宗右衞門の甥細川勝之助なるぞ。」

侍は二人の顏を見廻はして、口の邊に嘲りの色を浮べた。「ふむ、如何にも覺えてゐる、我が手にかけた山名宗右衞門の一子と甥だが、覺えて居れば何とする。」

「知れた事、親の仇、……覺悟せよ、」と云つて、宗太郎は杖の中に仕込んでゐた刀を拔いて振り冠つた。

「伯父の仇、」と云つて、勝之助も仕込杖の鞘を拂つた。

侍も編笠を後に放ねて、拔き合はせた。「不便ながら返り討にするぞ、」

櫻の花びらが音もなくちらちらと散つてゐた。侍と宗太郎の刄は、一たび合つて離れた。勝之助が踏み込んで行つた。氣味惡い大刀打ちの響が又起つた。

「喧嘩だ、」「仇討だ」と云ふ聲が附近に傳へられた。坐つてゐた者は惣起ちになつた。辨當包みを持つた者や、下駄を持つた者が雪崩を打つて、麓の方へ走り下つた。人雪崩に押し倒された女子供の泣き叫ぶ聲が其所にも此所にも起つた。

巡禮と侍とは、隙を見ては刄を合はせてゐた。物好きの遊客は、集つて來て、遠くの方から見てゐた。笈佛を脊にした、着物も手おひも股引も甲掛も皆鼠色の六部が進み出た。

「暫く、暫く、拙者一言申す事あり、」と云つて、杖ついてゐた錫杖を侍と巡禮との中へつと入れた。

「さまたげすな。」と、宗太郎は六部の方を睨みながら云つた。

「さまたげするなら、汝も相手なるぞ。」と、勝之助は云つた。

「いや、さまたげするにあらず、お二方の爲めを思ひての事なり。暫く、暫く、」と、六部は云つた。

「然らば早く申せ、何事なるぞ、」と、宗太郎はせき込んで云つた。

「然らば申すべし、暫く待たれよ、」と、六部は蹲んで脊にしてゐた笈佛の長い箱を下ろして、その扉を開いて中から一挺の三味線を取出して、宗太郎の方を向い

て、「これを貴殿に進上申す。」
「不思議なる品物拙者に下さるとな、遠慮なく頂戴致さん、」と云つて、宗太郎は手早く仕込杖の鞘を拾つて刀を收め、六部の手から三味線を取つて引き出した。
三四人の若侍が三味線に合はせて唄ひながら踊り出て來た。安藤兵庫も勝之助も、それと一所に刀を收めて、唄ひながら踊り出した。六部は三味線を出した後から大きな瓢簞を出して口の緣に持つて行つた。
遠卷にして仇討を見やうとしてゐた群衆は、一齊に手を打つて囃し立てた。これは旗本の若侍達の催した花見の趣向であつた。

二

江戸時代の上野は、寛永寺の境内であつたから、花見にも飛鳥山や向島などのやうに醉態狂態の限を盡す事は出來なかつた。山内はもと伊賀の上野の城主藤堂和泉守の屋敷であつたから、本國の城地の名を冠したものであつた。車坂など云ふ名も、矢張り城内を模したものだと云はれてゐる。徳川家で寛永寺を建立して門葉鎭護の寺觀としたのは、寛永元年の事で、それと同時に、山内を東叡山と稱する事となつた。
山内では鳴物を禁じてあつたから、三味線を引く事も、太鼓を打つ事も、鐘を鳴らす事も一切出來なかつたが、その代り靜に心置きなく花見をする事が出來た。腰掛莚の類も山内で貸してくれた。天和三年に成つた戸田茂睡の「紫の一本」には當時の樣を精しく書いてある。「東叡山黑門より仁王門までの並木の櫻の下に花見來なし。松山のうち、淸水のうしろ、幕はしらかして見る人多し。幕多きは三百餘りありすくなきは二百餘り。此外被衣(かつぎ)立てたる女房の上著の小袖、男の羽織を辨當からげたる細引にとほして、櫻木にゆひつけて假の幕にし、毛氈花莚しきて酒飮むなり。鳴物は御法度にてならず、小唄淨瑠璃仕舞は咎むるなし。」
寛永寺の本坊は、ほゞ今の帝室博物館の在るあたりに在つた。山内には本坊の外に、三十六坊が在つた。山の正面の入口には、彰義隊で有名な黑門があつた。その位置は、今の公園の左側の入口で、山王臺の催し

並行したあたりであつた。春の花見に限らず、山内は四季を通じて、江戸士民が行樂の場所となつてゐた。そして山内でも、別けて眺望のあるのは山王臺で、其所には水茶屋が居並んでゐた。山下の方を見ると、蓆張の小屋が軒を並べて、辻講釋、見世物、輕業などを興行してゐるのが見えた。

山内には寺同心と云ふ者があつて嚴重に取締つてゐた。酒に喰ひ醉つて、女に戯れたり、喧嘩口論したりする者は、この同心の手で山内を追ひ拂はれた。亂暴狼籍を恐れる女子供は、それが爲めに好んで此所へ花見に來たものであつたが、併しその秩序も、幕府の盛んな間の事で、晩年になつてその基礎が根抵から搖らぐやうになつてからは、最早昔日の面影がなかつた。

文久二年頃の事であつた。日本橋の或る商家では、一家こぞつて淸水觀音堂の側で花見をしてゐた。新らしい幕を張り、眞赤な毛氈を敷いて、その上で重詰を開いてゐた。お供を命ぜられてゐる三四人の店の子僧は、面白さうに幕を出たり入つたりした。薄すらした風があつた。咲き亂れた櫻の枝には、夕陽が燃付いて、花がちらちらと散つてゐた。花の散る下には文金の高島田に紅い布をかけた娘が、郡内の碁盤縞の大振袖を著て、紫繻子の帶を二重に廻はして、後に矢の字を結んだ人形のやうに可愛らしい姿で、銀泥の扇をかざして仕舞をやつてゐた。花びらは、その扇にも影をさして落ちた。それは十六歳になる一人娘のお豐であつた。

地謡は三十五六歳になる瘦せて脊の高い女がやつてゐた。毎日お豐の許に出稽古に來る浪人の女房であつた。師匠の女房は、咽喉を蛙のやうに脹らまして、『熊野』を謡ひつゞけた。

小肥滿(こぶとり)のした顏の色澤の好い父親は、女房の注いでくれた盃を胸の高さまで上げたなりに、我が子の舞の手振にうつとりと見入つてゐた。女房の顏はにこにこしてゐた。乳母も女中も、番頭も子僧も、主人夫婦が一生懸命に見入つてゐる場合に、割子に手をかける譯にも行かないので、さも感心したと云ふやうな顏をし

て、お嬢さんの方を見てゐた。

舞は終りに近かつた。何所かで口笛を鳴らす者があつた。と、人の罵り騒ぐ聲がして、幕を放ねあげて十人位の頭が押し込んで來た。茶色の袴腰のあるズボンを穿いて、同じ色の筒袖を著て長い大小をさした者で、幕府が新に西丸と三崎町の土屋邸とに設けた歩兵隊の隊士で、茶袋と綽名をつけられて市民から蛇蝎視せられてゐる者どもであつた。

父親は前に飛び出して、驚いて立ち縮んでゐるお豊を圍はうとした。大きな拳が二つ三つ頭に當つた。父親は仰向けに倒れた。茶色の服が四邊に渦を卷いた。女の叫ぶ聲がきれぎれにした。

師匠の女房は帶の解けかゝつたお豊を抱へるやうにして、觀音堂の御供水の側の秋色櫻の下へ逃げて來てゐた。朱塗の觀音堂の建物に夕陽が顫へて、花見客が四邊に散らばつて見えた。女房の頭髮はこはれてゐた。二人とも裸足であつた。

『やい、この婆婆ァ、』と云ふ聲がした。

女房は驚いて走らうとした。力の强い手が背後から帶際をぐつと摑んだ。女房はお豊を抱へるやうにしてゐた手を放して、體をねぢ向け、帶際にかゝつた手を振り放さうとした。力の强い手は女房の首に絡みついた。女房は氣を失つて倒れた。

お豊の乳母が來かゝつて、女房を抱き起した。女房は氣がついてお豊を尋ねたが、その姿はもう見られなかつた。

お豊はそれつきり、永久に姿を見せなかつた。

三

水色ではあるが天鵞絨のやうに盛りあがつて見えてゐる隅田川の流れは、とろりとして動くやうにも思はれなかつた。その流れの上には、花見の客を乘せた大屋形船や、小屋形船や、屋根なしの小舟などが、重みのある水を艙具をなすつたやうに船の舳に絡めて浮んでゐた。屋形船には、淺黄や紫などの幕を絞つてあつた。幕の隙からは派手な衣裳の端がちらちらした。三味線の音をさしたり、小唄を歌つたりする船もあつた。鶏

のやうな小さな白い鳥が其所此所についついと浮いてゐた。下流の大川橋の方には、二三艘の五大力船が見えてゐた。

風の無い靜な日であつた。枕橋から千住の掃部宿にかけて、一里の間咲き續いた向島の櫻の下は、花見の人で雜踏してゐた。三圍、牛の御前、秋葉、長命寺、白鬚、木母寺などは、わけて賑つてゐた。茶番をやる群がある。空也念佛のやうに瓢簞を叩いて踊つて行く者がある。紙衣の揃を著て三味線を引く者がある。土手の下に筵を敷いて遊山をしてゐる所へ、よたよたと這入つて行つて、帶から扇子を拔いて一さし輕く舞つて見せる者もある。

牛の御前の前には、三十人ばかり行列のある葬式がやつて來た。側にゐた者は眉を顰めて遠のいた。葬式は境内の廣場へ行つて棺桶を下ろして、人々はそのぐるりに圓くなつて、手を叩いて唄ひ出した。唄ひながらぐるぐると廻はつた。そして唄つてしまふと、棺桶にぴつたり寄つて行つて蓋をあけた。中には酒や辨當が這入つてゐた。

三圍の社の前に頭髮を振り亂した若い男の氣違が現はれた。片肌を拔いて赤い繻絆の袖を出して、古い草履や草鞋を五つ六つ束ねた物を片手で振りながら、彼方此方と飛んでゐた。女を見かけると走つて行つて、そのまはりをぐるぐると廻つた。女達は氣味を惡がつて逃げ走つた。氣違は追かけて行つて、げら／＼と笑つて見せた。

氣違は土手に上つて花の散りこぼれる下で、古草履を振つて踊り出した。『色氣違だ、色氣違だ。』と云つて、四邊にゐた者は集つて來た。

氣違は踊をやめてきよとんとして立つた。そして手にしてゐた、古草履を前にゐた者に投げつけた。背の高い侍が立つてゐて、古草履はその顏に當つた。侍は怒つて刀の柄に手をかけた。

氣違は驚いて川の方へ土手を驅け下りた。水際には簀垂をおろした小屋形船が一艘著いて、艫の方には向ふ鉢卷の船頭が、棹を衝立てて人を待つやうな風をし

てゐた。氣違はいきなりその船に飛び乘つた。と、船頭が船を出した。同時に船の賓乘があつて、中から唄につれて三味線の音が起つた。五六人の男と女の顏が覗かれた。氣違は屋根の上に上つて、手早く帶を解くと赤い長繻絆の全身があらはれた。「……いざさらば、ありし雲井の花の袖……」と、下の地語りが唄ひ出した。物ぐるひの保名は、屋根の上で身振りをはじめた。刀の柄に手をかけてゐた侍も、土手の上で踊り出した。――これは八笑人の作者はじめ、文政頃の江戸人の頭に浮んだ向島の花見の趣向であつた。

陽は川向ふの樺色にくすぼつたやうな空に落ちかゝつてゐた。本願寺か淺草寺かの屋根と思はれる屋根が黑くその下に聳えてゐた。

長命寺と百姓家との間の田舍路を通つて、土手の方へ來た四人連の者があつた。四人連の中の一人は男で、それは三十前後の色の白い脇差を一本差した町人であつた。女の中の一人は、その男の母親であらう、白髮の交つた頭髮を小さな圓髷に結うてゐた。後の二人は皆二十歳前後の綺麗な女で、一人はその男の女房であるらしかつた。

土手の下の草の上に、六人ばかりの若侍が酒を飲んでゐた。若侍の一人は、ふと背後に顏をやつた拍子に、四人連の女に眼がついた。若侍は何か云ひながら隣の仲間の袖を引いた。仲間の顏も續いて背後に向いた。

二人の若侍は起ち上つて、四人の方へ向いて歩いた。二人は酒に醉つて、足許がよろよろしてゐた。

四人の者はその容子に氣がさしたので、急いで土手の上にあがらうとした。二人の侍はよたよたと走るやうにして、四人に近付いて行つた。

「おい、すこし賴みたい事がある。」と、角顏の侍が橫合から聲かけた。

町人の男は、三人の女を背後にかばふやうにして、前に出た。「何の御用でございます。」

「おれ達は、今、あすこで酒を飲んでゐる者じやが、

其所に居らるゝ御婦人に一つお酌が願ひたい。』と、角顔の連の脊の高い侍が云つた。

町人は悪い者に引かゝつたものだと思つて、困つた顔をしてゐた。

『そんなに困らなくつても、一寸お酌をして貰へば好い。』と、角顔の侍が酒臭い呼吸をしながら云つた。

『……平生であつたら、お酌さしても宜しうございますが、今日は少し取急いで居りますから、』と、町人は習慣になつてゐる揉手をして云つた。

『急いで居るなら、お前さんと其所のお婆さんとが歸るが好いだらう、』と、脊の高い侍は舌なめずりして云つた。

『それは困ります。あの二人の女子は、親類の者でござりますから、』と、町人は周章てゝ口から出まかせを云つた。

『お神さんなら心配だらうが、親類の者なら好いじやないか、一寸頼まう。』と、脊の高い侍が嘲けるやうに云つた。

角顔の侍はいきなり前へ出て、町人の背後の方に困つた顔をして立つてゐた女の一人の袖を捕へやうとした。女は恐れて身を退いた。町人が體の向を變へて、角顔の侍をへだてやうとした。角顔の侍は、力を極めて町人を突き飛ばした。町人は仰向けに轉んだ。年をとつた女が驚いて角顔の侍の前に來た。脊の高い侍が横合から突き飛ばした。年をとつた女も横倒れになつた。

二人の侍は、それ〳〵一人づつ若い女の手首を掴んだ。町人と年とつた女とは、起き上つて側に來たが、手が出せなかつた。侍は一所に女を引き立てゝ行かうとした。女は行くまいと身悶へした。

土手の上には、澤山の人が足を停めて、侍の狼藉を氣の毒さうな眼で見おろしてゐた。女は悲しさうな聲を出して叫んだ。町人は我を忘れて、角顔の侍の手にすがり付いた。角顔の侍は足をあげて、町人を蹴た。町人は後によろ〳〵と離れた。

土手の上から隼のやうに駈け下りて、角顔の侍に近

付いた者があつた。小柄な眼の鋭い田舍侍であつた。彼は角顏の侍に近寄るや否や、右の拳をその横顏に加へた。角顏の侍は驚いて、女の手を放して向つて來た。田舍侍は角顏の侍の胸のあたりを突いた。角顏の侍は倒れた。

田舍侍は、又脊の高い侍に向つた。脊の高い侍は、女の手を放して身構した。

『狼藉者、』と云つて、田舍侍は組みかゝつた。

脊の高い侍は、かなはないと思つたので、後に飛び退つて刀を拔いた。角顏の侍も白刄を手にしてゐた。田舍侍は二人を睨みつけて立つた。

陽は落ちてしまつた。土手の櫻は灰色になつて、碧く晴れた空が、一しきり明るく見えてゐた。四人の者は、もう側にはゐなかつた。

脊の高い侍が斬り込んで來た。田舍侍も刀を拔いた。三人が一二度刀を合せた。二人の仲間はこれを見ると、皆起ち上つた。

田舍侍の刀は、忽ち角顏の侍の額に觸れた。角顏の侍は仰向けに倒れた。脊の高い侍は恐れて刀を引いた。

二人の侍の仲間が四人で迫つて來た。田舍侍は土手に駈けあがつて、ふいと花見客の中に姿をまぎらした。

この田舍侍と云ふのは、山田と云ふ岡山藩の者で、勤番の暇にまかせて、夜晝遊びまはつてゐる所であつた。

山田は何喰はぬ顏をして、土手を上へ上へと行つて、その夜の五つ頃に千住に著いた。

千住まで逃げ延びれば、大丈夫だと思つたので、大橋の袂から二百文の約束で駕籠に乘つて吉原に向つた。

駕籠舁はかけ聲をしながら、調子を取り〳〵歩いた。駕籠は小塚原にかゝつた。『や、三つ並んでゐらア、』と前の駕籠舁がひとり言のやうに云つた。

『おい、此所で景氣をつけて貰はうな、』と、後の駕籠舁が云つた。

『よからう、』と、前の駕籠舁が同意した。

駕籠はふいと止まつた。「旦那、一つ景氣をつけておくんなさい。」と、後の駕籠舁が云つた。

山田は淋しい所へ持つて來て酒手をねだらうとする駕籠舁の根性が惡くかつた。默つて返事をしないでゐると、駕籠舁はいきなり駕籠を投り出すやうに置いて、二人で薄月のさした路ぶちの石に腰をかけて、火打石を出して煙草の火を點けはじめた。二人の背後の方には、首晒臺があつて、首らしい者が三つばかり黑く見えてゐた。

山田は靜に出て、二人の眼の前に行つた。「金をくれてやる、受取れ、」と云つて、血曇のある刀を拔いて振つた。

駕籠舁はびつくりして逃げて行つた。山田は刀を鞘に收めて、駕籠の所に歸つて來ると、その駕籠を前の田圃へ持つて行つて投げ込んだ。

山田は、それからぶら／＼歩いて吉原に行つたが、仲の町の通りは夜櫻で賑はうてゐた。寛保元年から植えはじめて、寛延二年から年例となつた夜櫻には、行燈の火が綺麗に這入つてゐた。縹色繻子に金絲で燕子花などを刺繡にした裲襠を著た花魁が、新造や禿を連れて、嫖客の間を縫うて五十軒の引手茶屋に往來した。裲襠には縞繻子羅紗天鵞絨などもあつた。前に垂らした帶は、錦純子羅紗などを用ゐて、中には刺繡のある物もあつた。立兵庫に結うた頭には、二枚櫛と八本の簪とが見えた。

山田は京町の小格子に馴染の女郎があつた。其所へ上つて一本飲んでゐると、店の方が騷がしくなつた。不審に思つてゐると、番頭が這入つて來た。

「旦那、お出でになる途で、駕籠舁と何かあつたんですか。」と番頭が云つた。

「千住の方へ用達に行つて、かへりに大橋の袂から駕籠に乘ると、小塚原で酒手をねだるから、引拔いて追拂つて置いて、駕籠を田の中へ投り込んで來たんだ。」と云つて、山田は笑つた。

「旦那、冗談ぢやありませんよ、今、下へ命知らずが十五六人も來て、今あがつた侍を出せと云つてゐるん

ですよ。」
「左様か、……どうして知つたんだらう、」
「後からつけて來たもんですよ、……仕方がない、裏口からお逃げなさい、後は私が好いやうにして置きますから、」
山田は幾等か番頭に心付をして、裏口から戸外に出たが、その儘屋敷へ歸るのも馬鹿〱しいから、駕籠舁風の姿を避け〱して、又千住の方に歸つて行つて、其所の女郎屋にあがつた。
彼方此方した爲めに、可成り遲くなつてゐた。それに疲勞れてもゐるので、もう酒も飲まずに直ぐ寢床に這入つて、薄暗い行燈の下でうつら〱としてゐると、敵娼の女郎が這入つて來た。
「もう睡つたんですか、お起きなさい、」と、女郎は山田の肩に手をかけて搖りながら、「お前さんは、今日向島へ花見に行つたんぢやありませんか、」
山田はふと氣がさしたので、頭がはつきりしたが、眼は有意と開けなかつた。「行かないよ、なんだ。」
「今日向島で喧嘩があつて、相手を斬つた者が、此方へ入り込んでゐるらしいと云つて、町役人が來て、審べてゐるさうだから、此所へも來るんですよ、」
「來たら乃公が斬つたと云つてやらう、」
「そんな馬鹿な事を云はふもんなら、それこそ係り合ひになつて大變よ、」
「左様か、」と、山田ははじめて眼が覺めきつたと云ふ風をして、眼を開けて、女の顏を見てにつと笑つた。
「もう遲いかな、」
「追付け夜明けですよ、」
「左様か、それぢやぐず〱しちや居られない。夜が明けてしまつては、家の首尾が惡い。」
「直ぐ歸る。」
「左様だ。今から歸らう、睡ると今度起るが苦しいから、」と云ひ云ひして、山田は大儀さうに體を起して見せたが、心は周章てゝゐた。
その夜が明け放れて、鼠色の雲のある東の空がぼうと明るくなつた頃、山田は上野の山下に歸つて來て、

ドンドンの側にある茶飯あんかけで評判のある家に這入つた。

茶飯屋には、もう先客が二人ばかり來てゐたが、未だ朝が早いので、調子が揃はない。煙草の火も直ぐは持つて來なかつた。やつと出來て來た酒は生ぬるくて氣持ちが惡い。山田の若い心はおれて來た。

其所へ又二三人の後客が來た。山田のはじめに注文したあんかけは來ずに、後客の膳の上にそれが並んだ。

「おい、かな聾」と、山田は大聲をあげて怒鳴つた。

酒や肴を運んでゐる番頭が揉手をしてやつて來た。

「おい、乃公の膳の上を見ろ、注文した物が來てゐるか。」と、山田は右の手を銚子にかけて云つた。

番頭は一眼見て直ぐ分つた。「これは、どうも相すみません。」

「相すむも糞もあるけい。よく耳をこれでほじつて置け。」と云つて、銚子を執つて投げ付けた。

酒が番頭の顏にかゝつて、銚子は土間に轉げ落ちた。

「金は後から屆けさす。」と云つて、山田はその儘戸外に出た。

山田はそれから間もなく不行跡が知れて、國に歸されて謹愼を命ぜられ、茶飯屋では行燈の隅に「すこしつんぼ」と云ふ文字を書き入れた。

四

江戸の花見の場所は、今も同じやうに、上野、向島飛鳥山などが主な場所で、それに續いて日暮里、小金井、御殿山、芝の山内などが聞えてゐた。その中で小金井の櫻は、享保年間に飛鳥山、隅田川につゞいて、將軍吉宗がはじめて植ゑ、それから元文と嘉永の二度に補ひ增したものであつた。

花見は赤裸々な平民的な所に生命があるが、それでも貴族的技巧的な德川大奧などのやうな花見にも情趣のない事はない。

大奧の花見は、吹上の御庭で催した。その日、將軍夫人の御臺所は、美しう著飾つた數百人の女中を從へ、御中﨟に手をあづけて、大日御門から山里の御庭に入り、それから吹上の御庭の瀧見の茶屋に行つた。

その日は無禮御免と云ふ事になつてゐるから、女中はもう大日御門を這入つた時から騒いだ。

表使とお使番とが立ち合つて、お成の刻限までに瀧見の茶屋をはじめ十餘ヶ所の茶屋に、飾り付けをし、道具を運び、又庭の櫻の下の芝生に薄緣を敷いて、奥御膳所からは料理を取り寄せてあるから、御臺所が瀧見の茶屋に著くと共に、花見の宴が直ぐに開かれるが、御臺所にお相伴仰せ付られるは、お側の女中ばかりで、他の多くの女中は、自儘に場所を撰んで、酒を飲み肴をたべた。茶屋茶屋には、お仲居お末が燒團子田樂を構へて押賣りをしてゐた。女中達は、興にまかせて、唄つたり踊つたりした。狐拳をやつて、負けた者は著物を一枚一枚と剝がれた。鬼ごつこをする者は、白い脛を露はして走つた。

御臺所の前では、和歌がはじまつて、出來た歌は軒端に近い花の枝につるした。お側の女中の短冊を持つて考へ込んでゐる姿が向ふの築山の上からも見えた。一人の女中は、筆を控へてうつとりした眼をあげて、櫻の梢越しに戸外を見た。お末達の揚げる大紙鳶が空にうなつてゐた。ちもとの木につけてある袋から、種々の細工物が花の散るやうにひらひらと落ちた。鬼ごつこをしてゐる女中達は、遊びをやめてその細工物を拾つた。

かうして時の移るのも忘れて樂んでゐると、お矢倉の太鼓が七つを報じた。七つの太鼓が鳴れば還御が近いので、女中達は遊びをやめて衣紋の亂れを繕ふてゐると、お使番が來て、還御をふれ歩いて、花見の幕を下ろすのであつた。

老女と美少年との對話

生方敏郎

景

三越呉服店の休憩室。テーブルがところ〳〵に有り、その周圍に白布で包んだ椅子や長椅子が有る。それには男や女が懸けてゐる。何れも美しい衣服を着てゐる。此中にゐる人間は皆お客様かといふに、必ずしも然ではない。買物が目的でなく、たゞ此所へ來るのを目的として來る者が澤山ある。美しい着物を見る爲めに來るか、美しい着物を見せる爲めに來るか、兎に角一月の中に二三度は、三越を訪問しないと神經衰弱に罹るといふ婦人が甚だ多い。男はそのお供として附いて來るか、又は淸潔な便所を拜借せんが爲めに來るかである。彼等は椅子に腰打ち懸けて、自分の前に運ばれる接待の茶を、お客様のやうな顏をして、悠々と飮んでゐる、同じく接待を受けても着物が無ければ乞食である。着物が有ればお客様である。

人

老貴婦人――一見して婦人嬌風會愛國婦人會花の日會等の一員たるべき服裝をしてゐる。貴婦人にふさはしい裝ひであると同時に、貴婦人にふさはしい心懸をも持つてゐる。之は實は、西鶴の筆に、その行跡を留めた一代女の轉生である。

美少年は大學の制服を着て、角帽を冠つてゐる。そして、現代の大學生にふさはしい心懸を持つてゐる。彼は昔一代男と呼ばれた世之介の子孫、世太郎だ。世之介は七才から五十四才までに、三千七百四十二人の女にたはむれ、七百二十五

人の少人を弄び、天和二年神無月の末に好色丸と呼ぶ船に乘つて女護島へ渡らうとして、日本を去つた。その後の消息は誰も知らなかつた。

時　現代――春。

美少　いや、全く、意外でした。こんなところで、貴女に逅ふといふことは！

老女　さうねえ。逢ふといふことは、毎も不思議な運命ですわね。同じ時代に、同じ土地に住んでゐても、一生に一度も逢ふ事なしに永久に別れてしまふ者もあれば、時を距てゝも肝膽相照の知己であつたり、遠くはなれて生れても、一つところへ落ち合ふ事もあるでせう。だから、逢ふ事は死ぬ事よりも不思議な運命ぢやないの。死ぬ方は、生れゝば、屹度死ぬものと、初から極つてゐるんだけれど。

美少　本當に、意外でした。

老女　いゝえ。けれど、此所で會つたのは、そんなに意外ぢやないことよ。此所は、あなた三越ですもの。けれど、若し、これが、慈善市か慈善音樂會か、帝劇か、廢娼運動の演說會か、または花の日會でゞもあつたら、一層、自然だつたかも知れませんわね。

美少　何です。慈善市ですつて？　慈善音樂會ですつて？　廢娼運動の演說會ですつて？花の日會ですつて？　それは、何れも神聖な場所でせう。そんな神聖な場所で、貴女にお目にかゝるのが、自然なんでせうか？　一代女とまで謳はれた、あの浮氣女の――失禮ですが、浮氣女の、貴女が……

老女　私が浮氣女？　えゝ。さうなのよ。私を浮氣女と呼んだつて、そりやあ、ちつとも失禮のことはありませんよ。女は、美貌と手管がありさへすれば、誰も皆、浮氣女ぢやないこと。丁度、男は、勇氣と金力が有りさへしたら、誰も皆、蕩兒であるやうにさ。その上、淫蕩は、鳥度考へると他を誘惑することを好むものゝ樣に、思はれてるけれど、實は、却つて、他の誘惑に陷り易い性質のことなのぢやありませんか。だから淫蕩は決して刑法上の罪惡ぢやないでせう。男子

でさへ、堂々たる五尺の男子でさへ、嘘を吐かうが、法螺を吹かうが、おべつかをしやうが、人をかつがうが、友を裏切らうが、主人の陰口をきかうが、弱い者をいぢめやうが、長い物に巻かれやうが、意久地が無からうが、しみつたれであらうが、高利を貸さうが、その高利貸の息子を取巻かうが、刑法の網にさへ觸れないならば、少しも耻とは思はない現代ぢやないの。それに深溝位のことが、何で女の恥辱でせう。

美少　え丶。刑法に問れたからとて、あんまり恥とは思つてやしないでせう。植疱瘡をして、左の腕を掻いてゐる人は時々見かけるけれど、收賄をして耻をかいてゐるらしい官吏は近頃見かけませんからねえ。要するに　現代の日本は、耻といふものが品切れのやうですね。孔子が役人たるの第一の資格は耻を知る事だと說いた、その耻は！

老女　耻は品切れですとも。けれどその代り、僞善なら、ずいぶん輸出しても、まだ有り餘る位、澤山あるわ。宗教界にも、教育界にも、貴婦人の社會にも、學者の中にも、政治家の中にも、藝術家の中にも。戀愛の中にも。結婚の中にも。葬式の中にも。

美少　結構ですね。私は又、密航婦だけを輸出してゐるやうにばかり、聞いてゐましたが、なるほどこりやあ曲學阿官だの、僞善だのといふものも、大に輸出して見たら、面白いでせう。人は善人である場合に、人を得て物を失ひ、惡人である場合に、物を得て人を失ふのです。けれど、僞善者である場合には、人は善人と惡人と、その双方の利益を同時に收めるのです。だから此僞善こそは必ず、外國へ輸出したなら、乾度大に歡迎せられる事でせう。

老女　さあ、まだ、輸出しては見ないから、果して外國で、これを歡迎するかどうかは疑問だけれど、內地の需要は、とても供給し切れないほどなのよ。それに、僞善も、國々に依つて夫れ〳〵注文といふものがありますからねエ。章魚や海鼠が、いくら美味しいからつて、それを西洋へ輸出しても、喰べる人は恐らく一人もないでせう。僞善だつて、矢張り、そうだわ。

小學校の生徒を、氏神樣の社へ參詣させたり、お客の前で、女房を打毆つたりするやうな僞善を、むやみに輸出したからつて、どこの國の貿易商が、之れを受けとるものですか。

美少　そうですか。それなら、强ひて、僞善の押賣りなんかは、しないでもいゝでせう。僞善でなくつても、貞操の押賣りだの、出兵の押賣りだの、大和魂の押賣りだの、殊に婦人に對して、自覺の押賣りだの、青年に對して、抱負の押賣りだの、貧乏人に對して、節儉の押賣りだのも、あんまり、香ばしくはありませんからねエ。

老女　ですが、押賣りは惡いかも知れないけれど、節儉なんて、鳥渡、おつなものぢやあなくつて？　かなりの富豪の奧さんが、下駄と裾の儉約をして、自働車で買物に出るんなんかは結構ぢやありませんか。

美少　そりやあそうですとも。金持がやると、大抵なことが、結構になりますよ。貧乏人が、質素にすると、麥飯と菜つぱばかり喰べて、營養不良になつたりするものですが、金持が質素にして、大島か何かで間に合はせて置けば、着物も、長保ちがして結構です。そして大きなダイアの指輪をはめ、プラチナの時計を時々、出して人に見せつければ、その質素は、貧乏のためからではなくして、道德心のためであることを示す用意にもなりませう。

老女　實際それは、何事に依らず、道德心から行動しなくつちや、いけませんよ。顯官の人の息子に、學資を提供したいといふ、高尙な、義俠的動機から、一萬圓の賄賂を贈呈したといふ事は成金としては、左も有る可き事だわね。舞臺の上の藝術家を、富ましめて、後援してやらうといふ道德的動機から、役者を買ふ貴婦人や、慈善事業に義捐する目的の道德的動機から、花を賣つて大正婦人のお轉婆振りを、見せることの出來る貴婦人達は、實際尊敬に價ひするぢや、ありませんか。また、何かの道德的動機――必ずそれに違ひない――から、菜食主義を採る人々は、たゞ、貧乏の動機から、野菜物を喰ふ、哀れな人々に比べて、どんな

に道徳的に、えらいことでせう。軍國主義を打破しなければならないといふ道徳的動機から、血を流し骨を積む戰を續ける國々は、良い教訓を青史に遺しますわね。

美少　そう承はると、世の中に、道徳的動機から、やらないものは、一つも無いやうに思はれますね。泥棒をするのも、その金で、吉原の花魁を喜ばせやうといふ道徳的動機からかも知れません。火つけをするのも、材木屋と大工に利益を與へやうといふ、道徳的動機からかも知れません。賣淫をするのも、淋しい男を、暖めてやらうといふ、道徳的動機からかも知れません。ところで、戀愛をするのは、どんな道徳的動機からでせう？

老女　そうねえ、凡そ日本人のやることで、武士道と、國民道徳的動機とから出發しないものは、一つもないだらうけれど、戀愛ばかりは、そうでないと、見えますのね。若し戀愛が、賄賂や御用商賣や、廢娼運動と同じやうに、道徳的動機から、やるものだとしたら、あの正義好みの宗教家や教育家達が、憤慨して、とめもしなからうし、あの正義好みの田舍新聞記者が、戀愛事件を筆誅することも、無からうぢやありませんか。

美少　では、戀愛は、どんなところから、初まるのです？　一代女のあなたのことですから、戀愛のことなら、裏も表も御存知でせう。今日は、一つ、みっちり聞かせて頂きたいものですね。戀愛の、創世紀から默示錄まで。

老女　いゝえ。私は、戀愛といふことは、殆んど經驗がありませんのよ。私の仕たのは、浮氣ですから。私は、戀愛なんて、あんな賤しい眞似は、したことはありません。貴婦人ですもの。

美少　おや、そうですか。戀愛が、何故賤しいんです？　そして、浮氣が、なぜ貴いんです？　私は、戀愛は神聖だといふことを、何度も、聞かされて居りますが。

老女　あら、どこの大學の講堂で、戀愛の神聖だといふことを、講義した博士がありますよ？　いかに、

浮氣の價値と、戀愛の價値との高下を辨へない無識漢でも、若し多少なりとも自分の經驗があるものなら、戀が神聖なのではなくつて、戀の對照物が神聖だと、想像したゞけだ位のことは、わかつてゐませうに。實を言へば、その對照物だつて、神聖だか、どうだか、わかつたものぢやあないんだけれど、そりやね、戀愛も、勞働が神聖な位の程度に迄は神聖ですよ。若し、勞働が神聖だとすれば、その神聖なものゝ持主たる勞働者は、社會の尊敬を受けなければならない筈でせう。けれど、誰も、勞働者を尊敬するものは無いぢやありませんか。そりやあ、勞働者だけが、其の勞働の對照物たる、勞銀を神聖だと思ひ込むといふ事を、言つた迄に過ぎないのですよ。勞銀は、お金ですもの。お金なら、崇拜する者は、無數にありますわね。つまり、神聖だからでせう。だから、勞働神聖論といふのは、勞銀神聖論の間違ひで、戀愛神聖論といふのは、戀愛されたる女人神聖論の間違ひでせうよ。若し戀愛が神聖だとすれば、その戀愛をしてゐる男子が、少しは世間の尊敬を受けさうなものだけれど。誰も、女に惚れる男なんかを、尊敬する者なんか、有りやしませんよ。惚れられた御當人の女ですら、自分に惚れる男なんかを、尊敬しやしませんよ。だまされてる場合は別ですけれど。

美少　と言ふと。

老女　戀するのでなくつて、戀するが如くに、だます男に對してなら、女は隨分、尊敬を拂ひもしませうよ。自分に對して、甘い男なんぞ、誰が尊敬するもんですか。その男が、執拗ければ、蛇か、ゲヂゲヂ位の程度には、認めもしませうが、若し、善人なら、道傍の石ころ位にしか、思はないし、若し、面白い男なら、拾錢の人形位には、考へるでせう。子供が、人形を可愛がつて、手足を引拔いてから、それを捨てゝしまふやうに、女は、自分を愛する男を、可愛がつて、玩具にして、魂を引つこ拔いてから、捨てゝしまふんですよ。

美少　そうだと、男は善人だつた日にや、隨分、馬

鹿を見ますねえ？

老女　どこに置いても、貧乏籤を引くのは、善人だけれど、その内にも、善人が、最も馬鹿を見るのは、女を戀した時でせうよ。尤も、女は、えらい男に戀せずして、えらさうな男に戀するやうに、善良な男に、戀せずして、善良さうな男に戀し、親切な男の愛を受容れずして、親切さうな男に、目星をつけるものですよ。たゞ、何かの間違ひで女の方から戀されて、その陥穽に落ちた男には、善人も、親切者も、利口者も無いことはないだらうけれど、自分から、女を愛して、手に入れた男などに、碌な人間があるものですか。否、恐らく、眞心からの戀をしたものならば、失戀しない男は、一人も無いでせう。男の眞實の戀は、必ず失戀です。失戀に終らないやうな男の戀は、必ず、眞實の戀ではない。この場合だけは、逆は必ずしも眞ならずといふ疑を入れる餘地がないのですよ。

美少　成程、考へて見ると、戀なんて愚なことですねえ。

老女　けれ共、多くの智慧が、その中から引き出されますよ。だから、まだ、この位、聞いたところで、たゞ、愚なこととして戀を捨てるのは、早計ですよ。戀は、愚なことであるばかりでなく、また、賤しいことなのよ。お料理は、よろしく女中かコックの手に任せて、一家の息子や令嬢は、たゞお膳に向つて、箸を取れば、行儀がいゝ譯でせう。いくら、とろろ飯が好きだからと言て自分で、お勝手へ飛込んで、擂木を振り廻はすならば、賤しい令息令孃として、周圍から非難されませう。縁組も、それと同じ事、他人の拵へてくれた嫁聟で、おさまれば、良家の息子娘として、通りませうさ。けれ共、これを他人任せにしないで、自分でお料理をするのが、戀といふものです。

美少　では、料理屋へ上つて、夕飯を友達と共にするのは、どんな戀でせう？

老女　それは、女郎屋か、待合へ行くやうなもの。少しお金は高くつても、美味しいものがあるかも知れませんよ。その代り、お父さんや、お母さんの、お料

理とちがつて、滋養になるかならないかは、別物です。

美少　つまり、美味しいのを攝るか、滋養をとるかの、二つの場合が出てきますね。

老女　それですよ。衞生家、實利家、道德家は、滋養の多いのをとり、理想家、藝術家、浪漫家は、美味の方を取るでせう。それが、最も、經濟的な家財道具としての、女房を得る結果に終るか、不經濟で、そしてこの上もなく、面白い情人を得るの結果に達するかの、岐れ路でせう。

美少　そこで、その面白い情人を手に入れる戀の仕方は？

老女　戀で面白い情人は、出來やしないわ。戀は、先刻も言つたとほり、その網の中に、女を掬ふことは、出來ない。どんな大きい女でも、必ず、戀の網目からは、脫げてしまふでせう。情人を、捉へる鈎は、浮氣といふものですよ。

美少　浮氣と言へば、操の無いことでせう。そんなもので、釣り寄せられる女は、どうせ碌なものではないでせう。

老女　浮氣は、操の反對のもののやうにお考へだと、大きに違ひますよ。浮氣は、刹那的の操のことです。そして時には、狂的にまで、白熱的な、操です。たゞ、罌粟の花のやうに、命が短いといふばかり。美しさも、それに似て……。それにね、操が、如何に貴くても、金剛石で、魚は釣れませんからねえ。やつぱり、女を釣るのは、浮氣といふ罌粟の花に限りますよ。

美少　では、女が男を釣るには。

老女　たゞ女が逃げさへすれば、男は屹度、何處までも、釣られて行きます。女は、こんな場合にも、餌や鈎は用ひませんよ。たゞ、追駈けて來る男の意志が弱く、足が弱く、相互の距離が廣がり過ぎたりした場合にだけ、男の方から投げ掛ける鈎の餌を、食ひ逃げすれば、充分ですの。女は秋波一つだつて、男のためになんか、無報酬で、贈りはしませんよ。秋波や、媚態を時として、女は、男の位置か、名譽か、財産に對し

て、提供する事はありませう。無論、報酬が目的で。

美少　そして男は、眞心を以てこれに酬ひましたか？

老女　愚かな男は、いつも、そうします。けれ共、眞心や親切は、女の世界では、通用しない紙幣ですよ。

美少　では、女は、男の親切を無にするのですね。眞珠を與へられた豚のやうに、足でこれを踏むのですね。女は他の好意や親切を、奈何に取扱かふべきかといふことを知らない。

老女　けれど、又そうされることを、却つて男は喜んでゐるやうですから。眞珠を踏み躙つた女といふ豚の踏んだ土を、男はエルサレムのやうに神聖な地面として、そこに、いや高い戀愛の殿堂を建てますよ。

美少　そして、その中へ、相手の女を祀り込まうとするのですね？それからも亦、女は逃げてしまふんですか。

老女　もう、その時には、男の眼には、女は這入つてゐないのです。そして、女から、女の一番大切な肉體を捨てゝしまはうとするのです。女の鼻汁も、女の汗も、女の垢も、女の臭氣も、認めてはゐない。女を、冷たい大理石の塑像か、平べつたい畫像にしてしまうとするのです。そして、その塔の中へは、自分の魂を祀り込むのです。戀愛といふ自分の魂を！　そして、自分は、この祭司になつて、鯱こばつて、齋き、戀愛神聖經を讀み上げて、善男善女から、お賽錢を投げさせやうと言ふのです。それが、詩人ですよ。戀愛家ですよ。

美少　そんな詩人がありましたかなあ。

老女　詩を作るものばかりが、詩人ぢやありませんよ。丁度、詩を作つたからとて、必ずしも詩人ではないやうに。この戀愛の殿堂の神主様は、みんな詩人です。ほんたうの女といふものを知らない、女の信者です。丁度、神を知らない、神の信者が、澤山あるやうに。

美少　では、本當の女を知つてゐるものは誰ですか？

老女　そんな者は、恐らく一人も無いでせう。女を味つた者はある。女に觸れた者はある。女を掴むだものはある。けれ共、女はどんなものだかといふやうな事は、女自身でも、知らないでせう〳〵女は、毎日、鏡を見てゐる癖に、自分の顔を知らずにゐる者ですよ。古への物識で、何かと、世界の人を數へることの好きな、聖賢でさへも、女のことは、餘り知らなかつたやうですね。これを造つた神樣も、あんまり、よく、御存知ありますまい。たゞ、女は、アダムの肋骨から造られた。だから、後で出來た。それだけ、男より、よく出來たといふ女人崇拜家の説と、いやいや、女は、肋骨のやうに曲つてゐる、眞直にしやうとすれば、折れてしまふといふ女人憎厭家の説とがあります。女といふ魔性の物體には、X光線もF光線もどんな光線も透さない。たゞ、古來の浮氣家のみは、趣味の材料として、女を取入れてゐますよ。

美少　それは、どういふ事ですか？

老女　女は、趣味を持たない。けれ共、賢い女は、自分自身を趣味にする。戀愛家が、女を「神聖」の、レトルトに掛けて、蒸溜させ、揮發させてしまふ側らで、浮氣家は、これを料理して、妾にしたり、情人にしたり、家庭教師にしたり、小間使ひにしたり、看護婦にしたり、友人にしたり、樣々なものにして、その味ひを喰ひ分ける。戀愛は、食慾から、女をつまみ、浮氣家は、風流から、女を弄ぶ。だから、戀愛家は、僥倖にして、一人の女を食へば、堪能する。時としては、その一人の女をすら、消化し得ずして、胃弱症を牽起し、離婚といふ荒療治をしなければならないやうな事にもなる。世の中には、この不消化な女が、極めて多く、從つて、胃弱の男が、また極めて多い。浮氣家は、嘗めてみて味ひ、嚙んで見て味ふ、そして、美味い美味いと言ふから、それを聞いて、女は、肉を一と切れずつ渡す。みんな、渡してもいゝといふ顔を、女がしても、浮氣家は、一度にみんなは受取らない。いつも、たゞ、肉の一片を所望する。

美少　釣鈎の餌をすら食つて逃げる程、狡猾な女が、そんな讃め言葉に、瞞されて、自分の肉を渡すでせうか。

老女　そりやあ渡しますとも。男は眼に依つて戀をなし、女は耳によつて戀をすると、あの情事知りのオスカア・ワイルドが、言つてゐるぢやありませんか。だから、女は男からコスメチックでてか〳〵する頭だの、漸と戴つかつてゐるやうな金縁の鼻眼鏡なんかを、見せつけられるよりも、一寸した出鱈目のお世辭を擂かれた方が、嬉しいのよ。——勿論、金縁の價格はチャンと認めてゐるけれどもね。

美少　女の眼は、そんなに鈍感なのでせうか。美といふものに對して？

老女　いゝえ。ちつとも、そんな事はありはしないわ。女の眼は美に對して鈍感でないばかりではなく、恰度、宿屋の番頭が客の懐中を洞察するやうに、美の經濟的價値をも洞察するのですよ。女の眼はX光線ですもの、それが、物質的の物でありさへすれば、體の中の何處に隱されてゐても、屹度觀破せずには置きませんよ。男の身分、男の地位、男の收入——そんな物は、一つも彼女の視野から外に立つ事は出來ませんよ。

美少　さうですか。そして、たゞ、男の誠意だけが、女の盲膜に映らないのですね。

老女　えゝ。男の誠意なんて、よしんば認めたからとて、それが女に取つて、どれほど難有い物でせう。女の唇が紅い間だけ、女の指が白い間だけ、女の胸が柔い間だけ、之を讃めやうとか、握らうとか、抱かうとか考へる——そんな誠意が、何で女にとつて嬉しい事でせう？ほ、ほ、ほ、ほほ、男の誠意！男の眞實！言ひ換へて見りやあ、野心ぢや有りませんか。ナポレオンが如何に亞細亞を愛慕したからとて、それは取るのが目的だと知れゝば、亞細亞は、そんなに嬉しがりは、しませんよ。

美少　では、男の誠意を單に、所有慾とのみ、貴女は解釋されるのですか？　そして、その爲めに、男の

誠意を、蔑すむのですか？

老女　いゝえ。所有慾なら、男ばかりが持つてゐるのぢやないことよ。女にも、所有慾は可也働いてゐますわ。男の魂を奪つてやらう。男の體から、男の汗と膏をしぼり取つてやらう。男に感謝させながら、男をして自分を養はせてやらう。自分の子供を養はせてやらう。自分の飼ひ猫を養はせてやらう。女だつて、その位の所有慾も野心も、お腹の中にちやあんと、持つてゐますよ。けれど、自分の所有慾を滿足させやうとすると、時々却つて、男の所有慾の犧牲に終る結果を齎らすことが、ありますからねえ。これが、なか〳〵冒險なのよ。これが、男の浮氣家のする冒險のやうに、多分の好奇心の爲ぢやあ、なくつて、可也、細かい打算からなのですからねえ。

美少　男だつて、結婚する時には、乾度、算盤を置いてみますさ。戀する時にこそ、無打算になりますがね。

老女　ところが、女は、何那場合にでも、打算を忘れやしませんよ。

美少　それでも、美人は屢ば惡漢の喰物となり、賢い女は常に詰らない金持の家庭を、最後の牢獄とするのは、何故でせう？　少し、論理が合ひませんね。

老女　どうして？　それに不思議はないでせう。計算家必ずしも、計算上手とは言へませんもの。女は常に勘定が好きだけれど、屢ば勘定をぐれるのですよ。

美少　では、元へ歸つて、伺ひますが、何故、女は眼で見て、戀をしないんです？昔、太原晉陽の人、王濛は姿容が美しかつた爲めに、家は貧乏だつたけれども、帽子屋の老婆から新しい帽子を貰つたといふ、話がありますね。又、お祭佐七が表を通れば、町娘がお祭りのやうに、見に出たといふ話さへあるぢやありませんか。

老女　そりやあ、帽子位はやりもしませうさ。けれども、女は魂までは贈りはしませんよ。又、美しい物ならば、大濤や火事をでも、窓を明けて眺めもしませうさ。けれど、いくら火事が美しいからと云つて、誰

が好んで火事の中へ飛び込んで、身を燒くものですか。

美少　火事を見て、その中に飛び込まなくつても、波の音を聽いて、その中に飛び込めば、危險は結局、同じことぢやあ、ありませんか。これでは、耳に依つて、戀をするも、眼に依つて戀をするも、全く、同様な結果に到着するぢや、ありませんか？　況んや、それが、微妙な音樂でも、赤心の聲でもなくして、出鱈目のお世辭で、誘惑されぬなどとは、實際、以つての外ですね。

老女　まあ、そんなに、御心配には及びませんよ。女にとつては、その出鱈目の男のお世辭が、微妙な音樂とも、赤心の聲とも響くのだから、結構でせうがね。そりやあ、お世辭でさへあれば、出鱈目でも、嘘でも構はないのよ。

美少　成程、その點は、女も藝術家のやうだ。モウパスサンが、文學者の尤も好むところは、讃められる事にある、と言つてるのは、即ちそれです。

老女　いゝえ、〱、ところが大違ひ。女は藝術家の樣な、空想家とは違ふことよ。藝術家は、本當に讃めて貰ひ度いんでせう。讃められる樣な事をしたものと、自分を空想してさ。之に反して、女は嘘から讃めて貰ひ度いんですよ。先刻から、出鱈目でいいからと、何度も、私、言つてるでせう。猶一層ハッキリ言へば、出鱈目にでもといふよりも、出鱈目の方が一層結構なのよ。

美少　不思議な心理狀態ですなあ。

老女　不思議でも、何でもない。つまり、女は男よりも正直だからなのよ。だから、聲がいゝの、髮がいゝの、と眞向から讃められると、何うしても神經衰弱に成らずにはゐないわ。貞女だなんて物々しく祭り上げられて、ひもじい目に逢はされてゐる、可愛相な寡婦さんが、まア世の中には何の位ゐるだらう！　だから、寡婦に對つては細君の時のやうに讃め、細君に對つては娘に對する如くに讃め、娘に對つては、赤ン坊であるかの樣に、お讃めなさいよ。

美少　はゝあ、では、女は、男を、そんな嘘つきだ

と、思つてゐるのでせうか？

老女　いゝえ。大部分の男は詩人よ。嘘吐きは女の方の持前ですわ。

美少　こりやあ、おかしい。あなたは、先刻、女は男よりも正直だと仰言つたではありませんか！

老女　えゝ。正直ですもの……女は、實際、正直な嘘吐者(うそつき)なの。自分は正直で、その癖、嘘つきで、又、その癖、他に欺されるものなのよ。

美少　そいつは、仲々、念入りですね。

老女　でも、それは、仕方がない。さう生れついて來たのだから。ねえ。さうぢやありませんか。鼠は鼠だけれども、鼠が好物といふでも、ないでせう。猫は鼠でないけれども、鼠を喰べるのが好きでせう。それと同じことだわ。女は正直だけれども、嘘が好きなの……だから嘘をつくの……女は他を欺(だま)すのが好きなの……けれども、毎も他に欺されるの。けれど、男も、矢張欺される事が好きですよ。手管の有る女に、屹度引(ひつ)かゝるところを見るとねえ。

美少　さうすると、男も女も、嘘が好きだといふ事に成りますね。詩人は別物としまして……こりやあ、一體、何ういふ譯でせうね。

老女　嘘が一等本當らしいからでせう。嘘は、本當その物よりも、一層本當らしいんですもの

美少　では、本當、その物は、皆が何故好かないんです？

老女　好かない事も無いでせう。男の中には、眞理の好きな浪漫家(ロマンチスト)もありませうよ。けれど、本當なんて、何處々探しても、無いんですものね。だから、眞理を好む浪曼家は、詩人は、失戀家は、結局一等に近い眞理虚僞と同棲する事に成り、そして浮氣家と稱するリアリストは、最後に虚僞を享樂するやうに、成るのでせうよ。

美少　さうすると、女と浮氣家との、嘘に對する關係は同一ですか？

老女　そりやあ、違ひませうね。浮氣家は嘘を享樂し、女は嘘に執着するのですから……

美少　嘘に次いで、女の好物は何ですね。おさつの

ふかし立てですか？　襦袢の襟ですか？

老女　何れも皆、結構だわね。けれど、日本の女が嘘と同じ位好きなものは、若裝りをする事と、泣く事でせう。今日あたり、此所(三越呉服店)へ來てゐる奥樣がたの、服裝をごらんなさいな。皆な、自分の娘より若く見せやうと、してゐるやうぢや有りませんか？元祿時代よりは、また一層派出好みですわ。

美少　生れるから、死ぬる迄、人間ばかりは着物の御厄介に成り通しです。若くなるのも、老ひるのも、男になるのも、女になるのも、紳士になるのも乞食に成るのも、呉服屋さん次第ですからね。ハムレットは、墓場でばかり哲人めかしい事を言つてゐずに、時々は三越へでも來るがいゝです。墓は死人を白骨にするに止まつてゐるけれど、呉服屋はお婆さんを娘のやうにも、しますからねえ。呉服屋は人生の樂屋ですからねえ。

老女　けれど、駄目ですよ。若裝りを以て、男を引付ける事は出來ますけれど、鏡を欺く事は到底出來やしませんもの。クリームでもお白粉でも、かくすことの出來ない皺が寄つて來ますから。

美少　さうですか。中世の錬金學者等はアトラメンタムといふ藥を以て、銅を黃金にする方法を考へた相です。しかし、不老不死の仙藥は、誰も發明した者がありませんね。尤も肉芝といふ植物を喰へば、仙人に成れるといふ事までは、物の本に書かれてゐますが。

老女　けれど、仙人ぢや、汚なくつて困るわね。女の求めるところは、いつ迄も若くつて、綺麗でゐたいんですから。

美少　ほんとうに！　私は昨日も上野へ花見に行つた時も、つく〳〵さう思つたのですが、こんなに澤山ゐる美しい若い女を、皆なお婆さんにするのは惜しいもんですねえ。自然ほど不經濟なものはない。醜い女だけをお婆さんにして、美しいのは、永久に若くして置いてもらひたいですがねえ。

老女　それが、仲々、そう行かないんですの。醜い女には年齡がないけれど、美しい女は晩年に成つて、

なんだか復讐でもされるのぢやないか、と思ふほど怖ろしい姿になるわねえ。

美少　そんな譯で、女は泣くのですか？　それが悲しいので？

老女　いゝえ。女は悲しい時にばかり、泣きやしませんよ。泣く事は、愚かなる妻の唯一の曲藝であり、賢い少女の猫を被る事の手習ひであり、そして美人の最も大切な商賣道具ぢや、ありませんか。

美少　お言葉の中ですが、美人は何んな商賣をやるのです。「ウォーレン夫人の職業」ですか。官製烟草の販賣ですか。

老女　烟草屋さんは烟草を賣り、美人は美を賣るのです。そりやあ、三味線を景物にして、美を賣る場合も有れば、お菓子や文房具を景物にして、美を賣る場合もありますの。けれど、一等値段よく、美を賣らうと思へば、涙を景物にして賣ることでせうよ。この時には如何なる男も、釣錢を要求しやあしませんからね。ウォーレン夫人の職業は、美を賣ることよりも、あれは美を景物にして肉を賣るのでせう。あれは、肉屋さんですよ。肉屋さんも、近來益々需要が多い相で大に發展して來ましたね。どうも、女は潰しが利くといふ幸福を持つところ、やゝともすると、直き肉屋さんになるのですよ。そしてロクでもない肉を販賣するには、閉口しますことね。

美少　いや、近來はモグリの肉屋が多いから、むしろ同情に價ひする位でせう。だが、肉屋が美を景物にしてゐるのは、たしかに美に對する冒瀆罪ですね。婦人矯風會が廢娼運動をやるのは、つまり此冒瀆罪を責めるところからなのでせうね。

老女　いゝえ。あの人達は、自分達が娼妓と同業者でない事を、社會の人々に認めさせて置く必要からですの。また、あなたなんかも、他人の美の冒瀆罪を責めるより、自分達が美の盗人だなんて言はれないやうになさいよ。自分の眼にある梁を取りもしないで、姉妹の眼にある塵を取らせよと、いふのぢや困りますわ。

美少　これは。思ひも寄らないこと！　私がいつ他人の美を盗みました。

老女　おホ、ホ、ホホ、開き直つて何事ですねえ。他所の美人の顔をチョイ〳〵見て、一眼惚れや岡惚れをするのを美の盗人といふのですよ。電車の中だの、お芝居には、美の盗人がずいぶん多いわね。

美少　成程、しかし、天下の寶ともいふ可き美人を、獨占する者があつたら、それこそ却つて美の盗人ぢやありませんか。電車美人やお芝居美人をかいま見る等は、ぐつと罪の輕い方でせう。時に、閑話休題として、一體、人間が戀愛をする目的は何でせう。

老女　戀愛をするのは、人間ばかりぢやあ、ないことよ。初めの人は、鶺鴒に敎はつて、戀愛をしたとさへ、いふ話がありますね。さうだと、人間よりも、鳥の方が飛行術と此道とにかけては、先輩のわけですね。犬猫も戀をすれば、蟲も戀をする。しかも、彼等は、露骨にして、大膽な戀を、するぢやありませんか。ところで、戀の目的を、おたづねでしたね。ちよつと考へれば、それは、遠距離にある異性同志が、互に、接近して、相接觸しやうと努力することに、ある様ですね。二人一緒に暮すなら、竹の柱に萱の屋根、手鍋さげてもいとやせね。といふ文句が、それぢやあ、ありませんか。

美少　それだと、汽車か、電車か、自働車か、船か、何なりとも、運搬する機械がありさへすれば、そんな戀なぞはなくつても、すむわけですね。

老女　ところがさうはいかないのよ。まだ、その先きがあるんだから。

美少　おや、まだ、先きがあるのですか。手鍋さげてから、何うするのです。飯でもたいて、喰ふのですか。

老女　そりやあ、勿論御飯も食べますよ。その後で、子供が生れます。そこで、この子供を生むことが、戀愛の目的だといふ説もあるけれど、また、當人同志は、別段子供が、慾しいと思つたわけではないから、子供は、むしろ、戀愛の副産物だといふ、説もありますの。

バアナアド、ショウといふ小父さんは、人の戀愛は、世界意志により、子供を生むことが、目的だといつてますよ。

美少　その小父さんは、世界意志とやらから、直接に聞いてきた話でせうか。それとも、いゝ加減に、空想した話でせうか。

老女　そりやあ、大方、世界から直接に、聞いて來た話でせうよ。その小父さんは、イギリス人だといふから、嘘なんかは、いはないでせうよ。あの小父さんばかりでなく、よく世間には宇宙の目的だの人生の目的だのといふ事を話す人々がありますが、あれは皆直接に宇宙や人生から聞いて來た事なんでせうよ。宇宙や世界はそんなに遠いところでもないやうだから、鳥渡電話をかけても、目的位のことは談してくれるでせうよ。勿論、一々目的を立てゝから、戀をする樣な、規帳面な人は、あんまり見當らない樣だけれど、蛇だの蛙だのは、大方生殖の目的を立てゝ、それによつて、戀愛を、始めるのかも知れないわね。

美少　さうだと、蛙や、鰊は、仲々、成功したる戀愛家ですね。お染、久松だの、梅川、忠兵衛だの、小春、治兵衛だのといふ連中は、道草ばかり喰つて、遂々その目的地へ達しなかつた、極めて、不忠實な、下手くそな、戀愛家ですね。

老女　彼等は、デカダンですよ。目的地、そのものよりも、その過程を、樂しんだのですよ。そして、その過程を、戀だと、思つてゐたのでせうよ。

美少　ところで、例の浮氣家は、どうです。彼等は、世界意志から、さぞかし、大きなお目玉を頂戴することでせうね。彼等は此上もないデカダンですからね。

老女　いゝえ。さうではないでせうよ。浮氣家は直に女の肉體をつかむのですもの。そりやあ、浮氣家も、或場合には肝心の肉を打忘れて、專ら戀を享樂し、又は戀の過程を享樂する爲めに、戀その物の安危を賭してまでも、其「不確實」の味を貪らうとしたりしますね。恰度、子供がゴム風船を膨ますやうにさ。そして、其面白さに引入れられてゐる中に、しば〳〵悲しい戀

の最後に逢ふのです。

美少　いゝえ。そんな場合ばかりでなく、彼等浮氣家は、夏の初め胡蝶のやうに、花から花へと浮かれ歩き、生殖の目的を快樂の手段と心得てゐますもの。

老女　快樂の手段からも、生殖の目的を達しる事が屢ば、ありますよ。こんな場合には、「生めよ殖えよ、地に滿てよ」と仰しやられた神樣や、世界意志のお思召に叶ふのですから、よほど皆さんから讃められても、よさ相なものですが、事實は却つて反對ですね。之を俗に因果の胤だなどゝ、云ひますよ。生殖の目的を忘れて、戀愛を快樂の手段とするところは、戀愛家も浮氣家も、同樣同罪ですよ。戀愛家浮氣家ばかりでなく、宗教家教育家爲政家諸氏も同罪ですよ。快樂の手段としての戀愛を描けば、神聖なるものゝ樣に思ひ込み、生殖の目的としての戀愛を描けば、却つて不潔だとか、肉的だとか言つて之を責めるのだもの。何といふ迷妄でせう。

美少　小母さん。大層メートルを上げますね。けれども、アミーバの生殖作用を描寫した小說を書いたからとて、之をお上で發賣禁止にしやあ、しますまい。アミーバやコレラ菌や結核菌は、人間に比べると、遙に警保局的に高潔で小學校的にスピリチユアルなのですね。だから、これは、誰の罪でもない。人間に兩性生殖を營ませないで、男と女に作り分けた神樣が甚だよくないんですと、いふ結論に達しますね。本當は何地だかわからないけれど……

老女　そんな事は、何地でもいゝぢやないの。人間も、硝子工場でコップや壜を製造する樣に製造されたのぢや、浮世に味といふものが無くなりますわ。男性があり、女性があり、戀といふものがあればこそ、生れて來た初めの事も忘れて、「俺は大臣だ」の、「俺は詩人だ」の、「我輩は代議士だ」の、「我輩は博士だ」のと、すてきに萬物の靈長であるかのやうな誇りを、持つことも出來るのよ。戀愛は生殖のお化粧です。女の化粧部屋をのぞく者は惡魔であるやうに、生殖の化粧部屋をのぞく生物學者もまた惡魔ですよ。たゞ「生殖」が身

じまいをして、綺麗になつて出て來た「戀愛」の姿に、恍惚として眺め入つてゐた方が、幸せでせう。

美少　いや、併し、戀愛も可也人間を惱ませますぜ。失戀をする者の悲哀を考へてみて下さい。何とも、氣づかずに見過して來た路傍の花も、他人に摘られてから思ふと、大變美しい花になりますからね。知り合ひの娘が嫁に行くのを見るのは、男に取つては小さい悲劇の一つです。どんな娘の結婚するのを見ても、私は二日位鬱ぎ込みますよ。

老女　さて〳〵、あなたも、ずいぶんの嫉妬やきですね。尤も、嫉妬は愛情の嫡子ではなくして、所有慾の捨兒ですから、之を以てあなたを愛情の深い人と見るの證據には、ならないわね。だが、戀は之を失つて悲むよりも、之を得て失望する方が、更に一層みじめですよ。ダンテはビアトリースと結婚したら、果して神曲を書いたでせうか。

美少　さうすると、少しは悲しい思ひをしても、失戀して、幻影を永久化する方が幸福でせうか？

老女　ほ、ほ、ほ、あなたは正直ですね。失戀をして神曲を作るより、矢張、結婚して坊ちやんの一人も生ませた方が、幸福でせうよ。傑作は常に他人に作らせて、あなた方は、たゞ愛讀するだけにして、お置きなさいよ。その方が結構ですわ。その中には、また後から、いゝ幻影が、いくつでも參りますよ。お前一人と定めて置いて、浮氣や、その日の出來心、になさいよ。貞操は戀人に對する愛の深さを示すことを意味するよりも、他人の愛を拒絶するの意味ですよ。拒絶は即ち婦人の道徳ですの。けれど、浮氣は男の趣味でせう。何事に依らず新らしい物や新らしい名でさへあれば、「新らしい」といふ美名（？）の下に撥ぎ廻るくせに、戀愛のことゝなると、いやに氣が小さくなるんだから可笑しいわ。矢張、女が怕いんだわね。でもなくつて、新らしい物好きの現代人が、何で古い一人の戀を守るのでせう。何所へでもいつて、勝手に新らしいのと浮氣をしたら、いゝぢやありませんか。他所の娘が、嫁に行くのを見れば、直に小さい失戀をする、あな

の様な男が、何故、浮氣神聖論を主張しないのよ。

美少　之は恐れ入りましたね。それよりも、あなたに伺ひたいのは、拒絶が何故女の道徳であるかといふ事です。

老女　拒絶は常に如何なる物をも、高價にしますからさ。やらないと言へば、尙ほ更ら欲しくなるでせう。物從はぬと言へば、一層靡かせてみたくなるでせう。人は何でも骨折つて得なければ、尊くはありません。人は自分の骨折を手柄にして誇り度いといふ潛在意識に支配せられて、困難の後の成功を、價値あるものと想像するのですわ。それ故、戀も骨の折れたもの程、美しく、破れてしまへば最も尊いのです。だから眞心の戀は必ず失戀に終るけれども、失戀に終つた戀が、戀の中で尤も尊い戀ですよ。そして、それのみが、眞實の戀と言ひ得るのですわ。

美少　成程、してみると、女の拒絶は人生に裨益するところが、甚だ多い。

老女　漸く拒絶の眞價が解りましたか？拒絶は卽ち操です。操は卽ち處女權です。だから、若し、あなたが女なら、此拒絶をいふ飛道具を、傍に備へて置いて、それから男に媚を送りなさいよ。男の惱むことは受合ひです。そして、女を崇拜し、戀を神聖化し、世界を精神的に見る眼が開いて來ます。七擒八縱の奧の手も、活殺自在の怪力も、唯此拒絶と媚とから生れますの。

美少　手管といふのが、それですか？

老女　えゝ。その手管ですよ。だから、手管は女の寶ですよ。操は女の守本尊だけれど、手管は女の魔法の杖よ。

美少　ところで、若し、あなたが男でしたら、何うします？

老女　私は男だつたら浮氣をします。浮氣は男の趣味ですからね。

美少　けれど、拒絶の飛道具に合つたら何うします。

老女　「親切らしい」「實（じつ）があるらしい」の掩濠へ逃げ込みます。

美少　「媚」の城に立て籠る敵には？

老女　「我儘」の銃槍を以て、突貫しませうね。けれど、さういふ武器を仕入れるには、男は、錢が要りますよ。恰度女は美にして賢でなくつては、魔法の杖が得られぬ様に、男に錢が無かつたら、戀に用ひる新らしい武器は、需められないわ。だから、何うしても、「男に錢あれかし、女に手管あれかし」が、戀の戰場のモットーだわね。

美少　では他の人は。

老女　皆な見物人ですわ。けれど、人生では毎も役者よりも、見物人の方が樂でいゝでせうよ。それに、戀のお芝居を打つよりは、直に生殖の目的を實行する方が、神様のお思召に叶ふことですしね。さう〳〵、今日はあなたから、世之介さんの後日譚と女護島御見物のお話を伺はふと思つてゐたのに、却つて私の方が、つまらぬことを長喋りしてしまひました。女はお喋りが好物だものですから。

美少　なあに、私こそ。お喋りは大變面白うございました。男も、美しい女と喋る時だけは、かなりお喋りが好きになるやうです。では、左様なら。

老女　私は、もう、お婆さんで、お氣の毒ね。左様なら。



人物評論（九十二）

新任石井駐米大使
と
歸任林駐支公使



▽新任の石井と歸任の林

鵜崎鷺城

一

去年米國へ行つた石井菊次郎子が駐米大使に任ぜられて再び華盛頓の檜舞臺に立んとし、舊臘支那から

歸つて以來、今にも歸いる歸いると言つて道樂息子の流連の樣に、容易にお神輿を揚げなかつた林權助男も、漸く歸任と決して再び北京へ行つた。今や獨逸東漸の形勢に刺戟された日本の極東問題が緊張して、之に對する米國の態度如何が注意され、他にもいろ／＼問題の生ぜんとする時、新任の石井は日米兩國の關係を如何に引導するか、又た支那の政局は益々縺れて如何に歸決するかの危ぶまるる時歸任の林は石井を持直して日支外交の難面に何樣の新手法を試みるか、時節柄二氏の位置は極めて重大なる丈けそれ丈け當面の人（メン・オブ・アワー）として世間の注目する所となつてゐる。

石井も今では外交界の大立物で、實質は疑はしいにせよ、兎に角彼の虛名は現大使の何者をも凌駕し、いつも登場の舞臺が榮えてゐる。彼が未だ通商局長や次官をしてゐた時代は、小村壽太郎、林董、青木周藏、栗野愼一郎、高平小五郎、牧野伸顯等が上の方に頑張つて、後輩扱ひをされてゐたが、是等の先輩が或は不起の眠に入り、或は外交界を退いてから、外交界の景場（シーン）は一轉して、石井、本野、珍田、內田、林、松井、伊集院、等の時代となり、當年の菊ザンも今では押しも押されもせぬ先輩株である。而して現大使の中で外相の經驗あるは彼と內田の二人であるが、內田は第二西園寺內閣の外相を辭めてから駐露大使に復活するまで、殆んど四年間閑地に屛息し、殆んど世間から忘れられた形であつたけれども、石井は前內閣の瓦解後纔に半歲餘にして再び世に出で、別して特派使節といふ大した儀仗を當てがはれて面目を施した。其故に彼は西公使麾下の一記丞として初めて北京籠城に名を知られてから、外務省電信課長、通商局長、次官、駐佛大使、外務大臣　特派大使、駐米大使と、殆んど二十年近くの間に只の一度も休んだことが無く、然も順風に乘じて進む如く、要路から要路へとセリ上つてゐる。本野にせよ珍田にせよ外務に入つた順序から言へば無論先輩だし、大學系統の方では內田と林は二十年、松井は二十二年であるが、石井は二十三年で、同年の伊集院に比して一歩も二歩も先きに位置が進み、一年先きの內田定槌は未だ瑞典邊にコビリ附き同年の大鳥富士太郎は最近漸く南米邊の公使になつた位である。帝大出身で外務大臣になつたのは、加藤に次いで內田、石井といふ順席で、加藤は別格として後の兩人は出世の二幅對と言つて好いが、今では石井の方が內田よりも影が太いようである。

外相としては石井を價値附けた何物も無く、ヘマに始めドヂに終つたに過ぎぬ。特に彼の對支政策と來ては遺憾なく失體を暴露し、是れが元で累を後々まで引いたことになつてゐる。尤も當時は首相の大隈が外交の大風呂敷を擴げていろ／＼指圖をするし、加藤も閣外に在つたもの、外交に關しては一株有つてゐたし、丁度阪谷芳郎が大藏大臣であつたとき、井上と澁澤を數へて三人の大藏大臣があると言はれた如く、中實に於て三人の外務大臣があつた譯である。それ故に一概に石井のみを貶し附けるのは少し酷かも知れぬが、彼が大隈外交、加藤外交の犧牲になつたといふは裏面の消息論で、表面外相の位置にあつた限り、袁世凱の死んだ前後の大雜把な外交に關しては、當然失敗の責任者とした待つべきである。

二

彼が外相になつたときは內閣の末運期で、既に其の前から對支政策でヒビが入つてゐた場合だから、石井としては入閣の時機が惡かつた　然し彼が加藤から外相の交渉を受けると二つ返事で承諾し、佛國から歸る途中わざ／＼倫敦に寄て外相のグレーに面會し、加藤時代に不必要といつた倫敦宣言――單獨不講和條約加入を確約するなど、大分仕ずる所があつたらしいが、彼も佛國にゐて充分日本の事情が分らなかつたから、內

閣がアンナに早く潰れるとは思はなかつたであらう。

然し前内閣時代に失敗を仕出かした石井は、後の政府即ち寺内内閣に至つて名譽回復をして貰ふといふ、奇妙な結果になつた。彼が昨年特派大使に決定したとき、彼を任命した政府も、政府の勸誘を承諾した彼も兩つながら氣が知れぬ沙汰と見られたが、それも其の筈で普通ならばそん事が出來ぬ理窟である。蓋し現内閣の外交上の立前は、前内閣の對支政策の誤を訂正して新政策を立てるといふに在つて、本野外相は衆議院の秘密會議で洗ひ浚ひ前内閣の舊惡を暴露し、貴族院に於ても一寸口走つたので、石井が前當局者の面目上本野と言ひ爭つたことがある。又加藤が外交調査會に入るのを避けたのも、憲法論は餘所行きで、實際は不始末の尻拭ひが問題になるを見聞きするのが忌であつたからである。前内閣の對支政策は不都合であるとは、之れを言ひ換へれば、外相在職中に石井は不都合な外交をしたといふ意味になる。然るに一方に不信任を表明しながら、一方に信任狀を附けて重大な使命を託する政府も寸法に合つてゐなければ、自分のした事を失敗呼ばりされながら、米國へ行かぬかと言はれて、オメ〳〵現内閣に身賣りをした石井も桁に外れてゐる。

然しそれは純理論から下した觀察で、寺内や本野から言へば、前内閣の外相だからとて現内閣の用を爲さしめて差支なく、現に米國の參戰後、ウイルソン大統領は曩に民主黨の外交を破產外交と罵つた共和黨系のルートを遣露大使に任じた例もある。前内閣の時失敗したからとて今度も失敗すると限つた譯で無いといふので、前外相と子爵とを飾物にして、當時閑散の位置にあつた彼を特派大使に仕立てたのであらう。又た彼に花を有たせた半面には、前内閣派に對して若干面當の意味もあつたかと思はれる。

石井の立場から言へば、前内閣派は面白く思はぬにせよ、大隈や加藤の直系的約束がある譯でないから、外相を罷めて後までも忠誠を捧ぐ必要がない。彼の系統は寧ろ官僚であるから、何方かと言へば大隈、加藤よりも寺内、本野に近い。特に本野とは同じ外交の飯を食つた年來の友人であつて見れば、自然話も合ふ譯である。在職中の失敗云々にも明かに自分の名を指したのでないから、强ひて敵愾心を出す必要もなく、自分が重用される身になれば、自然知己に感激するやうになる。それ故に彼の進退を狹義に律して一概に厚顏無恥といふのは酷であるが、初めから寺内内閣の任命を辭したならば男らしいかつた。此の意味に於て不見識といへば不見識、寧丸の存在を疑へば疑はれる。

然し彼は元と百姓から知事の家へ養子に行き、養家の力で學問立身した人だから、意地を立て得ずして寺内内閣へ養子に入り、其のお蔭で一身の利達を計ると思へば理窟が合ふ。

三

歐洲聯合國は參戰後の米國へ使節を送つたから、日本も御多分に漏れず誰か人を出さねばならぬといふので、石井の特派となつた譯だが、本來は儀式的の程度に過ぎなかつたのである。唯だ行つた序に何か本國への土產物といふので、日米協同宣言とやらを持つて歸つたが、是れも唯だ支那に對する日本の優越權を公文の形式を以て聲明したといふだけで、別に大騷する程の獲物でない。然し無いよりは有る方が増しだといふ位の程度に於て、石井の小成功を認めて遣つて好い。而も彼は鬼界ケ島へ行つて、鬼の首を取つたように得々として歸つた。

彼は米國で大持てに持てた。殆んど今迄に例の無い歡迎である。當時英國からバルフォア外相、佛國からジョフル將軍、ヴイヴイアニ前首相、伊太利からサヴオイア親王一行が使節として行き、此の外に倫敦タイム

ス及びデーリー、メールの所有者で、英國政界に素晴らしい勢力のある有名なノースクリーフ卿も出懸けたが、是等の大立物以上に石井を遇した。由來米國人は感情的な突飛な國民であつて、お祭騷ぎをするとこが好きである處へ、戰爭熱に煽られてゐたから、極東の珍客が來たといふので、有ゆるお世辭を浴びせて石井を得意の絶頂に載せ去つたのである。併し日米覺書が必ずしも彼の爲めに大外交家の裏書とならぬ如く、ヤンキーの御馳走責と上院に於ける石井の演說は、必ずしも卓越せる經世家の標象（シンボール）とはならない。彼の場合日本を代表して何人が行つても、石井と同程度の待遇を受けたに相違なく、若し彼に幾分か得な點があつたとすれば、單に前外相といふ肩書に過ぎぬ。而も寺内なり本野なりは彼を外交上大成功をしたものゝ如く思ひ、眞に彼が米國官民の傾倒を得たかに直解した。少くも石井は目の當りチヤホヤされて高度の已惚心を起し、國務卿ランシングの言つたお世辭を直譯的に受取つて、夫子自らを高材の經世家――國際問題の眞相を洞見する大外交家としたかも知れぬ。必ずしも彼の米國行が大使更迭の前提でなかつたにせよ、彼が米國で評判を取つたといふので、人氣本位から雁首を取換へる氣になつたのである。

石井としても兎に角米國と馴染が附いたし、乃公が行けば華盛頓の外交舞臺に佐藤以上の評判と成績を收めて見せるといふ自負心があるだらうが、日米の關係は未だ何處かに一種の蟠りと暗礁があつて、外見と裏面と餘程違てゐる。新に最近西伯利亞問題が起つてからも歐洲聯合國の論調は孰れも日本の位置及び利害を知つて善意の解釋を下してゐるが、米國は贊成とも反對とも附かぬ奥齒に物の挾つたやうな態度で、特にハースト一派の新聞の如きは黃禍の暴說を吐き散らしてゐる。尤も今日は外國の方で盛んに出兵問題が論議されつゝあつて、日本の國論は未ださまで熱度が騰つてゐない。外國の意向は意向として、日本としては愼重に沈著に考慮すべき問題で、今日の形勢未だそれ程に急迫するを認めないが、兎に角極東問題は種々の意味に於て國際間の注意題目である。石井が今度大使として米國へ行けば爲すべき事は多く、日本の位置ゝ權利を充分に解得せしめる責任がある。

昨年來の惰力で仕事をする上に何程か便利な點もあるかと思はれるがそれにしても、彼の手腕は大概程度が分つてゐる。嚴密に評價すれば前任の佐藤に比して非常に距離がある譯でない。要するに彼の黃金時代は外務大臣よりも特派大使で行つたときで、今度は餘り期待を繫がずに疑問として置いたが好い。

四

林權助の歸任は支那の時局に重大なる影響ありとせられ、歸任後外交總長陸徵祥と會談し、既に何等かの行動を執つてゐるやうであるが、併し彼の位置は却々面倒である。對支政策が他の何物よりも最も當面の必要問題とせらるゝ點から言へば、石井よりも彼の力が一層望ましくて而も結果如何の目に立ち易い位置にゐる譯である。

孫聯政府の命令で歸つて以來、一時は辭職を傳へられ、更に然らざるを傳へられ、殆んど三箇月間進退の孰れに決するかを疑はれた。特に歸朝後の支那は討伐令發布の爲めに南北の感情を益ゝ險惡に導き、延いて北京政局は紛糾の度を加へたとき、公使館の主人公が之れを餘所に見て内地にグズグズしてゐたので、何等か其の間に言ふに言はれぬ事情の存するにあらざるかを思はしめた。蓋し過ぐる三箇月間には政府と彼の間に種々込入つた話もあつたであらうし、外交調査會の註文もあつたであらうし、又た林としてはオイソレと歸ることが出來兼ねて一時は進退に迷ふたと認むべき理由がある。

一昨年夏彼が伊太利大使から支那に轉じたとき、多くの期待を以て注目されたに似ず、其の後の對支政策振りは豫想に反して、隨分批難の聲が起つて公使の更迭を希望するものが多かつた。彼は名うての無愛嬌者ながら今の外交家中一種底光りのする方であるし、特に外國向よりも東洋向であるが、初めから支那に對して錯誤に陷つたのである。蓋し彼の支那に對する知識は、七八年間も伊太利住ひをして實際から懸離れた爲めに多少後れた所があつて、昔の公使時代の頭で今の支那に臨んだのと、一つは大局を見ずして最初から支那の現在の黨派的確執に自分の頭を向け過ぎた點が、少くも對支外交の錯誤を來した原因になつて居りはせぬか。

概括的に言へば彼の外交は支那全體を目標とせずして、一部分の勢力のみを對象としたから、自然片寄つた結果になつて、終に動きの取れぬことになつたのである。彼は決して無能でないけれども、其の能力を合理的の政策に用ゐずして、間違つた方に用ゐたのが、當初の期待程になく評判を墜した所以である。

五

更に一歩を進めて言へば、彼は段祺瑞の方に深入りして、自然南方を輕じ、寧ろ其の口吻や態度には南方を敵視する嫌ひが無いではなかつた。又は馮總統の勢力が如何なる程度で、如何なる方面に及んでゐるか、馮派と段派との關係が如何なつてゐるかを餘り好く見極めず、寧ろ馮を第二の黎元洪位に觀察してゐたようである。謂うい ふ譯であるから南方派の人々と會つて意見を交換するような事はなく、唯だ領事杯の好い加減な報告を讀む位なもの であつたから、南方の事情にも餘り明い方でない。

一帶日本を代表する林公使としては、南北の抗爭などに拘泥せず、然として一に東亞の大局、日支親善の上から打算して對支政策に手を下すべきである。初めから此の超然的位置に立脚して臨席せば、自ら權威が之れに伴ひ、干渉せずして事實上干渉以上の効力を奏する道理であるが、林は獨り此に及ばずして自分から政爭の渦中に投じた爲に、折角の不干渉主義も干渉となり、而も其の干渉は威力を失ひ、結局行詰るの避くべからざるに及ぶのである。林は會津人の特性として人間に癖があるから、其の癖を對支政策の上にも出して、一種依怙地な遣口をしたのである。少くも今日までは理智的よりも感情的に施爲した跡がある。

今日に至つて今までの政策が誤つてゐたことに氣附いたにせよ氣附かぬにせよ、同じ人間が同じ場合で掌を飜すように從來固執したのと別の方針で行くのは、多少旋毛の曲つた林としては心苦しい事で、歸任を澁つた心理狀態も、其の邊にあつたらしく思はれるが、既に再び任地に歸つた以上は、對支政策の一轉機を意味するものと見て好く、少くも彼の態度が從來と異る所があるだらうと思はれる。

林は多少癖があつても、稍ほ辛味と澁味のある點は小心翼々家の石井に比して役者の段が少し上である。唯だ餘りに一本調子で、外交上の隠略と先見と徹底を缺いてゐる。如何に段と氣が合ふといふので一刻に北に親んで南を疎んじたなども、一つは餘りに正直であるからだとも言へる。慢性の內亂病に罹つて表裏の錯綜する支那の時局に對し、林が如何なる政策を執らんとするかは今後の態度に徴するの外ないが、若し再び失敗するようでは、其の時は彼の相場もガラ落ちである。

▽共に苦しき兩使臣の立場

（一）

川尻東馬

△大隈内閣の外相として、外交失敗の跡歴然、其味方からさへ無能呼ばはりされた石井子は、僅か一年經つか經たぬに、米國に特使として派遣され、所謂日米宣言なるものを土產として歸朝するや、成功手柄と賞讃するの聲、國内到る處に充ち滿つるの盛況を呈した。一年前無能無爲の土偶視された同一人が、忽ちにして斯樣な贊辭を以て歡迎さるゝとは、如何に其成果を見て其人を賞罰するの原則に基くはといへ、聊か所謂世評なるものゝ輕佻浮薄を暴露した現象と云はざるを得ない。

△由來我國の外交は失敗の歷史のみである、中には多少成功の跡なきにあらぬも、之れを失敗と差引計算するに於ては、其差餘りに甚しく、態々算盤を彈くの勇氣さへ出でぬのは衆目の一致する處、故に我國の外交史、即ち失敗の歷史と一概に斷ぜらるゝ次第である。石井子の外相として失敗の歷史を遺したる、確かに其一に算すべきが、同じく失敗の跡を留むるもの、歷代の外相皆然りとせば、單り石井子をのみ酷評するは、當時に於て聊か氣の毒の感を起さぬでもなかつた。＝勿論前内閣末期の對支外交は、可なり甚しい失敗ではあつたが＝。

△之れと同時に、昨年の日米宣告に對する石井特使の所謂成功なるものに就ても、當人は世間の餘りに度を過ごしたる賞讃振りに同じ得なかつたのである。餘りに内情を書く自由を有しないから甚だ曖昧にして置くが、兎に角消息通の間には、特使の出發前既に相當の功果を齎らして歸朝すべきことを豫期して居たのは事實である。「御馳走を喰ひに行くからな、其喰ひ方の上手と下手は人によりけりだが、誰れが行つても喰へる丈けは間違ひでないノサ。」斯樣な皮肉を云ふて居る人さへあつた程で、只特使は前外相といふ外國には通りの好い履歷あり、且つ米國には比較的受けの好き、又事情に通じて居るといふ、頗る調子の整ふた人物であつたゞめ、御馳走を上手に手際好く喰つたといふ丈けの事、別に夫れ以上に大成功の大手柄のと賞嘆すべき理由はないのである。

△即ち失敗を攻擊罵詈する世論も、餘り酷烈過ぎると同時に、賞讃歡迎も少し浮いた調子でないかと考へた次第であるが、兎角世論といふものは、程好い處に居らぬもので、褒められる時には、少々位の不男でも容貌迄口の端に筆の跡に、何とか相當の理由をつけて賞揚するが、一度び貶す日になると、應接振り迄何のかのと難癖をつけて云ひたがるのは通例である。丁度冷熱をヨリ以上に感受する寒暖計と同じことで、實際の氣溫よりも高低を甚しく表示するのは、所謂世論世評なるものゝ實際であるから致方ないが、吾人は世論よりも頗る冷靜公平な見地からして、今度米國に向ふ石井大使に對し考へて見たい。

△外相としての石井子は、遺憾ながら歷代外相中の三等級に屬すべき人物である、人物手腕、殊に貫祿と度胸に於て、頗る貧弱なりしことは、吾人も勿論之れを認むる一人である。併し大使として外國に使すべき資格の現在人物より物色すれば、霞ヶ關の人物拂底せる現狀に於ては、同子の如き確かに一等級に屬すべき一人であらう。殊に米國といふ同子には甚だ都合の好き國柄であるから、前任者佐藤大使と比較して數等の上位にあること、恐らく之れは何人も異存あるまい。

△只玆に大使の爲め最も懸念憂慮すべきは、米國今後の外交的活動である、今や米國の一擧一笑は、歐洲大戰爭の殆んど全局面を制する實權を

掌握すると稱するも差支なく事實上に於ては、其覇王たるかの外觀內容共に兼ね備つて居る狀態、殊に講和期に入りての計策行動、更らに戰後經營の大志活躍、此間に處して帝國の利益と世界の幸福の爲めに、其使命を完了せねばならぬ重大責任は、勿論英佛駐在の大使等に倍加するのみならず、時としては外務大臣よりも重大且つ難局に處する場合、往々にして來り會するは必然の運命である。

△況んや現下の問題としても對支問題、對露問題、夫れに貿易制限問題もあれば、船鐵交換、船舶提供等、其他戰時中の對米交涉は、將さに眼前に山積の狀態である、無論今後も頻々として各方面に新問題の續起し來るべきは、明かな事情であるから、正直に云へば、實は大使としては其任餘りに重過ぎるのである。度胸なく確信に乏しき素質の大使は、此難局に處して、果して其使命を辱めず、其任務に服し其重荷に堪ゆ得べきか、吾人は遺憾ながら懸念なき能はざる一人である、否な曲りなりにも大過なく其任務を終り得るとすれば、之れは大使としては上出來大成功と賞揚して差支ひないのである。

△想ひ日米宣言が世論の歡呼を博したる後である丈け、世間の期待は到底大使自身の荷ひ能はざる重量にあるは勿論、假令此順境に居らず、依然前內閣の失敗外相として、一般世論の輕侮中に葬り去られたる其儘にて赴任するとしても、同子が大使として米國に駐在し、其擧げ得らるゝ成果に對しては、世論必ずや失敗を呼ぶの時代到着すべきこと明かな將來況して之れが中途成功者として歡迎せられたる今日に於ては、大使の未來に關して、個人としては寧ろ犧牲に供さるべく赴任するの境遇に同情を禁じ得ぬのである。吾人は大使が如何なる抱負と確信を有し、自ら進んで其任地に就くやは之を知らぬも、深夜人定まるの後、靜かに之を熟慮するに於て、吾人の言決して妄りに人を輕侮するの言にあらざるを、大使自ら感得するに至るべきを信じて疑はぬ。

△然り然らば飜つて、他に米國大使として適任者を發見し得るかと云ふに、遺憾ながら之を見出すことが出來ぬ、霞ケ關系の人物としては、勿論石井子以上の掘出物あるべき筈なく、さらば軍人中に求めんか、一長一短、中に恰好の二三氏なきにあらぬも、元々其出身を別にする關係上、外交官としては、確かに急造間に合せ物の感あるのみならず、實際交際社會に往來して、故障續出の結果は到底免れざる命數、結局落ち來りて、石井子の外にヨリ以上の人物なしといふに歸着するのである。要するに國家としては如何にも外交官に人材なきの實際問題に到着するの情なき狀態、然らば假令不足にしても、重荷にしても、人物なき以上は、止むなく諦むるの外に致方はない。

△是に於てか吾人は結論する。石井大使に期待せば他日必ず失望を招くは必定の事、其期待の大なれば大なる程、失望も亦大なるは明かな歸着點、併し顧みて此外に然るべき人物なしといふ情なき國情に想到せば、國民は須らく希望は希望として絶對之を要求するの傍はら、其人物と境遇に同情して、出來得る限りの後援を與へ、國家の體面と國民の利益を擁護するに努力すべき義務あるのである。之れ實に石井大使個人の擁護にあらずして、直接間接に國家に盡す國民としての、將さに執るべき相當方法であらう。又石井大使としてが、自身の擔ひ切れざる此重責と自己の力量手腕を靜かに考察し、偏へに國民後援の下に其任務を完うせんと、誠心誠意を常に披瀝して、敢て或ひは及ばざらんことに焦慮すべきは、勿論當然の覺悟でなければならぬ、此一點に至りては畏れ〱も大使に忠告し、切望し果ては强要せんとするものである。

（二）

△此人ならばと、在外使臣中より特に拔擢任命された林駐支公使は、今や攻撃批難の焼點となつて居る。剛直にして頑固、一旦思ひ詰めたる事は、是が非でも押し通すといふ性格に於て、一寸風變りの人物、殊に會津關系に於ては全く毛色の變つた別人である。流石に會津武士の血統を稟け居る丈けに、鐵骨稜々、意氣昂然たる處は、外交官中他に其類なしと云ふも決して過言であるまい。其代り融通の利かぬ、洵に困つた癖を有し、權謀術策の場合には最も適任だが、巧みに轉換圓滑に急場を外す杯の手腕技倆に至つては、拙の拙、劣の劣なる人物である。

△故に公使の對支外交は、最初より段祺瑞一派援助の一本鎗で、中途段內閣潰倒しても、依然其方針を改めぬのである。尤も此點に關しては、現內閣の外交方針に原因する處甚だ多く、罪科の大半、責任の八分は無論寺內首相、本野外相にあると云ふ迄もないが、然し公使としても今少しく支那の大局に注意着眼するの眼識大膽あり、廣く言議を容れ、事情を綜合するの冷靜なる態度、緻密なる頭腦あらば、斷程迄段援主義に執着深入するの大過もなかりしならんに、其處は持前の初心一徹、『我は對支外交に對して、寺內首相の教師なり、支那問題に關する內閣の方針、悉く我が方寸に出づ』と傲語して、直隸派何するものぞ、況んや南方烏合の衆、以て談ずるに足らずと、殆んど一顧の値さへ拂はずに猛進を繼續したのである。

△斯て支那の內情は益々混亂狀態に陷り、帝國政府に對する支那國民の反感は益々挑發せられ、國論內に囂々として、滿面目なる意味の對支外交は全く行詰りの狀態となつて了つた。例の外交調査會は勿論の事、政治界實業界の有力者間、有識階級、政黨、浪人等あらゆる方面に反對攻擊の聲喧しく、寺內首相も止むなく公使に召喚命令を發するに至つたが、歸朝後と雖も例の性格、絕對に當初の方針を改めず、依然として從來の態度を繼續したのである。公使更迭を迫る者、頻々として首相の門を叩き、帝國の前途を憂ふるもの、續々として一齊に口に對支政策を論議したのであるが、如何にせん首相外相共に同罪、若し公使を馘首することあらんか、何時如何なる邊に政變の颶風を起し來らずとも限られざる實行、何とか圓滿に解決せんものと、當時首相の苦心焦慮は實に一ト通りでなかつたのは事實である。

△漸くにして各方面の協調曲りなりにも成り、公使も終ひに我を折りて、今後の對支方針は大體國論の歸向點に根本を置くことに改め、其代りに公使としては相當面目を立つべき、或る重大命令を含んで、再び歸任の途に就いたが、其命令並びに閣議決定の內容、更らに外交調査會の經過等に關しては、茲に其一端さへ記述するの自由を有しない。併し兎に角從來の北方派援助、即ち段一派補護の根本方針を改め、今後は力めて南北妥協即ち國內の統一を主眼として、進むことに變つたのは事實である。世評に所謂寺內內閣の對支外交は大看板の塗替になつたと稱するもの、即ち之れを指すのである。過般の芳澤代理公使が致したる警告並に石光北支駐屯軍司令官の發したる抗議は、要するに此變改されたる方針により、行動したる第一矢である。

△斯くて寺內內閣も亦林公使も、其不評判攻擊の焼點より免れ、茲に對支外交の新生面を開き、大にしては帝國政府の面目、小にしては林公使の聲價を恢復せんと企てたのであるが、吾人をして率直に且つ露骨に云はしむれば、之れ又徒勞であり、否な無謀の計であると斷言するに憚からぬのである。第一帝國の威信を傷けず、政府の體面を損せず、公使の面目も潰さざる方法に於て、而も從來の私的交誼、個人的情實をも顧慮の範圍に於て、而して南北妥協國內統一の實果、果して收め得らるゝであらうか。

△吾人の知り居る各種の報道を根據として想像するに、且敢て想像とい

ふ＝對支外交大看板塗替を斷行するに當りて、成るべく從來の關係行懸りを顧慮し、之れに適應すべき手段方法の下に、効果あり成實ある南北妥協國內統一を實現せしめんと企て居るやに推定さるゝのである。若し果して斯の如き自己にのみ好都合の方策を用ひ、而して其成果を得べしと信ずるものあらば、吾人は夫れは痴人夢を說くの類にあらずやと思ふものである。

△勿論今日は世界大戰亂の眞最中、歐米諸國は共に對支外交に活躍すべき餘力を有せず、日本の實力以て之れに臨めば、支那內地の問題殆んど何事も解決し得ざるなしと云ふべき時期に際會し居るが故に、强て壓迫的に妥協統一を强要せんか、形式上の成果は或ひは之を收むること、必ずしも難事ではなからう。併し之を以て直ちに眞の妥協統一成立し、支那國の基礎、初めて强固安全なるに至れりとは、何人も之を容認しないのであるから、對支外交は依然たる失敗の繰返しと云ふを免れぬのである。否な斯く無理無體に强者の壓迫强要を以てしたる妥協統一の反動は、必ずや更らに數十百倍强度の彈力を以て起り來ること、之れ當然免れ難き運命、而して其後に於ける日支兩國民間の感情的背離は、實に由々しき大問題を將來に惹起する素因を爲すのである。實に國家の爲め寒心股憂に堪へぬとは斯の如き事題を云ふものであらう。

△假令全然至公至平の立場に戴り、從來の貪慾關係を全然脫離したる、誠心誠意以て眞の妥協統一を策するにしても、又同一內閣であり又同一公使である場合は、夫れは必ずや一方の猜疑を招き安心を得せしむる能はず、事業の成功殆んど覺束なきは、世間普通の狀態、人間が苟くも感情の動物である以上は、斯く成り行くこと蓋し當然の次第で、若し左樣行かぬ場合ありとすれば、夫れは確かに例外の成功である。況してや從來の關係貪慾等を依然顧慮の範圍に置き、而して同一內閣の下に同一公使の手に之を成果あらしめんと企つるが如き、俗に所謂木に據りて魚を求めんとするよりも、更らに一層至難の事業と云はねばならぬ、否な全然不可能事を企劃せる、其大膽無謀に對して、寧ろ呆然自失せざるを得ないのである。

△要するに現內閣更迭、林公使退任が、對支外交に對する先決問題で、如何に看板を塗替へ、根本方針を全然變改しても、夫れは些の好果を齎らし得ざるは勿論の事、强て壓迫的手段に出づれば、更らに益々窮地に陷るべきは、今より豫言に苦しまざる處である。況して彼の重大合介の成果を夢想するが如き事あらば、夫れは死人の歸來を待と同樣、何時迄過ぎても到底來ることなき明白の未來と云はねばならぬ。

△寺內內閣の外交は總て之れ失敗の歷史、殊に今回の西伯利出兵問題に對する、本野外相の輕擧妄動に至りては、實に之れ空前絕後の一大拙事とも評すべき程で、世に低能外相の酷評語さへ生れた所以であるが、其セメては對支外交根本方針變更の一段落、更らに或る成功を以て、其末期を飾らんと努力しつゝあること、吾人其心事は十分之を諒とするものなるも、如何せん如上の次第に依りて、更らに益々失敗の程度を深甚多大ならしむべく、寺內內閣の對支外交は、愈々窮地に陷りて、全く手足の出し樣なき窮境に悲鳴をあぐるの外なきに至るであらう。

△帝國目下の最大任務は、支那をして强固なる基礎の下に、國家を確立せしむるより急なるはない、時期に於ても、亦位置に於ても今日此際が最も適當且つ必要なる場合である、吾人は如何なる內閣の手に依つてなりとも、此東洋永遠の平和の爲め、支那を誘掖指導し、以て强固なる國家を組織せしむるの根本策を確立し、一日も速かに之れが事實上の解決を熱望して止まぬものであるが、如何せん朽木は再び繁茂せしむべからずで、寺內內閣と林公使の下には、最早解決は絕對不可能事となつて

了つた。

△今や名譽恢復の爲めに、新交渉に新生面を開かんと努力しつゝある林公使に對しては、其心事如何にも同情を禁じ能はざるが、不評判の挽回は最早徒勞である、否な却つて恥の上塗りとなるべき運命にある、一日も速かに飄然素志を撤して、勇退其任地を去るの男らしきに如かざるのである。吾人は公使の人物を知り更らに其前途に對して、倘ほ幾多の希望を屬する一人であるから、此際潔く實を引いて、他日發展の英氣を閑地に養ふの、如何に國家の爲めに又一身の爲めに得策なるかを、切實に勸告忠言し、其冷靜なる公使自身の反省に待ち度のである。同時に寺内内閣の更迭、一日も速かなれば一日國家國民の幸福を増すことも、序ながら附加して置たい、否な寧ろ冀望するものである。

▽兩天秤の林公使と井上大使

鐵拳禪

一

男林權助は、舊會津藩士なり、矮軀短幹にして、風采甚だ揚らず。その面貌は猿の如く冷悧にも見え、又頬より口に掛けて狐の如く狡猾にも見ゆるが、所詮は他を目八分に見るの癖ある人物なり。年齒説に五十九なりと云へば、外相本野よりも二歳の年長にして、其の閲歴にも富める事なり、定見を鼻の先にぶら下げて、多寡を括つて居るも尤もなる次第なり。加ふるに、彼れが他を目八分に見るの性癖を以てす、柔順ならんと欲するも得ず。その一たび頑張れば頑張るほど冷靜になり、屈從せしめんとすれば却て反撥し、何の彼等がと肚の中にて冷笑するを常とす。外面柔和にして謙遜なるも、内面堅剛にして果斷ならば宜しきも、彼れは之に反して、表裏共に頑固なりと見え、内心案外に弱き所あるやうなり。肚裡の冷笑は、必ずしも其の堅剛を語るものと見るべからず。

然れども權助は、若松城を枕にして血を流せる武士の系統を承けたるもの、剛健にして片意地なる、一種の氣風はあり。彼れも權助なれば、父も權助なり。その父の權助は戊辰の役、藩の隊長として京師守衛の任に膺り。白刃を踏むを怖れざるの驍勇あり。武術を能くせしは勿論、武器の製造なども心得たり。會津藩の夙に洋式の戰術を採用し、洋學を誘導したるが如きは、彼れが建言し、創設する所に係ると云ふ。此の新智識を有せる者の倅として權助は維新の際に人と爲れり。長ずるに及んで、あの矮軀に大小を佩び、突袖にして反身にならば、宛然ポンチ絵の武士たりしなるべしと雖も、文明開化の雰圍氣は、彼れをして玆に到らしめずして歇みり。

明治二十年帝大政治科を卒業する時、八人中の第四席を占めたり。上位席に法博一木喜徳郎、子内田康哉、早川千吉郎あり。下位に隨偏大林田龜太郎、鈴木馬左也等あり。經付も出したれど、大臣二人までゝ產したるは、級の誇りと云へば誇りなり。前外相にして、今の駐露大使たる内田の露都を撤退する時、彼れ林の任に支那に歸るも、對照の興味なきに非ず。彼れの歸任如何は議會の問題ともなり、首相寺内の腦漿をも痛め、外相本野の考慮をも殺し、揉つた揉んだのありたる所のものなり。如何の障害を排しても、歸任せずには措かずと豪語し、且頑張りたる彼れは、頑張る甲斐ありて、到頭歸任する事となれり。

權助は在學中、既に外交官たらんとして、頻りに新智識を振り廻し、新様に浮身を窶したるものなり。今日の所謂ハイカラを氣取り、あの頭

でなど、同聲をして噴飯せしめたる程なり。父の新條を好めるの血、漸く此の頃に至りて脈管に甦り、新智識の形を變へて現はれたるなり。卒業するや早速外務省に飛び込みて役人となり、順次、公使館一等書記官、通商局長、特命全權公使、大使と陞遷して、今日に及びり。其の駐伊大使より駐支公使に轉じ、大使より公使に逆戻りせるば、彼れが畢生の手腕を揮はんとして、好んで此の地位に落ちたるもの、決して貶黜にも非ず、左遷にも非ざるなり。性來つむじ曲りの彼れは、在外の間に何時しかハイカラの風を脱し、會津武士の木地を露はし來れるものが、和臭を帶ぶるに至れり。斯かる所にも、容易に他に化されず、却て他の意表に出でんとするが如き機智と、自信力の閃くを覺えずんば非ず。

二

子石井菊次郎は、千葉縣平民大和久龜太郎の賢弟なり。東京府士族石井邦猷の養子となり、其の家附の娘に配したるも、故ありて之を離縁し、更に山龍堂病院長たる樫村清德の女の美しきを後妻に迎へたり。今の玉子夫人は其人にして、實に舊公使たる加藤恒忠夫人の妹なり。玉子今茲三十八、菊次郎五十七。十九違ひの若さを以て、社交界に押し出す。菊次郎が鼻下の髯の白きに比して、水際立ちて若く美しく見ゆるも理りなり。而して先妻の長女は芳紀正に二十七、玉子との齢差僅かに十一のみ。彼れが糟糠の妻を離別せるの故を以て、彼れは冷血無情の非難を受けたりと雖も、彼れは個く沒道義の人間に非ず。相應に血もあり、又涙もあるやうなり。然れども、彼れが家庭の悲劇に面接するも、些も暗き影に囚はれず、相變らず快活なる面貌を保持するは、餘程氣丈の人と見えたり。人或は云ふ、佳人を得て、新にスヰートホームを作る、暗影を拂拭して、快活を更生せざるの理あらんやと。成程彼れが從來の屈托より脱して、放縱の態を示すに至れるを觀れば、しか首肯せられざるにも非ず、殊に外交官の生命は、美妻と而して背後の財力なりと云へば、二つながら之を得て滿足を感ずるは、普通の人情なり。玉子夫人は如何の働き手なりやを知らずと雖も、前大使たる侯井上夫人の如き、本野夫人の如き、內田夫人の如き、亭主の外交に寄與すること尠からずとせられたるの例はあり。それも夫人に對する辭令のみ、實は女の出娑婆る事は非常に邪魔なりと云はば、吾人はそを信ずるに躊躇せざる者なるも、米國などにては隨分夫人の腕が物を言ふやうなれば、一概には排斥すべからず。

兎に角菊次郎は、年を積むに從ひて、體軀も太り、人物も何程か大きくなり、活氣も亦充實して、體量も十九貫目と云ふ程の貫祿の備はり樣なり。男林などよりは、其の體格風采だけでも、歐米人に對して押が利きさうなり。堂々たる偉漢と稱せんには、尙非常の距離ありと雖も、鼠公使と稱されたる侯小村などよりは、一見福相にも、豪相にも思はる、が德なり。加之、圓き頰、大いなる眼玉、確然たる輪郭は、對者に强き印象を與ふると同時に、破顏微笑せる快活なる曲線は、多少の淋しみあるにもせよ、對者に好感を與ふるに足る。

こは餘りに頻の詮索と、夫人の評判とに紙數を費したるが、更に前に立戻りて彼れが經歷を點檢せんに、彼れは石井の養子となりて大學に通ひ、明治二十三年法律科を第三位にて卒業せり。當時級を同じうするもの、法博原嘉道、前文相柴田家門、法博小山温、青島民政長官秋山雅之介、駐伊大使伊集院彥吉等あり。その大臣たるに於て、長閥の寵兒たる柴田に後れたりと雖も、爵位をも有し、外相ともなり、今何人氣の中心たるを見れば、必ずしも後れたるに非ず。後の雁の先になりたるの觀あり。

卒業の十一月外交官試補を拜命し、翌年交際官試補となりて巴里に在勤し、先づ以て華やかなる外交界の空氣に觸接せり。二十六年公使館二等書記官に進み、二十九年一等領事として仁川に乘り込み、日清戰後の紛紜を處理して腕を磨き、三十年公使館二等書記官に逆戻りして清國に赴き、三十一年一等書記官に陞進し、三十三年外務省書記官に拔擢さるゝまで、前後十年殆んど旅より旅に費せり。此の旅稼ぎの外交官が本省に歸りて、總務局電信課長に補せられてより、御輿を据ゑて動かず。久しく通商局長となり、外務次官となりて外務の樞機に參し、彼れの名譽漸く著はるゝに至れり。そは多年本省に巢食ひたるの結果、省内の事務一として通曉せざるはなしと云ふの有樣にて、事務的頭腦、俗吏的手腕の惡達者となる迄に、技巧上の熟練を經たるが爲なり。舊き次官が新米の大臣に對して權威を有するが如く思はれ、局長乃至次官にして大臣の事を行ふは見上げたる者なりなど、得て評判の立ち易きものなり。彼れが名譽又この筆法に由れる傾向ありしかども、熟練以外、實力もあり、趣味もあるやうにも見えたり。唯何分にも、變な所に氣取を見せ、辭令に巧みなりしが故に、其の將來を危まれたるなり。駐佛大使より外相たるに及びて、行き着く所までは行き着きたるも、其の手腕は何等の冴えを增さず、外相としては寧ろ平凡に終れり。それにても大隈内閣の外相に就任せし許りに、子爵に陞爵せるは僥倖と云ふべし。

三

男林權助の有爲の人物なるを認められたるは、今は我に併合されたるも、當時獨立の體面を存せる韓國に公使たるの時にあり。彼れが玆に駐剳せるは、明治三十二年より三十八年まで約七年間の長日月なり。日清戰後數年を經、清國の勢力驅逐し去られたりと雖も、事大主義の韓國は、其の日其の日の日和次第にて如何に變ずるや測るべからず。されば對韓外交の至難なること一方ならず、何人も手を燒く所なりしが、彼れは根氣よく柳條を纖弄するの微風となり、遂にその枝條を自縄自縛せしめて日韓協約を締結せり。既に韓國政府を操縱するの呼吸を呑み込める彼れは、多少の自信を以て駐支公使となり、柳條微風主義を以て折衝を試みたり。支那に於ても亦、相當に成功を收めたるが故に、彼れは何事をか成し得るの伎倆ある人物なりと極印を押捺されたるなり。彼れ自身も、何事をか成し、外交界に寄與せんとせしに相違なしと雖も、其後何等目ざましき事を成さず、駐伊大使としては自らも氣を腐らし居たる樣子なり。

偶ま無能公使日置の支那駐剳を免ぜらるゝや、其の後釜は男林の手に落ちたり。彼れは支那に對して、より多くの興味と期待とを有し、乃公一たび難局に當れば、刄を迎へて解けざるなしとの自信を以て、意氣揚々として乘り込めり。實際手術臺に臨んで、刀を執るに及び、腐肉部にまで達するを發見せり。而も失望の氣色も見せず、大膽なる手術を、試みたるも手腕漸く老衰せるにや、或は情熱を缺如せるにや、何としても旨く行かず。剩へ立合人までが彼れ是れと容喙するに、聊か業を煮やして、投げ遣りの療治をなせり。病勢如何になり行くべきや、豫測すべからざるの狀態にまで進めり。然れども、彼れは必ずしも絶望せず、飽くまで外科手術の目的を達せずんば已まざる者の如し。若し其の覺悟なくんば、如何ぞ再び北京に歸任する者ならんや。

彼れの操縱手術は隱れも無き事實なり。其の畫策は段の勢力を中心とす。然らば其の方針にて一貫するやと云ふに、必ずしも然らず。下手な車夫の砂利路に腕車を引くが如く、一進一退、行き悩むこと數次なり。是れ、彼れが力量なく、定見なきに非ずして、現内閣の方針が絶えず動

衛する爲なりと云ふと雖も、彼れに何の罪なしと云ふべからず。曾て伯寺内の私設公使と稱されたる西原某の暗中飛躍を知らずして、悠々歸朝せるが如き、徒らに外交事務の末節に跼蹐して、支那の大局を達觀するの明を失へるが如き、將に任に赴かんとする際の、意氣込み程も無きに非ずや。口を開けば卽ち强がりを云ふも、局に當つて能く口ほどに手が利かぬは、獨り彼れに限るに非ずと雖も、彼れが一代の外交家たるを自負し、傍若無人の放言を敢てするに比すれば、機鋒甚だ辛辣を缺くものあり。對支外交は、今や睨籠と腕押をするが如き、根氣比べを以て滿足すべからず。一定不動の方針の下に、徹底的解決を着けざるべからざるの狀態にあり。彼れが援段を以て是なりとせば、須らく援段を以て遂行し、終始するを要す。其の事にして、倘し不可ならんには、彼れは責任を負うて辭職するに若かず。

彼れが歸任後の行動を見るに、秘密裡に援段の方針を急速に進捗しつゝあるが如きも、大勢に逆行せんとする此の畫策は、到底失敗に終るべき性質のものたり。現内閣は今更責任を彼れに轉嫁して彼れを馘首する能はず。馘首すれば、外相又晏如たるを得ず。從つて内閣の一角に龜裂を生ずるが故に、彼れが歸任の强要を甘受し、彼れをして在來の方針を踏襲せしめ、再び其の手腕を揮はしめんとせるなり。彼れが從來の失計を取り返して、幾分にても成功の曙光に接し得るやは頗る疑問たり。

四

石井菊次郎は、對米外交に於て失敗の歷史を有す。彼れが通商局長たりし時、加州排日問題の解決に干與し、一時を糊塗せんが爲に、姑息の解決をなせり。後年對米懸案に祟られ、歷代の駐米大使殆んど苦惱せざるは無しと云ふの有樣なり。素より彼れが直接其の衝に當れるものに非ずと雖も、彼れが抜き去るを忘れたる雜草なり。縱令その雜草は一本なりとも、漸次蕃殖するは自明の理なり。一の姑息的解決は、他の懸案を生み、一たび讓步せるの誓約は、容易に恢復すること能はざるなり。彼れが駐米大使たる、自ら抜き去るを忘れたる雜草を、自ら抜き去らざるべからざる境遇に立てるも同然なり。

現内閣の昨年、前内閣の外相たる石井を特派大使に推薦し、重大なる使命を托したるは、非常の厚意とも、一種の皮肉とも、觀察する者は觀察せり。石井の果して能く使命を全うするや否やを疑はれたるも、實効の程度は兎も角、非常の人氣を負うて歸來せり。その成功の薄箔は、禁鐵問題となり、米艦の潮入港となり、米國の東清鐵道沿線に利權扶植を目論める事に由りて、何程か剝落せりと雖も、一時彼れを謳歌するの聲は海若を驚かしめたり。彼れが何故に斯く米國に於て歡迎されたゞかと云ふに、其處には彼れが交際術の技巧の尠からず加はり居るを見る。米國に於て婦人の勢力を輕過すべからずと觀取せる彼れは、ウイルソン夫人の近親なる在京の某氏より、同夫人への紹介狀を得、出發前電報をもて發して貰ひたりとの事なり。既に米國社交界の明星たる大統領夫人の肩を入れたる事なれば、何かにつけて便宜を得たるのみならず、到る所に大持てに持てたるなり。婦人の勢力を利用するに想到せるの一事、流石に家は美夫人を擁し、花の巴里の社交界に三鞭の盃を嘗めたる石井なればこそと、人皆舌を捲けり。

斯くて調子に乘れる彼れは、多くの場合、米國の人氣に投ずるやうな演說を試みたるが、殊に紐育市長晩餐會に於ける、「日本は支那の門戶開放、領土保全を忠實に保持すべし」との聲明は、「過去數年間太平洋を掩ひし、不愉快なる雲霧を一掃せり」とまで感激せしめたり。雄辯家として一顧を拂はれざりし彼れが、異常の喝采を擇ひたるさへあるに、官僚

思想を抱ける彼れが、民主々義に共鳴を感ずるが如く受取らるべき言說を吐けるは、臨機應變の妙用、道に依りて賢しとも稱すべし。その日米共同宣告に至りては、失敗ならずと云ふも、多大の成功なりとは信ずる能はず。若し米人の言の如く、太平洋上の不愉快なる爆霧を全く吹拂し去れりとせば、何の文句も無き筈なり。然るに、對米問題は隨時に惹起し、隨所に利害の衝突を來して、險惡の現象を呈するの懸念なしとせず。況んや、米國は戰時に藉口して、彪大なる軍備擴張を實行せんとするに於てをや。彼れが駐米大使として彼地に歡迎さるゝは、何の理由に基づくやを知らずと雖も、彼れの行路は決して平坦なるものに非ず。その難局は、既に彼れが眼前に峙てり。

予石井は能く、微笑の價値を解し、對外人氣取の呼吸を知る者なり。本國に於ては、容易に公開演說の席上に起たず。縱令起つ事ありとも、其の識見抱負を述ぶる底の演說を回避す。唯纔かに不當不觸の談義をなす。海外に於て成せる堂々たる、一夕の雄辯をすら聽くこと能はざるなり。我が邦の外交家は、何故に斯く海外に雄辯にして、海內に緘默するや。又何故に斯く歐米の外交界に公明にして、本國の政界に秘密なるや。彼れが米人を感激せしめる辯舌を持ちながら、將に彼地に赴かんとするに際して、其の抱負を國民の前に披瀝せざるは何の心ぞ。吾人は、予石井が國民外交を疎外するの態度に慊らざると共に、米國に秋波を送るが如き餘りにお上手の言動を取らず。夫の米國の如く平和人道を力說し、之を以て他を責むること森嚴なるも、自己を容すに極めて寬大にして、他を凌いでも尙利權を攫取するに汲々たる國家に對し、親交の辭令を慣習的に、無意義に喋々するのみにては何にもならず。之れを思はずして、乃公の外交功を奏せりなど自惚るゝは、恰もぼんちの歌妓に鼻毛を讀まるゝの類、好笑の資料たるに過ぎざるを記憶せよ。彼れの外交事務に通曉するは、人皆之を知る。其の國家の休戚を荷うて起つの經綸抱負に至りては、未だ之を聞くことを得ず。極東門羅主義の雄辯が、財力の壓迫に、ぎやふんと參るが如きは、餘り見て呉れの好きものに非ざるなり。

（[illegible]）

▽圓轉滑脫の石井君と無愛嬌な林君

早川鐵治

今回石井君が米國で廣偉い成功をしたのは、實に我輩の以つて意外とする程であつた。立つ時にした英語演說を聽いた我輩は、失禮だが何うしても石井君にあれだけの成功を豫期する事が出來なかつた。然るに僅かの間に何ら練習したのか、天から授けられたやうなエロキユーシヨンのアートを以つて異常な効果を收め得たのは、我輩の意外とする所であると同時に、又大に之を尊敬する所である。米國が參戰以來、英國のハルフオアーとかノースクリツフとか佛蘭西のヴイヴイアニーとか云ふ世界第一流の政治家や新聞記者を初め、ジヨツフルのやうな凱旋將軍などが、各其雄辯を振つた後へ廻つて、習慣や風俗や言語の表現の全く異ふ石井君が、却つて彼等の企て及ばなかつた成功を收め得たのは偉い。石井君は實に不思議な隱れた天才を有つてゐる人である。

一體石井君は、根が武士の出身でないから、武骨の點が少しも無い。誰に對しても圭角の取れた、心切な、圓轉滑脫な人である。惡く云へば腰の低いお上手者だが、善く云へば圓轉滑脫な人で、男振りも西洋人に

好かれる、日本でも色男の部類に屬する方である。前の佐藤君(愛麿)は所謂英語には達者であるが、要するに人の好い英學者に過ぎない。外交家としての見識も腕力も餘り十分でなかつたが、殊に其風采なり人柄なりが、石井君ほど西洋人向きの圓轉滑脫に行かなかつた。其佐藤君の後へ西洋人好きのする風采を持つた石井君が渡米し、天から賦與されたか如き不思議な辯才を以て、米國人の人氣を博した。時偶ま獨逸人が盛んに權謀術數的な方略を巡らし、土耳古や南米を煽動してゐたのを米國が發行し、獨逸と手を切つた時だから、日米兩國間の多年の疑惑も、獨逸のミスシイヴアスな手段に由る事が解つたので、夫れが更に石井大使の成功を容易にさせたのであつた。移民問題とか人種的の差別の撤退問題など未だ重大な問題が、未解決のまゝ殘れてゐるが然し立派な成功と云つても好い。然し仕事は今後である。今迄にほんの小手調べに過ぎない。首尾能く手足調べを濟ました石井君に、我輩は首尾好く其本藝もやりこなして貰ひたい。西伯利出兵などについても、米國では餘り感心した行動とは思つてゐない。其他對支、對露の問題で、米國との間に面倒な交渉の起るに違ひない。是等の難關に處して、石井君は果して今日迄に得た意外の好評を墜す事なく、其盛名を永續して行けるだらうか。我輩は些か心配のやうな氣もするが、然し石井君には前に云つたやうに、人の意表に出づる意外の天才がある。案外難關に處して、數年來疑惑に疑惑を重ね、事によると兵火を交へるかも知れない日米間の關係を易す／＼と恙なく纏め得るかも知れない。

林權助君は石井君とは其風采に於ても、其性格に於ても、全然相反して居る。先づ武士育ちだけに、石井君のやうに圓轉滑脫とは行かず、無愛嬌で、兎角武骨になりたがる。其代り腹に策の無い、正直な男である。男振りでも石井君に比べると、東洋向きの男らしい方に近くて、決して所謂色男ではない。容貌が東洋向な許りでなく、頭腦も矢張り東洋向きで、語學には餘り通じて居られないし、西洋の事情にも明るい人ではない。斯の如く東洋流の林君が支那の公使になつたのだから、云はゞ適材を適所に措いたもので、必ず成功するに違ひないと、赴任の當時は我が人共に信じてゐた。所が案外評判が好くない。思ふに之れは自分の所信と中央政府の方策と巧く調和しなかつた事もあつたゞらうが、一つには林君が餘り人が好過ぎるので、猾詐奸計な支那人の言ふ事を、會津武士の頭で判斷してかゝる處から來たのであらう、然るに今や支那では、南北互に自然と折合を付けて、國を統一しなければならぬ氣運になつて來た。獨逸は單獨講和の成立と共に段々勢力を東漸して、支那や日本に迫らんとしてゐる。支那人としてもさう何時まで國内で鬩ぎ合つては居られない。こんな機運の動き出した處へ、林君は暫く東京に歸つてゐて、内閣の意嚮のある處を聞いたり、元老達の所へ意見を聞きに行つたりして、大分對支の方策も考へた事であるから、任地へ戻つてくる仕事は樂だらう。唯六つかしいのは、其方策を實施する上に、定めて日本にも支那にも下らぬ故障や批難が起る事であるが、林君は其處へ行くと會津武士だから。どし／＼と所信を斷行するであらうと思ふ。だから決心してやれば、存外容易く光明面に向かつて、從來の不評判を一掃する事が出來るだらう。石井君の今後に比べて、林君の方は遙かに效果を擧げ易い。

評論

九州疑獄事件と現代日本の社會的缺陷

大山郁夫

二月中旬、鋼片拂下問題が端なくも一議員の質問に依つて火の手を揚げ、事が河野前農相、仲小路現農相、及びその他幾多の議員に關係して居たために、大に世人の注意を惹きつゝあつた際に、議會に於ける現農相と故押川製鐵所長官との答辯の間に矛盾があつたといふので、形勢が益す重大となり、何か變つた結果を齎らさねば已みさうにもなかつた。然るに踰えて十八日、押川長官が自殺を遂げたとの報が新聞紙に依つて傳へられた。世人はさてこそと思つた。けれども同時に長官の死は、「鋼片拂下問題のためでない」といふ遺書が故人の身邊から發見せられたと報ぜられたので、世人は非常な疑惑を懷くに至り、その眞相が發表せられたまでは、好奇心が社會の各層に漲つた。

待つ間程なく、その眞相は遂に發表せられた。卽ち三月七日の夕刊以後の新聞紙は、一様に九州に於ける大疑獄事件を報じた。それは九州鐵道管理局の幹部、各課長以下驛員の多數、及び八幡製鐵所員、幷びに福岡鑛務署員と、之に關係せる多くの炭鑛經營者との間に於ける賄賂の收贈、饗宴、その他の不正行爲に關するものであつた。斯の如く、事は多數の官界及び事業界の人士に關するものであつて、押川長官は單にその一員たるに過ぎなかつた。而して長官は、事件の漸く曝露せんとするに及んで羞恥の念に堪へなかつたか、沈默の間に縊死を遂げ、殘餘の人々は知れた分だけ收監せられたのであつた。要するに今回の事件は、その罪跡の深刻なると、その關係人員の多數なるとに於て、往年の敎科書事件や、日糖事件や、海軍瀆職事件と並

び稱せらるゝものである。

此事件に就いて大に世間の前に面目を擧げたるは、昨年九月以來、警察官吏の力を借らずして、身自ら極力捜査の任に當り、遂にこの效果を收め得たる平沼検事總長、阿部検事正以下の多數の検事連であつた。無論、今回の検擧に於て、官界及び事業界の關係者の間に、細鱗が多く捕へられて呑舟の魚が逸せられた形跡がないではないが、検事總長・検事正以下の當該司法官吏は、その活働の可能なる範圍に於て、最善を盡くしたものであることは、全然之を認めねばならぬ。而してこの事件に關係あるらしき官界の大立物に手が觸れなかつたのは、幾分は我國に於ける司法權獨立の制度及び精神の不完全・不徹底なる事實に負ふ所があることは言ふまでもない。されば此事件發生以來、検事總長の地位を司法大臣の監督より獨立せしむべきものであるといふ議論が可なりに出て來る樣になつたのは、また自然の數である。けれども此意見も僅に一考に値するものであるが、同時に法律の效果は萬能でないこともまた察せねばならぬ。即ち我國の大官が惡事を行つて安全であり得ることの背後には、封建的專制時代より傳來せる一種の治者意識の潜伏して居るものであることは、疑ふべき餘地のないことである。此の考察は吾人をして、坐ろに三年前の大浦事件を想起せざるを得ざらしめる。又若干の事業界の大立物が、此事件に關して縲紲の辱めを免れて居るのは、明治初年以來の政府と政商との關係の遺習と、近年――殊に日露戰爭以後に於て我國にも勃興したる近代的資本主義の産業の威力に關聯して之を論じても、大なる誤謬に陷ることはないと思ふ。

否、近代的資本主義の産業は、現代の如き所謂「金が物言ふ世の中」に於ては、單にその絶大なる威力に依つて屢ば大規模に於ける腐敗行爲の本源なる事業界の大立物どもを、その身上に降り掛るべき法律的制裁より保護するのみならず、直接にこの「金が物言ふ世の中」を創造しないまでも、僅に之を激成するのである。即ち近代的資本主義の根本精神が勢力を揮つて、之に對抗する道義的精神が輿論の支持を失ふ時は、社會の各層の氣風が自然に經濟化せられて、すべての物が現實市場に於ける交換價値の有無に依つて評價せられ、經濟貨の所有の多寡が人生の幸福の尺度となるに至るのである。我國に於て近年産業の隆運に向ふに從つて、全社會の經濟化的傾向が次第に增進しつゝある

ことは、誰れの目にも明瞭に映ずる所である。かの製造工業上の產物は素より、文藝美術上の作品までが、現實市場に於ける交換價値を目標として產出せらるる傾向が年と共に進み行くは、正しく之が適例であると謂はねばならぬ。斯の如き時代に於て、今回の疑獄事件の如きものが出現したのは、決して怪むに足らぬのである。我等はその關係者どもの罪を憎む前に、先づ彼等の棲息した環境の不健全なる雰圍氣を見て、悚然として懼れざるを得ないのである。而かも彼等の棲息した環境は、同時に我等自身の棲息して居る環境と同一のものであることも亦、我等の考慮の中に加へざるべからざる所のものである。畢竟するに、社會改良の歸趨點は、環境改良の一事であらねばならぬ。

我國の封建時代より傳來せる武士道的規範が、或る程度まで現社會の經濟化的傾向に對抗して働き、相當の效果を收めつゝあることも亦、否むべからざる事實である。けれどもこの武士道的規範も、之をその封建時代の內容の儘に止めて置き、毫も之をして新社會の事情に適合せしめる樣に改造しない時は、その勢力が如何に微弱なものであるかは、現代に於て武士道的典型の維持者であるかの如き顏をして傲然として支配的地位に身を置いて居る閥族的長老政治家が、同時に資本主義の渴仰者たり、擁護者たり、實行者である事實に依つて、紛ふ方もなく裏書せられて居るのである。我等は某々大臣が如何にしてその巨大なる資產を作り、又その巨大なる資產に依つて如何なる活動をなして居るかを聞き、若しくはそれが某々の商會を助けて如何なる事業をなさしめて居るかの消息を告げらるゝ毎に、彼等が常に口にする封建的道德觀が新社會の經濟化的傾向の蠱惑に對して如何に無力なるかを考へずには居られないのである。押川長官の死の如きは、茲に又その一新例を加へたものである。

新聞紙の報ずる所に據れば、押川長官は一個の薩州男子であつて、武士道的訓練を受けたものであり、且つ又、過去の經歷に於ては、淸廉剛直を以て聞えて居た人である。然るに近代的資本主義は、直接間接に樣々の形式に依つて、傳說にあるエデンの花園を逍遙したエバを誘つた蛇の如く、此人に附き纏つた。無論彼の武士道的訓練は、彼をして極力此誘惑を排斥せんと試みしめたに相違ない。けれども「金が物言ふ世の中」である。經濟貨の所有の多寡が、人の幸不幸を決する時代である。彼は心に「惡魔よ、後へに退け」と叫

たであらう。けれども惡魔は後へに退かなかつた。彼は危い瞬間に、遂に墮落した。而して此墮落は、彼を死に導かねば已まなかつた。斯の如く觀來れば、彼の如きは寧ろ時代の犧牲者の一人であると謂はねばならぬ。彼は必ずしも常人よりも意思の弱い人ではなかつたであらう。否らざれば、彼は既往に於て清廉剛直の名聲を贏ち得ることが出來なかつた筈である。けれども彼に迫つた近代的資本主義の壓力は餘りに強く、之に對抗するための力たるべかりし彼の舊式の武士道的訓練は餘りに弱かつた。彼の死は彼の罪を償ふに足らぬかも知れぬ。また彼にして眞底より悔悟して彼の罪の前に慄ひ戰いたのであつたならば、彼は死よりも更に良好なる手段を採ることを得たのであつたとも考へられる。けれども彼の自殺は、少くとも彼をして憐むべきものの一人たらしめた。我等は今更、死せる押川長官の屍に鞭つ殘酷をするに及ばないが、併し幾多の生ける「押川長官」——而かも彼よりも更に大なる「押川長官」が權力と富とに飽滿して、その罪惡の發見せられざるを奇貨とし、恬然として世上に横行濶歩して居るのを快く見ることが出來ないのである。

近代的資本主義の產業の外形は、各國家の存立の基礎的條件が今日の狀態の儘存續する限りは、之を破壞することが出來ないことは謂ふまでもない。蓋し現代の國家は、物質的基礎なくしては、到底一日も存立する可能性を有せざるものであるからである。けれども縱し近代的資本主義の產業の外形をその儘にして置くとするも、その根本精神の上には、何等かの改造を加へければならぬ。已むを得ずんば、せめてその上に多大の制限を加ふることをでもせねばならぬ。否らざれば社會の解體の危險は、意外の邊より來るであらう。

一切の經濟貨を社會化（ソシアライズ）して仕舞ふことは、此方向に於ける最も徹底せる方法であるが、斯の如きことは到底實行を期し得べきことではなく、縱し實行を期し得べきこととするも、それは社會的革命を經た上でなければならぬ。然るに急激なる社會的革命は、現實政治の問題としては、極力之を回避すべきものであることは、言ふまでもない。が、假りに一種の社會的革命を經て、一切の經濟貨の社會化を斷行し得たとしても、それ以後の社會の一般的幸福が果して從前よりも勝るものであるか否かは、未だ解決せられざる問題であるから、責任ある政治家が輕々しく之が斷行を企つべき

筈のものではない。尤もこんな心配は、我國に於ては全然無用であると謂はば謂へる。何となれば、斯の如きことを斷行することを夢にでも考へて居る政治家は、我國に於ては皆無であるからである。けれども或る程度に於ける經濟貨の部分的社會化は、急激なる社會的革命を經ることなくして之を行ふことが出來る。殊に幸に所有權神聖の觀念が未だ極度に發達を遂ぐるに至らざる我國の社會に於ては、比較的溫和に之を行ふことが出來る。加之、之を行ふことは、今後資本主義の產業が益す旺盛を加へんとするに當つて、大に緊急の度を加ふべきものである。而して幾らかでも一般的に之を行ふには、是非とも之を社會政策的立法に依つてせねばならぬ。此頃になつて、曾ては社會政策を社會主義と混同して毛嫌ひをして居た官僚政府が率先して社會政策を云爲しかけたのは、極めて結構なことであるに相違ないが、彼等の社會政策が今に所謂「溫情主義」の官臭を脫せざるは遺憾である。けれども一部の人々の間に更らに進んだ社會政策を行ふ必要が次第に意識せられつつあるは掩ふべからざる事實であり、且つこの意識は次第に廣く一般國民の間に普及する見込があるものである。唯我國に於ては、代議士選擧資格の上に置かれたる極端なる財產上の制限が、貴族院や樞密院の制度以外に、進んだ社會政策の實行よの障害物となつて居るのは、遺憾千萬なことである。

併しながら、社會政策的立法のみを以てして近代的資本主義の害毒を有效に阻止し得られるものと早斷するは、非常なる誤謬たるを免れない。何となれば、第一に經濟貨の所有の多寡のみを以て人生の幸福の程度を決するは、社會の鞏固なる結合を計る上に於て、極めて有害なる事であるからである。第二に法律は一の社會的勢力には相違ないが、そのすべてではないからである。現代日本には法律萬能主義の社會觀が勢力を得つつあるが、是も亦近代的資本主義の漸進の一結果であつて、また恐るべきものたるを失はない。この點より見れば、社會政策的立法を以て、近代的資本主義の害毒を抑止せんとするは、毒を以て毒を制する效果以上に出でないものである。

近代的資本主義の害毒を最も有效に緩和せんとせば、その根本精神の一大要素たる個人的自由主義に對抗するに足る道德的勢力を强調せねばならぬ。斯の如き道德的勢力は何ぞやと謂はば、そは社會的奉仕の觀念であらねばならぬ。社會的奉仕の觀念が國民の良心

の中に深く彫り附けられ、輿論の强き支持を受くるに及んで、始めて近代的資本主義も大規模にその暴力を振ふことが出來なくなる筈である。九州大疑獄の關係者どもの中には舊式の武士道的訓練を受けたものがあり、又その多くは形式的忠君愛國主義の注入を受けた者であるが、その結果は我等の前に示された通りのものであつた。これに類似の腐敗事件は、尙ほ他に幾らも潜在して居ることも考へ得られる。この事は總て從來の我國の國民教育中の德育の主義方針の破綻を語るものであらねばならぬ。新時代の忠君愛國主義は、社會的奉仕の觀念を以て、その最も重要なる內容の一とするものでなければならぬ。

その他、右の疑獄事件の背後に於て、多くの婦人が重大なる役目を務めて居たことも亦、大に注意を要することである。此事件の檢擧に當つた阿部檢事正であつたかが、「總ての犯罪の影に婦人が潜む」ことを今更らしく慨歎したことは、婦人問題の硏究の隆盛なる今日に於て、深き考察を加へねばならぬことである。けれどもこれはその道の人々に讓ることとして、自分は玆で一先づ筆を擱かなければならぬ。（七—三—一九、大阪にて。）

選擧權擴張に對する各黨の態度

大山郁夫

政友會、憲政會、及び國民黨の選擧法改正案は何れも出來上つて、憲政會は二月二十一日に、國民黨は三月二日に、政友會は三月七日に、各々之を衆議院に提出した。

是等の三案の內容中に於て、最も多く一般國民の注意を牽くものは、無論選擧權及び選擧區に關することである。選擧區に關しては、憲政會及び國民黨は共に現制の選擧區制を維持せんとし、政友會は小選擧區制を新設せんとして居る。選擧權に關しては、憲政會案と政友會案とは、納稅資格を直接國稅五圓に引下げんとするに於て一致し、國民黨案のみは獨り之を三圓に引下げんとして居る。又多年問題となり來れる知識階級に選擧權を與ふる件に關しては、政友會案は何等の

規定を設けて居ないが、憲政會案と國民黨案とは、中等教育程度以上の學校の卒業者に對し、納税上の資格の有無に關せず選擧權を附與することに依つて問題を解決せんとして居る。卽ち憲政會案は、「中學校、師範學校、若しくは文部大臣に於て之と同等と認めたる學校を卒業し、又は之と同等の學力を有する者と檢定せられたる者」にも選擧權を附與せんと主張し、國民黨案は、「師範學校、中學校、若しくは文部大臣に於て中學校の學科程度と同等以上と認めたる學校、又は文部大臣の認可を經たる學則に依り、法律學、政治學、理財學を敎授する私立學校を卒業したる者」に對しても亦、選擧權を擴張せんと計つて居る。その外憲政會案は、「獨立の生計を營む」ことを選擧資格の條件の一に數へ、又現行法に於ける同一選擧區内住居上の條件に改正を加へて、之を六個月に短縮せんとして居るが、この點は他の二黨の案には規定せられて居ない。

以上の外に尙ほ、憲政會案は被選擧資格に關する除外例を增加して居るのは、注意すべきことである。卽ち同案は、現行法の第十三條第二項中に「政府の請負をなす者、又は主として政府の請負をなす法人の役員は、被選擧權を有せず」とあるを改めて、「政府の特別なる保護若しくは監督を受くる銀行又は會社の無限責任社員、重役、及び支配人は、被選擧權を有せず。政府の請負をなす者、及びその支配人、又は主として政府の請負をなす法人の無限責任社員、重役、及び支配人は、被選擧權を有せず」とし、且つ「官吏は勅令を以て指定したる者を除くの外、被選擧權を有せず。但し退職者はこの限に非ず」と言ふ規定を設けて居る。けれども他の二案は被選擧資格に關しては、現制度を維持せんとして居る。

以上の三案を對比する時は、選擧法改正の最大眼目たる選擧權擴張の件に關しては、之を肯定することに於て各黨間に全然一致を見、唯政・憲兩黨が納税資格を直接國税五圓に定めんとするに反して、國民黨が之を三圓にせんとする所に於て、その程度の差を見るのみである。普通選擧制を理想とする者に取つては、國民黨の三圓案にしてもこの目標を距ること甚だ遠いものたるを免れないが、若し一擧にして之に到達することが不可能であるとすれば、漸進主義を採つて國民黨案と折れ合ふことが出來る。同様に國民黨にしても、他の二黨の主張を自黨の主張に引附けることが出來ない限りは、自說を固守して虻蜂取らずに終るよりは、

寧ろ徐ろに他日を期し、暫く隱忍して他の二黨の主張を支持するを得策とするであらう。

憲政會が「獨立の生計を營むこと」を選擧資格の一に數へて居ることは、普通選擧制の場合ならば、その除外例を設くるために斯る規定を置くことは、多少の意義がないではないが、納税資格を五圓と定むる場合に於ては、それを置くことは全然無意義であるから、憲政會の立場より見て、斯の如き市町村の公民權に關する現行の法規を下手に眞似た項目を撤回することは、さして苦痛でない筈である。

又憲政會が同一選擧區内に於ける住居上の條件（現行法では一個年）を六個月に短縮しやうと言ふのは現行法中の最大惡弊の一つを除去するために最も當を得たものと謂ふことが出來るし又選擧權擴張の主張の當然の歸結であらねばならぬ。加之、此規定は選擧人名簿調製上の都合さへ許すならば、二個月に短縮しても、一個月に短縮しても、更に極端に言へば一二週間に短縮しても他に何等の支障を生じないものであり、且つ又、短ければ短い程結構なものであるから、選擧權擴張とまで切り出した他の兩黨に於て無論異存のあるべき筈のものではない。

若し夫れ憲・國二黨の提案たる知識階級に選擧權を及ぼす件に至つては、極めて合理的な主張であつて、我國の輿論に於ても既に久しく是認せられて居るものであるのみならず、政友會にしても主義として之に反對して居るのではなく、只市町村の公民資格が納税を標準として居る原則に符合せしめんとする便宜上の問題より之に同意することを拒んで居るものの樣である。されば政友會は、先づ市町村の公民權の上にも知識階級編入の主義を行つて、而して後漸次に之を國家の公民權の上に及ぼさうといふ意見を持つて居るらしい。けれどもこれは詰らぬ考である。苟くも知識階級編入の主義にして正しいものであるならば、之を孰れに先に施さうが、順序などに拘泥すべき必要は毛頭ないのである。若し之を便宜上の問題とすれば、現在着手して居る國家公民權卽ち衆議院議員選擧權に施す方が、更に便宜であるとすべきではないか。斯の如き根據なき議論に拘泥して、重要なる改革を行ふ機會を空しく逸せんとするは、我國人の常軌の場合に於ける通弊たる改革逡巡癖が、適ま政友會の態度の上に現はれたるものと見做すべきである。否らざれば、政友會の立場より見て、公正なる選擧を期する上に於て最も適

當なる分子たる知識階級を少しでも多數に無條件に選擧人の中に加ふることが自黨に不利益であると考へる事情が存在するに相違ない。兎も角、政友會がこれ程判り切つた道理の前に躓くのは、奇怪の至りである。政友會たるものは、此點に於て今一應反省する所あつて然るべきものである。

又憲政會が被選擧資格に關して、保護銀行・會社の無限責任社員、重役、及び支配人、并びに特定の官吏以外の一切の官吏を除外せんとするは、理論上甚だ公明なることである。前者の場合に方ては、政治上の特惠主義（ポリチカル・フエーヴオリチズム）を排除する上より見て當然であり、後者の場合に於ては、三權分離主義を徹底せしむる上より見て贊すべきことである。されば之に對して異議を唱ふる者は、その私的利害關係を疑はれねばならぬものである。

要するに三黨の選擧權擴張に對する態度は、その間に多少の差低こそあれ、孰れも皆極めて保守的のものであつて、普通選擧の理想よりは甚だ隔つて居るのみならず、選擧資格上の年齢の低下とか、或る程度以上の學生に選擧權を附與する件とかの問題に至つては、三黨の提案とも毫も言及する所がないのである。斯の如く三黨の提案の間に存在する距離は極めて短小なるものであるから、各黨にして眞底よりその口先で主張する選擧權擴張を眞に實現せんとする誠意があるならば、相互間に或る點に於て妥協點を發見して、之をして衆議院だけでも通過せしめることは、決して不可能のことではない樣に見える。

所が之に對して唯一つの大故障がある。それは政友會が小選擧區制を固守して、飽くまで之を貫徹せしめんとし、他の二黨はまた、どこまでも現制度の大選擧制を維持し、已むを得ずんば自黨の提案を抛棄してもその通過を妨げんとし、この葛藤のために選擧法改正の全體が丸潰れとなり、折角三黨が折れ合ひ得る點までも消失せんとして居ることである。

政友會が小選擧區制を主張する理由として述ぶる所の中には耳を傾くべき點がないではないが、要するに情實に依つて支配せられ易き我國の選擧界に於て小選擧區制を採用することは不適當であるといふ議論を打破するに足らぬ。又政友會の提案に係る選擧區の分け方は、著しく自黨の利益本位であるといふ疑念が、他黨の小選擧區制に對する反感を一層強めて居るのである。加之、我國に於ては、小選擧區制及び大選擧區制以外に、中選擧區制を主張する者もあつて、その孰

を採用することが果して最も適當であるかに就いては、研究が未だ終了して居ないのである。政友會は智識階級編入問題を後日に留保し、小選擧區制の採用を當面の必要として押出して居るが、是は寧ろ反對に、小選擧區制の採用を後日に留保し置き、知識階級編入を先決問題として處理すべきである。殊に今や輿論が選擧權擴張に對して大に動き、更に普通選擧制採用を叫ぶ者さへ少からざる時に當り、政友會が國民一般の尙ほ未だ痛切にその必要を感ぜざる小選擧區制に執着して、折角各政黨が合意し得る見込ある點までを破壞し去り、その極徒らに選擧權擴張の實現の時期を遷延せば、政友會は終局に於て輿論の攻擊の焦點となるべきことを覺悟せねばならぬ。

選擧權擴張に關する議論は我國に於ても殆んど討論終結の姿を呈し現下の輿論は一樣に此方向に傾いて居るのであつて、理想として更に極端に普通選擧制の採用を叫ぶ人々も、過渡期に於ける一時の便宜として、忍んで之を是認せんとして居る。殊に最近に及んで社會政策的立法が議會に於て益す重要なる地位を占めんとする趨勢を示すに至つてよりは、選擧權擴張の必要を一層痛切に感ぜられる様になつた。現代に於て下層階級の生活に關する案件が討議せらるに當り、有產階級の投票に依つてのみ選出せられたる議員だけが之に參加することの不都合なるは、誰の目にも明瞭に看取し得らるる様になつたのである。現に今期議會に於て、政府が提出した豫算案の上に現はれたる社會政策的意義の項目が、殆んど全く削除せられたのは、最も鮮明に此事を立證したものである。無論官僚政府の調製に係る豫算案の上に現はれたる社會政策的意義の項目と見做されたものと雖も、豫期せられた通り極めて微弱な社會政策の匂ひを持つて居たものたるに過ぎなかつたが、それすら比較的有福な階級の投票で選出せられた衆議院の大多數は、眞向より之を木つ葉微塵に打摧いたのである。又、同盟罷業とか、優良職工の表彰とか、中產階級の保護とか言ふが如き國民の大多數を占むる部分の利害に緊密なる關係を有する案件が、今期議會の進行中に於て、幾度となく大臣や議員の問答の端に上つたが、彼等の意見は概ね近頃官邊より流行し始めた溫情主義の範疇を出でなかつた。議政壇上に於て堂々と「岡半」の御用を務めた議員はあつたけれども、虐げられたる階級の解放を説いた議員の一人もな

かつたことは、「社會政策」なる近頃の流行語を口にする人々の集團としては驚くべき現象であつた。是等の賢明を誇る立法者の頭腦は、社會の下層に沈淪せる蒼生のせめて人らしく生きんとする要求が、彼等自身の陛下の赤子としての權利であると考へたことが、曾てないらしい。また是等の豪らさうな立法者の眼は、工場または田野に勞働する可憐の國民を、單に生產の道具・戰爭の材料とばかり見下して居るやうである。この三個月間に渉る議會速記錄を繰れば、我輩は溫情主義、恩惠主義、飼養主義の社會政策觀が、所在に餘りに多く表白せられてあることを發見せずには居られないのである。

國民の全部――下層社會の細民をも含めて――を人と見ることを得る代議士の若干を議會に於て得んためには、有產階級以外の投票をも有効にすることを前提條件とする。此立場を徹底せしめんがためには、勢ひ普通選擧制を主張しなければならぬのは、また已むを得ざる所であるが、唯それに到達するための道程として、現實政治の問題としては、我等はせめては國民黨の納稅資格三圓案をものにしたいと思ふ。けれどもそれすら尙時機が早いとならば、他の二黨の五圓案でも、有るは無きに勝ると思ふに依り、且つは選擧權擴張の問題に關しては巧遲よりも拙速を尙ぶ主意に依つて、極力その實現を促したいものである。唯我等が疑ふ所は、小選擧區制に拘泥する政友會を始め、他の二政黨が果してその口先で唱ふる選擧權擴張の主張に對する誠意を有して居るか否かの問題である。單に表面に現はれたる形勢よりして之を察すれば、官僚政府が「調査中」の好辭令を以て、纔に選擧法の別表のみの改正案を提出して責任免れを試むると同じく、各政黨も亦、表面選擧權擴張を唱へて輿論に調子を合はせながら、內實は小策小技巧を弄して、百方その實現を妨害して居るものとしか見えないことは事實である。

獨逸の憲政上の危險は、戰時中に拘らず、責任內閣樹立問題、及びプロイセンの選擧法改正問題より破裂した。我國の爲政者は仔細にその經過を驗察して、今にして大に鑑みる所がなくてはならぬ。(七―三―一八、大阪にて。)

姉崎博士に對する福田博士の批評について

法學博士　吉野作造

（一）

福田博士が「中外」三月號に於て公けにせる姉崎博士を批評せる一論文は深く吾人の注目を惹いた。議論の要點は二つの部分に分れる。一つはホッブスとグローシアスに關する姉崎博士解說に對する批難で、他は福田博士が觀て以て空想的世界觀とする姉崎博士の思想其物の排斥である。第一の點については何れ近き將來に姉崎博士より相當の辯解はあるだらう。吾人は唯兩博士の論戰によつて此古の二大學者を中心として當時の思想界の狀態を研究するの機會を與へられたる事を多とし且感謝する。唯第二の點については予は全く此論爭の局外者として傍觀の地位を取り得ざるが如き感がする。何となれば予も亦結論に於ては姉崎博士と尠くとも同一の傾向に立つものであるからである。此事は福田博士も亦認められて居るやうである。何となれば博士は予の名を一二度姉崎博士と同列に揭ぐるの光榮を與へられたからである。從つて予は姉崎博士に對して加へられたる批難の尠くとも一部分は又同時に予の立場に對して加へられたものと感ぜざるを得ない。

予は平素最も福田博士の學殖に敬服するの一人である。其時々發表せらるゝ所の論文は予の常に好んで讀む所である。予は元來人の批評を受くるや、如何に之に答へんかを考ふる前に、先づ其批評が予の思想のどの缺點を修補するものなるかを學はんとするの態度を執るものであるが、福田博士の今度の論文に對しては最も努めて此研究的態度を執つた。素より之によつて得る所極めて多かりしを感謝するが、然し結局に於て予は不幸にして、全然博士の論結に承服する事が出來なかつた。之れ茲に本誌の餘白をかりて一言せざるを得ざる所以である。

尤も予は姉崎博士に代つて答辯する積りはない。姉崎博士は今去つて米國にある。直ちに福田博士との間に論戰を開き得ざるは誠に學界の遺憾であるが、併し遠からず歸朝されて相當の答辯をせらるゝであらう。予の茲に一言するのは姉崎博士の思想其物を辯護する

を直接の目的とするものではない。福田博士が姉崎博士の如き思想を空想的世界觀となし、而して之を排斥するの態度について疑を質さんとするのみである。而して予が横合から飛び出して多少の文句を云ふ所以は、必ずしも予の名が二三引合に出されたばかりではない。斯の種の問題の研究は我々國民の當面の急務として亦大いに實用的價値ありと信ずるからである。

(二)

福田博士の批難の要點は、姉崎博士の說は「近頃流行の空想的世界觀」の一種なりといふにある。福田博士は此種空想的世界觀を破る爲めには飽まで執念く戰ふとて極度の熱心を示して居るから、姉崎博士と全然同一の說を執るにあらざるものでも之と稍々同じ傾向に立つものは福田博士に於て均しく一勁敵を見出さゞるを得ないのである。

然らば福田博士は何を以て姉崎博士の思想を空想的世界觀といふか。如何なるが即ち所謂空想的世界觀であるか。之は福田博士の次の言明に略ぼ表はれて居る。曰く「國家の實際問題を無視する者の閑事業」。曰く「日本人でありながら日本の具體的利益を度外視し云々」曰く「國家の實際的利益を離れて抽象的に理論を弄ぶ」福田博士は又頻りに「現實的に目覺めよ」と云はれるそは何の意なりやと尋ねるに博士はいふ「國家の爲めに其利益を具體的に主張せよ」と。此等の言明によつて觀るに國家の「實際的利益」を離れて抽象的に正義とか人道とかを說くのが即ち博士の空想的世界觀として排斥する所たるは明かである。

是に於て問題は起る。姉崎博士の說(又は福田博士の所謂空想的世界觀を取る一派の主張)は國家の具體的利害を全然眼中に置かざりしものなりや、又は少くとも全然之を無視せりと認むべきものなりや。我々はさうは思はない。予輩も屢々正義人道を說いた事はあるが、之を說くは即ち眞に國家の實際的利益を思ふが爲めである。姉崎博士の論文を觀ても、中に愛國の至情の蔽はんとして蔽ふべからざるものあるを認め得るではないか。之を目して抽象的理論の玩弄とするは人を誣ゆるも亦甚しい。

然し福田博士は唯徒らに人の心事を曲解するの人ではない。故に福田博士が眞摯に姉崎博士の說を空想的世界觀なりと確信して居るとするならば、福田博士は所謂國家の實際的利益といふものを極めて狹く解釋して居ると觀なければならない。尤も博士は國家の利益

といふ文字に對して何等正確の定義を與へて居ない。けれども此點に關する博士の意味は漠然ながら大抵其邊と見當のつかない事はない。斯く狹き意味に國家の利益といふ文字を解するに於て初めて福田博士の批評は成り立ち得る。何となれば姉崎博士は勿論其他之と同一の傾向に立つ一派の論者は、所謂狹き意味に於ての國家の利益に執着せず否な之にのみ執着する事が却つて結局國家の不利益を來すことありとなし、他の言葉を以つていへば狹き意味の國家の利害に執着する事より生ずる國家の謬迷を、抽象的理論の提示によつて矯正せんとするものであるからである。

さうすると玆に又更に一つの肝要なる問題が起る。狹き意味の國家の利益を度外視して抽象的理論を主張するのは何故に排斥すべきものなりや。又他の半面に於て此狹き意味の國家の利益を主張する事は常に必ず嘉すべき事なりや否や。福田博士は此狹き意味の國家の利益に執着せざる點に於て姉崎博士を攻撃し、所謂國家の利益の爲めならば抽象的理論に對する態度を曖昧にしても妨ぐる所はないといふやうな意見を述べられ、其例としてグローシアスを引き、彼の「海の自由論」を唱へたのは和蘭の利益を主張せんとするの動機に出でたものであつて、若し彼をして「葡萄牙に生れしめば果して海の自由論を唱へたであらうか」、唱へずともそは別段彼を累するものにあらずといふやうな說を述べられて居る。斯くの如き態度の果して正當なりや否やは暫く別問題として、姉崎博士を攻擊する福田博士の態度は此處までは一貫して居る。けれども福田博士は更に一轉してグローシアスとても「和蘭の利益の爲めにするといつても眞理を曲げたものではない」といひ、眞理に背いては所謂國家の利益の爲めにするのでも全然之を是認するを得ずとするが如き見解を執つて居る。加之東印度會社の利益掠奪方針を批難し、如斯は結局和蘭の國威を失墜する所以なりと警戒せりといふ同國のオルデンバルネフエルドを公明正大と賞讃して居る。之れ豈に抽象的理論を以て所謂國家的利益の爲めにするものゝ行動を倫理的に規律せんとするの努力を是認するものではないか。若し福田博士の此點に對する態度が其眞摯なる確信より出づるものであるならば、姉崎博士の說を唯國家の利益を度外視して抽象的理論を弄ぶとの故を以て之を空想的と批難する事は出來ない筈である。

果して然らば福田博士の思想は恐らく（一）抽象的に

如何に立派な主義でも國家の實際的の利益を度外視して之を主張するは空想的として排斥すべきもの、(二)又如何に國家の實際的利益の爲めになりても抽象的眞理を外れては取るに足らずとするに在るのであらう。然らば國家の具體的利益を主張するもの常に必ず良きに非ず、之が是否は其が眞理に合するや否やに依りて定まるものといはざるを得ない。斯くならば福田博士の立場は姉崎博士等の立場と大した相違のあるものではないやうに思ふ。

それでも福田博士と姉崎博士との間にはまだ大いなる距離がある。其距りある所以は姉崎博士が抽象的理論に耽つて國家的利益を度外視するが爲めではない。福田博士の斯く解釋するは正當でない。姉崎博士とても國家の利益を全然眼中に置かないのではないからである。唯之が國家の利益の爲めだとする其事に於て兩博士が其觀る所を異にするのである。故に予輩は福田博士が所謂國家の具體的利益を無視して抽象的に正義人道を說くものを一概に空想的として排斥するの態度には服しないけれども、若し福田博士が姉崎博士の取つて以て之が國家のためなりとする所の立說の內容實質を批判して其誤りなることを指摘するといふのであるならば、吾人は改めて博士の其論を傾聽するの必要がある。

(三)

福田博士の批難は更に進んで姉崎博士が之によつて日本を導かんとする抽象的理論の內容に立ち入つて居る。而して其所謂抽象的理論が實質上米國大統領の宣言其物であるといふ點に於て福田博士は日本の國家的利益に反すとなして居る。福田博士曰く「日本人でありながら日本の具體的利益を度外視して幾多の事件に於て日本の利益を踩み躙りつゝある所の米國大統領の教書に隨喜の淚を流し云々」。又曰く「ウヰルソンのやうに凡ゆる機會に於て日本の利益を無視する事を敢てしながら云々」斯く日本の利益に正反對なる米國大統領の宣言を取つて日本を導かんとするが故に姉崎博士の說は全然空想的であり又全然排斥すべきものであるといふのである。

是に於て予輩は次の問題を提出せざるを得ない。(一)ウヰルソン並に米國が凡ゆる機會に於て故意に日本の利益を蹂躙しつゝありといふは事實なりや。(二)假りに之を事實なりとするも米國大統領が戰爭の目的並びに講和條件に關してなせる宣明は總て皆日本の利

益に相反するものと認めざるべからざるや。（三）米國大統領の宣言に隨喜するは無條件に日本の具體的利益を度外視する事になるや。

第一點は事實問題である。今一々玆に事例を列擧して爭ふの煩を避くるも、公平なる觀察者は恐らく福田博士の見解を以て偏狹に失すとするであらう。敢て米國を辯護するには非ざるも、予は總ての機會を捉へて故意に日本を傷けて居るとは考へない。又現に日本の利益と相反する行動ありとも、其中には諒とすべき相當の理由あるものもあらうと思ふ。第二點に就ては米國大統領の宣言が特に日本を害するといふ特別意圖に出でざる以上は强ちに之を不都合なものといふ事は出來まい。若し此宣言の內容に公明正大の眞理を含むならば、卽ち我も之を取つて自ら利し、同時に之によつて彼の在來の不義を純化する事も出來るではないか。從つて第三點の疑も最早吾人には問題とならない。米國大統領の宣言なるが故に一から十まで之を取るな、之を容るゝは卽ち日本の利益に反すとの言を、公平なる福田博士の口より之を聽くは予輩の意外とする所である。之を取るの可否は、米國が從來我に對して如何なる態度を取つたか、米國大統領の現に日本に對して取る所の方針は如何なるものなりやの點によつて決せられずして、直に宣言の內容其物によつて決せらるべきである。日本に對する米國の態度の所謂不正不義は、大統領の宣言に盲目的反抗を示す事によつて矯正する事は出來ない。

隱す所なく云へば、予も亦姉崎博士と同じく米國大統領の敎書に隨喜する一人である。何故かといふに、彼は國家個々の利害を離れ抽象的の主義を以て戰爭を終結し、且將來永久に之に依て平和を保障せんとするの思想を最もよく代表するものと思ふからである。尤も此點に於て敎書は國家個々の目前の利益を度外視するといふ批判を免るゝ事は出來ない。併し國家目前の利益を互に爭ふて居ては際限がない。姑く之を無視して國家間の爭議を抽象的理論の裁決に一任しようといふのが今度の戰爭によつて新たに喚起せられたる世界人心の要求である。而して斯くの如き思想が國家の具體的利益の問題に平素深き直接の交渉のない人々の間から生れたるにあらず、最も深い關係のある有力な政治家の間から發現して來たといふ事は特に之を記憶する事を要する。果して然らば姑く國家目前の利益を無視するは世界の一員として國家の眞の利益を計るといふ

動機から出でたものと見るべきではないか。之を空想として排斥するには問題は餘りに現實である。

一體戰爭は利害の衝突から起る。從つて平和は利害の調節によつて齎らされなければならない。併し乍ら利害の調節は事實不可能である。調節し得るものであるならば初めから戰爭にはならない。而も利害の調節によつて平和を見ざるべからずといふのは戰爭に伴ふ一大矛盾である。其處で從來の平和は一方の意思が他方の意思を全然屈服するか或は双方が取疲れて此上奈何ともする事が出來ないといふので、第三者の周旋を機會に不徹底の妥協を爲すによつて收りがついた。斯くの如きは固より爭ひの根本的解決ではない。之れ從來世界の平和が一日も安全に保障されなかつた所以である。其處で何とかして世界永久の平和を保障するの途はあるまいかと昔から多くの志士仁人は攻究を重ねたのであるが、奈何せん實際世界に於ては虎視耽々互に武備を競ふの有樣であつたから平和論は卽ち紙上の空論に屬し實際家の省る所とならなかつた。然るに今度の戰爭になつてから之では堪らぬと實際家も氣が附いて、戰後は何とかして戰爭の機會が絕對にないやうに或は著しく少くなる樣にせなければならぬといふ事に意を用ふる樣になつた。而して實際政治家の中で此種の立場から、一方が他方の意志を屈服し、戰勝の上に平和を來たさんとする在來の俗說に疑を挾み、國家間の具體的利害の衝突に超越して何等か抽象的主義を求めて之によつて戰爭を罷め平和を打建てんとするの思想に最も早く着眼したものは米國大統領ウイルソンであると思ふ。彼が嘗て「勝利なき平和」を提唱して交戰國双方の間に周旋を試みんとしたのは畢竟此趣意に出づるものである。當時種々の批判論駁を受けたけれども予輩は此點に於て彼の一世に卓越する政治家たるを認め得た。けれども其後の事情は遂に米國をして參戰せざるを得ざるに至らしめた。「勝利なき平和」の主張者が一轉して飽まで獨逸を打破する事によつてのみ世界永遠の平和を克復し得べしとするのは大なる矛盾なるが如くにして、實は其間に一貫の理路あるを認むる。が此點は今玆に說く問題ではない。唯吾人は米國の大統領が今日尙一定の抽象的理論を掲げ之を承認するならば何時でも干戈を收めるといふ態度をとつて居る事を明かにすれば足る。而して彼が抽象的の主義によつて戰爭を終結し將來の平和を樹立せんとするの思想が、もう一層極端に同一の目的を達成せんとする事

命露國の態度によつて更に深く刺戟せられた事は言ふを待たない。尤も米國の思想は露西亞のそれの如く徹底を缺くの嫌はある。然し又徹底を缺く丈けそれ丈け各國家の實際的利益を全然無視しないといふ點もある。例へば民族自決主義を主張するにしても、露國は之を總ての場所に絶對的に行はん事を主張するに反し、米國は今度の戰爭に直接關係ある地域に於てのみ此主義を適用せん事を主張するが如き之である。單純なる理論上からは、些か徹底を缺くの嫌はあるけれども、元來實際政治界に於ては傳統・慣例其他總て過去の成果の上に築かれたる鞏固なる地盤があつて、之に一擧して新理想を徹底せしむる事は不可能である。故に實際政治家は動もすれば過去を重んずるの因循姑息に陷り易い。又過去を省み過去に從はずしては政治家は十分實行力を發揮する事は出來ない。徒らに新理想に奔る時は過去の上に立つ諸勢力は猛然として之を妨ぐるからである。併し乍ら政治家に尊ぶ所は又前途に新理想を認めて現實の社會を之に導かんとする點にある。新理想の實現能力のないものは如何に實行力があつても之を偉大なる政治家といふ事は出來ない。唯遺憾な事には現今の世の中に於ては理想の實現に熱心であれば其人の政治的實行力は各種の障礙を受ける。政治上の實行能力を大に發揮せんとすれば理想の實現は之を犧牲に供せざるを得ない。兩者は正に相反比例する。故に政治家の品定めに於ては、此相反比例する二つの方面を比較的多分に有するものを以て第一に推さなければならない。此點に於てウイルソンの如きは確かに當世に傑出する一大政治家と云つてよい。唯夫れ實際的政治家としての彼に理論の徹底を責むるは無理である。此點に於て予輩は戰爭の目的並びに講和條件に關する抽象的主義の宣明に關しては革命露國の主張を採らずして米國大統領ウイルソンのそれを採る。ウイルソンの説を行はれしむる事が大體に於て世界共同の利益であり、又世界の一員としての日本の利益であると信じて疑はざるが故である。

尤もウイルソンの思想が戰後直ちに實現するとは思はない。福田博士は曰く「デモクラシーが世界の大勢である事は疑がないが此戰爭で直ちに世界が悉く民主化せらるゝといふ事は到底考ふべからざる事である」と。云ふ迄もない事である。併し實現が出來ぬからとて全然之を捨てよといふ理屈はない。要するに世の中は現實に對する理想の永遠の爭鬪である。急速なる實

現の不可能に失望せず日に〱努力する事によつて世界が進歩するのではないか。假令完全なる實現が出來ないとしても、ウイルソンの教書に表れたやうな思想が一層適切に「現實」を批判し、以て世の中を一歩向上せしむる事が出來るならば、我々が之が爲めに努力するを決して徒勞とは思はない。

要するに予はウイルソンに裏書し、彼の教書に隨喜する事を決して夢を追ふ空想とは思はない。況んや之によつて日本を累すとおや。

斯く考ふれば米國大統領の教書に隨喜するの故を以て姉崎博士を攻擊するの根據は甚だ薄弱である。けれども若し福田博士の意がウイルソンの教書の趣意はいゝ、併し趣意がよいからとて米國を援け、之によつて英米が今度の戰爭で最後の勝利を得るに至るのが日本の不利益である、此點に於てウイルソンの教書に隨喜するは日本の利益に反する所以であるといふのならば、博士の說は又もう少し深く考へて見るの必要はある。博士は所々に斯う云ふ思想をいひ表されて居る。卽ち米國などは口ではどんなよい事を云つても事實上正義公道に反する所置が少くない。殊に我日本に對する從來の方針が一から十まで亂暴極つた者であつた。戰後も恐らくさうであらう。且つ又米國は現に必ずしも宣言に忠實でない。デモクラシーの爲めに戰つて居るといつて居りながら、現に最もオートクラチックなるは米國ではないか。然らば米國の勝利は卽ちオートクラシーの勝利である。故に米國の勝利は卽ち日本も亦戰はんとして居る所の反對の主義の勝利を意味し、事每に日本の不利益を計る國の勝利を意味する。此點に於て我々は米國を援けてはならないと。福田博士は此事に就ては更に英吉利をも引合に出して居る。極端に推し詰むれば、英米と行動を共にするのが誤りで寧ろ之を敵として戰ふべしといふ議論になりさうである。そは何れにしても併し博士の此議論の根據となつて居る事實は果して事の眞相を得たるものなりや否やは一個の大なる疑問である。米國が過去に於て正義公道を無視したとしても現在並びに將來亦同樣に同一の態度に出づるとも限らない。予輩は固より米國は正義公道を以て終始一貫したといふ程に之を辯護し得るものではない。けれども一方に於ては過去の誤りを正し、國家の行動をして正義公道の軌道を誤らざらしめんと努むる點に於ても、米國は最も勝れたる特色を有する事は事實の上に之を掩ふ事は出來ない。ルーズヴエルト時

代にパナマ地方に米國の保護權を設定せんか爲めにコロンビヤ國民の一部を煽動してパナマ共和國を獨立せしめた陰謀に對し、先年ウイルソンが大國の威信に關するをも省みず、共和黨側の猛烈なる批難攻擊をも意とせず、謙つて過去の罪を謝し多大の償金を以てコロンビヤに報いたるの態度を博士は何と觀るか。米國は西班牙と戰つて比律賓を奪つた。併し乍ら此地方の事情に精通せらるゝ先輩の新渡戸博士などの説によると、米國は比律賓に對し、將來獨立を與ふる積であると豫定しなければ到底理解する事の出來ない政治の遣り方をして居るといふ事である。數へ立てれば米國にも正義公道に反する事柄は多々あらう。けれども英吉利や獨逸や或は日本の爲す所以上に米國に不正不義の行爲多しといふを得るか。而かも米國のコロンビヤに對してなす所、比律賓に對してなす所の如きは獨り彼にあつて他に類似を觀ざる行動ではないか。予は米國を特に辯護する意味はない。唯博士が米國が特に僞善の著しき國なるかの如き感想を與ふるを以て些か偏僻に失せずやと怖るゝものである。若し夫れ日本に對する米國の所謂暴狀については博士と共に其事實を認めないではない。けれども米國が事每に故意に日本を苦しむるといふの誇張曲解の嫌あるはいふまでもなく、又吾人が動もすれば米國の誠意を疑ふの種となつて居る彼の日米問題の如きも、事固より双方の誤解に出づる事多し雖も、博士の如き偏僻の論が又一層此問題を困難ならしめた事情もある。日米問題の論究は今予輩の仕事ではない。唯予輩の此問題に關して多少研究せる所の結果によれば、此點に關して米國朝野の正義を糺すと同じ程度に於て日本の義正も亦糺明せらるべきものたる事を一言して置く。日米問題の紛糾は獨り米國の不義僞善に基くと見るのは大いなる誤りである。

米國がデモクラシーを唱へて而かも之を裏切つて居るといふ批難に對しては事極めて重大なる問題に觸るゝと思惟するが故に次に項目を改めて之を論じよう。

(四)

大統領の敎書は戰爭目的の一としてデモクラシーの確立といふ事をいつて居る。而かも此點に於て米國は固より英國も全然其宣言に裏切り、現に今日極端な專制をやつて居るではないかといふのが福田博士の批難である。博士曰く「英米兩國にては極度にデモクラシー逆轉の事實がある」。又曰く今日世界最大のオートクラットはロイド・ジョーヂとウイルソンとであると。

更に又曰く却つて獨逸にてはハートリング就任以來責任內閣、政黨內閣の芽がさしたと。

ハートリングが帝國宰相となつた事が、獨逸政界が「責任內閣若くは政黨內閣の實現に近つくべく初めた」ものと認むべき何等の根據なき事は、獨逸帝國の特有なる政治組織を多少知るものゝ悉く認むる所である。「假令不十分ながらも」と意味を制限しても、そが驚くべき速斷たるを免るゝ事は出來ない。併し獨逸が段々デモクラチックになつて居るといふ博士の見解に對して予は深く爭はんとする考へはない。唯英米兩國當局者が戰時非常の今日の場合、絕大なる權力を一手に收め居るを目してデモクラシーの逆轉となすの論斷に對しては大いに異議を唱へざるを得ない。

一體今度の戰爭はデモクラシーの爲めの戰爭であるとはよく人のいふ所である。之に關聯して或は民本主義の確立といひ、或は民主的外交或は民主的講和といひ、或は國際上の民主主義といふ。是等の文字の意味について我國には種々疑問があるやうである。而して今度の戰爭は民主主義の爲めなりといへば、我國の君主國體と相戾る事がないかとの疑も起るといふので、浮田博士は「太陽」の三月號に於て戰爭の目的としての民主主義は「各國の內政に干涉して國體又は政體を變更せしめんとするものにあらず」して「國民的生存の權利」を尊重保障するといふ意味のものであると解して居る。即ち民族自主の意味に解するのであつて、而して之が爲めに戰ふといふ意味は「獨逸は自國の文化を矯　する爲めに之に抗するものに戰を挑む」を以てなりと說明して居る。然し予輩は此解釋を採らない。矢張り戰爭の目的としてのデモクラシーはオートクラシーに對するものであると考へる。從つて民本主的外交とは外交の事を專門外交家の秘密の取扱から國民の手に之を解放する事を意味し、民主的講和とは講和會議には專門外交家の外所謂平民階級の代表者をも參列せしめるといふ要求を意味し、又國際上の民主主義とは、各國に於けるオートクラシーを打破し民本主義の上に政治組織を改めしめ、之を其礎として國際社會を建設せん事を要求する者と考へて居る。オートクラシーを打破して廣く政權を一般國民の手に歸せしむる新たなる世界を作らんとする事が戰爭目的の一つであると考ふるものである。尤も此思想の際には、とかく戰爭はオートクラシーの國に多い、政權が國民一般の手に歸すれば無用の戰爭は起るものではないといふ。

の潜んで居る事は之を認めざるを得ない。此考の當否は姑く別問題として、要するにデモクラシーの要求は永久平和保障の要求と相伴つて起つて居る事は事實である。而して英米等の聯合國が勝てばデモクラシーが盛んになり、獨逸が勝てばオートクラシーが盛んになると觀るのが通常である。

此通説に對して福田博士は反對する。第一に博士は獨逸が勝つても戰後の世界にオートクラシーが盛んになるとは限らないと觀て居らるゝやうだ。此點は予輩は同感である。極めて不確ではあるけれども獨逸は假令戰爭に勝つてもデモクラシーになるではあるまいかと想像せられる。唯、今の所更に其傾向は見えない。ハートリングの就任は必ずしも此傾向の開かれたる第一歩と見ねばならぬものでないことは先にも述べた通である。故に獨逸が勝つてもオートクラシーが盛んになるとは限らないにしても、デモクラシーを最後の勝利者たらしむるが爲めに英米よりも寧ろ獨逸を勝たしたいとは思はない。次に博士は英米が勝てばオートクラシーが盛んになるかも知れない、現に今の英米には極度のオートクラシーが表はれて居る、英米の勝つことは即ちオートクラシーの勝つことであるといつて居らるゝ。此點について予輩は大いに博士の説に疑なきを得ないのである。

博士は何の點にオートクラシーとデモクラシーとの區別を置かれて居るのであらうか。行政官の權限の廣狹は決して兩者を區別する標準ではない。二者は實に國民の直接間接の現實なる監督を受くるや否やによつて分るゝものである。尤もオートクラシーにあつては行政官の權限の廣きを常とする。併し狹くとも其狹き範圍に於て國民の監督の外に立つを得ればまたオートクラシーたるを失はない。之に反して如何に權限が廣くとも、そが現實の監督の裡にあればそは立派なデモクラシーである。今若し世界の行政首長をとり、其權限の最も廣大なるものを數ふれば米國の大統領である。米國大統領の斯くの如き地位は戰時になつて新たに始つたことではない。此點から觀れば米國の大統領は初代から今日に至るまで福田博士の所謂最大なるオートクラットであつた。然れども彼は任期四年の制限を受ける事によつて嚴重なる國民の監督の下に立つ事を忘れてはならない。再選は一度は許さる。從つてどんな有能敏達の士と雖も八年以上其職を繼續する事は出來ない。此一定の任期の制限があればこそ米國民は安じ

て絶大の權限を大統領に與へたのである。國民の氣に入らなければ四年で自分の壽命が終るから、思ひ切つた事をどん〳〵やつて、國民の意嚮と利益とを無視しない。玆に米國の特色がある。大統領の一見オートクラットの如く見えるのは之れ絶大なるデモクラシイを背景とするが故である。本當のオートクラットは本當のデモクラシーの下に於てのみ最もよく現はれ得るものである。此點は英國とても同じことである。英國は固より平時に於ては宰相に米大統領の如き廣大の權限を與へて居ない。唯戰時非常の處置として臨時にロイド・ジョーヂが絶大の權力を揮ふことを許されて居るが、之れ戰後に於て繼續すべき制度なりや否やは今日所明かならざるのみならず、又今日とても全く國民の監督の外に立つものではない。英國には今日尙國民の監督權を尊重するの思想は甚だ深い。先般巴里最高軍事會議に聯合諸國軍事統帥の實行權を賦與するの議を承認するや、之に關する說明をアスキスが求めたるに對し、宰相ロイド・ジョーヂは協約の義務と事柄の重大とを理由として或點以上の說明を拒んだ。議員の多數は之を諒としたる如くなりしも、尙少からざる一部の間に、議會に相當なる說明を與ふる事なしにかゝる大事を宰相の專決に一任するは英國憲法の精神に戻るとするの感じが大部强かつたやうである。斯ういふ考へが相當の勢力を持つて居るといふ丈けで英國のデモクラシーは未だ其光を失はない。現にロイド・ジョーヂも、自分の此態度を不可なりとせば何時でも內閣を改造せよと公言して居るではないか。

此點になると獨逸は全然趣を異にする。權限の大小は固より問題ではない。其權限の範圍に於て當局者は全然國民の直接間接の監督の外に立つて居る。國民は精神的に政府當局者の思想の上に道德的影響を及ぼし得るの外、殆んど當局者の行動を左右すべき手段はない。此點に於て我々は獨逸をオートクラシーなりといふのである。

尤も所謂國民の監督なるものは現實なるを要する。日本のやうに國民が政府を監督するの體裁が表面上整つて居つても、之が有名無實に終るのでは矢張り一種のオートクラシーといはなければならない。從つて英米に於てもロイド・ジョーヂなり、ウイルソンなりが今日其地位を利用し、或は議員を買收し或は國民を瞞着して監督關係を逆用する事あらば、福田博士が此人を罵つて世界最大のオートクラットとするの批難は當つ

て居る。併し我々はウイルソンやロイド・ジョーヂは、例へば三十有餘年の永きに亘つて墨西哥を支配し、先年マデロの爲めに顚覆されたポルフィリオ・デアスのやうな、又は事毎に國民の意思を諂ふと稱して部下の兵卒を使嗾して民意を製造せしむるを常とせし大小ナポレオンのやうな奸雄と認むることは出來ない。彼等の潮堂に立つて絶大の權力を揮ふ所以のものは、之に相應する國民の大いなる信任に基くものと信ずる。彼等が自家の思想に依つて國民を導く爲めに國民を煽動したといふ事實は否み難い。併しながら之を以てオートクラットなどと云ふのは誤りである。要するにウイルソン、ロイド・ジョーヂを以てオートクラチックといふのに妨げないけれども、之をオートクラットと云ふのは誤りである。從つて彼等のオートクラチックなるは、デモクラシーを裏切るものにあらずして、デモクラシーの益々盛んになりつゝあることを證明するものであると思ふ。

以上論ずる所によつて、予輩は福田博士が姉崎博士の思想を以て空想的世界觀とするの根據を疑ひ、而して其所謂空想的世界觀が排斥すべきものなりとする所以の根據を疑ふ理由を明かにした。而して姉崎博士と同じ系統に屬すと博士自身も認めらるゝ予自身の立場が、博士が姉崎博士に加へたる批難によつて一點の動搖を感ぜざることを公言して、謹んで博士の敎を乞はんと欲する。

出兵に關する所謂少數者の熱狂と多數國民の冷靜

法學博士　吉野作造

兎角海外發展の問題になると譯も無く熱狂し易い性癖を有つて居つた日本國民が、今度の西伯利出兵問題に對して極めて冷淡な態度を取つて居ることは誠に珍らしい現象である。之れ青年元氣の消耗に由るか、抑も又利害打算の敏捷となれるに由るか。或人は之を以て憂ふべきの現象となし、又或人は少くとも燥急性より脱却せんとしつゝあるの傾向に於て之を欣ぶべしとする。

今度の出兵論に對する多數國民の態度は、唯之を冷

靜とのみ斷ずる事は出來ない。進んで之に反感を呈するが如く見えるのは又吾人に取つて見逭すべからざる現象である。三月央殆んど時を同じうして東都の中央に出兵反對と贊成との二種の演說會があつた。出兵反對の演說會に於ては聽衆は極めて靜肅に之を謹聽した。多くの者は辯士の所論に啓發されて成程と考へて歸つたやうであつた。之に反して出兵贊成の演說會に於ては、辯士の貧弱にも由るが、聽衆は初めから侮蔑と嘲笑との態度を以て迎へたやうであつた。果ては一部の熱狂せる聽衆の、演壇に驅け上つて辯士を毆打し、數名の負傷者をさへ出す者があつた。斯の如きは日露戰爭當時には到底見られない現象であつたに相違ない。

此等演說會の聽衆の態度は或意味に於ては毫も顧るに足らないとも云へるけれども、又或る意味に於ては之が實に國民多數の感情を如實に反映するとも云へる。何故と云ふに之等聽衆の多數は學生青年か、若くは尠くとも世事の匆忙に係らざる連中である、社會の實際に直接の利害關係無き人丈け、此等の人の判斷は現實の責任を以て爲す所ではない、從つて此等の人の行動は所謂齊東野人の行動として轉々に看過するを得んも、また之を他の一方から考へれば、此等の連中は實際の利害關係に囚へられざる人々であり、人最も能く世上各種の論議に自ら接するの餘裕と慾望とを有する連中である。新聞・雜誌・講演等によつて爲さるゝ社會教育の効果は、最もよく此種の人の思想の上に表はれる。故に或る意味に於ては、此種の人々の思想感情が實に國民の夫れを測定する標準になる。此意味に於て我々は此等の云はゞ無責任なる彌次馬の感情を輕視する事は出來ない。而して此等の人の思想なり感情なりが、出兵反對論に緊張し、出兵鼓吹論に著しき反感を示したるは、我々の最も注目を要する現象である。

然らば斯くの如き現象は如何に是を解釋すべきものであるか。先づ疑のない點は、今日の青年は已に海外發展・領土擴張といふ空名に動かなくなつた事である。舊式の盲目的膨脹主義より覺醒した事である。否ずんば戰時の今日殊に歐米諸國が大戰に沒頭して全く東亞の經營を吾人に一任し居るに際し、所謂一攫千金の夢を辿りつゝある出兵論に隨喜熱狂せざる譯はない。況んや日本人は由來此點に於て最も熱し易き性癖を有せしに於てをや。而かも今日之と全く反對の現象を呈し居る所以のものは、彼等が漸く世界の一員としての帝國の地位に覺醒し、今日世界を支配し居る

の何たるかに漸く眼を開きつゝある爲ではあるまいか。

當代の青年の世界的に覺醒し初めたるに對し、所謂十年前の先覺者たりし者が、今尙舊式の甘夢より目覺めざるは、之れ亦青年の覺醒と相對して驚くべき現象である。見よ、今日出兵論を執つて天下に呼號して居る者は、新聞記者にまれ、政治家にまれ、多くは皆十年以前に名をなせる帝國有數の識者ではないか。而して此種の迷想家を代表して臆面もなく社會の表面に打つて出でた者に所謂九博士の連中がある。

予が九博士に於て平素尊敬する師友先輩を見るは甚だ遺憾とする所である。併しながら學界に於ける先覺であり、且つ社會が視て以て一世の師と仰ぐ此等有識の士が、學者に相應しき確實なる根據ありとも覺へぬに漫然として出兵の必要を主張し、淺薄なる領土的野心に迎合するの態度を取るは、吾人の到底默視するをを得ざる所である。憶ひ起す、日露戰爭の當時七博士の蹶起して國論を動かすや、國民は之に對して多大の感謝を捧げた。蓋し當時露國の我に加ふる壓迫は實に帝國の存在に關する急迫であり、而して廟堂の大臣が露國の强大を怖れて何等爲す所なきは、等しく國民の憤慨して措かざる所であつたからである。故に七博士の起つて國民を警醒し當局者を鞭撻するは、正に之れ國民一般の言はんと欲する所を代表するものであつた。形は同一でも、今回の九博士の運動は、其實質に於て之を當年の七博士運動と同一視する事は出來ない。予は敢て斷言する。九博士の運動は決して今日我々の屬する學界の多數の後援する所に非る事を。九博士の誠意には滿腹の敬意を表する。然れども其淺見短慮を窃かに嗤ふもの亦決して少くはあるまい。予は漫りに先輩師友を侮るを快とする者ではない。唯法學博士の肩書に迷はされて、正直なる世間が、九博士の運動を以て學界多數の輿論を代表するものなるかの如く思ふあらば、之れ眞に國家の大憂なりと信ぜるが故に、敢て鄙を先輩師友に得るを厭はないのである。

戰爭の目的に關する我國論の二種

法學博士　吉野作造

（一）

本年一月上旬のロイド・ジョーヂ及びウィルソンの宣言、之れに對する同月下旬のハートリング、ツェルニンの答覆、之等の應酬ありて以來、戰爭の目的に關する論議は交戰諸國の間に矢釜しくなつた。我國に於ても亦同樣で、新聞雜誌等の此問題を論ずる者少からず、議會に於ても現に之を以て當局者に說明を求むる者もあつた。而して退いて我國の論壇が此問題に對して如何なる態度を執つて居るかと觀察するに、二つの種類があるやうに思はれる。一つは此際我國も矢張り戰爭の目的を聲明すべしと論ずる者にして、他は戰爭の目的は初めから定まつて居る、今更ら事々しく聲明を繰返すの必要は毫頭無いと論ずる者である。而して前說を執る者は自らウィルソンやロイド・ジョーヂの宣言を以て矢張り大體我國參戰の目的たりと解し、又は少くとも斯くあらしめんとする立場を取り、又後說を主張する者は自ら我國參戰の目的を開戰當時の狹き範圍に限り、夫れ以上立入つて英米諸國が今現に聲明して居るやうな目的の遂行の爲めに迄我國を引入れざらしめんとするの立場を取るに傾くことは言を俟たない。

一體戰爭の目的といふやうなことを今頃事新らしく云ふ樣になつたのは、西洋の交戰國夫れ自身に於て實は此點に關する思想が最近變つたからである。著るしい變化とは思はないけれども、何の爲めに此戰爭を繼續するやの目的の意識が段々明白になり、而かも之等各國の目的の間には、自ら一致點の有ることが發見され、斯くて彼等は共同目的の認識の上に戰爭の遂行に關する確信を一層深からしめたので、斯く事新しく今更戰爭の目的に關する宣言を公にする事になつたのである。然るに我國一部の論者の間には、此戰爭の目的に關する思想の變化に從つて屢々之に關する聲明を繰返す事を以て、僞善に過ぎぬ、後から附け加へた口實に過ぎぬといふ風に觀る者がある。福田博士が「太陽」三月號に寄せたる「何の爲めに戰ふか」一篇の如きは、正に此種の論者の代表と觀てよからう。博士の說に據れば、凡そ戰爭には初めから確乎たる目的が存在せねばならぬ。戰爭最中變るのは畢竟戰はんが爲めに戰ふもので、所謂目的なるものも後から附け加へたものに過ぎぬと云ふて居る。此見解の正しきか否かは姑く之を別問題とする。縱し所謂後から附け加へた口實に過ぎぬにしても、既に單獨不講和條約に加入せる而已ならず、遍かに地中海方面に迄艦隊を出動せしめて居

以上、我國の現在の地位が、我國民をして何の爲めに戰爭して居るかを深く反省せしめざるを得ない。戰爭の目的を狹く限れば、我國現在の地位は進み過ぎて居る。又戰爭の目的を廣く解すれば、我國には尙進んで爲すべき多少の餘地があるかも知れない。何れにしても戰爭の目的に關する攻究は、決して我々に取つて閑問題ではない。

戰爭の目的に關する議論は、我國參戰の目的を何處に置くを適當とすべきやの問題と、我國現在の地位を如何なる目的の爲めに戰つて居るものと觀るべきやの問題とに分れる。尾崎氏が衆議院に於て戰爭の目的に關する說明を覓めたのは、恐らく第二の問題を明かにせんが爲であつたらう。帝國政府は其初め日英同盟の誼により、東亞の平和を維持確保するの目的を以つて此戰爭に參加した。併し乍ら今日我々が力を竭くして直接間接の援助を與國に給し、現に艦隊の一部を割いて之を歐洲戰場に送つて居る以上、我國の行動は當初宣明せる目的以外に出て居るものなる事は一點の疑を容れない。而して戰局の推移に伴ひ戰爭の目的を廣く解せんとする者は、帝國現在の地位を以て恐らく快心の事と觀るだらうし、又戰爭の目的を狹く解釋せんとする者は、却つて之を無用の愚擧と非難するであらう。何れにしても政府が秘密に事を行ひ明白なる宣明を爲す事を避けて居るのは、我々國民の甚だ不快とし且つ不安とする所である。遮莫、民間の輿論は此政府の態度を如何に觀るか、又政府に依つて作られたる帝國の現在の地位を如何に批評するかと云ふに、前にも述べたるが如く、茲に我々が明白に二つの異つたる議論の對立するを見るのである。一つは目的を廣く解し、新に之を聲明して遙かに英米當局者と對應すべしとの論で、一つは目的を狹く解し、今更ら聲明を繰返すの必要は無い、英米當局者の聲言に裏書きするが如きは以ての外であると云ふ論である。

（二）

戰爭の目的を聲明すべしとする立場を取る者は、言ふ迄も無く、戰爭の目的に關して英米と共同の步調を取るべしとする論者である。此論者の據つて以て立つ所の根據は、恐らく次の二點に存するであらう。（一）英米當局者の最近の宣言は、正義の確立に據る永久平和の保障に對する熱心と其可能の確信とに基く事。（二）此高尙なる世界的經營に參加するは日本に取つて寔に好ましき事なる事之である。彼等は曰ふ、今度の

戰爭は、從來の戰爭と同樣に、各國間の利害の衝突に其源を發するは固より言ふを俟たない。無論表面には銘々最もらしい口實を揭げて居る。或は正義公道の確保と云ひ、或は民族の獨立の擁護と云ひ、或は優秀なる文化の防衞と云ふ。然し口實は何であつても、其本質に於ては利害の爭――到底平和的方法では調節する能はざりし利害の爭である。利害の到底調節し得ざる場合に於ける唯一の解決法は、昔から戰爭と極つて居るが、併し戰爭はまた決して根本的の解決にあらざるは言を俟たない。何故なれば、一方が一方を壓倒し了る事無しには調節が六つかしいし、又一方が一方を壓倒し了れば、一時調節の効を收めても、必ず將來に禍根を貽すからである。斯くて、戰爭にはなつたものゝ、平和に眷戀たる歐米諸國の政治家は、如何にして此戰爭に終結を告げしめ、將來永久に平和を保障することを得べきかといふに苦心煩悶した。戰爭參加の以前米國大統領ウイルソンが勝利無き平和を揭げて双方の間に仲介の勞を取らんとしたるが如きは、當時一部の冷笑を買つたけれども、其間には又實に意味深長なるもの有るを認めざるを得ない。而して此點の苦心煩悶の結果が、やつと昨今に至つて「利害を忘れて主義で行かう」といふ考に到達した。換言すれば何の國と何の國との何の利害の衝突を、何うして調節するかといふ事を主たる問題として居つたのでは、何時迄經つても根本的解決が着かない。さういふ個々の利害衝突の問題には姑く目を閉つて、從來歐米諸國間の戰爭原因となつた問題は、如何なる種類のものであるか、如何なる性質のものであるか、之等の問題を解決するには如何なる主義原則を立てれば可いか、如何なる主義原則が世界的の平和を永久に保障する事が出來るかと云ふ點を考へて、之等の主義原則の貫徹の結果何の國は何ういふ犧牲を忍はねばならぬとか、何の國が何ういふ損害を受くるとかの問題は姑く之を度外視して、先づ抽象的の主義原則を發見し、各國は個々の利害を忘れて此主義原則の適用を甘受するといふ思想の上に、平和的解決案を見出さうとするに至つた。尤も斯くの如きは、現に利害の衝突に動かされて戰爭に從事して居る當事者に之を求め難い。唯幸にして去年三月露國に革命あり、革命後の露國民の言はゞ空想的社會觀は、初めて此方針に基いて戰爭終結の具體的案を宣言せしむるに至つた。續いて米國の戰爭參加はまた著しく此氣運を促進した。尤も米國の行動に就いては、福田博

の如く其動機の不純を疑ふ者もあれども目的聲明必要論者の多數は、米國參加の動機を以つて利害の念に出づるにあらず、單純に正義の爲めに立てりと觀て居るやうである。其觀察の當否は姑く置き、此種論者の立場から云へば、全然具體的利害の念を離れて干戈を執れるの殆んど空前の例として、米國を擧げて居る人もある。何れにしても露國の革命と米國の參戰は、交戰當事國の中より、主義原則によつて戰爭を終結せしむる方法を講ずべしとするの說を生んだ。此主義を適用し、各國が多少の犧牲を忍べは、今次の世界的紛亂も根本的に解決する事が出來る。少くとも此主義に基いて根本的解決案を示す事を得ば、各國は大體共歸する處を知り、爲めに著しく平和の機運を促進する事が出來るであらう。して見れば、由つて以て今度の戰爭を終結せしめ得べき、且つまた取つて以て將來永久の平和の保障たらしめ得べき主義原則の確立に依つて、我國も亦干戈を收める事が出來る。其處で今度の戰爭に依つて達せんとする所の究局目的は、畢竟此主義原則でなければならぬ。斯ういふ所から、更めて戰爭の目的といふ事が盛んに論ぜられる事になつたのである。唯徒らに物好きに騷ぎ廻る者と觀る事は出來ない。

併し乍ら此種の議論を全然深き確信に基かざる表面だけの言論と見、又は此種の議論を提唱する米國などの動機を僞善瞞著と觀れば、之に與みし之に裏書するは愚の骨頂である。けれども之を僞善瞞著と觀ず、且斯の如き思想を以て人心の深奥なる要求に根柢すると觀る人も決して少くない。更に進んで其の可能を信じ、之を以て世界の平和を一段と進め得べしと信ずる人も少からずある。而已ならず此の爲に努力するは、即ち人間としての高尙なる義務なりといふ念慮から、一生懸命奔走して居る者もあるのである。斯ういふ立場からすれば、日本をして又同樣な目的の聲明を爲さしめ、米國等と協力して、一つは將來の世界經營の大業に與らしめ、一つには將に來らんとする世界の大勢に我々を落伍せしめざらんと望むは寧ろ當然である。此種の論者は、單に希望として日本の世界的共同を說く而已ならず、日本現在の地位が實に此精神に基いて居ると解して、私かに滿足の意を洩らして居る。否、更に進んで日本は今日の地位に甘んぜず、もつと多くの出來得べき援助を西洋諸國に與へ、多少目前の國家的利益を犧牲に共しても、此高尙なる世界的事業の爲に更に一歩を進めるが可いと迄云ふ人もある。說の當否は姑く措

く。唯此種の考の者が我國識者の中の少からざる部分を占めて居る事實は、之を看過す事は出來ない。

（三）

之に反して目的聲明不必要論者は、また自ら英米當局者の聲明せる新目的に參加する事に反對するは言を待たぬ。此種の論の代表者とし予は嚮に福田博士を擧げたが、博士の說に據るに、此種の論の根據は凡そ次の數點に在るやうに見える。

第一に日本參戰の目的は對獨宣戰當初「東洋平和の維持」と云ふ事に確定して居る。之れ以上餘計の事を爲して人命と國土とを徒費するは愚の甚しきものであると云ふのである。然らば何故に東洋平和の維持といふ事以上に目的を延長するのが惡いかと云ふに、（一）元來戰爭の目的といふものは、各國別々の立場に立つものにして、劃一の共同目的といふものがあり得ない。（二）若し所謂共同目的を說く者あれば、そは空想か瞞著かである。其空想瞞著に欺かれて、夫れを取つて我國現實の目的とするの不可なるは、言を俟たないからである。斯くて博士は我國の參戰目的は、東洋平和の維持を以つて足れりとし、之れ以上に出づるは馬鹿息子の無駄使ひに等しいとなし、更に進んで此點より云へば、日本は既に十二分に戰爭の目的を達して居る。何時講和しても可なるの狀態に居ると說いて居られる。第二に福田博士は更に進んで、英米當局者の所謂共同目的の內容の一二を批評し、其全然空想瞞著にして取るに足らざる所以を明かにせんとして居らるゝ。先づ博士は（一）主義人道の爲めに戰爭するといふのが瞞著の甚だしいものであると說いてゐる。戰爭其物が元來正義人道に反する。戰爭に當りては戰爭を遂行する必要以外に正義人道を外れてはならぬも、戰爭共物は決して正義人道の實現を目的とするものではない。（二）所謂非併合・無賠償主義も、戰爭を許す以上は、決して實行し得らるべきものではない。何故なれば之れ國家の生存權より起る當然の歸結なればなりと云ひ、且つ此主義の徹底は却つて不正義の結果を來たす事があると主張されて居る。而して英米諸國が此原則の適用を獨り敵側にのみ迫りて、自國には之を沈默に附して居る。之れ瞞著にあらずして何ぞと歎いて居る。（三）オートクラシイを絕滅してデモクラシイを立つるといふも、之れ亦僞善である。何故なれば今日最も大なるオートラットはロイド・ジョーヂとウイルソンとに之を見るからだと云つて居る。

以上の批評が何れだけ正しいか、又學識の深淵と觀察の公正とを以て學者の間に特異の尊敬を拂はれて居る福田博士の言として、相應はしいものであるか否かは姑く別問題として、唯博士が英米兩國に對しては極度の反感を持し、寧ろ暗に獨逸に多少の同情あるが如く見ゆるのは、之を匿す事は出來ない。現に博士は日本は東洋の平和を維持する爲に獨逸と戰ふを必要と認めて宣戰したけれども、自分一個の考へとしては必ずしも東洋平和維持の爲めには對獨宣戰は必要でなかつたと思ふと云つて居る。之れだけの同情と理解とを獨逸に對して有つて居る人が、獨逸を敵とし獨逸に於て生育せる多くのものの絶滅を期して立てる英米の戰爭目的に反感を有するは當然である。從つて日本の戰爭目的を無理にも英米の夫れから引離さんとするに至るは、之れ亦已むを得ない。而して我國には所謂プロ・ジャーマンの案外に多いだけ、戰爭の目的を狹く限らんとするの論者も決して少くはない。予は福田博士を以てプロ・ジャーマンなりと云ふのでは無い。けれども唯博士の戰爭目的に關する最近の論文は、プロ・ジャーマンの系統の思想の好個の代表者なりと認めたるが故に、玆に之を引用したのである。

（四）

予の此の論文は兩說の當否を論ずるのが目的ではない。唯今日我國に取つて極めて重大なる問題と認むべき所謂戰爭の目的に關して、國論が截然として二つに分れて居ると云ふ事實を、讀者の前に明かにせんと欲するまでゞある。固より甲の說にも乙の說にも、種々の程度と段階とが有つて一樣ではない。予自身はと云へば寧ろ前說に近い傾向を有つて居る事を自白する。但、予は玆に姑く自說を固執する事を避け、二種の國論の對立するの事實を擧げて、當否の判斷をば賢明なる讀者に任せんと欲するのである。

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

家庭醫學叢書

全部五十册完成　定價各册十五錢　郵稅各册二錢

- 吾妻醫學博士述 ●お產の話
- 唐澤醫學博士述 ●小兒病の話
- 千葉醫學博士述 ●耳鼻咽喉病の話
- 山田醫學博士述 ●神經衰弱の話
- 額田醫學博士述 ●肺結核の話
- 岡村醫學博士述 ●皮膚病の話
- 佐藤醫學博士述 ●婦人病の話
- 廣川醫學博士述 ●淋病の話
- 佐藤病院長述 ●黴毒の話
- 森肛門病院長述 ●肛門病の話
- 杉江醫學博士述 ●ヒステリーの話
- 南醫學博士述 ●胃病の話
- 中原醫學博士述 ●外科療法の話
- 森醫學士述 ●呼吸器病の話
- 竹中ドクトル述 ●性慾敎育の話
- 森醫學士述 ●病人看護の話
- 中村醫學士述 ●精神病の話
- 菊地醫學士述 ●脚氣とリウマチスの話
- 齋藤ドクトル述 ●寄生蟲の話
- 豐福醫學博士述 ●小兒傳染病の話 上卷
- 豐福醫學博士述 ●小兒傳染病の話 下卷
- 竹中ドクトル述 ●感冒と肋膜炎の話
- 岡崎醫院長述 ●有益危險食物の話
- 阿久津醫學士述 ●男子生殖器病の話
- [illegible]の話
- 高橋醫學士述 ●妊娠と避姙の話
- 杉本醫學博士述 ●便秘と下痢の話
- 森醫學士述 ●注射の話
- 井上醫學士述 ●眼病の話
- 落合ドクトル述 ●科學的美容法の話
- 額田醫學博士述 ●糖尿病と腎臟病の話
- 土田醫學博士述 ●腦病の話（上卷）
- 同 ●腦病の話（中卷）
- 同 ●腦病の話（下卷）
- 岡崎醫院長述 ●有效漢藥療法の話
- 竹中ドクトル述 ●肺病有效療法の話
- 衞生新報社編纂 ●物理的健康增進法の話
- 同 ●化學的健康增進法の話
- 同 ●精神的健康增進法の話
- 同 ●滋養食物と滋養劑の話
- 同 ●兒童健康增進法の話
- 同 ●婦人健康增進法の話
- 同 ●黴菌と消毒の話
- 同 ●生殖衞生の話
- 同 ●營養療法の話
- 同 ●癌の話
- 橫手醫學博士述 ●理想的飲食物の話
- 小川醫學博士述 ●心臟病の話
- 宮原ドクトル述 ●理學的療法の話
- [illegible]內の話

體力養成叢書

- ▽冷水浴と冷水摩擦　大澤醫學博士述　▽定價二十錢　▽郵稅四錢
- ▽腹式呼吸　二木醫學博士述　▽定價二十五錢　▽郵稅四錢
- ▽海水浴　栗本醫學博士述　▽定價二十錢　▽郵稅三錢
- ▽滋養物の攝取　櫻田醫學士述　上卷二十五錢　下卷二十五錢　郵稅各錢
- ▽深呼吸　遠山醫學博士述　▽定價二十五錢　▽郵稅四錢
- ▽呼吸靜座法　伊藤醫士述　▽定價二十五錢　▽郵稅四錢

著者自費出版の引受

印刷、製本、出版、廣告、販賣等總て一切を引受く、御依賴御希望の方は原稿御送附あれ、書籍出版に必要なる手數一日積書提出す

組合セ本箱

東久邇宮家、梨本宮家、竹田宮家、大隈侯爵家、伊藤公爵家等の諸名家より御注文の榮を辱ふせる最善最良の本箱……△種類　價格並に構造を示せる目錄……郵稅二錢封入御申越の方へ進呈す

書籍雜誌小賣販賣

新刊月報　雜誌目錄、新橋堂出版目錄郵劵二錢封入御申越の方へ即時發送す

廣告的進物品製作引受

其必適品として卓上備忘曆、電話商況早見カード、廻轉式日曆等を販賣せる弊店は御注文に依り各種廣告的進物品製作の御需めに應ず

內外美辭名句集（全二十册）

- 夏目漱石美辭名句集
- 尾崎紅葉美辭名句集
- 高山樗牛美辭名句集
- 三宅雪嶺美辭名句集
- 德富蘇峰美辭名句集
- 森鷗外美辭名句集
- トルストイ美辭名句集
- ニイチエ美辭名句集
- ゲーテ美辭名句集
- イブセン美辭名句集
- ツルゲーネフ美辭名句集
- ダスタエウスキー美辭名句集
- 樋口一葉美辭名句集
- 曲亭馬琴美辭名句集
- 德富蘆花美辭名句集
- 近松巢林子美辭名句集
- 國木田獨步美辭名句集
- 幸田露伴美辭名句集
- 大町桂月美辭名句集
- 坪內逍遙美辭名句集

定價各册十八錢　郵稅各册二錢

●發賣元　東京市銀座通新橋際　振替東京二〇〇番　電話新橋一九九一　**新橋堂**

（中付二の一）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

（中付二の二）

四月一日發行

婦人公論

特價三十五錢
郵税二錢

「婦人之敵」號

澁澤男爵廿五年の苦心に成れる一大史傳

德川慶喜公傳

(中付二の四)

菊判布裝大全 函入、索引共 全八巻
四千二百五十七頁
コロタイプ九十六葉

內容見本進呈
(往復葉書申込次第)

男爵 澁澤榮一閣下著

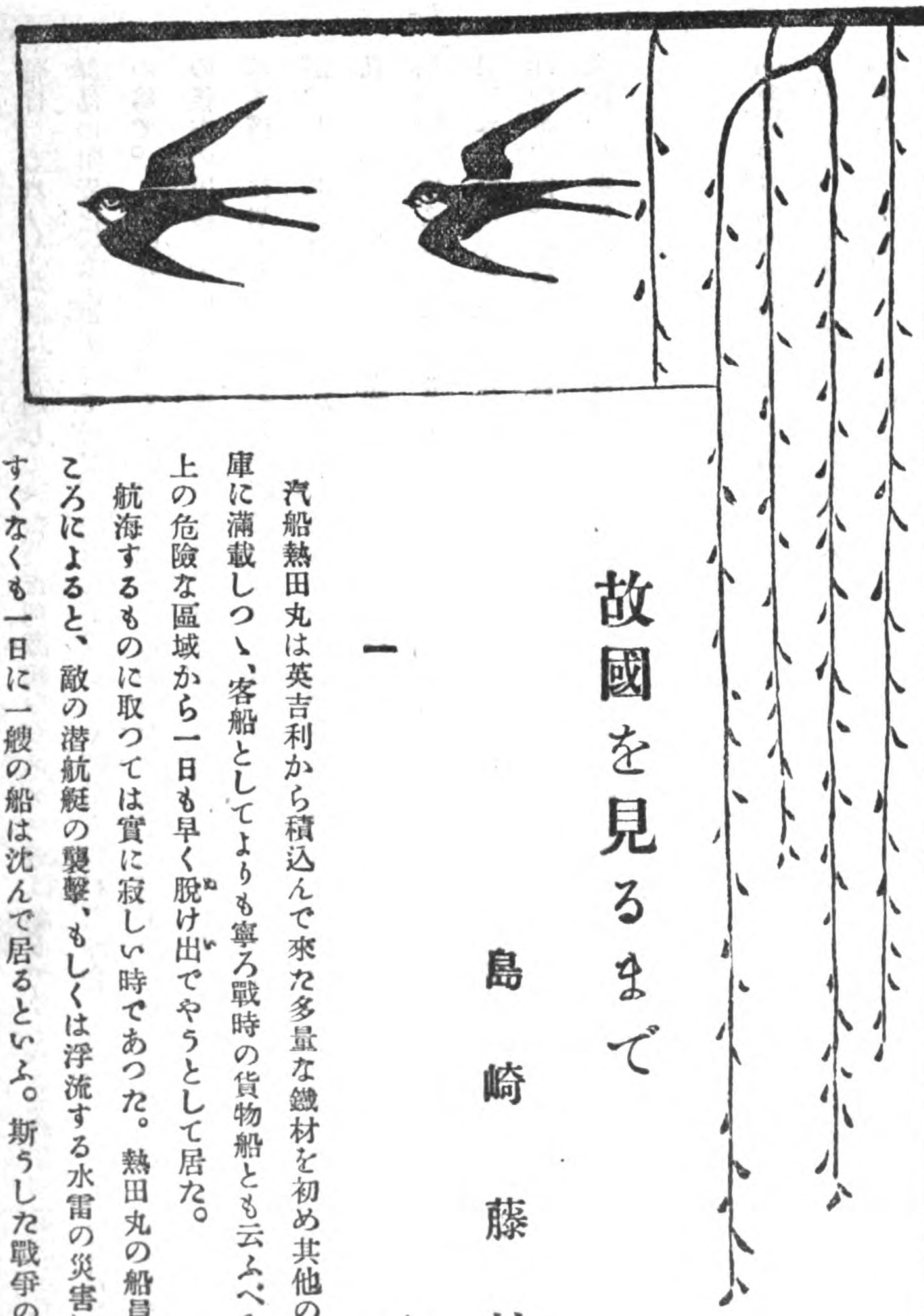
二千部限り實費頒布。正價金貳拾圓
郵稅內地五十六錢 臺樺壹圓 鮮支壹圓卅錢

前將軍德川慶喜公送葬の日、東京市は每戶灯を消し音を停めて、滿都哀悼の意を表したり、是れ江戶幕府最後の將軍の終焉を悼むのみか明治昭代の隆運も此公に負ふ所ある感謝の念にあらずんばあらず。澁澤男爵、壯年公に臣事し、其恩遇に感ずるの餘、公の一大傳記を編述して其心事を天下後世に傳へんと思立ちぬ。是實に今より廿五年前の事なりき。始めて之を福地源一郞氏に囑托せしが、氏の逝去の爲め中絕したるを、明治四十年更に國史學の泰斗たる萩野博士を主任として新に編纂所を開き、穗積、阪谷兩男爵を顧問に、三上博士を校修者とし、編纂員數氏日夜拮据十年の歲月を費し、三度の改稿を歷て始めて完成せり。本傳は四卷三十五章、寫眞版の數百十六、附錄は三卷、年譜、系圖、記錄、文書、引用書目を收め、外に索引一卷を添へ、首尾完全、毫も遺憾あることなし。從來隱秘の影に包まれし幕末史の眞相は、玆に遺憾なく發表せらるゝこととなりて、明治維新の大業は一層の光明を放つを見る。乃ち亦學界の一大慶事たり。思ふに幕末天下紛糾の時、公にして若し輕擧に出でんか、いかで斯く速に明治の昭代を謳歌するを得べき。戊辰の際に於ける公の隱忍苦衷を憶ふもの、誰か其高潔なる犧牲的精神に感奮せざらんや。斯くて本書は一面には偉人を景仰せしむべき國民修養處世の光範たり。一面には最も眞實に當時を語る維新史たり。萬人必讀、萬家の至寶として圖書館及學校は固より、諸官衙、銀行會社、團體等、必ず一本を備ふべく、教養ある者、資力ある家、亦須く一部を藏すべき不朽の典籍なりとす。

龍門社發行

發賣元 東京神田 富山房 振替五一〇

中央公論春期附録小説



故國を見るまで

島崎藤村

一

汽船熱田丸は英吉利から積込んで來た多量な鐵材を初め其他の貨物を船庫に滿載しつゝ、客船としてよりも寧ろ戰時の貨物船とも云ふべき形で、海上の危險な區域から一日も早く脫け出でやうとして居た。

航海するものに取つては實に寂しい時であつた。熱田丸の船員が語るところによると、敵の潛航艇の襲擊、もしくは浮流する水雷の災害によつて、すくなくも一日に一艘の船は沈んで居るといふ。斯うした戰爭の及ぼす恐

怖は、われ〳〵が既に通過して來た英吉利海峽やビスケエ灣ばかりでなく、葡萄牙の近海からカナツイ群島の附近にまで擴がつて居た。熱田丸が成るべく陸から離れた沖合を通過しやうとして居たのも、その爲で。この戰時にあつては船客も極く少なかつた。巴里以來ずつと一緒に旅して來たM君は、私がその後方の甲板の上に毎日見る唯一人の同胞の客で、他の二等船客はいづれも英吉利人のみであつた。それも僅かに男女を合せて七人の殖民地行の人達を數へるに過ぎなかつた。これほど寂しい時ではあつたが、しかし私は國を出てから以來自分の長い旅の中での最も樂しい時をこの海上に送らうとして居た。私には旅から旅に疲れて來た身をこの歸東の船の中で休めて行かうといふ樂みがあつた。Bon voyage! 私の願ひはこの言葉に盡きて居た。私は唯この航海の樂しかれと願ふより他の念慮を有たなかつた。五日ばかり私は早や波の上に暮した。私の出て行つたところは西南の貿易風がそよ〳〵と吹いて居る太平洋の最中だ。われ〳〵の熱田丸は多くの航海者の測量した海圖と磁石の針の示す方角とによつて、晝は太陽の位置に導かれ、夜は星の位置に導かれながら、廣大無邊な大海の上を南へ、南へと動いて行つた。

二

「お國の方へ今お歸りですか。」

私の側へ來て聲を掛けた人があつた。

「え丶――M君と一緒に。」

斯う私は答へたもの丶、私の側へ來た人の誰であつたか、何處で逢つた人かは、どうしても自分の胸

に浮ばなかつた。私は一寸挨拶する言葉に困つて、その人の顏を見まもつたまゝ斯樣な風に言つて見た。

「航海には申分のない天氣ですね。」

「全く。風は西南を受けて居ますし、好い時に君も出掛けて來ましたよ。」

僅かの言葉を交へたぎり、その人は私の側を離れて行つた。私は誰と話したのか、自分ながら解らないで居て話した。その人が行つてしまつた後になつても、どうしても思出せなかつた。

しかし、このエトランゼエは、不思議と旅らしい氣分を私に分けて呉れた。何處の誰であつたか思出せないやうな人に逢つて、一緒に海を眺めながら口をきくといふことも、斯うした旅らしかつた。私は白く塗つた鐵の柱の側に立つて、甲板の欄の上に自分の手を置きながら、つく〴〵巡禮者らしい心に歸つた。

"A la mer, à la mer,
O mon Hôstesse, à la libre mer,
A l'Adriatique verte et embaumée,
A la mer des poètes, à la déesse présente
Qui trempe mes nerfs et mes chansons !"

(Chant de l'Hôtesse.)

胸に浮ぶは斯の歌の一節だ。あの巴里の客舍の方でよく口吟むで見た歌の文句だ。私はこれを胸に浮べると同時に、異郷の旅の空で寂しく堪えがたい折々はよく自分の心が海の方へ行つたことを思出した。初めてゴオガンの「漁船」の圖の前に立つて見て、あの畫家にさうした奔放な境地のあることを知つた

時。一部の巴里人によつて激賞せらるゝリシユパンの著作を渉るうち、ふとあの劇詩人に「海の詩集」のあることを知つた時。さうした聯想はいつでも私の郷愁を驅つて海の方へ向はせた。マルヌの戰の前、私は巴里の混亂を佛國中部の田舍町に避け、そこに二月半ほどを送り、それから葡萄の産地なるボルドオの方へ旅したことがあつた。深い秋雨に障げられてビスケエ灣を見ることは出來なかつたが、私は獨りガロンヌの河岸に佇んで兎に角海に近いところまで行つたことを酷く懷かしく思つたことがあつた。すべてはまだ昨日のことのやうな氣もする。熱田丸の甲板に來て、私は日頃の空想を實にすることが出來た。

例のエトランゼエは甲板を一廻りして、復た私の側へ來た。

「一體、われ／＼の船は何の邊を通つて居るんでせう。」と私が尋ねて見た。

「こゝは君、モロッコの沖合さ。マデイラといふ島から七十哩も外を通つて居る。こゝから亞弗利加の陸までは、ざつと四百六十哩も離れて居る。」

「君はなか／＼精しいねえ。」

と私が言つた時は、エトランゼエは微笑んだ。

私達二人が立つて居たところから、甲板の階段の下の方に複雜な船の構造が見える。船庫のあるところに續いて、廣い廊下のやうな板敷の床が見える。そこは寧ろ本甲板とも言ふべきところで、港へ着けば物揚場ともなり、航海中は運動場ともなつて居る。その日の映つた低い甲板の上には、三人の船員を相手にデッキ、ビリヤアドの遊戯に餘念もないM君の姿がはつきりとよく見える。ズック張の船庫の蓋

の上に腰掛けて、皆なの遊戯するところを見物顔な、まだ女學生とも言ひたい英吉利人の姉妹連れの客もある。その側には幼い男の兒の手を引いた一人旅の英吉利の婦人も立つて眺めて居る。

「あの鳥打帽を冠つた人は、あれは誰ですか。」とエトランゼエが訊いた。

「M君です、巴里を發つからずつと僕は一緒にやつて來ました。」

「何をする人ですかね。」

「美術家さ。われ〱の國では新派で知られた人でさ。」

「まだ若い人のやうだね。」

「あゝいふ人達が君、われ〱の國の畫界では活動して居る。われ〱の國では何もかも若い、國そのものが若い——すくなくも僕は左樣いふ風に考へたいと思つて居る。」

甲板の上の遊戯らしい球の音がM君等の立ち留つて腰を曲めたり彼方是方と走り廻つたりする方から樂しさうに聞えて居た。しばらく私はエトランゼエと二人で眺め入つて居ると、丁度向ふの一等室の高い甲板の方から女の兒の手を引いた婦人がM君等の遊戯を見やうとして階段を降りて來た。

「あの女の人も、君の國の方の人らしいね。」とエトランゼエが言つた。

「あれはK君の細君。旦那さんは巴里の大使館の方に勤めて居た人です。あの人達は一家族で國の方へ引揚げて行くところです。」

海風に髮をなぶられまいとして白い薄絹で頭を包んで居るK君の細君、お母さんに手を引かれて一段づゝ船の梯子を降りて來る子供、それらの光景が私達の居るところからよく見える。

『あの女の兒は可愛らしい人形のやうな容子をしてるぢやないか。』

『短い上衣を着て居るところから膝小僧を出して居るところまで、すつかり巴里の風俗だね。あの兒は佛蘭西人の乳母に育てられたから、佛蘭西の言葉しか知らない。佛蘭西人は君、Hの發音が出來ないでせう。ハヒフヘホがアイウエオとなつてしまふでせう。あの兒が矢張左樣だそうです。なんでもあの細君の話に、「おはやう」といふ日本の言葉を敎へやうとしたところが、「おは」の「は」があの兒には、どうしても出て來ない。「おはやう」と言ふかはりに、「おかやう」と發音するんださうです。日本人の子供でさへ、佛蘭西に育てば左樣ですぜ。甚いものぢや有りませんか。』

『風土化。風土化。』とエトランゼエは快活に笑ひ出した。やがて私の方を强く見込むやうにして、『兎に角、僕は君にこれだけのことは言へる。まあ君がこれから國の方へ歸つて見たまへ。自分の國が自分の國のやうでは無くなるでせうよ。』

それぎり、エトランゼエは口をつぐんでしまつた。私はM君等の方へ行つて遊戯の仲間入をする氣になつた。

船梯子を降り、低い本甲板の上へ出て、今迄自分が立話をして居た方を振返つて見ると、四方に廊下と欄とを圍らした望樓の感じが浮ぶ。私は船庫の横手に見物する人達の前を通りぬけ、見あげるやうに高く太い帆柱の突立つたあたりから、船の炊事場寄りの方へ出た。

『M君、熱心にやつて居ますね。』

と私が横合から聲を掛けた。船に弱いM君はデッキ、ビリヤアドの遊戯にでも紛れて行かうとして居

るらしかつた。どうかすると白墨で番號の數字を記した赤や白の球が私の立つて居るところまで滑つて飛んで來た。私の側には見物する二三の船員もあつた。その甲板の片隅を廻つて、子供の手を引いたK君の細君が一寸私の方へ挨拶に來た。

「ムッシュウに「今日は」しないの。」

と細君に佛蘭西語で言はれて、子供は俯向き勝ちに私の方へ手を差出した。こんな場合に握手をすることは御辭儀をすると變りがないまでに私も旅慣れた。

細君は私に向つて、「ムッシュウは何處に居る、ムッシュウは何處に居るッて、この兒は口癖のやうに申して居ります。」

「連がなくて、子供も寂しいのでせうか。」

「そのくせ、お目に掛ると斯の通りなんですもの。お轉婆なくせに、是でなかなか「はにかみや」なんでございますね。」

「もうそれでも日本の人には大分慣れましたらう。」

「えゝえゝ、お船の方が皆さんが日本の方ですから――事務長さん始めね。この兒が「日本人は好きになつた」なんて、そんな生意氣を申して居ります。」

聞いて居る船員等まで微笑んで、皆な同じやうに外國育ちの子供の顏を眺めた。子供は何と思つたか、

「ママン、ママン。」

と母親の旅の衣裳に顏を埋めるやうにした。その時私はこの幼い女の兒が平素日本人を見ることを嫌

つて居たといふ曾て（かつ）の細君の話を思出した。「佛蘭西人を見ると、それは大悦びで、知らない男の方にでも直ぐに行つて抱かれたりなぞします」と言つた細君の言葉を思出した。

K君も船梯子を降りて來た。

「一つデッキ、ビリヤアドのお仲間入でも願ひますかな。」

と外交官らしい調子で言つて私達と一緒になつた。

「父さん、やゝさんは――まだおねんねですか。」と細君が訊いた。

「あゝ。よく眠つてますよ。」

とK君が優しく言つた。異郷の旅にあつて細君に優しくする人達の心持は私のやうな獨身者にもよく解る。殊に婦人を大切にする歐羅巴人の中にあつては。尤も、K君は家族のものばかりでなく、誰に對しても親切で、叮嚀だつた。

「子供を連れての航海もなかく\容易ぢやありません。」

とK君は私を見て笑つて、一緒にその低い甲板から、海を眺めた。日が輝いて來ると、海は譬へやうのない青さに光つた。

丁度一勝負終つたところだ。私はK君と連立つてその遊戯の仲間に加はらうとした。見ると出發點のところに、白墨で書いた床板の上の數字が消えかゝつて居る。船庫の蓋の上に置いてあつた白墨を取つて來て、私はそこに大きな圓を描き、更にその中に「壹」と書いて見やうとした。

「こりや驚いた。「壹」といふ字を忘れてしまつた。」

思はず私は自分で自分に言つて見たほど「壹」といふ字の書き方が胸に浮んで來なかつた。十の下に一と書いて、それから「壹」の字のやうにその下に直ぐ口があつたのか、それが私には分らなくなつてしまつた。

國の方に居ては想像もつかないやうなことが、眼前に見るK君の子供ばかりでなく、自分の内部にも起つて來て居た。僅かに三年ばかりの異郷の旅で「壹」といふ文字の書き方すらも忘れて居たといふことは、全く自分を驚かした。それほど遠くなつた心持をもつて、もう一度私は故國の方へ歸つて行かうとして居た。「自分の國が自分の國のやうでは無くなるでせうよ」とあのエトランゼエが私に言つたことは、妙に氣に掛る言葉として私の胸に殘つた。

懷かしい故國はもう遠い旅の窓で空のかなたに描いて見る夢想郷ではなく、一日一日と近づいて行く實際の陸であつた。白く塗つてある帆柱の側に立つて、そこから熱田丸の大きな煙筒を望むと、さかんな黑い煙が凄まじい勢ひで噴き出して居る。あだかも羽翼をひろげた黑い怪鳥が一羽づゝそこから舞ひ起つかのやうにも見える。この煙は、故國に向つて行く心を一層切に自分の身に感じさせた。この船の最終に行き着くところは、あるひはもう見納めかとさへ思つて出て來た神戶の港だ。さう思ふと、自分の心を强く刺激するいろ／＼さま／＼なものが國の方で自分を待受けて居て吳れるやうな氣がして來る。再び故國を見得るといふは實に嬉しいことであり、また心配なことでもあつた。

三

やがて熱が來た。白服に着更へた船員が私の眼前を往つたり來たりするやうになつた。われ〲の船から起す波の間には、あだかも鹽の結晶のやうに容易に消えない白い泡沫が舷に近く浮いて來る。沸く波、熱する潮、それを見ると三年前あの佛國汽船エルネスト、シモンの甲板の上で初めて熱帶の海を望んだ時の記憶が私の胸に歸つて來た。

すべてが夏景色らしくなつて來た。低い本甲板では帆柱から舷へかけて荒い布の日除が渡され、その蔭の船庫の蓋の上で火夫や水夫の群が食事したり、休息したりするやうに成つた。食後に青い勞働服を着けた人達が集つて將棊盤を圍む光景なぞも、往きの佛蘭西船では見られなかつた圖だ。私はこの歸りの船旅で最早かず〲の日本的なものを見つけることが出來るやうに思つた。帆柱の側あたりで起る擊劍の竹刀の音をも久し振りで聞いた。時には本甲板の片隅に持出された疊の上で、柔道の掛聲をさへ聞いた。

熱帶に入つて不思議に感ぜらるゝことの一つは、空の色だ。雲もなくて、妙にどんよりとした、不透明な色をして居る。しかもその空から日が熱く照りつける。旅するものゝ耳朶まで日に燒けて痛い。

「御覽なさい、海の方が空よりは反つて明るく見えませう。」

と連のM君が畫家らしい觀察を私に話して與れたが、さういふM君の顏も日に燒けて大分赤くなつた。何事につけても熱心なM君は、デッキ、ビリヤアドの遊戲にまで顏が赤くなるほど持つて生れた性分を發揮して居た。

言葉の通じない佛蘭西人の中に混つて不安と好奇心とで燃えて行つた往きの旅に比べると、さすがに

今度はいろ〳〵な便宜を得た。デッキ、ビリヤアドでよく顏を合せる船員はいづれも商船學校を出た靑生肌の人達で、斯うした船の中で働いて居る火夫や水夫の方へM君や私を誘つて行つて呉れた。炊事場の横手について機關室を訪れる。そこには眉の濃い機關士が居る。中央の甲板から高い觀橋の梯子を昇つて行く。そこには若手の運轉士が私達を待つて居る。私はM君と連立つて暗い船の底の石炭庫の内までも見て廻り、海風の吹き通ふ大きな舵の据えてある前へも行つて立つて見た。觀橋の上では、この船に見習ひとして來て居るといふ一人の商船學校の學生にも逢つた。

最早危險區域を脫したとあつて、船では救助用のボオトを舊の位置に引卸した。「ヨイサ、ヨイサ」水夫等が集つて綱を引く掛聲も、何となく元氣づいて聞えて來た。まだそれでも一切の電燈を掩ふ黑布を取去ることだけは許されなかつた。

「御退屈でせう。」

と給仕頭なぞが私の顏を見る度に至極慇懃な調子で言つて呉れたが、私はむしろその慰めの言葉を迷惑に感じたほど、それほど斯の旅を樂まうとして居た。追風で白波の多く揚る海を眺めて行つただけでも、私の心は慰んだ。唯、船の動搖が絶間なく自分の身に傳はつて來て、落着つて物を考へることも出來ないのは殘念だつた。日の暮れる頃、後尾の甲板に立つて見ると、海上の日沒のさまが私の眼に映る。赤く銅盤を懸けたやうな夕日が見る間に半圓の形になつて、やがて水平線のかなたに遠く姿を隱してしまふ。そこでは黃昏時が極く短い。日が落ちたかと思ふと、にはかに私の周圍は暗くなつた。

金星の見える宵の空を樂まうとして、私はM君と一緒に甲板の欄近く籐椅子を並べた。船の會計と

ふ人は慶應義塾出身で、事務長がK君等の方で勤めて居るやうな役廻りを二等船客の方で引受けて居たが、この人もよく私達の側へ來て、夕涼みがてらの浮世話を持寄つた。

「佛蘭西船はさぞ好かつたでせうね。」と會計はすこし鼻に掛る聲で私に尋ねた。

「しかし清潔なことから言へば、この船の方がずつと清潔です。」と私が答へた。

「さうだらうなあ、佛蘭西人の掃除と來たら成つて居ないからなあ。」とM君が横から。

「日本の船は親切で好い、と西洋人は皆な左樣言つて居ます。」と復た私が言つた。「現に私が乘つて見たフレンチ、メエルの中にも——メサジユリイ、マリチイム、往きには私はあの會社の船でしたが——歸りは是非日本の船にするといふ英吉利人なぞが乘つて居ましたつけ。」

「つまり、我儘が出來るからでさ。」と會計は引取つて、「食卓に就いても毛唐は言ひたいことを言ふ。この船の飯はマヅくて食へないの、何のつて。實に苦條の多いものでさ。」

「あまりに西洋人の要求を容れ過ぎるんぢや有りませんか。」と私が言つて見た。

「いえ、左樣いふ譯でも有りませんがね、」と會計は打消すやうにして、「歐洲航路となると、日本人の客はこれで極く少いんです。何と言つても、歐羅巴人がわれ〳〵の主なるお得意なんですからね。」

舊曆十六日あたりの月の光もこの甲板の上へさして來た。九日ばかりの航海の間に、男女の英吉利人の客の中には早や互ひに近付きに成つて、二人づゝ腕を組合せながら月かげに立つもあつた。ダアバン行の年若な技師は、子供を連れた一人旅の細君と。ボルネオあたりの護謨園へ行く途中にあるといふ男は、姉妹連れで來て居る姉の方の家庭教師と。私達が朝晩に見る顏觸れの中には、朝鮮へ布敎のために赴く

といふまだ年若な宣敎師もあつた。二等船客の英吉利人としては、その年若な宣敎師が一番さつぱりとして居て、そして誰に對しても丁寧で好かつた。

「兎に角あの手合は、英語の話せないやうなものは、人間でないやうに思つてる。」

斯う會計は殖民地行の英吉利人のことを言つて笑つた。その晩はK君も一等室の方からすごしさうな白服でやつて來て、浮世話の仲間に加はつた。生活の花やかさからK君と同じやうな道を取らうとする多くの青年はあつても、實際選ばるゝものは少いとの話であつた。

Notice.

To-night all clocks on board shall be put ahead by 9 minutes.

Commander.

時計の針の位置をすこし直すといふこの掲示が內外の客のために喫煙室の横手に貼出された航海の十日目には、倫敦から數へると三千三十九哩を乘つて來て居た。喜望峯まではまだ三千二百四哩もあつた。進めば進むほど時計の針の位置を改めなければ成らないといふことも、遠い海上の旅らしかつた。私は神戸と上海の間の時計に一時間の相違があつたことを思出した。日本郵船の旗の形をピンで留めて日々の船の位置を示してある海圖の前に立つて見ると、われ〳〵は既にカナリイ群島の附近を遠く後方にして、亞弗利加セネガムビヤの沿岸から離れた沖合を通過して居た。その日、夕食の鐘の鳴る頃に、夏らしい驟雨が甲板の上へ來た。凉しい雫は私が眺めて立つて居る板の間に流れて來た。船員の話によつて、赤道も漸く近づいたことを知つた。

四

「いよ〳〵明日は赤道にかゝりますかな。」

と私がM君に言つて見た頃は、船は中央亞弗利加のある一角から航路を西南に取つて進みつゝあつた。水掃除をした後の朝の甲板に出て見るのも心地が好い。乾いた雜巾で欄の上を拭つて居る年老いた水夫もある。曇つた空のかなたには驟雨を含んだ雲の遠く浮んで居るのも見える。その間から僅かに灰色がゝつた青空の一部も望まれる。午前のうちは時々雨がやつて來て、烈々と堪え難かつた。熱い溫度のために眠氣を催し易く、甲板の腰掛にもたれたまゝ私も少し眠つた。K君夫婦が女の兒の手を引いて私を見に來たといふのも知らなかつた。

「イル、ドオル。」

とあの兒は私の假睡して居るところを兩親に指して見せて、佛蘭西人の乳母から敎えられた言葉で左樣言つたとか。

太陽は、われ〳〵の船が進んで行つたところから見ると北に寄つて居た。實際に言へばあの光と熱との源から直下の位置は前の日に既に通過したのだ、と私に敎えて吳れる船員もあつた。斯うした遠い空にあつては、古代の渡天僧が旅先に病んで故郷の食物を願ひ、故郷の扇を見ては悲んだといふあの心持を思ひやることが出來る。寄ると觸ると、皆なの間には故國の食物の話がよく出た。この船が神戸に着いたら、先づ何を食つて見たいかといふやうな話がよく出た。M君は甘黨だから、羊羹を五十錢ばかりも買

つて思ふさま食つて見たいと言ふし、K君は神戸の酒の好いことを言出して、青々とした疊の上に浴衣がけか何かで好い日本酒の香氣を嗅いで見たらさぞ長旅の疲れを忘れ去ることが出來やうと言ふし、私はまた子供の時分に好きで食べたやうな食物を、お花見にと言つて母親がこしらへて呉れたやうな辨當を、黄色い玉子燒を、椎茸を、それからあの蒲鉾を一口に頬張つて見たら、とそんなことを胸に描いて居た。

翌日は海上で迎へる二度目の日曜に當つた。例の朝鮮行の若い宣教師はカトリックの僧服に近いものを着け、小形な金縁の聖書を手にして、改まつた顔付で私の側を挨拶して通つた。英吉利人のみの禮拜が催されると見え、食堂の方からは一同の讃美歌の聲が起つた。その男女の合唱の中でも、年若な技師に夫のある腕を許した上海行の細君の聲が際立つて高く震へるやうに聞えて來た。それらの英吉利人が信仰の奈何は知らないこと、萬事に控え目勝ちな日本人の中にあつて、彼等は無遠慮に團體としての强味を發揮した。

私は甲板に居て海を見て居た。その日の午前の海は廣重の板畫を見るやうで、水平線に近い部分のみが殊に濃い藍色を成して居た。いづこの國に屬するとも知れないやうな二本煙筒の汽船がめづらしく私の眼に映つた。甲板の欄を支へる白い柱と柱の間から、遠く動いて行く船の形を望むほど美しいものはない。向ふの船は一つの柱から他の柱へと動いて、終には影も形も全く見えなくなつてしまつた。

午後の一時三十五分には赤道を通過するとあつて、相圖の汽笛を待つ船客一同は甲板に集つた。早や二時に近い。まだ汽笛が鳴らない。赤道は既に通過したのかなどゝ言出すのもあつた。いよいよその海上に差掛るといふ頃、K君が私達を迎へに來た。三人連立つて中央の廣い甲板に行つて見ると、そこに

も男女の一等船客が集つて居る。K君夫婦を除いては、他は皆な外國人であつた。何事かを待受け顏にあちこちと歩き廻つて居るものがある。懷中時計を取出して通過の時刻を計るものがある。驚異の眼を見張つて欄に近く行くものがある。

「赤道と言ふからに、何か少しは變つたことでもあるのかと思つた。そこいらが赤くでも見えるのかと思つた。是が赤道か。」

このM君の調子には私も噴飯さずに居られなかつた。

全く赤道そのものは平々凡々だ。唯そこを無事に通過したといふ旅客としての心持から、K君は紀念のための葉書を書き、M君は風のある濃い紺青の海と、水平線のかなたに起る遠い夏雲の群とを前にして、小さなスケッチを試みた。三時半頃、船では强飯を出して祝つた。夕飯には五目飯が出た。それも赤道通過の祝の意であつたらしい。

夕風の來る後尾の甲板の方で、私はめづらしい猫の鳴聲を聞きつけた。水夫等に飼はれて居る猫は船中の熱さのために季節も忘れたのであらうか。黑布に掩はれた電燈のかげから眺めると、低い本甲板の下の方にも船の燈火が泄れて見える。闇に包まれた通風筒のかげ、暗い船庫の蓋の上などには、涼み話に集る水夫や火夫がある。何となく大船の夜の感じがするではないかと、私は自分の側へ話し込みに來た眉の濃い機關士に言つて見た。

「斯ういふ船ではまだ駄目です。あなたの言ふやうな大船の感じは眞實には味はれません。それには、どうしても和船でなくちや――」

と機關士が言つて、更に言葉を繼いで、

「さう言へば、あなたが倫敦からお乘込みに成つた時に、私はあの下の甲板に立つて居ましたよ。私は何處かの牧師さんでも斯の船に乘込んで來たのかと思ひましたよ。あなたゞとは思はなかつた……Mさんはまだ若いから、私共と一緒にデッキ、ビリヤアドでもやりそうだが、あなたまで一緒に成つてバッサリおやんなさらうとは思はなかつた……」

熱帶の星夜の空を眺めながら、この書生肌な機關士は簡單に自分の過去を語つた。世には十年も交際して居ながら決して自分の生涯をあからさまに話さないやうな人もあり、この機關士のやうにデッキ、ビリヤアドの附合ぐらゐで海員としての生活を語り聞かせて吳れる人もある。その晚は金星が殊に强い光を放つた。輝いた星影が海に映るほど强く。赤道を越してから南極星も見え始めた。時々私は甲板の欄に近く立つて行つて、そこから暗い海を眺めた。往きの船旅に見て行つた靑い燐の光が復た眼前の波の間を流れて居た。

五

風のある涼しい甲板の上で、私は旅の鞄の中に入れて來たルウソオの「ジュリイ」(又の名、「新しきエロイズ」)を讀み初めた。

「懺悔錄」によつてフロオベエルに感化を與へたといふルウソオは、この「新しきエロイズ」によつてストリンドベルヒにまで影響を與へたのではあるまいか、といふことが讀んで行く中にだん〳〵思はれ

て來た。近代人の母體とも言ふべきあの瑞西生れの天才が何度も何度も後世の人の心に活きかへるといふことは、寧ろ一つの奇蹟のやうにも思はれる。巴里の客舍の方で、私はファゲエのやうな批評家に四巻のルウソオ研究のあることを知り、もう一度ルウソオに歸らうではないかといふ若い時代の佛蘭西人のあることをも知つて來た。私は自分の青年時代から好きなルウソオがあの薄命な佛蘭西の新進作家シャアル・ルイ・フイリップによつて、白耳義の詩人エルスカンプと共に、生前愛し慕はれたといふことにも言ひあらはしがたい懐しみを覺えて居た。

海の反射は私を疲れさせた。私はその讀みさしの黄色い紙表紙の本を伏せたまゝ、長い籐椅子の上でしばらく眠つた。眼が覺めて見ると、前に遇つて口をきいたエトランゼエが籐椅子の側に立つて海の方を見て居た。

「先刻僕は君を見に來たが、君はよく眠つて居た。」

とエトランゼエが言つた。

私は通風筒の側の方から空いた籐椅子を一つ引いて來て、それをエトンゼエに勸め、自分でも腰掛け、それから船で買つた卷煙草を取出した。

「煙草はいかゞです。」

自分の好きなものを兎角人にも勸めたかつた。それを燻して居るうちに、假睡の後のボンヤリした頭が漸くはつきりして來た。

「君は隨分煙草をやるね。」とエトランゼエも卷煙草を燻し〳〵、「もう君、喜望峯までは僅かになつて來

ましたぜ。後三四日の辛抱だ。グリインウッチの子午線といふやつは昨日もう通過ぎた。」

前に逢つた時よりも餘計に斯の人は必安い口の利き方をした。旅のことで、私も持前の書生流儀を出して、

「こないだから僕は左様思つて居るんだが、君はなか〳〵海のことに精しい。長い航海の間には、何かこれで不思議なことでも有るものでせうか。」

「そんな不思議があるものかね。」

「何かそれでも變つたことが有りそうなものですなあ。」

「別に無いね。よく幽靈の出る船があるなんて言ふけれども、陸でも矢張左様いふ家があるやうなものぢやないか。航海中に行衛不明になる船もよくある。それだつて別に不思議はない。なにしろ君、この通り廣い海の中でせう。珊瑚島に乘揚げたりなんかして、全く消息の知れなくなつてしまふやうな場合はよくあるす。そりや君、一年中を通じて計算して見たら、行衛不明になつてしまふ船は何艘あるか知れない。」

「ヒドいものですなあ。」

「不思議と言へば君、何でも不思議す。君が旅に出掛けて行つたのも不思議、斯うして僕が君に逢つたのも不思議ぢやないか。」

「そんなことを言つては失敬かも知れませんが――」と私が言つて見た。「一體、君は奈何いふ人でしたつけ。」

「僕かね。僕は海から來たものさ。巡禮者で澤山だ。」

斯う言つて、エトランゼエは微笑んだ。

丁度その時、この船の水夫らしい男が藥の瓶を手に提げ、蒼ざめた顏付をして、重さうな足を引摺りながら甲板を通過ぎた。私達が話し込んで居た直ぐ上部の甲板員は船員以外の昇降を禁じてあつて、そこに船中の病室が設けてある。藥の瓶を提げた男はその病室の方へ行かうとして居る。

「あゝ脚氣患者だ。」

と私は左樣思つた。エトランゼエも私と同じやうに、その病人の極く靜かに歩いて行く後姿を見送つた。

「左樣言へば、君のお連は奈何しました。」とエトランゼエが訊いた。

「M君ですか。海の寫生でもして居ませう。」

「あの人よりは君の方が先に國を出たんだね。往きの旅と見ると、君も變つた。」

「さうかなあ。これで僕も變りましたかなあ。」

「君、髪は奈何しましたい。何かそれには意味があるんですか。」

「いゝえ、別に意味もありませんサ。髪の白くなつたのは鏡にでも向はなければ自分で分らないが、髪の白いのは見えて、心細くて仕樣がない。いつそ剃つてしまへ。さう思つて、巴里を發つ前に自分で剃つて來ました。」

「惜しいことをした。髪ばかり白くて、眉が黑いのは、何だか變だ。矢張上と下に白いものゝある方が、

調和がとれて好い。」

「君もなか／＼面白いことを言ふ。まあ自分でもいくらか異人臭くなつて歸つて來たかとは思ふが……そりや髪の刈り方とか、何とか、さういふことは仕方が無い。自分の内部に左樣變りやうが無い。僕だつても巴里に居る時分に、自分ながら不思議な夢を見たこともある。親戚のものとも、何處の誰とも言へないやうなものを夢に見る。兎に角、それは自分の國の方の女だ。顔だけは日本人だ。それで居ながらその女の眼は西洋人のやうに青かつたりする……どうかすると僕はまた夢に自分の國を歩いて居る。お寺の境内のやうなところが見える。その境内に人家がある。町がある。墓地がある。畠がある。左樣かと思ふと僕は日本の着物を着てその境内を歩いて居るために、物見高い西洋の子供に煩く附纏はれたりする……僕の夢はそんな風に、半分西洋が混つて來るやうに成つた。恐ろしいものぢやないか。三年ばかり外國に居るうちに、それだ。しかし斯樣なことは一時的の話だ。僕自身の變質でも何でもなからうと思ふ。僕は神戸を出掛ける時にも、自分の國に居ると同じ心持で外國へ行つても暮して見やうと思つた。今度もそれと同じ心持で、自分の國へもう一度歸つて行かうとして居る。」

「君はそのつもりでも、もし君が自分で自分の眼を疑ふやうなことが起つて來たとしたら……」

エトランゼエは籐椅子を離れて向ふの方へ歩いて行かうとしたが、何か思出したやうに引返して來て、斯う言つた。

「幸か、不幸か、君も海の洗禮を受けてしまつた。」

「まあ話したまへ。」と私は身を起して、エトランゼエを引留めるやうにした。「きのふは大分船が搖れた

か、今日はそれほどでも無い。」

「この邊は君、亞非利加の下ギネア州の沿海だ。これで船は西南、西南を取つて行つて居る。」

「あの向ふの海の方に青く光つてるのは、何でせう。何が流れて居るんでせう。」

「虫の群だ。」

「あれがねえ。隨分長く續いて居ますなあ。」

その時エトランゼエは遠い海のかなたを指して見せて、あのナポレオンが流竄の地なるセント、ヘレナの島はその方角にあたることを私に話して呉れた。絶海の孤島といふ言葉はその見えない島なぞにこそ實によく宛篏るやうにも思はれた。

「英雄も大變なところへ流されたもんだね。」

と私が言つて見て、エトランゼエと二人で立つて眺め入つた。風のある海には白い波が立つて、どうかすると近い波のしぶきが私の顔へ來た。

エトランゼエが行つた後でも私は獨りその甲板に殘つて、海の想像に耽つた——踊躍の世界、湧き上り湧き上りするエナアジイの無盡藏、驚くべく豐富な魚族の國。

六

倫敦を發してから早や十八日目だ。敵艇の出沒するといふ噂を氣遣つた斯の航海では、あのドバアの海峽で白々とした斷崖の遠く光るのを英吉利沿岸の方に望んで來たきりで、それから十五日ばかりの

間、陸といふものを全く見ずに暮した。その間、遠い島の影一つ私の眼には映らなかつた。明けても暮れても私の眺めて行つたものは海だ。ある時は眼を射るほど强度の靑さに反射するやうな海を。ある時は濃い霧がやつて來て船の進行を停めてしまふやうな海を。ある時は無數の銀色な飛魚が遠く近く波濤の間に群れ飛ぶやうな海を。昨日は何哩來た、今日は何哩來たと、私はM君と二人で毎日毎日それを言ひ暮して行つた。一航海に四季を經るとは、あのチルビユリイの船着場でいよ／＼自分等がこの船に乘らうとする際に倫敦からそこまで乘客一同を見送つて來て呉れた郵船會社の副支店長から聞いて來た言葉だが、實際復た氣候が變つて來た。われ／＼は何となく秋めいた海の上へ出て行つた。空も澄んで來た。雲も遠くなつた。波濤の感じまでが冷くなつて來た。船員は復た黑服を取出して着更へるほどに成つた。

めづらしく一羽の海鳥がわれ／＼の船に近く飛んで來た。信天翁だ。陸上の消息も絕えた十八日間の長く續いた航海が奈樣なものであるかを經驗して行つたわれ／＼は皆な爭つて斯のめづらしい海鳥を迎へた。

「M君、鳥が飛んで來るやうになりましたぜ。そろ／＼陸も近くなつて來ましたぜ。」

と私が言つて見た。

私は掲示板のあるところへ走つて行つて、倫敦から既に五千四百四十二哩も來たことを知つた。喜望峯までは八百哩あつた。そこは南緯二十三度十八分、東經九度四分としてある。試みに海圖の前に立つて見ると、日々の船の位置を示した例の旗の形が亞弗利加ダマラ洲といふ地方の沖合に挿してあつた。

カナリイ群島の附近から中央亞弗利加の一角を廻つてそこまで南下した點々とした留針の痕を辿ることも出來た。

海上の危險といふことも最早忘れたやうにして行つた私は、ふと會計の部屋を訪ねて、見てすくなからず驚かされたことがある。まだその日まで船員は浮袋を枕の下にして眠ることを忘れて居なかつた。この船には無線電信の裝置もしてあつて、それを取扱つて居る局長の鋭敏な耳ばかりは種々な戰時らしい暗示に接することがあるといふ。その事はわれ〳〵乘客にはわざと知らせずにあるといふ。私はデッキ、ビリヤアドの好きな船員の一人として暇さへあれば高い船梯子を降りて來る局長といふ人をも知るやうになつたが、實際あの局長は何樣な海上の秘密でも感知することの出來さうな、人一倍大きな紅味がゝつた耳を有つて居た。とは言へ斯うした時の航海でも、星のあざやかな夕方にでもなれば、高い艉橋に近い船長室の方では戰爭を他に謠曲の聲が起り、本甲板の隅の暗いところからは船員の吹く尺八のひとさも傳はつて來た。

西南の風が持つて來る「うねり」は普通の波濤とも異つてわれ〳〵の船を動搖させた。翌日は殊にこの「うねり」が高かつた。左樣いふ日にかぎつて、M君は部屋に引籠つて、食慾のないことをコボして居た。どうして斯樣に自分の飯はまづいのか、あの帆柱の影の粗末な食卓では水夫等がいかにも甘さうに食つて居るのに、とM君が羨ましさうに言つて居た。相變らず私は自分の部屋の方で、ボオイが運んで來て呉れる膳に對つた。どうかすると部屋の隅に隱れて居る船蟲が私の膳にまで上つて來ることがあつたが、船中で一番私の嫌ひなものは斯の船蟲だ。船で出す飯も隨分硬かつた。

「いよ／＼明後日はケエプ、タウンへ着きますそうです。」

と言つて部屋を出て行くボオイの聲も何となく元氣づいて聞えて來た。

一日は一日より信天翁の飛んで來るのが多くなつた。航海の二十日目に、私が本甲板に立つて『うねり』の靜まつた海を眺めて居ると、船に近く飛んで來た一羽の信天翁が丁度私の頭の上で恐しく長い羽翼をひろげて見せた。私はあの海鳥が自分の頭の上へ落ちて來るかと思つたほど、それほど眞上に仰ぎ視ることが出來た。最早船中ではケエプ、タウン着の時間を測つて旅の慰みに賭などを思ひ付くものがある。一等室から二等室の間を周旋して歩く物數奇な手合もある。M君も一シルリング賭けたと言つて笑つた。われ／＼には亞弗利加の南端に達するといふ樂みがあり、近く港に着くといふ樂みがあり、故國を見る前に種々な知らない殖民地を見て行くといふ樂みがあつた。午後に私は巴里や倫敦の知人へ宛てゝ旅の紀念の葉書を書いた。

一晝夜に三百十二哩ほどの速力で駛つて行つた熱田丸は油を流したやうな靜かな夕方の波の上へわれ／＼を連れて行つた。冷い海の色も何となく「南」らしかつた。美しい夕日をも見た。

七

二十日もかゝつて遠く眼ざして行つたケエプ、タウンの港はチラ／＼とした曉方の燈火から私の眼に映じて來た。私が船床の上に眼ざめた頃は、船は既に港に入つて居た。私は寢衣のまゝ甲板に上つて、一旦港の入口に靜止した熱田丸から水に映るその燈火を望んだ。

石質のあらはれた三つの連なつた禿山に朝日のあたる頃、船は波止場の方へ動いて行つた。その名からして面白味のないライオン峯、テエブル山、デビル峯の眺望はあだかも高い石の屏風だ。朝靄の籠めた山の裾から傾斜に添ふて町のある地勢が何となく荒凉とした感じを與へる。港内には閑散らしく淀泊する一隻の英吉利の軍艦を見るのみで、商船の數とても極く少なかつたが、でも煙の混つた空氣を通じて煤けた煙筒と、帆柱と、帆綱と、その間を飛ぶ鷗の群などを見るのは港らしかつた。朝日は燈臺の立つ棧橋の上にもあたつて居て、そこを行きかふ英吉利人や土人も見える。

私は上陸の仕度して甲板に出て居ると、水夫の監督らしい船員が來ていろ／＼と私に話しかけた。この人も商船學校出らしい書生肌の人だ。私はM君の仕度するのを待つ間、しばらくその船員と一緒に立つて、陸上に見える高い時計臺や、いかにも英吉利の殖民地らしい赤く黒ずんだ屋根などを眺めて居た。

「金と金剛石が出るんで、兎に角これだけに發達したやうな町なんですね。是處はまあ、私共には餘り用はありません。唯皆さんの御見物のために寄るやうなものなんです。」

とその船員が私に話して呉れた。丁度そこへM君も部屋から出て來て私達と一緒になつた。斯ういふ場合にはM君は寫生の帳面と鉛筆とを手放さないほど熱心な人だ。

「M君、賭はどうでした。」と私が訊いて見た。

「駄目、駄目、一シル損しちまいました。」

とM君は言つて、皆なの中で一番近い時間を言ひ當てた英吉利の看護婦の手にあの賭金が落ちたことを話して笑つた。二十日の間も海に暮した私は可成激しい土の渇きを覺えて來た。私は唯それを踏むと

いふことだけでも滿足しやうとして居た。その心をもつて、私はM君と一緒に陸へと急いだ。

南亞弗利加博物館といふは小規模ながらに、ケエプ、タウンでの見るべきものゝ一つであつた。種々な土人の裝飾物、酒器、石器、其他初めて來て見る地方の奇異な風俗を示してあるものゝ前で、しばらく私達は時を送つた。金剛石を含むといふ石塊の陳列された室へも行つて見た。古代の航海者が喜望峰に達したことを紀念するための文字を刻した幾多の石片の前へも行つて立つて見た。この地方に產するといふ動物の剝製が蒐集された室では、K君夫婦が女の兒の手を引きながら見て廻るのに行き逢つた。博物館の出口で、私はこの旅を紀念するに好い一小冊子を求めた。

Inscriptions
left by
Early European Navigators
on their
way to the East.

としてあつた。

私達は小さな美術館をも訪ねた。そこにある繪畫は現代の畫家の手に成つた英吉利風の風景で、見るに足るものは無かつた。覇王樹、芭蕉、それから名も知らない紫色の花の高い枝に咲いたのが眼についた植物園の內を通りぬけて、あるさゝやかな珈琲店で英吉利風の紅茶をも味つた。倫敦の町などを步いて見かけることの出來ないやうな、實に思ひ〳〵の風俗をした殖民地の英吉利人が私達の前を右に往き

左に往きして居た。

歐羅巴を見た眼で斯うした亞弗利加の殖民地を見ると、すくなくも向ふには純粹なものがあり、こゝには外來の勢力を無理に押し込んで造りつけたやうな濁つたものがある。すべてが實に雜然紛然として居る。成程こゝには建築物として立派なものもある。しかしその一つでも殆んど他と調和したものが無い。私は斯うした殖民地を見た眼でもう一度自分の國を見るといふことが何となく氣がゝりになつて來た。

死んだ町を歩いて來たやうな心持をもつて、私は船まで引返した。M君は町から探して來た土人の製作品で、早速喫煙室の卓上を飾つて見た。あだかもそこに靜物の別天地でも形造つたやうに。歐羅巴の方の戰爭の消息も、その港では判然したことを知ることが出來なかつた。

出帆までにはまだ間があつた。K君に伴はれて、M君と私とを見に來た人があつた。外務省から取調のため一時この遠隔な土地に派遣されて居る官吏で、M君の兄さんをも知つて居るといふ。簡短に亞弗利加の氣候をも話して呉れた。一時季にうんと降り續いて、その他は殆んど雨の來ることが無い。農作には適せず、土地の發達しない所以だと話して呉れた。恐らくこの官吏はケエプ、タウンで邂逅することの出來る唯一人の同胞であらうかとも思はれた。

午後の三時には艫の方で錨を卷く重い音が起つた。船は波止場を離れて靜かに廻轉し始めた。斯うして私はまた二度と旅する機會のありさうにも思はれない南の果の港を出て行つた。

南亞弗利加博物館で見つけて來た小冊子――初代歐羅巴の航海者が遺した記錄は私の膝の上にあつ

た。それを手にして居ると、まだ私はあのケエプ、タウンの町の方に自分の身を置くやうな氣もする。私の心は、あの赤味がゝつた土の上の日あたりの方へ行つた。竹のやうに青い椰子の樹の幹肌の方へも行つた。奇異な植物ばかりの茂り重なつた中で、ところどころに秋を見せた黄葉の方へも行つた。短く黒く土色に縮れた土人の髮の方へも行つた。赤い色の布で頭を包み白衣を身に纏ふた婦人の方へも行つた。怪しげな風俗の歐羅巴人と、殖民地生れらしい子供と、混血兒などの往きかふ町の方へも行つた。私の心はまた、あの博物館内の青白い鴕鳥の玉子や鶴の玉子などの並べてあつた室の方へも行き、種々な動物の剝製の方へも行つて、そこに標本として形をとゞめた山羊、鹿、斑馬、象、獅子、駝鳥、それから何程の種類のあるかも知れないやうな毒蛇と毒虫などの實際に棲息するといふ荒く未開な地方を想像して見た。

八

それから三日目にダアバンの港へ着いた。喜望峯を廻つて行つたわれわれの船は急潮のため一時間に三哩づゝも押し流された。入港もそのために豫定の時よりは後れたとのことであつた。

午前の九時半頃には私は早や動搖を感じない甲板の上に居て、M君はじめ英吉利人の乘客等と一緒に、水先案内の來るのを待受けた。港の入口にある禿げた崖の上には、暗く蒸々した灰色の雲を遠い背景にして白い燈臺の立つのを望んだ。

「鱶。鱶。」

といふ聲が皆なの間に起つた。その邊はどうかするとあの大きな魚が船に近く躍りあがるやうな海だ。

一艘のランチが熱田丸をめがけて進んで來た。ケエプ、タウンでの入港の經驗で、それが水先案内の迎へに來た船といふことが分つた。やがて熱田丸は靜かに動き始めて、燈臺の立つ崖の下を過ぎた。

「あの崖に生えて居るのは何でせう。」

「あれは覇王樹の林です。」

「あれがねえ。何か黄色い花も咲いてますね。」

われ／＼は水夫の監督をする船員と一緒にこんな話をしながら、一面に覇王樹の綠に包まれた崖つゞきの地勢に添ふて波止場の方へ入つて行つた。小高い山腹に倚つた岸の上には石炭を積むための裝置がしてある。その岸に近く船が停つた時、針金のやうに髮の卷き縮れた黑い皮膚の土人が素足で岸の方から走り寄つた來た。

ダアバンの寄港は船に石炭と水とを積むためであつたから、われ／＼はゆつくり上陸する時を得た。ランチで水を渡つて行くと、間もなく私はなだらかに盛上つた砂山のやうなところへ出た。海水浴場としてこのダアバンが名高いといふことも、その邊の勾配のゆるい地勢を見たゞけで點頭かれる。町の方へ通ふ電車の終點地に近く、路傍の草の上でオレンヂを賣る二人の土人の娘があつた。頭から冠つた白い布で身體の全體を包んで居るやうな亞非利加風俗をしながら、通りかゝる土人の若者と共に物言ひ、笑ふ娘達が、現に自分の前に居るといふことだけでも、私には活きた不思議の一つだつた。全く別の世界に暮して來たやうな自分のその日迄と、それからの若い黑人達に近く行つた瞬間と、その間には何の連絡があり何の關係があるかとさへ思はれた。見ると、その娘達は何處から何處まで輪づくめだ。耳に

輪。鼻に輪。首に輪。指に輪。足にまで輪。青黒い入墨も、暗い色の皮膚にあつて見れば決して醜くない。むしろその容貌に深さと陰影とを増すやうにも見える。

「黒人もなか／＼好い。」

とさゝやいて私は連のM君を笑はせた。そこを離れて電車の停留場の方へ歩いて行くうちに、私はあの可憐な黒人の娘からオレンヂ一つ買はなかつたことを悔ゐた。

亞非利加らしい六月初の日あたりや殖民地風の市街を電車の上から見て行つて、ダアバンの中心地へ出た。土人の車夫の群の異様な風俗をしたのが、われ／＼の周圍に集つて來て、しきりと乘車を勸めた。獸の角や鳥の羽で頭を飾つたその風俗は、古くから土地の習慣ではあるかも知れないが、旅客の眼を引くためのわざとした裝束らしくて卑しかつた。矢張彼様いふ風俗は遠い山間の方に隱棲する土人ばかりの中へでも持つて行つて見たいものだつた。

「見て御覽なさい、あの足は何かで白く塗つてるんですよ。」

とM君は榕樹の並木の陰に客を待つて居る土人の車夫を私に指して見せた。

この港町で土人の引く車がわれ／＼の國の意匠を模倣した二人乘の人力車であるのは、めづらしかつた。日本的なものゝ影響がこんな亞非利加の果にまで及んで居ると考へることも決して惡い心持はしなかつた――人力車そのものゝ好いか惡いかは別にしても。

半日ばかり知らない町で暮して見るうちに、私はあの波止場で一番最初に見た土人から、あの針金のやうに卷き縮れた髮から、あの恐ろしげに光る眼から、あの氣味の惡く黒い皮膚から、あの赤い唇と際

立つて白くあらはれる歯から、一概に獰猛な性質のものゝやうに自分の感じたことを改めなければならないやうに成つて行つた。私はまた、黒人を婬欲の象徴として見るやうな、ある一部の歐羅巴人を憎むやうにも成つて行つた。ダアバンの博物館を見た眼を移して、町々を往きかふ人達の中に出て見ると、あの土人の製作品として陳列してあつた南京玉をおもしろく意匠したものなぞが土地の婦人の身を飾つて居ることが分る。私はある繁華な町の商家の前で、花嫁かと思はれるほど盛裝した土地の若い婦人を見かけたが、その人は卷き縮れた前髪を縒り下げ、その一つ〳〵に南京玉の飾を垂れて居た。男や女が素足で日のあたつた土の上を踏んで居るといふことも、斯うした地方で見れば左様可笑しくないのも不思議だ。ある黒人の巡査は半ズボンの制服を着け、手鎗を携へ、脛から足をあらはして町の角に立つて居たが、その人の銅色な素足は下手な靴なぞを穿いたよりも立派だつた。M君と私とはあの博物館の樓上の窓のところから、椰子や榕樹の並木の梢の間に港の一部を望むことの出來たやうな、靜かな樂しい時をも送つて來た。歐羅巴の方で見て來た種々な名畫の複製が可成多く陳列されてあつたのは一層その樓上を樂しくして見せた。着色板ではあつたが、私はもう一度あのレンブランドの前へも行つた。倫敦で見ることの出來なかつたやうなロセッチのある作の面影にすら接することが出來た。

船を指して私達が歸りを急いだ頃は、暮色が匍ふやうにやつて來た。熱帶的な黄昏の短かさは鬱蒼とした榕樹の蔭なぞを物凄いほど暗くしてしまつた。ランチの出るところへ辿り着く迄に、大分道に迷つた。

熱田丸に引返して燈火の映る夜の港の光景を前にした時の私は半日の疲を忘れた。M君を相手に、

「あの桃太郎の傳說は南の方にでも關係があるんぢや有りませんかね。先刻の土人の風俗なぞは鬼にそつくりですね。」

と話して見た。私はまた古代の武士が武勇のしるしとしてあの兜の前面を飾つたものと、亞非利加の土人が額を飾つて居る獸の角と、その間の類似を思つて、自分等の遠い先祖と「南」とを結びつけて想像して見た。

「Mさんには今日はすつかり擔がれてしまひました。私はほんとにヱルダンが落ちたのかと思ひましたよ。」

と言つて笑ふK君も私達の側へ來て、最早二十四日の間も聞かなかつた陸上の消息や、ダアバンへ來て初めていくらか知ることの出來た歐羅巴の方の戰況の噂なぞをした。私達三人が巴里を辭したのは丁度ヱルダンの戰爭の始まらうとする頃であつた。

「何故日本人がこんなところへ來たのかと言つて、先刻しきりと私に尋ねて居るダアバンの人が有りましたつけ――私があの公園に腰掛けて居ましたら。もと〳〵このダアバンは葡萄牙人の開いたところださうですね。それから英吉利人の手に移つたのですね。土人の中には葡萄牙人の血も混つて流れてゐるのがあるんださうです。えゝ、えゝ、ですから斯の土地の人はあまり英吉利人に好い感情を抱いても居ないのですね。」

といふK君の話もあつた。

ダアバンでの碇泊は翌日まで續いた、非常に多量な石炭の積込を終る迄とあつて、船のボオイや炊事

方の中には海岸へ釣道具を持出し、長い航海中で僅かに見つけた『閑散』を樂まうとして居るものもあつた。波止場に近い崖下の砂道に添ふて私も海岸へ歩きに出た。鯨が捕れて引揚げられて行つたといふ場所のあたりには、まだ人だかりがして居る。紅い鯨の血のあとをそこゝに見ることも出來る。私は覇王樹の生ひ茂つた傾斜の間に一筋の細道のあるのを見つけた。そこから崖の上に登つて遠く海を望まうとしたが、毒蛇のあることを聞いて思ひ止つた。名も知らない草の蔓や短い灌木の類が崖の裾にはびこつて居た。その中には紫色の草花の亂れ咲くのもあつた。試みに私は『磯菫』と名づけて見て、旅の記念にとその一つを摘み取らうとした。

『覇王樹に觸るのは、お止しなさいよ。』

と向ふの方から呼ぶ會計の聲に驚かされて、私はうつかり知らない土地の花も摘めないことを知つた。

まぶしい海岸の日光の中で、私は會計やM君や二三の船員とも一緒になつた。もう直き崖の端の燈臺に近い。突出た岸の岩づたひに一同は大きな岩と岩の間を降りた。見ると、知らない土人が何時の間にかやつて來て、一番高い岩の上へ素足で登つて行つた。波打際に近い岩の蔭には涼しい日影がある。腰掛けるに好いところがある。どうかすると打寄せる波が私の休んで居た岩の間までも流れ込んで來て、復た我と吾がリズムにつれて向ふの方へ引いて行つた。私はその日影で旅の服から好きな卷煙草を取出し、白い波が砕けるのを眺めながら一服やらうとした時ほど、遠い南亞弗利加の果に身を置いて居るやうな氣のしたことは無かつた。私の眼に映る青い深い海はまだそこから何程際崖も無く續いて居るとも知れなかつた。

やがて私達は日のあたつた海岸を船の方へ引返して行つた。めづらしく一羽の蝶を見た。何處から聞えて來るとも知れないやうな遠い鷄の聲を聞きつけたのも、めづらしかつた。崖の裾には自分の國で見るものとも違ふ松葉牡丹の根が這つて居て、その間には種々な色の花も咲き亂れて居た。

「柴の花なぞを摘るのは止した方が可い。どうかすると毒草だ。」

と會計が言つて居た。

その崖の下で、私は釣竿を提げて來る二人の歐羅巴人の子供に逢つた。二人ともズボンをまくし揚げて、土人と同じやうに洗足で歩いて居るのも、殖民地らしかつた。

海岸には丁度一艘の捕鯨船が着いた。海賊の船でも見るやうな舊式な汚い船は沖の方から捕れた鯨を引いて來た。聲を揚げて呼ぶもの、走り廻るもの、立つて見物するもの、種々雜多な人種が群がり集つて居る中で、巨大な鯨があをむきに鐵の鎖に繋がれながら、寄生蟲の一面に附着した白い腹部を露出しながら、海から陸へ揚つて來た。まだ主人公の死も知らず顏な澤山な寄生蟲は鯨の體に深く食ひ込んだ自分等の殼を出たり入つたりして、ピチ／＼跳ねて居た。その海岸から波止場に繋がれた熱田丸の方を見ると、八千噸からある二本マストの船が城のやうに浮いて居た。もうそろ／＼出帆の仕度も始まつたと見え、黒い煙筒からはさかんに煙を噴出して居た。

九

エトランゼエは船の方に私を待つて居た。石炭の積込から飛散した眞黑な塵は下手に欄にも觸れない

ほど甲板の上を汚したが、最早水洗ひも濟んだ後で、氣持が好い。長い板の間のところ〴〵には、まだ半乾きに濕つた部分もある。私は洗ひ立ての甲板をエトランゼエと二人で踏んで、覇王樹の山に對した二階の廊下からでも下瞰すやうに、岸から歸つて來る人達を眺めた。私の直ぐ眼の下には、このダアバンで熱田丸を離れるといふ年若な英吉利人の技師が上海行の一人旅の細君と腕を組合せて、船旅で重ねた馴染の別れを惜み顏に、波止場の上を極く靜かに歩いて居た。多情な細君は時々物に怯えたやうな眼付をして、後方を振返つて見ては復た男と歩調を合せて居た。この二人の男女の客から私は厭になるほど種々な場面を見せつけられて來た。

其時、本甲板の下の方で船員全體の點呼があつた。デツキ、ビリヤアドで知合になつた運轉士、眉の濃い機關士、局長、入港出港の節に自分等の甲板へ來て水夫の監督をする人、艦橋の上で見かける年若な商船學校の見習生、いづれも他の船員と一緒に二列になつて船庫の前に並んだ。M君や私のところへよく話しに來る一等運轉士といふ人も船庫に近い自分の部屋から出て來た。會計も出て行つて前列の左の端に立つた。

「斯様なところで英吉利の官憲から點呼を受ける必要があるだらうか。」

と私はエトランゼエに言つて見た。エトランゼエも私と一緒に立つて眺めながら、

「どうかすると港で火夫や水夫の逃出すといふことがあるからね。大抵の船が一航海して歸つて行く時分には、船員の頭數がよく減つて居るからね。」

港の役人らしい英吉利人は船の事務長と共に本甲板の方に立つて、皆なの出揃ふのを待つて居た。白

い頭巾を頭に載せた炊事方から、K君の子供の世話をする女の給仕まで出て來た。私の部屋付のボオイも改まつた顔付でボオイ連の仲間に加はつて居た。私はそれをエトランゼエに指して見せて、

「あれが君、僕の部屋のボオイだ。あの隣に立つてるのがM君の部屋のだ。どうして君、皆な藝人だ。見給へ、ボオイの服なぞを着て居ても、何處か斯う意氣なところが有るだらう。左樣思つて時々僕は獨りで噴飯したくなることがある。彼樣いふ意氣で、イナセなところが、僕等の國の方の特色かも知れんね。」

巴里の方で見て來た生活のさまなぞか、それからそれと私の胸に浮んだ。私はエトランゼエを誘つて港の見える左舷の甲板の方へ歩き廻りに行つたが、胸に浮んだ旅の話なぞがして見たかつた。

「歐羅巴の方へ行つて、一番僕の驚いて來たのは貧富の懸隔の酷しいことだつたね。ブルジョアはブルジョア、勞働者は勞働者――あれほど勞働者を卑しむ心持なぞは、一寸僕等の國には見られない。上流の人達と下層の階級のものとは、まあ寄席の席まで別になつて居るやうなものだ。勞働者だとか、百姓だとかいふ言葉は、まるで輕蔑のサンボルだ。あれでは君、サンヂカリストの運動なぞが起つて來る筈だね。」

私は更に言葉を繼いで、

「なんでも君、巴里の方でこんなことが有つた。ある食卓で百姓の話が出た。「私もこれで日本の方では農家の子です、信州といふ山國の方の百姓です」と言つたら、その食卓に居る人達はどうしても信じなかつた。「あなたが百姓ですか」と言つた調子だ。僕は口惜くて堪らないから、百姓だつてそんな輕蔑し

たものぢやない、僕等の國の方では寧ろ農夫を尊んでる、左樣言つてやつた。するとその食卓には露西亞の方から來て居る女學生も居て、「そりや百姓の中から物を考へるやうな人間が出ないとは限りません、現に露西亞にも百姓から出てエクリイヴンとなつたものも有ります、しかしそんなのは例外といふものです、まあ百姓の中から碌なのもゝ出やうがありません」――君、さういふ調子さ。その時僕は歐羅巴人の百姓とか勞働者とかいふのは大分僕等の國の方で言ふのとは違ふなと思つた。しかし佛蘭西あたりの勞働者と來たら、隨分また汚いからねえ。僕なんかですら一寸傍へは寄りたくないやうなのが有る。あれはいろ／＼な關係から來て居るんだらうが、一體歐羅巴人は僕等の國の人ほど着物なぞを取替へない、年百年中一枚の丈夫な着物で通す人さへある。そこへ行くと僕等の國では比較的安い物を着るかはりに、何枚と取替へる。職人でも何でも瀟洒としたものを着て居られる。歐羅巴の勞働者のやうに、あんなに汚い服裝をして居ないでも濟むからねえ。寄席へ行つて傍へ寄れないやうなものは居ないからねえ。何か斯う僕等の國には歐羅巴の方に無いものが殘つて居て――意氣とか、イナセとかいふものがあつて――淸潔を愛するやうな天性があつて、それが貧乏人と左樣でない人達との間を調和して來たやうな氣もするね。ホラ、先刻僕が君に話したらう、この船のボオイでも何でも何處か意氣だと言つたらう。おそらく「職人」といふ言葉から僕等の耳に響いて來るやうな爽快なものは、歐羅巴の方に無いものだらうと思ふね。けれども、氣候とか、風土とか、經濟狀態とかに――僕は左樣いふものを歸着させてしまひたくない。僕等日本人に左樣いふ愛すべき天性があるといふ風に考へたいね……」

エトランゼエは默つて私の言ふことを聞いて居るばかりであつた。時によると、この人はほんとに默

つて居た。氣味の惡いほど默り込んでた。

「君、行つて何か飲まう。」

私はエトランゼエを誘つて甲板の上にある喫煙室の方へ行つた。鈴を押して私の部屋付のボオイに來て貰つた。

「何か飲むものはありますまいか。」

「碇泊中だもんですから、すつかり鍵を掛けてしまひまして‥‥何かそれでも有るかも知れません。行つて見てまゐりませう。」

と言つてボオイは出て行つた。

「そろ〳〵船も出るかな。」

とエトランゼエは喫煙室の窓から外を覗きに行つて、やがて私の側に腰掛けた。そこへボオイがペパミントとの入つた罎と小さな玻璃盃を二つ持つて來た。

私達の前には涼しさうに靑く光るペパミントの注がれた玻璃盃が一つづゝ置かれた。私達二人はその玻璃盃を觸れ合せて、互ひに旅の健康を祝した。

エトランゼエは薄荷酒のやうなペパミントを一口やつて、

「ダアバンは奈何でした。」

「ケエプ、タウンよりは僕にはずつと面白かつた。」と私が答へた。

「左樣さ。英吉利の殖民地といふものも大したものさね。」

「僕はケエブ、タウンの方でも覗いて來たし、こゝでも一寸雜誌屋を覗いて來ました。」

「何か有りましたかね。」

「實はねえ、倫敦の方で雜誌屋を覗いて見たら、冒險小說とか情話とか左樣言つたやうなものが、有る、有る、びつくりするほど有る。斯樣な低級な趣味の雜誌や小說が一體誰に讀まれるのかと思つて見て來ましたよ。ところがケエブ、タウンやダアバンへ來て見ると、それが雜誌屋にずらりと並んで居る。一口に言へば、あれはまあ殖民地向なんだね。」

「コロニスト（殖民地の連中）といふやつが、今じやもう大した勢力サ。」

「君も左樣思ふだらう。誰だつて英吉利の殖民地の發達を見て驚かないものは無い。今がもうその絕頂かも知れない。どうも僕の考へには、英吉利の本國まで殖民地のために壓されて來たやうな氣がする。」

「倫敦には、君は――」

「いえ、素通りサ。ほんの九日ばかり。僕はほんの自分の印象を語るに過ぎないがね。しかし彼地に長く居る人から聞いて見ても、倫敦に今有るものは、何でも面白ければ可いと成つてるやうだね――芝居でも、音樂でも。小說や雜誌の讀物でも。面白ければ可い。それが君、殖民地の連中が要求してるものぢやないか。あの金儲けに忙しい連中が、一日働けばもう草臥れてしまつて「娯樂」の外には求められないやうな連中が‥‥」

「君の言ふのは、英吉利本國の殖民地化かね。」

「まあ其樣なものだ。どうも英吉利といふものは變だ――おそらく是が僕ばかりぢや無からう、正直に

英吉利のことを考へるものは左様思ふだらうよ。僕が巴里を出る時は、丁度セルバンテスの三百年祭さ。あの「ドンキイ、ホオテ」を書いた人のために、佛蘭西ではシュアレスのやうな批評家があつて、一冊の「セルバンテス」といふ本が出版された。倫敦へ渡つて見ると、丁度そこでも君シェクスピアの三百年祭があつた。僕は金びかなシエクスピアの紀念帖を見せつけられたばかりだつた。誰一人あの「ハムレット」の詩人のために三百年を紀念するに足りるやうなものを出したとは聞いて來なかつた。佛蘭西と英吉利とは、それだけもう時代に對する意氣込が違つて來て居るね……」

その時、エトランゼエは腰掛を離れた。喫煙室の外の方へ出て行つて、やがて入口のところから、

「もう君、船が出るよ。」

と呼んだ。

私が甲板に出てそこに立つ人達と一緒に成つた頃は、M君も一等室の方から戻つて來た。船が波止場を離れて元來た蛙の下を出て行くと、港にはもうチラ／＼燈火が映り始めた。高い蛙の端にある燈臺にも青い灯が入つた。

この出帆を樂しくしたことは、全く戰爭の危險から拔出たといふその安心だ。窓を掩ふ黒布、甲板の電燈を掩ふ黒布、其他一切の船を掩ふ黒布が取除けることを許された。動いて行く船の上から見ると、細い下弦の月が空に懸つて居た。

『新嘉堡まで行けば、もう日本へ歸つたも同じやうなものです。』

このボオイ等の言葉を樂みに、私は六月の初にダアバンの港を出ていよ〳〵印度洋に向つた。佛領のマダガスカル島を過ぎた。今度の航海では錫蘭をヌキにして、コロンボの港へは寄らずに印度洋を横ぎつてしまふ。もう一度赤道を通る。新嘉堡まで直航する。復た〳〵陸を見ない長い船旅を繰返さなければ成らないといふことは大分私に取つて思ひだつた。丁度風向は逆になつて、海上を吹く風と船自身の進行から生ずる風とが相剋するところから、全く風の無いのも同じやうな甲板の上では、とても大西洋を乘つて來た時の涼しさは望まれなかつた。K君夫婦はよく飽きずに子供の早く寢付く夕方から骨牌遊びに私達を招いて呉れ、時には夫婦して二等室の食堂の方へも見えたが、しまひにはM君も私も骨牌に飽いてしまつた。『御退屈でせう。』などと船員から慰められる度に反つて迷惑に思つて居たほどの私も、今度といふ今度は海上の無聊に襲はれるやうに成つて行つた。私にルウソオの『新しきエロイズ』でもなかつたら、他に時の送りやうが無いやうな日もあつた。どうかすると私は海を見やうとする心さへ失つてしまひ、船に具へつけてある雜書をボオイから借りうけて、歴史小說でも何でもないやうな歴史小說を二日も三日も讀みつゞけ、たやすく、卑く、馬鹿らしく、骨の折れないのを寧ろ樂しとしたやうな、左樣いふ疲れて來た自分をあさましく思ふ日さへあつた。殖民地行の英吉利人の男や女の客が日に日に募る横着な振舞は默つて知らん顔をして居る私の心を餘計にいら〳〵させた。蒸される熱のために半分酣醉したやうな心持になつて、絕間なく船から傳はつて來る單調な動搖を身に感じながら、もう一度私は熱帶の光の海の方へ入つて行つた。

十一

航海は復た十五日續いた。

その十五日目に、漸く船はマレエ半島に近づいて行つた。倫敦を出發した日から數へると四十日目に當つて居た。マダガスカル島以來、レユニオンといふ島で燈臺を望んだのみで、十五日間陸を見ずに暮し、再び赤道を越え、兎にも角にもマレエ半島の附近まで歸つて行つて、淡いスマトラの島影を前にした甲板の上に立つて見た時は、實に蘇生るやうな思をした。乘客は皆な涼しい風の來るところへ集つて、朝曇りのした空のかなたに輪廓をあらはしたスマトラの山々を望んだ。

「スマトラも見えて來ましたね。」

と言つてエトランゼエが私の側へ來た頃は、空もすこし晴れた。私はエトランゼエと二人でずつと艫寄りの方の太い綱の積重ねてある側に籐椅子を並べた。

「長かつた、長かつた——ダアバンからこゝへ來る間は實に長かつた。」

と私は半分獨語のやうに言つた。

「なにしろ君、ダアバンからこゝまでは四千四百哩以上もあるからね。」

と言ふエトランゼエが自分の傍に居るに關らず、私は一つ二つ續けざまに荒い溜息を吐いた。

「こゝまで來れば、譯は無いさ。」とエトランゼエが言つた。「新嘉堡までは、もう二日路だ。今夜あたりはスマトラの燈臺が見えるだらう。」

「どうも君の精しいには驚く。海のことなら君は何でも知つてるやうぢやないか。」

「そりや君、あたりまへだよ。海から來たものが海のことに精しいのは。」

「それに、君はなか〳〵話好きだね。」

「僕と喋舌と來たら、毎日……僕が喋舌をすると、晝間は騷がしくつて、夜は寂しいなんて言つた人もある。」

「妙に君とは御馴染に成つたものさね。君だから言ふが、下等な英吉利人にはつく〴〵僕も厭に成つた。

「君の國の人だつて、隨分評判の好くないのが有るぜ。今度の戰爭で歐羅巴の方へボロ船を賣りつけに行つて、それに乘組んで行つた連中が外國船で歸つて來ると、途中で大喧嘩だ。醉つた勢ひに外國人を捉へて喧嘩を賣りつける。部屋へ逃込むやつの窓硝子を叩き壞す。引摺り出す。袋叩きにする。歐羅巴人なんてものは何程下等な奴でも、さう君の國の人のやうに喧嘩速くはないね。」

「そんな話は僕は初めてだ。そりや火夫か何かの氣の速い連中だらう。」

「なにしろ君、船長がピストルを向けたつて其樣なことを屁とも思はないやうな人が君の國には居るからね。外國船の中には、君の國の人を體よく斷つて居るのもある。日本人といふと、隨分恐がられて居るぜ。」

すこし話が途切れた。

「一體、僕等の國の方のものは暴れる時は暴れるが、そのかはり平常は莫迦に溫順しい。」

と私が言つて見た。「そこへ行くと、歐羅巴人は平常暴れることを知つてる。」

「平常暴れるは、好かつた。」とエトランゼエも笑出した。

「全く、歐羅巴人の生活は享樂的だね。群集としての訓練がある。子供の時分から共同生活といふやうなものを教え込まれて居る。左樣いふ素養があつて暴れるんだから、堪らない。この船に乘つてる英吉利人なぞでも……」

私はもう斯樣な話をしたくなかつた。自分の國のことにして見れば、箱根あたりの湯治場にでも行つて居るやうな氣分で殖民地行の途中を樂んで行かうとするコロニストの連中のことなぞを彼是言ふのも馬鹿馬鹿しい氣がした。

「君、僕はケエプ、タウンの博物館で面白い土產を買つて來た。初代歐羅巴の航海者の記錄といふやつさ。あれで見ると、何だねえ、歐羅巴の方から喜望峯を廻つて東へ東へと出やうとしたのは、もう十五世紀あたりからだねえ。」

「皆な印度に達するつもりさ。」

「左樣らしいねえ。西班牙人も行けば、葡萄牙人も行けば、英吉利人も行く。印度といふものが兎に角皆なの目的だつたんだね。印度が中心で、それからあの勢力が東の方へ延びて行つたんだなあ……印度から安南、安南から支那、支那から僕等の國……」

その時、左舷の甲板の方からヒイ／＼叫ぶ女の聲が聞えた。何事が起つたかと思はれるやうな女の叫び聲だ。

「何だ。」とエトランゼエも聞耳を立てた。

私は籐椅子を離れて、山のやうに積重ねてある綱の周圍を左舷の方へ廻つて行つて見た。惡く戯けることの好きなボルネオ行の技師が情人の妹をつかまへて、子供のやうに騷いで居るのだ。馬鹿らしく思つて復た私はエトランゼエの方へ引返した。

「復た英吉利人が騷いでるんだ。」と私がエトランゼエに言つた。「あのヒイ〳〵いふのは娘がくすぐられてるんだ。」

「大袈裟な聲だねえ。」とエトランゼエも馬鹿馬鹿しさうに笑つた。

やゝしばらく私達二人は默つて甲板から向ふのスマトラの島影を、海上に連なり續く岬のかたちなぞを賞し眺めて居た。一艘の白い汽船が波の間にあらはれた。すくなくも自分の國の船では無いらしい。

それを見て居ると、あのエルネスト、シモンの聯想が私の胸に浮ぶ。

「往きと歸りとでは、もう大分種々な港を見たなあ。」と私が復た言出した。「東洋の方で肝心な港々は大抵今では英吉利のものだね。先刻の印度の話ぢやないが、僕はこの旅で左樣思つて來た、最初の歐羅巴の航海者なんてものは必ずしも他の國を奪るつもりではなかつたんだね。唯、奴等は強いものを一緒に持つて行つたんだね。實際歐羅巴の方へ行つて見ると、強い組織的なものがあるからねえ。左樣いふ強いものが押込んで行くと、組織的でないやうな弱いものは否でも應でも敗けてしまふ。だからケエプ、タウンでも、ダアバンでも、コロンボででも、新嘉堡でも、結局強いものが支配するやうに成つちまう。そいつが僕等の國の方まで延びて來たんだね。」

「今から思ふと、君の國の長崎や神戸がよく新嘉堡のやうに成つてしまはなかつたものさね。」

「僕は斯様な風にも考へる。印度や埃及や土耳其あたりには、古代と近代としか無い、幸ひにも僕等の國には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡に成らなかつたばかりぢやない、僕等の國が今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思ふよ。見給へ、日本の兵體が強いなんて言つても、皆な封建時代から傳はつて來たものゝ近代化だ。兵體はまあ一例だが、僕等の國に今有るものは何一つとして……好いものでも、惡いものでも……どうかすると僕は旅に居て自分の國のことを考へて、まだ前世記が自分等の中に生きて居るやうな氣のすることも有る。眞實に自分等は革命といふものを經て來たのか知らんと疑ふやうなこともある……」

波の間に見える白い汽船は遠くはなつたが、まだ動いて居た。私は眺め入りながら、更に話し續けた。

「君の前だが、この旅では僕もいろ／＼なことを考へるよ。僕はよく自分の死んだ阿爺のことなぞを考へるよ。僕が阿爺に別れたのは十三の歳だがね、あの阿爺と來たら、そりやあもう頑固な人だつたからね。僕等の國には十八世紀の末から十九世紀の前半期あたりへかけて非常にさかんな保守的の精神が與つたさ。それが國學といふやつを產み、古語の研究となり、古代詩歌の復活となり、續いてさかんな愛國運動とも成つた。僕の阿爺なぞも矢張その運動に加はつた一人で、尊王攘夷なんてことを唱へて、西洋から入つて來るものを極力排斥したね。耶蘇教なぞはもう大嫌ひで、邪宗異端なんてことを言ひつゞけて、しまひに君、座敷牢で死んだ……その阿爺だらう、僕が十二の歳に英學を始める時は非常に心配してね、自分の子供が奈樣か成つてしまふやうにでも思つたんだらう。でも、しまひには僕に許して呉れたがネ。なにしろ阿爺は狂に成るくらゐだから、平素は優しい人でも、すこし激して來ると可畏しか

つた。僕の兄貴などはどうかすると弓の折で打たれた。僕はまだ幼少さかつたからそんな目には逢はなかつたが、子供心にも阿爺といふものは恐いもの、頑固なものとばかり思つた……それから大きくなつても、僕の學ぶこと、爲ること、考へることは阿爺と何の關りがあるだらう、自分の心持は全く通じないものゝやうにばかり思はれて仕方がなかつた。もしあの阿爺が生きながらへて居て、自分の爲することを見たら、と僕はよく左樣思つた。しかし君、僕だつて左樣無暗に西洋を難有がつて外國の學問をした譯でも無いサ。成程、好いものでありさへすれば、假令いかなる國のものであつても、躊躇せずにそれを受納れやうとはした。英吉利のものでも。獨逸のものでも。佛蘭西のものでも。それから露西亞のものでも。僕ばかりぢやない、一緒に學問をした僕等の國の青年は皆なそれだ。僕は自分で自分の半生を振返つて、歩いて來た細い道を辿つて見ることもある。要するに僕なぞが長い間かゝつて外國の言葉を學んだり、外國の本を讀んで見たりしたのは、唯西洋を摸倣する心からでは無い。何卒して觸れて見たいと思ふものが有つたからだ。言つて見れば、まあ近代の精神だ――エスプリイ、モデルンといふやつだね。何卒して、人として眼を覺ましたい、それが半生の學問の究極の目的だつた……不思議さねえ、遠い外國の旅に出て來て見ると、子供の時に別れた阿爺のことなぞがしきりと戀しくなる。僕等が今日あるのも、彼樣して阿爺の時代の人達が頑張つて居て呉れた御蔭だ。印度あたりのやうに外來の勢力に敗けてしまはなかつた御蔭だ、左樣思ふと僕はあの頑固な可畏しい阿爺に感謝するやうな心持を有つて來た。多少なりとも僕等が近代の精神に觸れ得るといふのは、あの阿爺達に强いものが有つたからだ。それに觸れ得るだけの力を殘して置いて呉れたからだ。僕は左樣思つて來たよ……いゝえ實際、阿爺

の愛といふやうなものを喚起したのも、寂しい外國の旅だつた……」

エトランゼエは默つてこの私の話を聞いて居たが、籐椅子を離れて起上る際に、「君もなか〳〵話せる、しかし君の言ふことは半分は寢言だ」といふ眼付をした。

十二

私の船床はそれまで食堂の側にあつて、たつた一人で一室を占領して居たが、新嘉堡以東は急に乘客も增すといふことで、その日の午後にM君の部屋の方へ一緒に成つた。そこは喫煙室に近く、甲板へも直ぐに出られた。私は陰氣な階下の部屋を出て、窓から海の望まれる二階の部屋の方へ引越したやうなものだつた。長い船旅で、鞄の中から取出して着た單衣の和服は解けたり、綻びたりした。私はそれを巴里の客舍の方でも着、この船へ來てからも夏の羽織を重ね熱い甲板の上で暮したことが多かつた。時には私は人の居ない喫煙室の方へ旅の着物を持出し、漁師が網を結くやうな手付でその綻びを縫つて見た。

新嘉堡も近づくにつれ、殖民地行の英吉利人の多くは熱田丸を離れやうとして居た。夕方から私がM君と二人で甲板に出て居ると、出來るだけ船旅の終を樂まうとするやうな人達が長い板の間を往つたり來たりした。一航海の末には護謨園に從事するといふボルネオ行の技師とまだ女學校を出て間もないやうな眼鏡をかけた家庭教師とが腕を組合せて鴛鴦の番のやうに甲板を歩き廻るばかりでなく、同船した英吉利人の中では一番教育もあり、德もあり、日本人に對しても丁寧で、これから東洋への布教の途中にあるといふまだ年の若い朝鮮行の宣教師までが、ダアバンで入港の時の賭に勝つたといふ紅ら顔で、

人の好さそうな肥つた看護婦と連立つて、惱ましく魘れるやうな眼付をしながら私達の前を通過ぎるやうに成つた。宣教師から見ると、看護婦の方は年嵩なやうでもあつた。この紅ら顏な看護婦は、どうかすると髮を包むものから身に纏ふ衣裳まで一切赤づくめで、日頃『赤色』といふものに特別の興味を持つM君の畫のモデルに頼まれたこともある。佛蘭西がへりのM君の新派な肖像畫は、もつと美人にでも描いて貰ふ積りで居たらしいこのモデルには解らなかつたこともある。M君は細い觀察家だから、眼前を散歩する人達のことを私に言つて、『あの宣教師は看護婦の方から誘はれたんですね、』とか、『あの家庭教師はなか〳〵しつかりした女だ、あれでまだ肌までは許して居ないですね、あそこが歐羅巴の女だ、』とかの噂をした。姿を見かける度に誰にでも微笑んで見せるやうなのは、子供を連れた上海行の細君だ。ダアバンで年若な技師を見送つた細君は一等室の方に居るある外國人に腕を任せるやうに成つた。音樂が好きで聲の自慢な細君は子供もそつちのけに浮かれ歩いて居た。

斯うした人達の接待役として三度々々食卓を共にする會計は、M君や私のところへよくコボしに來る。

『あんまり癪に觸つたから、言つてやりました。』と會計は陸で働く同僚の氣樂さでも思出し顏に、『皆な食卓に並んで居るところで言つてやりましたよ。「私は後悔した、私は今迄英吉利を尊敬し過ぎた、英吉利人といふものはもつと禮節を重んずる立派な國民とばかり思つて居た」ッて――ネ。あのケエプ、タウンから乘込んで來た商人がありませう。あの英吉利人は皆なの前で私の說の方に贊成しちまいました。「英吉利本國の人はもう駄目です、皆なもうデカダンです、南亞弗利加の殖民地に居るものゝ方が遙かに健全です、」とさ。』

この又聞きにした南弗利加のコロニストの聲は思はずを私を微笑ませた。左樣言へば、あの商人は他の英吉利人の客を避けて、甲板の片隅に腰掛けながら獨りでよく海を眺めて居た。

ダアバンから乘つて來る十五日の船旅の間に、私はある洒落を思ひ付いた。それは惡い洒落かも知れない。しかし會計の言草ではないが、「英語の話せないものは、人間で無いと思つて居る」やうな左樣いふ殖民地行の連中の煩はしさから離れて、斯の船旅を樂むには一番好い方法だつた。何か英吉利人が話しかけるやうな場合があつても、私は自分の國の言葉で答へることにした。

「Good evening.」

「今晚は。」

斯業な調子で。

この私の惡い洒落は、不思議な反響をさへ喚起した。一等室の方に居る和蘭の領事は私の洒落を氣にして、私が挨拶した言葉の意味をK君に尋ねたとか。私は日本語を用ひることによつて、まるで眼中に人の無いやうな英吉利人の誇りを傷けた。

エトランゼエが私に話して呉れたスマトラの燈臺の灯も見えて來た。私は往きの佛蘭西船の甲板の上を思出した。あのブルタアニユ生れのドクトルが私に指して見せたのも、この燈臺の灯であつたことを思出した。その晚は良い月夜だつた。私は中央の長い甲板を通り拔けて、ずつと船の軸の方までも水のやうな光を浴びに行つた。月夜ほど海上に神秘な寂寞な感じを與へるものは無い。暗い海は波の上だけ照つて、長く一つところを見て居られないほど物凄い。夢のやうな夜の世界はそこゝに浮かれ歩く人の

影を映して見せる。ある影は六度抱擁したなぞと言つて話して忌々しさうに笑ふ見張番の水夫もある。艫の方の甲板へ引返して見るとM君や會計が浮世話に耽つて居る。べと〳〵して熱苦しい潮風に吹かれながら、私達は眠り難い夏の夜を遲くまで甲板の上に送つた。

十三

新嘉堡まで辿り着いた。滴るやうな鮮緑に包まれた港の入口が、島々の眺望が、早や私の眼にある。私は二度も赤道を越え亞弗利加を遠廻りして漸く海上の本街道へ出て行つたやうな氣がした。往きの船旅で見て行つた波止場の岸、赤黒い倉庫の建物の光景などがもう一度私の前に展けて來た。熱田丸へ漕ぎ寄せる土人の輕いカノオは、あだかも私の方へ歸つて來る三年前の記憶そのまゝであつた。

「往きに見て行つた新嘉堡はあまり感心しませんでしたよ。何だか火事場の燒跡でも歩くやうな氣がしました。」

と私がM君に言つて見ると、

「左樣ですかなあ、新嘉堡はなか〳〵好うござんすぜ。好い緑はあるし、色彩は鮮明だし、ほんとに熱帶地の港らしい感じがありますぜ。」

「もう一度よく見て行くんですね。」

斯樣な話をして私達は上陸を急いだ。

港内には特にこの戰時で警備の任に當つて居る日本の海軍の船があり、波止場へ上ると英吉利人や支

那人やマレエ人に混つて歩き廻つて居る同胞がある。ケエプ、タウンやダアバンを經てこの港へ來ると、船から上つたばかりでもうこゝまで及んで來て居る自分の國の勢力が感じられる。陸上の消息に饑えて行つた私達は何よりも先づ新聞を買つて、北海の海戰、キッチナア將軍の死などを確めた。まち〱の噂があつたヹルダンの戰爭も、新嘉堡まで來て初めて眞實のことが分つた。

一緒に上陸を約したK君夫婦と連立つて、間もなく私達は支那風の家屋を日本の領事館に宛てたその靜かな屋根の下に居た。窓にアカシヤの茂つた博物館の建物の內にも居た。K君夫婦には海岸に近いごちや〱とした町の角で別れたが、その邊にはシヤムの土人、フイリッピン人、マレエ人、支那人、それから何程の人種が入り亂れて居るかと思はれる程、相異なつた風俗と色彩とが私の眼についた。

「海岸の並木の方へ行かう。」

とM君を誘つて行く途中で、私はめづらしく日本の駒下駄の音を聞きつけた。あのカラコロ、カラコロいふ音を實に私は何年振りで聞いたらうとさへ思つた。

M君に聞けば青龍樹といふ名のある熱帶的な並木の繁り續いたあたりには、樂しい蔭があつた。私はある青草の上を擇んだ。シヤムの土人が二三人休んで居る側を擇んだ。M君と二人でそこに足を投出した。

「M君、今日の博物館もなか〱面白かつたね。マレエの土人の造つたものには驚いた。あんなにわれ〱の國の意匠に近いものがあらうとは思はなかつた。」

「船の形なぞはそつくりでしたね。」

「土人の人形で、刀を腰に差したのが有りましたぜ。よつぽどわれ〳〵は南洋の方に緣故が有るんですね。」

休み〳〵話した。

私は傍に居るシヤム人の年とつた女や孫らしい二人の娘達の風俗を眺め、それらの人達が身に纒ふ赤い模樣のある布を眺め、腰巻を眺め、甘さうに食ふ檳榔樹の實なぞを眺めて、自分の好奇心をそゝられたばかりでなく、つい近くの並木の蔭で支那人が剝いて賣つて居るアナヽスや、桃に似て肌の白いめづらしい果實を自分でも味つて見たかつた。

「あんなところで賣つてるやうな物は、何だか汚らしい。」

とM君は顏を澁めて、笑ひながら見て居た。私の好奇心は唯それを見ただけでは承知しなかつた。行つて屋臺店の前に立つと、支那人は鹽と唐辛の入つた汚い皿と、上手に剝いた果實とを私に出して呉れた。

「M君。」

と私は呼んで、氣味惡るがる連の手にアナヽスを分けた。

「人の食ふやうなものは何でも食へるよ。」

「でも、あの鹽を附ける氣には成れない。」

私達は斯樣な話をして笑ひながら味つた。

M君はマレエ人の腰に纒ふやうな、模樣のある布地を買つて行きたいと言つて、支那人の町の方へ私

を誘つた。途中に、路傍の並木の陰で『へぎ』を直接に土の上に敷き、米の飯を盛り、カレエ粉の汁らしいものを掛けて賣る大道店があつた。土人の客はそれを手掴みでやつて居た。

『序に、あれも食つて見たら奈何です。』

とM君は私に戯れて言つた。

故國を見る前に、私は早やこの港町でかず〳〵の日本的なものを見つけて行くことが出來た。すつかり國の風俗で町を歩いて居る二三の女の子供にも逢つた。その中の一番幼いのは腰に巾着をさへ下げて居た。商家の密集した支那人の街から逃れ出るやうにして、息のつまるほど熱した空氣の中を、私達は海岸へと急いだ。日ざかりの知らない裏町も、樹蔭のある海岸も、賭博に耽り晝寢を貪るシャム人の側も、十七日續けて海に暮した私達にはすべてが懐かしかつた。

やがて私達は午後の三時頃迄も食ひはぐれた晝食をしたゝめる爲に、日本の蕎麥屋のあるやうな町を人に敎えられて行つた。そこは船着場のいづこにも見出さるゝやうな場處で、その隈界には日本の煙草、吳服、下駄、其他の雜貨を鬻ぐ店の外に、御嶽敎會と按摩の看板を掲げた家などが眼についた。同じやうに軒を連ねた家々の窗にはいくつかの籐椅子とめりんすの座蒲團とが見出さるる。浴衣に細帶をしめ髪を束ねたやうな同胞の女が家の外に集つて、往來の泥溝を淩つて居るのもあつた。晝間の三味線の音は陰氣な町の空氣を通して何處からともなく響き傳はつて來て居た。

私達は歩き廻つた。そしてそれが國から來たものとあれば、好いものとなく、惡いものとなく、自分等の注意を引いた。支那人の引く人力車に乗つて、もう一度海岸に續く青龍樹の並木の下あたりまで引

返して行つた頃は、まだ日は暮れなかつた。自働車を驅つて樹陰へ涼しさを納れに來る支那の良家の娘らしい人達もあつた。熱帶地らしい港町はその夕方から蘇生るかのやうにも見えた。波止場へ行く車の上で、蟲の聲をも聞きつけた。荷積、荷揚の音のかしましく耳にひゞく船まで歸つて來ると、私の胸は數限りもない種々雜多な印象で滿たされて居た。碇泊の夜は盜賊を恐れて甲板に添ふ船室の窓々を堅く閉したから、とても蒸暑い船床の上では眠られなかつた。私は喫煙室の方で横に成つて一晩中續くかと思はるやうな貨物の揚卸しの音を聞いた。

十四

翌朝に成つて見ると、ボルネオ行の技師、家庭教師とその妹、紅ら顏の看護婦なぞは既に船を去つて居た。入れ替りに日本人や支那人の客が乘込んで來た。新嘉坡から一緒に成つた同胞の男女は主に護謨園の連中だつた。私の周圍は早や國の方の言葉、挨拶、話し聲、笑ひ聲、甲板の上を踏む女の疊付きの下駄の音なぞで滿たされた。熱田丸はこれらの新しい客を乘せて午前の八時頃に港を出て行つた。一晝夜に私は三百三十哩を乘つて行つた。北緯十度三十五分、東經三十度三十七分といふあたりへかゝる頃は船は一層速力を加へた。見たばかりでも眼の眩むやうな激しい日光の射した甲板へは、どうかすると涼しい驟雨が來た。太陽を崇拜する回々教、享樂と肉欲との國、明日のことを考へないといふマレエ人の生活――それらのものは實にこの强烈な光と熱との中にあることが想像せらるゝ。

新嘉坡を出て三日目の朝のことであつた。朝飯を濟ました後、私は船尾の甲板の方へ行つた。水深を

測量するために欄の上に装置されてある器械は相變らず獨りでくる〳〵廻つて居た。私はその前に立つて、故國を指して歸つて行く悄然とした自分の姿を胸に描いて見た。十日ばかりの後には早や故國を見ることが出來るその自分の心の期待と不安とを思つて見た。際涯の無い藍色の海に、遠く近く碎ける白い波に、船が殘して行く青い泡と白い泡とそれからずつと向ふの方まで光つて見える一筋の水尾とに、獨りで私は艫から見入つて立つて居るその自分の心を思つて見た。

私は船具の多い艫の甲板のあたりを一廻りした。階上の病室の方へ通ふ船梯子の下あたりへ出た。丁度向ふの通風筒の側を廻つて私の方へやつて來るエトランゼエに逢つた。

「大分賑かに成りましたね。」

それが私の側へ來て立つた時のエトランゼエの挨拶だつた。

三年の間一日も忘れることの出來なかつた國の方を思出させるやうなものが、今は早や私の直ぐ眼前にある。黑いものづくめの巴里風俗を見慣れて來た眼には、一切模樣の無いものは無いやうな女の兒の長い袖や、帶や、子守として附いて居る女中の赤い襷までが眼につく。子供の眼を悅ばすやうな幼年雜報の美しい表紙すら見慣れて來た質素なものとは違ふ。大きな束髮も、帽子を冠る國には一寸無かつたものだ。浴衣がけて籐椅子の上に横に成つて居る女の素足を見るのも殊にめづらしい。どうかすると、それにはみだらな感じをさへ伴ふ。あちこちに不規則に置並べてある籐椅子の下には、客の去つた後と見えて、ビイルの空罎やら、密柑の皮やらが取散してある。

「汽笛一聲、

新橋を、
　早やわが汽車は
　離れたり──」
無邪氣な子守はこの唱歌を歌ひながら、女の兒の手を引いて甲板を歩き廻つた。
「君の國の歌だ。」
とエトランゼエは私の肩を叩いて言つた。
私は斯うした淺薄なメロディで自分の國の唱歌を代表させたくなかつた。私は何とも言つて見やうの無いやうな氣がして、唯默つて居た。
長い沈默がエトランゼエと私の間に續いた。私にはこの沈默が物を言ふより辛かつた。私は甲板の欄に近く行かうとすると、エトランゼエも一緒に隨いて來て、復たしばらく二人で默つて海を眺めて居た。
「僕は冷いかねえ。」
とエトランゼエが言出した。
「別に君が冷いとも思はない。」私は他に言ひ樣がなかつた。
「僕はこれで大分君の國の人達に逢つた。海から歸つて行く君の國の人で、左樣話の合はないやうな人は無かつた。一體、君の國の人はあまり自分を知らなさ過ぎる。海へ出て來て皆な眼を開けて歸る。見給へ、その證據には一人として滿足して歸つたものは無い。絕望して自分の國を咒ふか、あきらめて默つてしまふか、さもなければもう何事も爲る氣がなくなつて隱遁するかだ。」

「自分の國を思へばこそ左樣だよ。冷淡なものなら、咒ふ氣にも成らない。隠遁もしない。僕に言はせると、左樣いふ人達こそ愛國者だ。」

「でも、君、愛國心なんてものは寢言だと言つて歸る人が多いぜ。」

「君には國が無いのかね。」

「行く先が僕の國さ――到るところが僕の國さ――だから、僕は君に訊いてるぢやないか。僕は冷いかつて言つてるぢやないか。疑ぐつて言ふ譯ぢやないが、君は僕を煩いとでも思つて來たのかい。」

「君もまた妙なことを言ふねえ。」

「試みに僕から離れて見給へ。それが君に出來たら、えらい。君は僕から離れたつもりでも、僕はもう絶えず君に働いて居る。一旦海の洗禮を受けたものが、どうして心に革命を引起さないで濟むものか。」

「一體、君は僕を奈何しやうと言ふんだねえ。」

「だからさ、まあ左樣むつかしいことは言はずに、長く心安くしやうぢやないか。友達として旅を續けやうぢやないか。折角斯うして君とは御馴染に成つたものだ……」

「そりや僕の方でも願ふところだ。」

「左樣言へば、大變子供が泣出したね。」

「なんでも新嘉堡の方から、お母さんが國の方へ連れて歸る女の兒だ。妹の方はさうでもないが、姉さんの方が彼樣して泣くんだ。昨夜なぞは一晩中泣きつゞけた。恐ろしい疳性な兒だね。彼樣泣かれたんぢやお母さんが堪らない。それに君、あの兒は子守の背中でなくつちや、どうしても眠らない。」

「たしかにあの聲は、君の國の子供の泣聲だね。」

護謨園の連中が喫煙室の方から出て來て、中には私の傍へ話しかけに來たので、エトランゼエは別れて行つた。

新嘉堡以來、われ〳〵の甲板は長崎とか仙臺とか栃木とかの方へ歸つて行く同胞の客で主なる部分を占められるやうに成つた。居殘る僅かの英吉利人は隅の方へちいさくなつてしまつた。それにしても私はあの眼さへ覺ませば泣き續けて居るやうな氣むづかしい女の兒の泣聲を――子守の背中でなければ夜も寢つかないといふあの女の兒の泣聲を――エトランゼエに聞かせたくないと思つたばかりでなく、東洋への初旅らしい年若な朝鮮行の宣教師にも、南亞弗利加の商人にも聞かせたくないと思つた。

英吉利人の女の客では、子供を連れた細君のみが二等室の方に殘つた。多恨な細君はめつたに甲板の上へ顔を見せずに、獨りで靜かな食堂の方に居て、好きな洋琴のお浚ひに餘念もなかつた。どうかすると遣る瀬のないやうな細君の獨りで歌ふ聲が自分で合ひの手に彈く洋琴の音に和して、高く震へるやうに響き傳はつて來た。それまで甲板の上では、家族連れの護謨園の連中が無邪氣な鐵道唱歌などを子供に歌つて聞かせて居たが、左様した國の方の素人の聲はすつかりあの細君の強い調子に沈默させられてしまつた。

十五

香港まで歸つて來た。往きの旅の記憶は一層新しく私の胸に蘇つた。凍雨が來ては復た止むやうな

黄綠な海、香港の入口らしい幾多の島嶼、その一つに立つ白い燈臺の眺望などが、もう一度私の前に展けて來た。低く垂下つて來る雲又た雲の群は海上に遠く近く容を顯す島と島の間を往つたり來たりして居た。

見覺えのある水道に添ふて船は港の方へ入つて行つた。海まで迫つて來て居る大陸的な地勢は、あだかも山間に分け入るの思ひをさせる。樹木といふものを見ることは出來ないが若草の綠に包まれた連山の光景を、私は甲板の上に立ちながら望んで行くことが出來た。ある水道の曲に、山の傾斜の裾のところに、病院らしい大きな白い建築物をも望んで通つた。水道の中にはところ〳〵に旗印を立てゝ、水雷の浮流する位置を示した場所もあつた。その邊で私の眼についたものは、近い山から山を往來するさかんな雲の群だ。夕立を帶びて風の涼しい水蒸氣の多い空氣の中に、香港の港が次第に近く見えて來た。私の周圍には立つて港を望む人ばかりであつた。例の泣き易い女の兒もその時は着物を着更へさせて貰ひ、赤いリボンなぞを髮にかけて、おとなしく母親に連れられて居た。靜かに水道を動いて行つた船が港に入つた頃は、早や陸上に燈火を望んだ。港はまだ暮れきらない頃だつた。支那風の帆檣が群立する間から夕方の煙の立ち登るのを望み見たばかりでも、身は既に東洋にあることを感じた。

入港の時間がすこし遲れたとかで、われ〳〵は其晩上陸を許されなかつた。港の役人が來て外國人の乘客は皆な旅劵を調べられたが、日本人だけは其事もなしに濟んだ。神經質な英國の官憲は斯うして印度人の反逆を監視するのだとも聞いた。現に熱田丸にも一人の印度人の客があつて、その人は大分皆なの眼を引いた。私は朝鮮行の宣教師の手に、「印度の覺醒」と題した新刊書のあつたことを思出した。そ

の中にはあの詩人タゴオルばかりでなく、私などの名前を聞いたことも無い幾多の現代の印度人に就いて書いてあつたことを思出した。其晩は貨物の揚卸しの響もなく、入込んで來る港の人足や商人の雜音もなくて、それだけでも氣持が好かつた。低氣壓が過ぎ去つた後とかで、港口に碇泊した船へは凉しい夜風が沖合の方から通つて來た。湖水のやうな水に映る無數の燈火を前に、私はK君の家族やM君等と斯の航海中での最も靜かな夜を送つた。

朝になつて見ると、われ／＼の船は大阪商船會社の濠洲行の汽船の近くに移つて居た。まさに港を出て行かうとする郵船會社の汽船もあつた。その港に見る七八艘の大きな汽船で、大きな煙筒で、自分の國のもので無いものは無かつた。斯の戰時に際する日本の船舶の活動も思ひやらるゝ。朝の五時半頃からわれ／＼の船ではもうさかんな貨物の揚卸しが始まつた。本甲板の上あたりは器械的な荷積の裝置の響や、支那人の人足の呼び騷ぐ聲で耳も遠くなるほどであつた。

山のやうに茶箱などの積まれた波止場を通り拔けて私はM君と一緒にランチの出るところへ急いだ。

「往きにはこの香港あたりから、そろ／＼暑く成りかけて、一日町を歩いたらカラが綿のやうに成つちまいました。香港は蒸暑いところだと思ひましたよ。でも君、今度は暑い方から來たんだからそれほど驚きませんね。」

と私はM君に話した。

私達二人は海岸の通りから女王ヰクトリアの立像のあるあたりを歩いて見た。三年の間を置いて「時」の歩いて行つた足跡が斯の曾遊の地にも認められる。もうあの辮髮から散髮に移つたばかりの時のやう

な長い髮を振亂して、大童で俥を引いて行く支那人の車夫なぞは一人も町に見かけなかつた。

丘上の公園でしばらく時を送つた。棕櫚、椰子、其他の樹木が繁つたあたりの石の上に二人して腰掛けた。風雨、霜雪、日光、寒暑、乾濕の度を異にした遠い異郷の方から歸つて來て見ると、私達は自分の國の方で見るやうな黒ずんだ樹木の緑を早やこの香港に見つけることが出來た。

「あゝ蟬が鳴いて居ますぜ。久し振りで蟬の聲などを聞いた。」

と、私達は言合つた。あそこに齒朶が生えて居た、こゝに蟻が這つて居た、そんなことにまで私達は子供のやうに騷いだ。

公園の出口に寫眞屋を出して居る國の方の人に教へられて、戀しい食物の味へるといふ町の方へと出掛けて行つて見た。やがて私達は新嘉堡の方で見て來たと同じやうな陰氣な町の中を歩き廻つた。鮨の一つも食つて見たいと思へば、どうしても左樣いふ町を訪ねなければ成らなかつた。港へ來て日本人の町と言へば、必とまた左樣いふ場所を敎へられた。そこは南淸の一部とも英領の殖民地とも思はれないほど、日本の港町や船着場にあるやうなものが有る。暖簾がある。格子窓がある。二階の欄から乾した着物がある。夜と晝とを取違へて居るやうなその界隈へは手持無沙汰な日の光が射し入つて居る。何もかも飽き疲れて、ひつそりとして、欠びをして居るやうにも見える。思はしい晝食にも有付けなかつた。澤山な蠅は來て物食ふ私達に取付いた。もう少しで私は丼の中の飯と一緒に蠅の一つを呑込んでしまふところでつた。斯うした晝眠つた世界を離れて支那町の方へ出ると、そこにはまた熱い日ざかりの空氣の中を往きかう人々の雜沓があつた。

私はM君に言つて見た。

「この前、上海や香港の町を歩いて見た時は、左樣思ひました、支那には斯樣に古いものがある、いくら新しい人が生れて來たつて斯のまゝ古いものを奈何することが出來やうつて。左樣思ふと、支那の青年が氣の毒に成りましたつけ。今度來て見ると、大分支那も變つて來たやうですね。」

「それに香港は廣東人が多い。男でも女でも活氣がありますよ。」

とM君が答へた。

三年前の寄港の折には、假令有つても眼につかなかつたやうな支那風のものが――曾ては自分等の先祖が憧憬し嘆美して止まなかつた支那風のものが私の眼についた。そればかりでは無い、三年の月日の間に進んで來た若い支那が何となく私の眼についた。私は殊にそれを支那の婦人に見つけた。前髮を分けかゞやいた眼付をして深窓から出て來た若草のやうな娘を町に見かけることは、たしかに多くなつたやうだ。

「支那は好い。國の方で思つたやうなものぢやない。殊に支那の女は好い。」

私はM君に聞えよがしにそれを言つた。M君は佛蘭西あたりの女に比べて特に支那の女を褒めるほどの理由も見當らないといふ顏付をして居たので。尤も私は歐羅巴に居る頃から支那を好くやうに成つた。今度香港へ來て見て一層その心を增した。隣國にあるものを好くやうに成つたのは海の外へ出て來た旅の賜物の一つだ。唯私はこの愛好心が單なる趣味に墮ちることを恐れる。

涼しい風の來る海岸の通りをランチの出るところまで引返して行つた頃は大分二人とも歩き廻つた後

だつた。私達は疲れて海岸の小屋に腰掛けた。その屋根の下から直ぐ岸のところまで來て居る潮を、動いて行く帆を、櫓の長い支那風の小舟を、日の丸の旗を掲げて通るランチを、其他數へきれないほどごちや／＼とした港内の眺めを賞して居た。その海岸の小屋のところで艀を待つ五六人の支那の青年に逢つた。その中の一人、白い涼しさうな支那服を着け、パラソルを手にした若い支那の女が混つて居た。さう酷く羞を含むでもなく、さうかと言つて輕燥な容子もなく、連を見る眼付なぞは怜悧でいき／＼として居た。連立つ青年の一人の若い細君らしくも思はれたが、髮の束ね方なぞも所謂束髮に支那風を加味したやうなもので、それに歐羅巴風の女の靴を穿いて居た。手には腕輪も嵌めて居た。この人は私達の注意を引いたばかりでなく、小屋に休んで居る多くの支那人の視線をも集めて居たらしかつた。

「支那の女の着物には、靴も似合ひますね。」

と私はM君にさゝやいたが、東洋風のものと西洋風なものとの調和が自分等の眼前に居た若い支那の婦人に左樣をかしくないのも不思議だつた。私はまた往きの旅で見て行つた支那人の多くが鈍いうるんだ眼をして居たことを思ひ出し、それを眼前に見る人達に思ひ較べて、すくなくも若い支那が自分等ごときの通りすがりの旅客の眼にすら映ずるやうに成つたことを想つて見た。

ランチを待つ間、私はM君と二人で小屋の前をも歩いて見た。一夜の碇泊の後には斯の港を辭し去らうとして居た私達の前には、船着場で多く見かけるやうな土地の人達も通つた。油で支那風な髮をかため、汗染みた薄いものを着て、背の肌へ直接に子供を負つて居るやうな、船着場の人足の嬶らしい女も通つた。

「あなたの好きな支那の女が通りますぜ。」

と言つてM君は私をいやがらせた。

間もなく私達はランチで熱田丸の方へ歸つて行つた。私としては、往きの旅で逢つたI總領事、ある會社のW君などをこの香港に見ることの出來ないのが殘念だつた。

「M君、今日も大分いろ〳〵なものを見て來ましたね。支那にあるものは妙に西洋から來たものと調和するやうぢやありませんか。衣、食、住――すべて。」

「そこが大陸的なところでせう。支那人の生活は餘程歐羅巴人に近い。」

「ホラ、巴里や倫敦に支那料理がありましたね。支那の料理なら直ぐ彼樣して歐羅巴風のメニユウに上せられる。新嘉堡で見て來た日本の領事館だつて、あれは支那の家屋でせう。あれなら君、洋服を着て椅子に腰掛けて少しも可笑しくない。同じ東洋で、隣の國にはこれほどの調和があつて、われ〳〵ばかり不調和を感ずるのは奈何いふもんでせう。日本の部屋に油繪の額を掛けて見たまへ、どうしたつて君、調和しないからね……一體、支那人の生活には外國から來たものでも何でも包容するやうな大きい力があるんでせうか。」

「さあねえ……なにしろ、われ〳〵の國は島國でからに、全く特殊な發達をしたんですね……」

M君と私との間には斯うした旅の話が盡きなかつた。K君も町の方から歸つて來て互に一日の見聞を持寄る頃は、最早日暮に近かつた。港の空には夕方の雲の群が低く垂下つて來た。

十六

朝の出帆は意外な出來事のために延びた。熱田丸の若い水夫が死んだ。熱い海上を病み續けて來たその若い水夫は脚氣衝心のために仆れたといふ。年は二十とか聞いた。よく藥の罎を提げ重さうに脚を引きながら上甲板の病室の方へ通つて居た蒼ざめた顏付の男のことが直ぐと私の胸に浮んだ。港へ着いてから死んだ水夫の遺骸は、水葬にしないで、陸上の方へ送られるとのことでもあつた。

パセチツクな光景を見やうとして、時々私は左舷の甲板の方へ急いで行つた。欄のところから下瞰すと、眼の下は直ぐ棧橋で、荷揚げの濟んだ跡が綺麗に掃除してある。水夫の遺骸はそこを通るらしい。棺を送るためのランチも來て、棧橋の端のところに横着けに成つて居る。誰一人出棺の時間を知つて居るやうな人には出逢はなかつた。M君の姿をすら見なかつた。

復た私が左舷の方へ廻つて行つて見た時は、ランチはもう動いた後だつた。欄に近く立つて沈思するやうなエトランゼエのみを見かけた。

「惜しいことをした。もう少し早いと君も間に合つた。今々棺がこの下を通つた。」

とエトランゼエは私に話して聞かせた。船員一同、船長から火夫まで、若い水夫の死を見送つたとも話した。

「しかし、可哀そうなものだね。僕も若い時分に斯樣な話を聞くと、涙が出て來て困つた。今ぢやもう斯樣な話を聞いたぐらゐで泣けなくなつた。」

と私は言つて、棺の通過ぎた後の棧橋の上を眺めた。水夫の遺骸が送られ、葬られるといふ香港の町の方を見ると、煙ともつかず、霧ともつかないやうな水蒸氣の群が向ふの山腹を蟲のやうに匍つて居た。どうかすると、往きの旅に支那風の輿に乘つて登つて行つたあの1總領事の山莊のあるあたりが濃い水蒸氣に隱れて見えなくなるほど。

やゝしばらく默つてそこに立つて居た後、エトランゼエが私に言つた。

「上海まで行けば、君ともお別れだ。」

「左樣かね。上海でお別れかね。君も友達の少なさうな人だね。」

「僕は左樣澤山の人を知りたくない。今迄にもう逢ひ過ぎたやうな氣もする。旅で逢ふ人は、君、妙なものさね。直ぐと懇意に成るかはりには、一度別れてしまつたら音も沙汰も無い――」

「それは僕も同感だ。」

斯うした言葉をかはしてエトランゼエは私の側を離れて行つた。

午前十時頃になつて熱田丸は錨を拔いた。揭示板には船長の名で、短命な水夫のために有志の乘客から贈られた義捐金の禮が出て居た。私はその勞を執つたものが朝鮮行の宣教師であることをもその揭示板で讀んだ。左樣言へば、あの年若な布敎者が改まつた顏付で、例のカトリツクの僧服に似たやうなものを着け、皿を手にしながら一等室の方から戾つて來たのは、その集金のためであつたといふことも分つた。

香港からは、われ〳〵の甲板では更に同胞の客を加へた。香港で手廣く商賣するといふ日本人に連れ

られて、日本へ觀光のために出掛けて行く二三の支那の商人もあつた。M君と私と二人だけで占領して居た船室へも一人の客が入込んで來た。この人は礦山事業のために長いこと南淸地方に雇はれて居たとかで、好んで無用の書を讀むと言つたやうな、樸訥な老書生たる風采の同胞だつた。

新嘉堡以來、自分の夢を破られるやうな氣の仕出した私は、香港を出發して一層その心を痛切に感ずるやうに成つて行つた。日本――三年の異鄕の旅にある間、一日も私の心から離れることのなかつた日本――その故國の方へ近づけば近づくほど、遠く旅窓で私の胸に描いたものは美しい夢のやうに消えて行きかけた。信じがたいほどの孤獨と無刺激とが左樣した美しい夢を生んだのかと疑はせるやうに成つて行きかけた。愛あるものゝ胸に幻滅ほど悲しいものは無い。そしてその愛が切なれば切なるだけ、餘計に悲みを增して來る。私は早やその矛盾に陷りかけた。と言つて、それを奈何することも出來なかつた。

斯ういふ時には、きまりであのエトランゼエのことが私の胸に來る。何時の間にか私の胸に忍び入る。私の前へ來て、腰掛けて、非常に冷靜な、しかも誘惑するやうな眼付で私の方を見て、「僕は冷いかね」などと言ひかけられるやうな氣がして來る。

「君は僕を弄ぶつもりか。」

斯樣な會話をさへ私は獨りで自分の胸に描いて見る。

しかし、私は斯の心中の戰ひを、自分の胸の底に秘めて、もう一度懷かしい故國の方へ歸つて行つて見たい思つた。

「失禮な。日本の婦人を何と思つてるんだらう。」

といふ聲が私の直ぐ側で起つた。私の沈思は斯の聲で破られた。香港から乘組んで來たある商人の婦人が――最近に夫を失つて歸國の途にあるといふ女ざかりの未亡人が甲板に皆な出て居るところへ來て、そんなことを言つた。

「あんな西洋人には、相手に成らない方が可い。」

と復たその女學校出らしい未亡人が言つた。

「あの西洋人は變な人です。彼方へうろ〳〵是方へうろ〳〵してます。」

と新嘉堡から來た護謨山の連中の一人で、年の割合に娘らしいところの殘つた色の淺黒い女が、長い籐椅子に素足を投出しながら言つた。

われ〳〵の甲板には、どうかして日本の女に近づかう〳〵として居る一人の和蘭人も乘組んで來て居た。何を職業として居るかもよく分らないやうな斯の和蘭人は、私に向つては日本のことを褒め、これから日本に行き、出來るだけ長く住み、日本の言葉を學びたいといふやうな話をしたり、しきりに英吉利人の惡口を言つたりして、日本人仲間の船客の方へ、殊に女の客の方へと寄つて來た。終には、女ばかりの船室の前へ行つて長く佇立むやうに成つた。

「私の部屋の前へも來て立つてるぢや有りませんか。失禮な。私はあの西洋人に酷く言つて懲してやりましたよ。相手に成るやうな人が有るから惡いんです。」

斯う未亡人は復たその甲板に出て居ない人に當てつけがましく言つた。われ〳〵が同船の客の中には、

新嘉堡で見送りの西洋人と泣別れて乘つて來た極く容貌の醜い同胞の女も一人混つて居た。

私は斯の光景を見ると、復た一つ自分の夢を破られるやうなことが起つて來たといふ氣もした。私は、船醉に惱んでいぎたなく喫煙室に横に成つて居る同胞の女の寢顏からあらゆるセンシユアルな心の秘密を讀まうとするやうなあの和蘭人のことを想像するにも堪えなかつた。日本の言葉といへば『腹切』と『柔術』と『花魁』と『藝者』と『吉原』としか知らないやうな歐羅巴人に、日本の着物と言へば直ぐに寢卷を聯想するやうな歐羅巴人に、日本の女と言へば商家の未亡人と賣婦との見さかへもつかないやうな歐羅巴人に、私は自分の國のものを見せたくないやうな氣がした。綠色の幕のかげから女の船室をうかゞはうとする和蘭人のやうなのは勿論例外である。しかしあの和蘭人ばかりでなく、同船したすべての外國人の眼から、私は自分の國の女のあまりに華美な風俗を隱したかつた。あまりに褪めやすい色彩を隱したかつた。あまりに刺激的な意匠を隱したかつた。せめてあの香港の町々で支那の婦人に見つけて來たやうな好ましい「淸楚」を持たせたかつた。

「今見るのは、言はゞ日本のコロニストの風俗だ。本國へ行つたら、もつとずつと違つたものがある。」と私は自分で自分を言ひ慰めた。

風の凉しい甲板では明るい黄綠の海を樂んで行くことが出來た。極熱の地方を通過ぎて、季候の好い自分の國の方へ歸つて行くといふことは、それだけでも船旅の心持を變へさせた。

香港を出た翌日の午後には、濃い霧が海上に集まつて來た。われ〳〵の旅の着物は皆な酷く濡れた。甲板に置いてある籐椅子も、何もかも濡れた。しまひには、一面に水蒸氣の籠めた湖水のやうな波の上

で、餘儀なく一時停船するほどに成つた。島は多し、おまけに潮流は急なところで、進んで行くには危險だともあつた。霧の晴れるのを待つた間、甲板の片隅では牛肉を餌にして釣を垂れる水夫などもあつた。斯の停船中われ〳〵の旅情を慰めたものは、無線電信の掲示だ。私はM君と共に掲示板の前に立つて、讀んで見た。西班牙の沖で敵艇のために撃沈された滊船のことが出て居た。郵船會社の船では無いと斷つてあつたが、兎に角、日本の船だ。

「して見ると、隨分危險なところを通つて來たんですね。」

と言つて私はM君と顏を見合せた。

その掲示の中には、思ひがけない日本の方のことも出て居た。日本の西部は大雨で、所々に出水の報があるとしてあつた。唯それだけ。しかし、その短い文句が嬉しかつた。私はM君と二人で國の方の最近の消息を、その海上まで行つて漸く接し得た消息の一片を讀むことを樂んだ。

さかんな滊笛が鳴つた。船は復た動き出した。往きの船旅に、楊子江の河口を離るれば離れるほど海は明るく黄がちに、次第に透きとほるやうな青さを增して行つたが、今度はそれを逆に繰返した。もう一度、私があの楊子江から流れそゝぐおそろしい泥まじりの濁つた海を見たのは、六月の末であつた。遠く倫敦を出發した日から數へると丁度五十日目で、上海まで歸つて來た。

十七

エトランゼエは立つて濁つた水を見て居た。

黃浦江は前を流れて居た。そこは威賽公碼頭としてある上海の波止場で、往きに私の乘つて行つた佛國船の着いた波止場から見ると、河口の方へ寄つた位置にある。私は可成疲勞を感じて居たし、腹具合もすこし惡かつたし、四日の後には神戶の港に入ることを思ふと是上疲れて國の方へ行きたくなかつた。で、上海では上陸を見合せた。碇泊中の船から港のさまを眺めながら、すこし自分の身を休めて行きたいと思つた。

M君はじめ、新嘉堡や香港から乘つて來た客は其時一人も後尾の甲板に居なかつた。エトランゼエと私の外には、碇泊中の時を樂み顏な水夫等が居て、支那人が船へ賣りに來るいろ〳〵な土地の產物をひやかして居た。船へは耳の掃除をする一人の支那人も來た。丁度二つ三つ水夫の耳を濟ました後だつた。私も積重ねてある船具を後方に、籐椅子に腰掛けて、耳を一つやつて貰つた。私が胸のあたりへ白い布をかけて腰掛けて居ると、時々エトランゼエは私の側へ來た。

「耳ばかりかと思つたら、こりや髭もやつて呉れるんだ。」

と私は半分獨語のやうに言つて側に立つ支那人を見た。私は子供の時分に、油染みた櫛箱を提げてよく私の父親のところへ通つて來た男の髮結のあつたことを覺えて居る。丁度あの髮結の隱居を思出させるやうな年とつた支那人だ。鏡もなく顏を洗ふものも無いやうな場所で、支那人は私の鼻の下のあたりから剃取つた髭をそこいらの甲板の上へ彈き捨てた。先づ髭をやつて、それから耳にかゝつた。

「隨分、君も日に燒けたね。」

とエトランゼエは復た私の側へ來て言つて、口の利けないで居る私の顏や、そこに立つ支那人の爲

る態などを眺めながら立つて居た。藥指と小指の間に長い耳搔や細い剃刀を幾つとなく挿んで居た支那人は隨分丁寧に、私の耳の掃除に餘念もなかつた。眠くなるやうな午後の日は甲板の上に映つて居た。波止場の方からは荷物を揚卸しする器械の重い鎖の音が絶間なく單調に聞えて來て居た。耳搔を手にした支那人の技術の巧みさは、どうかすると私の旅の心づかひを一切忘れさせるほどにした――上海の港町を見て廻つて居るM君等のことも、いかなる三年の間の變遷と發達とを語つて居るかと思はれるやうな陸上のことも。

　見覺えのある支那風の赤黑い大きな帆はいくつとなくわれ〳〵の船の側を通過ぎつゝあつた。私は顔を濟ました後のサッパリとした心持で、エトランゼエと一緒に碇泊中らしい時を送つた。時には、その港に抑留された二艘の墺太利船の見えるところへ行つて立つた。

「でも君、上海まで來ると氣分が違ふね。獨立した自由な空氣が吸へる。寄る港も寄る港も今迄のは皆な西洋人の殖民地ばかりで厭に成つた。」

　と私が言ふと、エトランゼエは笑つて、

「上海だつて半分殖民地サ。英租界、佛蘭西租界、中央租界をヌキにして見給へ、この港から君、何が殘る。」

「まあ、眞實の獨立したものは神戸まで行かなくちや見られないかナ。」

「歸つて行つて見給へ――君の國の神戸が殖民地のやうに見えなかつたら仕合だ。」

　エトランゼエは半分私に調戲ふやうにして笑つた。

六神丸、香、線香、陶器、刺繍のしてある絹などを手にして甲板を徘徊する支那人が私達二人の側へも煩いほど勸めに來た。二日鼠の入れてある箱と、赤い布の垂れた傘を持つて來て、私達の前で小さな動物を掴み出した支那人があつた。そんな藝當を見たいとも何とも言はない私達の前へ、その支那人は掌に載せた二日鼠を突きつけた。いくらかの錢を出せば、旅の徒然が慰められるとでも言ふらしい。白い小さな動物は異様な眼を光らせてその支那人の身體をちよろ〳〵這つた。

私は眼前の鼠づかひに關はず、唯エトランゼエと二人でそこに立つて居て、

「地圖で見ると、香港と臺灣の間はいくらも離れて居ないやうだね。臺灣には僕の兄貴が居る。香港の沖を通る時に、僕は左樣思つて兄貴の居る方を眺めて來たが、臺灣は見えなかつた。」

「香港の沖から臺灣は見えないさ。」とエトランゼエが噴飯した。

「でも君、極くかすかにでも島の影が望まれるかと思つて。」

「どうして。海はいくらも見えない。いかにも遠くまでよく見えそうだが、あれで見えるのは五里四方ぐらゐのものだね。」

その時、水夫は來て私達の側に居る鼠づかひや物賣る支那人を追拂つた。

「不可。左樣入つて來ちや不可。」

水夫は手を揚げて怒鳴つた。

そこにある港の聲は土の色に濁つた冷たい感じのする水を渡つて聞えて來て居た。何程のごちや〳〵とした遠い近い物音がそこにあつたと言ふことも出來なかつた。動揺する波のつぶやき、艀の音、汽笛

なぞに混つて、時々鐵板でも投出すやうな騷がしく高い音が河口の空に響き渡つた。そればかりでは無い、新嘉堡から香港へ、香港から上海へと歸つて來るにつれ、私の耳の底にある聲が次第に判然と聞えて來るやうな氣がした。私は聞きたいと思ふ故國の聲が自分の耳の底にあるのか、それとも早やこの港にあるのか、いづれとも言ふことの出來ないやうな氣もした。

「國の方へ歸つて行つて見たら、奈樣な氣がするだらうなあ。」

と私はエトランゼエに言つた。エトランゼエが聞いても、聞かなくても、私はそれを言出さずに居られなかつた。私はエトランゼエと一緒に、眼前を流れる黃浦口の水を悄然眺めながら、胸に浮んで來る旅の心持が話したかつた。

「つく／＼僕は左樣思つて來た。自分の國を愛するのは難いことだと思つて來た——でも、僕には自分の國が矢張一番好い——國は戀しい——あの神戸へ著いたら、誰でも關はない、一番最初に逢つた人を捉まへてその人に咬り着きたやうな氣がする。力一ぱいその人を抱き締めたいやうな氣がする——今、僕はそんな氣がして。」

「まあ、これから君が歸つたら、自分の國がくつきりとよく見えるだらうよ。ほんとに浮き上つたやうによく見えるだらうよ。」

とエトランゼエは力強く私の方を見て言つた。

その時、船のボオイが私を探しに來た。

「この方がお目に懸りたいと言つて居ます。」

と言つてボオイは一枚の名刺を私に渡した。見ると上海の新聞記者としてある。私はその名刺の意味を直ぐに讀んだ。國の方で自分を待受けて居て呉れるやうなものが最早この港で待つて居たか、とさへ思つた。旅人は、旅そのものが一つの仕事であるといふだけでは許されなかつた。

「おや、これでお別れだ。」

と言つてエトランゼエは私の方へ手を差出した。

「もう君とはお別れかね。」

あわたゞしい心持で私はエトランゼエの冷い手を握つた。

それぎり私はエトランゼエを見なかつた。上海の新聞記者の外に、船まで訪ねて來て呉れた古河公司の店員にも逢つた。あの往きの旅に、一緒に李鴻章の故廟を訪ねたり、租界の公園を歩いたりした古河公司のU君は最早上海を去つたといふことをも聞いた。倫敦から乘つて來た一人旅の細君だけを置いて、其他の乘客はポツ〳〵引返して來た。旅らしい麥藁帽を冠り、英吉利製の灰色な短い脚絆を宛て、港見物の話を持つて歸つて來たM君とも一緒に成つた。

翌朝熱田丸は神戸へ向けて波止場を離れた。上海からは更に同胞の婦人の客なぞを加へた。黄浦江の河口を下る船から、私は向ふの對岸の方に支那風の家屋の白壁、草地に見る牛、それから岸邊に投網する人々なぞを數へて行くことが出來た。朝の濡れた新緑の眺めから來る快さは、國の方で見るものに近かつた。

それからの私は、復た〳〵自分の夢を破られるやうな種々なものを甲板の上に見たが、もうそんなこ

とを彼是言つて見る暇も無かつた。曾ては一切のものから離れやうとして海へ急いだ私が、曾ては捨て得るかぎりのものを捨て去つて故國に別れを告げて來た私が、曾ては愛する歴史を忘れやうとし愛する同胞を忘れやうとして日本を思出させることの多い東洋の港を假令そこが自分の國で無くても遠ざからうとしたほどの私が、曾ては傷ついた獸のやうに全く知らない國へ全く知らない世界へ全く知らない人の中へと遁れて行つた私が、丁度その正反對な心をもつて、もう一度波の上を急いで來た。

上海を離るれば離れるほど、海の色は次第に青さを增して行つた。揚子江の河口から押して來る濁流を見た眼で、その海の色を見て行くと餘計に增して行く青さを感ずる。空も次第に透きとほるやうに成つて、日本で見ると同じ青空らしく光つて來た。

「神戸へ着く晩は、皆な寢ないことにしやう。港へ入る迄は奈様に遲くなつても起きて居やう。」

氣の早い連中はまだ琉球あたりの島一つ見えないうちから、そんな申合せをするものも有つた。

海上へは蜻蜓が飛んで來るやうに成つた。そこまで乘つて行つた時は、私は實に激しい長旅の疲勞を自分の身に感ずるやうに成つた。あだかも眠くなる夜の部分を通り越すと反いて頭腦が冴えて來るやうに、私は疲れながら一層よく思考することが出來るやうな氣がして來た。私は東京の方に自分を待つ友達や親戚や子供等ばかりでなく、遠く知人の住む信濃の山の上の方までもあり〳〵と見ることが出來るやうな氣がして來た。私はまた、海へと志した曾ての自分にも勝つて、一層よく船の進路から起る青白い水晶のやうな波の渦と泡とを見て行くことが出來るやうな氣もして來た。濃い藍色の黒潮は早や私の眼前へ流れて來た。（をはり）



麥の若芽

野村愛正

一

母親が生きて居たその當時までは、雪松の家には、例へて云へば水が低き方へ流れて行くやうな、極めて平凡な幸福が滿ちて居た。或ひは殊更に幸福だとは云はれなかつたかも知れなかつた。梅の木に梅の花が咲き梅の實がなつて熟れるやうに、たゞ總てのことが當然の範圍を脫しなかつたのに過ぎなかつたかも知れなかつた。が、少くとも他人からは幸福だと羨やまれても好い、代々續いた村での地主の仲間で、隱庄（隱居庄屋の略、屋號に類するもの）さんと尊ばれて、穩やかな境遇の中に沈着き拂つてゐたのであつた。そして老人達が死んで父親の武次郎が家督を繼いでからこのかたの、殆んど二十年に近い、躍動しつゝある生活の連環がその上にあつた。――生きると云ふことが、一面から云へば人間相互の欲望や感情の相反撥しあひ、相絡みあふ中へ立交ることであるから、時には淵ともなり瀨ともなり瀧ともなるのは

止むを得ない事であつた。そしてこの些細な順當な事件を指して不幸な事だとは云はれなかつた。總かの苛立ちが夫婦を二日も睨み合ひの中に置く事があつたり、或ひは銀行の通帳の締高に著しい増減が生じたり、或時は病氣が家族を交る交る襲つたり、又ある時は他から借財をしなければならぬ程に一家の經濟が不順であつたりしたことはあつた。その折り折りの溜息や、喘ぎや、苦惱は確かに彼等夫婦をして自分達の境遇を悲しませるに充分であつたのに違ひなかつた。なだらかに引かれたと見える線にでも、仔細に檢分すれば必ず何處かに多少の顫ひは發見されるものである。たゞそれだけのことに過ぎなかつた。離れて見れば黑々と眞直に引かれた一本の線であつた。水は川から海へと、何時も靜かに注いで行つて居るのであつた。——しかし雪松が若しも然う云ふことを考へて見たことがあつたとすれば、それはずつと後の或る年齢に達した頃であつた。彼がこの悠久とした境遇に居た時は、所謂少年時代で、その生活に離別て行つた時ですらまだ自分が判然とは分つて居なかつたのであつた。

女中のおすみは雪松と一緒に彼の家で生長をした。彼女は十一の時、雪松の妹の百代の子守として彼の家へ雇はれて來てから、長い間彼の家を離れなかつた。彼女の家族としては兄がたゞ一人あつたが、年齢もずつと違つてその當時既に三十を越して居た。富造と云ふ名で跛足であつた爲めに、村の人は誰もそのほんとうの名を呼ぶ者はなかつた。富の跛足と云つて居たが遂には訛つてとんちんと呼んだ。富造も別にそれを氣に懸けるでもなく「とんちん」と呼ばれると「おい」と返事をした。放蕩無賴と云ふ

やうな男で、殆んど博奕を渡世のやうにして居た。雪松も子供の時にはとんちんは怖いものゝ一つで、自分達とは異つた人種のやうに思つてゐた。で、おすみは彼の家へ來るまでは、同じ村の薄暗い家で、たゞひとり取殘されたやうに育つてゐたのであつた。

亡くなつた雪松の母親は、おすみをまるで自分の娘のやうに可哀がつてやつた。尤もそれは子供が少なかつた爲めでもあり、彼女の境遇が不幸な爲めでもあつた。また、自分の境遇を殆んど佛に任せ切つたと云つても好い程の佛敎の歸依者であつたので、その慈悲善根の念が總ての人を愛した爲めでもあつた。が、主となる原因は彼女が持つてゐた才智の働きであつた。十一になつたばかりの子供が既に生活の苦痛を知つてゐて、少しでも主人の氣嫌を損じ無いやうにしやうと心掛ける、小刀の刄先きのやうに鋭く顫へる神經の働きであつた。母親はそれを可憐にも不愍にも思つたが、賞讃もし奬勵もした。雪松は、種々な場合に於て彼女を見習ふやうに度々母から誨へられた。彼はこの忿懣をやる爲めに、蔭では幾度も彼女を撲つたり、石を投げたり、苛めて泣かせたりした。しかし彼女は告げ口はしなかつた。

彼女は子守をしながら彼の家から小學校へ通つた。その頃彼女に對する母親の愛は絶頂に達した。ゆく〳〵は女學校へ入學させて、娘同樣に自分の家から嫁けてやる考へでゐたのであつた。最つと穿鑿をすれば、彼女の年齡が雪松と反對であれば、母親は、生長後の彼が妻君の候補者として第一に彼女をあげたかも知れないと思はれる程であつた。けれども彼女の方が彼よりも三つも年上であつた。彼女の學校の成績は何時も優等であつた。

ところが不圖した動機がもととなつて、彼女は遂に女學校へは入學せずに了つた。丁度二年學課が進

れて居た彼女が、明年は入學試驗を受けやうとする秋の頃であつた。監獄から歸つて來たばかりのとんちんが彼の家へ來て、强請(ゆすり)がましく喧ぎ立てゝ彼女の給料の前借をして行つた。然う云ふ事は以前にも度々あつた。で、彼女の給料とすれば殆んど十箇年分の前借となる位の額に達した。內密に行はれたのであつたが、頭腦を鋭敏に働かす彼女は直にその事情を知つた。そして恐しく陰欝になり考へ込むやうになつた。その上に猶も自分に被せられる主家の恩義が、子供の彼女にも餘りに重く苦しく考へられたのであらうと思はれた。いろ／＼思案の揚句、彼女は遂に決心をしたらしかつた。泣いて明日からは學校へは行かぬから、普通の女中と同じやうに野良を働かしてくれるやうにと母親へ賴んだ。母親は內心では彼女のこの素直な心持を喜びもしたが、默つて自分達に任せて置くが好いと云つて許さなかつた。彼女もその時には强ひてとは云はなかつた。

翌日から彼女の姿は學校へは見えなくなつた。家は朝は普段の通りに學校へ行く支度をして出掛けるのであつたが、學校へは行かなかつたのであつた。彼女より一級下の雪松が最初に氣が附いた。彼は道草を喰ふ爲めに何時も彼女より先きに家を出掛けるのであつたから、初めは收穫の忙しい爲めにその方へまはされて居るのだと思つて居た。けれども暫く續くので母へ窃つと告げた。母も不思議に思つて彼女に內證で驗(しら)べてみた。おすみは學校へ行くと見せかけて、收穫(とりいれ)が終るまで待つてゐられぬ畑の作物の手入れをしてゐたのであつた。そして他の生徒が歸宅する頃を見圖(みはから)つて何氣なく歸つて來てゐたのであつた。

この事實が分つた時には、母親は喜悦に泣いて彼女の希望を許した。その上猶も學業を强ひるのは、

却つて彼女に苦痛を與へるものだと云ふことが分つたからであつた。彼女は直に翌日から學校を退いた。しかしその夜一夜は、教科書や多年使ひ慣れた學校用具を抱いて床に入つて、まんじりともせずに泣き明した。母親はそれを見て更に貰ひ泣きをした。

が、依然として母親は彼女を野良仕事へは使はなかつた。以前よりも眼に見えて一層深く愛した。服裝なども常に綺麗に飾らしてゐた。事情を知らぬ人達は彼女を「孃さん」と呼んで、顏を火のやうに赤くさせることもあつた。けれども彼女は決して調子に乘つたり、傲慢におちいつたりはしなかつた。何處までも召使ひとしての謙讓の態度を失はずに、甲斐々々しく働いてゐた。

ふすみは生長して行つた。ほんとうに美しく生長して行つた。頭髮も漆のやうに黑く豐かにあつた。脊も女としては高い方であつた。やゝ長味のかつた、磨かれた白い顏には薄く赤味がさして來た。切長の、神經質的な勝氣な眼が、何時もすばやしてく顫へて居た。だん／＼肉のついて來る身體が、調子を含んで小氣味よく動いた。

母親は三十六で死んだ。武次郎は未だ三十八の男盛りであつた。母親は十六で結婚して二十に雪松を生んだ。かうした早婚はその息子の彼を恐しく早熟にした。丁度中學校の三年から四年に進級しやうとする學年試驗の前で、彼は十八であつた。が、脊も大人程に高く、上唇にぽつ／＼と濃い髯が見えかけてゐた。朝々の登校に、同じ路を歩いて行く若い女學生の姿が、ふとした途端に彼の顏を眞赤にさせることのある時代であつた。

生きる標準を失つたやうに、父親の武次郎は暫らくは惘りとして了つた。妻の死を悲しんだ事も勿論

であつたらうが、自覺的には意識をしてゐないうちに、確然と把握の意識を持つてゐた自分の永遠の同伴者が、不意に自分から離れて行つて唯一人取殘されたと云ふ戸迷つた心持であつたのであらうと思はれた。父親は母親の葬式の終つた席上で親類の者が持ち出す後妻の話を打消して、暫く考へさしてくれと云つた。別に急ぐと云ふ程のことでも無かつたので、親類の者もそのまゝにして置いた。それから半年ばかりの間は、寂しさと氣落ちの表情をして座敷の長火鉢の前に据り込んで居た。好きな漁などへも一度も出掛けなかつた。だん〳〵影が薄くなつて行くやうに思はれたが、半年經つと獅子のやうに立上つて猛然と家を飛び出して行つた。その後はめつたに歸らなかつた。半月目に一度や、甚しくなると一ケ月目に一度位歸つて來るが、三日と經たぬ内にまた出歩いた。種々の事業に手出しをして失敗を仕初めたのも、顔面にまでもその荒み方が表はれるやうになる程に激しく遊蕩をしだしたのもこの頃からであつた。以前の穩やかな長者の風は拔けて、まるで人が異つたやうに疎暴な性格となつた。

留守はおすみが主婦のやうに、そして最も忠實な召使ひとして家事の一切を握つて、妹の百代と下男の猪之吉と三人で寂しい生活を續けて居た。雪松は町の親類へ下宿してゐて中學校へ通つてゐたのであつた。彼はたまに冬の休みなどで歸宅した折りに、相抱いて床へ入りながら、泣いて訴へる百代の言葉を、矢張り泣いて答へてゐるおすみの聲の悲しい言葉を度々聞いた。彼は年齢から云つても然うあるべき筈の、激しい感傷的な印象を受けた。そして學校をやめて家へ歸つて、妹とおすみと三人で睦じく暮さうかとも思つてみた。そして父親には全然好意を持たなくなつた。父を呪ひもした。けれどもそれ以上に實行に歩を進めることは、その當時の彼には不可能なことであつた。

母親の死去の際のことであつた。彼は子供の時から自分の部屋として與へられてゐた二階の四疊半に籠つてゐて、いよ〳〵臨終だと云ふのにもかゝはらず病室へは顏を出さなかつた。迎へに來た叔母は、彼のこの行爲を目して鬼子だと罵つた。それでも猶も彼は動かなかつた。心配の餘りにすゝめに來たおすみを、憤怒の餘りに強く撲りつけた。彼は後では、それは母の死をちか〳〵と眺めて居る程に自分の悲しみは輕いものでは無かつたからだ、と自分に辯解をした。けれども後でこの事實を思ひ出すと、堪らなく寂しく悲しくなつた。自覺的にそれを罪と觀じて購はうとした爲めではなかつたし、また寂しさを紛らす爲めに何物かを求めた爲めでも無かつたが、町へ歸ると直に其處の基督教會へ通ひ初めた。母親の抱いてゐた熱烈な信仰が心の何處かへ殘されてゐたのであらうと思はれた。そして母親の死がそれを刺戟し誘引したのは事實であつた。が、彼はたゞ無意識の裡に讚美歌を唄ひ、無意識の裡に說敎を聞き祈禱をした。

翌年の早春、彼は初めて情熱的な戀を經驗した。女は敎會の女子靑年會員であつた。何かの際、男女の靑年會員のみが合同して宣敎師館で會合を開いたことがあつた。田舍で生れて其處で育つて來た彼は、その時まで然う云ふ純外國風な部屋の裝飾を見たことは無かつた。大理石の暖爐や、白と織物との二重にかゝつた窓帷や、バネのついた安樂椅子や、綺麗に刺繡をしたクッションや、白いレースを掛けた卓子や、重く垂れた海老茶色い帷幕や、磨かれた洋琴や、油繪の額や、裝飾のついた電燈の笠や、踏み心地の好い絨氈や、何に一として彼に眼新しく無い、珍しく無い、心を魅さないものは無かつた。これらのものは部屋に割合ひしてやゝ暗い電燈の光りのなかに、ぼんやりと淡く浮き出されてゐた。彼は

最初から夢幻境に入つたやうな恍惚裡に溺れてしまつた。感情がひどく感傷的になり、情緒的になつて何となく悩しかつた。

會の順序は、何處の基督教徒の會合でも同じやうに讃美歌と祈禱とによつて開會された。そして中途に茶菓が出て、會員同志の餘興が初まつた。濤が打ち寄せるやうに、漣が囁くやうに洋琴が彈奏された。豎が嗚咽するやうにヴイオリンが啼嘘いた。その間々に、嵐が凄じく吼號するやうな、女の肉體のやうにふくよかな感情を遣瀬なく唆り立てるやうな獨唱が交つた。彼の感情は煽てあげられ、小突きまはされ、細かく刻まれて、殆んど昂奮の頂上へ達した。顏は火のやうに熱く火照り、我れにもあらず泣き出したい程に甘い心持となつた。そして何を聞いて居るのだか、何を見てゐるのだか、總てが薄赤く彩られて惘りとなつて來た。

その時彼は不圖頭部を擡げて自分の視線の正面に座つてゐる女を見た。それはほんの偶然であつた。海老茶に黄と綠の浮模樣のある帷幕を背景として、二つの黑味勝の大きい瞳が火のやうに輝いて彼を瞶めてゐた。Nと云ふ女で、薔薇のやうに赤い唇を持つてゐた。以前にも屢々教會で顏を合せたことがあつたので、通り合せた路上などではお互ひに挨拶などを交す程の知りあひであつた。けれども曾つて一度も注意をして彼女を見たことも無く、勿論話をする程に親密な間柄では無かつた。年齢も彼女の方が一つか二つ位年上であつた。Nも雰圍氣に醉つたやうに仄つと顏を染めてゐる。

卒然として彼の血管は破裂しさうに思はれた。頭髮までも赤くなるやうであつた。彼は羞しさの爲めどぎまぎと混亂して、狼狽てゝ頭部を垂れた。が、彼の心はそのまゝでは滿足しなかつた。彼は怖る怖

る頭部を擡げた。彼女の視線は猶も彼の上に降り灑いでゐた。彼はまた急いで頭部を垂れた。しかし何時までも彼女の凝視は額に感じられた。

やがて雪松もだん／＼大膽になつて來た。自分にも分る程の熱情を漲らして彼女の顏を凝視した。凝視點は頸から次第に上にのぼつて、瞳に行つて止まつた。彼女も彼の凝視を感じて來たらしかつた。耳朶までも赤くして一度は顏を伏せたが、直に正面から視線を送つて來た。その眼は一層の濕みと羞とを含み、まるで媚びてゐるやうであつた。二人の視線がぴつたりと合つた時、彼女はひとやかに微笑んで見せた。彼は微笑の意味が分つたやうに思つた。そして全身を激しく戰慄さした。かう云ふことは幾回となく、會が終るまで繰返された。

この夜の會合のあつた以來、彼は丁度熱を煩つた病人のやうになつた。思ひ出が氣異ひのやうに心を惱ませ、身體を限りなく顫はせた。けれどもこの心持を女に打明けやうと試みる程彼は未だ世間へ馴れてゐなかつた。たゞ自分一人の胸に犇と抱いて、夜、突然起上つて兩手を顏にあてゝ泣き出す程に懊惱してゐるのみであつた。其後Nにも度々顏を合したが、彼女は會合のあつた夜のことは全然跡形も無かつたことのやうに、普段の通りに濟してゐた。雪松も二度とはその夜ほどの印象は受けなかつたが、一度胸に感じた情感は依然として持續けて來てゐた。そして彼から見れば既に離隔してしまつたやうに思はれる彼女の感情を喚く心は、斷えず刹那の融合を思ひ出して、却つて次第に深みへ牽き込んで行かれるやうであつた。

懊惱に懊惱を重ねながらも、漸く學年試驗だけは終つて、制服の襟に羅馬字のVの字を輝かせるやう

になつた。この安心はやがて雪松の神經を激しく虐げた。彼はかなり重症の神經衰弱にかゝつて、通學することを醫師から禁ぜられた。彼は止むを得ず四月の下旬に保養の爲めに生れた田舍の家へ歸つて來た。

二

生れた家はます〳〵寂しくなつて來てゐた。主人の武次郎は何時でも留守であつた。彼が妹の百代は、叔母が見るに見兼ねて引取つて行つてゐた。廣い家にはおすみと下男の猪之吉とが、樂しみも何も失つたやうに陰欝な顏をして殘つて居た。が、その時の雪松は家が何んなに荒廢して行かうとも問題ではなかつた。Nの居る町を離れたことは更に彼を寂しく惱ましくさせた。彼は毎日自分の部屋にばかり閉ぢ籠つてゐて、傷を受けた若鷹のやうに狂亂しながら、靈の痛む彼女の追憶や彼女に關聯した空想やに耽るのを樂しんだ。病氣はだん〳〵昂じて來る方であつた。

雪松の歸宅したことは、寂しい二人の召使ひをどんなにか悦ばしたか分らなかつた。おすみと猪之吉とは、一度失つたものを自分の掌に取返したやうに、交る交る彼の傍へ來ては離れなかつた。すべての仕事を放擲して、彼一人のことのみに熱中した。彼がうるさがれば、それを病氣のせいにして、ます〳〵接近して來た。彼は殆んど我慢がしきれ無くなつた。

それは彼の家の周圍や山々の樹々が、悉く綠の新しい衣を着け終つた五月の下旬のある夜のことであ

つた。部屋の中へ籠つて居れば、袷ばかりでも汗が滲む程暖かく、何となく全身の關節が懈く遣瀨なくなるやうであつた。彼は二階の彼の部屋でおすみに肩を揉んで貰つて居た。彼はその年齢にも似合はず、ひどく肩の凝る性であつた。殊に病氣になつてからは甚しかつた。この點と神經質な所とは母の遺傳であつた。母親は殆んど毎夜のやうにおすみに肩を揉んで貰つてゐた。彼女はまたこの母親の肩を揉む爲めに、村から村を渡つて歩く座頭（盲人）を泊めては、その肩を揉んで揉み方を敎はつた。從つて揉み方は職業としてゐる按摩にも劣らぬ程上手であつた。

三分芯の置洋燈が机の上から部屋を佗しく照して居た。雪松は初めから口を利かなかつたし、おすみも無言であつた。初夏の夜い風は山から窈つと忍んで下りて、庭園の梅や櫻の若葉に接吻し、泉水の水に一寸からかつて緋鯉を驚かし、それから彼等の居る部屋の雨戸をほと〳〵と叩いた。彼等は悄りして振返つて見た。風は薄笑ひを洩して何處かへ消えて行つた。後はたゞはた〳〵とおすみが肩を揉む音だけが際立つて響いた。永遠のやうな靜けさであつた。

三十分ばかり經つた。彼女は一寸手を休めて、苦しさうに、惱ましさうに、そして遣瀨ない情感を吐き出してしまふやうに溜息を洩した。が、また直に揉みだした。五分間ばかり經過した。突然、彼女は揉む手をやめて唏嘘を初めた。彼は驚く暇も無かつた。彼女は彼の右肩の邊りに顔を壓しつけて、身體を顫はして咽び泣いた。彼はほんとうに飛び上る程驚いてしまつた。

「何うしたんだ？　え、何うしたんだ？」

から慌しく叫んで背後へ向きかへらうとしたが、彼女の兩手が彼の上膊部を抑へてゐて動かれなかつ

た。彼女は彼の問ひには答へもせずに、殆んど彼を抱くやうにして暫く泣いて居た。それから兩袂で顔を蔽つて部屋を駈け出して行つた。

「一體、何のことだらう?」

彼は譯が分らず、一人部屋へ居殘つてゐて呟いた。若しや、と思ふ考へがあつたが、彼は急いで頭部を横に振つて振り落した。相手は、たかの知れた自分の家の女中であつた。例令空想にしろ然う云ふことを考へるのは、自分の純潔を足蹴にする樣なものだと思つた。Nに對しても死に價するだけの穢れだとも思つた。が、不思議にもおすみの顔が鮮やかに頭腦に浮んで來た。Nの血色の好い華やかな顔に較べても劣らない美しさを持つた、やゝ寂しさを含んだ白い細い顔が情感を唆つて笑つてゐた。彼はそれを幾度も振り落さうとした。けれどもすつかり振り落し得ない内に、膿んだやうにぶよ〱に病み衰えた頭腦はしん〱と痛んで、激しい苛立ちの情が彼を昏惑に導いた。彼は自分の周圍に非常な危險が近よつて來つゝあるやうな、漠然とした恐怖を感じだした。

次の夜、同じやうな事件が雪松とおすみとの間に起つた。彼女は更に一歩深く彼に切りこんで來た。顫へ顫へする涙聲が、彼の耳のすぐ傍から囁いた。彼の肉體には女の肉つきを直接感ずる程に彼女の身體が犇と壓しつけられてゐた。そして兩手は確と彼女の爲めに握られてゐた。彼は前夜からかうなることを待つてゐたやうな氣がした。自分が取返しのつかぬ處へ落ちこんで行くことを痛切に感じた。惑亂がすつかり彼を包んだ。

「出て行け!」

彼は顫へながら、皺嗄れた聲で叫んだ。その聲が自分の耳に入ると、彼は大變な失策をしたやうに思つた。同時に慘忍な、血を見ることを悦ぶやうな心となつて、彼は身體を激しく振つた。おすみは縋つてゐた手を放して疊の上に俯伏した。膝の邊りの亂れたのも構はずに、一塊の肉のやうに自分を投げ出して、狂亂して悶え顫へた。けれども泣きはしなかつた。

凄じい嫌惡の情が彼を逆上さした。雪松はおすみを散々に撲りつけるか、足蹴に掛けて踏み躙るかして、二度と身體が動かぬやうにしてやらうかと狂暴に考へた。が、それをし得ないで、狼狽てゝ立上つた。そして部屋の片隅に竦んだやうに佇立んで彼女を眺めてゐた。まるで彼女が躍りかゝつて來るのを懼れてゐるやうな格構であつた。

やゝ暫くの後、おすみは起上つた。顏は白紙のやうに眞青であつた。恥ぢしめられた爲めに歪んだ血走つた眼が、刺すやうに彼を睨んだ。その憎惡と反抗とに燃えた眼はかう云つてゐるやうであつた。

「覺えてゐろ、いゝか！　きつと一度はお前を捉へて、今お前が與へたに等しい恥辱と苦痛とを反對に與へて見せるぞ！」

彼女は歯を鳴しながら、寧ろ傲然として部屋を出て行つた。

おすみの姿が消えると、彼は直に兩手で頭部を抱えて部屋の最中へ倒れた。非常な安心と、取返しのつかぬやうな失望との入り交つた感情の激動が、痛む彼の頭腦を無慘に虐げた。彼は混亂の餘りに唸つた。

「構ふもんか！」

彼は自棄になつてから叫んだ。が、それが何を意味してゐるのだか自分にも分らなかつた。おすみへ行くことを肯定するやうな心持でもあつたやうであつた。

自分で床を敷いて彼は寢に就いた。けれども長い間眠られなかつた。長い間眼をあけて、仄つと洋燈の影の映つた天井を瞶めてゐた。非常に澤山のことを考へて居たやうであつたが、何一つとして意識となつては殘つて來なかつた。そして不圖氣が付くと、彼はふら／＼と立上つて何處かへ行かうとして居た。

「何處へ！　階下へ！」

愕然として彼は自分の心に戰いた。

だが、心は依然としておすみから離れなかつた。彼女を憫れむの情が胸一杯に込み上げて來て、彼は自分が餘りに慘酷だつたやうに思つた。愧ぢと口惜しさとの爲めに、死ぬ程に身悶えをして泣き濡れてゐる彼女の寢亂れた姿も浮んで來た。蠕動してゐる白いふくよかな肉體も見えた。彼はそれを力限りかい抱き、涙に固つた頭髮を掻きあげて、其處の小さな耳に慰めの言葉を優しく優しく囁いてやりたいやうに思つた。彼はまた惑亂した。再び起上りかけたが、狼狽てて蒲團へ嚙みついた。彼は何かしら眼に見えぬものと必死に鬪つてゐるやうに思つた。全身から汗がじと／＼と流れた。中から動いてゐる動脈の響が、はつきりと聽かれる程頭腦が激しく痛んだ。極めて切迫した、瞬間に肺臟全部の空氣を吐き出してしまはうとするやうな吐息が、口を銜いて喘ぎ喘ぎに出た。

やがて不圖また氣が付くと、何時の間にかおすみの姿がNの面影と變つて來てゐた。彼は再び理由の

分らぬ安堵と失望とを感じた。自分が救はれた、Nに對しても顏を合せることが出來るとも思つた。けれども何かしら物足らぬ焦立ちが彼の心を掻き撈つた。彼は果しなく轉輾と寢返りを打つた、

　部屋の一つの側面は褐色の壁で仕切られて居た。しかし色彩を判然と描き出すには餘りに光りの力が弱かつた。彼の視線はその壁に向つて濺がれて居た。視覺は無かつた。たゞ漫然と其處へ止まつてゐたのであつた。心は惱しく閉されて、瞬つた眼が空を瞶めてゐるのであつた。彼は強ひてNのことを思ひ續けて見た。かう云ふ靈の苦惱が空間を超越して、せめては夢になりとも彼女の心に感應しないものかしらと云つたやうなことも考へた。彼はまた頭腦と胸とに刻まれるやうな痛みを感じた。

　何う云ふ理由と云ふのでも無く、不意に視覺が甦つて來て、彼は偶然に壁を見た。二つの焦點がその薄黑い面に明らかに現はれてゐた。おすみが部屋を出る時に彼を睨んだ。その刺すやうな眼であつた。彼の神經はぎくりと戰いた。彼は一層注意深く焦點を瞶めた。

　紛れも無くおすみの眼であつた。その眼は徐々と運動を起して、次第に大きさを增して來た。彼は酷烈なる恐怖を感じだした。が、吸ひつけられたやうに視線を動かさなかつた。動かすことが出來なかつたのであつた。

　よく注意をすると、二つの眼の背後には、極めて濃い不快な陰翳が生物が蹲つたやうに漂つてゐた。そしてその陰翳は彼の凝視が續くに從つて、ほんとうに生物となつてだんだん動いて來た。遂には全然姿を作つて壁から現はれた。手足一杯に針のやうな黑い毛を生した、醜惡無慘な一匹の蜘蛛であつた。蜘蛛がおすみの眼を持つてゐるのであつた。やがて蜘蛛は長い手足を部屋一杯に延ばして蹲つた。眼が

丁度彼の眞上に來て、乘りかゝるやうにして上から凝然と見下した。何時までも何時までも見下してゐた。彼は怖毛を顫つて竦んだ。肌膚が悉く鳥膚立つた。彼は恐怖の餘りに聲をあげて唸つた。

幻影は忽ち消え失せた。けれども彼にはそれが幻影だとは思はれなかつた。眞實然う云ふものが居たやうであつた。何處か其處らへ一時姿を隱したもの、やうであつた。彼は寢たまゝ頭部を擡げて姿を探り求めた。暗い部屋の片隅に、今度は小さな小さな二つの眼があつた。おすみの眼であつた。彼は自分の作つた氣持の爲めに水を浴びたやうに竦つと顫へ上つて了つた。頭部からすつぼりと蒲團を被つた。が、彼女の眼だけは依然としてその視覺の中にあつた。彼は起上つて無闇に洋燈の芯を捩ぢあげた。

その後も彼は度々蜘蛛の幻影を見た。彼は靈を顫はせて怖れた。そして自分の部屋に籠つてゐても、天井や自分の座つてゐる床板や疊やを透して、凝乎と自分を監視してゐる慘忍な顫ひを帶びた、病的な切長の瞳を忘れることは出來なかつた。またその瞳はほんとうに執拗に、臺處や茶の間にゐて、油斷なく彼を追ひまはしてゐたのであつた。

雪松は二重の苦しみを感じだした。Nに對する彼の最初の戀愛が齎す潔癖が、その自分の心を愧ぢ自分を悲しませて、抉りまはされる惱みの爲めに殆んど狂氣のやうになつて悶え喘いで居た。それにもかゝはらずその瞳——蜘蛛を限りなく怖れながらも、切長な彼女の瞳からは、何う焦つても遁れることが

出來なかつた。そしてやゝもすれば肉體も心靈も悉く捉はれてしまひさうな心持がして、ひどく不安でならなかつた。この惱みから脫する爲めに、彼は潔よく自分を彼女の前に投げ出してしまはうかとも考へたことが度々あつた。が、其處まで達する程に彼には勇氣が無かつた。またNの姿は何時もこの自棄的な心持から彼を救つた。長い長い一ヶ月餘りの月日が、雪松とおすみの睨みあつた內に經過した。

眞靑な穹から光り輝く日輪が黃金の雨を降らせる七月が來た。彼はまるで腑拔けのやうに惘りとしてしまつた。考へることも思ふことも出來なくなつた。病氣も治つたのか、一層惡くなつたのか分らなかつた。たゞ重苦しく惱ましさが續いた。ある日不圖彼は思ひついて、おすみの油斷を見すまして、脫兎のやうに家を飛び出した。そして五六里離れた海岸へ行つた。病氣の身體を思つた爲めでも、氣を轉換させやうと思つた爲めでも無かつた。たゞ彼女の監視の中から脫したかつたのであつた。たゞ現在の境遇から遁れたかつたのであつた。彼は彼女が其處へ居る限り、二度と生れた家へは歸るまいと、固く固く決心をした。

暑中休暇には、彼の行つてゐる海岸へ學校の友人がやつて來た。彼等は終日海へ浸り舟を漕ぎまはつた。從つて生長慾の盛んな時代だけに雪松の身體も思つたより早く健康となり、病氣も恢復した。そして喰べることも好く喰べだした。腹一杯に晝飯を喰べた後で、一貫五百目の西瓜を二人して喰べた。雪松は直ぐその後で、更に懸賞で菓子を二十錢喰べた。けれどもNのあの宣教師館の夜の情熱的な瞳と赤い唇とは忘れることは出來なかつた。思ひ出すさへ不快で苛立たしくなりながら、おすみの姿も忘れることが出來なかつた。二つとも永久に忘れることの無ささうな、深い深い刻まれた印象であつた。

九月の中旬には海岸からずつと學校へ歸つて行つた。遅れた學課を取返すのは仲々苦痛であつたが、彼はかなりよく勉强をした。これと云つて取りとめた考へは無かつたけれども、何となく前途にも微かに希望が持てだした。Nに對する戀も幸福な解決がつきさうな氣がした。彼はとにかく路だけは眞直に歩いて行かうと思つた。

ところが十月の末になつて、續けて起つた打擊の爲めに、彼は再び起上ることの出來ない手痛い傷を受けた。彼の决心も希望も、現在踏みつゝあつた生活も根柢から一氣に覆へされてしまつた。その一つは、當時彼等の仲間の間で發行されてゐた回覧雜誌にのつた小説であつた。作者は彼よりも學級が一つ上で、その年の三月に學校を卒業した男であつた。町端れの稻田に沿つた杉の生垣の所の路が丁字形に分れてゐる、ある夏の薄明るい夜、其處の枝の垂れ下つた榎の下で、若い男が若い女と囁きあひ抱擁しあつて別れて行く、と云ふのが小説の筋であつた。作者は普段から彼が最も嫌つてゐる男であつた。そしてその女は、彼が純潔なもの神聖なものと思ひ、自分で觸れやうと云ふ考へを起すさへその尊厳と美とを穢すやうに思つて居たNだと云ふことであつた。彼は彼女の爲めに、自分を傷けながらも貞操を守つた來てゐた。それにもかゝはらず彼女は彼の最も嫌ひな男の手の裡にその身體を托したのだ。何の爲めに病氣になる程苦悶をしたのだ。何の爲めにこれから生きて行くのだ。彼は叫んでも叫び切れない絶望をした。毛髪を悉く拔き去られ、爪を殘らず剝がされても猶これにまさる苦痛ではあるまいと思はれる程の絶望をした。世界が眞黒になつて來たやうに思はれた。

けれどもこの打擊だけならば、彼のよりよく生きやうとする本能が、未だ自分の立場に踏み止まらし

たかも知れなかつた。雪松は未だ自分にはおすみがあると思つた。さうだ、自分を愛してくれるおすみがあると思つた。彼はまた學校も何も總てを放擲してしまつて彼女の許へ走らうかと云ふやうな自棄な考へに陷つた。それがこの場合に最もよく彼を救ひもし慰めもしてくれることのやうに思はれたからであつた。しかし其處へ到達する時間上の餘裕が無かつた。次に來た打擊は彼を微塵に粉碎してしまつたのであつた。

三

雪松にとつては、眞に打擊と云はれる打擊であつた。Nを失つたことは、戀を失つたことは、彼が諦めてしまへば諦められることであつたかも知れなかつた。時間と云ふ魔物が何時の間にか忘れさしてしまふことであつたかも知れなかつた。しかしこれは諦めやうとしても諦めることの出來ない、忘れやうと思つても忘れることの出來ない、淺間しくも恐しい事實であつた。そしてその打擊の苦痛は刹那だけで濟まされなかつた。何處まで續いて行くか分らない事實であつた。彼は最う自分が絕對に起上ることの不可能な地位に投げ出されたことを痛感した。

彼女が、おすみが、父親の妾となつて町に圍はれたのであつた。息子の耳に泣いて囁いた女が、その息子を執念く追ひまはした女が、父の妾となつたのであつた。――そして雪松にとつては、戀を失つた唯一の遁れ場所を失つたことでもあつた。生きる望みが根刈りにされたことでもあつた。

この事實を知つた時には、雪松は全く字義通りに躍り上つて驚いた。魂を不意に振りしめられたやうに、一時は全身の感覺を失つて呼吸さへも出來なかつた。見る見る顏がヒン歪つて、一生涯治らなかつ

た蒼白な醜いものと變つて來た。
「子と父とだ！　淺間しい！」彼は自分の頭部を抱えて身を悶えた。「恐しい！　淺間しいことだ！
獸の行爲だ！」
そして考へがおすみの上に及ぶと、彼は顏を紫色に膨らして憤怒した。ほんとうに眩暈で倒れてしまひさうであつた。
「呪つたな、蜘蛛！」彼は我れにもあらず聲帶の壞れたやうな聲を出して叫んだ。「投げつけられた手套は確かに受取つたぞ！　うぬ、何方が勝つか鬪つて見せる！」

のちに沈着いて考へて見れば、彼にとる復讐の手段としては、如何にも彼女が選みさうなことであると思はれた。が、その時には然う云ふやうに觀賞してゐることは出來なかつた。何うかしてその怖しい呪ひの網の中から遁れねばならなかつた。父子の上に投げられた戰慄すべき事實の中から、第一の責任者として自分と共に父を救はねばならなかつた。彼は事情を知らぬ父に對して、死んでも申譯けが無いやうに思つた。また父をひどく氣の毒にも思つた。憎い讐は唯ひとりであつた。おすみ一人であつた。しかし殆んど一週間近くもおち〳〵眠らないで考へたが、これと云つて適當な方法は考へつかれなかつた。彼は射る矢がみんな的を外れて飛んで行く激しい苛立たしさを感じた。

たゞ一つ、父親に總ての事情を悉く打明けて、彼女を放逐してしまふのが最も好い方法のやうに思はれた。が、それだけでは彼は滿足が出來なかつた。全身を戰かせ、世界のあらゆる幸福を一時に奪つてしまつた彼女に對する復讐としては、如何にも生溫いもののやうに思はれたのであつた。彼は彼女に最

つと慘酷な手段を要求して居た。生きてゐて、終生喘ぎ苦しまねばならぬ程の酷虐な方法がとりたかつたのであつた。彼が彼女に對する心持は、最早單なる憎惡では無かつた。言葉通りの憤怒ではなかつた。憎惡と憤怒とに幾層倍の輪をかけた憎惡であり憤怒であつた。しかしこの感情の底の渦の中に姿を隱して、蛇のやうな嫉妬が眼を輝やかしてゐたことには彼は氣が附かなかつた。

考へても考へても解決のつく筈の無いこの懊惱は、彼をとう／＼酒に導いて行つた。十九の盲目的な感情が行はせるに相應しい、最も亂暴な、自棄的な、制禦し難い狂惱であつた。彼は度々醉つて路上に倒れて眠つた。車夫などを相手に喧嘩をした。料理屋の床の花瓶を放りつけて藝者に傷を負はした。彼の身體にも何時も生傷の斷間が無なかつた。生れつき持つて居た純潔や淸淨を慕ふ心も、肉體の貞操もこの期間にみんな失つてしまつた。そして得たものは惱みと涙とだけであつた。

然うだ、酒も――醉つた時も、醒めた時も少しも彼に慰めを與へてくれなかつた。醉へば醉ふほど堪らなく悲しくなつた。醒めれば醒めるで身體の置き場所も無い程に心が痛んだ。彼はとう／＼酒が苦痛になつて來た。

丁度翌年の一月であつた。彼の遊蕩の激しいのにあきれた學校の方では、彼を放逐すると云ふ會議が開かれたと云ふことであつた。彼は友達から聞いたけれども怖れはしなかつた。が、それと同時に、怖毛を顫ふやうな欲望が彼を誘惑してすつかり盲目にした。彼はまるで夢遊病者のやうにふら／＼と、園はれてゐる彼女の家の格子に手を掛けた。その日は父親が彼女の處へ來てゐないと云ふことを知つてゐたのであつた。

鐵のやうに緊張して居りながら、心の底には極めて慴した何物かゞあつた。或ひは全部がそれであつたかも知れなかつた。この恐怖心にこたへて格子戸が鳴つた。彼はぎくりと慄へた。蒼白な顔がいよ〱蒼白となり、眼が据つて血走つて居た。

奥の間で物音がした。彼はまた慄へた。やがて跫音が玄關で止まつて障子が開かれた。障子の間には美しく丸髷に結つて赤い手柄をかけた女が叮嚀に頭部を下げてゐた。おすみだ。彼女だ。彼女は頭部を擡げて彼を一目見ると、顔を眞青にして驚愕した。

「若様！……」

彼女はかう叫ぶより早く急いで障子を閉め切つて、ばた〱と奥へ駈け込んで行つた。殆んど同時に彼も燕のやうに身體を飜へして外部へ飛び出した。が、何故かしらひどく安心をした。そして遣場の無い憤怒が更に彼を苛立たした。

「父だ！」

と、彼は叫んだ。彼女がさう云ふ境遇に陥つたのも悉く父親の不法な行爲に起因してゐるやうに思はれだしたのであつた。彼女は彼の家の恩義の爲めに泣いて父親の前に屈服してゐるやうに考へられだしたのであつた。彼は急いで俥を驅つて三里の路を家へ歸つて來た。角立つて歪んだ眼、拘緊つた顔、斷えず戰慄してゐる身體、彼は全然發狂してゐた。後になつて考へても、何故その時父を探ねて家へ歸つて來たか分らなかつた。勿論、彼女を救ひださうとした譯でも無かつた。彼女のことに就て父を詰責する程の生温い考へでもなかつた。若しも强ひて仔細に穿鑿すれば、判然とは分らなかつたが、たゞ一つ

のあるものを瀆めてゐたやうに思はれた。しかしそれは永遠に思ひ出すことを禁じた、怖しいものであつたらしかつた。

丁度父親は家にも居なかつた。彼は非難する猪之吉を怒鳴りつけて無理に土藏を開かせ、在庫米を殘らず賣り拂つた。

「おれは誓ふ、生きてゐる内は二度と、二度とこの故郷の土は踏まない！」

若しも呪咀がほんとうに慘虐な行爲を宥すものであつたならば、あらゆるものを屹度悉く呪咀したのであらうと思はれるやうな心を抱いて彼は故郷を離れた。自分の行動や心持に就ては、何故に、と云ふ反問は少しも無かつた。たゞ渾身の動きであつた。

かう云ふ息子の心持を、父親の武次郎はちつとも知らなかつた。父親は最初から彼に左程の反感を持つてゐた譯ではなかつた。たゞ出奔の前になつて、彼の年齡にあるまじき遊蕩やその他の行爲が、如何にも自分の弱點を抑へた上の狡猾なものゝやうに思はれて、かなり強く腹を立てたばかりであつた。けれども自分の生活も彼に劣りはしなかつたので、雪松のみを非難することは出來なかつた。

が、彼の家出が動機となり、武次郎は自分の生活を改革せねばならなくなつた。唯一人の息子まで追つたと云ふ抗議が親類から起つた爲めであつた。父親はおすみとも綺麗に分れた。いろ〳〵關係をして居た事業の方も出來るだけは見切りをつけ、借金も一先づ整理をした。そして後妻を迎へて、内心はと

もかくも表面だけは家へ沈着いてゐるやうになつた。おすみも間もなく父親から貰つた手切金を婚資として、十里ばかり離れた宿場の相當な水車業者へ嫁いだと云ふことであつた。

雪松は、しかしそれより底へは沈むことが出來なかつた。彼は地方のどの青年もが望むやうに、まつしぐらに都會を指して行つた。彼は其處で多くの人を見た。この人の群集は第一に彼を威嚇した。彼は自分の過去も忘れてしまふ程に激しく面喰つた。一時は何うして好いかすつかり途方に暮れた。そして落着くに從つて、だん〳〵生長慾が萌えだしてくるのを見た。彼は圖書館へ通つて、貪るやうに書籍を讀み初めた。新しい世界が彼の前へ展開して來た。

父親の生活の改革と同時に、親類の者が間に立つて、彼は毎月父親から生活費の送附を受けるやうになつて居た。武次郎は世間の手前から云つても雪松に歸つて來て貰ひたかつたのであつたが、意姑地のやうな心が禍して、何うしても彼は承諾しなかつた。かうして父と子とが手紙で押問答をしてゐる間に年月が經つて行つた。

三回目の櫻が咲いて散つて行つたけれども、雪松は何うしてもこの都會の人の波の中へは入つて行くことが出來なかつた。彼は何時も一人ぼつちで寂しかつた。道を歩いても陰鬱な眼が下を向いて土を瞶めて居た。

「おれは百姓の家に生れたんだ。矢張り田舍の方が好い。」

から何時となく呟くやうになつた自分の聲を自分に聽いた。圖書館だけには續けて通つて居た。

「然うだ、この廣い廣い地球の上には限りなく土地がある。それだのに何故おれはあの山のあひの狹い土地に生れたのだらう？」彼は並木の篠懸の葉の日蔭を選んで步きながら、度々さう云ふことを考へた。「たゞ偶然に生れあはせたんだ。だが、その偶然と云ふことには何等の意味も無いものであらうか？　土地とその土地に生れた者の靈(たましひ)との聯關と云ふやうなものは、絕對に無いものであらうか？　若しもあるとすれば、その生れた土地を見棄てゝ好いものだらうか？」

時とすると彼の眼前に故鄕の山や野が姿を現はすことがあつた。山と山との間は四五町に足らぬ平地であつたが、川も流れて居れば村もあつた。川の岸には枝を切られた白楊が並んでゐた。村は杉の立木と竹藪とに圍まれて、山に沿つて段々に家があつた。そして降る光線の雨を浴びて谷が靜かに眠つて居た。柔らかな風が靑い靑い稻田の上を渡つて行つた。――彼の眼には淚があつた。

「おれを生んで育てゝくれた土地、家、其處の人達――おゝみんな美しい！」

一生涯忘れることが出來ないやうに思つたNに對する感情も、おすみに對する憎惡も、悉く實感を離れて慕はしかつた。何一つとして總ての人に間違つたことは無かつた。誰一人として彼自身に間違つた態度をもつて對した者は無かつた。Nが彼の嫌ひな男へ走つたことも無理だとは思はれなかつた。おすみが復讐の念から自棄になつて父に自身を任したとしても、父の愛慾が弱いおすみを犧牲にしたとしても、または別な理由からあゝした結果になつたとしても、おすみにも父にも無理は無かつた。みんな道理であつた。若しも嚴密に云へば惡とか醜とか云ふ名のつけられるものもあつたかも知れなかつたが、

みんなが抑え切れない人間の感情の發露によつて動いたのであつた。みんなの行爲が肯定できるのであつた。たゞその中に交つて殘つてゐる不快の情は、何等の反省も持たずに感動してまはつた彼自身の愧づべき行爲だけであつた。それだけは實感を離れて肯定し是認することは出來なかつた。雪松は時には自分を世の中で一番下劣な男のやうにも思つて見た。時には齒がみをして自分の傷けられた純潔を口惜しがることもあつた。が、決して自分以外の者にその罪を被せやうとは思はなかつた。

肉身に對する强い愛着も、彼は初めて自覺的に感ずることが出來た。彼は父を想つた。妹を想つた。そして若しも自分が最つと深く考へるところがあつたならば父も妹も現在に到るやうな經過をとらないで濟んだかも知れぬと思ふやうな事もあつた。彼はこの人達に對して申譯が無いやうな、一種の重い責任苦を感じた。さう感ずれば感ずる程、最つと明瞭と確かなものを掴まねばならぬやうに思はれた。失つた純潔を取返さねばならぬやうに思はれた。

故郷が戀しくなる時には、彼は一人で郊外を歩いた。故郷は山間であつた。其處は平野であつた。しかし其處には樹全體に生氣を漲らした楢の林があつた。滑らかに崩えてゐる草があつた。彼は時々草原へ寢轉んで空を眺めた。空は故郷の空と同じやうに青く澄んでゐた。トコ〳〵と音がして砲車をひいた砲兵の群れが、直に空と接した草の柔らかな斜面を登つたり下つたりするのが見えた。砲身がキラ〳〵と陽に光つた。燕が空を切つて翔んで居た。

「生れた家にもこんなに廣い土地がある。」彼は周圍を見廻して考へた。「あの廣い松林の切跡は何うなつてゐるだらう？　最う早稻は穗を出したかしら？」

けれども土着的な事業には一切手出しをしなかつた父親の性格から云つて、松林の切跡は荒むがまゝに放つてあることは事實のやうに明らかだと思はれた。彼は小學校時代に、下男と一緒に田圃に出て稲を刈つたことを思ひ出した。畑も打つた。牛が牽く田切車に乗つて田の土を砕いたこともあつた。

「この稲の林が林檎の木立であれば……。そしておれがその主人公であれば……。あゝ、都會の人の群れの中へ歸つて行くのは最う苦しい。」彼は立上つて歩きながら呟いた。「然うだ、おれは一本立の人間として生きねばならないのだ。誰にも手頼らないで、手足に力一杯自分と云ふものを漲らして生きて行かねばならないのだ。……おれは農夫にならう。おれを生んでくれた土地、おれを育てゝくれた土地、其處のたゞ一人の農夫とならう。」

昇奮に顫へながら雪松は下宿へ歸つて父親へ宛てゝ手紙を書きだした。先づ長い間父の厚情に叛いて、不穏な、だらしの無い生活を續けて來たことを詫び、いよ〳〵今回歸郷する決心をしたことを告げた。

「罪――それ程實際的な感じ方ではありませんが、父さんや、亡くなつた母さんや、生れた家や、故郷の人々や、私を育てゝくれた土地やに對して、私として最つと何事か爲さねばならぬ事が澤山あつたやうに思はれます。」と云ふやうな意味を書いた。「それにもかゝはらず、私はこの總ての私に好意を持つて生長を助けてくれた人々や事物に對して、少しも感謝の意を表はさなかつたのみか、思ひ出すさへ羞しい、卑しい、普通罪惡だと云はれてゐる事柄よりも最つと自分の心靈を穢した行爲ばかりを續けて來ました。それを今から私の全努力に依つて取返したいと思ふのです。然うすることに依つて私が初めて一

個の人間となることが出來るやうに思はれるのです。然うすることが私の、人間としての、眞實の仕事のやうに思はれだしたのです。」彼の顏は赤く熱し、眼が輝いて來た。筆を持つ手が顫へた。「‥‥そしてから云へば父さんに對しては面目も無い氣持も致しますが、今の私としては、父さんのこととか家のこととか（その當時彼の家の家產は餘程傾いて來てゐたのだ）と云ふことのみを考へて居られ無い氣がするんです。最つと最つと多くの、私に交涉のあつた、また今後もある、その總てのもの、然う云ふものゝことが考へられるのです。‥‥ですが、この考へ方は、やがては父さんや生れた家に對する私の精神の全集中になるのでは無いかと思はれます。‥‥」

そして彼は、この目的を果す手段として、たゞ普通の小作人のやうな農夫となりたいから暫く少額の資本と土地とを貸して貰ひたいと書いた。果樹も栽培したいとも書いた。鷄も飼ひたいとも書いた。

が、直に飛んで歸るやうな心持でゐたのにもかゝはらず、歸鄕は案外遲れて秋の半ばになつた。山へ深く入つた谷間の故鄕の稻は、最早大半刈取られてゐた。

四

丁度、然う云ふ言葉が最もよくあてはまる黃昏時であつた。生れた故鄕へ、生れた故鄕の家へ、雪松はとう／＼歸つて來た。彼の若い血潮はまるで初めて戰場に向ふ中世紀頃の騎士のやうに、戰鬪（たゝかひ）と功名との爲めに激しく沸立つてゐた。が、彼はそれは纔かに一部分の感じに過ぎないやうに思つた。最つと眞面目な、最つと敬虔な何物かゞ、より多く心の中に含まれて居るやうに思つてゐた。

「さあ、これからいよ／＼新しい生活が始まるんだ！」

數年前から叫んで、生れた故郷と生れた家と其處の人々とを呪ひ、後足で砂を蹴飛ばし、ずだ〱に踏み躙り、唾をはきかけても猶飽足りないやうな憤懣の情を抱いて出て行つた、今、彼の心はその時と同じ言葉を繰返して然う叫んで居た。

「さあ、これからいよ〱新しい生活が始まるんだ！」

家の中は未だ洋燈も點けてなかつたのでかなり薄暗かつた。父親は朝から氣嫌が惡く、家族の者に當り散してゐたが、彼が歸つて來たことを物音で知ると、急にそは〱と立ち上つて肥つた身體を玄關まで運んで行つた。

「歸つたかい、長い道中のことだけ少しは疲れたらうな。」武次郎は笑ひながら、一番變化の激しい青年期を野獸のやうに勝手我儘に過して來た息子の變り方を見定めやうとするやうに、長く彼から視線を離さなかつた。「とにかく、まあ奥へ通つて悠り休むが好ゑ。」

翌朝彼が二階の客間で眼を覺した時は既に遲かつた、父親は座敷の帳場格子の机に向つて、思案をしながら算盤を彈いてゐた。彼はその傍へ行つて、更に改めて歸鄉の目的や計劃して歸つた事業の話などをした。父も手を休めて熱心に彼の話を聞いた。

「なる程な、お前の云ふ通り少しも儲けにならんな。金利にも合はんわい。」父親は彼の計劃を聽いて算盤を彈いて見てからから云つた。「けれどもまあ、何れだけ損がいくと云ふ譯じやなし、働くのが損位なもんだけ、遣りたけりや遣つて見るも好からう。……若い時に働くのは藥になるけな。」

それから父親は鷄の種類の善惡や、栽培果樹の適不適などに就ても意見を述べた。彼は父のこの好意

が嬉しかつた。自分一人の感情だけではあつたらうが、子供の時に感じたやうな、しつくりと絡みあつた融合を、ほんとに久し振りに感ずる氣持がした。

「おい、おとく。」父親は襖越しに聲をかけて繼母を呼んだ。「何かな、お茶受けになるやうなもんはないかい？」

「さあ、何も御座んせんな。」

繼母はかう答へたが、やがて鹽豆の入つた蓋物を持つて座敷へ來て彼等の仲間入りをした。繼母は雪松とは年が幾つも違はぬ程に若かつた。赤い手柄なぞを掛けてゐた。

「賑やかな處からお歸りになつては、こんな田舎は寂しくて詰らんでせう？」繼母は彼に愛相笑ひをして見せた。「何にも御馳走はありませんし。……お茶でも淹れかへませう。」

彼は父親と相對して話してゐる時よりかは少しは固くはなつたが、しかし二人の好意は身に泌みて嬉しく感じた。そしてかうしてしんみりと人間の愛情を肉體にまで受けることは實に珍しいことであつた。

「御馳走なんぞがいるもんかい。」父親は繼母の言葉を受けて云つた。「これは少し變り者の方でな、學問して出世をするよりも百姓の方が好えつて云つて歸つたんだもの。」

「えゝ、然うですよ、百姓になる爲めに歸つて來たんですよ。」

父が今彼から聞いた話を簡單に繼母に語るのにつけ足して、彼は愉快さうに云つた。雜談は暫く續いた。

「だが、この頃は身體の方は丈夫かい？　そんなに瘦とつて鍬が握れるかい？」

「えゝ、充分ですよ、骨で働くんですからね。……でも、働けば屹度丈夫になるでしやう。」彼は涙ぐましく感情を動しながら冗談を交へて云つたが、不圖別なことを思ひ出して、總てを一時に語つて了はねば氣が濟まない若者の心持を露骨に表したやうな調子で父へ云つた。「ねえ、父さん。私はね、彼方（あちら）へ行つて居る間はずつと圖書館へ通つて本ばかりを讀んでゐたんですよ。いろ〳〵の學者の書いた本を讀んで見ました。そして唯これだけのことを知つたんです。我々は、つまり人間は、何千年以前から土を耕して來てゐたんだと。――然うすればこの世で云はれてゐる善だとか惡だとか云ふものは、みんなこの掘り返された土から湧いて出たことになるんですね。……で、若しも人間が善や惡から遁れて純な姿に立返らうとする時には、土から受けたものを土に返せば好いことになるんですね。……しかし土は何も知らない、たゞ人間が勝手に掘り返して勝手に拾つて行つたんです。だから土に返すと云つても土を虐けることではありませんね、土を愛して行くことですね。愛して耕し返して行くことになるんですね。ね、かう云ふ考へ方なり立つでしやう？」彼は少し考へて「ですが、この考へ方が果して正しい眞理だか何うだかは、勿論私にも分りません。そして恐らく誰にだつて分らないことでせう。仕方がないんですから、飽迄も自分の信ずる處を眞直に進んで行くんですね。分らねば分らぬなりで好い、矢張り何千年以來人間が行つて來てゐるやうに、土を耕しながら分る時を待つんですね。……」

自分で作つた感情に顫へながら、彼は眼を擡げて天井を仰いだ。何年前の、彼が未だ家に居た頃と同じく古びて煤れて居た。彼は視線を轉じて周圍を眴した。壁も、障子も、境の襖も、火鉢も、帳場格子

も、梁にかゝつた槍も、彼にはみんな見覺えのあるものであつた。そして時間と云ふものを超越して何年前と同じことであつた。たゞ變つてゐるのは、その中へ住んでゐる人間の心だけのやうに思はれた。彼は生れ落ちるとから一緒に育つて來たそれらのものが、一齊に喜悦の涙を溜めて彼を歡迎し彼を瞶めてゐることを感じた。生れた家へ歸つて來た幸福が、肌膚の毛孔の一つ一つから滲み込むやうに思はれた。

未だ身體の何處かゞ懶いやうであつた。旅の疲勞が全く癒え切らないのであつた。が、家の中に凝然としてゐるには、何物か、餘りに彼を驅る力があつた。雪松は下駄履きで表から下男部屋の方へ廻つて行つた。

丁度、下男の猪之吉は晝飯を終つてまた畑へ出て行かうとしてゐるところであつた。禿げかゝつた頭部へ鉢卷きを締めて「どつこいしよ。」と云つて鍬を擔いだ。そこへ雪松が來合せた。

「達者だつたかね、猪之？」

と、彼は莞爾々々と笑ひながら話しかけた。この家へ三十年近くも下男として働いてゐる老僕は、主人よりも誰よりも一番彼を好んでゐた。で、昨晩野良から歸つて來て彼の歸宅を女中のおしげから聽いて、早速逢ひに奥へ行つた。けれども彼は碌々話しもしなかつた。猪之吉は恐しく自分に腹を立てながら、母家に添ふて建て出された部屋の圍爐裡の傍へ歸つて來た。それにもかゝはらず今日は朝から落着

かず、斷えず唆られるやうにそは〳〵としてゐた。

「え丶――。」

猪之吉は無口の方であつた。不意にから話しかけられると恟りしたやうにまごついて、何と返事をして好いか分らぬやうに途方に暮れてゐた。そして髯に埋れた、ひしやげたやうな顔を赤く火照らし、滴れるやうな笑ひを腹から搖りだした。

「何仕事だね、稲刈りかね。」

彼は重ねてから訊いた。

「いゝえいな、この頃作つとるのは糯稲だけですけえな、最う刈つて了ひましたとがな。……檜苗の伏せ換へですだ。床の中で冬を越させると根が立ちますけえ。……」

「然うかね、何處へ行くんだい？」

「直き裏の畑までゞすが。」

「それでは僕も行くから一緒に行かう。」

から云つて彼は牛部屋の方へ歩いて行つた。母親が死んでから殆んど牛を飼育する必要も無くなつた程作田を少くしたのであつたが、猶猪之吉の友達として飼つてあつた。猪之吉も鍬を擔ぎ直し 彼の後を隨いて來た。見覺えのある乳牛雜種の牝が、勞れたやうな灰色の眼をして、腹部の傍へ踞つてゐる犢の横腹を嘗めてゐた。

「え丶犢でござんしよがな。ブラウンスイスの雜種ですだぜ。」

猪之吉は自分の所有物を自慢するやうに、母牛を追ひたてゝ、牛部屋中を疾走する慣を指して云つた。彼はすつかり田舍の百姓家が持つてゐるのび〳〵とした幸福に魅された。微笑が自然に頰へ浮んだ。

この地方の習慣として、如何なる富豪の家でも相當の田地を耕作してゐた。彼の家もこの類に洩れず、母親が未だ生きて居た頃までは、普通の農家と同じ程の段別を耕作してゐたのであつた。尤も家族の者はめつたに野良へは出なかつたが、それでも最も忙しい時期にはまるで氣保養のやうな積りで雨戶を閉めて出掛けることもあつた。で、土藏に通ふ廊下を境として、一方は奧座敷に面した庭園となり、一方は純粹の農家の裏庭をかたちづくつて居た。納屋もあり、物置きもあり、稻から籾を米にする勞作場もあつた。彼と猪之吉とは牛部屋を出て、この建物の並んだ中の、石疊を敷いた廣場を橫切つて裏木戶から山裾の方へ行つた。

「だが、母牛もすつかり年老つたね。」

彼はかう云つて、改めて感慨深く猪之吉を見た。親牛が子牛を嘗めて育てる――それは丁度猪之吉が雪松に對する適當な形容であつた。彼は生れ落ちるとから猪之吉の掌や懷中で生長して來たやうな處も少くは無かつた。彼は何時も變らぬこの老僕の愛情が懷しかつた。二人は路々いろ〳〵の話を交しながら步いた。

「何故麥を蒔かんのだい？」

大豆や小豆を收穫したらしい、空いた畑の多いのを見て彼はかう訊いた。畑は田よりも雪の消え方が遲いので、早く蒔く必要のあることを彼も知つてゐたのであつた。

「麥を誰が食べますだい？」

不平さうに猪之吉は云つた。彼は以前よりもずつと贅澤になつて來てゐるらしい生活狀態を思ひ浮べて、それも然うだと思つた。

「ぢや蠶豆でも植えりや好いじやないか、春まで遊ばして置くのは勿體ない。」

けれども猪之吉は更に返事もせずに、ぶつ〳〵と口の內で低く呟いてゐた。父親がかう云ふことに就ては一切面到を見なくなつてゐることを痛切に感じた。彼は一層自分の任務が重大のやうに思つた。

「何んな仕事にでも、何んな勞働にでも堪えて見せるぞ！…そして人間としての眞實の路を、足を地につけて確りと歩いて行くんだ！　確りと歩いて行くんだ！」

彼はまた激しく昂奮し、顏が赤くなる程血の沸き立つのを感じた。身體がひとりでに顫へて來たやうであつた。

畑は山裾に段々に重つて居た。檜の苗床はその一番上にあつた。

「隨分澤山あるね、幾何位あるんだい？」彼は畑の隅の石の上に腰を下して云つた。「賣るのかい？　それとも殘らず植え付けるのかい？」

「植付けるんですがな、山がみんな坊主になりましただけ。」猪之吉は雪松と並んで腰を掛けながら怒つたやうに打切棒に答へた。父親が借金の整理をする時、なるべく土地を賣らないやうな方法をとつて、山林と云ふ山林の樹木を殘らず賣り拂つたと云ふことは彼も聽いてゐた。「檜が四畝に、杉が五畝。…植えつけたばつかりじや大きくはならんだに！」

それから猪之吉は父親の監理方法が惡いことをくど〱と長く述べ立てた。そして終には繼母が怠け者で、だらしがなくて、贅澤すぎると云つて惡口を初めた。溜り溜りしてゐた感情を一時に吐き出すやうな訴へ方であつた。亡くなつた彼の母の慈悲深かつたことがひきあひに出されたりした。

猪之吉が然う云ひ得る者は彼より外にはなかつた。雪松もこの老僕の心持には同情をしたが、然う云ふ一家の內情に關することに就ては一切自分から離して置きたかつた。で、彼は急いで話を轉換さした。

「ね、猪之、僕は百姓になるんだよ、その爲めに今度都會から歸つて來たんだよ。だからね、來年からね、稻も最つと澤山作るし、麥も蒔くし、畑だつて何時も靑々として居るやうにして見せるんだよ。」彼は笑ひながら、しかる眼を光らして云つた。「そしてね、あの松林だつた跡にね、梨や林檎や葡萄やを植ゑ、鷄も飼ひ、蜜蜂も飼はうと思つてゐるんだよ。」

「旦那と同じこつた！」と猪之吉は悲しく思つたが、非難はしなかつた。百姓になるのは好い事だと心から賛成をした。猪之吉は云つた。

「半年も働いて見なんせい、うんと力がついて、村の若い者と相撲が取れるやうになりますぜ。」

雪松は猪之吉と分れて、道を眞直に登つて行つた。急な芝生と小松の茂つた間とを縫つて行くと、切拓かれた山の中腹のたわいに出た。彼は注意深く周圍をみまはしながら、猶も登つて行つた。此處は彼が故鄉にゐてまだ町の中學校へ通つて居た頃、父親が製糸の損失を補ふ爲めに賣り拂つた松林の跡であつた。

故郷へ歸つて來る決心をした唯一の目的、唯一の計劃は、實にこの一帶のたわに向つて立てられたのであつた。今彼の全精神を傾注させ、また彼の全生涯を傾倒させせんとしてゐるのは、實にこの一帶のたわであつた。此處の土が彼の生長に關聯したあらゆるものゝ代表者となつて彼を惹きつけたのであつた。此處の土が彼を呼び返したのであつた。彼の足は病後のやうに激しく顫へた。筋肉の一つ一つが恐く凝固してしまつたかと思はれる程に緊張した。喘ぐに等しい吐息が、肺の底から快よく發した。彼は足の指先きに力を入れて土を強く踏んだ。緊つた路の土は、まるで底に空洞を隱してゐるかのやうに鳴り響いた。

松林の跡は廣かつた。段別で云へば二十町歩以上もあらうかと思はれた。たわから急に傾いて峰の方へ上り、左右は柔らかな曲線を作つて谷へ消えて行つてゐた。谷は直に起上つて、兩面から來る風を防ぐやうに、聳えて栗の林となつてゐた。空は秋らしくもなく曇つては居るが、南を正面に受けた此處は、彼の熱した頰を吹くひやゝとした微風もない程に暖かであつた。彼は豫期をしてゐた通り、氣象の方に就ては果樹を栽培するに理想的な本場所だと思つた。

松が生えてゐた頃は實際見事であつた。松は大抵六尺以上も周つて居た。枝下が三間から四間あつた。勿論彼の家の自慢でもあつたし、村でも自慢の一つに數へられてゐた。今はその名殘の切株の間々に、妙に枝の縮んだ、ひねくれまはつた、白い苔の生えた、虐げられたやうな桑が並んでゐた。父親が製糸熱に浮されてゐる時に植えつけて、そのまゝ手入れを怠つて放つてしまつた桑であつた。それでも地味の好い處には、餘程長く伸びてゐるのもあつた。桑は切跡全面に植えてあつた。

彼は路から少し横に入つて、傾斜がやゝ急になつた額の邊りの一つの松の切株へ腰を下した。そして農夫のやうに顏から流れる汗を掌で拭いた。視線が土に喰ひ入るやうにたわ全體を見下した。

「粟を蒔いてゐるな、これでは土質が枯れてしまふ一方だ。」

と、彼は呟いた。誰か、多數の人へ小作をさしてゐるらしく、處々に區劃をつけて粟や、蕎麥や、小豆などをばら〳〵に蒔いてゐるのであつた。かうして今二三年も經てば、土地が持つて居る滋養分は悉く作物が吸ひ取つてしまひ、杉も檜も育たなくなつて來る。若しも小笹か芝かゞ渡つて來れば、其處は殆んど永久にと云つても好い程の荒地とならねばならなかつた。彼は家の運命を此處にも見るやうな氣がした。

が、何と云ふ寂しいことだらう、と彼の心の一方は他の一方を眺めながら思つた。此處まで登つて來た時の昂奮、それは幾らかの時間に彼の身體の何處にも見られなくなつてゐた。何時の間にか内部が空虛になつて、代りに重苦しい惱ましさに似た薄暗い氣分が、まるで彼の全部を隈取つてゐるやうに追蔽さつてゐた。不意に吐息が苦しく口を衝いて二つも三つも出た。

「彼處は駄目だよ、土質が惡くつてな。」

彼が果樹園の候補地として此處を指定した時、父親は然う云つて他の場所を選ぶことを勸めた。けれども彼は、それは父親が桑の栽培によつて失敗した自分の跡で他人が成功をするのを好まない偏狹な心から云つた事だと思つてゐた。それよりも彼は此處に限り無い愛着を抱いて居た。このたわばかりを睨んで歸つて居た。

期待は空しく外れた、と思つた。其處には鰻のやうに根を張つた松の切株が、到る處に頭部を擡げてゐた。土質は父親が云つた通りに赤松以外の植物の生長に適しない赤い粘土であつた。この土を堀り返し耕し返したところで、何年間經てば眞に彼が胸に描いてゐるやうな果樹園がかたち作られることであらう、彼には迚も想像がつかなかつた。結局、あの桑のやうにひねくれた梨や桃の木が出來るが落ちだと思はれた。父と同じ道を歩いて行くのが落ちだと思はれた。彼は松の切株や土質を呪ふ氣になつた。歸鄕したことを悔むに似た念と、自己の憐憫と、輕擧を苛責する心とが、彼をすつかり惑亂さした。

「土に對する愛、自分の眞實の路――それが何處にある？　何處にある？」彼は立上つて兩手で頭髮を掻るやうにして呟いた。「みんな離れて考へた時のことだ！　みんな空想だ！　みんなセンチイメンタルだ！」

彼は汽車の中からまでから考へて來た。

「……先づあのたわの最中にまつすぐの路をつけるんだ。……」

そして路の兩側にはチエリーを植えて圓狀剪定を施さうと思つた。梨は下部の最も土質の好い場所を選んで植え、桃は一等上の傾斜のやゝ急になりかけた處へ植える都合であつた。最上部には地均しを行ひ、路の正面に當る處へ番小屋を建てた。鷄はこの番小屋の周圍の廣場で飼ふことにした。垣根は成長が早いので最初はポプラをもつてし、ゆく〳〵は杉を代らせやうと考へた。それから鷄小屋の周囲の墻には狐や鼬の襲來を防ぐ爲め網目の細かな金網を張ることも忘れなかつた。彼は晴れた日の朝、その路を登つて行く自分の姿を想像して見た。桃が媚びるやうに枝一杯に花をつけてゐることもあつた。棚の

下が暗くなる程梨が葉を茂らして居ることもあつた。鶏小居へ入ると、愛らしい横斑プリモースが歡迎の意を表して鳴き立て丶、一齊に彼の肩へ止りたがつて喧しく騒ぎ立てた。

未來の光榮を有する土――彼は一時も早く其處へ行つて、親しく跪づいて、抱くやうにその土へ接吻したいと思つてゐた。……

「羞しいことだ！　眞實に羞しいことだ！」

彼は父に語つた話の中の決心や自負の言葉を思ひだした。二度と父親とは顔が合はされぬやうな愧ぢを感じた。昂奮しやすく、感傷的になりやすく、空想を直に實際のことのやうに思ひ込んでしまふ自分自身の性格が怨めしくなつた。彼は全身の力を失つて、またもやもとの切株の上に腰を下した。そして兩手を顔に當てて、途方に暮れて深い思案におちいつた。

無理でも飽迄も決行しやうか、と彼は思つた。が、それは丁度父親が此處の土質を知りながら桑を植えたと同一の結果を來すことであつた。他の場處を選定するには、餘りに一箇所に執着があり過ぎた。では、思ひ切つて父へ謝つて再び都會へ行かうか、とも思つて見た。しかし再び都會へ行つて何をするのだ、何が出來るのだ。――考へは頭腦の中から相撃ち相反撥しあつて、何時までも同じ所をぐる〳〵と廻轉して居た。若しも少しでも心へゆるみが生ずると、この自分自身の哀れさの爲めに瞼が濕んで來るやうであつた。

「惡魔！　失せろ！」突然、彼は躍り上つて力限り叫んだ。「こいつ、いつも矢張りセンチイメンタルだ！」

彼はその逃げて行く惡魔を捕へやうとするやうに、兩手を高く空中に差上げて、歡聲とも罵聲ともつ

かね唸聲を發しながら、いつさんに傾斜を驅け下りた。時々作物や木の根に躓づいて、危ふく轉びさうに身體を斜めに傾けたが、それでもたわまで一氣に驅け下りて來た。丁度、其處に長く伸びてゐる一本の桑があつた。彼はその桑の枝に摑まつて、立止まり晴れやかに大きく息を吐いた。不圖、違つた思ひ出が頭腦に湧いた。彼は思はず聲を立てゝ笑つたが、急に眞面目な顏となつた。それから悲しさうに次第に頭部を垂れた。

五

曾つて最一度、今と同じやうな行爲が雪松にあつた。それは故郷を見棄てるやうになつた前年の七月の上旬で、海岸へ行つて居た時の出來事であつた。友人も未だ來て居なかつた。朝、彼は晝顏の蔓の伸びた濱の畑の中の小徑を抜けて、ずつと海へ近い松並木まで行つた。そこから渚まではかなり急な傾斜をしてゐて、歩數で云へば三十歩位しかなかつた。山から登る旭は未だ波を照さず、廣い海面は穩やかに仄つと霞んでゐた。

立つたまゝ腕組をして彼は海へ眼を遣つて居た。けれども眺めて居るのでは無かつた。Nの情熱的に潤んだ大きい瞳と、薔薇のやうに赤い厚ぼつたい唇とを思ひ浮べてゐるのであつた。彼は黎明その姿を夢に見たのだ。そして眼覺めた後の聯想が、衰え切つた彼の神經を削り盡すやうに酷らしく苛んだ爲め、彼は裸足のまゝで宿屋の緣側から飛び下りて來たのであつた。

彼はまた切長な眼の底が星のやうに聰明に輝いてゐる二つの瞳を思ひ出した。その瞳は最も怜悧に、鋭敏に、且執念く彼の心の何處かを捉えてゐて離さなかつた。蜘蛛の聯想のあるおすみの瞳であつた。

彼は片方のNの姿に對して蜘蛛を病的のやうに愧ぢ、怖れながら、依然として切離すことが出來なかつた。Nの姿がおすみのやうに思はれたり、おすみの姿がNのやうに思はれたりすることもあつた。から云ふ絡みあつた二つの感情が、松の下に立つて居る彼をすつかり惑亂さしてしまつたのであつた。彼は兩手をあげた。唸るやうな叫聲を發しながらまつしぐらに傾斜を驅け下り、そのまゝ朝の海の中へ躍り込んだ。冷たい海水は飛沫を發して彼を受け入れた。水は帶から胸と浸して來た。紺絣の單衣の裾が、水を含んで母衣のやうに彼の背へ浮き上つた。彼はまた腕を組んで、暫くは惘然と海の中へ立つたまゝ考へ込んでゐた。――

この追憶は幾分か彼の心を悲しくもしたが、しかしあの土に絶望し切つた心持から救つてくれた。彼の眼は再び光つて來た。顔面の筋肉がだん／＼顫ひを帶び、そして緊張した、眞面目な表情となつた。新しい力が、必死の決心が、身軀一杯に溢れて來たのであつた。

「放つて置かれても、これ位に伸びて行く者さへあるのだ。努力だ、努力だ――何を失望することがある。土は立派な素質を持つてゐるのだ！」彼は確りした歩調でその一本の桑の周圍を巡り、親しさうに見上げて呟いた。「五町歩、十町歩、然う大仕掛けな計劃をしたのがつまり空想であつたのだ。事業家になるのではない、たゞ一人の農夫になるのだ。出來るだけ遣るんだ。今年出來なかつたら、また來年遣るまでのことだ！」

彼は最つと詳しく此處を觀察しやうと思つた。で、粟や小豆の中を分けて、土質や切株の狀態やを檢べて歩いた。何百年間かの積り積つた落葉が土と化してゐる良質の處も少くはなかつた。切株は五坪乃

室七坪に一つ位のものらしかつた。彼は一種の確信、あの情熱的な、空想的なものでは無かつたが、冷やかで最つと實際的な確信を感じだした。土を愛すると云ふ心持も、希望のやうに甦つて來るやうであつた。彼は自分の將來に幸福は期待されなかつたが、不幸だとも思はれぬ穩やかな氣分となつた。

「先づ大鍬を買ふんだ。」

と、彼はまた獨語つた。第一に松の切株と土中にある根とを堀り起し、地均しの必要な處には地均しを行ひ、それから出來るだけ深く耕し返すんだと思つた。勞働と肥料と、この二つがありさへすれば何んな荒地でも征伏出來ない筈は無いと考へられた。

彼は再度傾斜の激しい場所へ登つて行つて腰を下した。そして今度の計劃に要する地面の廣さを、眼をもつてほゞ區劃つて見た。それから腕を組んで、雪が降る頃までの仕事の豫定を考へた。

畑には蠶豆を植え、田には麥を蒔かうと思つた。蠶豆は苗を仕立てゝ移植するのであるから、最う少し後の仕事であつた。が、猪之吉と二人で働けば三日もかゝれば充分のやうであつた。田の麥は既に急いで居た。氣早やな者はそろ〳〵鋤返しにかゝつて居るのを彼も見て居た。で、明日にでも早速着手しやうと思つた。未だ彼自身の身體が勞働に慣れ切らないので、一段歩蒔くとすれば男の二人位づゝ二日は雇はねばならぬやうであつた。然うすれば三日間ですつかり終つてしまふことが出來ると思はれた。

彼は麥蒔きが終ると直に此處の開墾に着手しやうと考へた。

その年の天候の具合で慥かなことは分らないが、雪の爲めに仕事が全く出來なくなる迄には、未だ二ケ月近くはあるだらうと思はれた。男を二人雇つて猪之吉と四人で働けば、それまでにはざつと五段歩

以上の面積の松の根を堀り返すことが出來るやうであつた。殊に南向きの暖い土地のことであるから、春も早く雪が消えるだらう、それから地均しを行ひ、大鍬を振るつて深く耕せば、果樹苗の植付けの頃までには屹度立派に開墾することが出來る。あとはまたその冬、またその次の冬……。彼は又しても樂しい空想の中へ入つていつた。

　不圖我れに歸つて、彼は自分に附着してゐるものを振るひ落すやうに身體を揺つて立ち上つた。そして更に何物かを確めるやうにたわいを見下した。彼の頭腦にある通り、總てのものが確實に彼の眼にあつた。彼は安心の吐息を大きく一つ洩した。それから緩い歩調で右の谷間の方へ歩いて行つた。登つて來た時よりも違つた路を辿つて家へ歸らうと思つたのであつた。

　谷に面した傾斜の眞中へ、五尺も周つた栗の木がたゞ一本だけ殘してあつた。父親が何かの目的をもつて切らずに置いたものであらうと思はれた。彼は少年の頃、身軀一杯に漲り切れる程の喜悦を抱いて栗拾ひをしたことを思ひ出した。彼は寄ると云ふ意識も持たずにその木の下に立寄つた。割れて落ちた毬が無數に腐つてゐた。

　幸福な心持が甘く彼を浸して來た。彼は何事も忘れて熱心に周圍を探した。濃い褐色をした指先き位の栗が二つ三つ見付かつた。彼は少年の心のやうにすつかり有頂天になつて谷間へ下つて行つた。

　谷の底は五間ばかりの帶のやうな平地で、流れとは名づけられぬ程のさゝやかな流れが音を立てゝゐた。高い茨や榛の茂りが路を塞ぐやうに立並んで、あらゆる連鎖から切離して、此處だけを特に物佗びしい世界としてゐるやうであつた。陽は餘程傾いて、狹い谷間一杯に冷々とした秋の空氣が集合し重り

あつて縮かんでゐた。彼はその中を分けて歩いた。

丁度、谷の中央位の、かなり廣くなつた處まで來ると、彼は偶然に一人の女が藪の蔭から何事かしてゐる姿を發見した。女は深く頭部を下げてゐるので、彼の歩いて來る方から見れば、帶とその裾だけしか見えなかつた。が、着物の模樣から推して、それはまだ若い女であることが分つた。彼は村の娘の誰かだらうと思つた。輕い好奇心も起つた。然う云ふ馴染深い村の人達とは、歸宅後一度も顔を合して居なかつたからであつた。そして彼は、その時は格別穩やかな幸福な心持を抱いてゐたからであつた。

自分の方から先きに聲をかけて見やうと彼は思つた。けれどもその必要は無かつた。彼が近よつた跫音を聽くと、女は半身を起して振返つて彼を見たからであつた。女は蒼白な、何處か激しい憂鬱な顔を持つてゐた。眼か病的にギラ〳〵と輝いてゐて、珍しい筈の雪松の姿を認めても、少しも疑つた表情を起さなかつた。彼女はすつかり手をやめて彼と向ひあつて立つた。

激しい驚愕が雪松を石のやうに竦ました。ほんの一瞬の間に顔は白紙のやうに血の氣を失ひ、腋から冷たい汗がだら〳〵と流れた。立つて居る足部が惑々と顫へた。意外と云ふよりも、豫想外と云ふよりも、寧ろ突然に額を發矢と撲りつけられたやうな思ひであつた。閃光が視覺を襲つて直ぐ消えた。彼は自分の眼を疑つて、一度瞑つてからまた見直した。しかし間違ひでは無かつた。女の姿は依然として眼の前にあつた。心臟はまるで燒鏝を當られるやうに痛んだ。全身の筋肉と云ふ筋肉は悉く收縮して、言葉さへも咽喉から出なかつた。

かう云ふ彼の驚愕も、女には少しも分らぬらしかつた。彼女は一緒に來て居る連れの人に逢つたやう

な極めて親しい馴れ切つた態度で、幾分か氣忙しさうな早口で云つた。

「若様、此處にこれ、零餘子が澤山なつとりますぜ。」彼女は傍の一つの籔を指した。籔の中には丸い籾飾が置いてあつた。その中には黒瑪瑙の結晶のやうな零餘子がかなり多く入つて居た。彼女は今までそれを穫つてゐたのだ。「それ、澤山穫れましたでせうがな。」

「お、すみ！……」

と、彼は途切れ〳〵に押出すやうに叫んだ。が、霰のやうな感情の激動が神經の働きを停止させて、それから先きの言葉は咽喉にひつかゝつて出て來なかつた。たゞ纔かに顔を苦しく歪め、唇をもが〳〵と顫はせた。そしてそれに依つて漸く彼女との聯絡を保たうとするやうに、氣狂ひのやうな眼で彼女を睨んだ。

「若様。」と、また彼女は云つてヒステリックな笑ひ方をした。「若様は零餘子の穫り方を知つとりんさりますか？　かうして穫りますのですぜ。」

以前の如く彼女はくるりと後へ向き直り、深く前半身を垂れて籔を掻つた。彼女の臀部が彼を嘲けるやうに動いた。零餘子は音を立てゝ籾飾の中へ落ちた。

「おすみ！」

と、また彼は漸くにして叫んだ。彼が最つと冷靜に考へることが出來たならば、この場合に於ける彼女の表情や行動の中に、恐らく不自然な處のあることを發見したのであらうと思はれた。しかし彼の苛立ちやすい感情は、最初ちらと見たばかりで直に逆上してしまつた。彼女がこの土地に居らぬと云ふ安心

が、不意の相遇を一層激しく驚かした爲めでもあつた。場所が人氣もない山中の寂しい處であつたので、奇怪な恐怖に誘はれた爲めでもあつた。また多大の希望を抱いて歸鄕した直ぐのことでもあり、分けて幸福な心持となつて居た時の爲めでもあつた。そして殊にあゝした事件のあつた後に初めて相會しながら、羞恥も苦痛も悔恨も感じないらしい、平然たる態度は彼を全く混亂の裡におとしいれた。彼は心が落ちつけば落着く程、堪え難い屈辱の感じに襲はれた。總てを容認して行かうとした心持は最早何處にもなかつた。抑制することの出來ない憤怒、呪咀、憎惡、嫉忌の情が、過去に於ける彼と彼女との間に起つたいろいろの事實を一時に生々と血脈の中に甦らして來た。戰きつゝ父を尋ねて家へ歸つた怖しい心情も、純潔を泥に委した酷烈な苦痛も、みんな彼女に原因してゐるのにもかゝはらず、彼女はまるで知らない顏をしてゐるのだ。彼は齒を喰ひしばつた。眼界が血のやうに眞赤になつたやうに思はれた。

彼は一足踏み出して、强く彼女の肩を掴んだ。

あすみは振返へつて顏を擡げた。依然として同じ表情が、同じ不氣味な病的な眼が彼を怪訝さうに瞶めた。彼等は暫くは石のやうに睨みあつた。やがてまた彼女は顏を歪げてヒステリックに笑つた。何處かに媚を含んだやうな笑ひ方であつた。

最う彼は我慢が出來なかつた。赤と黑との溶けあつた視覺の世界の中で、彼の血潮が激しく分裂したやうに思つた。彼は更に嚇となつたのだ。彼女の肩を掴んだ右の手に力が入つたと思つた。

「畜生！」

と、彼は夢中で怒鳴つた。彼は彼女が恐しく長い時間をかゝつて、ふうわりと籔の中へ仰向けに倒れて

行くのを見た。何事か甲高い聲を發して叫んだらしくもあつた。が、彼はそれを見屆ける程の餘裕をもつて居なかつた。急に踵を返して、谷の口の方を向ひて、無我夢中で驅け出した。彼女が直に追掛けて來て飛びかゝるかも知れぬと云ふやうな恐怖が、その慌しい中に動いた。彼は魂を轉倒さして後も振返らずに驅け拔いた。

とう／＼雪松は谷を出切つてしまつた。眼界が急に展けて、深く茂つた立桑や、畑や、稻田などが眼に入つた。其處へ來て見れば未だ高い陽の斜光が、急に違つた世界へ來たやうに彼の眼を羞しく射た。彼は一度谷の方を振返つて彼女の追掛けて來ないのを見定めてから足を緩くし、大きく二三度吐息をして喘いだ。心臓は未だ破れるやうに高く鼓動して居た。

「畜生！……眞實に野獸だ！　蜘蛛だ！　恥しらず！」

彼の心は根底から荒びて來て居た。事業も愛も無かつた。殺伐な、血に餓ゑたやうな、自棄的な、あの故郷と生れた家と其處の人達とを呪つて出奔した時の感情に似た、全身を戰慄させる憤懣と苦しい苛立ちとが、熊手で引搔くやうに胸の中を搔き挘つてゐた。彼は血走つた眼で路の一角を睨めながら、何故最つとあの倒れた上を踏み躙り蹴飛ばして來なかつたのであらうと口惜しく思つた。自分に對する愧ぢも無かつた。反省も無かつた。

「だが――何と云ふ苛い、惱まし氣な顏をして居たのだらう。」

一寸立止まつて考へた。けれどもこの心持は彼女を憫れむ情を起すに足りなかつた。彼は彼女が若しも病氣であつた處で自業自得だと思つた。寧ろ痛快な復讐をすることだと思つた。彼は顫へる足を踏み

しめ踏み締め、唸りながらよろ〳〵と路を歩いた。何うかすると、つい眼に映つた石にさへ躓づいて轉びさうになつた。

路はずつと下つて、彼の家よりも二町ばかり上手の橋の袂で縣道と合して居た。彼の家は村から一軒だけ離れて、桑畑や稻田に圍まれた中にあつた。村は橋を渡つて更に二三町行つた右の山に添つてあつた。戸數で云つて五六十戸の、極めて小さな村であつた。周圍には高い山がそゝり立つて、何方を眺めても半里とは遠望が利かなかつた。その狹い谷間を一筋の川と一條の縣道とが曲りくねつて平野の方へ遁れて行つて居た。彼はこの縣道を、激情の爲め全身の力を失つて、白痴のやうに惘りとなつて家へ歸つて來た。

六

父親の武次郎は座敷一杯に狩獵の道具を並べて熱心に手入れをして居た。猫が眠つてゐるやうに、胸には何事か藏しながら面を優しく飾つて居るやうに見える普段の父に較べると、全身に活氣が滿ちて活々としてゐるやうであつた。雉子や小鳥を追ふ時の沸き返る血潮が心身に甦つて來て居るのらしかつた。

父に對する憤懣や呪咀は、都會に居る内に跡かたも無く消えた通りであつた。そして殘る處は彼自身の悔恨と愧ぢとだけであつた。この心持はその時でも少しも變りは無かつた。けれども折りが折りであつたので、言葉を交すのは彼には苦痛であつた。が、父の居る座敷を無言で素通りにすることも出來かねた。彼は惱みながら一寸膝をついて、暫くの間見なかつたこれらの獲物袋や、ケースや、帶皮などを珍

しく眺めた。
「お前は未だこの銃を知つとらなかつたらうな？」父親はかう云つて贅澤な英國製のグリーナ二連銃を雪松に示した。掃除を終つたばかりの銃は出生を誇るやうに光つてゐた。借金の整理を終つて家に居つくやうになつてから買入れたのであつた。自慢らしく構造や特長に就て說明を加へたりした。「しかしな、最う好きな鐵砲打ちも駄目になつたわい、肥つて歩けなくなつてな。‥‥狩獵家の第一の資格は犬を上手に使ふこと、第二は足の達者なこと、鐵砲のあたるあたらんは次に行くのだからな。」
　彼が默り込んで相手にならないので、父親は不思議さうに注視した。
「何うしたんだい、ひどく顏色が惡いじやないかい？」
「いゝえ。」
　何氣なく裝つて、輕く彼は頭部を橫に振つた。けれども心は穩やかでは無かつた。そして父にさう訊かれたことは、竦つと身震ひのつくやうな苦しさであつた。彼は思はず脂汗を流した。戰きながら父を凝視して自分で質問を發して、却つてその回答を懼れた。
「父さん、おすみね。彼女は何處か遠くへ嫁に行つたと云ふ話を聞きましたが、さうでは無かつたのですか？」
「おすみが‥‥？」父親は雪松が未だ自分と彼女との關係を疑つてゐるのだとでも思つたらしく、不快と嘲りとの表情をもつて云つた。「あゝ行つとるよ、Cにね。‥‥一年も、最つと前のこつたよ。」
「でもね、今逢ひましたよ、H谷で‥‥。」

「あゝ、然うか、お前は彼處へ行つたのか。」

父親は漸く質問の理由が分つたと云ふやうな顔をして、愛銃の臺尻を平手で撫でながら云つた。「病氣だと云つてな、一月ばかり以前から自分の家に歸つとるつちゆこつた。……他人(ひと)の噂では、離緣になつて戻つたゞらうと云はれとるよ。」

父親の頰には不意に毒々しい、一種の慘忍性を帶びた笑ひが浮んで來たが、電光のやうに直ぐに消えた。おすみの話はそれで途切れて、また狩獵の方へ移つた。二人共追求して語るのは苦痛であつたからであつた。彼は間もなく二階へ上つて、自分の部屋の四疊半へ入つて行つた。

自分の生長が芽生えて來た部屋、自分の苦痛が芽生えて來た部屋、その四疊半は恐しくもあつたがまた懷しくもあつた。雪松は巢立ちをした燕が荒い太洋の上を翔つて歸つて來たやうな氣で眺めまはした。かうして落着くことは何年振りかであつた。恐しかつた、暗かつた、悲しかつた、そして勇敢であつた、希望に滿ちた、目覺しく生長した何年振りかであつた。

部屋はその當時と同じことであつた。襖の古びさへも見られぬやうであつた。殊に繼母の心盡しであらう、机も本箱も昔の場所に昔のまゝに置かれてあつた。まるで昨日別れて今日歸つて來たやうな有樣で、長い時間の障りは何處にも少しも見られなかつた。尤も何となく荒廢したやうな氣分も無いではなかつたが、それは長く人が住んでゐなかつた爲めであらうと思はれた。既に綺麗に掃除も出來て、旅から持つて歸つた鞄や包みが持運ばれてあつた。机の前には見覺えのある座蒲團も敷いてあつた。

女中のおしげを呼んで手傳はして、本箱の中や押入れなどを整理し、荷物を片附けやうかと思つた。

けれどもそれで無くてさへ思ひ出に襲はれがちな部屋の姿は、おすみに出會つた、そしてあの苛立つた盲目的な行動を敢てした感情と絡みあつて、容易に沈着いて室内の整理などをする氣分になることを許さなかつた。彼はやがて机によりかゝつて額を抑へた。

おすみがこの土地に居ないものと信じた爲めに歸郷したのであつた。それにもかゝはらず歸郷の第一日に、然も物語のやうに傳奇的に相會したのであつた。彼は歸郷したことを悔んだ。そして切離すことの出來ない運命の連鎖を怖れた。何物も失つてしまふやうな當惑を感じた。忘れやうと思つてゐた、忘れたと思つて居た、また或る時は容認しやうとも思つた、容認したとも思つた過去の事實が、慚愧悔恨の、苦痛懊惱の實感的な幻影となつて活々と彼の心盤を訶んでも來た。再びその當時の自分の姿を其處に見るやうな氣もした。それはみんなおすみに聯關を持つたことであつたのだ。みんなおすみに依つて起つた怖しい、厭はしい出來事であつたのだ。

「だが、既に既に過ぎ去つたことだ。過去だ。過去は何うあつた處でやむを得ないのではないか。」暫くの後、彼は漸く自分に歸つて、困憊の餘り自分に辯解しやうとするやうに呟いた。「さあ、生のある限り、その虐げがおれに必要ならば何處までも虐げろ。おれはそれを鞭とし糧として生きて見せる！」

が、彼の心は息まらなかつた。事實の上から云つて、若しも彼女が噂の通り離縁になつて歸つて來て居るやうなら、彼女に對する確固たる意志を定めて置かねばならぬやうにも思つた。愧ぢも反省も少しも持つて居ないらしい彼女は、單に彼が加へたあの苛立つた行動のみに對しても、乾度何事か復讐的な事實をたくらんで來るに違ひないと想像されるからであつた。けれども彼は徒らに鬪ふことは最早苦痛

であつた。その他のことは、混亂に混亂を重ねたその時の彼の頭腦では分らなかつた。その内でたゞ一つ、彼女は今は父とも分れて居る、と云ふことだけは明瞭に彼に安心を與へた。この父親が圏外へ出て居ると云ふことは、如何なる事變に際しても以前よりも忍ぶことの出來ると云ふ意味であつた。これから後に起ることは彼と彼女との間に於けることのみのやうに考へられるからであつた。

「しかし仕事だけは初めやう。」

突然に彼女が出現したことは、前途に對する凶兆のやうにも思はれた。が、幸福や不幸などは問題では無かつた。乘りかゝつた船に何處までも乘つて行かうとする自棄的な考へからでもあつた。事實に對する反抗的な氣持からでもあつた。仕事の爲めの仕事であつた。とは云ふものゝ、彼の空想や理想が全然消え失せた譯ではなかつたのであつた。彼は固く固く決心をした。

仕事は豫定の通り滿足に進行するやうであつた。小作をさして居た田地の遣り繰りをして、家より左程離れて居ない場所へ五段歩ばかりの田地を纒めた。明年は小手調べのことであるから、一先づそれだけを雪松の手にて耕作することにしたのであつた。

父親も彼がだん／＼着實に計劃を實行しやうとするのを見て、最初は幾分か輕蔑もして居たらしかつたが、次第に自分もその渦卷の中へ入つて來た。種子のことや肥料のことなどを、自分が先きに立つて心配をした。そして少し仕事が片づいたら一緒に銃獵に出掛けやうなどと彼を誘つた。

一週間の後、彼は田の麥を蒔きにかゝつた。少し遲くはあつたが、村でも未だ蒔いてゐる者もあつた。最も忙しい收穫時で、麥田へ下肥や厩肥を運ぶものや、家へ乾いた稻を運ぶ者やが、狹い田圃路を行つたり來たりして居た。秋は丁度澄み切つた頃で、來る日も來る日も蒼い高い空が見られた。

牛部屋の母牛が仔牛と引き離されて追ひ出された。猪之吉が田を鋤返した。田の土が未だ濕りを帶びて居るのと稻の根が生きてゐるのとで、母牛はなか〳〵苦しさうであつた。直に口から泡を吹き出して、腹を波のやうに喘がした。

忙しい時期と頼み遲れた爲めに、人は思ふやうに雇はれなかつた。與七と云ふかなりの老人が一人だけ來てくれたばかりであつた。で、女中のおしげも連れて出た。彼れは猪之吉が鋤返したあとを隴(さく)に作つた。鍬で溝に落ちて居る土を掻き上げて、足でそれを上手に隴へ壓しつけて形を完成させるのであるが馴れない雪松には何うしても手際よく行かなかつた。直に掌に肉刺(まめ)が生じて鍬を握るのが辛くなつた。

彼は何處からか中學校時代の古服を探し出して、そのズボンの上に猪之吉の手製のハバキ（藁で作つた脛當）をはいてゐた。上着は何時の間にか脫いで、白いシャツ一枚になつてゐた。それでも快よい汗は全身から瀧のやうに流れた。與七が一本の隴を作る間に、未だ半分にも達しなかつた。そしてその隴は卵を呑んだ蛇のやうに、ところ〳〵太くなつたり細くなつたりして曲つてゐた。

「何んの！」

彼は自分を激勵した。慣れない力業(ちからわざ)は骨が撓むやうに苦しくはあつたが、然う云ふ苦しさは、然う云ふ愉快な苦しさは、未だ彼が感じたことの無い幸福なものであつた。曾つて少年の頃猪之吉に鎌を研い

で貰つて稻を刈つたことのあつたのを思ひ出して、その時の懷しさが身に泌みたりした。餘りに懸命に焦つて力を出すと、輕い腦貧血を起して眼がくらくらとまはつて來た。彼は度々鍬の柄の上に手を重ねて乘せて立つて休んだ。そして最う耐えられぬ程の疲勞が來た時は午飯の時刻であつた。

午後は父親も田圃へ出て來た。家の中に居るよりも外の方が氣持の好い晴れ方であつた爲めでもあらうと思はれた。しかし狩獵の時の厚ぼつたい焦茶の外套を着た、錆びた鍬を擔いだ、肥つた姿が田圃に現はれた時には、誰も殘らず氣嫌がよくなつて一時に笑ひだした。が、父親は仕事らしい仕事はしなかつた。畦に腰を掛けてゐて、煙草をのんだり猪之吉や與七の邪魔をするやうに話しかけたりした。たまに隴に向つても、ものゝ五分間とも經たぬ間に吐息を洩して鍬を放り出した。

「何うも肥つてはいけんわい。息切れがしてどもならん。」

父親は又畦に行つて腰を下した。與七は輕く鍬を動しながらどん／＼と仕事をして行つて居た。話をしても矢張り手は休めなかつた。

「でも若い時には働かれましたゞになあ。」

「そりや、若い時には少しは働いたこともあるけどな。」

與七は笑つた。働く方になつたら何と云つても此方の領分だぞと誇つて居るやうに見られた。實際、雪松も子供の時に夕方父親が野良から鍬を擔いで歸つて來たことのあつたのを悧りと覺えて居た。けれども明瞭と記憶に殘るやうになつてからは、斷ず家の中ばかりに籠つてゐた。田植や稻刈りなどの家族總出の時などに出掛けて來ることがあつても、その日と同じく迂路々々としてゐて仕事はしなかつた。

雪松は午后は田の土を鋤返した。猪之吉が母牛の鼻を捉へて先導として歩いてくれた。鋤が深く入れば柄を抑へ、淺くなれば持上げるやうにと教へられた。が、何うかすると床土までも鋤込む程深く入つたり、淺く土を掛けすぎて一間も二間も上面を走つたりした。狼狽すれば狼狽する程左の鋤の柄を握つた腕が勞れて、肩の處から離れさうに思はれた。しかし彼は我慢をして、齒を喰ひしばつて續けて行つた。いよ〳〵駄目だと云ふ頃を見計らつて猪之吉が代つてくれた。

「春、鋤返す時には氣をつけんといけんぜ。」猪之吉は輕く自由に牛と鋤とを使ひながら、自慢さうに大聲をあげて笑つた。「どうだい、この邊の隴の底はちつとも土が起きとらんがなあ。」

最う彼は鍬も握れなかつた。朝から、他人は何うしやうと自分は自分だけの事をすると云つたやうに、執念く默り込んで手で土を持ち上げて隴を作つてゐる年若いおしげに習つて、彼も手で隴を作り初めた。

「最う往生したのかい、早い弱り方だなあ。」

と父親は彼を見て笑つた。「でもな、一時に働くより悠りと慣らしていく方が好えけな。」

彼も笑つて答へた。が、自分の弱り方が涙ぐましく思はれた。餘りの幸福が彼を感傷的におちいらしたのであつた。彼は立つてシャツの袂で顏の汗を拭つた。直ぐ三町ばかり上手に家が見えてゐた。十棟に近い白壁赤甍の一廓が塀に圍まれて誇るやうに陽炎つてゐた。彼の生れた家であつた。彼は初めて眞に生き得たやうな激しい喜悦を感じた。何物かに、然うだ分らない何ものかに、叮嚀に頭を下げて感謝の情を沁々と述べたいやうにも思つた。大聲をあげて喧きたくも、他人が居らねば泣き出し度もあつ

た。しかし彼は笑つた。

七

夜中彼は自分の唸聲を耳にして居たやうに思つた。けれども仔犬のやうにぐつすりと好く眠つた。眼が覺めた時には既に日が高くあがつて居た。身體は動かれぬ程に激しく痛み、節々が音を立てゝ鳴つた。彼は今日は迚も働けぬと思つた。物佗びしいやうな悲しさにも襲はれた。が、無理に勇氣を出して起上つた。起上つて見れば眠つて居つた時とは違つて、また新しく勵まされた。

「さあ、遣れるだけ、身體の續く限り遣つて見せるぞ！」

彼は幾度も同じことを繰返した。

朝の内に彼は種麥の鹽水選を行つた。そして鹽水からあげたのを水で注いで蓆に乾した。其處へおしげが眞青な顔をして歸つて來た。

「誰も來てくれません。」

昨日の仕事が豫想よりも意外に進涉らなかつた爲め、今日は二人ばかり人を雇ひ增す都合でおしげを村に遣つたのであつた。彼は例の古服を着て裏庭の廣場へ立つてゐた。

「何うしたんだい？顔が靑いよ。」

と、彼は訊いた。

「あの、あの、おすみさんが……。」おしげは自分の心持に恐怖を感じてゐるやうに身體を顫はせて云つた。「おすみさんが、自分の家の前の道の眞中に立つとんさつたけ、聲を掛けて挨拶をしたけど默つと

りんさりました。……青い青い、ほんとに凄い顏をして、髮を振り亂して、破れた着物を着て。……ええ、そりやほんとに氣味が惡るござんした。」

おすみ？おすみ？あつ然うだ、彼奴と彼は思ひ出して憤怒した。けれども彼女のことを考へるには餘りに心が一方に集中してゐた。何んなことを企つても好い、最う自分一人だけのことだ、自分一人が苦しんで行けば好いのだと思つた。それよりも彼は人の雇はれなかつたことに當惑をして腕を組んだ。

「父さん。」彼は家の何處に居るとも分らない父へ外部から大聲で呼びかけた。「父さん、二人共駄目ですつて。外に誰か來てくれるやうな人はありまんかね？」

「さあなあ。」思ひ掛けなく直ぐ其處の窓の障子を開けて父親が顏を出した。「今日は最う仕方があるまいぜ、みんな仕事にかゝつたけな。」

武次郎も暫くは思案をして居た。

「今晩早く歸つておしげに賴ましとくだな。三人も雇へば明日には濟むだらうけえ。」然う云つて家の内を振り返つた。「さあ、今日は家內中總掛りだ。おとく、お前も出な、雪松の門出だ、景氣をつけてやれ。」

父とおとくとおしげと、家內總掛りにかゝつた處で日雇の一人分の働きが出來る筈はなかつた。彼はみんなの滑稽な服裝を思ひ浮べて可笑しくなつた。が、さうしてまでも勵ましてくれる父の厚意には感激した。猪之吉と與七とは旣に田圃へ出掛けてゐた。

手筈はきまつた。みんなは散るやうに分れてしまつた。彼は鍬を擔いで、口笛を吹きながら田圃へ出

て行つた。寢覺めに感じた、あの肉と骨との離れるやうな疲勞は最早何處にも無かつた。身體を動かせば未だ痛みと懈るさとが殘つてゐるやうにも思はれたが、働くことの幸福がそれらに打ち勝つて行つた。彼はたゞ自分の行ふことのみを知つてゐる盲信者のやうな心持で動いた。今日も猪之吉は母牛を使つて鋤返してゐるが、半日も經てばそれは終るだらうと思はれた。彼は掌に痛む肉刺を忍んで鍬を振つた。

父親と繼母とが連れだつて田圃へ出て來たのは十時を過ぎる頃であつた。父親は昨日と同じやうに畦に腰を掛けて煙草をのんだり、冗談を云つてゐたりした。繼母はおしげと向ひあつて一本の隴を作つて行つた。彼も次第に慣れた。昨日程に力を入れずに上手に鍬を使ふやうになつた。

午後もすつかり家の雨戸を閉め切つて出掛けた。鋤返しが終つた爲め、母牛は仔牛の傍で長くなつて寢た。家の中に殘つた生物は、たゞこの二匹の牛だけであつた。

黄金粉を天地間に振り散いだやうに輝きを持つた午後の陽が、狹い谷間のその一帶の平地を飽和して居た。遠くの方には麥を蒔く人や、稻を刈る人の群れがあつた。小さく蠢めくやうに鮮やかに描き出されてゐた。晩稻はまだ刈るには早やかつた。柔らかな黄色にやゝ綠を含んだ稻が、微かな風の足跡を見せて音律的に靡いた。

猪之吉も午後はみんなと同じやうに鍬で隴を作つた。鉢卷きを締めて、一番元氣よく、一番手早く働いた雪松は時々鍬の柄に身體を靠せるやうに立つて休んで、額から流れる汗を拭ひ吐息を洩した。總てが穩やかであつた。其處には少しも人間と人間との爭鬪は無かつた。たゞ人間と自然との抱きあつた姿

があるばかりであつた。彼は眼を瞑ぢてみた。瞼の肉の中の血脈が陽に透けて赤く見えるのみで、心には少しの蟠りも無かつた。彼は微笑んだ。そしてまた鍬を取上げて土を掻き上げて隴の腹へ持つて行つた。何等の意識も使はない内に、左の足がその土を抑へて隴の土と融合さした。

晝飯が終つてから餘程の時間が經つたやうにも思はれたけれども陽は南を離れなかつた。土は露骨にその光りを受けて居た。畦に生えた名も知れぬ一本の雜草も、山の樹木に群らがる無數の葉も、悉く黄を帶びて輝いて、再び來ることの期待されぬこの光線の祝福を喜んで受けて居るやうに思はれた。

何故か自分にも理由が分らなかつたが、不圖彼は氣が付いた。しかし其の時には既にみんなが氣が付いて居た。疑問の言葉を發する者は無かつたが、立つて其方ばかりを凝視して居た。おしげが兩手を上げて、被つてゐた白い手拭を取つて亂れた頭髮を掻き上げた。

「何だらう？何事だらう？」

彼は自分に呟いた。

家の前の縣道を今此方へ向つて動いて來つゝある何物かの形を認めたからであつた。彼は少し近視となつた眼を細めて注視した。が、まだ明瞭とは分らなかつた。たゞ白い、人の姿のやうであることだけは受け取れた。驅けつて居るものらしく、かなり早い速度で近よつて來つゝあつた。

「何でしやうね、父さん？」

かう云つて父親を振り返つた。父親は答へなかつた。その顏には疑惑と恐愕の表情が浮んで居たやうであつた。

彼は竦つとした。何故に父親の顔を見たばかりでそれ程驚いたのだらう、後になつて考へて見たけれども分らなかつた。彼は父親から視線を移して再びその白い形へ眼を遣つた。今度は明瞭と分つた。そして彼は躍り上る程驚いてしまつた。確かに女の裸體の姿であつた。黒い頭髮が亂れて背後に長く靡いてゐた。それ程早くその女は驅けつてゐた。

「誰だらう？……何の爲めだらう？……喧嘩かしら？喧嘩にしては後を追つて來るものが無い！」彼の頭腦は迅速に考へた。最初姿を認めてからその間が、約一分間位のものであつた。「あ、あ、あ！……」叫ばうとしたが聲は息と共に止まつてしまつた。全身の筋肉が悉く痙攣を起し、顏が眞青になつて激しくがたがたと顫へた。動かうと思つたが、手足の一箇處も動かすことが出來なかつた。まるで土の上に釘付けされたやうであつた。

「おすみだ！」

と、誰かゞ絞り出すやうな聲で叫んだ。續いてまた、

「おすみだ！」

と、鸚鵡返しに同じやうな驚愕に充ちた聲で誰かが叫んだ。あとは永遠のやうに長い、絶大な沈默が來た。立ち竦んだまゝ、一人も其の場から動くものは無かつた。お互ひに顏を見合はせるものも無かつた。

眠つて居た平地の空氣は、忽ち眼覺めて狂亂し初めた。打突りあひ、嚙みあひ、虐げあつて猛獸が爭うやうに渦巻いた。その中を射透す光線を大理石のやうに白い肉體に正面に受けて、彼女はひた走りに

走つて來た。右手で靡く頭髮を抑へ、裸の足で道路の砂を蹴飛ばし埃を捲きあげた。

彼等が麥を蒔いて居る田は、直ぐ縣道に沿つてあつた。おすみは其處まで來ると、急に身體を飜して麥田の畦に躍り上つた。危險が來た、何かしら怖しいことが――みんなは恐怖の爲め空氣の色が變つたように思つた。呪はれて動かぬ足部を見棄てゝ、たゞ胴體だけが危險から遁れやうとするやうに、身體を等しく後へひいた。けれども彼女は彼等が其處へ居ると云ふことには氣が就かなかつたらしく、畦にひき殘つて居た枝豆を一摑み引き拔くと、また縣道に飛び下りて驅け出した。何處を目あてとも、何處が限りとも、云ひやうの無い無慘な疾走のしかたであつた。

畦に躍り上つた時、雪松は彼女の顔をよく見た。瞬間のことではあつたけれどもよく見た。一生忘れることの出來ない、押しつけられるやうな病的に物凄い顔であつた。血の氣を失つて草葉のやうに蒼ざめて居た。口は石のやうに固く固く噤ぢられてゐた。眼は血走つて据り、終生瞬きをすることはあるまいと思はれる程睜つて居た。が、彼の心を焼き盡したのは、然う云ふ部分々々のものでは無かつた。顔全體であつた。顔全體に漂よつてゐる凄愴な感じが、見る者の心を抉りまはさねばやまぬ、魂に衂つた苦痛を表はしてゐた。今にも呼吸が止まるかと思はれる程肩を動かして喘いで居た。

彼女の姿は彼等の居る場所からだん〳〵離れて行つた。彼女は猶も駈けりに駈け拔いて居るのであつた。彼等の視線も彼女から離れなかつた。

丁度、彼女の先きを、この地方でよく見掛けるやうに、棒のさきに一升德利一つをつけて擔いだ男が歩いて居た。一里餘り離れた宿場へ買物にでも行くらしかつた。男は肩にたゝんだ赤毛布をかけてゐ

た。彼女はその男に追ひつくと、突然後から赤毛布を奪つて身體に卷いた。羞恥の情が、未だ彼女の何處かへ殘つて居る羞恥の情が働いて、肉體の露出を蔽はしたのかも知れなかつた。男はひどく驚いたらしく、一時は立止まつて彼女を眺めてゐた。が、やがて駈け出して彼女を追づた。この二つの姿は絡むやうに糾れあつて、山を切割つた出鼻から隱れて行つた。

「とう〳〵行つた。」

と、彼は思つた。激しい感情の動きの爲めに、彼は腑拔けたやうに悄然として立つてゐた。頭腦の中に動く意識らしい意識は何物も無かつた。若しも何かゞあつたとすれば、それはたゞがんがんと鳴り響く血潮の戰慄する音だけであつた。しかし彼女の姿が見えなくなると、彼は思はず安心したやうな、心の底から發する太い吐息を洩した。

「何うしたんだらあ？」

「氣がちがつたんだらあぜ！」

「何うしたんだつて？」

「氣がちがつたんだつて！」

「氣がちがつたんだつて？可哀さあになあ……」

今まで一言も洩さず、一歩も動かなかつた彼等の仲間から、急に喧しく話聲が起つて來た。それが、まあ自分達で無かつて好かつたと云ふやうな、また自分達で無かつたことを知ると同時にひどく好奇心を燃して居るやうな話し振りであつた。けれどもみんなの顏がひどく不安に縮み上り、洒されたやうに

蒼白と變つて慄へて居た。

彼は鍬を棄てゝ父の傍へ歩いて行つた。

「氣がちがつたんだね？」

雪松も同じことを云つた。それより外には云ひ方が無かつたのであつた。

「ひ、氣がちがつたんだ」

父親も同じことを云つた。父子はそれ以上に話を進めて、彼女に關聯したいろ〳〵の事件の思ひ出されることを恐れて居るやうな氣持であつた。暫くはそれ切り二人共默つてしまつた。

彼は父親にならつて畦に腰を下して、非常に必要に迫まられて居るやうな心持で、頭部を抱えて考へ込んだ。が、考へることは何も無かつた。漸く心が緩むと同時に、何故あのまゝに走らしたか、何故止めてやらなかつたかと、殆んど苦痛に近い後悔が起きて來たばかりであつた。とは云ふものゝ心の内には、何處までも走れ、それがお前の、彼女の最も似合つた運命だと云つて居る、自棄的な殘酷なものも動いて居たやうであつた。

「彼女（あれ）の家は氣ちがひになる血統だけなあ。」

と、父親は思ひ出したやうに彼に云つた。武次郎も自分と彼女との間に於ける過去の事を思ひ出して、自分に辯解がしたくなつたのであらうと思はれた。「お母あの方がいけないんだよ。矢張り氣がちがつて首を縊つて死んだんだけな。……とんちんも若い時には一時は氣がちがつとつたこともあるんだ。」

然う云つて父親はまた暫く沈默した。

八

ものゝ十分間とも經たぬ後のことであつた。

「歸つて來た！歸つて來た！」

と、猪之吉が叫んだ。父親と彼とは未だ畦に腰を下して居たが、他の人々は、例へ心から不安を取去ることが出來なかつたにしても、殆んど以前の何事も無かつた時と同じやうな樣子で仕事に着手して居た。彼は立上つた。みんなも手を休めてだん〳〵慣れて來た眼に一層深く好奇心を燃しながら眺めて居た。この顫へる程の恐怖の伴つた突然の出來事は、實際類の無い珍しい觀物であつたに違ひなかつたのであつた。

父親は極めて悠りとした步調で畦傳ひに縣道の方へ步いて行つた。彼も無意識に父親の後を隨いて行つた。先刻感じた、捉へて靜止させやうと思ふ心持は、再び彼女の姿を見ると同時に殘りなく身體から消え失せてゐた。何うにでもなれと投げ遣つた心持も無くなつてゐた。代りに繩のやうに糾はれた、恐怖とも苦痛とも例へ方の無い感情の激動がたゞわく〳〵と慄へさしてゐるのみであつた。父親も恐怖を感じて居るらしく、何處となく微かに顫へてゐるやうであつた。

おすみは右に長い竹切れを一本、地をひきずりながら持つてゐた。何處で何うして求めたのか、一束の草を抱えて居た。依然として緊縮と蒼白とのその顏には緩みは見られなかつたが、身體には疲勞が激しく來たのらしく、立つて眞直には步けぬやうによろ〳〵としてゐた。

「何うも大變なことになりましたなあ。」

縣道を隔てゝ立ちながら、村の芳次郎と云ふ農夫が父親に話しかけた。何時、何處から現はれて來たのか、今まで彼は少しも氣が付かなかつたのであつた。晩稻の刈りにかゝらうと思つて居るらしく、手には研ぎすました鎌を持つてゐた。

「うん、大變なことになつたなあ。」

父親は縣道に下りて行つて彼女と接近するのが怖しいと云ふやうな格構で、畦に立つたまゝ彼女を眺めてゐた。

「とめん方が好えでしやうな、氣ちがひのこつてすけ。何んなことをするか分りませんけえなあ。」

「うん、さつき止めたらうかと思つたけど、然う思つてとめなんだ」

嘘を云つてゐる、と彼は思つた。何故に嘘であらう、恐いからとめなかつた、しかし父は彼女との過去の聯關を怖れてゐるのだ、彼はそんなことを考へてみたが、判然とは分らなかつた。おすみは彼等の前まで來た。

突然、彼女は持つてゐた竹切れと草束とを放り出して芳次郎に躍りかゝつた。彼等は叫ぶことも出來なかつた。そして芳次郎が驚く暇に持つてゐた鎌を奪つた。

「何をするんだい！」

芳次郎は顫へながら叫んで、鎌を取り返しにかゝつた。直にまた驅け出さうとした彼女は、捕へられた手を捥ぎ放して向き直つた。鎌が機糸のやうに縱横に空氣を切つた。

「危險い！」

「危險い！」

殆んど同時に父子は叫んだ。けれども一層心臟の凍るやうな恐怖を覺えて、一步も動かれなかつた。芳次郞も狼狽てゝ三間も後へ飛び退いた。

彼女は驅け出した。鎌を振りながら縣道をもと來た方へ驅けつた。氣ちがひに刄物を持たしたと云ふことは更に彼等を不安にした。芳次郞は取り返さねばならなかつた。彼女が放つた竹切れを拾ひあげて後を追つた。一町も行つた。芳次郞はその竹をあげて、彼女の露はな肉體を力に任せて打つた。獸のやうに尖つた悲叫が、それは迚も人間が發すると思はれぬ悲叫が、彼等の立つてゐる處まで傳つて來て、彼等の病んだ心臟を猶も虐げた。芳次郞は續けて二度も三度も打つた。

悲鳴は續いて起つた。彼女は身體を竦めて道の傍へ蹲つた。芳次郞は彼女の鎌を持つた手に飛びかゝつて捕へた。けれども彼女はまだ離さなかつた。芳次郞に噛みつかうとでも思つたらしく、手の方へ顏を近よした。芳次郞は足をあげて彼女の腭を蹴つた。彼女は鎌を離して仰向けに倒れた。芳次郞は直に飛び退いた。そして後を振り返り振り返り驅け出して來た。

父親はまた畦に腰を下した。が、彼は腰を下すことも出來なかつた。凝固した瞳は蒸きつけられたやうに、寸分だに彼女の上から離れなかつた。陽はだん／＼斜めになり、何處かに少し冷たさを帶びて來たが、それでもまだ光り輝く光線は彼女の周圍と肉體とに降り濺いで、嘆きと悲しみとの舞踏を續けてゐた。

倒れてゐた彼女は、やがて極めて間鈍く起上つた。そして少しく跛足をひくやうな調子でふら／＼と

歸つて行つた。彼は遠ざかるに從つて次第に惘りとなつて來る姿を、眼を細めて何處までも追つた。漆黑の垂れた頭髮がキラ〳〵と陽に反射をした。

彼の家へ彼女が近づいていつた時、彼は一種の豫覺を感じた。その時は既に姿は判然とは見えなかつたが、白い形だけはおぼろに受取ることが出來たのであつた。果して豫覺の通り、彼女は彼の家の道に面した裏門の邊りで消えた。家の內に入つて行つたのであつた。長年生長して來た家のことであるから、例へ戶が全部締切られてゐても、何處が開くかと云ふことは彼女には分つてゐたのであつた。そして麥田からは家が直接見渡されてゐるので、完全に戶締りもしてゐなかつたのであつた。

ふと自分に氣が付くと、雪松は縣道を家の方へ向つて懸命に驅けつてゐた。直ぐ後を父が肥つた身體を揺りながら、喘ぎ喘ぎに靑くなつて驅けて來て居る。遲れて繼母とおしげとが馳けて居るのも眼に入つた。

「何をするのだらう？……火を放けるかしら？……それとも首を縊るのかしら？……物を毀すだけかしら？……」

忙しく彼の頭腦は動いた。けれども最早恐怖的には感じなくなつてゐた。まるで他人の話を聞くやうな興味的な心持であるやうに思はれた。刺戟され過ぎた彼の覺感は、莫迦のやうに感受性を失つてしまつて居るのであつた。彼は第一番に家の前まで驅けつけた。

突然、二階の雨戶が一枚開いた。おすみが其處から顏を出した。彼は立止まつてたゞ茫然と彼女を見上げた。

「降りて來い！」

漸く驅けつけた父親が、息を切らして怒鳴つた。彼女は雨戸を繰り初めた。

「降りて來い！」

最一度父が怒鳴つた。彼女は何か言葉の明瞭と分らない早口で叫ぶやうに云つた。そして父親を莫迦にして居るやうな眞似をした。

「降りて來い！」

父親は憤怒に顏を赤くして裏の方から家の中へ入つて行つた。彼も怒つた。石を拾つて投げつけて遣らうかと思つた。彼女の氣ちがひになつたことも忘れたやうな氣持であつたのであつた。が、それも爲し得ないで、たゞ眺めて居た。

周圍の田圃で働いて居た人々は、堪らなく面白い觀物を發見したやうに、驅けつて集つて來た。村に於けるおすみの唯一軒の遠い親類に當る家の主婦のおとねが、この時漸やくおすみの着物を抱えて遣つて來た。顏を不安さうに歪めて、全身をおど／＼と慄はしてゐた。恐怖の餘り捉へやうと云ふ考へも失つてゐるらしかつた。

彼女は彼の部屋へ入つて行つたらしく、一時は姿を隱した。それから急いで本箱や机や額縁や小箪笥などを持出して來て椽側へ並べたてた。

「おとね、早う連れて下りて來んかい、みんな物をめぐぞ！」

集つて來た人達はかうおとねに云つた。おとねは哀れにもすつかり戸迷つてしまつて、迂路々々と狼

狽した。

「おすみさん！おすみさん！下りて來てごせいよ。お前がそんなことをしてごせると隠居さんに濟まんけな。」おとねは泣聲を出しておろ〱と云つた。「よ、下りて來てごせいよ。濟まんけ！」

並べた品物の陰に隠れるやうに凝然と身體をひそまして居た彼女は、全身をまた群集の前に表した。白い身體の所々には、蜥蜴のやうに蒼紫に腫れたり、痛々しく血が滲んだりして居た。大方芳次郎に打たれた跡であらうと思はれた。

「濟まん？濟まん？」と彼女は不思議さうに繰返して思案をした。「濟まん！濟まん！ほんとに濟まんけ、これを投げる！」

小簞笥を重さうに、歯をくひしばつて彼女は持上げた。

「投げてはいけんぞ！」群集は口々に狼狽して叫んだ。「投げてはいけんぞ！」

「そんならこれを投げる！」

彼女は今度は玻璃入りの額縁を持上げて、欄干より外に出して眞實に投げさうな格構をした。

「投げてはいけんちゆうに‥‥！」群集はまた口々に怒鳴つた。「おとね、早う上つて捉まへんかい！何をぐず〱しとるだい！」

狂路ついて居たおとねも、詮方なく裏門の方へ廻つて行つた。

不意に彼女は、空に響き返すやうな聲をあげて笑ひだした。何が可笑しかつたのであらう、群集を指して、腹を抱えて笑ひこけた。何時までも何時までも笑ひ續けた。聽く人は頭腦から冷水を浴びせられ

るやうに、魂を冷して氣味惡く慄へ上つてしまつた。が、彼は何を見ても實感的な感情は起らなくなつて來た。この光景さへ、遠い遠い世界へ起つたやうに思はれて仕方が無かつた。何うしても時間の隔りのある事件のやうに思はれてならなかつた。すべてが薄く霞んで、ぼんやりとしてゐた。

「何だつて騷ぐのだらう？何だつて好いじやないか？」

とは云ふものゝ彼は自分の持つてゐる重苦しさには耐えられなかつた。其處をそのまゝ見棄てゝ、何處かへ歩いて行かうか、と云ふやうな意識もあつたやうであつた。それよりも何よりも早く一人になりたいとも思つた。一人になつて何をするのか、考へるのか、それは彼自身にも分らないことであつた。しかし彼は矢張り群集と同じやうに仰いで彼女を眺めて居た。

「雪松さん、上つて捉まへんと、物をめぎますぜ。」

群集の一人は分別らしく彼に注告をした。

「えゝ。」彼は心に少しの蟠りも無ささうに微笑を洩して云つた。「ですがね、何だか恐いやうでしてね。」

だが、眞實は恐いとも思つて居なかつた。然う云はれて初めて何とかしねばならぬやうにも思つたが、今に誰かゞ何とかしてくれるだらうとも思はれた。彼は動かなかつた。

笑つてゐたおすみは急に笑ひをやめ顏を歪めて室内へ姿を隱した。暫く經つた。ばた〳〵と室内を馳けまはるらしい跫音や、障子の倒れるらしい物音や、激しい叫聲などが起つた。外部に立つてゐる人々は微かに動揺めいた。誰の頭腦にも世の中にありとあらゆる酷たらしい光景の想像が起つた。鳥肌立つやうな恐怖と共に、黒幕が容易に切つて落されぬ焦立ちを感じて眼を光らした。が、次の瞬間はひそと靜

まり返つて、畳を踏む跫足も聴えなくなつた。沈默は長くは續かなかつた。誰が語るとも無く低聲の囁きが起つて來た。

おすみが繰つた雨戸より反對の雨戸が繰られた。みんなの期待に反いて武次郎が笑ひながら顔を出した。笑つて居て怒つた、昂奮し切つた青い顔であつた。父親は二階の縁側の雨戸を全部開けた。

「歸つたよ。」

然う云つて父親は顎で村の方を指した。年若な連中は直に縣道まで走り出た。年老つた分別のある者は、一度武次郎におすみの闖入に就ての見舞を云つてから歸つて行つた。彼もみんなの後に隨いて縣道まで出てみた。

裏木戸から塀の外を廻つて縣道へ出て來たのだと思はれた。おすみは着物を着てちやんと帶まで締めて、おとねに何事か語りながら歩いて居た。おとねが度々頷いた。安心と失望との溜息が群集の口から洩れた。しかしみんなは四間も離れて居て、それより近よつて行く者は無かつた。

彼は直に家へ引返して來た。未だ雨戸が全部繰られて居ない爲め、家の中は薄暗く氣味惡るかつた。おすみは歸つたので無くて、家の何處かに蹲つて彼を待ち受けて居るのだと云ふやうな妄想も起きた。繼母とおしげとは勝手口の處で慄へて居た。けれども無理に勇氣を押し出して、彼は繼母達よりも先きに家の中へ入つて行つた。

麥蒔きのことは最早彼等の念頭から失せてゐた。悄え切つた家族の者は、再び家を留守にして田圃へ出掛けやうなどとは考へも及ばなかつた。離ればなれになるのさへも怖しいやうに、一つの部屋に集つ

て居た。が、誰一人として口を利く者も無かつた。種々な意味で彼の家とおすみとの間には深い關係があつたのであるから、彼女のことを語れば勢ひ沈默の裡に葬られて居る事柄へ移らねばならぬやうな氣持となるからであつた。父親も繼母もそれを怖れて居た。で、一處へ集つてゐても何となく溶けあはない感情の渦が彼等の心持を重苦しくするのであつた。

九

雪松は一人離れて二階にゐた。彼は彼で、彼一人にのみしか分らぬ激しい苦痛が、だん〳〵心が自分に返つて來るに從つて湧き起るのを見た。それは永遠に彼一人のみが負はねばならぬやうな責任苦の惱みであつた。

「おすみが發狂した！しかしそれに就ておれがどれだけの罪を引受けねばならぬのだ？」彼は考へることが苦しくなるやうな自棄な氣持であつた。「勝手にしあがれ、たゞ何事もなるやうになつたのだ！責任を負はされて堪るもんかい！」

父親の云ふ通り、或ひは彼女の肉體の中には遺傳的に發狂者の血が流れてゐたかも知れなかつた。だが、それを誘導する苦惱は誰が與へたのだ。そつと眠らして置けば永久に眠つてゐたかも知れない血を誰が甦生らしたのだ。彼が彼女に囁いたのではなかつた。彼女が彼の耳に囁いたのであつた。彼は全然受け身であつた。この路に立つてゐて通りすがりの旅人から與へられたやうな一つの林檎の爲めに、彼は既に既に激しく苦しんで來てゐた。たゞ一度の囁きの爲めに、彼は全部の所有物を殘りなく破壞して來てゐた。未だ報酬はそれでは足りなくて、發狂に對する責任までも負擔せねばならぬのだらうか？

が、彼があの囁きに反抗したのが、發狂の原因では無いと云ふことは誰にも分らないことであつた。若しも父親に走つた理由がそれに起因してゐるとすれば、彼女のこの二三年間に經驗した自己苛責と自棄と苦惱とは確かに發狂するに充分であるに違ひなかつた。そして原因が其處にあると假定しても彼は今更自分の行動を罪惡だとは思はれなかつた。罪惡ではなかつたが、しかし自身を安易な位置において彼女の狂躁を傍觀して居ることは彼の心が許さなかつたのであつた。さうかと云つてあの際彼女の囁きを受け入れた方がよかつたと云ふやうな心持も起らなかつた。何故受け入れられなかつたか。それを追求して行けば彼の生れたのを否定するやうなものであつたからであつた。その上最早過去に屬して居た。今、不意に現はれて來た事實の怖しさの爲めに、如何に足踏みをして悔んでも取り返しのつかぬ過ぎ去つた事件であつた。

「何故おすみはおれの前で氣がちがつたのだ。何故おれの居ない內に起らないでおれが歸鄕すると直に起つたのだ。何故おれは偶然に歸鄕する氣になつたのだ。何故この時丁度おすみが歸宅してゐたのだ？」

この偶然は、彼にとつては單なる偶然のやうには思はれなかつた。運命と云ふ黑表の上に、最初からちやんと計理的に記載されてあつたことのやうに思はれるのであつた。さう考へられるだけに一層發狂の眞因が彼自身に關聯してゐるやうに思はれてならなかつた。若しもさうで無いとすれば、別れて居た數年の間にでも起るべき筈の事件のやうに思はれるからであつた。

しかし原因が全然彼に關係が無いとしても、默つて見過すことの出來ぬ心持であつた。けれどもかう云ふ場合に何う所置をするのが一等最良の手段であるか分らなかつた。彼自身には未だ認められなかつ

たが、彼女に對する深い憐憫の情も交つて居た。慘酷な自己苛責と、あり得べからざる事件の異相を摑まんとする喘でもあつた。彼の心は空間の痛みに虐げられてゐるやうに、捩ぢまげられ、叩き倒され、切り刻まれた。空漠たる苦惱の中で、傷いて血に塗れた心靈が惱み悶えてゐるのを眺めて居るのみであつた。彼は數年の間の讀書で得た理想も幸福も愛も生活の標準も、纔かにこの半日で根柢から木葉微塵に消え散つたことを確實に知つたやうに思つた。殘つて居る所有物は最早自暴自棄のみであるやうに思つた。彼は二階の緣側の柱に靠れて、暮れて行く谷間の白い光りを眺めながら苛々と爪を嚙んだ。

「おゝ、その責任を一身に負擔してやらう、おれに在るとすれば。」彼は投げるやうに自分に言つた。「そして何とでもするが好い、おれは回避はしない、立派にこの肉體に受けて見せる！」

かう云ふ考へ方は一層彼を自棄的にした。全然慰めなどの得られぬことを知りながら、却つて求めて自分を苦痛の中に抛つて酒に浸つて行つた過去の遊蕩時代の、砂漠のやうに荒廢した精神が何處からとなく湧き起つて來つゝあるやうであつた。彼は突然、拳を固めて力限り柱を撲つた。そして顏を醜く歪めてその拳を唇へ持つて行き、自分にも譯の分らぬ淚を滴した。

苦惱は苦惱であつたが、晝の勞働の爲めに身體は疲れ切つて居た。父親の相手になつて晩酌の酒を二三杯飲んだ後は、前夜と同じやうに獸のやうに鼾を立てゝ眠つてしまつた。思想も生活もおすみの發狂も無かつた。夢さへ彼を襲はなかつた。

「誰だ？」暫く經つて又怒鳴つた。「誰だ？」

不圖彼はこの聲に吃驚して眼を覺した。眠つてから未だ幾何も時間は經つて居なかつた。闇は深く、

屋を取り圍んでゐた。そしてその聲は慥かに父親の聲であつた。彼は晝間おすみか闖入したことを思ひ出した。身體が急に瓦斯を放散した風船玉のやうに縮んで、恐怖が潮のやうにどつと押し寄せた。けれども彼は起上りはしなかつた。事實の眞相を確めやうとするやうに、蒲團に耳をつけて全身の注意力を傾けた。やがて襖の開く音がした。父親が起上つたのだなと彼は思つた。續いて駈け出す跫音と、襖や障子などに衝突するらしい激しい物音とが聞えて來た。

「おのれ、出て失せい！」

父親が再び怒鳴つた。殆んど同時に女の尖つて高い叫聲がした。晝間芳次郎が打つた時に聞いた、あの獸のやうなおすみの叫聲であつた。彼は唾さへ飲み込むことの出來ない氣持となつた。蒲團に確りと獅噛みついて、たゞがた／＼と顫へて居た。直ぐ裏戸の開く音がして、それから物音が靜まつた。暫く經つと父親が呟いてゐるらしい低い聲が聞えた。

彼は起上つて階下へ行つた。裏戸のところの暗闇の中から、父親が何かごと／＼と云はせて居た。

「おすみが入つて來たんですか？」

顫へる聲で彼は父に訊いた。最う訊く程の必要も無い位明らかに分つて居た。

「うん、入つて來たんだよ。戸締りの樣子をよく知つとるもんだけな。」父親は闇の中からでもその憤怒に赤くなつた顏が見えるやうな昂奮し切つた聲で云つた。「晝の勞れでぐつすりと寢込んどつて、入つて來た時には氣がつかなんだけどな、直き次の間の襖の開く音で眼が覺めたんだ。……おい雪松、何か竹切れのやうなものを探してごせい。此庭の戸の後へやるんだから。……二階へ上る階段の所に凝平と立

つて居たんだぜ。二つ三つ撲つたつたら驚いて飛んで出てしまつた。」

二人がゝりで漸く戸締りを嚴重にして、彼等は各々の寢床へ歸つて行つた。雪松はひどく昂奮もしてゐたが、疲勞の爲めまた眠りへ入りかけた。

丁度うと〱と、半ば醒め、半ば眠つて居るやうな狀態にゐる頃であつた。彼は裏口の戸を輕く叩く音を聞いた。續いて父親の怒鳴る聲を聞いて、また眠りから醒まされた。音は直にやんだ。と、思つてゐると、今度は急に激しく聞えて來た。表の方の戸を叩いてゐるらしかつた。裏の方を諦めて表へ廻つたのだらうと思はれた。

「畜生！また來(うせ)あがつたか！」

父親が怒鳴りながら起上つて表口の方へ行つたらしかつた。叩く音に應じて激しく叱責してゐた。音はやんだ。彼はやがて安心の眠りに襲はれかけた。

同じ音が、同じ激しい表戸を叩く音が聞えて、彼は三回眠りから醒めた。彼は最うその音を聽くことに堪えられなかつた。骨までも刻み込むやうに一打一打響いて來る音は、まるで傳奇的な物語にある呪咀の釘を頭腦にぐさ〱と打ち込まれるやうに、鼓腹を鳴らして痛烈に感じられた。けれども聞かずに居ることは出來なかつた。音に誘惑があるやうに思はれた。彼は苦痛とは知りながら、自分でそれを求めて居るやうな心持で耳を傾けた。今度は父親の怒鳴る聲はしなかつた。

「眠つて居るのかしら？」

と彼は思つた。が、眼覺めて居るらしい氣配がするやうでもあつた。表戸を叩く音はます〱烈しくな

った。板が割れて消飛んでしまふかと思はれた。彼の恐怖と苦痛とは一層濃厚になつて、然うして闇の中へ凝乎と横になつて居ることが一つの責苦のやうに感じられだした。

「何しとられるだな?」

繼母の聲がした。

「弓の折れを探しとるだ。彼女を撲つたるんだ!」

次で父親の怒りに慄へた聲が聞えた。そして一分間ばかりの長い時間が經過した。突然戸の開く音がして、殆んどそれと同時に例の獸のやうな叫聲を聽いた。繼いてばた〳〵と駈け出す跫音が起つた。

「こん畜生!こん畜生!」

父親が狂亂したやうに叫んだ。その聲には男と女との違ひはあつたが、發狂したおすみの叫聲と同じ病的に尖つた感じを持つて居るやうであつた。おすみの叫聲も屢々した。

彼は我破と撥ね起きた。絶對に寢て居ることは出來なくなつたのであつた。起き上つて表側の雨戸を繰つて見やうと思つたが、全身を走る顫ひがそれをさせなかつた。彼は起直つたまゝ、我れと我身を抱くやうにして兩手で耳を抑へたが、不安になつて直に離した。おすみの聲は猶も聞えた。彼は兩手を力限り握り合して、身體を動搖さして悶えた。血潮が頭腦に向つて逆流するやうに思はれた。肉體の疲勞と精神的困憊と一緒になつて、そのまゝ昏倒してしまひさうであつた。

眼の前の闇の中に、彼は明瞭と父親の姿を見たやうな氣がした。その父親は顏面一杯に青い血脈を怒張させて、黑塗りの弓を打ち振り打ち振り、血に餓えた猛獸のやうな慘忍な心を抱いて驅けつて居た。

直ぐさきを、頭髪を亂した裸體のおすみが駈けつて遁げてゐた。やがて父親が追ひついた。弓が容赦なく彼女の豐滿な肉體をぴしり／＼と打つた。――その女は彼が子供の時から姉弟のやうにして育つて來たおすみだ。母親が自分の肉を分けたやうに愛して居たおすみだ。彼の耳に囁いたことのある、そして蜘蛛の堪え難い苦痛の印象を與へたおすみだ。追つかけて居る父親自身の妾であつたおすみだ。彼は死んだ母親が死後に於ける一家とおすみとの間に起つた狀態を知ることがあれば、何んなにか嘆き悲しむことであらうと思つた。

「何の爲めの呪ひだ？何の罪に依つてから復讐されるのだ？おれには耐えられぬ！耐えられぬ！」

雪松は頭部を兩手で抱えて、床の上に身體を投げ出して足掻き苦しんだ。死と云ふ觀念に捉はれた譯ではなかつたが、不意に柱にでも頭部を打つけてしまひたいやうにも思つた。自棄になつて何處を構はずに飛び出してしまひたいやうでもあつた。

やゝ暫くの後、表戸に鍵をかける音がした。父親が歸つて來たのらしかつた。跫音が奥の間で消え繼母と二言三言低く呟きあつてゐた。それから物音はやんだ。床へ入つて行つたのであらうと思はれた。

疲勞は甚しかつたけれども、彼は最う眠る心持にもならず、眠くも無くなつた。彼は狹い部屋の中に押しあひ重りあつて、濃く濃く漂つてゐる闇へ長い間凝然と眼を据えてゐた。父親が歸つて來てからは衝動的に悶々とすることは無くなつたが、心は何物も受け入れぬやうに固く固く張り切つて居た。が、その長い間を何を考へて送つたか、後になつても少しも記憶には殘つて居なかつた。たゞ疲勞が作つた

闇の中の凝視點へ、茶褐色をしたもや〳〵と湧く雲形の模様が描き出されたことだけは覺えてゐた。模様の中には瑠璃色の小さな二つの焦點があつた。その焦點は菊のやうに變り、日向葵のやうに大きく黄となり、日輪のやうに輝きを持ち、やがて火花のやうに無數に分れて飛び散つた。そして赤が失せると黄に移り、またもとの雲形模様が動きながら現はれて來た。

おすみは長い長い後また表戸を叩いた。けれども考へて見れば父親が床に入つてから間も無くであつたかも知れなかつた。その時は父親も起きなかつた。彼は兩手で耳を抑へ、音の方へ向かうとする注意力を壓しつけて、蒲團を頭部から被つて縮まつて居た。音はやゝ長く續いた後自然にやんだ。それから彼も眠りに入つたらしく、夜の明けたのを知らなかつた。

一〇

憑きものが落ちたやうにがつかりと、彼は自分自身にも境遇にも絶望しきつてしまつた。身體を持扱ふことさへも物憂く億劫であつたが、何うしても遁れ得ない氣持で、二日後には麥蒔だけは終つた。おすみは夜になれば必ず來た。二度も三度も表の入口の戸を叩いて壓眠りに入つて居る家族を驚かした。けれども父親も怒鳴つたり追つかけたりすることは中止した。おすみの方でも根氣負けがして何時も五分間ばかりの後には歸つて行つた。そして一時間か乃至三時間位の後にはまたきつと遣つて來た。これは彼の家一軒のみのことではなかつた。殆んど村の大半の家をかうして叩いて終夜歩きまはつてゐたのであつた。彼女は夜歩く時には一つの小さな提燈を下げてゐた。これはこの地方の農家で使はれてゐる普通の夜歩き用のものであつた。

この頃どの家にも乾いた稻が家一杯に取り入れてあつた爲め、村の人達はその提燈に入つてゐる石油を怖れた。意識して放火しないまでも、若しもあやまつて轉倒させることがあるかも知れないと思はれるからであつた。が、村の人は誰も一時間も自分を休ませてゐる暇は無かつた。二三人田圃で出會つた時、提議を區長にしやうかとも云つたが、忙しさにかまけて行つて話をする者はなかつた。

麥蒔が終つた後は直に果樹園の開墾に着手しやうと思つて居た彼は、計劃を全然棄てゝしまつた。彼は生きることさへも忘れてしまつたやうな心持であつた。たゞ空虛になつた魂を抱いて、身體だけが彷徨してゐるやうなものであつた。しかしおすみのことに關しては、外部から傳つて來る事實や噂が苦情と化して、それのみに感受性の激しくなつてゐる彼の神經を限り無く訶んだ。彼の顏は次第に青褪めて來て、病的な暗い憂鬱に蝕まれだした。まるで彼女の發狂が傳染して行きつゝあるやうなものであつた。何うかすると一日中部屋の中へ閉ぢ籠つて、何を考へるともなく漠然と自分を虐げて居ることもあつた。めつたに家族の者とも口を利かなくなつた。

けれどもまた室內の籠居もやがて彼を苦しめるものとなつた。彼はそれから遁れたくなつた。遁れたくはあつたが遁れる方法は分らなかつた。町にゐたならば乾度遊蕩の中へ苦惱を浸しに行くのだらうと思はれたが、三里も離れてゐてはその爲めわざ／＼出掛けて行くにも耐えられなかつた。彼は一箇所を何時までもぐる／＼とまはつて居るやうな、遣場の無い切なさを感じた。

足の向け場は無かつた。が、外の空氣がとう／＼彼を誘ひだした。彼は欝した眉根を顰めて、兩手を懷中に入れ悄りと足を動した。射る陽の光りは餘程冷たく白く冴え、何時の間にか田圃の稻も殘らず刈

り取られてゐた。村の人達は乾いた稻を家へ持ち運ぶのに忙しく、額から汗を流し、血相を變へて働いてゐた。彼は縣道を辿つて橋を渡つた。橋より一町も行つた路の兩側には、村人から異端視されて居る木賃宿や、駄菓子屋や、酒好きな百姓が野良歸りに立寄つて一杯飮む居酒屋などがあつた。彼の足は自然に其處へ向いた。忙しい收穫の最中にあつては、この一廓より外にはたゞの十分間でも彼の相手になつてくれる者は無かつたからであつた。

居酒屋の縁側には五六人の怠け者が集つて何やら面白さうに話しあつて居た。みんな近在の百姓や馬喰達で、本職よりも博奕で渡世して居るやうな、好くない方へ足を踏込んだ人々であつた。その中には居酒屋の主婦も交つて居た。主婦は彼の家へは斷えず出入りをして居たので、彼は子供の時から好く知つてゐたのであつた。

「隱居さんの若さん、こつちへ來なんせ。」主婦は手あげて彼を招いた。「今面白いことが初まつとりますぜ。」

雪松は顏も擡げずにその群れへ近づいて行つた。その人達は彼を見ると一層愉快さうに聲を立てゝ笑ひくづれた。彼は吃驚して周圍をみまはした。

路を隔てた駄菓子屋の縁側へおすみが座つて、何事か頻りに身振りをしながら語つてゐた。駄菓子屋の主婦が相手になつて語らして居るのであつた。居酒屋の連中は今までそれを見物して居たのであるらしかつた。彼は直におすみの語つて居ることが彼か或ひは彼の家かに關聯してゐることだと云ふことを悟つた。彼は絞られるやうに鋭く自分の心を見た。が、その驚きはやがて周圍の人々に自分の弱味を見

せることだと思ひ返して、無理に平然と裝つて彼女へ眼をやつた。

おすみは彼にも見覺えのあるかなり派手な紺絣の袷を着て、赤い模様の帶を締めてゐた。頭部には新しい白い手拭を姉さま冠りに被つてゐた。彼は駄菓子屋の主婦が他人の惡事を探り出して話しまはるのを唯一の樂しみとして居るやうな性質の女であることを知つて居た爲めに、この發狂した哀れな彼女を唆かして何事を喋舌り出させるか分らないと考へてひどく不安であつた。

「何をしてゐるんです？」

彼はたまらなくなつて訊いた。

みんなは顔を見合せてまたしても聲高に笑つた。が、誰も返事をしなかつた。彼は急に苛立つて來た。

「何を云つてゐるんです？　何をしてゐるんです？」

再び彼は詰め寄るやうに鼻を昂らせて居酒屋の主婦に訊いた。

「これから嫁入りをしやうとして居るんですわいな、あんたさんの處に。」主婦は猶も笑ひながらから云つて其處からおすみへ聲を掛けた。「おすみさん、さあ隱庄さんの若さんが此處に來んさつたがなあ。迚れて歸んで貰ふが好えわい。」

「そりや、隱庄さんの若さんがお前さんを迎へに來んさつたといな、そつちを向いて見るだがなあ。」

駄菓子屋の主婦はおすみを無理に彼の方へ向かした。けれども彼の姿は彼女の眼には入らなかつたらしかつた。直ぐにまた相手の主婦の方へ向き直つて、聞き馴れぬ者には分らない早口で何事か喋舌り續けた。

「お前達は……何を莫迦なことを云つて氣ちがひに戯つて居るんだい！」

顔を赤くして彼は怒つた。だがそれ以上に强く云ふことは出來なかつた。心に燒きつけられて居る一つの疚しさは、その眞中へ短刀を突込まれたやうに激しい羞恥と苦痛とを感じたからであつた。彼は自棄的な安逸を貪る爲めに其處へ來たことが、却つて自分を惱ますことであつたのに氣が就いてひどく自分を悲しんだ。最う世界の果てまでも自分の安住する土地は無いやうな氣がした。

「おい、お前等はおれを知つとるかい？」

彼は其處の群れから離れて、傍に恐しさうに立つてこの場の光景を眺めて居た二人の子供に話しかけた。六つばかりの女と、四つばかりの男の子供とであつた。

「知つとる、隱庄さんの若さんだがなあ。」

女の子はかう云つた。男の子はべそを搔くやうに指を咬へて、不安と不審との眼を擡げて彼の顔を窃み見た。二人共頰の赤い、口の邊りへ食物の滓をくつゝけた汚い子供であつた。

「おれと一緒に柿取りに行かんかい？　熟柿をうんと食はしてやるぜ。」

彼は二人の子供を兩手で抱くやうにして步き出した。男の子は女の子が一緒に來るので詮方なく行くと云つたやうな、不承々々な不氣嫌な顔をして居た。彼はその子供達をあやしながら步いた。

「恥を知れ、莫迦者共！」彼は心で居酒屋の前の人々を罵つた。「氣ちがひに戯ふのが何だつて面白いのだ！　哀れな病める人間の魂をまるで玩具のやうに思つてゐる！」

柿の木は家より上手の畑續きの小高い丘の上にあつた。彼は子供の時には、秋が終りに近づいた頃に

はこの木の下から離れなかつた。彼等は石塊の多い小徑を辿つて上つた。「だが――おれだつておすみだつて、ほんとうにあの人達の嗤笑の的になる位の處が丁度似合つた資格だかも知れない。」彼はやゝ感傷的に考へた。「嗤ふなら嗤へ！　狂人を唆して匿されてゐる秘密をみんな聞いて、罵るなら罵るが好い、おれは今となつては怖れはしない！　受けるだけのものは立派に自分に受けて見せるぞ！」

木の下の柔らかな傾斜をした芝生に子供達を座らして置いて、彼は柿の木へ登つた。そろ〳〵葉の落ちかゝつた西條柿には、生のまゝで食べられる熟柿が澤山あつた。彼は自分も飽きる程食べ、子供達にも取つてやつた。

「さあ此處へ來いよ。」彼は木から下りてから芝生の上に腰を下して子供達を呼んだ。「お前達の好きな程食べてくれ、な。最つと食べたかつたら最つと取つて來て遣るからな。」

子供はすつかり彼に馴れ切つて來た。彼が云ふがまゝに彼の兩側へ來て柿を食べた。彼は兩手を子供等の脇へまはし、交る交る汚い顔を覗き込みながら一時の幸福に微笑んだ。

「おすみは氣ちがひになつた。……しかしおれは彼女を憫れんでゐるのだらうか？　それともあの苦湯を飲まされたやうな苦痛と、一生拭ふことの出來ない汚濁の中へ入つて行つた自辱との爲めに、痛快な復讐を爲しつゝあるやうに思つてゐるのだらうか？」彼は度々自分に質問したことをまたしても訊いた。「勿論おれは、次を次をと投げかけて來る苦痛に對しては永久に彼女を宥すことは出來ん！　おれは宥すかも知れない、いや、おれは宥さなかつたが一時は容認しやうと思つた。實際容認し得たとも思つてゐ

た。けれどもおれの心に殘された苦惱は、おれが最後の日まで彼女を呪ふだらう。……然うだ、おれは呪ふぞ！　おれは呪ふぞ！」

「何うだい、甘いかい？」彼は子供達の頰へ自分の頰をすりつけるやうにして訊いた。「最つと欲しいかい？　あんまり食べるとお腹が痛くなるぜ。」

男の子は頷いて、肉のついたまゝの柿の種子を吐き出した。子供達の頰は熟柿の爲めに更に汚くなつてゐた。

「然うだ、おれの中にある苦惱は彼女を限りなく呪ふ……だが、何故におれは彼女をそのやうに憎むのだらう？　何故に氣がちがつた後までも呪はねばならぬだらう？」

苦し氣に彼は喘いだ。だん／＼顏が顰んでそれ以上深くは一氣に考へることが出來なかつた。彼が彼女を怨み憎んで來た心持は、充されなかつた愛の嘆きではなかつたらうか。彼女を愛して居た爲めに彼女を失つたことを苦痛に感じ、憎んで來たのではなかつたらうか。彼女が父に赴いたと云ふことが彼に苦痛を與へるに比例して一層深く愛していつたのでは無かつたらうか。苦痛が愛を生み、愛が苦痛を生んだのではなかつたらうか。その苦痛と愛とが更に憎を彼に感じさしたのでは無かつたらうか。憎は紙一重隔つた愛の氣持ではなかつたらうか。その愛が未だ彼に殘つてゐる爲めに、彼女が氣ちがひになつたことに就いても甚だしく愕え、苦しみ、悶えて來てゐるのでは無からうか。――彼は痙攣する唇を咬み、眼を空に据えた。

「いゝや、おれは愛しない！　愛しない！」彼は誰かに質問されたやうに、聲をあげて叫んで惶しく否

定をした。「愛するもんか！　憎むのだ、たゞ憎むのだ！」

一瞬の間彼の眼界は眞黑になつて行くやうであつた。しかし何となく彼の急所を抉られるやうなものであつただけにこの否定は自棄な惑亂的なものであつた。全くの混亂が彼の顏を醜く歪め、眼を血走らした。彼は譯が分らずに唸つた。

不意に子供の泣聲が彼の耳に入つた。彼の怒りに顫へたやうな獨語が、叱られでもしたやうに子供等を慴れさしたのであつた。彼は急に氣が付いて狼狽して立上つた。彼の腕から解放された子供達は、柿を棄てゝ一目散に芝生を駈け下り、畑の中を轉びながら遁げだした。背後を振り返り振り返り、聲を張つて泣き喚いた。

「おい、待て、待て。……おれが惡かつた、惡かつた！」彼も駈けだした。「あ、あ、また轉んだ。」

子供達は彼が趁つて來るのを見ると、一層大聲をあげて叫び、根限り（こんかぎり）に足を早めた。おほかた捕まへてその上撲りつけでもすると思つたのであらうと思はれた。小さな二つの姿は縺れあつて畑から下の路へ隱れて行つた。が、泣聲はまだ聞えて居た。

直に氣が付いて彼は立止まつた。何處へ行つても誰一人として慰めてくれる者も無い心の屈托を、せめてはその子供等と親しむことに依つて輕くし紛らさうとした寂しい困憊の行動であつた。それにもかゝはらず子供等は彼を棄てゝ行つた。彼の惱みに惱やかされて遁げて行つた。彼は子供にさへも見棄てられる自分が何んなにか憐れであつた。身體の置場所の無いやうな寂しさが、涙の無い啼嘘となつて暫くは彼を迂路々々とさした。

「可哀さうに、すつかり驚かされてしまつた。」から云つて彼は顔を歪めて笑ひかけたが、不意に躍り上つて力限り大地を踏みつけた。「何うだつて構ふもんか、莫迦！」

殆んど狂惱に近い荒びた心持と變つて來た。けれども子供のことは氣に懸つた。彼は分らぬやうに見え隱れして後を趁つた。子供達は要心深く時々立止まつて後を見まはしてゐたが、彼が姿を認めなくなるとだん〲泣きやめてしまつた。そして縣道の橋を渡る頃には全く氣嫌を直して、二人で何事かひそ〲と語りながら歸つて行つた。

橋までは彼ぁ行つた。しかしそれより先きへ行くことは彼には恐しかつた。子供が歸りついた安堵と、遣場の無い感情の痛みとが、たゞ茫然と川の面を見下さした。彼は欄干に靠れて凝然として居た。

川には二抱もある石が到る處へごろ〲と横に寢たり、座つたり、腹這ひになつたりして群れて居た。急激に川上から來た水は、幾筋かの白い縱線を描いてこの石の間を流れて居た。小山のやうな形をした最も大きい石の上には、短い藜が半分枯れながら赤い穗をつけて居た。水は怒つたやうにこの石へ打當つて二つに分れ、片分は不精に犬のやうに寢てゐる石の脊を撫で、綺麗な小石の上をまはつて來た他の仲間と大石の下部で出合つた。彼等は出あつた時の歡びを現す爲めに、光琳風な立浪に似た形に躍つて泡を沸き立てた。それからひそ〲と睦じさうに囁き交して川下の方へ流れて行つた。仲間の具合によつて縱に描く白い線や、犬の脊の撫で方や、立浪の模樣などがそれ〲違つてゐた。幾秒間、幾分間經つ内には偶然のやうに同じ形となることがあつたり、永久に同じやうな形の起らないものがあつたりした。長く瞶めてゐる内に彼の方から形を忘れることもあつた。そして流水に眩惑された瞳は、ぐら〲

と動いてめまひがするやうになつた。彼は一寸手をあげて眼を蔽つた。
再び彼は川へ眼を遣つた。依然として同じやうな水が斷間なく流れ來り流れ去つてゐた。五分も高く石へしるしをつけて行く時もあり、ずつと低い時もあつた。時には底の砂礫を動かして來ることもあつた。彼は何事も忘れて熱心に眺めた。見たばかりでは同じやうであつても、微細な變化の極りないのが彼の興味を惹いたのであつた。
或る喚聲が耳に入つて、彼は思はず頭部を擡げた。縣道を橋の方へ向つて、おすみが駄菓子屋の緣側へ居た時とは異つた餘程取り亂した格構で此方へ步いて來てゐた。その背後には二十人ばかりの學校歸りの腕白共が、手に手に竹切れを振りまはしたり、算盤の入つた袋を鳴らしたりして彼女を威嚇して追つたてゝ居た。彼女はそれを非常に愉快なことのやうに思つて居るらしく、自分でも手を拍いて囃し立てゝゐた。
「隱庄の若さん、隱庄の若さん。」
腕白共は彼の姿を認めると、道路から列つた稻田の中へどやどやと遁げ込んで行つた。自分達の行爲を雪松が叱るとでも思つたらしかつた。
「隱庄の若さん、隱庄の若さん。」
おすみも同じやうに生徒達の眞似をして、恐しさうに狼狽てゝ一緖に田の中へ駈け下りた。彼は欄干へ靠れたまゝ動かなかつた。
雪松の默してゐることは、生徒達に不安と輕蔑との念を與へたらしかつた。やがて一人の子供は彼女

の耳へ何事か低聲で囁いた。彼女は直に叫んだ。
「若さん、若さん、嫁貰ふた。その嫁跛足で戻された。」
「わあ、あ！」
と、子供等は一齊に手を叩いて喝采した。彼女も同じやうに手を拍いてわあ、あ、あと叫んだ。この子供達の喝采はすつかり彼女の狂つた神經を有頂天にしてしまつたらしかつた。彼女は幾度も幾度も繰返して叫んだ。子供達はその都度拍手と喝采とを繰り返して彼女と彼とに浴びせた。
「若さん、若さん嫁貰ふた。」幾度も繰り返すうち、彼女は次の文句を忘れてしまつたらしかつた。「とかく若さんの氣に惚れた。」
この間違ひは生徒達を更に喜ばした。彼等は一層騷ぎ立てた。中には群れから離れて彼に挑戰するやうに肱を張つて見せる子供もあつた。子供の悉くの視線が彼に注がれた。
靜かに彼は欄干を離れた。そして頭部を深く垂れて家の方へ足を向けた。幾度も幾度も浪のやうな喝采が背後から彼に襲ひかゝつた。
「何故お前は脊後を向きたがるんだ？　何故あの子供を相手にして獸のやうに荒れ狂ひたがるんだ？」
彼は自分に云つてきかした。「追つ拂はれた犬のやうに、尾を垂れて逃げ出せば好いんだ。それが丁度お前に似合つた運命なんだ。」
日和續きの路の上には、轍が割つた砂礫を埋めて白い埃が浮いて居た。土に塗れて汚なくなつた幅廣い柾目の下駄が、その埃を蹴飛ばして動いた。下駄は彼が都會を出發する時に買つたものであつた。

「雪松……雪松……。」彼は自分でも意識しないのに、偶然に自分の口が彼自身の名を呼んでゐるのを聴いた。「お前はいくつだ？……然うだ、二十二だ。……」

鼻の中心が急に酸つぱくなつて、瞼が激しく痙攣した。そして眼と口とが近づくやうに顔が顰むと、大粒の涙が旺然と流れ落ちた。彼は歸鄕してから三週間近くの日が經つたなと思つた。

二

毎夜々々夜中におすみの爲めに戸を叩いて惱やかされることを怖れたのみでも無かつた。一時の安逸的な慰樂を求める爲めのみでも無かつた。たゞ彼自身に落着いて居る場所が無くなつたのであつた。家に居ることが堪え難くなつたのであつた。消極的からではなく、思ひ切つた棄鉢の心を抱いて彼は其夜家を出て行つた。行く處とても別に無かつたが、夜の道をふら／＼と歩いて居るうち、不圖前日逢つた村の若い者が夜遊びに來るやうにと云つたことを思ひ出した。その男は彼の學校友達であつたが、既に立派な一人前の農夫となつて居た。迷つた彼の心はとう／＼指定された場所へ行つた。其處は村の中央の大石のある處で、若い者の夜遊びの集合地となつて居た。

その夜も其の若者の外に未だ五六人の若者が集つて居た。彼等は何處からか持つて來た蓆の上に腰を下して、村の娘達の話や、娘達と若者とに關する話やに耽けつてゐた。傍の叢からは蟲が雨の降るやうに鳴いて居た。

雪松の來たことは若者達にとつては非常に珍しいことであつた。みんなは彼の周圍に集つて彼の健康を尋ねたり、遠い都會の話を訊いたりした。彼も少年時代の友達は懷しかつた。涙の滲むやうな哀愁を

感じながら、若者達の滿足するやうに叮嚀に返事をした。

暫くの後、彼は若者達が御馳走振りに先導をするのに随いて、娘の家へ覗きに行つた。娘達はみんな彼と同時に小學校へ通つて居たものであつた。級こそ下の者が多かつたが、毎日顔を合せたり、時々登校の途中で苛めて泣かしたりした仲であつた。その娘達が數年見なかつた間にすつかり一人前の女となつてゐるのに驚かされた。中には彼も相手の女も未だ性に就ての感情の目覺めない時分のある盆躍りの晩、偶然のやうに手を握り合はして後でお互に語るのに困つたことがあつたやうな娘もあつた。その娘は姉と一緒に奥庭で穗を落して居た。彼は若者に招ねかれ、足に踏臺をして高い窓から覗いて見た。斜めに見下される娘の肩と胸の邊りには、丸々と重りあがつた好い肉付きが着物の上に浮いてゐた。彼はすべての記憶を呼び起すその人達が懐しかつた。殊に秘密に窃み見をしてゐると云ふことは一層彼の興味を唆つた。彼自身もその追憶の中へ溶けて行くやうな氣がした。

「小若者等、濟まんが何處ぞから薪を一把盗つて來てごせいや。寒うてどもならんけ。」

彼等が再び大石の處へ歸つて來た時、年長者の彼の同級生だつた男は云つた。十五六ばかりの小若者はこの不法な年長者の命令に喜んで服從するやうに、競つて立上つた。

「おい、待ていや。」年長の若者は重ねて云つた。「それからな、珍しいお客さんだけ雪松さんに柿を御馳走してあげてごせいや。……けどなあ、毎晩々々盗る家のはよせいよ。あんまり可哀さうだけな。」

「むなら誰家のが好からあ?」小若者の一人は振り返つて云つた。「上土居の方へ行くと何ぼでもあるけど、彼方に行くと氣ちがひに出會ふけ、俺氣味が悪い。」

「若い者の癖に臆病な奴等だなあ。」

年長の若者は舌打ちをした。

「でもなあ、昨夜もなあ。」小若者は仲間の一人へ應援を賴むやうに云つた。「なあ、――さん家の前の暗い處に立つとる者があるもんだけ、誰だ、誰だちつて訊いても返事をせんけ近よつて行つたら隱しとつた提燈を急にぱつと突出すだらあ、見りやおすみだがな。……青い顏して、髮を亂して。……怖しい！」

「むなら俺が行く。」彼より一級學年の下だつた中若者が立上つた。「誰ぞが一人來いや。俺こないだから眼をつけとる柿があるだけ。」

二人は柿を盜りに、他の三人は薪を盜りに行つた。後にはまだ五六人殘つて他愛もない話をして居た。が、雪松の心はだん／＼憂鬱になつて來た。これと云つて別にその理由も分らなかつた。若者達に誘はれるがまゝに、自意識を失つて娘の家を覗きまはつた自昂の爲めでもあつたやうであつた。折角遁れてゐたおすみの發狂のことがまた心に甦生して來た爲めでもあつたやうであつた。そして未だ自分のこの憂鬱に氣が付かなかつたまではよかつたが、一度意識へ上ると、意識が更に憂鬱を生み出して來るやうに思はれた。彼はやがて極端まで行つた寂しさが地に滅入りこんでしまひたいと思はせるやうな、泣き出したいやうな氣持となつた。若者達の間に對しては返事さへも碌々せず、闇の中から凝乎と地上を瞶めて蹲つてゐた。

薪は盜つて來られた。

「なに構ふもんかい、何うせ若いもんのせいだと思はれるもん。」

かう云つて路傍の空地で焚火が初められた。最初白い煙が闇を染め、やがて赤い焔が廣い〳〵天地の一部を切り破つた。その時まではお互に判然と見られなかつた顔が、怪物のやうに赤く浮き出して來た。彼はつく〴〵と若者達を注視した。みんな子供の時から記憶してゐる顔ではあつたが、悉く或る變化の激しい期間を經て來た生長が見られた。その中で彼自身一人が何年以前と同じく、燻され切つた憂欝の中で何時までも喘ぎ藻躁いてゐるやうに思はれた。彼も曾つては一度は確かに掴んだ、と思つたこともあつた。けれども歸郷して現實に打當つた時には、まるで幻影のやうに空しく掌から消え失せてゐた。そして自分では否定しながら、求めて得られない自己僞瞞の慰めを得る爲めに村の若者達と一緒に下らぬ夜遊びに耽けつてゐるのであつた。

「おい、何うだい、これを見い！」息を堰切つて歸つて來た中若者と他の一人は、かう叫びながら裾からげの中から熟した大きい柿を取り出した。「おい、〳〵、くすんだぜ！」

「なる程な、こいつは甘い。」焚火の傍の土の上に並べられるのを見て若者達は口々に訊いた。「誰家のだい？」

「當て見い。」

中若者は得意の頂上に達して、惜しさうになか〳〵明さなかつた。

「村にだつて三軒きりしか無いだけ、みんな云やあ當るがなあ。」

「とんちん家のだい。」

中若者はひつたくるやうに云つた。

「、、、とんちん家の？」―若者達は愕然として困つたやうに顔を見合せた。「分つたらあいつは若い者の處に怒鳴り込むぜ。」

「、、、とんちんは今病つて寢とるだもん、癒るまでにやみんな腐つて落ちてしまふわい。」中若者はますます得意であつた。「それに氣ちがひのおすみだつて取つて食はんちゆ譯はないしな。……」

雪松は靜かに、意識的に靜かに立上つた。

「僕は歸る。あまり遲くなるやうだから。」彼は誰にともなく頭部を下げた。「何うも種々厄介になつて有難う。……また來ますよ。」

「まあ好えぢやありませんかいな。折角あんたの爲めに柿を取つて來たとけ。」彼の同級生はかう云つたが無理には止めなかつた。「むなら柿を持つて歸にもつて食つてつかあさい。……また明日の晩にも來なんせい。」

謝絶るのを強ひて若者達は彼に柿を五つも六つも持たした。彼はハンケチに包んだり、手に持つたりした。

「さようなら。」

彼は若者達から別れて、闇の中をとぼとぼと辿つて行つた。焚火の光りを瞶めて居た視覺は、眼に殘る輝きの爲めに路を一層暗くさした。彼は時々石に躓いた。

若者達がみんな勇者のやうに彼の眼に殘つて居た。恐れず、躊躇せず、その時々の、その日々の生活

に滿足してゐる有樣が、まるで敵陣へ突貫して行く雄々しい武者振りのやうに思はれた。そして彼等は總てが幸福であるのだ。彼は自分の數時間も一つ場所へ居られないやうな動搖した現在の心持と較べてみた。羨望と自己憐憫との爲めに涙が浮んで來るやうであつた。

「たつた一人だ！　然うだ、僕は世界中でたつた一人だ！　そして丁度今のやうに、路も分らぬ闇の中を、たつた一人で手探りに步いてゐると同じことだ！」と、彼は自分に呟いた。が、急に苛立つて唇を嚙んだ。「自分を憫れむな！　それがおれの脊負つて立つた運命なんだ！　趣くまゝに趣かしめよだ！さあ、何處へなりとも引き摺つて行け、行ける處までは行つてやる！」

が、在りとあらゆる物に衝突したやうな困惑が彼の身體を硬直さしてしまつた。彼は一足も前へ進むことが出來なくなつた。重い重い、空中から壓しつけられたやうな屈托に、靈を失つた心が惘然と立停した。

おすみのことを考へた爲めでは無かつた。それに依つて苦しんでゐる自分の心の痛みを思つた爲めでも無かつた。自分の前途の幸福や不幸を考へた爲めでもなかつた。生の意義や、運命や、死やを考へた爲めでも無かつた。然う云ふことはその時彼からは全然遠くに離れて居た。たゞ生きることを失つたやうな心持であつた。自分の存在そのものを認めなくなつたやうな心持であつた。例へば肉體も精神も失つて粉のやうな滓ばかりが、土を離れてぼんやりと浮んでゐるやうな心持であつた。いや、然う云ふ心持さへもだんだん失つて行つて、總ての實在が分らなくなつたのであつた。放心と云へば全くの放心であつた。かう云ふ狀態が時間を超越して暫く續いてゐた。

何かに襲はれるやうな氣持で、雪松は愕然と自分に返つた。そして手に持つて居る柿に氣がつくと、突如として路の上に力に任せて放りつけた。熟した柿は音を立てゝつぶれた。彼は大聲をあげて歌を唄ひながら歩きだした。

歌は彼が遊蕩時代に覺えた流行歌であつた。濁つた、汚れたやうな太い聲が、闇から闇を傳つて喘いで消えて行つた。彼は無我夢中で續けて二つも三つも怒鳴つた。

ふと耳に神經が渡つて氣が就くと、その唄ふ聲がまるで泣いて居るやうに哀れに悲しかつた。何時の間にか低く呟くやうに變つてゐた。

「莫迦！」

闇に向つて彼は自分を罵つた。そして聽覺の甦生を懼れるやうに、全身の神經を聲に集中して改めて怒鳴り立てた。けれども長くは續かなかつた。十足も歩いた頃には、また低く哀れに呟くやうになり、彼自身がその悲しい自分の歌に耳を傾けて居た。

縣道から村へ通ずる路は二つあつた。彼が歩いて歸りつゝあるのは下土居へ通ずる下の路で、上土居へ通ずる路は二十間ばかり上の山裾にあつた。縣道までは最う幾かの距離であつた。

不意にその上の路から彼の方を目掛けて、石を摑んで投げるらしいばら／＼と云ふ音が起つた。彼は愕然として唄ふのをやめて立止まつた。上の路の邊りからは、提燈の灯らしい光りがちら／＼と光つてゐた。石を投げるらしい音は續いて二度も三度もした。そしてその音がやむと、闇を電光型に破つて病的な甲高い女の笑聲がした。自分に反問するまでも無く、その女はおすみであることを彼は知つた。や

がて笑ひもやみ、提燈は急激に動いて村の方へ行つた。彼はおすみが驅けつて村へ歸つて行つたのだなと思つた。

彼は眞直に身體を延ばして歩き出した。歌を唄つてゐた時のやうにあやふやと混亂した歩調では無く、沈着いた、靜かな、念を入れて土に一度づゝに足をつけるやうな歩調であつた。彼は齒をくひしばつてゐた。闇を裂かうとするやうに眼を据ゑてゐた。

縣道まで出た。が、家へ歸るやうに左へは曲らず、右へ行つて晝間追ひ立てられた居酒屋の戸を開けた。何處までも自分を底へ沈めて行かうとする自棄からでは無くなつてゐた。身を躍らして流水の中へ飛び込んで、更に對岸へ達しやうとする冒險者の氣持であつた。彼は躊躇も反省も持たなかつた。

一二

居酒屋を出た時は既に十二時を過ぎる頃であつたらうと思はれた。雪松は眞實に泥醉と云へる醉ひ方をして、しかし間違ひもなくふら／＼と自分の家の方へ歩いて行つた。眞直に立つては歩けなかつた。兩手を宙に浮べ、空氣を掻き分けるやうに、土の上を這ふやうにして、路を弓なりに縫つて歩いた。

居酒屋には近在の百姓で博奕打ちが二人居た。彼はその人達と一緒に飲み初めたことだけは後までも覺えて居た。けれども健康な酒になれた人々を相手に、麴臭ひ地酒を立續けにぐい／＼と煽ることは叶はなかつた。彼は間も無く全身の感覺が痺れて、ひどく醉つたことを意識した。それから後は殆んど記憶と云ふ記憶がなかつた。

「何いな、晝間留守の家へ入り込んで勝手に飯を食つて行くだもん、腹の空く心配はありやせんがなあ。」

主婦がかう云ふ話聲が、ふと彼の耳に入つたこともあつた。彼はおすみの話をして居るのだなと思つた、おすみ、おすみ、あゝ、勝手にしあがれと彼は考へた。相手は云つた。

「そんなら誰も構はんのかいな。とんちんは何がいしとるだいな？」

「とんちんかいな？　とんちんもこの頃は病氣でな、寢た切り食ふや食はずに居るのだがなあ。」

「そいつは重ねがさねいけんな。……でも見殺しにする譯には行かまいけ……。」

かう云つて急にその男は言葉を切つて彼を見て、やゝ狼狽した格構をした。

「分つとるよ。僕の家が面倒を見てやれば好いと云ふのだらう。」彼はさう思つた。「莫迦を云ふな！　糞つくらへだ。」

それから氣が就くと二人は博奕の話をして居た。家が激しく動搖して、身體が何處かへ落ち込んで行くやうであつた。彼は、おのれ確りしろ、と自分を叱るやうな氣持を起した。頭腦が斧で縦横に割られるやうに痛んだ。

「何だ、博奕の話か。」

おすみの話が何時の間にか消え失せてゐるので、彼はがつかりと寂しくなつた。と、思ふと、子供の時山へ遊びに行つて、其處に開かれて居た賭場に偶然に打つかつたことがあつたのを思ひ出した。博奕打ちは默つてゐろと云つて幾何か金をくれた。その金で菓子を買つて食べて、後で母親に大變叱られた。何故母親は叱つたのだらう？　博奕を打つ處へ行つたのが惡かつたのか、金を貰つたのが惡かつたのか、それとも菓子を買つて食べたのが惡かつたのか、しかし彼には分らなかつた。その時も今も分らなかつ

た。そして彼は誰かゞ自分の酒を飲むことを中止させやうとしたのを覺えてゐた。誰だつたらう、主婦らしくも思はれた。

「默つとれ、莫迦！」

と、彼が怒鳴つたことも覺えてゐた。それから彼は彼の頭腦の中は薄暗い穴窟のやうになつて見えた。その穴窟の中には、影繪のやうな無數の人が蠢動して居た。修羅場であつた。取り組んで撲りあひ嚙みあつて居る人達もあつた。鋭い刄物で生命を的に斬りあつて居る者もあつた。彼は刄物と刄物で打合ふ音や、踏み鳴す跫音や、叫び喚く聲をその自分の耳で聽いた。彼自身の苦惱か、幻影の人々の喘ぎか、彼は極めて力強い苦痛を感じながら、判然と自他の區別がつかなかつた。彼は思はず昏倒しさうによろめいた。

自然に動く意識が、今一歩と云ふ處で彼を立直らした。彼は手に觸れた何物かに掴つて漸く倒れずに濟んだ。掴つたのは橋の欄干の親柱であつた。

「あ、此處は橋の上だな。」

はつと意識が返つて彼はさう思つた。が、直にまた空漠たる世界が彼を包んだ。彼は頭部を垂れて間鈍く首を搖り動かした。

胃の中はまるで手を突込んで掻きまはされるやうであつた。やゝもすれば飲下物の全部を吐き出してしまはうとするやうに、惡臭に滿ちた氣味の惡い噫が咽喉を抉り抉りして出た。けれども最うそれが自分の肉體のことだとは思はれなかつた。自分より離れた別な何物かゞ苦しんで居るやうな心持であつた。

呟いて居るやうな唸り聲が、斷えず口から洩れてゐた。しかし欄干の親柱からは容易に離れなかつた。
「畜生、畜生！」彼は親柱に兩手をかけて、人の顏を覗きこむやうな格構をしながら、縺れて動かぬ舌で無闇に喚いた。「さあ云へ！　さあ云へ！　おすみが發狂したことに就ておれに責任があるか？　おれに責任があるか？　……ある？　あると云つたな。……嘘だ、嘘だ！　彼女は自分で蒔いて自分で刈つたんだ！　ざまを見あがれ、獸！　蜘蛛！　そしておれを思ふ通りに苦しめたんだ！　然うだ、苦しめたんだ！」彼は聲をあげて泣き出した。「然うだ、心靈に一生癒えぬ傷を負はしたんだ！　子として父を想ふ愛慕の情の中に、恐しい毒汁を投げ込ましたんだ！　おれはその爲めに自分を呪つて來たぞ！　その爲めに自分の一生を呪はねばならんのだぞ！……一體、このおれを何うしてくれるだい？」

突然、彼はさも〳〵怒りに耐え兼ねたやうに、またそれが憎い相手でもあるかのやうに、欄干の親柱の頂點の角に嚙みついた。暫くは自分の齒の折れるのも厭はぬやうに、夢中に力を入れた。が、腰には力がなく、全身は斷えず動搖した。

「呪つた！　呪つた！　呪ひの穴が二つ掘られた。その自分で掘つた穴に彼女が眞先きにまんまと落ちたのだ。ざまを見あがれ！」急に大聲をあげて笑ひだしたが、また口を歪めて怒つた顏をした。「だが、おれは彼女の爲めに二度地に投げつけられた。が、一度は直ぐに起上つた。今度だつて何時までも倒されて居るものか、今に起上つて見せるぞ！　起上つて見せるぞ！　呪ふなら呪へ、その呪ひは自分に返るばかりだ。……何うだ、そら。何うだ。……」

彼は自分の健全を誇るやうに、親柱から兩手を離して立つた。が、まるで赤ん坊のやうにいぶ〳〵と

した居た。そして動かうとした途端、遂に身體の中心を失つて路にばつたりと座つてしまつた。何かを求めて、それを手頼つて立上らうとするやうに、兩手は周圍の闇を探つたが、つい二尺とも離れて居ない親柱にも掴ることが出來なかつた。彼は土に兩手を突いて苦しく喘いだ。

「‥‥彼女を愛して居た？　然うだ、愛し居た！　愛して居た！　愛して居た！‥‥いゝや愛しては居らなかつた！　誰が愛するものか！　穢はしい！　心靈の穢れだ！」彼は地に向つて胃の腑にあるものを吐き出すやうな格構をした。自分にある彼女を吐き出す考へでもあつたのであらうし、また眞實に吐氣を催した爲めでもあつた。「愛した？　‥‥あ、彼女は發狂したんだ。然うだ。氣がちがつたんだ。‥‥とかく若さんの氣に惚れた、か。」

彼はまた大聲をあげて笑つて、兩手を後頭部に組合してごろりと仰向けに寢轉んだ。それと同時に、此處は路上だな、自分は土の上に倒れたんだな、と云ふことを意識した。意識をしながら動くことが億劫であつた。そして冷々とした土の冷たさは、酔つた身體に快かつた。彼は暫くは凝乎と身動きもしなかつた。

「起上つて見せるぞ！」やがて彼は叫んで、兩手をあげて力なく空を動かし、頭部を少し擡げたが、直にまたばつたりと下してしまつた。囈言のやうな縺れた聲は續いた。「起上つて見せるぞ！　起、上つて、見せるぞ！」

見るとも無く無數の星が砂子のやうに輝いて居る、晴れて澄み切つた晩秋の夜の空が眼に入つた。風も吹かない冷え切つた夜であつた。空は左右に大動搖をして、彼が熱心に一箇所を瞶めやうとしても何

うしても安定をしなかつた。彼が脊の下にある大地までが、ゆら／＼と動いて居るやうであつた。

星の光尖は何れも細く、長く、鋭く、横にのびて居た。最初は非常に高く思はれて居た空が、だん／＼彼に向つて突進して來て、遂にはすぐ手の届きさうな近くへ下りた。星が一つの集團となつて、月のやうに大きくなつて見えた。その星がくる／＼と廻轉して彼の眼前で躍つた。

何處からか寂しい蟲の啼く聲が聞えてゐた。頭部の下では水が石に衝突する響がしてゐた。この二つの微かな音は入り交つて、極めて物佗しい音調を作つた。醉に惑亂し、苦痛の絶頂に達して居る彼の耳にも、この音樂だけは靈妙な美しさを持つて入つて來た。星の光りは次第に彼の視覺から消えて行つた。

何うかした途端にふと彼は都會の繪草紙屋の店頭で見たブロマイド版のモナ・リザの肖像を思ひ出した。その肖像には魂が入つてゐた。あの眼が柔らかく彼を瞶めて居ることを彼は知つた。モナ・リザは死んだ母のやうにも思はれた。母親が彼の狂態を知つて空間から嘆きの瞳を向けて居るやうにも思つた。しかしよく見ると母親では無く、矢張りモナ・リザであつた。涙を湛めて何時までも彼を瞶めて居た。何時までも‥‥。

闇は空間から地を壓迫するやうに、地の上のみに重り重りあつて居た。空では星が瞬いたり飛んだりして居た。その中に、その下に、土を床として醉つた雲水が死人のやうに眠つて居た。轍が作つた溝に腕が嵌つてゐた。砂礫が彼の頰の下に踞つて居た。

曉近くなつて繁く降りた露と冷氣との爲めに、彼は眠りから醒めた。着物は水から上つたやうに濡れて砂が塗れて居た。眼覺めた時に彼は初めて地上に眠つて居たことを意識したが格別驚きもしなかつた。酔つてから後の記憶も一つも殘つては居なかつた。彼は着物の砂を兩手で拂ひ落して靜かに家へ歸つて來た。

醉ひは未だ大分殘つて居た。意識がかなり判然と迫つて來たゞけに肉體的の苦痛は一層激しかつた。彼は屢々昏倒しさうになつて、小さな石にさへも度々躓いた。彼は女中のおしげを呼び起して、二階の自分の部屋へ入つて寢た。

苦痛は翌日も續いた。何處かへ毒物が殘つて居るらしく、身體を少し動かしても直に嘔吐の感じが催して來た。胃は酒精分の爲めに乾燥し切つて、腹が鳴る程水を飲んでも猶もその上に欲した。顳顬からかけて額の邊りには太い青い筋が浮み、顏は醜く凄く青褪めて眼が据つて血走つて居た。

頭腦は刄物をもつて少しつゝ切り刻まれる時でもそれ程切なくはあるまいと思はれる程に激しく痛んで居た。彼はタオルで緊しく鉢卷を締めて居たが、それでも猶も少しも輕くはならなかつた。が、彼のその日の苦惱はこの肉體から來るものでは無かつた。抑へつけられ、撓めつけられて來た彼の心臟の泣き叫ぶ聲が彼を訶むのであつた。劍をもつて我と我が身體を傷けて來たことに就て、鐵槌のやうな自責の念が彼を脅迫するのであつた。彼は午後になつて宿醉の苦からやゝ逃れることが出來ても、依然として寢床から起上らずに考へ續けた。

「最う澤山だ、最う澤山だ。事業も理想も愛も覺醒も、おれは自分の持物を全部失つたんだ。それは勿

論一種の幻影に過ぎなかつたのだから早晩失はるべきものであつたに違ひない。しかし最早失つてしまつたのだ。その上猶何を無くしろと云ふのだ。」彼は自分に云つた。「最うおれの所有物はこの肉體と、持つて生れて傷けられ虐した心臓とだけだ。その上これまでも放り出せと云ふのか。」

幾度も考へて來たやうに、彼はまたもやおすみに關する事件の推移や自分の性格やを考へて見た。彼が知る彼の性格は、神經質で、感傷的で、他人から見ればまるで氣に掛けるにも當らない纖かな事に就ても、やゝ過大に感じ過ぎて苦悶懊惱する習癖を持つて居る一種の精神的不具者のやうに思はれた。彼は何故自分は自己の生長に對するあらゆる障害を押し倒し踏み倒し、勇者のやうに前へ進むことは出來ないだらうと考へた。すぐにこだはつてしまふのだ。そして自分で生んだ自分の心持に熱し、狂惱し、惑亂してしまふのだ。そして意識をしながら自分をどん底へ沈めてしまふやうな行動を敢てするのだ。

しかしかう云ふやうに彼はやゝ、或ひは好んで、自分を誇大な悲劇の中へ置きたがる傾向は持つてゐたが、内心に燃えてゐるより好く生きたいと願ふ本能的な欲望は、ばつたり行詰まると何時でも或る水準點までは連れて歸るのであつた。底無しの泥沼へ踏み込んだやうに、何時となくずる／＼に境遇の底へ落ちこんで動かずにしまふやうになるには、餘りに彼は烈しい神經質的な感傷家であつた。彼のその日の新しい苦惱は、このよりよく生きやうとする欲望から生れつゝあつたのであつた。

「囁き、蜘蛛、父の妾、人妻、離婚、そして發狂――若しもおれが彼女に愛着を感じて居たからつてそれで好いではないか？　人生と云ふ長い道程にあつた一つの難所に過ぎなかつたのでは無いか？　何故にこの事實を狀態として眺めて行かれぬのだ、他の一些事のやうに？　何故に自己をも一つの物象と

て傍觀者のやうに觀賞者のやうに瞶めて行かれないのだ？　何故に自分から切離して忘れてしまはないのだ？　何故に自分をその中へ沒入さして喘ぐのだ？」彼の心が心に反問した。「計劃が無かつたり、豫期しなかつたりする人生の偶然事に對して、何故に自分が責任を負擔せねばならぬのだ？　何故にそれを罪惡的に感じて自己を虐げねばならぬのだ？……この度の悲劇の種子は自分に依つて蒔かれたのかも知れない。しかし自己の反省や意識の絶無であつた場合に起つたことが、果して原因と名附られるのだらうか？　その原因によつて起つた總ての推移の事實を、全部自分が購はねばならぬのだらうか？……最う澤山だ！　この上僕に何があるのだ？　何を提供することが出來るのだ？　たゞ徒らに無益な懊惱と病的な惡の行爲とを繰返すばかりでは無いか？　最う宥してくれ、あれは耐えられぬ！」

が、かう云ふ考へ方が彼を起上らせるものであつたならば、彼は最つと早く地上に立つて居なければならなかつた。この考へに對する實感は彼の身軀にも湧き起つてゐた。しかし心靈と同化して彼を支配するやうになるまでには、まだ／＼遠い距離があつた。つまり一つの理窟としか感じられないのであつた。深淵の中から時々湧き出る泡のやうなものであつた。惱しき限りの心は依然として胸一杯に張り溢れて居た。

　雪松は自分の性格のことから母親の性格を考へて見た。母は宗教的な見地から自己に罪があるものと思惟し、自己の行爲に關聯のある悲劇や惡に對しては、悉く自己に責任を嫁して居た。或ひは最つと極端に考へれば、すべての世の中に起る缺陷は自分の責任に歸して居たかも知れないと思はれる程であつた。その爲めに全力を擧げて佛を祈り、佛の功力を手頼り、猶幾分かでも自分の信仰によつて缺陷の輕

滅を圖らんとして居たやうであつた。彼は自分の中に母親の性格の一部を見るやうな氣がした。けれども彼には信仰と云ふものは絶無であつた。付つては信じんとしたこともあつたが、何うしても思ひ切つて墻を一つ躍り越えて内部に入ることが出來なかつた。この自分を彼は幸福にも勇敢にも思ひ、限り無く哀れにも思つてもゐた。彼は今母親と自分との差異の大半がこの信仰の有無の一點に殘つてゐることを認め、其處に幸福と懊惱との結果の生ずることを知つた。が、信仰——彼は何うしても其處へ行かうと思ふ氣にはならなかつた。考へて見たゞけでも自ら嗤笑的な氣分になるのであつた。そしてたゞ數年前に教會へ通つて居た時に得たあの初戀の思ひ出が、苦しく遣瀬なく、懷しく、慕はしく、門出の第一歩の印象として殘されて居るばかりであつた。

彼は自分の部屋を見渡した。褐色の壁と、芦に雁を描いた襖と、床にかゝつた南畫の山水と、欅の机と、本箱と、それらの物が初戀に續いて起つた恐怖と苦痛との蜘蛛の印象を語つて居るやうに思はれた。この追憶は彼を直に現實に追ひ返した。彼はまた狂つたおすみのことを考へた。

「この部屋で起つたことだ、この部屋に歸してしまへば充分だ。」彼はまた呟いた。「さあ最う好い、最う好い！　最う何か生れて來ても好い頃だ！　抑へつけられ撓めつけられるのはこれで澤山だ！……さあ生れて來い！　生れて來い！」

終日彼は床の中で輾轉として悶えてゐた。けれども何物も生れては來なかつた。疲勞が烈しく全身へ來て、起き出た時には足がふら〳〵と震へて居た。

夜、山を越えた隣村に火事があつた。彼は火事と聞いた時、直に發狂したおすみを聯想して竦つと顫へて狼狽して起上つたが、隣村であつたので漸く安睹した。そしてその村には遠い親類續きの家が二軒あつたので、父親に賴まれて駈けて行つてみた。欝した心には却つて然う云ふ刺戟が喜ばれたのであつた。

幸に火事は親類の一二軒先きでとまつた。しかし親類も道具を運びだしたりして大騷ぎだつたので、見舞の炊出しが必要のやうに思はれた。で、彼は親類の者が引止めるのを無理に振り離して、父親に報告する爲めに一人とぼ〳〵と山を越して歸つて來た。峠は暗かつたが星のある夜は左程困難でも無かつた。火事場で働いた疲勞が來て、時々睡魔に襲はれたりした。

彼が火事をそれ程親しく見たのは漸く二度目であつた。一度は未だ子供の時のことで、學校のある隣村の一軒家が燒け、其家の主人が燒け死んだ。彼はその時、燒けた藁屋根の下から引き出されて、一塊の土のやうに黑くなつた死骸が地上に横たへてあつたことを覺へて居た。彼が無慘だと云ふ印象を受けた最初のものであつた。彼は遠いその昔のことを回想しながら歩いた。

「今夜の火事が、若しもおすみが火を放けたのだつたら？　そして燒け死んだのだとしたら？……」彼は考へるのさへも怖しかつた。「でも好かつた。ほんとうによかつた！」

家族の者は眠つて居た。彼が家を出る時、父親が若しも眠るやうであれば裏木戸を開けて置くから奥縁から入つて來いと云つたのを思ひ出した。彼は裏木戸へ廻つた。

裏木戸の扉は誰かゞ内へ入つてそのまゝ放つて置いたやうに開いて居た。彼は幾何その夜に限つて其

庭に鍵のかけて無いことを他の人が知らないからと云つて不用心なことだと思つた。内から釘をさし込み、案内を知つた廣場を横切つて奥庭へ行かうとした。其處には土藏に通ふ廊下があつた。廊下も兩側が扉となつて、板敷が切り下げて奥庭から裏庭へ通ずるやうになつて居た。不思議にも其處の扉も明け放つたまゝにしてあつた。彼は首を傾けながら廊下を横切らうとした。その途端氣が就くともなく土藏の方を振り返つた。何物も見えなかつたが、何となく人の氣配がするやうに思はれた。

「誰だ?」彼は若しも居なかつた時に憶病を自分に辯解する爲めのやうな低聲で云つた。「誰だ?」

返事は無かつた。彼は行き過ぎやうとしたが、微かな光りが眼を射たやうに思つてまた立止まつた。

心臟が眞實に憶病らしく鼓動を初めた。

光りはやがて闇に馴れた眼を眩しく射て現はれた。次で人影も見えた。おすみであつた。おすみが提燈を持つて土藏の前から何かして居たのであつた。彼は思はず聲を立てる程愕とした。恐怖が全身を走つて、立竦んだまゝ動くことが出來なかつた。そして今考へながら歸つたばかりの聯想が直に放火と云ふことを思はした。殊に他の事を見習ひやすい發狂者は、隣村の火事に刺戟されないとも限らぬからであつた。が、彼は動けなかつた。勿論聲をかけることも出來なかつた。

狂つて居ても流石におすみも氣がとがめるらしかつた。彼を發見すると丁度彼のやうに吃驚した樣子であつたが、狼狽てゝ廊下から飛び下りて廣場の方へ駈けて行つた。

「嘘つき、嘘つき! 若さんの嘘つき!」

と、彼女は叫んだ。それから裏木戸の掛金を外して出て行くらしい跫音がした。彼は震へる足を踏みし

めて再び裏木戸まで取つて返し、改めて掛金を掛けてから土藏の前へ行つて仔細に檢べた。しかし火の氣らしいものは何處にも見え無かつた。彼は漸く安心して奥座を入つて行つて委細を父親へ語つた。

「誰だつたんだい、今其處で話をして居たのは？」

彼が寢室の傍を離れやうとすると、父親は追つかけて訊いた。彼は不意を打たれたやうに思つたが、何故か自分にも分らずにおすみのことは明さなかつた。

「然うかな、確かに話聲が聞えたやうに思つたがなあ。」父親は訝さうに云つた。「おやすみ。」

二階の部屋は眞黑であつた。彼は立つたまゝ暫く腕組をして考へて居たが、やがて手探りに床へ入つて行つた。

「おゝ、おすみは死なんで好いことをした。」

と、また彼は思つた。「おれも一度は何故死な無かつたのだと考へたこともあつた。淺間しい姿をみんなの嗤笑の的にして、そして聞くだに恐しく苦しい魂の傷を抱いて狂奔しまはるよりも、死んだ方が餘程安らかであらうと思つたことがあつたのだ。しかしそれは間違ひだつた、間違ひだつた！　氣がちがつて居ても一度全快しさへすればまた幸福だと思ふ時も來るのだ。然うだ、彼女は死なんで好いことをしたー」

歸鄕以來、彼は初めて安らかな心持で眠り入つた。明日は何と云つても父親を無理に說きつけて、彼女を病院へ入れて治療してやらうと思ひながら。例へ彼女を二年や三年病院へ入れてやつた處で、無くなつて居るとは云へ未だ彼の家にはそれに困らぬだけの資産があつたのであつた。

床を離れた時は遲かつた。父親は雪松が未だ起上らぬ内に炊出しを猪之吉に擔がして親類へ近火見舞に行つて居た。彼は茶の間で繼母に昨夜の火事の樣子を詳しく話して聞せた。最早おすみの發狂の原因を穿鑿したり、それを自分に歸して悶えたりする心持は無くなつて居た。たゞ起つた事實に對して注がうとする無意識の裡から萠え出た愛の若芽があるばかりであつた。彼は長く繼母の傍へ止まつてゐて親しく無駄話をしたり新聞を讀んだりして居た。

父親が留守となつた爲め、昨夜決心したことも語ることは出來なかつた。と云つて他に彼の仕事は無かつた。果樹園の計劃などは遠い昔の思ひ出のやうで、彼の現在とは全然交涉が無くなつて居た。要するに都會から持つて歸つたものは、故鄕へ對する思慕の同伴者であつたに過ぎなかつたやうに思はれるのであつた。彼は二度とその心持を振り返つて見やうとは思はなかつた。彼はやゝ落着いたけれども、何事かを性急に要求する心が恐しく怠屈にした。

「何かしなければ、何か仕事を見付けなければ。」彼の心は焦つてから叫んで居た。「何んなことでも最う受入れて見せる。たゞあの空想的な計劃でなく、眞實の自分の仕事が欲しい！　自分の全力をあげて、何んな事變にあつてもびくともせぬ眞の自分の仕事が欲しい！」

怠屈を紛らす爲めに本でも讀まうかしらと考へた。けれども彼が所有して居る書籍の中内には彼のこの心を滿してくれるやうなものは一冊も無かつた。彼は階段を登り切ると一二三と步數を數へて自分の

部屋へ入つて行つた。歩數は二十一數へられた。

「右から數へて二十一冊目。」

彼は本箱の扉を開いて、上の段の右から數へ初めた。二十一冊目は二段目の左の方にあつた。或る文學者の感想錄のやうな本であつた。彼はがつかりして曳き出して開いて見る氣にもならなかつた。そして改めて、何か讀むものは無いかしらと、貧しい書籍の名をずつと讀んでみた。

心に咬られるやうなものは一冊として無かつた、彼は涙を瞼に滋めて欠呻をした。やがて彼は詮方なささうに厚卷の聖書を取り出した。教會へ通つて居た時の唯一の實在した記念品であつた。彼はある時は非常に舊約の傳奇的な物語に興味を寄せて居たことがあつた。それなりとも繰り返して讀んで見やうかと思つたのであつた。

「元始に神天地を創造たまへり。――」

彼はまた欠伸をした。それでも辛抱をして漸く五六頁讀んだが、とう／＼我慢がし切れなくなつて放り出してしまつた。また直に所在なさが來た。彼は障子を開けて外部を見た。

いよ／＼白さを增して來た寒さうな陽が、正午過ぎのその頃を斜めに家を照してゐた。裏山の落葉樹の葉は大抵色づいて、風が吹けばから／＼と鳴りさうに枯れかけてゐた。彼は冬の近づいて來たことを痛切に感じた。二ケ月も、あるひはそれ以上も、明け暮れを雪の中で送ることを思ふと、氣が滅入るやうであつた。希望と仕事との無い長い時間の恐しい怠屈が彼を威嚇した。彼は泣き出したくなつた。

下駄をつゝかけて彼は裏木戸から畑の方へ歩いて行つた。麥を蒔いたり蠶豆を植えたりしやうと思つ

た計劃が見事に挫折して、畑は依然として空いて居た。黃色い桑の落葉が土一面を蔽つて、彼の空想の消滅を嗤つて居るやうに思はれた。彼は土に對して羞しいと思つた。けれども同時にさうして淘汰されてだん〳〵確實なものを握つて立たうと焦つてゐる自分の變化を讃美しやうとする氣持も無いではなかつた。空虛なものが取り去られて、その極端の最後まで行つた時に、何かしら最も確實なものを摑んで起上られるやうに思はれるからであつた。

彼は西條柿の木の下へ行つた。考へるよりも柿でも食べろと云ふ氣になつたのであつた。彼は前々日、其處で子供が彼に驚いたことを思ひ出して顏を赤くした。轉びながら畑を遁げて歸つた姿を、今其處に見るやうな氣もした。が、またそれは遠い遠い何年以前のやうにも思はれた。彼は涙ぐんで微笑を洩した。

「おれは過去を忘れやうと思つた。その重苦しい中から自分を脫しさせやうとした。しかし過去の事實は空間につけた足跡だ。消ゆるにしては餘りに鮮やかだ！」彼はだん〳〵肉體が顫へるやうな昂奮を感じた。「過去に於て波瀾や屈折や、そして羞しき行爲の多かれだ。おれは今何物も持つて居ない！　が、やがてはこの過去の事實が自分を生長さしたことに氣が就く日が來るだらう。……おれは最早遁れたり忘れたりしやうとは思はない！　恥よ、苦痛よ、實感となつて甦生れ！　おれを鞭て！　みんな甦生れ！　甦生れ！」

彼はまた子供等のことを考へた。この次には安心して眞實に飽くる程熟柿を食べさしてやらうと思つた。彼は甘い哀愁を感じながら、鳥のやうに柿の木へ登つた。

谷間の稻は大抵家へ運ばれて、稻架に殘つて居る分は纔かしか無かつた。冬の水を引いた田には、鶺鴒が尾を搖り動かして遊んでゐた。野良を働く農夫の姿もあつた。

麥を蒔かれた田も處々にあつた。黑い隴の上が淡い綠を帶びてみられた。それは間違ひも無く麥が若芽を出したのであつた。

「麥が生えた！」

と、彼は思つた。昂奮が一時に急激に發して、快よい戰慄が身體を走つた。彼は狼狽て、柿の木から下りて、息を堰切つて馳けつて自分の麥田へ行つて見た。煩惱と惑亂との項點へ立つて、全然自意識を失ひながら、引き摺られて詮方なく種子を下した麥田へ行つて見た。頰白鳥が五六羽隴の間へ下りて餌をあさつて居たが、彼の姿を見ると微かに啼いて飛び去つた。彼は畦に立つた。

麥は若芽を出して居た。無の中から有を發したやうに、厩肥を貫いて瘦せて色の惡いひよろ／＼とした芽が五六分ばかり萌えてゐた。けれどもその芽には飽くまでも伸びて行かうとする生長の欲望が燃えて居ることを彼は感じた。種子の下し方も薄かつたかと思はれる程に丁度よかつた。彼は込み上げて來る喜悅の情の爲めに、躍り出したいやうであつた。自分の力によつて生れ出たものに對する强い强い執着を、初めて全身に犇々と感得した。彼は何時までも隴の間をぐる／＼と巡りまつた。

「この隴は隨分下手に出來て居るな。」と彼は思つたりした。「きつとおれがやつたのだらう。……だが麥は矢張り生えてゐる！」

彼はふと敎會へ通つて居た頃、牧師が頻りに繰り返して說明をした、約翰傳の麥種の譬への言葉を思

ひ出した。この頃の例となつてゐるやうに、教會のことを思ひ出す時に起る嗤笑的な氣分は無く、何となく快よい空氣が自分の周圍を浸して來るやうに思はれた。

「誠に實に爾曹に告げん、一粒の麥若し地に落ちて死ずは唯一つにてあらん――。」彼は聲に出して暗誦した。「誠に實に爾曹に告げん、一粒の麥若し地に落ちて死ずば唯一つにてあらん、若し死なば多くの實を結ぶべし。……誠に實に爾曹に告げん、一粒の麥もし地に落ちて死なずば唯一つにてあらん――。」

聖書の聯想から彼は今しがた讀んだ創世紀の一節を思ひ出した。耕す者の先祖はその弟を打つて殺した、土がその血を受けた爲め土に呪はれて一生流離人となつた、と書いてあつた。彼は父のやみがたい欲望が、やがては家族も流離人とするかも知れないと云ふ運命の豫覺を持つて居た。

「そして……。」と彼は考へた。「おすみの發狂の原因がおれに在るとすれば、おれの境遇も耕す者の先祖に似て居る！」

が、血は流さなかつたと彼は思つた。彼女の生命はとりとめることが出來ると思つた。

「その代り、今では未だ幾分か耕された土地が殘されて居る。……が、土の呪ひだけは遁れても、あの發狂に導いて行つたに就いては、何物かの呪ひだけは受けねばならぬ。おれは一生この記憶を確りと抱いて生きて行く！」彼は自分の將來を見やうとするやうに眼を光らした。「勇敢なれ、さあ、今度こそいよ〳〵新しい生活が初まるんだ！」

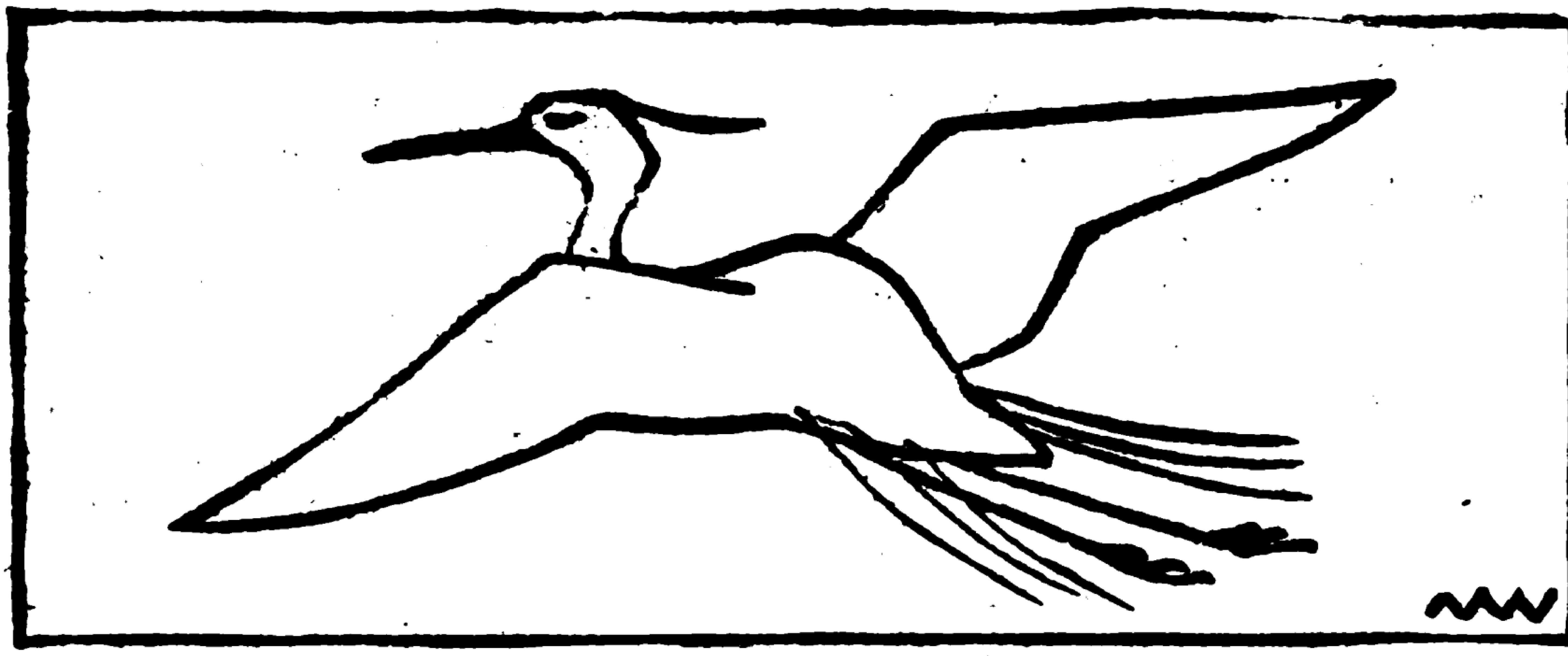
彼はこの麥が幾十日の間雪の下に壓されて過す冬のことを考へた。そして彼もその間に何物か確實なものを掴んで、春になつて麥が生長すると同時に猛然と起上らねばならぬと思つた。

「それでも猶分らなかつた時には、矢張り耕された土地を耕し續けて、何事か分るまで待つのだ。……然うだ何時迄も待つのだ！」

家へ歸つても未だ父親は親類から歸つて居なかつた。彼は直に實行を迫る氣早な焦慮と、廣い廣い原つぱに一人棄てられたやうな寂しさとを抱いて父親の歸宅を待つて居た。

彼が豫覺してゐたやうに雪松の家族が生れた家を失つて流離人のやうに故郷を離れて行つたのは、この時から長い年月の後では無かつた。從つて彼も未だ土に確りと足を踏みつける程に起上らぬ迄に耕された土地を失つてしまつた。後から考へあはして彼はその時にも單に春の若芽に刺戟されて再び空想的な土の熱着を感じだしたのであつたなと思つた。けれども長い長い生の道程の中の一つの事實であつた。其後も幻は幾度か彼を眩惑し、幾度か消えて行つた。倒れたと思ひ起上つたと思ふ生活は何處までも續いて行つた。そして彼はそれを切り拓いて行かう行かうと悶え苦しんだ。

おすみの發狂は姙娠の爲めであつた。子供が生れる時には既に治つて、間も無く嫁入つた家へ歸つて行つた。が、この事實は彼の重荷を脊負つたやうな過去の足跡に輕減を與へるものでは無かつた。呪ひを受けて行かうとする感じは何時も恥ぢとなり苦痛となつて雪松を虐げ、鞭つて行つた。――（完）――



袈裟と盛遠

芥川龍之介

上

(日暮、盛遠が部屋の柱によりかゝりながら、前栽の秋草を眺めてゐる。)

その獨白

もう日が暮れるな。何時もは日が暮れるのを待ちかねる己も、今日ばかりは暗くなるのが殘り惜しい。今までの己が一夜の中に失はれて、明日からは人殺しになり果てるのだと思ふと、かうしてゐても、體が震へて來る。この兩の手が血で赤くなつた時を想像して見るが好い。その時の己は、己自身にとつて、どの位呪はしいものに見えるだらう。それも己の憎む相手を殺すのだつたら、己は何もこんなに心苦しい思をしなくてもすんだのだ。が、己は今夜、己の憎んでゐない男を殺さなければならない。

己はあの男を以前から見知つてゐる。渡(わたる)左衛門尉と云ふ名は、今度の事

に就いて知つたのだが、男にしては柔しすぎる、色の白い顏を見覺たのは、何時の事だかわからない。それが袈裟の夫だと云ふ事を知つた時、己が一時嫉妬を感じたのは事實だつた。しかしその嫉妬も、今では己の心の上に何一つ痕跡を殘さないで、綺麗に消え失せてしまつてゐる。だから渡は己にとつて、戀の仇とは云ひながら、憎くもなければ、恨しくもない。いや、寧己はあの男に同情してゐると云つても、よい位だ。衣川の口から渡が袈裟を得る爲に、どれだけ心を勞したかを聞いた時、己は現にあの男を可愛く思つた事さへある。渡は袈裟を妻にしたい一心で、わざわざ歌の稽古までしたと云ふ事ではないか。己はあの生眞面目な侍の作つた戀歌を想像すると、知らず知らず微笑が脣に浮んで來る。しかしそれは何も、渡を嘲る微笑ではない。己はさうまでして、女に媚びるあの男をいぢらしく思ふのだ。或は己の愛してゐる女に、それ程までも媚びようとするあの男の熱情が、愛人たる己に或種の滿足を與へてくれるからかも知れない。

しかしさう云へる程、己は袈裟を愛してゐるだらうか。己と袈裟との間の戀愛は、今と昔との二つの時期に別れてゐる。己は袈裟がまだ渡に縁づかない以前に、既に袈裟を愛してゐた。或は愛してゐると思つてゐた。が、これも今になつて考へると、その時の己の心もちには不純なものも少くはない。己は袈裟に何を求めたのか、童貞だつたその頃の己は、明に袈裟の體を求めてゐた。もし多少の誇張を許すなら、己の袈裟に對する愛なるものも、實はこの欲望を美しくした、感傷的な心もちに過ぎなかつた。それが證據には、袈裟との交渉が絶えたその後の三年間、成程己はあの女の事を忘れずにゐたにちがひないが、もしその以前に己があの女の體を知つてゐたなら、それでもやはり忘れずに思ひつゞけてゐたで

あらうか。己は恥しながら、然りと答へる勇氣はない。己が袈裟に對するその後の愛着の中には、あの女の體を知らずにゐる未練が可成混つてゐる。さうして、その悶々の情を抱きながら、己はとうとう己の恐れてゐた、しかも己の待つてゐたこの今の關係にはいつてしまつた。では今は？　己は改めて己自身に問ひかけよう。己は果して袈裟を愛してゐるだらうか。

が、その答をする前に、己はまだ一通り、嫌でもかう云ふいきさつを思ひ出す必要がある。――渡邊の橋の供養の時、三年ぶりで偶然袈裟にめぐり遇つた己は、それから凡そ半年ばかりの間、あの女と忍び合ふ機會を作る爲に、あらゆる手段を試みた。さうしてそれに成功した。いや、成功したばかりではない。その時、己は、己が夢みてゐた通り、袈裟の體を知る事が出來た。が、當時の己を支配してゐたものは、必しも前に云つた、まだあの女の體を知らないと云ふ未練ばかりだつた譯ではない。己は衣川の家で、袈裟と一つ部屋の疊へ坐つた時、既にこの未練が何時か薄くなつてゐるのに氣がついた。それは己がもう童貞でなかつたと云ふ事も、その場になつて、己の欲望を弱める役に立つたのであらう。しかしそれよりも、主な原因は、あの女の容色が、衰へてゐると云ふ事だつた。實際今の袈裟は、もう三年前の袈裟ではない。皮膚は一體に光澤を失つて、眼のまはりにはうす黑く暈のやうなものが輪どつてゐる。頰のまはりや顋の下にも、以前の豐な肉附きが、嘘のやうになくなつてしまつた。僅に變らないものと云つては、あの張りのある、黑瞳勝な、水々しい眼ばかりであらうか。――この變化は己の欲望にとつて、確に恐しい打擊だつた。己は三年ぶりで始めてあの女と向ひ合つた時、思はず視線をそらさずにはゐられなかつた程、強い衝動を感じたのを未にはつきり覺えてゐる。

では、比較的さう云ふ未練を感じてゐない己が、どうしてあの女に關係したのであらう。己は第一に、妙な征服心に動かされた。袈裟は己と向ひ合つてゐると、あの女が夫の渡に對して持つてゐる愛情を、わざと誇張して話して聞かせる。しかも己にはそれが、どうしても或空虚な感じしか起させない。「この女は自分の夫に對して虚榮心を持つてゐる。」――己はかう考へた。「或はこれも、己の憐憫を買ひたくないと云ふ反抗心の現れかも知れない。」――己は又かうも考へた。さうしてそれと共に、この嘘を曝露させてやりたい氣が、刻々に強く己へ働きかけた。唯、何故それを嘘だと思つたかと云はれゝば、それを嘘だと思つた所に、己の己惚れがあると云はれゝば、己には元より抗辯するだけの理由はない。それにも關らず、己はその嘘だと云ふ事を信じてゐた。今でも猶信じてゐる。……

が、この征服心も亦、當時の己を支配してゐたすべてではない。その外に――己はかう云つただけでも、己の顔が赤くなるやうな氣がする。己はその外に、純粹な性欲に支配されてゐた。それはあの女の體を知らないと云ふ未練ではない。もつと下等な、相手があの女である必要のない、欲望の爲の欲望だ。恐らくは傀儡の女を買ふ男でも、あの時の己程は卑しくなかつた事であらう。

兎に角己はさう云ふいろいろな動機で、とうとう袈裟と關係した。と云ふよりも袈裟を辱めた。さうして今、己の最初に出した疑問へ立ち戻ると、――いや、己が袈裟を愛してゐるかどうかなどと云ふ事は、いくら己自身に對してでも、今更改めて問ふ必要はない。己は寧、時にはあの女に憎しみさへも感じてゐる。殊に萬事が完つてから、泣き伏してゐるあの女を、無理に抱き起した時などは、袈裟は破廉恥の己よりも、より破廉恥な女に見えた。亂れた髮のかかりと云ひ、汗ばんだ顔の化粧と云ひ、一つと

してあの女の心と體との醜さを示してゐないものはない。もしそれまでの己があの女を愛してゐたとしたなら、その愛はあの日を最後として、永久に消えてしまつたのだ。或は、もしそれまでの己があの女を愛してゐなかつたとしたなら、あの日から己の心には新しい憎しみが生じたと云つても亦差支へない。さうして、ああ、今夜己はその己が愛してゐない女の爲に、己が憎んでゐない男を殺さうと云ふのではないか！

それも完く、誰の罪でもない。己がこの己の口で、公然と云ひ出した事なのだ。「渡を殺さうではないか。」――己があの女の耳に口をつけて、かう囁いた時の事を考へると、我ながら氣が違つてゐたのかとさへ疑はれる。しかし己は、さう囁いた。囁くまいと思ひながら、齒を食ひしばつてまでも囁いた。己にはそれが何故囁きたかつたのか、今になつて振りかへつて見ると、どうしてもよくはわからない。が、もし強いて考へれば、己はあの女を蔑めば蔑む程、憎く思へば思ふ程、益何かあの女に凌辱を加へたくてたまらなくなつた。それには渡左衛門尉を、――袈裟がその愛を衒つてゐた夫を殺さうと云ふ位、さうしてそれをあの女に、嫌應なく承諾させる位、目的に協つた事はない。そこで己は、まるで惡夢に襲はれた人間のやうに、したくもない人殺しを、無理にあの女に勸めたのであらう。それでも己が渡を殺さうと云つた、動機が十分でなかつたなら、後は人間の知らない力が、（天魔波旬とでも云ふが好い。）己の意志を誘つて、邪道へ陷れたとでも解釋するより外はない。兎に角、己は執念深く、何度も同じ事を繰返して、袈裟の耳に囁いた。

すると袈裟は暫くして、急に顔を上げたと思ふと、素直に己の目ろみに承知すると云ふ返事をした。

が、己にはその返事の容易だつたのが、意外だつたばかりではない。その袈裟の顔には、今までに一度も見えなかつた輝きが眼に宿つてゐる。姦婦——さう云ふ氣が、己はすぐにした。と同時に、失望に似た心もちが、急に己の目ろみの恐しさを、己の眼の前へ展げて見せた。その間も、あの女の淫らがましい、凋れた容色の厭らしさが、絶えず己を虐んでゐた事は、元よりわざわざ云ふ必要もない。もし出來たなら、その時に、己は己の約束をその場で破つてしまひたかつた。さうして、あの不貞な女を、辱しめと云ふ辱しめのどん底まで、つき落してしまひたかつた。さうすれば己の良心は、たとひあの女を弄んだにしても、まださう云ふ義憤の後に、避難する事が出來たかも知れない。が、己にはどうしても、さうする餘裕が作れなかつた。まるで己の心もちを見透しでもしたやうに、急に表情を變へたあの女が、ぢつと己の眼を見つめた時、——己は正直に白狀する。己が日と時刻とをきめて、渡を殺す約束を結ぶやうな羽目に陷つたのは、完く萬一己が承知しない場合に、袈裟が己に加へようとする復讐の恐怖からだつた。いや、今でも猶この恐怖は、執念深く己の心を捕へてゐる。臆病だと哂ふ奴は、いくらでも哂ふが好い。それはあの時の袈裟を知らないもののする事だ。「己が渡を殺さないとすれば、よし袈裟が手を下さないにしても、必己はこの女に殺されるだらう。その位なら己の方で、渡を殺してしまつてやる。」——あの女の淚がなくて泣いてゐる眼を見た時に、己は絶望的にかう思つた。しかもこの己の恐怖は、己が誓言をした後で、袈裟が蒼白い顔に片靨をよせながら、眼を伏せて笑つたのを見た時に、更に裏書きをされたではないか。

ああ、己はその呪はしい約束の爲に、汚れた上にも汚れた心の上へ、今又人殺しの罪を加へるのだ。も

し今夜に差迫つて、この約束を破つたなら――それも、やはり己には堪へられない。一つには誓言の手前へもある。さうして又一つには、――己は復讐を恐れると云つた。それも決して嘘ではない。しかしその上にまだ何かある。それは何だ？　この己を、この臆病な己を追ひやつて罪もない男を殺させる、その大きな力は何だ？　己にはわからない。わからないが、事によると――いやそんな事はない。己はあの女を蔑(さげす)んでゐる。恐れてゐる。憎んでゐる。しかしそれでも猶、それでも猶己はあの女を、愛してゐるせいかも知れない。

（盛遠は腕を拱きながら、徐に立ち上る。どこかで今様を謠ふ聲がする。）

げに人間の心こそ、無明の闇も異らね、
ただ煩惱の火と燃えて、消ゆるばかりぞたのみなき。

下

その獨白

（夜、袈裟が帳臺の外で、燈臺の光に背きながら、袖を噛んでもの思ひに耽つてゐる。）

あの人は來るのかしら、來ないのかしら。よもや來ない事はあるまいと思ふけれど、もう彼是月が傾くのに、足音もしない所を見ると、急に氣でも變つたではあるまいか。もしひよつとして來なかつたら――ああ、私はまるで傀儡(くぐつ)の女のやうにこの恥しい顔をあげて、又日の目を見なければならない。そんなあつかましい、邪(よこしま)な事が、どうして私に出來るだらう。その時の私こそ、あの路ばたに捨ててある屍

骸と少しも變りはない。辱められ、踏みにじられ、揚句の果にその身の恥をのめのめと明るみに曝されて、それでもやはり啞のやうに默つてゐなければならないのだから。私は萬一さうなつたら、たとひ死んでも死にきれない。いやいや、あの人は必來る。私はこの間別れ際に、あの人の眼を覗きこんだ時から、さう思はずにはゐられなかつた。あの人は私を怖がつてゐる。私を憎み、私を蔑みながら、それでも猶私を怖がつてゐる。成程私が私自身を賴みにするのだつたら、あの人が必來るとは云へないだらう。が、私はあの人を賴みにしてゐる。あの人の利己心を賴みにしてゐる。いや、利己心が起させる卑しい恐怖を賴みにしてゐる。だから私はかう云へるのだ。あの人はきつと忍んで來るのに違ひない。…

しかし私自身を賴みにする事の出來なくなつた私は、何と云ふみぢめな人間だらう。三年前の私は、私自身を、この私の美しさを、何よりも亦賴みにしてゐた。三年前と云ふよりも、或はあの日までと云つた方が、もつとほんとうに近いかも知れない。あの日、伯母樣の家の一間で、あの人と合つた時に、私はたつた一目見たばかりで、あの人の心に映つてゐる私の醜さを知つてしまつた。あの人は何事もないやうな顏をして、いろいろ私を唆かすやうな、やさしい語をかけてくれる。が、一度自分の醜さを知つた女の心が、どうしてそんな語に慰められよう。私は唯、口惜しかつた。恐しかつた。悲しかつた。小供の時に乳母に抱かれて、月蝕を見た氣味の惡さも、あの時の心もちに比べれば、どの位ましだかわからない。私の持つてゐたさまざまな夢は、一度にどこかへ消えてしまふ。後には唯、雨のふる明け方のやうな寂しさが、ぢつと私の身のまはりを取り圍んでゐるばかり——私はその寂しさに震へながら、死んだも同樣なこの體を、とうとうあの人に任せてしまつた。愛してもゐないあの人に。私を憎んでゐる、

私を蔑んでゐる、色好みなあの人に。——私は私の醜さを見せつけられた、その寂しさに堪へなかつたのであらうか。さうしてあの人の胸に顔を當てる、熱に浮かされたやうな一瞬間にすべてを欺かうとしたのであらうか。さもなければ又、あの人同様、私も唯汚らはしい心もちに動されてゐたのであらうか。さう思つただけでも、私は恥しい。恥しい。恥しい。殊にあの人の腕を離れて、又自由な體に歸つた時、どんなに私は私自身を淺間しく思つた事であらう。私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思つても、止め度なく涙が溢れて來た。けれども、それは何も、操を破られたと云ふ事だけが悲しかつた譯ではない。操を破られながら、その上にも卑められてゐると云ふ事が、丁度癩を病んだ犬のやうに、憎まれながらも虐まれてゐると云ふ事が、何よりも私には苦しかつた。さうしてそれから私は一體何をしてゐたのであらう。今になつて考へると、それも遠い昔の記憶のやうに朧げにしかわからない。唯、すすり上げて泣いてゐる間に、あの人の口髭が私の耳にさはつたと思ふと、熱い息と一しよに低い聲で、「渡を殺さうではないか。」と云ふ語が、囁かれたのを覺えてゐる。私はそれを聞くと同時に、未に自分にもわからない、不思議に生々した心もちになつた。生々した？　もし月の光が明いと云ふのなら、それも生々した心もちであらう。が、それはどこまでも日の光の明さとは、違ふ生々した心もちだつた。しかし私は、やはりこの恐しい語の爲に、慰められたのではなかつたらうか。ああ、私は、女と云ふものは、自分の夫を殺してまでも、それでも猶人に愛されるのが嬉しく感ぜられるものなのだらうか。

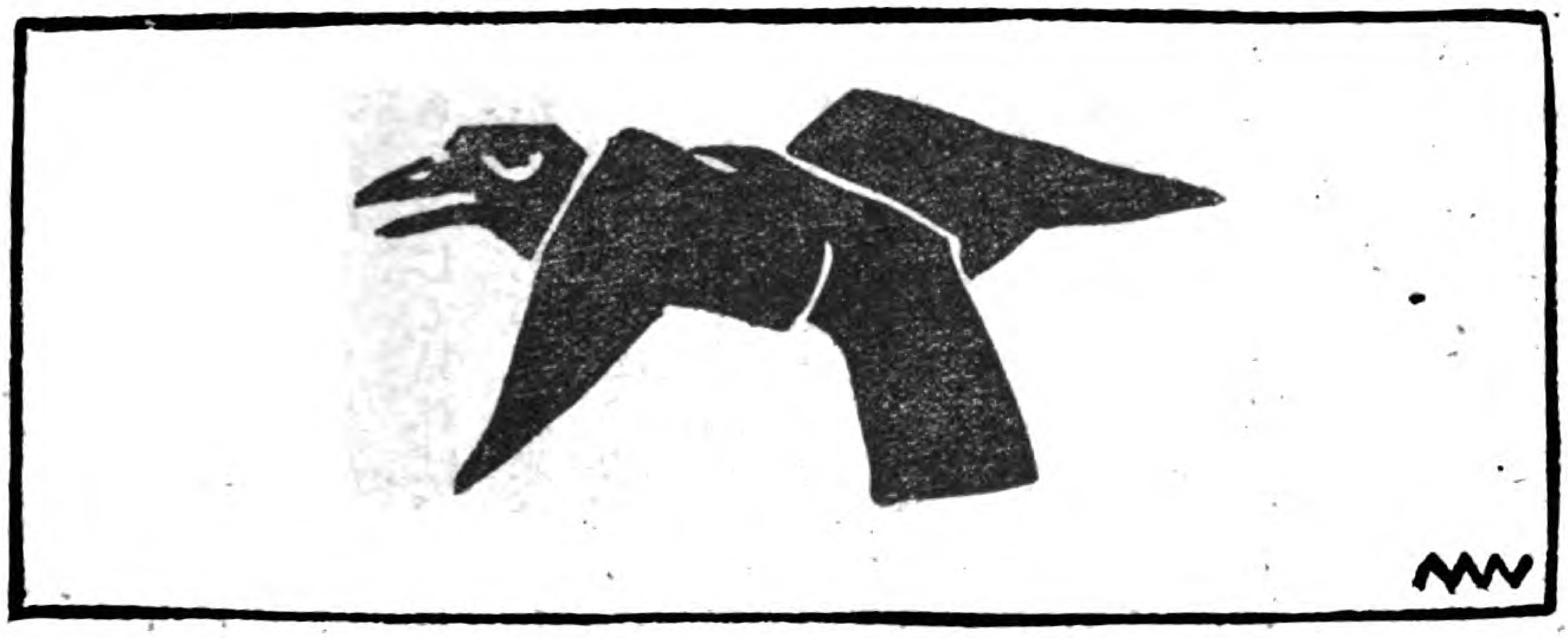
私はその月夜の明さに似た、寂しい、生々した心もちで、又暫く泣きつづけた。さうして？　さうして？　何時、私は、あの人の手引きをして夫を討たせると云ふ約束を、結んでなどしまつたのであら

う。しかしその約束を結ぶと一しよに、私は初めて夫の事を思ひました。私は正直に初めてと云はう。それまでの私の心は、唯、私の事を、辱められた私の事を、一圖にぢつと思つてゐた。それがこの時、夫の事を、あの内氣な夫の事を、――いや、夫の事ではない。私に何か云ふ時の、微笑した夫の顔を、ありあり眼の前に思ひ出した。私のこのもくろみが、ふと胸に浮んだのも、恐らくその顔を思ひ出した刹那の事であらう。何故と云へば、その時に夫の顔を考へながら、永續きはしなかつた。泣き止んだ私が顔を上げて、あの人の方を眺めた時、さうしてそこに前の通り、あの人の心に映つてゐる私の醜さを見つけた時、私は私の嬉しさが一所に消えてしまつたやうな心もちがする。それは――私は又、乳母と見た月蝕の暗さを思ひ出してしまふ。それはこの嬉しさの底に隱れてゐる、さまざまの物の怪を一時に放つたやうなものだつた。私が夫の身代りになると云ふ事は、果して夫を愛してゐるからだらうか。いやいや、私はさう云ふ都合の好い口實の後で、あの人に體を任かした私の罪を償ひをしようと云ふ氣を持つてゐた。自害をする勇氣のない私は。少しでも世間の眼に私自身を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。けれどもそれはまだ大目にも見られよう。私はもつと卑しかつた。もつと、もつと、醜かつた。夫の身代りに立つと云ふ名の下で、私はあの人の憎しみに、あの人の蔑みに、さうしてあの人が私を弄んだ、その邪な情欲に、仇を取らうとしてゐたではないか。それが證據には、あの人の顔を見ると、あの月の光のやうな、不思議な生々しさも消えてしまつて、唯、悲しい心もちばかりが、忽ち私の心を凍らせてしまふ。私は夫の爲に死ぬのではない。私は私の爲に死なうとする。私の心を傷けられた口惜しさと、私の體を汚された恨しさと、その二つの爲に死なうとする。ああ、私は生き甲斐がなかつたば

かりではない。死に甲斐さへもなかつたのだ。

しかしその死甲斐のない死に方でさへ、生きてゐるよりは、どの位望ましいかわからない。私は悲しいのを無理にほほ笑みながら、繰返してあの人と夫を殺す約束をした。感じの早いあの人は、さう云ふ私の語(ことば)から、もし萬一約束を守らなかつた曉には、どんな事を私がしでかすか、大方推察のついた事であらう。して見れば、誓言までしたあの人が、忍んで來ないと云ふ筈はない。――あれは風の音であらうか――あの日以來の苦しい思が、今夜でやつと盡きるかと思へば、流石に氣の緩むやうな心もちもする。明日(あす)の日は、必首(かうべ)のない私の屍骸の上に、うすら寒い光を落すだらう。それを見たら、夫は――いや、夫の事は思ふまい。夫は私を愛してゐる。けれども私にはその愛を、どうしようと云ふ力もない。昔から私にはたつた一人の男しか愛せなかつた。さうしてその一人の男が、今夜私を殺しに來るのだ。この燈臺の光でさへ、さう云ふ私には晴れがましい。しかもその戀人に、蔑(さげす)まれ果ててゐる私には。

（袈裟は、燈臺の火を吹き消してしまふ。程なく、暗の中でかすかに蔀を開く音。それと共にうすい月の光がさす。）



ある心の影

正宗白鳥

例年よりも暑さの烈しかつた夏も過ぎて、これからは都會にゐても住み心地がよくなると樂みにしてゐた當てが外れて彼岸時分から毎日のやうに雨が降つた。よし雨が止んでも空は氣だるさうに濁つて、廣々と冴えた日の照渡ることは極めて稀であつた。

「よく降りますねえ」と、よく日常の挨拶に云はれてゐたが、そのたびに瀨川は他人よりも一倍強い感じをもつて、この言葉を耳に觸れ口に出した。陰欝な霖雨のために自分の頭が苛まれてゐるやうに彼れは感じてゐたのであつた。天に對して怨みを寄せながら、雨、雨、雨と日記帳に書留めた。

……ある手術のために、土用前後に二三週間ある外科の病院に入院してゐた彼れは、患部の癒えるにつれて、總身に衰えを來してゐたので、不順な時候の刺戟にどうかすると彼方此方を惱まされ勝ちであつた。

で、秋になつても鴻の臺あたりと多摩川べりへ二三度散歩に出掛けたば

かりで、例年のやうにしみ〴〵郊外に親しむことの出來なかつた彼れは、運動と氣晴らしたに、六本木の玉突屋へ通ふことにした。この遊戯には五六年前に少しの間凝つたことがあるのだが、手先の不器用な彼れは上達の見込みがないので厭氣が差して、その後は機會があつても全くキューを手にしたこともなく、今も興味は起りさうでなかつた。たゞ衞生の一つの手段として客の無い折を見計らつては、自分の家から程近いその玉突屋へ入つて、他所目にも氣乘りのしてゐないらしい不樣な身構へをして、相手無しに玉を轉がしてゐるに過ぎなかつた。

「玉突も勝負ですから、相手がなければ眞劍になれませんよ。腕も上りませんよ」と、垢染みた衣服を着た顏色の煤けた、ゲームを取るよりも代書屋の机の前に座つてゐる方が似つかはしい風をした三十格好のキューボーイが、分り切つたことを云つた。

「上手にならなくつても構やしない。負けてばかりゐて他人にゲーム代を拂はされるのは忌々しい、それに相手があつちや煩いよ。こんな下らない遊戯でも少し旨いと高慢ちきな顏をして下手な者を見下げたり、得て差圖がましい口を利いたりするから厭さ」

瀬川はさう答へてゐた。そして、稍々もすると獨角力のやうな物足らなさを覺えながらも、殆んど相手を求めなかつた。たまに來合せた客に挑まれても頑なに辭退した。大抵は午前中に一時間ほど玉臺の周圍をうろついて、輕い疲勞を手足に覺えると、一役濟ましたつもりで家へ歸つて行くのであつた。

今年は秋といふ季節無しに、夏から直ぐに冬が來たやうに、紅葉の銀杏の葉も稀有の暴風や霖雨のために萎けて、少し日和が續きだしたかと思ふと、人々はもう肌寒い風に襲はれた。「東京といふ土地が惡

いのか、日本といふ土地が惡いのか、或は地球その物が人間といふ生物に取つて、最早住み憂きところとなりつゝあるのか」と、瀨川は寒中寒明けの酷寒や、乾燥した疾風を豫じめ皮膚に感じながら、ひそかに歎息してゐた。

「おれも東京へ來た當座は、綿の入つたものは着なかつたし、足袋を穿いたこともなかつたのだから、東京が住難くなつたのぢやない、年々おれの身體が都會生活に適しなくなるのかも知れないね」と、瀨川は妻に向つて話すこともあつた。生めよ殖えよ地に滿てよと昔噺のエホバ神が祝福したまふたやうにこの世上は人間が樂んで繁殖するに今も相應しいのであらうが、自分自身だけがこの土地にいつくしまれる資格を缺いでゐるのかも知れないと、彼れは考へることもあつた。

玉突屋への途中に舊宅を壞して新に普請をしてゐる家があつた。年內に仕上げるつもりらしく雨を冐して工事が急がれてゐて、主人らしい豬肥りに肥つた中老面の男がをり〳〵普請場に立つてゐるのが、俗界の幸福の標本のやうに瀨川の目に觸れた。御用聞の噂によると、その男は戰爭のお蔭で大儲けをした株屋ださうだ。その家と同じ並びに四五軒隔てゝ、去年から着手してこの春に出來上つてゐる新派の俳優の妾宅があつて、そこにゐる色の白い瘦形の女が近所の人々の目を惹いてゐた。瀨川はかつて舞臺で見たことのあるその俳優の容貌や音調を思出しながら、愛妾の意氣な姿形を通りすがりに顧みることもあつた。崖の上の見晴らしのいゝ家の入口にS――といふ名刺が何時の間にか貼付けられたのに彼れはある日目を留めた。Sは瀨川が小學時代に敎を受けたことがあつて、辯舌の巧みな先生であつたが、今は代議士に撰ばれてゐるのである。同じ町內に今一つ瀨川の舊知である同縣人の表札がかゝつてゐた。

初めは同名異人かと疑つてゐたが、ある日玄關先で子供を擁してゐる主人の姿を一瞥して、二十年前の面影を認めたのであつた。

書齋生活をしてゐる瀬川洗吉といふ一篇の主人公が、たゞ玉突屋へ通つたりぶら〳〵近所の家や人を傍見したりして日を送つてゐるのは取立てゝ云ふべきほどのことではないが、さういふ瑣細なことが何時となしに彼れの身に影響を及ぼすやうになるのであつた。

前日からの荒い埃風の鎭まるとゝもに底冷たい空氣の身に染みる夕方であつた。客の出入が極めて稀で不斷ひつそりしてゐる彼れの家は、珍らしく親戚のある女客が訪ねて來て、茶の間で夕飯を共にして賑かな話に耽つて、長座して歸つて後で、妻の勝子は湯屋へ出掛けたが、すると間もなく怪立たましい警鐘の音が、客の長話に聞疲れた瀬川の耳を驚かした。二階へ上つて、隣の物干臺の叫び聲に教へられて北の窓を開けると、直ぐ目の前に火の手が上つてゐた。燒落ちる物の音も聞えた。「K坂か知らん……此方が風下になつてゐる」と、彼れは頰に觸れる空氣が熱ぽつたくなつたやうに思ひながら、をり〳〵火の粉の勢ひよく飛散するのを見てゐた。

「もう大丈夫だ。さつきはえらい勢ひだつたが」と、物干臺の人々は互ひに安心したやうに云つた。瀬川の頭は夏以來疲勞を續けてゐる上にこの夕方の來客の悠長らしい世帶話に倦んじてゐたゝめか、今にも大火になるやうに思つて恐怖を覺えるとゝもに、いつそう風の手が加はつて火燄が四方へはびこつて、そこら中にうぢや〳〵してゐる家をも人をも舐めつくす樣を夢見るやうに待設けてゐた。日に〳〵鬪殺

しに會つてゐるやうな自分の頭腦をも五臟六腑をもいつそ一思ひに燒果した方が快いやうに思はれた。が、實際は家一軒燒拂ふだけの力をさへ持たない小火に過ぎなかつたのか、瀨川の目と心に映つた凄じい火餘は彼れだけがあだに描いた幻影として消失せた。餘も火の粉も、空を染めた火の色も見る〳〵名殘りなく拭はれて星は氷のやうにきらめいて、急に寒い風が窓を襲ふて來た。

この間中から、天變地異を豫想してゐた彼れは、その前兆かと思つた火餘の事もなく輕く鎭まつたのに、心安さと物足らなさを感じながら、ふら〳〵と二階を下りて、火事場の方を差して出掛けた。すると、株屋の普請場に、彼れの目には珍らしい提灯の光が見えた。主人が見廻りに來たのかと氣をつけたが火影に映つたのは職人體の異つた顏であつた。

「T町はこの頃物騷だ。今夜のも放火ださうだ」と、通りすがりの男が連れと話してゐた。T町なら瀨川が豫想してゐたK坂の一つ向うの通りである。そんなに遠かつたのか知らと、彼れは先つき二階から見やつた火餘の方角を思浮べながら、外套を忘れた身體に寒さを覺えて、肩を窄めて懷手して、俯首加減で張合拔けのした樣して步いてゐたが、ふと、河野謙造といふ表札に向つて目を上げた。幼少の頃の自分を知つてゐるこの男を憚るまでもなく懷しがるでもない一種捉まへどころのない感じが、表札を見るたびに起るのだが、この頃は通るたびに見なければ氣が濟まないやうになつてゐるのであつた。他の事を考へてゐても、この家の前まで來ると、表札の文字が彼れの目を吸付けるやうになつゐた。今夜も一度仰ぎ見てそれで氣が濟んだやうに、眼を轉ずると、そのトタンに懷手した彼れの突出してゐる袂とすれ〳〵に、其處の主人がアタフタと歸つて來た。瀨川の顏を見つけると、物を言ひたさうな表情をチ

うと浮べたが、それなり口は利かないで門を入つた。

「おれの方では覺えてゐるのに、先方では忘れてゐるのだな。あるひはおれの顔がそんなに變つたのだらうか」

瀬川は自分から進んで言葉を掛けやうとはしないで行過ぎた。河野の顔だつて萎びて爺い染みてゐたが、それでも一目して昔の彼れと知れるのに、自分の顔には昔の影がなくなつてゐるのだらうか。

「河野の奴、あの後二十年ばかりの間、何處で何をして世を渡つて來たのか、一度の噂をも聞いたことがないので、些とも分つてゐないが、今住んでゐる家の構へによつて想像すると、世間的には可成りの地位を得てゐるのに違ひない。少くもおれよりはいゝ生活をしてゐるのに違ひない。一時田舍の私立中學の教師をしてゐたことはよく知つてゐるので、何時までもその土地で埋まつてゐるのだらうと以前見くびつてゐたこともあつたが、元來修業した課目は理財科の方だつたから、何時の間にか、會社か銀行か、金に縁のある方面へ仕事の口を捜して立身の途を開いたのだらう」

瀬川は豫想したよりも道が遠過ぎるので、火事跡の見物を中止して、家へ引返したが、何時も長湯をする勝子も近火に驚いて慌てゝ歸つてゐた。

「所は分つても半鐘の音を聞くと落着いて洗つちやゐられませんからね。T町の塚本さんの隣の家が燒けたんですつて。お湯の中で皆んながその噂をしてゐましたよ。先月からあの近所に三度放火があつたのですつて。皆んな塚本さんの持ち家だから、屹度あの人に怨みのある者がしたことなんだらうと云つてゐますよ。何の怨みか知らないけれど、家を借りてる者は迷惑ですわね」と、勝子は早くも霜燒のし

てゐる手へクリームか何かをつけながら云つた。

「東京はこれから火事の時節に入るんだね。……」と、瀬川は、地震雷火事親爺と、調子をつけながら云つて、「お前はこの四つの中でどれを一番怖いと思つてる」と、眞顔で訊いた。

「そんなことは御維新前の人が云つたことでせう。私四つの中のどれだつてさう怖くはないわ。」

「それはまだ災難に會つたことがないからさ、今日のやうな寒い晩に寢巻一枚で燒出されちや火事も怖くなるだらう」

「だけど、親爺さんが怖い物の一つになつてるのは可笑しいぢやないの。私お父さんなんか些とも怖かあないわ。……さうね、世の中で何が一番怖いか知らい」

勝子は病氣の苦みや貧乏の苦みなど、さま〴〵な浮世の苦みをあれかこれかと念頭に浮べたが、身に染み〴〵と感ぜられるものはなかつた。妖怪變化に出會つたことはないし、他人に恨みを抱かれてゐる覺えはないし、幽靈は文明の世界には存在しないものであるし、未來の世に針の山や血の池地獄が在るといふのは、無智な昔の婆さんなんかの信じてゐたことに過ぎないのであるし、……晝間は日當りがよくつて、夜は夜で二十何燭の電燈の明るい東京のこの家にゐるのだから、恐ろしいことのあらう筈はないと思つてゐたが、長火鉢の緣に肱を掛けて煙草の臭い煙を吐いてゐる瀬川の眠たげな顏に何氣なく目を据えると、今まで一心に索つてゐたものをやうやく搜し當てたやうな氣持がして、ふと胸騷ぎがした。「こんなことを考へるのぢやなかつたのに」と、ひそかに後悔しながら、口を噤んで、空々しい微笑を强いて口元に湛へてゐたが、瀬川は相手の目顏に現はれた驚きと恐れとを見のがさなかつた。

「何を考へてるんだ。怖い物で何か思當つたことがあるのかい」
「いゝえ。私の身の上に災難が湧いて來ようとは思はれませんよ。私の實家はお父さんの生れる前からずうつと運がいゝんですつて。夭死した者も無いし、大病に罹つた者も無いし、‥‥」
勝子は自分の實家の幸福を數上げたり夫の生家の平穩を目出度いことゝして話したりしたが、さういふことは夫の手前を取繕らうための空々しい言葉に過ぎなかつた。一二年越しに萌してゐる恐怖の念はこの頃知らず〲彼女の心に根を張つてゐるのであつた。そして、それはみんな夫として起臥を共にしてゐる男からあふれ出るので、不祥の源は夫一人の身にあるやうな氣がした。不幸とか悲惨とかゞ世の中にあつて、網を張つて人間の引掛かるのを待つてゐるとしたなら、自分は夫のためにその網の中へ追込まれさうだつた。‥‥
で、勝子が伏目勝ちになつて口を利くにも倦んじたやうになりだすと、瀬川も例のやうに茶の間に厭いて、自分の書齋になつてゐる二階へ上つた。
「叔母さん、ゐらつして?」と、格子の外で可愛らしい聲がすると、勝子は俄かに生々した顔をして腰を浮かせて、
「お話に入つしやいな、おふみさん」
「些つとお使ひに行つて來ますから、歸つてからお邪魔に上りますわ」
「ぢや、早く行つて入らつしやいな。‥‥何方まで」
おふみの返事は聞取れないで、下駄の音は草津湯横丁の坂を上つてゐた。この頃は毎晩のやうに今時

分になると、その坂の方へ出掛けてゐるのを勝子は氣留めた。昨日までは何とも思はなかつたのだつたが、今夜は先つきの夫との話によつて神経の尖つてゐたゝめか、おふみの外出を意味ありげに見做した。「あの女が歸りに此家へ寄つたら行先を訊ねたいが、若しすると訊ねられて迷惑する所なのかも知れない」などゝ、暫くはおふみ一家の様を目の前に浮べて想像を逞くしてゐた。……父親に死なれて、母親の手一つで女の子二人を育てゝゐるおふみの家庭こそ、世間でいふ氣の毒な家なのだらうが、見たところ誰れも不幸らしい顔はしてゐない。小さい家に住んでゐるし、貯蓄が豊さうではないらしいのに、不斷の話に泣言じみたことは云つてゐやしない。喰物なんかこそ儉しくしてゐるけれど、年頃になつてゐるおふみは何時も、小瀟洒した服装をして、髪はちやんと結つて勝子自身のやうに手づくねのぐるぐる巻にしてゐることなんかなくつて、お化粧も朝から念入りにしてゐる。……

「以前はをり／＼三味線を彈いてゐたのに、この頃はちつとも音をさゝなくなつた。習つても詰らないからお師匠さんの方も斷つたのだと此間云つてゐたが、稽古を止めたのにも何か理由があるのではあるまいか」

勝子は氣の置けない女友達が東京には一人もゐないのだから、この三河臺へ越して來てから懇意になつたおふみが懐かしい話相手の一人になつてゐた。無邪氣らしい娘盛りのおふみに「叔母さん々々々」と親しまれるのが、勝子にはいゝ氣持であつた。そして、自分の實家や夫の郷家からの到來物のあるたびに、屹度おふみの家へ裾分した。

「私達が世間の事に明るいと、ふみちやんを何處か確かりした人のところへお嫁に世話をして上げたい

わね」と、ある日夫に向つて云ふと、
「彼家の母親は娘に對してどんな大望をもつてゐるか知れやしないよ。……が、あの女の容色は十人並以上なのだらうか」
「さうですとも。……貴下はこの町内で何家の女を一番奇麗だと思つてゐるんです？」
「さうさ。あんまり奇麗な女はゐないやうだが、矢張役者のお妾さんがいゝのかも知れないね」
瀬川はその女が通りすがりによく目につくので、ふと口に出したのだが、心からさう思つてゐるのではなかつた。
「へえ、あのお妾さんが美人なのですかね。貴下はあんな顔立がお好きなの」と、勝子は皮肉な口調で云つた。そして、夫が默つてゐると、「ふみちやんはあの人とは比べものになりやしないわ」と呟いた。

二三日經つてからであつた。瀬川は例の如く六本木の玉屋へ出掛けて、時間定めにして獨りで遊んでゐて、他の客が入つて來たのにも目を遣らなかつたが、やがてふとしたはずみに、側のも一つの玉臺でボーイを相手にゲームをはじめてゐる男の顔を見上げると、意外にもそれは舊知の河野であつた。ボーイに無駄口を利いてゐる樣子が定連の一人であるらしく、腕前も可成りに冴えてゐた。

で、瀬川は、自分のキューを棄てゝ、珍らしく他人の勝負に注意してゐて、一勝負終つたところで、此方から名乘りを上げようかと喉まで聲を出しかけたが、相手の樣子があまりに空々しいのに氣遅れがして、そのまゝ聲を呑んでしまつた。

「人違ひの筈はない。かうして面と向つてよく見れば見るほど、昔の河野の面影がまざ／＼と浮んで來る。たとへ深い交際をつゞけてゐた仲ではなかつたにしろ先方でもおれの顏に氣づきさうなものだが。……」

瀨川は相手の記臆から疎外されてゐるのを不快に思ひながら、河野のキューの捌き工合や戲談口などに暫く心を捕へられてゐた。するとやがて、書生風の若い男が靜かに扉を開けて、半身を覗かせて、

「先生」と聲を掛けた。

ボーイに敎へられて河野は扉の方を顧みながら、

「何だい。客が來たのか」と訊返した。

「はい。津崎さんが入らつしやいました。」

「ぢや待たして置け。この勝負をつけてから歸らう。」

河野は鷹揚にさう云つて、玉臺の方へ向直つた。見事に勝ちを占めてキューを置場へ收めて、葉卷をくゆらせながら出て行つたが、すると、暫く茫然として火鉢の側に腰を掛けてゐた瀨川は、我れに返つたやうに目を上げて、蟲齒でも疼むのか頰ぺたを押えて舌を鳴らしてゐるボーイに向つて、

「あの人は何をする人だね」と訊ねた。

「會社へ出てるんでせう……」

ボーイは齒痛のためか、口を利くのが面倒臭さうで、明晰な返事はしなかつた。何處に住んで何處へ出勤してゐると云つてゐるやうだつたが、顰めつ面して指先で齒をせゝりながら、ムジャ／＼と不明瞭な言

葉を洩らしたゞけなので、瀬川の耳にはよく入らなかつた。

瀬川は重ねて訊ねやうとはしないで、其處を出て同じ道を通つて、河野の表札をも一瞥して家へ歸つた。

「世間は廣いやうで狹いね。何時何處で誰れに會はんとも限らないね」と瀬川ははじめて妻に向つて、河野の話をした

「だから油斷は出來ませんよ。身裝だつて不斷氣をつけてゐなければ、何時知つた人に見られるかも知れませんわ」と、妻は服裝振りを構はなさ過ぎる夫を戒めるやうに云つて、「河野さんて聞いたことのあるやうな名だけれど……」と、思出さうとつとめてゐたが、やうやくそれと氣づくと、悅しさうに顏を綻ばせて、「京橋の保險會社へ出てる人ぢやなくつて?。ふみやんのお父さんと同じ會社に出てる人がこの町内にゐてお父さんの死ぬる時分には隨分世話をして呉れたのですつて。その人の名をたしか河野と云つてゐましたよ。その人は無論ふみちやんのお父さんよりは地位がずつと上なのでせう。私はまだ見たことがないけれど、乾度いゝ家にゐるんでせうね」

「大していい家ぢやないが、おれの家のやうに貧乏くさくはない。若しも隣の秋山の亡父の上役だつたといふ河野が、あの河野であるのなら、世間は廣いやうで狹いものだね。何處にかゝり合ひがついてゐるのかも知れないね」

瀬川は近い間に河野と往來をすることゝなりさうな氣がした。最早政治季節に近いてゐて代議士の多くも上京するであらうから、古い記憶に潛んでゐる顏の一つをまたも近所で見るかも知れないと、この秋

い町内だけででも、何事かをしに田舍から寄つて來る世相の片影の現はれてゐるのを、さもはじめて氣づいた珍らしいことのやうに見做してゐた。この空氣の濁つた騷々しいところへ狹苦しく押合つて身心を苛んで榮達を計る人心を淺間しいものとして、河野をでもＳをでも、彼れは淺間しいもの丶實例としてしまつた。人間の些細な惡行に怒りを發して地の上に人をつくりしことを悔いて四十日四十夜の大洪水を起して、すべての生物を地の上より拭ひ去らんとしたほどの氣六ケしい昔の神がまだ死なゝいで今も生きてゐるとしたなら、今の世にこそ百日の洪水でも千日の大火でも下して、地上を一掃除しさうなものだと、彼れは住みよき世界があるとしたなら、それはこの世の外の世界であるやうに、ひとりで空想してひとりで極めてゐた。(瀨川がこの頃ともすると西洋くさい神樣の幻影を描いたり、その言葉に思及んだりするのは、先日銀座通りの露店で、埃まみれの舊新約全書を購つて來て、その書物から新しい力でも得るつもりで身を入れて讀んだためであつた。十幾年の昔に天地間の尊い書物として禮拜跪坐して讀んだことがあるので、昔の懷しい追憶がページとページとの間から湧出て來たが、しかし、今新たに無我夢中の崇拜を離れて讀んで見ると、この書物だつて人間の書いたものに過ぎなかつた。並大抵の小說や歷史などよりも遙かに面白くて、昔も今も渝らない人の世の姿を見ることは出來るけれども、われ人類の存在の價値も理由もこの中に不朽に刻まれあるのでも何でもなかつた。他の幾萬の書物に人間れわとして必ず讀まなければならないものがあるとは覺えないが、この書物だつて例外ではなかつた。瀨川はこの書物の何處を見ても取りつく島がないやうな氣がした。怒りつぽい嫉妬深いエホバ神が基督によつて愛の神に變つたところが、正體の分らない人間の運命の一時の氣休めに過ぎないとしか瀨川に

も思はれなかつた。……でも彼れは人類の祖先の所行や惱みや喜びや夢を飾り氣なく有りのまゝに書いた創世記や出埃及記や民數紀略列王紀略などを面白い物語として讀通した。イザヤ書やエレミヤ記やヨブ記傳道の書などの慷慨悲憤の文字や說敎じみた文句にはをり／＼反感を抱くが、あるひは人間共有の痴呆の聲として多少の同感を起したりしながら）

幾千年の昔、イスラエルの子孫がヱホバ神やモーゼに導かれて幾千の辛慘を嘗めてやうやく辿りついた乳や蜜の流れてゐるカナンの沃土も、永久の住みよき土地ではなかつたのを思つては、瀨川は今樣の姿を粧つて當世風の言葉を用ひて自分達を說賺してカナンの空を夢見させようとする現代のいくたのモーゼに盲從する氣にはなれなかつた。

「お前も怠屈さうだね」と、長い夜の退屈をまぎらしがてら縫物をしたりなどしてゐる妻の側に二階から下りて行つて、舊約の昔物語をすることがあつたが、一杯の羹物(あつもの)にかへて家督の權を棄てたエツーの話や女に欺かれて身を亡ぼしたサムソンの話など、勝子に取つても興味のある話は少くなかつた。瀨川もたとへ敬虔の念をもつてゐないにしても、火鉢の側でかういふ外國の古代の物語でもしてゐる方が、外へ出て娑婆つ氣の多い話に疲れるよりか餘程心の保養になつた。

「叔母さん」と、その日も鐵瓶の湯の滾る音を聞きながら昔噺をしてゐるところへ、例の聲が格子の外でした。

「入らつしやいましな」

例のやうに勝子は快く招いて、「河野さんのこと訊いて見ませうか」と、小聲で夫(をつと)に云つた。

瀬川は頷いて座を離れた。女達の世間話を側で聞いてゐてもいゝのだか、おふみが何時も彼れを煙たがつて彼れの前では打解けた話をしかねるのを知つてゐるので、氣を利かせたつもりで、彼女が玄關へ入ると、入代つて外へ出て行くか、二階へ上るかするのを例としてゐた、その日は冷腹の冷痛を感じてゐたので、溫まるつもりで湯屋へ出掛けた。

「歸りにおいしい者を買つて來て下さるといゝですがね」と、勝子は夫に聲を掛けてからおふみを迎へた。四五日以來晝間會つたことがなかつたゝめか、おふみの顏の何となく窶れてゐるのに今日はじめて氣づいた。が自分の目のあやまりかと出拔けに訊ねはしないで、それとなく樣子を見てゐた。

「まだ極つたといふ譯ぢやないから、人樣に知らせちやいけないつて、母に口止めされてゐるんですけれど、私貴女にだけはお話して置きたいと思つてゐますの。だから秘密にしといて下さいな。私もう叔母さんにもお目に掛れなくなるかも知れませんの。今年中に家を片付けて田舎へ引込むことになりさうなのですもの」と、おふみは心細さうに云つた。

「故郷へですか。濱松の近所の?」勝子は田舍落ちの理由は訊かずとも略々察しながら、「本當にさうなつたら私どんなに寂しくなるか知れませんよ。」と、今にも涙ぐみさうな氣持になつた。

「彼方は溫いところなんですつて。冬でも雪は降らないし夏は海水へ入れるし、身體のためにいゝつてお母さんはひとりで喜んでゐるのですけど、田舍へ遊びに行くのとは譯が違ふんですから」

「でも田舍の方が住んで見たら乾度いゝんでせうよ。一寸東京の近在へ出てさへ胸が透くやうな氣がしますものね。故郷には親類の方がゐらつしやるんでせう」

「えゝ。」

おふみは故郷への距離や故郷の様子などを頻りに訊かれたが、如何にも詰らない風でハキ〳〵した返事をしなかつた。

「故郷（くに）へいらつしやつたら、時々お手紙を下さいましな。東海道筋だから、私達も出抜けにお訪ねすることがないとも限りませんよ」勝子は相手に力を添へるためにさう行つたが、おふみは首垂れて涙をホロ〳〵落した。

「何ですね、ふみちやん。‥汽車があるんですもの、何時だつて東京へ出て來られるぢやありませんか。」

「さうぢやないんですの。‥‥叔母さんにはいろ〳〵お世話になりましたわね」

おふみはさう云つて、呆氣に取られてゐる勝子に別れを告げて出て行つた。いくら氣丈な母親でも、女の子二人を抱へて、諸式の高い東京では生活（くらし）を立てかねるのだらうと、勝子は氣の毒な思ひをするとともに、唯一人の親しい女友達を失ふのが寂しかつた。が、元の座へ戻つて考へるともなく考へると、おふみの様子が少し變に思はれないでもなかつた。元來が無邪氣な快活な女であるのに、只田舍へ移轉するといふことのために、しかも父母の生れ故郷へ歸ることになつたゝめに、顔の窶れるほど悲しんだり泣いたりするのは不思議に思はれないでもなかつた。

「どうだつた。河野のことを訊ねたのか」と、瀬川が湯屋の歸りに買つて來た箱入のシュークリムを前に置くと、

「それどころぢやないんですよ」と、勝子は想像をまぜて大袈裟に秋山の田舍行を吹聽して、「私に別れ

るのがいやなつて泣いてるんだから氣の毒ぢやありませんか」

「それが人情なんだらうね」

瀨川は一つ二つシュークリームを食べて茶を飮んで、日當りのいゝ緣側に蹲んでゐたが、隣の娘がゐなくなつた後の妻の寂しさから、それにつれて自分の家の一層陰氣になることが豫想された。自分はどちらでもいゝが、妻の身に取つてはあの娘と親しくしだしてから、どれほど自分達の都會生活を住みよくしてゐるか知れなかつたと、瀨川は信じてゐた。夫婦の心を蝕んでゐる鬱陶しい空氣も可愛らしいあの子のために、知らず知らず追拂はれて、二人の間をいくらか和げてゐるのだつた。

「東京で嫁入口もないのかね。」と訊いたが、勝子はそれにはハッキリ答へないで、

「少し變ですよ」と呟いた。

「ふみちやんがかい」

「えゝ」

「あの女も些つと色氣づいてる樣子が見えないなこともないからね。」

「まさか」勝子は無垢な娘にケチをつけるのを恐れて、「人のことを考へて頭を痛めたつて詰らないから止しませう」と、後の柱時計を見て晝飯の仕度に取掛つた。

秋山一家の田舍行のことは、おふみの云つてゐたやうに秘密にする必要はないと見えて、母親の口から大ぴらに話されて、その日の中に隣近所に知れ渡つてゐた。勝子は臺所口の向合つてゐる太田の主婦

にその話を仕掛けられて、「さうですかねえ」と白々しい返事をしたが、「諸道具を一切賣拂つて入らつしやるんですつてね」と主婦は云つてゐた。そして、「私どもの親戚で空家を搜してる者がありますから、早速後をお借りするやうに話をつけときました」と、主婦は言足した。

その夜は瀨川が風邪心地で早く寢床に就いたので、勝子は毎夜の氣晴しにしてゐる湯屋へも行けないし、獨座しての取留めのない思ひの端に現はれる例の苦しい幻影に惱でゐたが、こんな時に些しの間でも話しに來て吳れゝばと願つてゐるおふみの聲も下駄の音も聞えなかつた。……一緖にゐて日夜相手の所行や言語を見たり聞いたりしてゐると、氣風までも傳染するのかと、勝子は夫の見てゐると同じやうに、自分の心に世の中の映りだしたのを無氣味に思つてゐた。心持ばかりか、夫が消化不良に惱むのにかぶれて、子供の時から健かだつた彼女の胃の腑も、この一二年をり／＼重苦しく感ぜられることがあるやうになつてゐた。

明るい電氣の下で溫い火鉢の側で、氣儘に縫物なんかしてゐながら、目の前に大變な變事でも湧いて來さうで、落着いてはゐられないのは、夫の調子外れの氣持が傳染してゐるのだと、勝子は夫から離れない限りは自分の心持がどうなるか分らないといふ恐れを恐れてゐた。

「ふみちやんが色氣づいてる」と、先つき夫が云つてゐたが、成ほどさうらしいところもあると思ひ當ることのあるつもりになつた。役者のお妾さんの意氣がつた身のつくりについても目はしの利いた惡口を云つてゐた。役者なんかは大嫌ひと云つてゐながら、妾宅へ通つて來る役者の顏形や日常の行爲や舞臺の藝風についても、よく知つてゐた。さういふ浮いた事には緣の遠い勝子から見ると、おふみは滅多

に芝居など見に行かない癖に、何處で聞き覺えるのか見覺えるか、意外によく知つてゐた。「御免下さいまし」と、ふと秋山の母親の頑丈な聲が格子戸の外でした「ふみは今夜お宅へ上りましたでせうか」

「今夜は一度も入らしやいませんでした。何處かへお出掛けになつたのですか」

勝子は玄關の障子を開けて挨拶したが、軒燈は母親の不安な顏を照らしてゐた。

「お夕飯前に些つと云つて出掛けたきり歸つてまゐりませんですよ。……何處へ遊びに行つてゐるんですか」

「……」おふみが晝間萎れてゐたことを不吉なしるしのやうに勝子は思出しながら、「まあお入りなさいましな。その中歸つていらつしやるでせうから」

「……其處等を訪ねてまゐりませう。若しすると、松本さんか河野さんかのお宅へ伺つてゐるのかも知れませんから」

母親は不斷に似ず慌てゝ通りの方へ急いだ。勝子も胸に波打たせながら、そつと格子戸を開けて二三歩踏出した。自然に秋山の家の前へ足が向いたが、そこの格子戸も玄關の障子も開いたまゝで、十一だといふおふみの妹が座敷の中をうろ〳〵してゐるのが外から見えた。移轉も話ばかりでまだ仕度に取掛つてはゐないのか、家の中の樣子は不斷の通りであつた。

忍び足で家へ戻つてからも、勝子の神經は戸外の足音や人聲について著るしく鋭敏になつてゐた。いろんな不吉な事をおふみの身の上に豫感しだした。かうと知つたなら晝間會つた時にそれとなく意見し

て置くのであつたのに、さも自分の不注意から女一人の身の所置をあやまらせたやうに思つたりした。餘程經つてからも隣の母親は歸つて來なかつた。そして妹娘が戸口へ出たり入つたりして母親を呼ぶ聲が、更け行く夜の空氣に凄く響いた。

寢床に横はりながら、手近かにあつた雜誌を引寄せて時間潰しに讀んでゐた瀨川の枕許にも、隣の少女の泣聲が響いて來た。わざと頭を峙てゝ耳を留めながら、頭腦を錐で揉まれるやうな不快を感じてゐた。親としてはあんな聲が懷しく聞かれて可愛さがますのか知れないが、彼れには生存の不幸を叫んでゐる無氣味な凶音としか思はれなかつた。この夏病院で屢々耳に觸れた患者の呻吟の聲が思出された。

「よく泣くぢやないか」瀨川は書齋から茶の間へ下りて、妻に向つて訴へた。

「無理もないわ。一人置いてき堀にされて、お母さんがこんなに遲くまで歸つて來ないんですもの」

「山村の隱居は喉を締められたやうな聲を出して謠を唸るし、後の家ではヴアイオリンで齒の軋るやうな音をさせるし、今夜は外が靜まつてると子供の泣聲がするし、溜らないね。何かいゝ音を聞いて氣持よく眠つて見たいよ。」

「上手な三味線でも聽かれないものですかね、ふみちやんの長唄はあまり上手ぢやなかつたけれど、それでも今夜は聽きたいやうな氣がしますよ」

最早十時が過ぎてゐるので、勝子は表の戸を鎖して寢床も延べたが、隣の事を頭の中から打棄てる譯には行かなかつた。目蕩むと惡夢に襲はれてゐたが、何かの音に目醒めると、隣には幾人もの人が出入りして騷いでゐるやうだつた。事情を知りたくつても、眞夜中に起きて行つて訊ねるのは變なので、あ

くる朝まで我慢してゐたが、夜が明けて臺所へ出てゐると、太田の主婦が顏を出して、
「ふみちやんのことお聞きなすつて？」と、訊いた。
「いゝえ、存じませんですが」勝子は歳を取つたこの主婦の、何時もながらこんな事にかけて素早いのに感心した。
「宵に出たつきり姿を隱したのですつて。誰れかに勾引かれたのだらうて云つてゐる人もあるんですけれどね、どうですか」
「へえ、そんなことがあるもんでせうかね。警察へは捜索願をお出しなすつたのでせうか」
「お宅へはふみちやんがよく遊びに行つてゐなすつたから、お心付のことがおあんなさるでせう」
「いゝえ、些とも存じませんですよ」
勝子は家出したおふみの内情を自分が知つてゐるとでも思はれてゐるらしいのに驚いて、主婦との噂話もそこ／＼にして茶の間へ入つた。……この人の多い家の多いそして夜も明るい東京の市街で勾引したり勾引かされたりすることがあるのであらうか。でも、さうでないとすると、若い女として無斷で家を空けるといふことのあらう筈はないしと、そこへ起きて來た夫に向つて噂を取次いだが、瀬川は默つてゐた。世間がどうなつて行くのか、人間の所行はどんな筋途をたもつて進んで行くのか、自分などの頭の力では解らなくなつてゐる彼れには、女の子一人が何を考へて何をするのやら皆目見當はつかなかつた。
「太田さんの主婦さんには大抵解つてるらしいんですよ。私達ばかりが始終會つてゐながら些とも理由を

知らないのだから、頓間ぢやありませんか」

「兎に角あの女はあんな柔しい顔してゐても怖いことをやつたのだらうよ」

勝子は平生の交際から云つても、隣へ顔出しゝなければならないのだが、知らない人が幾人も出入りして取込んでゐるのを憚つて、行かうとしては躊躇してゐた。瀬川は朝餐後例の通りに玉突屋へ出掛けたが、そこのボーイは不斷の無口なのに似ず、「河野さんの書生さんは昨夕ゐなくなつたんですつてね—」と云つた。

「それがどうしたのだ」瀬川はそれが自分に取つて何の關はりがあるかといふやうな顔して、機械的にキユーを手にした。

「女と駈落ちしたのだと云つてゐますよ」

「へえ……」

瀬川は書生の顔は先日些つと見たばかりなので、その男の生死から特別の感動は起されなかつたが、

「河野さんは貴下を知つてゐらつしやるんださうですね。昨日貴下のことをお話したら氣がついたやうでしたよ」とボーイに云はれると、知らん顔してはゐられなかつた。そして、河野についてボーイの知つてゐるだけのことを訊糺した。が、ボーイは河野の身についてよりも、書生のことを先づ熱心に話した。

「勉强家で性質も溫順で、河野さんも褒めてゐましたがね。人間は分らないものですね。まだ二十になるかならない位なのに」

「相手は誰れだい……」瀬川は自分で訊ねながら、ふと秋山の娘の顔が心に浮んで來たが、すると、何故だか悠長に玉を突いてなどゐられなくなつて、來たしるしだけに二三十分間氣乗りのしない玉を轉がしてから歸つた。前を過りながら秋山の家を覗いたが別に變つたところもなかつた。

まだ乳の香の失せぬやうなあんな女と男とがそんな大それた眞似をするのだらうかと、半信半疑で家へ歸つたが、勝子は待ちあぐんでゐたので、

「貴下(あなた)がお出掛けになると、一足違ひで河野さんが訪ねて入しつたんですよ。」と云つて、息せはしく河野の書生と隣の娘と同じ時刻にゐなくなつたことを知らせた。「河野さんはお隣へ入らしつた次手に寄つたんですよ。……私も譯を聞いて知らん顔しちやゐられないから、些(ちよ)つとお見舞に行つたのですけど、ふみちやんのお母さんは目を泣腫らして眞蒼な死人のやうな顔しゐますよ」

さう云つた勝子の顔にも心の激動が現はれてゐた。

「墮落したつて、金のありもしない若い二人が何時まで他所で暮されるもんぢやない」瀬川はそんな夢見たいなことの考へてゐられる若い男女を自分達とはまるで異つた心を持つてゐるものとして多少の羨ましさをも感じてゐたが、

「暮されなければ二人で死ぬつもりなのですさ」と、勝子はそれを當然のことのやうに云つて、「だから皆んな心配してるんでせう」

二人の死體が發見されたのはそれから間もなかつた。大森附近の軌道で轢躪られてゐたのが知れて隣

家は大騒ぎになつたが、瀬川夫婦はその中に立交るのを厭つて出て見ようとはしなかつた。弔詞を述べにも行かなかつた。勝子の目には絶えずおふみの影がチラついて、此方を見詰めて「叔母さん」と呼んでゐるやうな氣がしてならなかつた。

「おや、あの日は私にお別れに來たんですわね。一言でもお腹の中で思つてることを知らせて呉れゝばいゝのに」

「さうしたら意見するのだつたのか。おれなら知つてゐても打遣つて置くね。死んだ方が本當は仕合せかも知れないもの」

「私はあれほど懇意にしてゐたんですもの。今夜から怖くつてこの家に安心して眠られはしませんよ」

二人で長い間空な恐れや淋しさに心を惱してゐたところへ、不吉な影が形を具へて目の前に現はれたやうな氣がした。昨日まで二人に華やかな力を見せてゐたゞけに、おふみの慘死は一層強く暗い影を二人の上に投げるのであつた。

「その書生さんはどんな人だつたのでせう。」と、勝子は死者の追想に耽つてゐる間に、書生の顏を生前に一目でも見て置けばよかつたのにとふと好奇心を起して、「貴下は些つとでも見なすつたからよ御座んすわね」

「女を騙すやうな男とは思はれなかつた。極く柔しさうだつたがね」

瀬川は玉突屋の扉の間からの一瞥を思出したが、「先生」と呼んでゐたその書生の一言がその時と同じ音調をもつて耳朶に響いた。「叔母さん」と云つたおふみの言葉が勝子の耳に響いてゐるやうに。

おふみの死骸は翌朝手輕に火葬に附せられて、母親は二三の知人の助けを借りて一日も早く一家を片付けて、遺骨を持つて田舍へ退かうとしてゐたが、近所の人に顏を見られるのをも非常に嫌つてゐた。河野が羽織袴で威儀を正して、鹿爪らしく瀨川の玄關へ案内を乞ふたのは、その夜秋山の家の新しい位牌へ供物を捧げて最後の禮拜をしての歸りであつた。

瀨川は喜んで書齋へ通したが、別後二十年間の話はさし置いて、先づ今度の變事を互ひの口から云い出した。

「あれは惜しいことをしました。僕の方では非常に望みを囑してゐたのですから。學問に一心になつてゐて、決して女のことを念頭に置いてゐるやうな靑年ぢやなかつたんですが、一口に云へば女がいけないんです。女の母親はさう思つてはゐませんが、斷じて責任は女の方にあるんです。それはまだ誰れにも口外しないんですが、僕は昨日戸山の――家の書生の名は戸山と云ふんです――あれの持物を驗べて見ると、日記があつたのです。他に女が寄越した手紙も何通か保存してありましたが、それによつて見ると、情死の原因が略々推察されますよ。尤も混雜中でまだ詳しくは讀まないし、僕にはよく呑込めないところがあるんですが、兎に角先日までは女に附け文されるのを非常に厭がつて、他人に知られやしないかと、ビク／＼してゐたらしいんですよ。昨日の正午過ぎに僕が見た時にだつて不斷と異つたところがあるやうには氣づかなかつたのに、急にあんな破目になつたのは實に不思議でなりませんね。お望みなら、君に戸山の日記をお目に掛けますから、よく讀んでやつて下さい。情死したつて、決して心まで墮落してゐるやうな靑年ぢやないので、死者の追福のために、あれの身内の者に僕からよく說明して

置くつもりです」

「そんな日記があるのなら是非拜見したいものですね」

瀬川は直ぐにも見たがつたが、夜が可成り遲いので、翌日玉突屋への行きがけに立寄つて借りることにした。河野は以後の往來を約束して匆々に暇を告げた。

瀬川は自分の曇つた心を照らすやうな大事な書物に接するやうなつもりで、翌朝河野の出勤前に其家(そこ)の玄關へ立つた。そして應接間で、河野の手から二綴りの日記を受取つたゞけで、近日ゆつくり球戯でも共にする約束をして出て來た。

「女の手紙も二三通僕が保存してゐるから、見たければ持つて行きたまへ」と云はれたが、瀬川は氣遲れがしてそれにまで手は出さなかつた。

日記は小型の洋紙へペンや鉛筆で亂雜に書かれてあつた。自分の覺書として符牒見たいな文字の臚列に過ぎないやうなところもあつた。

瀬川は歩ながら肝心なところを捜し／＼讀んだ。日記の筆者は神田のある英語學校の夜學部へ通つてゐたらしかつたが、歸りがけに例の所で饂飩かけ二杯食べたと屢々書いてあつた。成程實直な青年らしく、瑣末な支出をもちやんと書留めてあつた。そして、感情的な感想錄も隨所に發見されたが、主人に對する不平は殆んど見出されなかつた。就眠後呼起されて使にやられたことを悲しげに二三ヶ所書いてあるに過ぎなかつた。

十一月十一日の日附の所に彼女の手紙を机の上の辭書の下に發見す。と、明かに名差してはゐないが

秋山の娘に違ひない女のことがはじめて洩らされてあつた。が、それに續いた記事は、鉛筆の文字がインキで消されてあつたので讀めなかつた。

十三日。雨に會つたので、書物を懷に入れて、風呂敷を頭から被つて歸る。辭書の下にまた彼女の手紙を發見す。

十四日。……自から省みて何等の疚しきところなきも、昨夜は眠れなくて困つた。主人に知れてはこの家に寄食してゐられなくなるだらうし、一生の破滅になるかも知れぬと案ぜられた。二三ヶ月前に何の氣なしに與へた寫眞を肌身離さず持つてゐると書いてあるが、若しもそれが彼女の母親の目につきでもしたなら、自分が誘惑したやうにでも邪推されるかも知れないが、自分には何よりもそれが怖い。夜學から歸つたら、また例の手紙が例の所に置いてありはしないかと思ふと、饂飩を食べる氣にもなれない。最初彼女と口を利いたのが惡かつたのだ。

あなたが私を嫌つてこの手紙を主人に見せでもしたら私は生きてはゐられませんから、私を安心させるやうな返事をして下さいと書いてあつたが、それほど心配なら人の目に付き易い机の上などへ手紙を置かなければいゝのに。自分が先方の氣に入るやうな返事をやつたら、どうしようと云ふんだらう。自分は何年先に結婚の出來る身の上になるのか知れないのにそれまで待つのだらうか。最初の手紙を見てからあの女の心が怖くてならない。彼女などに誘惑されはしないが、主人や世間から詰らない誤解を受けるのが氣遣はれる。……昨夜までの手紙はすべて火中に投ず。（濃いインキで力強く書いてあつた）

十七日。日曜にて通學せず。机に向つて讀書すれど、今や格子の外に彼女の聲せざるや、障子が開いて彼女の顔が現はれはせずやと疑はれて、專心眼を書物に注ぐ能はず。されど今宵は彼女幸はひに來らざりし。予の在宅を知りながら來らざるは不思議なり。心稍安んず。

十八日。やうやく雨が霽れて澄んだ空があらはれた。八幡神社の銀杏の葉が美しい。小鳥の聲も晴やかだ。柿が紅く熟してゐるであらう。稻が刈られてゐるであらう。故郷の秋景色が思出される。せめて東京の郊外でも散歩して見たい。落葉で汚れてゐるので庭掃除に骨が折れた。小溝の芥を流して門の外の掃除をもしたが、平生はいやな掃除でも今日はいゝ氣持であつた。その時俳優の妾だといふ綺麗な女が自分の顔を見ながら前を通つたので自分は極りが惡かつた。極りの惡い思ひをするのは卑怯だが、どうもあの女を見ると……（數行が抹殺してある）

秋の日の冴えた道を通つてゐるその女の後姿を、自分は見送つてゐたが、蛇の如き彼女の所行のことを思ふと、女は恐ろしい。彼女はどんな風にして手紙を自分の机の上に置くのであらう。妻君のところへ話に來た次手に置いて行くのであらうか。格子の外へ忍んで來てそつと置いて行くのであらうか。自分は物蔭からその様子を見たくなつた。

二十日。幸はひに彼女には途中でも出會はず、手紙もその後投込まれなくなつたが、まだ彼女の所行が頭の中に滯つてゐて勉强の邪魔をして仕方がない。彼女の不心得を諭して此方の迷惑をも知らせる返書を一度だけは送りたいと思ふけれども、郵便で送つては母親に見られる虞れがあるし、直接に手渡しするヿとは倘更出來ない。秋山へは時々遊びに行つて居るし、行けば母親に歡待されるだらうが、然

早彼家の閾を跨ぐ氣にはなれない。

二十二日。生れてはじめてあんな厭な思ひをして女といふものを見た。頭が震動して溜らない。彼女だと氣づくと直ぐに避けようしたが避ける間がなかつた。自分も顏を外らし、彼女も目を伏せて行過ぎたが、確かに一度自分の方へ向けた目には恨みだか情愛だか一種異樣な光を帶びてゐた。自分の邪推かも知れんが、無邪氣だとばかり思つてゐた丁年未滿のあの女の心には男を害する毒を有つてゐる。自分は警戒しなければならない。

夜歸つて來ると果して、手紙が例の所に置かれてあつた。棄てても破りもする譯には行かないから封を切つたが自分の手は震へた。半紙へ筆で書いた例のとは異つて、桃色の洋紙にペンで書いて、香水の匂ひが籠めてあつた。こんなことが自分をして却つて彼女をます〳〵厭はしめた。日と時刻と場所とを勝手に極めて自分に會ひたいと强請してゐるから圖々しい。全體會つて何を話さうとするのだらう。

瀨川は知らず〳〵玉突屋の前を通り過ぎた。日記帳を持つた手は冷たくなつて目も疲れた。で、それは懷に入れて、違つた途を取つて近所を一周して歸つたが、今まで讀んだところだけでは、痒いところに手の屆かぬやうで物足らなかつた。

書齋へ入つて火鉢にカン〳〵火を熾して、手をも顏をも温めながら、先つきほど乘り氣にはならないでところ〳〵拾ひ讀みしてゐたが、同じやうなことの繰返しで日記は十二月へ入つた。文字は分り難くなつて、ところ〳〵自ら戒めるやうな文句のみが際立つて明かに記されてあつた。

「彼女が予の書物を借りると云つて部屋を覗いてゐたとの妻の言葉を聞いて自分はぎよつとした。妻君は予に疑ひを抱いてゐるのではあるまいか。何等の疚しき點なく、自分は彼女に對してむしろ嫌惡の情を有してゐるばかりであるのに、無實の噂をつくられるのは遺憾だ。生きてはゐられぬとか死ぬる覺悟だとか手紙毎に書いて自分を脅迫してゐる。……」

十五日の日附けの下にかう書いたきり、日記帳の文字は終りを告げてゐた。……そして、三日後の十八日の夜にはもう二人相並んで轢死を遂げてゐる。

「その後女に會つて甘い言葉で泣き口說かれたゝめに、俄かに一緒に死ぬ氣になつたのかも知れない。死ぬるまでの一時間でも一晩でも、二人はどんないゝ夢を見てゐたか、傑れた詩人に唄はせたらどんなに美くしも可憐にも、若い二人の心持を現はすかも知れないが、當人の書いた日記の文句は何といふ平凡なものだらう？」

待設けてゐた異つた感じは、ついに何處からも得られなかつたので、瀨川は、日記帳の端が火に焦げてゐるのをも構はず二人の男女の死首を目前に並べて、心を据えてゐたが、すると、その女の顏は何時となしにFといふ昔馴染の女の顏に變じた。……十五六年前の昔になるが、瀨川の多少の緣つゞきでよく出入して、世話にもなつてゐた家にも、おふみと同じ年頃の娘があつた。おふみのやうに快活ではなくて、むしろ陰氣な方だつたが、母親の差圖で、瀨川の汚れ物の洗濯をしたり、古物を仕立直したりなどして吳れた。その時分の女の素振や瀨川自身の心持が、今讀んだ日記の文字の刺戟によつて朧ろに記憶の底から浮出たが、Fといふ女が、も少し強く出て來たならば、自分も河野の書生と同じやうにな

つたに違ひないと考へられだした。……今讀んだ日記の文章が遠い昔に消去つた瀨川自身の心の跟とし て見られだした。……あの時も運がよかつたのか、若い心に女からの傷を一つも受けないで健やかに生 延びて來た、のだが、と夢見るやうに思つてゐると、およみかF子か分らぬやうな若い女の死首は消え て、中棧の玻璃障子越しに、物干臺へ出てゐる後隣の太つた下女の脊中が彼れの眼を壓した。暫く物干 竿の音をさせてゐたが、その姿が失せると、瀨川は机の方へ向直つて、長い間手を着けかけては中途で 止め〳〵してゐる書き物に筆をつけようとしたが、ふと忘れてゐる間に、例の日記帳は彼れの手を辷 り落ちてよく熾つた火に煙つてゐた。

惡夢に襲はれて、怖い物から逃げんとしながら身の自由を失つてゐる人のやうに、彼れは火中の日記 帳を急いで拾上げようと思ひながら、手出しをしなかつた。そして、じつと目を凝して、日記帳の端か ら端まで、燻つては灰になつてゐるのを見てゐると、何となしに快い感じがした。河野の書生の魂が燻 つて燒けて灰になりつゝあるのだ。……締切られた部屋の中に濛々と立籠つた煙の中に、瀨川はかの書 生の顏を彼方此方に漂はせてゐた。

「大變焦臭いぢやありませんか」と云つて、勝子は階子段を上つて來た。襖を開けると煙に噎びながら 吃驚して、「どうしたのです」と、火鉢の側へ駆寄つて、燒殘りの帳面を抓み出して、緣側の障子を開放 した。煙が流れ出るとゝもに、灰殼は寒い風に煽られて火鉢のまはりに漂つた。

「何をこんなに燃しなすつたの？」と、茫然として煙や灰を見てゐる夫に向つて云ふと、瀨川は、怪訝 な顏してゐる妻によつて夢から醒めたやうに、

「河野がおれに讀ませうと思つて、わざ／＼貸して呉れた日記帳だ。おれが讀んだらいゝ材料になるとでも思つてるのだらう。……だけど駄目だね」と、本氣なく云つた。

「そんな大切な物を燒いていゝんですかね。河野さんに申譯が立つんですか」

「河野よりも死んだ人間に怨まれるかも知れないね。」と、瀬川が日記帳の要點を話すと、勝子は意外な珍聞として耳を聳てゝ、

「不思議ですね。だけど、書生さんの書いてゐることが皆んな本當だかどうだか分りやしませんよ。ふみちやんがそれほど蓮葉な女とはどうしても思はれないぢやありませんか。ふみちやんからその書生さんへやつたといふ手紙を讀んだら本當のことが分るかも知れないけれど」

「さういふ手紙を讀んだら、お前はまた泣かなきやなるまい。そして、死んだ女の思ひが一層深く殘つていけないよ。」

「……私今でもあの女の死ぬ時分の顏付が目に見えるやうですの。ちやんと一つ所で死んでゐたのですつて。……些つとしたはずみで人間の死ぬるのは雜作もないものなんですわね」

「さうさ、雜作もないだらうね」瀬川は何の氣なしに相槌を打つてから笑ひ／＼「……しまひには二人仲よくして死んでゐるのにこんな日記が後へ殘つてゐたら、二人であの世で氣まづい思ひをするかも知れないから、燒けて跟方もなくなつた方が死人の本望だらうよ。死人の亡靈が來て日記を搔浚つて行つたと河野には言譯をするんだね」

「まさか。……昔の世ならそんな口實が通用したでせうけれどね。」と、勝子は嘲笑ふやうに云つた。

「今は神様さへ死んだのか、この世へ顔を出さなくなつたほどなのだから」
瀨川は勝子に同意したつもりで欠伸まぜりで云つた。
秋山の家では、かうなつたら一日も早く田舍へ退かうとしてゐるので、古道具屋を呼んで、いろ〳〵な者を賣拂つてゐた。時節柄諸道具の價が高いらしいので、勝子も物置部屋から不用品を搜出して價踏みをさせた。不用品を拂出すのはいゝが、長火鉢や用箪笥など東京生活の間に時代のついた者を詮方なさに人手に渡すのは、垣間見てゐてもあまりいゝ氣持はしなかつた。
「お知合ひの方は直ぐに越して入らつしやるんですか」と、勝子が、そつと様子を見に來てゐる太田の主婦に訊くと、
「何だか見合はせるやうなことを云つてゐましたよ。あんなことのあつた後ですから、厭氣が差したのでせうよ」と、主婦は空々しく答へた。
その夜の寂しさと云つたらなかつた。勝子は一人でお通夜をしてゐるやうであつた。むしろ位牌を据ゑてその前で煎香でも手向けてゐる方が遙かに心が落着けるであらうと思はれた。死人に對する氣味の惡さは、實の母親よりも、假りに「叔母さん」と呼ばれて懷かれてゐた自分の方が一層ひどいやうな氣がしだした。死者に對して親切こそ盡したれ、徹塵も不爲なことをした覺えはないのに、と慰めても、昨日までの可憐なおふみの聲も顔も、今日は死人の聲となり顔となつて、忌はしく耳目に迫つて來た。
「寄席でも聽きに行かうか」

二階から下りて來てふとさう云つた瀨川の聲は、勝子には自分の聞違ひかと疑はれるくらゐ珍らしかつた。

「久振りで群集の中へ出て見たくなつたよ。お前もさうだらう。」

「えゝ。寄席だつてたまには面白いかも知れませんね」

勝子は忌はしい影を振退けるつもりで、夫に勸められて仕度にかゝつたが、ふと思出したのは、先日間おふみを一度寄席へ誘はふと堅く約束してゐながら、約を果さなかつたことであつた。それが些つと氣になつたので、それを夫に訴へて、

「何故貴下は寄席へ行かうなんて云出したのです？」と詰つた。

「寄席へ行くゝらゐに理窟もないさ。銀座を見るだけでも賑やかでいゝぢやないか。正月の買物もあるのだらうし」

「さうね」

勝子は春の買物といふのに心を唆られて、勢ひづいて出仕度をした。

街上は年末の氣分で華やかに色取られてゐた。二人に夜店を素見しなどしてぶら〳〵と歩いてゐたが、例のバイブルの賣子は、先日と同じやうに聲を尖らせて道を說いて、通りすがりの人を集めてゐた。

瀨川はその方を指示して、「彼方で買つたのだよ、先日の本は」と、云つて微笑した。今のやうな人の世に一握の火の粉をさへ降らす力のなくなつた昔の世のエホバ神を說いてゐる人の顏は寒さうだつた。

「神も死し、人も死す」瀨川は舊約の卷々と、雜作なく燒失せた青年の日記とを頭に浮べた。

肩を並べて燈火の街を步いてゐる二人は、そろ〳〵互ひに思出しながらも、暗い道を辿つて死を求めて行つた若い二人の氣持は兎の毛ほども身に感じ得られなかつた。

「御婦人方は人間の水上。……岩戸神樂の昔より」と、寄席へ入ると、高座で辯じはじめてゐた。

二人は笑顏に取圍まれて座を占めた。

二人の稚兒

谷崎潤一郎

二人の稚兒は二つ違ひの十三に十五であつた。年上の方は千手丸、年下の方は瑠璃光丸と呼ばれて居た。二人は同じやうに、まだ頑是ない時分から女人禁制の比叡の山へ預けられて、貴い上人の膝下で育てられた。千手丸は近江の國の長者の家に生れたのださうであるが、或る事情があつて、此の宿房へ連れて來られたのは四つの歲のことである。瑠璃光丸は某の少納言の若君でありながら、やはり何かの仔細があつて、やうやう乳人の乳を放れかけた三つの歲に、都を捨てゝ王城鎭護の靈場に托せられたのである。二人は勿論、さう云ふ話を誰からともなく聞かされては居るものゝ、自分たちに明瞭な記憶があるのでもなく、たしかな證據があると云ふ譯でもない。自分たちには父もなく母もなく、たゞ此れまでに丹精して養うて下された上人を親と賴み、佛の道に志すより外はないと思つて居た。

「お前たちは、よくよく仕合せな身の上だと思はなければなりませぬぞ。人間

が親を戀ひ慕うたり、故郷に憧れたりするのは、みな淺ましい煩惱の所業であるのに、山より外の世間を見ず、親を持たないお前たちは、煩惱の苦しみを知らずに生きて來られたのだ。」と、をりをり上人から諭されるにつけても、二人は自分たちの境遇の有り難さを、感謝せずには居られなかつた。上人のやうな高徳の聖でさへ、此の山へ逃げて來られる以前には、有りと有らゆる浮世の煩惱に苦められて、其の絆(きづな)を斷ち切るまでに、長い間の觀行(くわんぎやう)を積まれたのださうである。まして上人の御弟子の中には、朝夕經文の講釋を聽きながら、未だに煩惱を絶やす事が出來ないのを、歎いて居る者が多勢あると云ふ。二人は世の中を知らないお蔭で、それほど恐ろしい煩惱と云ふ惡病に、罹らずに濟んでしまふのである。煩惱を滅せば、やがて菩提の果を證することが出來ると云ふ其の煩惱を、初めから解脱して居る自分たちは、近いうちに稚兒髷を剃り落して戒律を受けたなら、必ず師の御坊にも劣らぬやうな貴い出家になれるであらうと、其れを樂しみに日を送つて居た。

けれども二人は、子供らしい無邪氣な好奇心から、煩惱の苦しみとやらに充ちて居る浮世と云ふものがどんな忌まはしい國土であるか、其處に住みたいとは願はぬまでも、いろいろの想像を廻らして見る事はあつた。上人を始め多くの先達の話に依れば、此の穢はしい世の中で、西方淨土の俤を僅かに傳へて居るところは、自分たちの居る山の上だけださうである。山の麓から四方へひろがつて、青空の雲につゞいて居るあの廣い廣い大地、――あの大地こそは、經文のうちにまざまざと描かれて居る五濁(ごぢよく)の世界であると云ふ。二人は四明が嶽の頂きから、互ひに自分の故郷だと聞かされた方角を瞰(み)おろしては、たわいのない夢のやうな空想を、胸に浮べずには居られなかつた。或る時千手丸は近江の國を眺めやつ

て、うす紫の霞の底に輝いて居る琵琶の湖を指しながら、

「ねゝ瑠璃光丸、あすこが浮世だと云ふけれど、そなたは彼處をどんな土地だと思うて居やる。」

と、兄分らしいませた句調で、もう一人の稚兒に云つた。

「浮世は塵や垢にまみれた厭な所だと聞いて居るが、此處から見ると、あの湖の水の面は鏡のやうに澄んで居る。そなたの眼にはさう見えないだらうか。」

瑠璃光丸は、そんな愚かな質問をして、年上の友に笑はれはせぬかと危ぶむやうに、恐る恐る云つた。

「だが、あの美しい水の底には恐ろしい龍神が棲んで居るし、湖の縁にある三上山と云ふところには、その龍よりももつと大きい蜈が棲んで居る事を、そなたは多分知らないのだらう。山の上から眺めると浮世はきれいに見えるけれど、降りて行つたら其れこそ油斷のならぬ土地だと、いつぞや上人が仰つしやつたのは、きつとほんたうに違ひない。」

かう云つて、千手丸は口元に悧巧さうな笑みを泛した。

或る時は瑠璃光丸が、遙かな都の空を望んで、繪圖をひろげたやうな平原に、蜿蜒と連なつて居る王城の甍をさし示しながら、

「ねえ千手丸、あすこも浮世に違ひないが、彼處には、此のお寺の藥師堂や大講堂にも劣らない、立派な樓閣がありさうに見えるではないか。そなたはあの人家を何だと思ふ。」

と、不審らしく眉をひそめた。

「あすこには、日本國を知ろしめす皇帝の御殿がある。浮世のうちでは、彼處が一番淨く貴い住居なの

だ。しかし人間があの御殿に住まへるやうな、十善の王位に生れるには、前世にそれだけの功徳を積まなければならないのぞ。だからわれ／＼は、やつぱり此の山で修業をして、今生に出來るだけの善根を植えて置かなければなるまいぞ。」

かう云つて、千手丸は年下の兒を勵ました。

だが、勵ます方も、勵まされて居る方も、此れだけの問答では、容易に好奇心を滿足させる譯には行かなかつた。上人の仰せに從へば、浮世は幻に過ぎないと云ふ。山の上から眺めた景色が、たとへ美しさうに見えても、ちやうど水の面に映つて居る月の光のやうなもので、影に等しく泡に等しいものであると云ふ。――「あの、尾上の雲を見るがいゝ。遠くから眺めると雪のやうに清淨で、銀のやうにきらきらと輝いて居るが、あの雲の中へ這入つて見ると、雪でもなく銀でもなく、たゞ濛々とした霧ばかりである。お前たちは、此の山の谷底から湧き上る雲の中に、包まれた覺えがあるだらう。浮世はその雲と同じことだ。」――かう云つて説明されると、成る程それで分つたやうな氣はするが、やはり何處やら物足りなかつた。二人が殊に、最も物足りなく感じたのは、浮世に住んで居る人間の一種で、凡べての禍の源とされて居る女人と云ふ生き物を、見たことのない一事であつた。

「麿が此の山へ登つたのは、たしか三つの歳ださうだが、そなたは四つになるまで在家に居たと云ふではないか。そんなら少しは浮世の樣子を覺えて居てもよささうなものだ。外の女人は兎も角、せめて母者人の姿なりと、頭に殘つて居ないか知らん。」

「まろも時々、母者人の俤を想ひ出さうと努めて見るが、もうちつとで想ひ出せさうになりながら、う

すい帳に隔てられて居るやうで、いつも焦れつたい心地がする。まろの頭にぼんやり殘つて居るものは、生暖いふところに垂れて居た乳房の舌ざはりと、甘いなつかしい乳汁の香ばかりだ。女人の胸には、男の體に備はつて居ない、ふつくらとふくらんだ、豐かな乳房があることだけはたしからしい。たゞそれだけが折々おもひ出されるけれど、それから先は、まるきり想像の及ばない、前世の出來事のやうにぼやけて居る。……」

夜になると、上人のお次ぎの部屋に枕を並べて眠る二人は、こんな工合にひそひそ話をするのであつた。

「女人は惡魔だと云ふのに、そんな優しい乳房があるのは不思議ではないか。」

かう云つて瑠璃光丸が訝しめば、

「成る程さうだ。惡魔にあんな柔かい乳房がある譯はない」

と、自分の記憶を疑ふやうに、千手丸も首をかしげる。

二人は幼い頃から習ひ覺えた經文に依つて、女人と云ふものが如何に獰惡な動物であるかを、よく知つて居る筈であつた。しかし女人が、いかなる手段で、いかなる性質の害毒を流す物であるかは、殆んど推量する事が出來なかつた。「女人最爲惡難。縛着牽人入罪門」と云ふ優塡王經の文句だの、「執劍向敵猶可勝、女賊害人難可禁」と云ふ智度論の文句から察すれば、女人は男子を高手小手に縛めて、恐ろしい所へ曳き擦つて行く盗賊のやうにも考へられた。けれども又、「女人は大魔王なり、能く一切の人を食ふ。」と、涅槃經に說かれた言葉に從へば、虎や獅子より更に巨大な怪獸のやうでもあつた。

「一とたび女人を見れば、能く眼の功德を失ふ。從ひ大蛇を見るといへども、女人をば見るべからず。」

と、寶積經に書いてあるのが本當であるとしたら、古沼に棲む蟒のやうに、その體から毒氣を噴き出す爬蟲類でもあるらしかつた。千手丸と瑠璃光丸とは、さまざまの經文の中から、女人に關する新しい記事を搜して來ては、それを互ひに披露しあつて、常に意見を闘はした。

「そなたも麿も、その恐ろしい女人を母に持つて、一度は膝に掻き抱かれた事もあるのに、かうして今日まで恙なく育つて來た。それを思ふと、女人は猛獸や大蛇のやうに、人を喰ひ殺したり毒氣を吐いたりする物ではないだらう。」

「女人は地獄の使なりと、唯識論に書いてあるから、猛獸や大蛇よりも、もつと悽じい形相を備へて居るのだらう、われわれが女人に殺されなかつたのは、餘程運が好かつたのだ。」

「だが、」

と、千手丸は相手の言葉を遮つて云つた。

「そなたは唯識論の、其の先の方にある文句を知つて居るか。女人地獄使、永斷佛種子、外面似菩薩、内心如夜叉、――かう書いてある所を見ると、たとへ心は夜叉のやうでも、面は定めし美しいに相違ない。その證據には、この間都から參詣に來た商人が、うつとりと麿の顏を眺めて、女子のやうに愛らしい稚兒だと、獨り語を云うたぞや。」

「まろも先達の方々から、そなたはまるで女子のやうだと、度び度びからかはれた覺えがある。まろの姿が惡魔に似て居るのかと思ふと、恐ろしくなつて泣き出した事さへあるが、何も泣くには及ばない、

そなたの顔が菩薩のやうに美しいと云ふのだと、慰めてくれた人があつた。まろは未だに、褒められたのやら誹られたのやら分らずに居る。」

かうして話し合へば話し合ふほど、ますます女人の正體は、二人の理解を超越してしまふのであつた。大師結界の靈場とは云ひながら、此の山の中にも毒ある蛇や逞ましい獸は棲んで居る。春になれば鶯が啼いて花が綻び、冬になれば草木が枯れて雪が降るのは、浮世と少しも變りがない。たゞ異つて居るのは、女人と云ふ者が一人も居ない事だけである。それほど佛に嫌はれて居る女人が、どうして菩薩に似て居るのだらう。それほど容貌の美しい女人が、どうして大蛇より恐ろしいのだらう。

「浮世が幻であるとしたら、女人もきつと美しい幻なのだ。幻なればこそ、凡夫が其れに迷はされるのだ。ちやうど深山を行く旅人が、狹霧の中を迷ふやうに。」

いろ〳〵考へ拔いた末に、二人はとう〳〵斯う云ふ判斷に到達した。美しい幻、美しい虚無、——それが女人と云ふものであると、否でも應でも決めてしまはなければ、二人の理性はどうしても滿足を得られなかつた。

年下の瑠璃光丸の好奇心は、恰も幼兒がお伽噺の樂園を慕ふやうな、淡い氣紛れなものであつたが、彼年上の千手丸の胸に蟠つて居るものは、好奇心と言ふ言葉では表はせないほどに强かつた。夜な〳〵彼と向ひ合つて、すや〳〵と熟睡する瑠璃光丸の、無心な寢顔を眺めては、自分ばかりが何故かうまで頭を惱ますのであらうと、彼は他人の無邪氣さを羨まずには居られなかつた。さうしてたま〳〵眼を潰れば、眼瞼のうちに種々雜多な女人の俤があり〳〵と浮かんで、夜もすがら彼の眠りを騷がせる。或る時

は三十二相を具足する御佛の姿となつて、紫磨金の光りの中に彼を抱擁するかと見たり、或る時は阿鼻地獄の獄卒の相を現じて、十八本の角の先から燃え上る炎の舌で、刹那に彼を燒き殺すかと覺えたりする。やゝともすれば、惡夢に魘されてびつしよりと冷汗を掻き、瑠璃光丸に呼び醒まされて、蓐の上に飛び起きる事などもある。

「そなたは今しがた、妙な譫語を口走つて呻つて居た。何ぞ物怪にでも襲はれたのか。」

かう云つて尋ねられると、千手丸は耻かしさうに頂を垂れて、

「まろは女人のまぼろしに責められたのだ。」

と、聲をふるはせて答へるのである。

日を經るまゝに、だん〳〵子供らしい快活と單純とが、千手丸の素振りや表情から失はれて行つた。隙さへあれば、彼はこつそり瑠璃光丸の目を竊んで、大講堂の內陣に佇みながら、觀世音や彌勒菩薩の艶冶な尊容に、夢見るやうな瞳を凝らしつゝ、茫然と物思ひに耽つて居た。さう云ふ折に、彼の頭を一杯に塡めて居るものは、唯識論の「外面似菩薩」の一句であつた。たとへ內心は夜叉に等しいにもせよ、又その姿は幻に過ぎないにもせよ、この山の數多の塔堂におはします諸菩薩のやうな人間が、世の中に生きて居るとしたら、どんなに端麗な、どんなに莊嚴なものであらう。かう考へると、女人に對する恐怖の念はいつの間にか消滅して、跡に殘るのは怪しい憧れ心地であつた。藥師堂、法華堂、戒壇院、山王院、――彼は山內到るところの堂宇をさまようて、其處に安置してある本尊だの、脇士だの、楣間を飛騰する天人の群像だのを、飽かずに眺め入りながらうと〳〵と日を送つた。もう此の頃では、年下の

兒を相手にして、女人の噂などを語り合はうともしなかつた。「女人」の二字を口にするのが、瑠璃光丸には何でもない事のやうに思はれるのに、彼には不思議に罪の深い、惡事であるやうに感ぜられて來た。眼には
「自分はなぜ、瑠璃光丸のやうな無邪氣な態度で、女人の問題を取り扱はうとしないのだらう。貴い御佛の像を拜みながら、なぜ心には淺ましい女人の影が浮ぶのだらう。」
ひよつとしたら、此れが煩惱と云ふものではないか知らん。――さう氣が付くと、彼は身の毛の竦つやうな心地がした。山の上には煩惱の種がないと云ふ、上人のお言葉を賴みにしては居るものゝ、自分はいつしか煩惱の囚となつて居るのではあるまいか。いつそのこと、彼は日頃の胸中の悶えを、上人に打ち明けて見ようかとも思つたが、「たやすく人に打ち明けてはなるまい。」と、絶えず耳元でさゝやく聲が聞えて居た。その悶えは苦しいと同時に甘かつた。たゞ何となく、大事に藏つて置きたいやうなものであつた。

千手丸が十六になり、瑠璃光丸が十四になつた歳の春であつた。東塔をめぐる五つの谷には山櫻が咲き亂れて、四十六坊をつゝむ青葉若葉に、梵鐘の響きが蒸されるやうな、鬱陶しい、ものうい陽氣が毎日續いた。或る日の明け方、二人は上人の仰せをうけて、横川の僧正の許へ使ひにやられた歸り路に、人通りの稀な杉の木蔭に腰をおろして、暫く疲れを休めて居た。千手丸はをり〳〵深い溜息をつきながら、兜卒谷の底から立ちのぼる朝霧の、尾上の雲につながつて行くさまを、一心に視つめて居たが、ふ

と、

「そなたはさぞ、ちかごろの麿の樣子を不審に思つて居るだらう。」

から云つて、にこりともせずに年少の友の方を振り顧つた。

「……まろはそなたと浮世の話をし合つてから、女人の事が氣にかゝつて、明け暮れ此のやうに惱んで居る。まろはゆめ〳〵、女人に會ひたいと思うのではないけれど、耻かしいことには、如來の尊像の前に跪いて、いくら祈願を捧げても、女人の俤が眼の先にちらついて、片時も佛を念ずる隙がない。何と云ふ呆れ果てた人間になつたのだらう。……」

瑠璃光は驚いて、千手の頰から流れ落ちる涙を見た。泣いて居るからには、千手は定めし眞面目なのであらう。それにしても、女人の問題がどうして彼に此れほどの苦悶を與へるのか、その理由が瑠璃光には分らなかつた。

「そなたはまだ、出家をするのに一二年間があるが、まろはことし得度するのだと、上人が仰つしやつて居らしつた。だが、この忌まはしい根性が直らぬうちは、菩提の道へ志したとて何の効があらう。たとへ六波羅密を修し、五戒を守つても、頭の中の妄想が一期の障りとなつて、まろは永劫に、輪廻の世界から逃れる事は出來ないだらう。成る程女人は、虛空にかゝる虹のやうな、假の幻であるかも知れない。しかし我れ我れのやうな愚かな凡夫が、虹をまぼろしと悟るのには、有り難い說教を聽くよりも、いつそ雲の中へ這入つて見た方が、容易に合點が行くものだ。それ故まろは、出家をする前に一遍そつと山を下つて、女人と云ふものを見て來ようと決心した。さうしたらきつと幻の意味が分つて、立ちど

ころに妄想が消え失せるに違ひない。」

「そんな事をして、上人に叱られはしないだらうか。」

迷ひの雲を打ち拂ふ爲めに、女人の正體を究めに行くと云ふ千手の決心は、いかにもいぢらしい。けれども瑠璃光には、たつた一人の友を恐ろしい浮世へ放してやるのが、心もとなく感ぜられた。琵琶の湖の龍神だの、三上山の蜈蚣だのが、出て來たらばどうする氣だらうか。女人に手足を縛られて、眞暗な穴ぐらへ曳き込まれはしないだらうか。萬一生きて歸つて來ても、「わしが許すまで山を降りてはなりませぬ。」と、嚴しく誡められた上人の掟を破つて、再び山に住むことが出來るだらうか。

「浮世には無數の厄難が待ち構へて居る事は、勿論覺悟して居るのだ。猛獸の牙にかゝり、盗賊の刃に脅されるのも、佛法修行の一つではないか。過まつて命を落しても、かうして煩惱に苦しめられて居るよりは、增しではないか。それに先達の話では、都はこゝから僅かに二里の道のりで、朝早く山を下れば、晝少し過ぎには歸つて來られると聞いて居る。都へ行くのが遠ければ、麓の坂本の宿へ降りても、女人は澤山見られるさうな。たつた半日上人の眼を掠めれば、まろの望みは遂げられるのだ。よしや後になつて露顯しても、悟りの道の妨げになる疑惑を晴らす事が出來たら、必ず上人は喜んで下さるに極まつて居る。そなたが案じてくれるのは忝いが、どうぞ止めずに置いてくれ。まろの決心は堅いのだ。」

千手はきつぱりと云ひ切つて、脚下に展けて居る琵琶湖の水面の、曉の霧の中を滑るやうに昇つて行く日輪を眺めながら、

「幸ひ今日は又とない好い折だ。此れから出かければ未の刻には歸つて來られる。無事で戻つたら、此

宵はそなたに珍しい浮世の話を語つて進ぜよう。それを樂しみに待つて居るがいゝ。」

と、瑠璃光の肩へ手をかけて、宥め賺かすやうにした。

「そなたが行くなら、まろも一緒につれて行つてくれ。」

かう云つて、今度は瑠璃光が泣いた。

「恙なく歸つて來られゝばいゝが、たとへ半日の旅にもせよ、そなたの身に若しもの事があつたら、いつの世に再び會へるだらう。命を捨てゝも厭はないと云ふそなたと、今こゝで別れるやうな不人情な眞似は出來ない。まして上人にそなたの行くゑを尋ねられたら、まろは何と云つて答へたらいゝだらうか。どうせ叱られるくらゐなら、そなたと一緒に山を出て見たい。そなたの爲めに修行になるなら、まろの爲めにも修行になるに極まつて居る。」

「いやいや、妄想の闇に鎖されたまろの心と、そなたの胸の中とは、雪と墨ほどに違つて居る。淨玻璃のやうに清いそなたは、わざわざ危難を冒して、修行をするには及ばないのだ。そなたの體に間違ひがあつたら、それこそ麿は上人へ申し譯がないではないか。面白い所へ出かけるのなら、そなたを捨てゝ行きはしない。浮世はどんなにいやらしい、物凄い土地なのか、運よく命を完うして歸つて來たら、まろの迷ひの夢もさめて、きつとそなたに精しい話をして聞かすことが出來るだらう。さうすればそなたは、自分で浮世を見るまでもなく、幻の意味が分るやうになるのだ。だから大人しく待つて居るがいゝ。もし上人がお尋ねになつたら、山路に踏み迷つて、まろの姿を見失つたと云つて置いてくれ。」

それでも千手は、名殘り惜しさうに瑠璃光の傍へ寄つて、長い間頬擦りをした。物心がついてから―

度も離れた例のない友と山とに、ちよいとでも別れるのが、辛いやうでもあり勇ましいやうでもあつた。彼の感情は、始めて戰場へ出る士卒の昂奮によく似て居た。實際死ぬかも知れないと云ふ懸念と、功を立てゝ凱旋したらと云ふ希望とが、小いさな胸に渦を卷いた。

二日立つても三日立つても、千手は歸つて來なかつた。谷へでも落ちて死んだのではあるまいかと、同宿の人々が八方へ手分けをして、山中を殘らず搜し廻つても、彼の姿は見えなかつた。

「上人さま、わたくしは惡い事をいたしました。先日わたくしは上人さまへうそを申したのでございます。」

から云つて、瑠璃光丸が上人の前に手をつかへて、生れて始めて不妄語戒を犯した事を懺悔したのは、千手が居なくなつてから、十日ほど過ぎた後であつた。

「横川から歸る道すがら、千手どのを見失つたと申したのはうそでございます。千手どのはもう此山には居りませぬ。たとへ人に頼まれたとは云へ、心にもない僞りを申したのは、わたくしが惡うございました。どうぞお許し下さりませ。なぜわたくしはあの時に、千手どのを止めなかつたのでございませう。」

さう云ひながら、瑠璃光丸は疊へひれ伏してくやし泣きに身を悶えた。

自分が兄とも頼んで居た千手丸は、今ごろ何處をうろついて居るだらう。いかなる野末の草に寢ね、

露に濡れて居るだらう。半日のうちに戻つて來ると、あれ程堅く云ひ殘した言葉を思へば、きつと何か變事があつたに相違ない。此の上は徒らに山内を搜索するより、浮世を隈なく調べて貰ひたい。さうして幸ひに生き長らへて居たら、一刻も早く救ひ出してやりたい。――瑠璃光はさう決心して、叱られる事を覺悟しながら、千手が山を降りた動機を、包まず上人に白狀したのであつた。

「一旦浮世へ出て行つたからには、大海の中へ石ころを投げたも同然だ。千手の體は、もうどなつたか分りはせぬ。」

上人は少年に對して威嚴を示す爲めに、ことさら眼をつぶつて息を吸ひ込むやうにして、考へ深い句調で云つた。

「それにしても、お前は妄想に迷はされずによく山へ殘つて居た。年は下でも、お前と千手とは幼い時分から機根が違つて居た。――さすがに血と云ふものは爭はれない。」

千手丸は百姓上りの長者の悴、瑠璃光丸はやんごとない殿上人の種である。「血と云ふものは爭はれない。」と云ふ文句は、二人の器量や品格が比較される度毎に、以前から屢々人の口の端に上つて、瑠璃光の耳にも響いて居たが、それを上人から聞かされるのは今日が始めてゞあつた。

「恠しいまゝに掟を破つて、山を脫け出るとは憎い奴だが、そんな愚かな眞似をした罰で、憂き目を見て居るだらうと思ふと、不憫に感ぜられる。今ごろは犬に食はれたか賊に浚はれたか、恐らく無事で生きては居まい。もう此の世には居ないものとあきらめて、追福を祈つてやるとしよう。それにつけてもお前は決して煩惱を起してはなりませぬぞ。千手丸がよい見せしめだ。」

かう云つて上人は、悧潑らしい、くりくりとした瑠璃光の眼の球を覗きながら、「何と云ふ賢い兒だらう。」と云はぬばかりに、その背筋を撫でゝやつた。

毎晩瑠璃光はたつた一人で、上人のお次ぎの部屋に寢なければならなくなつた。別れる時に、「では直き歸つて來る。」と云ひ捨てゝ、人目にかゝらぬやうに、わざと往來の淋しい崎嶇たる岨道を、八瀨の方へ辿つて行つた千手丸の後ろ姿が、夜な夜な彼の夢の中で、小いさく小さく遠くへ消えた。今になつて考れば、見す見す命を落す事に極まつて居たものを、無理にも斷念させなかつたのは、自分にも罪があるやうな氣がするけれど、あの折自分が一緒に行つたら、どんな禍が待つて居たゞらうと想像すると、彼は覺えず己れの幸運を祝福せずには居られなかつた。

「此れと云ふのも、自分には御佛の冥護が加はつて居たのだ。自分は飽くまでも上人の仰せを守り、行く末高德の聖になつて、必ず千手丸の菩提を弔つてやらう。」

さう繰り返して、瑠璃光は心に誓つた。果して自分が、上人から褒められたほどの鋭い機根を備へて居るなら、いかなる難行苦行にも堪へて、遂には眞如法界の理(ことわり)を悟り、妙覺の位を證する事が出來るに違ひない。――かう思ふだけでも、けなげな彼の頭の中には、無限の信仰が燃え上るやうに感ぜられた。

やがて其の年の秋が來た。千手が山を下つてから既に半年の月日が過ぎた。滿山の蟬しぐれがうら悲しい蜩の聲に代つて、森の梢がそろそろ黃ばみ始めた時分である。瑠璃光丸は或る日ゆふべの勤行を終つて、文珠樓の前の石段を、宿院の方へ降りて行くと、

「もし、もし、あなたさまは瑠璃光丸と仰つしやいますか。」

から云つて、あたりを憚るやうに、石段の上から小聲で呼びかける者があつた。

「わたくしは山城の國の深草の里から、主の使ひで、あなたさまをお尋ね申して參りました。此の文を私からあなた樣へ、直き／＼にお渡し申すやうに、云ひ付かつて居るのでございます。」

男は樓門の蔭に身を隱して、袂の裏に忍ばせてある文の端を、何か曰くがありさうにちらりと示しながら、頻にぺこ／＼お辭儀をして瑠璃光をさしまねいた。

「――から申したゞけてはお分りになりますまいが、くはしい譯は此れにしたゝめてございます。此の文を、成るべく人目にかゝらぬやうに御覽に入れて、是非御返事を伺つて參れと云ふ、主の申し付けでございます。」

瑠璃光は、いやしい奴僕の風俗をした、二十あまりの薄髯のある男の顏を、胡散らしく見守つて居たが、何心なく受け取つた文の面に眼を落すと同時に、

「おゝ、千手どのゝ手だ。」

と、我を忘れて叫ばずには居られなかつた。その甲高い調子を、男は制するやうにして言葉を續けた。

「さやうでございます。よく覺えて居て下さいました。その文の主は、あなたさまと仲好しであつた千手丸さま、今の私のあるじでございます。ことしの春、山を降りると程なく恐ろしい人買ひに浚はれて、長い間いたましい思ひをなさいましたが、未だに御運が盡きなかつたのでございませう、ちやうど二た月ばかり前に、深草の長者の許へ下男に賣られたのが緣となつて、あの優しいみめかたちを長者の娘に見初められて、今では其の家の入り聟になり、何不足のない美しい御身分におなりなさいました。

ついてはいつぞやの御約束通り、浮世の樣子をあなた樣へお知らせ申したく、この文を持參いたしたのでございます。浮世は決して、山の上で考へて居たやうな幻でもなく、恐ろしい所でもない。女人と云ふものは、猛獸や大蛇などに似ても似つかない、彌生の花よりもきらびやかな、御佛のやうに情深いものだと云ふことが、こまごまと書いてある筈でございます。千手丸さまは、長者の娘ばかりか多くの女人に戀ひ慕はれて、明日は神崎、けふは蟹島、江口と云ふやうに、所々方々を浮かれ歩いて、二十五菩薩よりもうるはしい遊女の群にかしづかれながら、春の野山を狂ひ飛ぶ蝶々のやうな、樂しい月日を送つておいでになるのでございます。かほどに面白い浮世とも知らずに、わびしく暮らしておいでになるあなた樣の御身の上を考へると、お氣の毒でなりませんので、成らう事ならそつと深草の里へお迎へ申して、昔のよしみに此の仕合はせを分けて上げたいと、かやうに主人は申して居ります。私がお見受けしても、あなた樣は千手丸さまにも勝つた美しい、愛らしいお稚兒で居らつしやるのに、かう云ふ山の中でお果てなさるのは、あんまり勿體なうございます。あなた樣のやうなお立派な御器量のお方が、世の中へお出でになつたら、どんなに人々から持て囃されいとしがられるでございませう。まあわたくしの申すことが嘘かまことか、その文を御覽なすつて下さいまし。さうして是非、わたくしと一緒に深草へお出で下さいまし。私は此れから近江の國の堅田の宿へ打ち越えて、あすの明け方には再び此處へ戻つて參ります。それまでの間によくよく分別をなすつて、決心がおつきになつたら、誰にも見咎められないやうに、此の樓門の下で私を待つて居らつしやいまし。必ずぐ惡いやうにはいたしませぬ。もしあなた樣をお連れ申す事が出來たら、主人はどれほど喜ぶでございませう。」

かう云つて、にこ〳〵笑つて居る男の風體が、瑠璃光には譯もなく恐ろしかつた。半歳ぶりで思ひもかけぬ友の消息を得た嬉しさを、しみ〴〵と味はふ暇もなく、自分の一生の運命に關する重大な問題を、不意に鼻先にひろげられた彼は、暫く息が詰まるやうな、眼が眩めくやうな心地に襲はれて、戰慄しながら立ちすくんで居た。

「さても其のゝちの數々の事ども、いづこに筆を起しいづこに筆をとゞむべくさふらふやらむ。みづから山に罷りこし絶えて久しき對面して、まのあたり申し聞えんとおぼえ候へども、一旦掟を破りさふらふ身にては、一乘のみね高くそばだちて仰ぐべからず、一味のたに深くたゝへて近づき難しとこそ覺え候へ……。」

かう書いてある手紙の端を持つたまゝ、璃瑠光は自分で自分の身を疑ふが如く、たゞ上の空で、ところどころの文言を慌しく讀み散らした。「半日がほどにて歸り候はんなどまをし候て、かく打ち過しさふらふ間、さだめてわれに謀られたりとおぼし構へられ候こと、かへす〴〵くちをしう心ぐるしくおぼえ候。千手が身に於いては、さることゝろがまへ初めより露ばかりも候はず、その日のゆふぐれ宿坊へ戻り候はんとてすでに雲母越にさしかゝり候をりふし、俄かに物蔭よりおどり出でたる人のさまにて、淺ましう口をふたがれ眼をふたがれて何處ともなく舁き行かれさふらふほどのこゝち、佛罰たちどころにいたりて生きながら三途八難に赴くかとおぼえ候ひしぞや。」かう云ふ殊勝な文句もあれば、また思ひ切つて大膽な、「あらおかしやあらおかしや」と云ふ言葉を以て書き起した、神をも佛をも憚らぬやうな一節が見えた。「あらおかしやあらおかしや、浮世は夢にても幻にても候はず、まことは西方淨土を現じた

る安樂國にて候ぞや。けふこのごろの千手が爲めには、一念三千の法門も、三諦圓融の觀行も、さらにやうありとも覺えずさふらふ。圓頓の行者たらんよりは、煩惱の凡夫たらんこと、はるかに樂しくよろこばしく候ぞかし。かやうに申しさふらふことをば、かまへて御惑ひあるべからずさふらふ。とく〳〵御こゝろをひるがへして、山を降りさせたまふべきなりとおぼえ候。」——此れがまさしくあの千手丸の口吻であらうか。あれほど信心深かつた、煩惱の二字を呪ひに呪つて居た千手丸の、此れがほんたうの了見であらうか。その文章の全幅に溢れて居る冒瀆な言語と、妙に浮き浮きした調子と、一種人を壓迫するやうな意氣組みとは、瑠璃光の胸に強い反感を挑發すると共に、一方ではそれと同じ强さを以て、長い間頭の奧に潛んで居た「浮世」に對する好奇心が、むらむらと湧いて來るのであつた。

「あすの朝までゞよろしうございますからとつくりとお考へなさいまし。申すまでもございませんが、決して他人に相談をなすつてはなりません。此の山の坊さんたちの云ふことは、みんな眞赤な嘘でございます。あなた樣のやうな罪のないお稚兒に、世の中をあきらめさせやうとして、好い加減な氣休めを云ふのでございます。兎にも角にも、其の文をゆつくり御覽になつた上、御自分で御分別をなさいまし。ようございますか。」

男は瑠璃光の顏つきに表れて居る狐疑の色を、それと見て取つてそゝのかすやうに云つた。さうして、いそがしさうに二三度輕く頭を下げて、すたすたと石段を驅け降りて行つた。

それでもまだ、瑠璃光の體のふるへは止まらなかつた。男は純潔な生一本な少年の心に、這入り切れないほどの重苦しい物を托して行つた。自分が明日の朝までに用意して置く返答に依つて、自分の將來

がどうにでもなる。——そんな大事件が、彼の手に委ねられた例は嘗てなかつた。さう自覺するだけでも、彼は激しい慟悸を制することが出來なかつた。

夜になつても、不安と昂奮とに腦裡を支配されて、彼は到底與へられた問題を、靜かに落ち着いて考へる譯に行かなかつた。長へに封ぜられて居た「女人」の秘密を發き、いたるところに驚異の文字を連ねてある不可思議なる手紙を、もう少し胸騷ぎが治まつてから讀み返して見ようと思ひながら、そつと机の上に載せたまゝ、彼は瞑目して一心に佛を念じた。なつかしい舊友の消息ではあるけれど、折角自分が勇猛精進の志を堅めて、隨緣起行の功を積まうとして居るものを、不意に横あひから掻き亂さうとするのが、恨めしくもあり腹立たしくもあつた。

「讀めば迷ひの原になる。いつそ燒き捨てゝしまはうか知らん。」

かう思ふ傍から、「そんなに危險を感ずるほど、自分は弱い人間ではない。」と、己れの卑怯を嘲笑ふ氣にもなつた。自分が迷ふのも迷はぬのも、御佛の思し召し一つである。浮世が幻でないと云ふ千手丸の言葉が、果してどれだけ信ずるに足るか、どれだけ自分を誘惑するか、その誘惑に堪へられないくらゐなら、自分は御佛に捨てられたのであると、そりそり頭を擡げて來る好奇心が、彼にいろいろの辯解の辭を作らせずには措かなかつた。

「……そもそも女人のやさしさ美しさ、繪にも文にもかきつくしがたく、何にたとへ何にくらべてか告げまゐらせ候はん。……きのふもよどの津に舟をうかべて、江口と申すところに參り候へば、川ぞひの家々よりあまたの遊女たち水にさほさして寄りつどひ候ありさま、せいしほさらの降り立ちたまふか、

楊柳觀世音の假形したまふかとあやしまれて、世にもめでたくありがたくおぼえさふらひしに、やがて千手が舟をめぐりて口々に神樂催馬樂をうたひどよもし候へば、何にてもあれ、歌一首きかせてんやと申しさふらふほどに、一人の遊女ふなばたをたゝいて、有漏路より無漏路へかよう釋迦だにも、羅睺羅が母はありとこそきけと、くりかへしくりかへし、節おかしううたひ出で候ものか….。」

その前後の文章は、千手が渾身の力をこめて、瑠璃光の道心を突き崩さうとして居るやうな書き方であつた。生れ落ちてから十六年の後、はじめて世間と云ふものを見せられた若人の、無限の歡喜と讃嘆とが、其處に聲高く叫ばれて居た。或るところでは有頂天になつて踊り上り、或るところでは自分を欺いて居た上人を怨み、或るところでは幼馴染の瑠璃光の爲めに、昔に變らぬ友情を誓つて、誠意を披瀝して下山をすゝめて居るのであつた。瑠璃光は今迄に此れ程深い讀後の印象を、經文の一節からも、他の何物からも受けた事はないやうに感ぜられた。

「十萬億土の彼方にあると信ぜられて居た極樂淨土は、つい此の山の麓にある。其處には無數の生きた菩薩が居て、自分が行けばいつでも歡待してくれる。」――此の驚くべき事實は、もはや一點の疑ふ餘地もない。千手の手紙には書き洩らしてあるけれど、其處には定めし迦陵頻伽や孔雀や鸚鵡が囀つて居るのであらう。硨磲碼碯の樓閣や、金銀赤珠の階道が築かれて居るのであらう。忽ち瑠璃光の眼の前には、お伽噺にあるやうな素晴らしい空想の世界が、まざまざと描き出されたのであつた。それほど樂しい世界へ降りて行くことが、何故悟道の妨げになるのであらう。何故上人は、その世界を卑しみ、その世界から自分たちを遠ざけようとなさるのであらう。彼は誘惑に打ち克たうとする前に、打ち克たなければ

ならない理由を知りたかつた。

彼はほの暗い燈火のかげに文を繰り展げて、幾度も幾度も讀み返しながら、一と晩中、まんじりともせずに考へ明かした。自分の智識、自分の理解力のあらゆる範圍から、手紙の事實を否認するに足るだけの、何等かの證據を摑み出さうと藻掻いても見た。我ながらけなげであると思はれるほど、良心の聲に耳を傾け佛の救ひを求めても見た。さうして結局、彼が最後の決心を躊躇させて居るものは、たゞ住み馴れた宿院の生活に對する未練さと、上人の訓戒が强ひる盲目的な畏敬との外には、何も存在しないのであつた。

しかし、此の二つの物は案外執拗に彼の心を把握して居た。彼がどうしても山を降りまいと努めるならば、此の二つの感情を、出來るだけ高調し助長するより道はなかつた。

「お前は千手丸の報告を信じて、佛陀の敎や上人の警めを信じないのか。勿體なくも佛陀や上人を噓つきだと云ふのか。それでお前は濟むと思ふのか。」

から、彼は聲に出してまで呟いて見た。浮世は千手丸の云ふやうに、きつと面白い所に相違ない。けれども其の面白さに引かされて、十四年來築き上げた堅固な信仰を、一朝にして抛つてしまつていゝであらうか。自分は此の間から、難行苦行に堪へようと云ふ誓ひを立てゝ居なかつたか。現世の快樂を得られたにしても、その爲めに佛罰を蒙つて、來世で地獄へ墮ちるのであつたら、十倍二十倍の苦痛ではないか。

「血と云ふものは爭はれない…。」

この文句が、その時ふと瑠璃光の胸に浮かんだ。自分と千手丸とは幼い折から機根が違つて居る。自分には御佛の加護がある。自分が今、運よく「來世の應報」を想ひ出したのも、必ず御佛の加護に違ひない。來世と云ふものがある以上、自分はどうして佛罰を恐れずに居られやう。來世の希望があればこそ、上人は我れ〳〵に現世の快樂を禁ぜられるのであらう。千手丸は信じて居ないやうであるが、自分は飽く迄も來世を信じ、佛罰を信じよう。それでこそ始めて、自分の機根が優れて居ると云へるではないか。上人が自分を褒めて下すつたのは、此處のことを云ふのではないか。

その考へは、たとへば天の啓示のやうに瑠璃光の頭上に降つて來た。最初は電光の如く閃々ときらめいて居たものが、次第に汪洋たる海の波濤の如くひろがつて、ひたひたと瑠璃光の魂を浸し、全身に漲つて來た。そのすがすがしい、嚠朗たる音樂に醉つて居るやうな心持ちは、三昧の境地に這入つた行者でなければ味ひ得ない、極めて貴い宗教的感激であるかのやうに覺えたのであつた。瑠璃光は我知らず掌(たなごころ)を合はせて眼に見えぬ佛を拜んだ。さうして、胸の奥で次ぎの言葉をつゞけざまに繰り返した。

「しばしの間でも今生の榮華に心を移して、來世の果報を捨てようとした愚かな罪を、どうぞお許し下さいまし。もうわたくしは二度と再び、今夜のやうな淺ましい考を起す筈はございませぬ。どうぞお許し下さいまし。」

もうどんな事があつても、自分は人の誘惑に乘りはしない。千手丸が現世の快樂に耽りたいと思ふなら、獨りで勝手に耽るがいゝ。それで來世は無間(むげん)地獄へ眞つ倒まに落されて、無限劫の苦しみを忍ぶがいゝ。その折にこそ自分は西方淨土へ行つて、高い所から彼の泣き喚く姿を瞰おろしてやらう。もう何

と云はれても、自分の信念は搖ぎはしない。自分は危機一髮の際に喰ひ止めたのだ。もう大丈夫、もうたしかだ。

瑠璃光が斯う云ふ決心に到達した時、長い秋の夜がしろじろと明るくなつて、曉の勤行の鐘が朗らかに鳴り響いた。彼は平生より幾層倍も緊張した胸を抱いて、今しがた眼を覺ましたらしい上人の居間へ、うやうやしく侍候した。

千手丸の使の男は、その日の朝の卯刻ごろに、文珠樓の石段のほとりに待つて居ると、果して其處へ瑠璃光丸はやつて來たが、少年の答は全然彼の豫期に外れて居た。

「浮世は面白いであらうが、まろには少し仔細があつて、山を降りるのを止めにする。まろには女人の情(なさけ)よりも、やはり御佛の惠みの方が有り難い。」

と、瑠璃光は云つた。さうして、懷から昨夜の文殼を取り出しながら、

「まろは、此の世で苦勞をする代りに、後の世で安樂を享ける積りだと、千手どのに傳へておくれ。此の文を持つて居ると却つて心の迷ひになる。どうぞ此れも、ついでに持つて歸つておくれ。」

男が不思議さうに眼をしばだゝいて、何事をか云はうとして居る隙に、急いで瑠璃光は文殼を地に投げ捨てゝ、後をも見ずに宿房の方へ姿を消した。

かくて其の年の冬になつた。

「もうお前も、來年は十五になる。千手丸の例もあるから、春になつたら早々出家をするがいゝ。」

と、上人は瑠璃光に云つた。

だが、一旦舊友の消息に依つて、搔き亂されさうになつた彼の心は、一時の情熱で無理に抑へては居たものゝ、決して長く平靜を保つては居なかつた。彼の胸にも、だんだん煩惱が曙の光を放ち始めた。嘗て千手丸を苦めた妄想の意味が、彼にもやうやう分りかけて來た。彼も千手丸と同じやうに、女人の佛を夢に見たり、堂塔の諸菩薩の像に蠱惑を感ずる時代となつた。どうかすると、彼は千手丸の手紙を返してしまつたのが、惜しいやうな氣持ちがした。事によつたら、また深草から使の男が來はしないかと、何となく待たれる日もあつた。彼は上人に顏を見られるのが恐ろしかつた。

けれども、未だに「御佛の冥護」を信じて居る瑠璃光は、千手丸のやうな無分別な行動を取らうとはしなかつた。彼は或る時上人の前に畏まつて、こんな事を云つた。

「上人さま、どうぞわたくしの愚かさを憐んで下さいまし。今ではわたくしも、千手どのを嘲笑ふことが出來ない人間になりました。どうぞ私に、煩惱の炎を鎭める道を、女人の幻を打ち消す方法を、授けて下さいまし。解脱の門に這入る爲めには、どんなに辛い修行でも厭はぬ覺悟でございます。」

「お前は其れを、よくわしに懺悔してくれた。ほんたうに見上げた心がけだ。感心な稚兒だ。」

と、上人が云つた。

「さう云ふ邪念が萠した時には、たゞ偏へに御佛の御慈悲にお縋り申すより仕方がない。此れから二十一日の間、毎日怠らず水垢離を取つて、法華堂に參籠するがいゝ。さうすればきつと御利益に與かつて、

忌まはしい幻を打ち拂ふことが出來るだらう。」

から上人が敎へてくれた。

ちやうど其の明くる日から二十一日目の、滿願の夜であつた。瑠璃光が堂内の柱に凭れながら、連日の疲勞の結果とろとろと居睡りをして居ると、夢の中に氣高い老人の姿が現れて、頻りに彼の名を呼んで居るらしかつた。

「わしはお前によい事を知らせて上げる。お前は前世で、天竺の或る國王の御殿に仕へて居る役人であつた。その時分、其處の都に一人の美しい女人が居て、お前を深く戀ひ慕つて居た。しかしお前は、其の頃から道心の堅固な、情慾に溺れない人間であつた爲め、女人はどうしてもお前を迷はす事が出來なかつたのだ。お前は女人の色香を斥けた善業に依つて、此の世では上人の膝下に育てられ、有り難い智識を授かる身の上になつたが、お前を慕うて居た女人も、未だにお前を忘れかねて、姿を變へて此の山の中に住んで居る。お前が女人の幻に苦められて居るなら、その女に會つてやるがいゝ。その女は、お前を迷はせようとした罪の報いで、此の世では禽獸の生を享けたが、貴い靈場を棲み家として、朝夕經文を耳にした爲めに、來世には西方淨土に生れるのだ。さうして、漸く極樂の蓮華の上で、お前と共々に微妙の菩薩の相を現じて、盡十方の佛陀の光明に浴するのだ。その女は今、唯獨りで此の山の釋迦が嶽の頂きに、手疵を負うて死なうとして居る。早く其の女に會つてやるがいゝ。さうしたら、其の女はお前より先に阿彌陀佛の國へ行つて、お前の菩提心を蔭ながら助けてくれるだらう。お前の妄想は、必ず名殘なく晴れるだらう。――わしはお前の信仰を賞づる餘り、普賢菩薩の使者となつて兜率天から降

りて來たものだ。お前の信仰が行くすえ長く搖がないやうに、此水晶の珠數を與へる。決して決して、わしの言葉を疑うてはなるまいぞ。」

瑠璃光がはつとして我に復つた時、もう老人の姿は見えなかつたにも拘らず、彼の膝の上には、正しく水晶の珠數が曉の露のやうに、珊々と輝いて居た。

十二月も末に近い日の朝まだきの、身を切るやうな寒風の中を、釋迦が嶽の頂上へ登らうとするのは、いたいけな稚兒に取つて、三七日の水垢離にも增す難行であらうものを、淺からぬ三世の宿緣を繫いで居る女人の、現世の姿に會ひたさに、嶮しい山路を夢中で辿つて行く瑠璃光には、何の苦勞も何の障害も感ぜられなかつた。途中から霏々として降り出した綿のやうな雪さへも、彼の一徹な意志と情熱とを、ますます燃え上らせる薪に過ぎなかつた。見る見るうちに天も地も谷も林も。浩蕩たる銀色に包まれて行く間を、彼は幾度か躓き倒れながら進んだ。

やうやう頂上へ達したと思はれる頃であつた。渦を卷きつゝ繽紛として降り積る雪の中に、それよりも更に眞白な、一塊の雪の精かと訝まれるやうな、名の知れぬ一羽の鳥が、翼の下にいたましい負傷を受けて、點々と眞紅を花の散らしたやうに血をしたゝらせながら、地に轉げて喘ぎ悶えて苦しんで居た。その樣子が眼に留まると、瑠璃光は一散に走り寄つて、雛をかばふ親鳥の如く、兩腕に彼女をしつかりといだき締めた。そうして、聲も立てられぬほどの嵐の底から、彌陀の稱號を高く高く唱へて、手に持つて居た水晶の珠數を、彼女の項(うなじ)にかけてやつた。

瑠璃光は、彼女よりも自分が先に凍え死にはしないかと危ぶまれた。彼女の肌へ蔽ひかぶさるやうに

して、顔を伏せて居る瑠璃光の、可愛らしい、小いさな建築のやうに端厳な稚兒輪の髪に、鳥の羽毛とも粉雪とも分らぬものが、頻りにはらはらと降りかゝつた。

(大正七年、三月作)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館、
同　北區東梅田町	立誠堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼區別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、電通社、信賴社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正七年三月廿九日印刷納本
大正七年四月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　曾谷憲治
印刷人　高木酉三

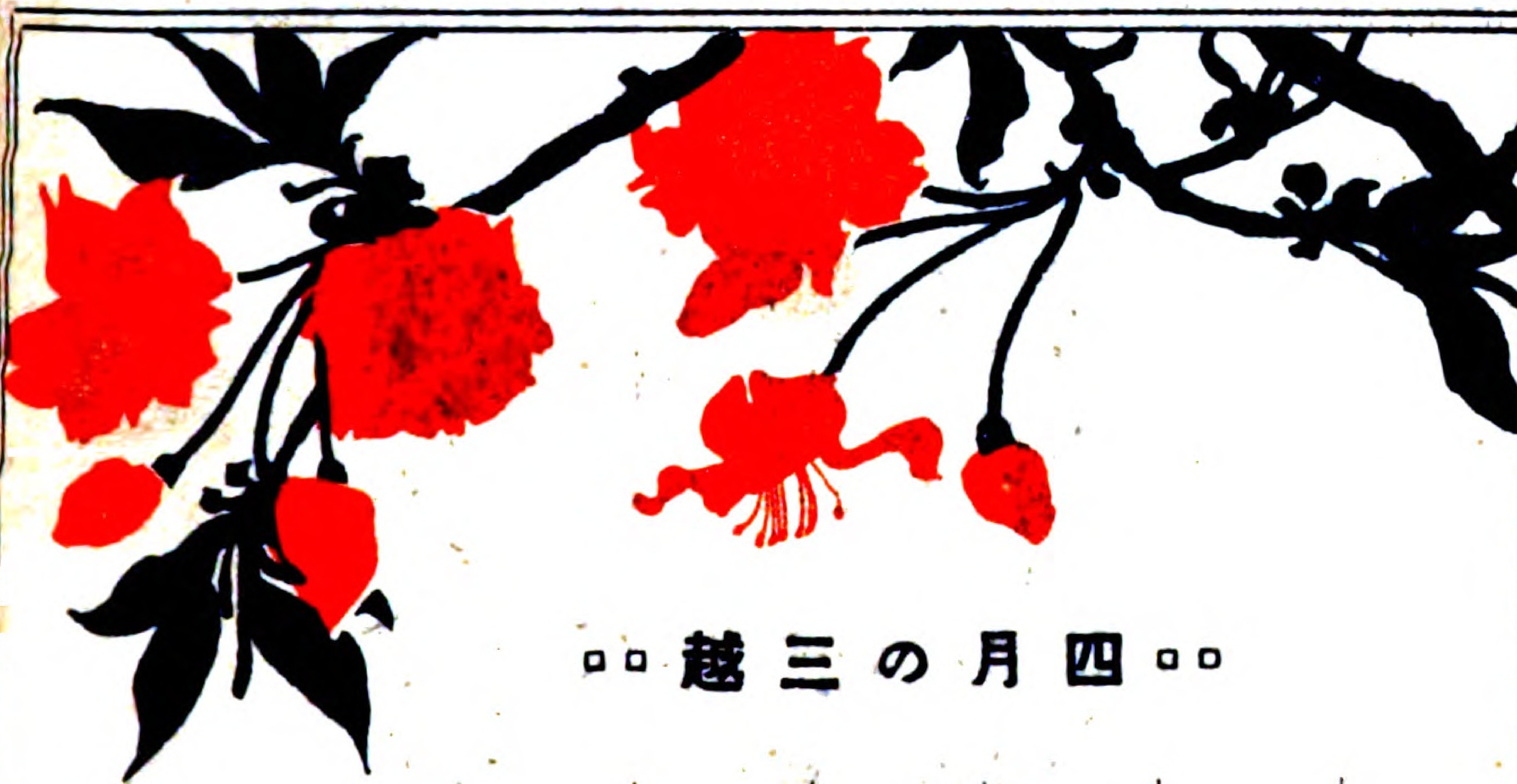
發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話番號小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

◉本號に限り　特價金六十錢　稅郵金四錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年三月



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す